

「若年不安定就労・不安定住居者聞き取り調査」報告書
——「若年ホームレス生活者」への支援の模索——

2008年3月

特定非営利活動法人 釜ヶ崎支援機構
大阪市立大学大学院創造都市研究科

「若年不安定就労・不安定住居者聞き取り調査」報告書の刊行にあたって

「格差社会」や「貧困の拡大」が言われるなかで、2006年の中頃から「ワーキングプア」、なかでも、日雇い派遣などで働くが低賃金のためアパート代も払えず、ネットカフェに寝泊まりせざるをえない若者の貧困層（「ネットカフェ難民」）の存在が、マスコミ等でも頻繁にとりあげられるようになってきた。

2007年3月、国会でもこの問題について取り上げられ、柳沢厚生労働大臣は、「健康とか安全管理というような面からしても、望ましい労働の形態とは言えない」、「どういう調査が可能であるか、これは検討してみたい」と答弁した。これを受けて、厚生労働省は、住居を失いインターネットカフェ・漫画喫茶等の店舗で寝泊まりしながら不安定就労に従事する「住居喪失不安定就労者」等の実態を、店舗利用者に対する調査を通じて明らかにすることを目的とし、平成19年6月から7月にかけて、「住居喪失不安定就労者の実態に関する調査」（概数調査（「複合型喫茶店をオールナイトで利用する者の実態に関する全国調査」）、生活・就業実態調査（「ネットカフェ等のオールナイト利用者に対する対面アンケート（東京・大阪）」）を行った。調査の結果から、「住居喪失不安定就労者」（「ネットカフェ難民」）が全国で約5,400人に上ると推計された。

一方、青年労働者団体は、2007年4月から5月にかけて、青年の貧困の実態を全国規模で明らかにすることを目的に、首都圏を中心に全国19都道府県のネットカフェ94店舗に聞き取り調査を行い、青年の「貧困」が予想以上に広がっていると同時に、青年の仕事と生活の困難さの縮図ともいえる状況を明らかにした。

若年の貧困層の存在は、マスコミなどが取り上げる以前から、特定非営利活動法人釜ヶ崎支援機構が行っている就職相談や福祉生活相談の窓口でも把握されていた。特にここ1、2年、建設日雇い労働を中心とした寄せ場に位置する釜ヶ崎支援機構の事務所に、建設日雇い労働の経験がほとんどない、もしくは全くない若年者からの相談の割合が増えてきた。ホームレス層における若年者の増加と元建設労働者の減少は、野宿生活者が入所する自立支援センターや施設でもみられ、また他の支援団体からも同様の訴えを耳にすることが多くなった。

この明らかに寄せ場の日雇労働者とは層の異なる若者たちを支援する上で必要なことは何かを明確にする必要があった。当機構では、こうした状況に鑑み、「ネットカフェ難民」や「若年不安定就労者」の問題がこれまでの寄せ場やホームレスの問題とどのような関係にあるのか、そして「新たなホームレス」層に対してどのような支援策が可能かを検討するためには、釜ヶ崎での相談事業からの情報だけでは不十分だと考え、釜ヶ崎から市内府内の他地域に出て、実際にネットカフェやまんが喫茶等で寝泊まりしている若者や野宿生活を余儀なくされ自立支援センターに入所した寄せ場の日雇労働を経験していない若者たちから直接話しを聞き、実態把握することにした。

こうした中、2007年5月に「大阪市就業支援モデル委託事業」において「若年者を中心にした不安定就

労・不安定住居者」の聞き取り調査を提案する機会を得た。調査の目的は、「ネットカフェ難民」と呼ばれる若者だけでなく、野宿生活者予備軍、あるいはその周辺に置かれている人々の、家族との関係、就労、生活、現状に対する想い、そして現在に至る経緯を聞き、彼ら／彼女らの置かれている困難な状況を総合的かつ多面的に捉えて、「若年ホームレス生活者」への支援を模索することである。

事業の実施決定を受けて、幸いにも各方面からの調査への協力を得て、2007年6月から12月にかけて聞き取り調査を実施することができた。実際にネットカフェやまんが喫茶、ファーストフード店に出向いて利用している人やネットカフェを寝泊まりの場所として利用した後野宿に至った人、さらにはネットカフェを利用したことはないが野宿に至った若者を合わせて、100人から聞き取りをすることができた。本報告書は、聞き取り調査で得られた生活誌（「資料」）と、調査に参加したメンバーがそれぞれ行った分析をまとめたものである。

大阪・関西圏では初めての、若年不安定就労・不安定住居者に対する本格的な実態調査であるとともに、ほぼ同一都市において100人から詳細に聞き取りを行うという、全国的にも例をみない調査であったと自負している。調査の結果、「若年ホームレス生活者」への支援は、現在の社会制度の枠組みで活用できる社会資源は非常に乏しく、当機構だけでは極めて困難であることが明らかになった。さまざまなところでこの調査報告書が活用され、高齢日雇労働者や不安定就労・不安定住居の若者たちをはじめ、誰もホームレスにならなくてもよい社会をつくりあげていくための一助にいただければと想う。

調査は、一人ひとりの調査協力者に、その生い立ちから現在に至るまでを細部にわたって聞き取りするものであった。長時間に及び、またプライベートな問題にわたる質問に対して、快く応じてくださった調査協力者の方々に心からお礼を申し上げる。

また、とうていこのような大調査は当機構だけで行い得るものではなく、多くの研究者・学生・施設関係者・労働運動関係者等の参加と協力が得られたからこそ、実施できたものである。特にネットカフェやまんが喫茶など深夜営業店での調査では、店舗前で聞き取り協力者を捜して声をかけ、その場で協力を要請しなければならない困難さを要し、調査終了が連日深夜に至るという過酷なものになったにもかかわらず、調査に協力してくださった、大阪市立大学・大阪府立大学の研究者・学生の皆さん、神戸大学の学生の皆さん、南大阪平和人権連帯会議・大阪市職労・連合大阪東南地区評議会の皆さん、大阪社会福祉士会の皆さんにお礼を申し上げます。なかでも、調査協力者の選定・調査場所の提供など多大な労力を費やしていただいた舞洲アセスメントセンターの名井信一所長をはじめ、舞洲1・舞洲2・淀川・おおよど・おおいずみの各自立支援センター所長と職員の皆様、貴重なご示唆を賜った大阪府立大学の中山徹先生、そして大阪市立大学大学院の島和博先生には、特に感謝する次第である。

諸々の事情から報告書の作成が遅れてしまったことをお詫びするとともに、この紙面を借りて調査に協力して下さった皆様に厚くお礼を申し上げます。

2008年3月

特定非営利活動法人 釜ヶ崎支援機構
事務局長 沖野 充彦

ホームレス問題の過去と現在とそして「未来」

今回の「ネットカフェ利用者」および「自立支援センター入所者」を対象とした聞き取り調査の報告を読みながら、「ホームレス問題」ひいては「貧困問題」の構図が、その基本的なところで大きく変化しつつあるのではないか、ということ強く感じました。もちろん、これによって問題の新たな構図がすべて明瞭に見えてきたというわけではもちろんないのですが、それでもここに記録されている人びとの苦境を丁寧に読んでいくと、そこからは、問題の新たな構図の大まかな輪郭は出てくるような気がしています。

ところで、今回の調査の対象者は、旧来の「ホームレス問題」において主として語られてきた人びと、すなわち「寄せ場」の失業日雇い労働者や、その寄せ場を追われてホームレス状態を余儀なくされている人びとではありません。そうではなく、近年急激に不安定化しつつある雇用状況と、拡大する社会の不平等化の趨勢のなかで、多様なかたちで姿を現しはじめた不安定就労者であり不安定居住者が、しかもそのなかの相対的に「若い」人びとが、調査の対象者です。このように、対象者の社会階層的な背景や属性がかなり異なっているのですから、調査の結果から見えてくる問題の構図もまた大きく異なると予想されるのですが、そして事実、その個別的な苦境や困難の様相は大きく違っているのですが、しかしもう一方では、両者に共通する側面が少なくないことも調査結果からは読み取れます。

その表層的な違いにもかかわらず、両者の間には通底する構造的な要因がある、両者（とその抱えている問題）が結びつくことを不可避とするような社会の仕組みがつくられつつある、これが調査報告を読んだ最大の印象でした。この印象を、きわめて大雑把にはあるのですが、述べてみたいと思います。

隅谷三喜男は、すでに1960年代の初頭において、日本の高度経済成長とともに顕著となってきた労働者階級の「『中間層』化現象」について論じた際に、「労働者も全体として見れば、寡占体制下に包摂されて、その間の対抗関係は表面化しえないでいる」と述べつつ、しかし同時に、この「寡占体制」の枠組みからあらかじめ排除された労働者部分もまた存在している、ということに注意を促していました。

もっとも、労働者のなかで、日雇・臨時工と呼ばれ、「他に分類されない単純労働者」と呼ばれている層は、その消費水準の低さにも示されるように、「中間層」化しえない、やや異質な存在である。その矛盾の集中的な表現が釜ヶ崎の騒擾というような姿をとるのである。それは寡占体制の枠のなかに入れない都市雑業層の底辺部分なのである。この層は高度成長の過程で良質の労働力を吸いあげられ、中高年層を中心とする停滞的過剰人口として、むき出しの姿を示している。

この「寡占体制」の外部にあって、そして外部にあることによって資本主義経済のメカニズムにむき出してさらされ、「良質の労働力を吸いあげられ」た挙句に廃棄されてしまった（はずの）「やや異質な」労働者層（の「残骸」）が、突如、1990年代後半期に「亡霊」のように日本の大都市の中枢部に大挙して姿を現した、おそらくこれがいわゆる「ホームレス問題」の出発点でした。

青木秀男は都市下層のひとつの結集点あるいは集約点ともいうべき「寄せ場」が、「社会的に隔離された陸の孤島」として存在してきたことを指摘し、また西澤晃彦は戦後の国民国家による「隠蔽的介入」によって都市下層が「ホームの空間から排除された人々の受け皿として制度化」された「不可視化された空間」へと囲い込まれてきたと述べています。これが、「総中流化」社会（実際は決して「総」ではなかったのですが）の成立の裏面としての都市下層（あるいはこれを「不定住的貧困」あるいは「アンダー・クラス」等々と呼ぶこともできるでしょう）の排除（＝包摂）と不可視化という事態です。

そしてこのような都市下層（民）の排除・隔離と不可視化の社会的仕組みは、ただ単に過剰人口の搾取と管理のためという経済的あるいは治安上の理由からのみ要請されたのではなく、それと同時に、戦後の「豊かな社会」日本のリアリティをその最も基底的なところで、すなわち人びとの日常の生活感覚において、担保するためにも必要不可欠であったのです。高度経済成長を支えた「寡占体制」の成立と存立は、下層「貧民」の排除（社会の周辺部への封じ込め）とその隠蔽（不可視化）によって初めて可能となったのです。そして、この「豊かな社会」の「汚物」は厳重に封印・管理されなければなりません。市村弘正は、『『貧民』の視界からの脱落』という表現によって、寡占体制（「日本型」フォーディズム体制）下における人びとの日常的な社会認識の下限に引かれた境界線の存在に注目を促して、この境界線の内側に自足してその外側にいる者たちを「異物」と見る（というよりもそもそもにおいて「見ない」）人々の「感覚態度」こそが「豊かさ」の実感なのだと言及したのですが、こうした日常的社会認識の限界を画する境界線を踏み越えないことによってのみ私たちの日常の「安楽」があった、ということなのです。このような事態をまた渋谷望は「ミドルクラスのトラウマ」と表現しているのですが、この「排除」に付随する「トラウマ」こそが、後の「ホームレス問題」の大衆レベルでの受容のかたちを規定していたのではないのでしょうか。

それにもかかわらず、すなわちその厳重な封印にもかかわらず、それ（都市下層）は図らずも1990年代後半の「今頃になって」あからさまに（ホームレスというかたちで）露出してしまったのです。この事態は一体何を意味しているのでしょうか、そしてどのように解釈されるべきなのでしょう。端的に言えば、現在の私たちの社会においてホームレスとは「亡霊」のような存在です。無用化され、行き場を失い（奪われ）、さりとて葬られることもなく放り出された労働者（の「残骸」）です。たんに「ホーム」がないのではなく、彼らが「正当に」存在することのできるいかなる「場所」も今の社会の中にはない、そのような存在です。それゆえ、ホームレスを「排除された者」と（のみ）見るのでは不十分です。なぜなら、「排除」は決してその生存の場所そのものを奪ってしまうのではないのですから。どこか「外」に「場所」が用意されて初めて「排除」は可能になります。しかし、現在のホームレスにはその排除されて隔離されるべきそのような「場所」さえありません。それゆえ、彼らは都市を彷徨うしかないのです。このことは、つい先頃、大阪市によって強行された釜ヶ崎労働者の「住民票抹消」という事態のうちに如実に、また象徴的に、示されているのではないのでしょうか。

現段階における根本的な問題（困難）は、ホームレスを「包摂＝排除」するための「特別な場所」（すなわちホームレスのための「ホーム」）を私たちの社会がもはや確保できない（のではないか）、ということです。現在の私たちの社会はもはや（彼らを「帰還」させるべき）「寄せ場」を必要とはしていないし、またその他の「特別な」社会空間を彼らのためにリザーブしておくような余裕もありません（というよりもむしろ、かつて下田平が指摘したように、私たちの社会総体が「寄せ場」化しつつあると言わなければならない）。「排除＝包摂」が可能となるためには何らかの「特別な場所」が必要なのですが（「寄せ場」「福祉施設」「老人ホーム」「刑務所」等々）、その確保がもはや不可能なのであれば（そしてネオリベ的な「自由競争」と「自己責任」のロジックからすれば、そのような「古い」既得権によって守られた「特別な

空間」などは存在の余地はないのです)、ホームレスは都市のまっただ中に晒されて居座るしか「生き延びる」途はないということになります。そして、事実そのようになりはじめています。

このことはホームレスの「自立支援」という国家主導による「包摂」の試みの「失敗」によっても明らかです。過去5年間にわたって進められてきたこの「ホームレスの自立支援」策をどのように総括し、「評価」するのかということに関しては、その問題の多面性や複雑性に規定されて、一言で結論付けてしまうことはできないのですが、しかし少なくとも、「ホームレスの就労自立」というその「本来の」意図もしくは「明言された」意図という点からすれば、それは明らかに「失敗」であったと言わざるをえません（もちろんそこには「意図せざる効果」もあったのですが、これについての「評価」はまた別の問題です）。一方では、ホームレスに「自立」を促しつつも、しかし他方での彼らを「受け入れる」ための「場所」を私たちの社会の中に確保できないままに、「自立支援体制」の5年間が経過してしまいました。「自立」への出口（具体的には仕事と住居、そして社会関係を取り結ぶことを可能とする「場所」）を確保するアテのないまま、机上で計画されたホームレスの「就労自立」などというものは、最初から「絵に描いた餅」でしかなかったのです。その結果もたらされたものとは言えば、ホームレス（のコア部分）のホームレスとしてのさらなる固定化とその<亡霊>化です。

ホームレスの「自立支援」の試みは、その支援を「与える側」と「受ける側」の双方から拒否された（されつつある）のではないかと見えます。一方には、実効を伴わない「支援」を拒否し、むしろホームレスとして「自立」し、まさしく「自己責任」において都市のなかで何とか生き延びようと日々努力するホームレスが出現し、その数を増しつつあるという傾向がうかがえます。そしてもう一方では、「市民レベル」でのホームレスへの「拒否」「反発」「嫌悪」等々の感情の肥大化とそれをベースとした「厳しい世論」の形成という流れも確かにあります。かつてのホームレスを「かわいそうな人たち」「社会の犠牲者」と見て、「福祉の対象」とするような市民の「温かな」まなざしは確実に弱まっています。少なくとも「支援」を拒否している（ように見える）頑固なホームレスへの市民や世論の視線は厳しくなっています。こうした状況の中で、都市の中核部に「停滞」「沈殿」するホームレス（層）が無視できないボリュームで生み出されてきたのです。厚生労働省も昨年のホームレスを対象とした全国実態調査でこの事態を一定程度は認識したようですが、しかしその報告書を読む限りでは、このような事態の背後に潜む私たちの社会総体の趨勢と関連づけてこの事態の意味を読み取ろうとする姿勢は希薄なようです。

寄せ場という「特別の場所」を奪われてしまったホームレスにとって、その生きのびるための場所は都市の隙間しか残されていません。たとえその存在様式が不法あるいは非合法的なものであり、またその「行く末」が無残な路上死であったとしても、そうなのです。そして、寄せ場を追われた「旧来の」ホームレスが自らの居場所を「確保」しようとしているこの都市の隙間空間は、同時に現代の「新たな」貧困層がたどりつく場所でもあるということ、このことが今回の調査から徐々に見えてきました。資本によって地ならし的に再編成された（されつつある）都市空間に、もう一つの不可視の社会空間（「貧者の領域」）が形成されつつあるかのようです。寄せ場の解体は都市総体の寄せ場化という状況をもたらし、そしてこの寄せ場化した都市のここかしこに姿を現しはじめた「小さな寄り場」で新旧の「亡霊」が出会い、混ざり合うという事態がうみだされつつあるように見えます。

…ポストフォーディズムの時代にあっては、かつて支配諸国の労働者階級の多くの部門が当てにできた安定し保証された雇用は、もはや存在しない。労働市場の柔軟性と呼ばれるものは、どんな職も確実ではないということの意味する。今や雇用と失業の明確な境界は消滅し、すべての労働者がその間を不安定な形で行ったり来たりするというグレーゾーンが大きく広がっているのである。

ここでネグリ & ハートが指摘しているのは、「寡占体制」(＝フォーディズム)という私たちの「幸福」の基盤が、あるいはこれまで私たちの『豊かさ』における一体感を支えてきた「こちら側」と「あちら側」を分ける強固な「境界」が、完全に消滅した(あるいは奪われた)という事実であり、それにかわって私たちの眼前に広がり始めたのが、「貧者の領域」へと文字通りボーダレスに繋がっていく、多分に「不安」と「恐怖」に満ちた「グレーゾーン」である、という状況です。そして、このグレーゾーンとしての都市空間においてホームレスという「古い」下層は「新たな」それと融合しつつ「深い貧困」層(あるいは「固定的貧困」層)を形成しつつあるのです。

この2年ほど、いわゆる「格差問題」の延長線上で、「若年」の不安定就労者(派遣労働者やパートタイマー、アルバイトなど)や不安定居住者(マスコミ用語でいえば「ネットカフェ難民」に象徴されるような定まった「住居」を喪失した人びと)の存在がにわかに注目を集めて、社会問題化し始めているのですが、こうした都市の「新たな」貧困層と、主として寄せ場(釜ヶ崎)を給原とする「古い」都市下層が、ボーダレスに拡大しつつある都市の「貧者の領域」で遭遇し、混ざり合い、融合しつつあると見えます。ネットカフェ、24時間営業のファストフード店、サウナやカプセルホテル、自立支援センター等の施設、派遣労働の寮や飯場、公園、街路、そして建設現場や工場といった労働現場、現代の「ミニ寄せ場」ともいべきこうした場所で両者は混ざり合いはじめています。新旧の貧困者の主観的な意識や認識においては、かならずしもこのことが自覚されてはいないかもしれませんが、しかし実態のレベルではこの融合は否定できないようです。少なくとも今回の調査からはそう言えます。またこうした現象は、かつての隔離空間であった釜ヶ崎でも見られるようになったとも聞き及んでいます。旧来の境界を越えて融合し始めた「新たな」ホームレスの出現です。

労働市場の分断とその階層化によって支えられてきた「豊かな社会」(＝フォーディズム体制)は完全に終焉を迎え、それによって社会的な対立と矛盾の構造はその姿を変え、またその現れ方も変化してきています。岩田正美は(崩壊しつつある?)中流(下)層の<不安>が開示する可視的「問題」領域(ここは行政の「包摂」策や市民団体の「支援」策が一定の効果を発揮する問題領域でもあるのですが)に覆い隠されるようにして拡大・深化しつつあるより深い「問題」領域への注意を促しているのですが、「新たな」ホームレスはまさに、この深い領域におけるコアとして形成され始めているのではないのでしょうか。危機の本質はホームレスの「量」にのみあるではありません。その「質」と「深さ」にこそ注目されるべきです。中間層(ミドルクラス)の「不安」のように容易には回収・包摂できない問題と危機の領域が、そこには姿を現しつつあるのです。

現在から振り返るならば、1990年代の中頃から社会問題化した「ホームレス問題」は、いわば「豊かな社会」日本の「終りの始まり」であったとすることができます。それから10年以上を経過した現在、私たちは徐々に、この「豊かな社会」の後に続く社会のありようをおぼろげながら垣間見ることができるようになってきました。そこでは、もはやかつての「分厚い中間層」は存在しえないであろうし、それゆえそうした中間層の存在によって支えられていた「社会の安定」もきわめて不確かなものとなるだろう、と予想されます。当然にも、社会的な「寛容」の幅はますます狭まり、また社会的な不安の高まりによって引き起こされる「治安(セキュリティ)」意識の上昇にも規定されて、ホームレスはかつて以上に「危険な」存在として敵視・迫害・抹消される可能性さえあります。さらには、「問題人口」としての「新たな」ホームレスは、もはやかつてのように社会のある特定の隔離された空間(寄せ場)から姿を現すのではなく、その「給源」は広く社会全体(の下方)に拡散しているのですから、旧来の局所的な封じ込めを基本とする社会政策のさまざまな手法はほとんど役に立たないと予想されます。

こうした「予想される」状況に対して、私たちはどのように対応すべきなのでしょう、おそらくこの

ことが早急に議論されなければならない最も重要な課題です。現状においては、新旧二層の（顕在的・潜在的）ホームレスは、その社会的背景や「給原」の違いなどに規定されて、問題の認識や対抗的な運動のための「共通の」基盤を確立してはいません。また「問題」の現象形態やその深刻度における「地域差」も小さくはなく、このことも状況をトータルに把握することを難しくしている一要因です（特に東京と大阪では「寄せ場」の状況においても、また「若者」の置かれている困難な状況においても、かなり大きな違いがありそうです）。こうしたさまざまな「違い」を超えて、「新たな」ホームレス（都市下層）問題の「構造」をただしく認識し、その認識に基づいて、これも「新たな」対抗運動を構想・構築すること、これが求められているのではないのでしょうか。

大阪市立大学 教員
島 和博

目次

「若年不安定就労・不安定住居者聞き取り調査」報告書の刊行にあたって	i
ホームレス問題の過去と現在とそして「未来」	iii
第1章 労働社会の変容 —— 流動的労働形態のたどり着く先	3
1.1 はじめに	3
1.2 「若年不安定就労・不安定住居者聞き取り調査」から見えるもの	5
1.3 労働社会の変容（建設日雇労働市場と派遣等不安定労働市場）	13
1.4 ホームレス問題の変化と複雑化	23
第2章 「ネットカフェ難民問題」とその対策の社会的意味について	31
2.1 はじめに	31
2.2 ホームレス問題とその対応	31
2.3 実態としてのネットカフェ生活者	34
2.4 社会的排除とネットカフェ生活者	35
2.5 不安定な就業	38
2.6 不安定な生活と窮乏	40
2.7 対策の社会的意味について	41
2.8 まとめにかえて	44
第3章 中卒者、高校中退者の就業実態	47
3.1 はじめに	47
3.2 中学校卒業者の実態	47
3.3 高等学校中途退学者の実態	49
3.4 おわりに	50
第4章 「ネットカフェ生活者」の析出に関する生育家族からの考察	53
4.1 はじめに	53
4.2 生育家族における困難	54
4.3 低い学歴達成・不安定就労層としての析出	58
4.4 援助してくれる相手の欠如	60
4.5 おわりに —— 「家族」と「自己責任」についての若干の考察	63
第5章 不安定労働における時間・空間・生計の破綻	67

5.1	労働力の「再」商品化	67
5.2	間接雇用における労働時間・労働日	68
5.3	間接雇用における地域移動・職住分離	71
5.4	労働による生計の破綻	73
5.5	個人化される失業	75
5.6	潜在的失業の拡大	77
第 6 章	不安定就労・不安定住居者と「障害」をめぐる政治	81
6.1	不安定就労・不安定住居者にみる「障害」	81
6.2	「障害」の可視化と「問題」の所在	82
6.3	不安定就労・不安定住居者における「障害」者支援：医学モデルの罫	84
6.4	不安定就労・不安定住居者への支援と政治	86
第 7 章	「ネットカフェ難民」を含むホームレス問題をどのように捉え直し、支援していくべきか	91
7.1	はじめに	91
7.2	支援の限界——社会の「建前」と「本音」の狭間で	92
7.3	終身雇用が崩れて——仕事をしても生活できない	93
7.4	社会の中で生きるためのレッテル貼り	94
7.5	犯罪に荷担してしまった知的障害者	97
7.6	家族が支えてくれるという「神話」	99
7.7	おわりに	102
第 8 章	「不安定就労・不安定住居者」に「既存の施設」は対応できるのか？	105
8.1	はじめに	105
8.2	「保護施設」あるいは「自立支援センター」では何が行われているのか	106
8.3	では、どう使うか使えるか	107
8.4	おわりに	108
第 9 章	なぜ「彼ら」はそんなにも語ってくれたのか	109
9.1	前半（ネットカフェ等利用者へ）の聞き取り調査を通じて感じたこと	109
9.2	後半（自立支援センター利用者へ）の聞き取り調査を通じて感じたこと	111
9.3	共通して感じたこと	111
9.4	識字とつながる	112
9.5	自らを取り戻し、連帯していく場の必要性	113
	資料「生活誌」	117

第1章

労働社会の変容 ――流動的労働形態のたどり着く先 ――新たなホームレス問題はどうか始まっているか――

NPO 釜ヶ崎支援機構・事務局長
沖野 充彦

ポイント1: 「ネットカフェ難民」とは、何か独立したカテゴリーではない。派遣や業務請負会社の寮での居住や、ネットカフェなどの深夜営業店での宿泊、路上や野宿を繰り返していく過程の、ある一時点での「表現形態」である。

ポイント2: 「ネットカフェ難民」問題の本質は「若年者問題」ではない。「底辺労働力・代替可能労働力」として派遣等非正規雇用を繰り返さざるをえない流動的労働者、「二極化された一方の極の労働形態」に置かれた労働者下層の問題である。中高年男性労働者の一定数がまだ「終身雇用システム」の中にあるため、若年者で目立っているに過ぎない。

ポイント3: 「ネットカフェ難民」問題はホームレス問題へと至らざるを得ない。同じ流動的労働形態に置かれてきた寄せ場の建設日雇労働者が、野宿と隣り合わせであったことと同じ事態が始まりつつある。すでに狭義のホームレスとのボーダー層（寮・ネットカフェ・野宿の繰返し）が一定数存在し、その過程を経て野宿生活にいたった人たちがすでに生み出されている。

ポイント4: 「ネットカフェ難民」問題は社会的排除の問題である。多くは、家庭の貧困・低学歴・障害など社会的困難を背負わされた人たちである。効率主義のもとにある現状の民間労働市場に、「就職」という形で押し上げようとするだけでは問題は解決しない。また、不安定で先の見えない就労や生活に置かれることで、就労意欲や生きるエネルギーが低下させられていく。

1.1 はじめに

1.1.1 調査に至る経緯

2006年度NPO釜ヶ崎では、お仕事支援部における就職支援を通して、20歳代～30歳代の労働者12名に、就職に至る支援をおこなった。製造業の業務請負の現場を渡り歩き、ネットカフェに泊まって仕事に行っていた20歳そこそこの若者もいた。彼らは結果として釜ヶ崎にある建設日雇労働市場に吸引され、そこで建設日雇労働者として仕事を探すことになった。また、今年度になってからは、3月は年度末で

「現金」と呼ばれる日払いの日雇仕事がたくさんあったので 30 万円ほど稼ぐことができたが、5 月は「アブレ期」で仕事がないため、ドヤ（簡易宿泊所）に泊まりながら携帯電話の登録派遣サイトで「日雇い派遣」の仕事を探して暮らしているという若者もいた。

また、福祉相談部における生活福祉相談でも、「新たな相談者——40 歳未満の若年相談者」が増加傾向にあった。生活福祉相談における一昨年度の 40 歳未満の相談者は 21 人・全相談者の 3.8 %（25 歳未満 1 人、25 歳以上 30 歳未満 4 人、30 歳以上 35 歳未満 5 人、35 歳以上 40 歳未満 11 人）に過ぎない。しかし、相談者の生活形態や状態の変化は確実に現れてきていた。① 飯場に現在いるけど腰の調子が悪いので仕事にいけない、② 仕事で腕を骨折してしまったが労災の手続きもしてもらえず、飯場から追い出されそうで病院受診もできない状態だ、と建築日雇という仕事の不安定さから困窮に至っている相談者は 2 人とどまった。釜ヶ崎で何年間（2、3 年以上）か働いたことがある人も 2 名で、釜ヶ崎での就労経験がまったくない、もしくはほとんどない人ばかりだった。それではどのような経路で釜ヶ崎にたどりついたのか。シェルターを利用するために来た、野宿するなら西成に行けと言われてきた、他の区から三徳ケアセンターを利用して初めて西成に来たという人が多かった。それ以外にも釜ヶ崎以外の西成区で生活保護受給していて NPO を紹介された、持ち金がなくなりドヤに泊まりに来たという人もいた。

ちょうど 06 年度の後半あたりから「ワーキングプア」や「ネットカフェ難民」の問題がマスコミ等で取り上げられるようになっていた。実は今釜ヶ崎でも見られるひとつの変化はこの流れの中にあるのではないか、「ネットカフェ難民」の問題はホームレス予備軍の問題ではないか、その中には就職支援だけでは解決しない、より柔軟な就労支援や福祉援護を必要とする若者も多いのではないか、それらはホームレス予防策として行われる必要があるのではないか。また、今年度おこなわれた厚生労働省の「ホームレス全国調査」では、野宿生活の長期化と高齢化が表れており、この層に対して「野宿生活から脱却」していくための施策を強めなければならないことが明らかになっているが、例えこの層がさまざまな形で野宿生活から脱却することができるようになったとしても、その後次から次へと新たな層がホームレス化していくなれば、問題は解決に向わないのではないか。

そうした思いが、調査と支援に向わせ、そのための事業費を得るために、企画提案型公募事業である「大阪市就業支援モデル委託事業」への提案へと向わせた。

1.1.2 実施方法

「聞き取り調査」は、調査員 2 名が一組となり、対面調査により、調査対象者から「生育歴・職歴・家族との関係」を詳細に聞き取る方法で行なった。聞き取りに要した時間は、対象者一人当たり 1 時間半～2 時間である。

そのうち「ネットカフェ等深夜営業店を利用している人への調査」は、大阪市内の十三・梅田・難波・心齋橋・日本橋・京橋・天神橋筋 6 丁目・恵美須町および高槻市の 9 駅周辺の深夜営業店に出入りする人に直接声をかけて調査協力を依頼し、18 店舗の利用者のうち 48 名から聞き取りを行なった。「野宿に至った人への調査」は、大阪市内・府内 5 箇所の自立支援センターの入所者に協力を依頼するとともに、NPO 釜ヶ崎支援機構に就職相談や生活福祉相談で訪れた人に協力を依頼し、合計 52 名から聞き取りを行なった。

また「聞き取り調査」と併行して実施した「若年者就労支援事業」においては、若年者 24 人に寝場所支援・就職先紹介・就職後アフターフォローを実施（うち常用雇用へ 15 人）した。そのうち日雇労働未経験の不安定就労・不安定住居者で、「聞き取り調査」対象者 6 人（全年齢では 8 人）に、就職・寝場所・定着

調査場所	人数
ネットカフェ・漫画喫茶等	43
ファーストフード店	5
自立支援センター	41
NPO 釜ヶ崎支援機構	11
計	100

	調査対象店舗 (電話)	調査対象店舗 (下見)	調査対象店舗 (実際に調査)	調査対象者の いた店舗	調査対象者数
天満・天六	6	6	6	2	3
十三	3	3	2	2	5
梅田	10	10	8	3	14
京橋	5	5	5	3	7
上本町	2	2	0	0	0
心斎橋	6	6	6	0	0
難波・千日前	6	6	4	4	15
日本橋・恵美須	7	7	5	3	2
福島・野田	3	3	0	0	0
西区・大正区・ 港区・住之江区	5	5	0	0	0
長居・西田辺・ 平野区	8	8	0	0	0
堺市	7	7	0	0	0
高槻市・茨木市	7	5	2	1	2
東大阪市	7	3	0	0	0
門真市・枚方市・ 守口市・八尾市	10	2	0	0	0
計	92	78	38	18	48

支援をトータルに実施した。

ここでは、派遣・アルバイト・契約社員等非正規雇用においても入職が困難となる年齢である 40 歳を基準とし、40 歳未満を「若年者」と規定した。

1.2 「若年不安定就労・不安定住居者聞取り調査」から見えるもの

1.2.1 住居を失った原因・住居確保ができない理由

住居を失った主な原因は何か、就労形態や転職歴はどうか。この問題意識に基づいて、聞取りをした事例を大きくは 3 つのケースに分類してみた。1、野宿生活に至ったケース（自立支援センター入所者および野宿状態で NPO 釜ヶ崎に相談に訪れた事例）52 例、2、住居を失って、ネットカフェなどで生活しているケース 14 例、3、住居や実家等は帰れる範囲にあるが、ネットカフェなどで寝泊りしているケース 20 例。

そのうち、1 の野宿ケースをさらに、A、現在、野宿とネットカフェなどと住込みを繰り返しているケース 4 例、B、過去に野宿とネットカフェなどを往復する生活を送ったことのあるケース 13 例、C、A・B

性別	男 61			女 4			合計 65
年齢	～19歳	～29歳	～39歳	～49歳	～59歳	60歳以上	合計
	1	22	54	16	6	1	100
学歴	中卒	高校中退	高卒	大学中退	大卒		合計
	29	13	49	2	5		98
正社員歴	なし	1年未満	3年未満	5年未満	10年未満	10年以上	合計
	15	5	11	8	13	11	63
住居喪失時	1月未満	1年未満	3年未満	5年未満	10年未満	10年以上	合計
	9	28	10	3	3	3	56
現在の仕事	正社員	日雇・短期派遣	長期派遣	非正規	その他	失業中	合計
	6	16	3	19	4	15	63
主な職種	事務IT	運輸倉庫	建設警備	営業販売	サービス	その他	合計
	11	11	11	3	8	4	48
前住居地	同一市町	同一府県	他府県(通勤圏内)		他府県(通勤圏外)		合計
	13	19	8		18		58
収入1ヶ月	5万以下	10万以下	15万以下	20万以下	25万以下	25万超	合計
	6	17	7	10	4	5	49

*年齢・学歴以外は、前半調査の分のみを集計した。

ではないケース 35 例 に区分した。

3 のケースは、A、住居はあるが就労上の理由でネットカフェなどで生活しているケース 7 例 と、B、家族関係上の理由でネットカフェなどで生活しているケース 13 例 に分けた。

1 の B と C のケースは、「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」に規定されているところの現時点ホームレス、1 の A のケースは、法律上のホームレスとのボーダー層（つまり生活形態をどの時点で見るとかによって、ホームレスともなり、そうともならないという層）、2 のケースは、国が規定する「住居喪失不安定就労者」（マスコミ等では「ネットカフェ難民」とも呼ばれる）、3 のケースは、「住居喪失不安定就労者」「ネットカフェ難民」とも規定することもできるともいえるし、できないともいえる層である。

■住居を喪失した主な原因 まず住居を喪失した主な原因について見てみる。対象は、1 と 2 のケースである。

	野宿	住居喪失	合計
日雇派遣・非正規で働いていたが家賃を払えなくなった	10 (24%)	3 (21%)	13 (20%)
失職し、家賃を払えなくなった	14 (34%)	5 (36%)	19 (29%)
失職し、住込み先を出なければならなくなった	17 (41%)	6 (43%)	23 (35%)
建設日雇で不安定だった	[4]	[0]	[4 (6%)]
その他	[7]	[0]	[7 (11%)]
合計	41 [52]	14 [14]	55 [66]

野宿にいたったケースと、調査時点で住居を喪失してネットカフェなどに寝泊りしているケースを比較

して考えてみる。「建設日雇で不安定だった」と「その他」を除いた3つの住居喪失原因では、野宿ケースとネットカフェ等ケースの傾向はほぼ同じと考えられる。その上で、「日雇派遣・非正規で働いていたが家賃を払えなくなった」ケースと「失職し、住込み先を出なければならなくなった」ケースを掘り下げて考えてみる。この2つのケースは、働いていても住居費を払えない、あるいは住居を借りる費用をためることができなかったケースだからである。

〔ア〕まず、「日雇派遣・非正規で働いていたが家賃を払えなくなった」ケースが、66人中13人、約20%を占めている。これらの人は、働いているにもかかわらず、家賃を払えなくなり、住居を喪失している。なぜだろうか。

この要因には、まず日雇派遣の就労の不安定さと賃金の低さがあると考えられる。

〔雇用の不安定性〕

- 「日数も多い週で3日、少ない週では1日しか仕事がないときもあり（だから月収は「10万円をはるかに下回る）」、決して安定した仕事ではなく、今のこの仕事で自立するのはとても無理」。
- 「派遣会社に昼間携帯電話で連絡すると、もしも仕事があれば、次の日の集合場所・時間など連絡がくる。派遣会社の方から仕事してくることは減多にない。仕事も毎日あるとは限らず、週3~4回あればいい方」。
- 「少ないときは週2~3回、多いときは週6日とばらつきはある」。
- 「『仕事ありますか〜』と、前日に確認の連絡をいけない。そこで仕事がなくて明日の仕事が断られるときがある」。
- 「年齢。年齢制限があるから、45歳を超えると仕事はない」。
- 「仕事の準備をして出かける前に『今日はなくなりました』と突然言われることもまれではない」。
- 「ひどいときなど現場まで行って仕事がキャンセルになったので別の現場に行っていきたいといわれ、仕事もせず交通費だけ自己負担することもあった」。
- 「立場的に弱く、仕事をせかされるのは仕方がない」。

きわめて過酷な不安定さが浮かび上がる。その日やそのときになって派遣会社から仕事がキャンセルされるなど、労働契約などあってないに等しいような現状も見取れる。

〔賃金・労働条件〕

- 「人材派遣会社から紹介された会社から靴・手袋・作業着などが必要ということで6,000円購入したが1日だけしか仕事がなかったこともあった。」「日給は交通費込みの6,000円~7,000円」。
- 「日給7,000円前後だが、交通費は自分持ち。例えば神戸まで行くと往復で1,500円くらいかかり、250円の保険と税金140円も引かれる。また、残業になるとその税金は倍になって280円引かれる。結局手元に残るのは5,000円程度」。
- 「朝9時~午後5時で、日給5,775円。経費等の引きはなかったが、交通費はなし。軍手とカッターマジックペンは自分もち」。

日給は、昼勤で6,000円~9,000円という話が多かった。また交通費を自己負担しなければならないところが多く、中には会社所定の作業着などを購入しなければならないところもある。日給または時間給の問題だけではなく、交通費や作業着等の経費がかかることが、彼らに多大な負担をかぶせている。

非正規雇用でも、ガードマンや歩合制の仕事では、不安定な就労を強いられるところもある。

〔雇用の不安定性〕

- 「工事現場のガードマン。高齢者が多い。雇用の名称は「契約社員」だが、雇用は安定しておらず日雇仕事である。仕事は前日の「夕方6時」に電話でこちらから会社に連絡をとって明日仕事があるかどうか確認する。ただ、当日になって電話がかかってきて仕事がキャンセルになることもある。」
- 「リフォームの営業の仕事に就いた。業界は、注文を取れなければ1ヶ月もいられない雰囲気、1ヶ月いる人はほとんどいない。日銭で3,000円もらうが、1ヶ月いなくて月給はもらえないというのが常識みたいところ。」

〔賃金・労働条件〕

- 「歩合制の場合、行動費として3,000～5,000円もらうことはあっても、基本給など全くない、契約をとってその売買差益が給料になる。」
- 「新聞の勧誘の仕事は最初の2週間は3,000円をもらえるだけで基本給はない。歩合+賞金という形で、『1、2、3』という歩合になっている。つまり3ヶ月の契約で千円、6ヶ月で2千円、1年で3千円という歩合。」
- 「水道修繕のチラシ配布。実はリフォーム目的。日給は5,000円。実際の給料の支払は、日払分が3,000円残りを給料日にもらうという形。」

〔イ〕次に、住居を喪失した主な原因が「失職し、住込み先を出なければならなくなった」ケースが23例・35%ある。

聞き取り調査の対象者では、派遣労働（住込み）で、昼勤・夜勤、また業種や作業内容によって少しずつ異なるが、通常時給1,000円程度、日給8,000円から、深夜や特殊な業務では10,000円以上というのが相場のようなのであった。社会保険もあるところとないところと両方あるようだ。2交代制を取っているところなどでは、定時+4時間残業で拘束時間12時間というところも多いが、寮費などが差し引きされると、半年ほど働いても、自分でアパートを借りて就職後の給料日までの生活費を捻出できるほどにためることは難しいという声が多くの人から聞かれた。

- 「社会保険・厚生年金なし、退職金もなかった」。
- 「職場で全く同じ仕事をしている他の人（正社員）にどれくらい給与をもらっているかきくと、全く違った。その人はだいたい1,100円/時間であったが自分は700円/時間ぐらいだった」。
- 「ほとんど仕事の内容が登録時に聞いたときとちがったり、寮費（6万円）やふとん代などを差し引かれ手元にお金が残らず生活するにもぎりぎりだった」。
- 「給料は残らなかった。時給1,000円で1日6～7時間労働なのだがいろいろ『経費』が引かれる。」
「社会保険はないが、社会保険に入ろうと思えば入れる。ただし、事業主負担分を含めて当人の給料から差し引かれるが」。

住込みの派遣や期間工・新聞配達などの場合、日雇派遣に比べれば、一定期間の雇用契約が結ばれているため、その間は就労することができる。だが、長期に安定して同じところで働けるわけではない。

- 「6ヶ月（半年）契約で移動していく。半年以上なぜ契約をしないかという、それだけ時給があが

るから。半年契約にしていたらずっと安い単価で使えるわけ」。

- 「派遣会社の担当から、突然『今日で仕事は終わり』と言われ、滋賀県の製造の仕事を紹介された。突然言われ、どうすることもできず、その工場に行くことにした」。
- 「2年以上、寮で泊まりながら全国数箇所製造工場に就労。半年契約のため、中国・四国・近畿・関東へと半年ごとに移動し就労先が変わった」。
- 「1年半派遣で働いた。リコールのとき派遣社員から切られて500人はやめさせられた。その後また新しく若い子を入れていた」。
- 「トヨタへ。そこでは2年11ヶ月期間工として働いた（期間工は最高この期間しか働けないため。また、戻りたいと思っても辞めてから半年たないと戻れない）」。
- 「新聞配達所は半年いる人が珍しいくらい。入れ替わりが激しい」。
- 「自分が勤めた販売店には多いときは10人ぐらい住み込みで働いていたが、出入りが激しく長期にわたって働く人はほとんどいなかった」。
- 「東京にあった新聞販売店で働きはじめた。配達、集金、勧誘の仕事すべてせねばならず、研修期間のうちから誤配率3%未満、集金率も97%を達成しないと給料が出ない」。

また、寮といっても中には個室のところもあるが、たいていは3LDKに3人、2LDKに2人であるようだ。それに伴い当然人間関係上の問題も生じ、それが早期に仕事をやめて派遣会社の寮を出る要因になっている場合もある。期間工では契約更新がなく、新聞配達では入れ代わりが激しいところもある。

働いていてもなお、住居を喪失せざるを得ない現実が、単純に「失業問題」としてのみは捉えられない深刻さを示している。

■正規雇用・住居確保ができない理由 学卒もしくは中途退学後の初職においては、66人のうち初職が非正規雇用や派遣である人20人（30%）、正規雇用44人（67%）、その他家業など2人（3%）となっている。

	野宿	住居喪失	合計
初職が派遣や非正規雇用であった	14	6	20
初職は正規雇用であった	37	7	44
初職は家業などその他の分類であった	1	1	2
合計	52	14	66

〔ア〕初職から非正規雇用や派遣であった人が30%存在している。初職が派遣や非正規雇用である場合、最初からリスクを抱えている。しかし、例えば正規雇用で就いたとしても、過酷な労働状況によって離職せざるを得ない場合も多い。

正規雇用での退職理由として「過労が原因で退職」「過労による精神疲労で退職」を明確に述べた人が、66人のうち6人いた。他に「求められる資質とのギャップで退職」が1名、「職務に起因したと見られる病気退職」が2名と、計9名が過労働や職務との関係で退職せざるを得なかったと述べている。

- 「サービス残業があり、結局朝4時30分におき、家に帰ってくるのは23時頃で睡眠時間が3、4時間しかとれず体調を崩して」。「短期間で仕事を仕上げるために2、3日寝ずに仕事をするこ

あった」。

- 「結局、朝の 8 時 30 分から翌朝の 4 時まで仕事をしており、家に帰ってとれる睡眠時間はわずか 2 時間だった」。
- 「チーム内でも差がつき、できるやつにおんぶになることがとつてもつらかったし、それがプレッシャーになった」。
- 「関係の機関に変則労働の届けのような書類を出さされ、朝の 5：00～夜の 11：00 ごろまで働いていた。残業手当は出なかった。月 19 万ほどの給料だった」。

その中には、「半年間休みがなく、12 時間休みなしで働かなければならず、体調を崩して辞めた。正社員で働こうという意欲はあるけれども、12 時間働くのはしんどい」と、初職での過酷な労働が、正規雇用につくことへのトラウマとなり、就職阻害要因になっている事例もある。

7～8 人に一人が過労働等を退職理由に明確に挙げざるを得ない状況は、正規雇用の現場が、きわめて過酷な労働状況にあることを示している。

〔イ〕調査にあらわれた現実、初職が非正規雇用であれ正規雇用であれ、いずれにせよ、一度日雇派遣と住込みの派遣や非正規雇用の繰返しと、それに伴って寮やネットカフェなどでの生活に入ってしまうと、そこから正規雇用に移行し、自ら住居を構えるのは容易ではないという現実だった。

- 「この中（日雇派遣での収入）から貯金するのは無理であり、生活費が貯まらないことが就職活動をするうえでも大きな障害となっている」。
- 「もし今就職をしても目の前の生活が成り立たない。就職してしまうと給与は 1 ヶ月後に入ってくるので生活できない。就職するなら 2 か月分の生活費を貯めておかないとだめだ。そう考えるとこういう生活をしている人が就職するのはしんどいと思う。家を借りても払っていけない」。
- 「できたら職場の近所で部屋をかりたいと思うこともあるが、アパートを借りるとなると敷金などを含めて初期費用だけでも 20 万円はかかるので、金銭的な余裕がないので住居を確保できるとは思わないし、それに加え長い目でみるとそうだが、この仕事が継続できるかどうか不安なので、この職場の近所に部屋をかりてもいいのか悩む」。

さらには、日雇派遣から住込みでの派遣にさえ移動することでさえ困難があるという声も聞こえてきた。

- 「登録の日払制の仕事をするようになったのは、手持ちのお金が 1、2 万円になってしまったからだ。1、2 万円だと『派遣』の仕事には就けない。給料が週払い、前払いのところもあるが、さすがに手持ちが 1、2 万円だと 1 週間もたないので住込みの派遣にはつけない」。
- 「そもそも持ち金も 4,000 円ほどしかなかったにもかかわらず、給料は日に 2,000 円しか支払われず残りは月末払い（計 24 万円）だったので、日々の生活が立ちゆかなくなる。ご飯を食べることもできず、倒れたこともあった」。

■**転職の傾向** 本文の最後に参考資料として掲げている「住居喪失経過事例」のケースごとの事例を見れば分かるように、どのケースにおいても、ほとんどの人が派遣や、アルバイトなどの非正規雇用、正規であっても住込みの現業労働を繰り返している（整理の仕方として、より実状が分かるように、同じ非正規雇用ではあるが、パート・アルバイト・契約社員・委託社員などのみを非正規雇用として表現し、派遣と区別した）。これらのことは、「野宿生活に至ったか」「野宿とネットカフェなどと住込みを繰り返してい

るか」「不安定就労や無職でネットカフェなどで生活しているか」は、時間の経過の中での現在時点をあ
らわしているに過ぎず、それらのケースはひとつの連関の中にあることを示している。

1.2.2 住居や実家は帰れる距離にあるがネットカフェなどを利用する理由

〔ア〕住居があるケース、家族との関係で利用していると考えられるケースのうち、聞き取り時点での雇用
形態は、前者で〔正規雇用〕が2名・残り5名が〔日雇派遣〕、後者では13名全員が〔派遣・非正規・無
職等〕になっていた。

〔住居がある正規雇用〕のケースでは、2名とも「終業が深夜のため自宅に帰れない」のであるが、〔住
居がある日雇派遣〕では、交通費や通勤時間の問題が多い。交通費が出ないため、自腹で払わなければなら
ない交通費とネットカフェなどの料金が同程度になるならば、長い通勤時間をかけて体力を消耗する
よりも、派遣先に近いネットカフェなどで寝泊りしたほうが良いという心理が働くのは、十分に理解でき
る。こうした生活が続けば、あえて家賃を支払って住居を確保し続ける必要性が低下してアパートなどを
引き払う、あるいは家賃を支払うことが経済上過大な負担になり、滞納して住居を喪失することにつな
がりがやると考えられる。日雇派遣からの収入では、アパートなどを維持し続けるのが困難となる傾向にあ
ることが、〔住居を喪失したケース〕から見えているからである。

〔イ〕〔家族との関係で利用していると考えられるケース〕においては、家を出る時点で〔日雇派遣・派遣〕
が4名、〔非正規〕が1名、〔失職・無職〕が6名、〔家業をするのがイヤ〕が2名となっている。「仕事を
失って、両親との折り合いがさらに悪くなり」あるいは「正規の仕事を探しているのに正規の仕事がない
とはむかってけんか」 「仕事が見つからないことが理由で親ともめて」というのが多い。30歳代であり
ながら派遣や非正規や無職であることが、親との関係の悪化につながり、それが家を出る要因になってい
ることは否めない。

このことは、親からの心理的圧迫だけではなく、本人自身の心理にも圧迫感を与えている。〔不安定就
労や無職でネットカフェなどで生活しているケース〕を含めた中からは、次のような声が聞かれた。「実
家に両親は健在であるが、30歳をすぎた男が面倒をみてくれというわけにはいかない」「実家に両親は健
在であるが、迷惑をかけたくないという思いがあり帰るつもりもない」「今更こんな状況で顔を出せない。
しばらく顔をだしていないし弟にも言えない。家からは消えるように出てきたからほとぼりがさめるまで
帰れない」

実家に戻れない心理、実家に戻ってもまた出てこざるを得ない心理が、〔不安定就労⇔不安定住居→住
居喪失〕スパイラルに、本人をさらに強く組み込む役割を担っている。

1.2.3 「不安定就労⇔住居喪失→野宿」のスパイラル

〔ア〕日雇派遣は、まさに不安定でかつ劣悪な労働条件での就労であった。しかし、住み込みでの派遣で
も、派遣先と派遣元との関係のみで、いとも簡単に労働契約の変更や終了が決定され、派遣労働者は置き
去りにされたまま、労働力の調整弁としてそれに従わざるを得ない現実があった。

非正規雇用の現場も、きわめて不安定な就労状態であった。期間工には「クーリング期間」があった。
これは有期雇用契約の上限が労働基準法上3年以内と定められているために2年11ヶ月に限定し、さら
に「クーリング期間」を置くことで「同一労働者との契約更新ではない」として「解雇制限法理」が適用
されないようにするものである。ガードマンの事例は、「契約社員」といっても、日雇派遣や建設日雇と

まったく同じである。リフォーム営業などは、当初から長期では勤続できないような雇用システムになっている。歩合制の仕事で、彼らは通常「委託労働者」または「請負労働者」と呼ばれている。雇用者側からの指揮・命令があり、労働基準法上は明らかに「労働者」である場合が大半であるが、「個人事業者への委託・請負」とすることで、給与補償や社会保険だけではなく、労働災害や業務上の事故への補償などにおいて、雇用主としての責任を負わないようにするために導入しているところが多い。彼らは何らの保障もない現状におかれている。

日雇派遣にしる、住込みや期間契約の派遣・非正規雇用や、表向きは「正規雇用」であっても非正規雇用とほとんど変わらない雇用形態にしる、がんばってそこで働き続けようとするれば働き続けられる雇用形態ではないことは共通していた。派遣や非正規雇用が「自ら選ぶことのできる柔軟な働き方」としては機能しておらず、逆にそこで働く人たちを、望むと望まないに関わりなく、「流動的労働者」として就労先を転々と移動しながら働き続けるしか、生きる道がなくなるところへと追い込んでいってしまっている現実が、調査での聞き取りを通して見える。

〔イ〕 こうした現実を見てくると、いったん派遣や非正規雇用を繰り返さざるを得なくなった場合、そこから自力で抜け出すことは難しく、その過程で野宿生活へと至らざるを得なくなる場合が多いことが分かる。

要点を整理する。

1. 正規雇用や初職・非正規での失業後、ストレートに野宿生活に移行するというよりも、派遣や非正規雇用（間に正規雇用をふくむ場合もある）での就労を転々とせざるを得ない過程を経て、野宿生活に移行していく。
2. 移行していく過程においてさえ、「野宿や路上と隣り合わせの生活形態」であった。「野宿とネットカフェなどを往復する生活を送ったことのあるケース」が17人と、「野宿生活に至ったケース」全体52人のうち33%存在していた。さらに、「不安定就労や無職でネットカフェなどで生活しているケース」と「家族関係上の理由でネットカフェなどで生活しているケース」でさえ、合計27人のうち、野宿を経験したことのある人が7人、「本屋の前で寝ずに過ごした」「コンビニの立ち読みを移動した」など準野宿を経験した人が3人と、3分の1を超える37%の人が一度は路上を経験していた。
3. 日雇派遣・ネットカフェ生活は、正規雇用への就職や、（住み込み派遣など非正規であっても）常用雇用での就労へと向かわせる力よりも、より強い力で野宿生活へと引っ張られている。
4. 日雇派遣・ネットカフェ生活でなくても、派遣や非正規雇用、特に自分でアパート等を確保できず寮などの住込みで働いている場合、失職が住居喪失に直結することで、（ネットカフェなど深夜営業店での生活を経たとしても）野宿生活に移行せざるをえない危険が高くなっている。

〔ウ〕 要約すれば、（働いていても家賃を払えなくなってしまう、失職して次の仕事を探す間に家賃を払えなくなってしまう）→（住込みの派遣や非正規雇用等を転々とせざるを得ない）⇔（日雇派遣や失職中にネットカフェなどで生活する（野宿や路上をはさむ場合あり））→（野宿生活に至る）というスパイラルである。

そして「ネットカフェ難民」と野宿生活者の間に、ホームレスとのボーダー層が確実に存在し、両者は地続きになっていた。つまり「ネットカフェ難民」あるいは「住居喪失不安定就労者」と呼ばれる存在は、

何か独立した存在ではなく、「野宿生活に至らざるを得なくなる過程での一時点」「ホームレスの直近予備軍」だと捉えなければならない。

1.3 労働社会の変容（建設日雇労働市場と派遣等不安定労働市場）

それでは彼らはなぜ、不安定就労を繰り返しながら住居を喪失し、そして野宿に至らなければならないのか。その原因はどこにあるのか。現在もなおホームレス層の中心のひとつであり、絶えず野宿と隣り合わせの生活を強いられる、寄せ場の日雇労働者と比較しながらその原因を探ってみる。

1.3.1 建設日雇労働市場と派遣労働市場の検討

■寄せ場の日雇労働者の労働形態と野宿 寄せ場の日雇労働者の雇用形態は、日々雇用であれ期間雇用であれ「流動的雇用」であり、その存在は「流動労働者」である。季節変動や景気変動による建設労働市場の変動に応じて、雇用されやすい時と雇用されにくい時がある。さらにこうしたマクロ的変動のみならず、それぞれの建築・土木現場の始まりや終わり、工程の段階などミクロ的変動や雨などの天候要因によっても、就労可能性にたえず変化が生じ続けてきた。それゆえ、就労先を求めて、簡易宿泊所に泊まりながら「現金仕事」と呼ばれる日払の仕事に行ったり、「契約」と呼ばれる飯場（寄宿舍・寮）にはいって日雇仕事をしたりして働いてきた。あるときはこの業者で、あるときはまた別の業者で。あるときは大阪で、あるときは滋賀県で、あるときは奈良で、という具合にである。山谷や釜ヶ崎などの寄せ場を渡り歩いてきた労働者も多い。就労現場もまた、あるときは大林や鹿島といった日本を代表するゼネコンの現場であったり、あるときは町の中小建設会社であったりという具合である。

「流動的雇用」は、雇用される側である労働者の流動化も必要とするからである。あるところが忙しく、あるところが暇であれば、暇なところから忙しいところへの労働力の移動が必要になる。それは雇われ先の移動の場合もあれば、派遣先の移動の場合もあり、また就労地域の移動の場合もある。こうして、「流動的雇用」の下で働く寄せ場の日雇労働者は「流動労働者」にならざるを得なかったのである。

流動労働である建設日雇労働は、野宿と隣り合わせである。仕事量が減る、けがや病気で働けなくなる、年をとって雇ってもらえなくなるなどの就労阻害要因が少しでも立ちはだかると、たちまち収入が途絶え、路上に放り出されるからである。しかも収入が不安定であるだけでなく、たえず移動労働者として住む場所を変えざるを得ないために、固定した住居をもてない状況におかれている。そのことが、収入減が宿泊先の喪失に直結する要因を増幅している。また飯場などは雇用と居住が一体であるため、退職による収入の途絶と住居の喪失が同時にやってくる。流動労働の過程で、就労からこぼれ落ちることがあれば、たちまち野宿を強いられたり、恒常的な野宿生活に追いやられたりするのである。労働社会の末端で、使えるときだけ使用され、いらなくなれば何の保障もなく労働市場から排出される「使い捨て労働者」が、寄せ場の日雇労働者だったのである。90年代初頭、バブル経済の破綻に起因した建設日雇労働市場の縮減によって、寄せ場の日雇労働者が大量に野宿生活に放り出され、結果90年代においてホームレス層の中心にならざるを得なかった現実が、流動労働と野宿の連関性を証明している。

■間取り対象者の労働形態 それでは、間に正規雇用をはさむことがあっても、派遣や非正規雇用を転々としてきた人が大半であった間取り対象者は、どういう労働形態の労働者なのだろうか。彼らの多くは、一定時期から、複数の事業主あるいは派遣先の間を比較的短期に移動していた。就労地域・居住地域も、かなりの距離で移動している人が多かった。正規雇用者であるか、派遣労働者であるか、アルバイトや契

約社員などの非正規雇用者であるかは、それらの過程の一時点での属性を表しているに過ぎなかった。

派遣労働を取ってみても、彼らは就労し続けるためには、複数の派遣元に登録したり、派遣元や派遣先を一定期間で移動していくことを余儀なくされてきた。それは、派遣事業においては、派遣元という雇用主の事情によって雇用量が決定されるのではなく、派遣先の労働力需要に応じて派遣元の雇用量が決定されるからである。特定の派遣元と雇用契約を結んでいても、派遣先の事情によって就労できたりできなかったり、雇用契約が更新されたり更新されなかったりする。あるいは、派遣先＝労働力の提供先は短期間で入れ替わったりするからである。

これは、労働者派遣事業法の成立以前から続いてきた寄せ場の日雇労働者の就労形態そのものである。彼らを規定するとするならば、「流動労働者」こそふさわしく、その時々の雇用形態は、「流動労働」の一時点における表現形態に過ぎないといえる。

寄せ場の建設日雇労働者と彼らは、ともに流動的労働形態で働く「流動労働者」だった。

■流動的労働形態の特徴 「流動労働形態」の問題は、単純な「失業」問題としては表れない。なぜなら「働いている」にもかかわらず、同時に「失業している」からである。あるいは比較的短期間のうちに、就業と失業を繰り返すからである。また、近年「ワーキングプア」＝働いていても生活保護基準以下の生活しかできない人たちの問題が社会問題になっているが、それは長時間働いていても低賃金であるため貧困状態を強いられる人たちと、低賃金でありかつ半失業状態に置かれている人たちの両方から成り立っている。聞き取り調査においても、住み込みの派遣などで、毎日残業をふくめて働いても、寮費などを引かれると1ヶ月に数万円しか残らない状態と、日雇派遣で毎日仕事がなく、1ヶ月の総収入が生活保護基準前後かそれ以下である状態の両方を聞くことができた。しかも、その両方の状態を、同じ人があるときは一方、あるときは他方と繰り返しながら働いている事実である。

厚生労働省の「日雇派遣労働者の実態に関する調査」でも、「短期派遣のみでありかつ雇用契約が1日単位である者」のうち男性の月平均就業日数は、18.6日、月平均収入は15.1万円となっている。かつての寄せ場の日雇労働者の姿とダブって見える。

■建設日雇労働市場における「手配師・人夫出し制度」の存在 つぎに、寄せ場の建設日雇労働市場において「手配師・人夫出し制度」と呼ばれているものが存在しているのはなぜだろうか。

建設業は受注産業であるため、その工事量に絶えず変動が生じる。そのため、ゼネコンと呼ばれる総合建設業を頂点に、専門業者を二重三重に配置したピラミッド型の重層的下請構造を作ることによって、工事量の変動に対応している。末端の専門業者は、ひとつの建設工事の工程の一部を担い、ひとつの工事の間にも工程の進捗具合や他の専門業者の工程との関係で、人手を多く要する時とさほど要しない時、さらにその業者自体が工程に加わらない時とが生じる。そのため、労働力の需要に一定期間ごと、また日々においてさえ変動が生じる。

日々変動が生じる労働力需要を、それぞれの事業主が、その時々自力で労働者を募集し、雇い入れることで満たすことは、きわめて煩雑である。事業所が労働者を集めに行きにくい遠隔地にある場合も多い。また必要のないときに不要な労働力を抱えていれば、事業主にとっては経費負担が増大してしまう。そのため、労働力需要を簡易に満たせるようにするために、複数の事業主間で、必要に応じて労働力の入退と移動を円滑に行えるようにするシステムが必要とされたのである。円滑にするためには、募集者と雇用者、直接の雇用主と労働力の実際的使用者を切り離すことが最も効率的である。それを担う業者として、手配師・人夫出しが必要とされたのである。いわば労働力のレンタル業である。

それゆえ、「流動労働者」である寄せ場の日雇労働者は、不特定の事業主に、必要に応じて労働力を提供

するために、特定の事業主に従属するのではなく、彼らの労働力を必要とする事業主層の総体に従属している。必要があれば労働市場に吸引されて一時的に特定の事業主に従属し、他の時期には他の事業主に従属し、必要がなくなれば労働市場からの退出を余儀なくされる。それは、特定の事業主に労働力を提供し続け、その支配下にとどまることを基本としている終身雇用とは異なる雇用システムである。

■労働力供給システムの検討 では、寄せ場の日雇労働者と派遣や非正規を転々とする労働者で、労働力供給システムは、異なるのだろうか。建設日雇労働市場において「手配師・人夫出し制度」と呼ばれているものと、派遣労働制度との違いはどこにあるのだろうか。

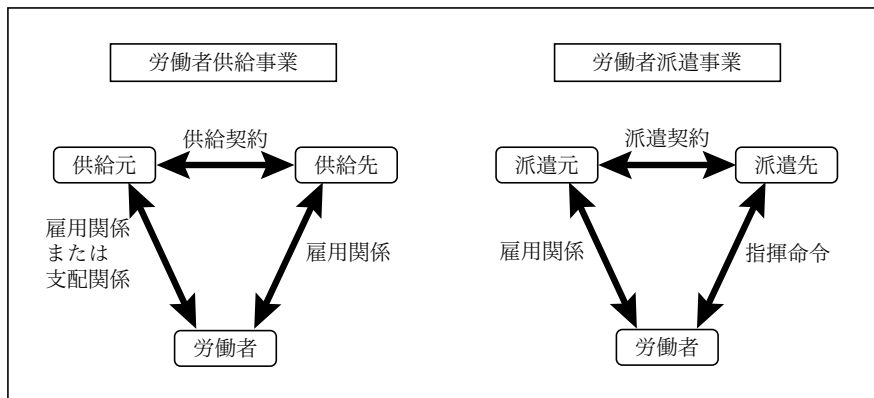
まず、建設・警備・港湾運送の3業務は、労働者派遣事業法において派遣禁止業務と規定されている。「手配師・人夫出し制度」は職業安定法において禁止されている「労働者供給事業」に当たるとされ、違法であると認定されている。しかし、現実には、東京・山谷、横浜・寿町、名古屋・笹島、そして大阪・釜ヶ崎の四大寄せ場と呼ばれる地域を中心に、かつては神戸・新開地、尼崎・出屋敷においても寄せ場が形成され、70年代初頭までは港湾荷役・製造・運輸・建設と幅広い業種に肉体日雇労働力を供給する手配師・人夫出しが存在していた。70年代末以降は、業種は主に建設労働に絞られていったが、現在に至るまで存続している。聞き取り調査においても聞くことができた建設日雇では、大半がこの手配師・人夫出しが介在して労務供給が行なわれている。

派遣労働制度とは、1986年に当初専門的13業種に限定して施行され、その後原則業務限定なし・一部禁止のネガティブリスト方式へと改定された労働者派遣事業法によって、法律的に許された制度である。派遣事業者として厚生労働大臣から許可を受けた事業者が、禁止業務を除いては、合法的に労務供給できるシステムである。労働者派遣制度は、そもそもが労働者供給事業のシステムに、さまざまな法的規制をかぶせ、派遣元事業者と派遣先事業者の責任所在を規定したものであると考えて間違いない。

派遣労働制度の成立は、それまでの雇用システムの大転換につながるものであったということができる。派遣法以前においては、アルバイトやパートであれ、期間雇用であれ、労働者を指揮命令する事業主が直接雇用することが前提であり、一部許可を受けた労働組合をのぞいては、非合法的な存在としてのみ労務供給システムが存在していた。派遣法の制定は、新しい衣を着せることによって、労務供給システムを、社会的に堂々と認められた制度としてデビューさせた。つまり、収益（営利）を目的に、雇い入れた労働者を他の事業主の下に送り出し、その指揮命令のもと働かせる（いやな言い方をすれば、労働力の使用権を売買する）ことが、立派な事業として認められたということである。

事業者側してみれば、余分な労働者を抱える必要がなく、必要なときに必要なだけの労働力を、外部の派遣会社から投入してもらうことができる。そのことによって、人件費を固定費から変動費に変えたり、総額人件費を削減することができる。のみならず、解雇や人員整理といった雇用調整に伴うリスクを回避することができるようになる。それゆえ需要は大きく、すでに労働者派遣事業法成立間もない80年代の後半からさえ、「専門26業務」ではない違法派遣が行なわれていた。聞き取り調査においても「20年間ずっと派遣で働いてきた」と言っていた人もいる（専門26業務ではない）。一時各都道府県労働局が摘発に乗り出していた「偽装請負」を、キャノンや松下といった名だたる大手メーカーが半ば公然と行なっていた事実から見ても、すでに「全業務において派遣労働は認められるべき存在である」という風潮が、企業社会・雇用現場において蔓延していたと見るべきである。

つぎの図を見てみることにする。



左の図と右の図はどう違うのだろうか。労働者供給事業における供給先と労働者の「雇用関係」から、「指揮命令」権のみを取り出したのが労働者派遣事業だと見てしまうのは、私だけだろうか。「二重雇用は違法だが、雇用と指揮命令を分離すれば合法である」と言っているようなものである。寄せ場において建設日雇労働市場を見てきた者にとっては、二つの事業はまったく同じに見える。なぜなら「手配師・人夫出し制度」における人夫出しとは事業者であって、当該労働者と雇用関係を結び（それゆえ正規の手続きとしては、日雇労働被保険者手帳に人夫出し業者が雇用保険印紙を貼付し、その業者名の割印をする）、供給先の業者は指揮命令のみを行なって、賃金支払等の雇用関係に基く行為は行わないからである。

「労働者供給」といおうが「労働者派遣」といおうが、一方の事業者が他の事業者に労働力の使用权を商品として売るものであることに変わりがない。

1.3.2 寄せ場型建設等日雇労働者と若年派遣労働者の労働市場参入過程の検討

■労働市場への参入システム それでは、寄せ場型建設等日雇労働者と若年派遣労働者の労働市場参入過程の共通点と相違点はどこにあるのだろうか。

まずは、労働市場への参入システムから見てみる。ここで比較するのは、釜ヶ崎において日雇労働者への職業紹介を行なっている財団法人・西成労働福祉センター（以下、センター）が2007年10月に実施した、センター求人事業所に対する「求人状況アンケート」と、厚生労働省が2007年6～7月に実施した「日雇派遣労働者の実態に関する調査」である。

センター調査は、338社から回答があり、その事業所は大阪府内181社を最大数にして、そこから兵庫・京都・滋賀・奈良といった近畿各府県が10社以上、さらには島根・岡山といった中国地方、富山・長野・石川といった北陸にまで広がっている。

一方厚労省調査では、日雇派遣等の短期派遣を取り扱っていると考えられる派遣元事業主10社から回答が得られている。

募集方法を比較してみることで、労働市場参入の仕組みを比較する。センター調査は、2007年9月1ヶ月間に新規に期間契約（飯場に入ること）で雇用した労働者の実数で単数回答であるのに対し、厚労省調査では募集方法に関する複数回答である違いはある。

調査方法の違いを考慮しても、大きな相違が存在している。日雇派遣ではホームページ・携帯サイト・求人広告などが中心であるのに対して、建設日雇では、特定地域での直接的な募集が大半である。つまり、日雇派遣では、インターネットや広告媒体が主な参入方法であるのに対して、建設日雇ではいまだ近畿圏においては寄せ場＝釜ヶ崎が主な参入方法なのである。

募集方法	日雇派遣 (厚労省調査)	建設日雇 (センター調査)
自社ホームページ	25 %	—
自社の携帯電話サイト	21 %	—
チラシ等広告 (求人情報誌をふくむ)	33 %	3 %
ポスター・新聞広告	8 %	0.60 %
ハローワーク	4 %	5 %
その他	4 %	7.40 %
釜ヶ崎での募集	—	84 %

この違いは何をもたらすのか。釜ヶ崎から各地の飯場に行った建設日雇労働者は、そこでの仕事を終えたり辞めたりすれば、釜ヶ崎に戻ってくる。そしてまた釜ヶ崎で仕事を探して他の飯場に行く。一方、日雇派遣労働者は、広告媒体で探して仕事に就く。つまり、日雇派遣労働者は、実家等の帰る場所を有さず住み込みやネットカフェなどを転々として就労している場合、同じ日雇労働者、同じ流動労働者であっても、帰ることのできる地域も仲間も持つことができないということである。そのことは、就労できず泊まる場所さえ失いそうになったときでさえ孤立し、福祉等の施策につながる情報を持つことができないということに結びついている。

聞き取り調査では、次のような声が聞かれた。

- 「自立支援センターなど知らず、福祉事務所に言っても門前払いだろうと思っていた」。
- 「もっと早くこのような施設（自立支援センターのこと）があることを知っていたらよかったのに。こんな施設があることをまったく知らなかった。いよいよ耐えきれなくなって区役所に駆け込んだのだが（それも『どうしよう』と区役所付近で逡巡しているときに、近くを通りかかった中年の女性に『どうしたの』と声をかけられ、『困っている』と事情を話すと、その女性が『すぐに区役所に相談しなさい』とすすめてくれたので、やっと相談に行った）」。
- 「今回自立支援センターに入るまで、こういった施設やNPOなどの相談機関については全く知らなかった。もっと早く知っていればなあ」「相談出来る行政や、NPOなども全く知らない」。
- 「自立支援センターという言葉は聞いたことはあるがどんなところかは知らない」「行政関係への相談はしたことがない。役所で福祉事務所や相談できる場所があるとは知らなかった。巡回相談も1年前に声をかけられるまで、あることさえ知らなかった」。

■参入理由 参入理由について見てみる。生活していくために日銭が必要だったことがひとつの要因でもある。

- 「どうしても日銭が必要だったので手っ取り早くお金を稼げる派遣にどうしてもなってしまう。収入が不安定なことはわかっているが、どうしても生活していくにはすぐお金が必要だった」。
- 「まとまった金がないですから、日払いの仕事しかダメなんですよ」。

求職活動をしたが、見つからなかったため、という理由も多い。

- 「ハローワークには99%仕事はない。元やくぎの自分をつけるような仕事はないと。求職活動は新聞の求人欄などをみて探すが就けたことはない」。
- 「一番困っていることは定職がないこと。住民登録を大阪にもどさないと面接できない。ある派遣

会社に電話したら、自分の経歴をきいて、すぐ働ける現場はあるけれども住民票が大阪でないと、つまり履歴書の書類の住所と住民票の場所が同じでないとお得意さんが受けてくれないと言われた。

- 「ハローワークにも行って職を探したが見つからず、家賃も払えなくなり、電気水道ガスも止められてしまったので、夏に大阪に高速バスで出てきた。保証人がいないことが就職活動の妨げになった」。

正規雇用での精神的な磨耗や、住込みを点々とする生活に疲れたという理由もある。

- 「十年以上も寮生活を続けてきて、これまでに東京や北陸、愛知、岐阜などを転々としてきた。寮や住み込みはもういやだ。人に使われるのももういい」。
- 「正規雇用で長時間拘束され安い賃金で使われるよりも今の派遣労働の方がましである。今は休みなしで働こうと思えば働けるが正規になるとそれはできなくなる。そういう面で就職は迷うとても迷う。よっぽどいい条件がないと正規では働けない」。
- 「仕事はクビになることがないので仕事がある限り、この生活を続けていく。自分の中では今が楽だし、正規雇用になるメリットも月給にするメリットもない。昇進のない会社であれば正規で働いてもいいかとも思う以前（正規雇用のとき）に比べたら楽ではないけど精神的には楽であるので求職活動をする必要もない」。

寄せ場の日雇労働者の参入理由とも共通しているところが多いと感じる。

■労働市場参入に対する学歴の影響 つぎに、学歴・転職などの経過を見てみる。ここで比較するのは、今回の聞き取り調査と2006年9月にNPO 釜ヶ崎が行なった「特別清掃登録者アンケート調査」の「職歴調査」部分である。

「特別清掃」とは、建設日雇労働にさえ就きにくくなる55歳以上の高齢日雇労働者と高齢野宿生活者を対象に、輪番就労の形で公共施設や道路等の清掃や除草・環境美化などへの就労機会を提供することを通して、自立の促進を図る事業である。建設日雇労働の減少によって路上に投げ出された釜ヶ崎の労働者の行政要求によって1994年から公的就労事業として開始され、現在はNPO 釜ヶ崎等が、大阪市と大阪府から受託して実施している。(2007年度で2,372人が登録し、1日当たり222人の就労者数で、月平均一人当たり3~4回就労することが可能である。)

このときのアンケート回答者数は、「職歴調査」で830人、平均年齢は60.5歳であった。最終学歴は次のようになっている。

最終学歴	小・中	高校中退	高卒	短大・高専	大学
特掃調査	61.5%	0.0%	35.1%	1.7%	1.7%
若年者調査	29.6%	13.3%	50.0%	2.0%	5.1%

特掃事業の登録者は55歳以上であり、そのうち55歳以上~64歳が86.6%であるから、中学を卒業した年代は、1956、7年頃~1966年頃である。当時の高校進学率は、男子で55.0~73.5%だった。今回の聞き取り調査の対象者は、49歳以下が93%であるから、中学卒業年代は、1973年以降ということになる。このときの高校進学率は、男子で88.3%、それ以降は1975年に男子進学率が90%を超えて以降、現在は96%に達している。最終学歴における中卒比率は、特掃調査で同年代の約1.4倍~2.3倍、今回の聞き取り調査で2.5倍~7.4倍となっている。母数や50~60年代の高校進学率の急速な伸び等条件が異なるため、単純な比較はできないが、高齢日雇労働者や高齢野宿生活者よりも、若年ホームレスや「ネットカフェ難

民」の方が、学歴要因による流動的労働市場参入への圧力が、より強く働いていると考えられる。

学歴、とりわけ高校への進学に当たっては、家庭の貧困状況と関係しているともいわれており、「貧困→低学歴→流動労働者化の危険の増大」という貧困の再生産の構図を立てることが、さほどの得ていないとは考えられない。聞き取り調査の対象者のうち、最終学歴が中学卒業で、それまでの家庭環境を聞くことができた27人のうち、高校進学できなかったことに、家庭環境が基本的には影響を与えていないと判断できたのは、7人にすぎなかった。残り、判断ができない2名を除く18名は、家庭環境が何らかの影響を与えたと考えられる。父母の離婚が6人、家庭に借金があった人が3人、家庭の収入が不安定だったのが3人、児童養護施設や親戚宅に預けられていた人が3人、家庭が生活保護を受けていた人が2人だった。

■転職の影響 [ア] 転職状況についてみる。2006年の特別清掃アンケートでは、異なる職種に移動する転職種（同じ職種の場合は転職とみなさない）を3～4回経た人が27%、5～6回が26%、7～10回が20%と、転職を繰り返して釜ヶ崎に来ている人が多いという結果が出ている。今回の聞き取り調査では、対象者のほとんどは、派遣や非正規雇用・正規雇用の間で転職を繰り返している。学歴においても低学歴傾向が顕著に現れている。

[イ] 一方、聞き取り調査で得られた感触は、2002年の就業構造基本調査に現れた傾向とも一致している。就業構造基本調査では「転職経験のある者の割合をみると、30歳代後半までは学歴が高いほど低い（過去に一度でも転職を経験したことのある有業者の割合は48.4%でほぼ5割・最終卒業学校別に転職ありの割合をみると、高校・旧制中卒の52.7%に対し、大学・大学院卒は38.0%と低い）」と分析されているが、聞き取り調査の対象者は、大半が低学歴で転職回数も多かった。また就業構造基本調査では、転職希望理由で「収入が少ない」「時間的・肉体的に負担が大きい」をあげる人が多いが、聞き取り調査でも正規雇用からの退職理由に、低収入や過労働・過労働による精神的磨耗をあげる人が一定数いた。

なかでも最も注目すべきなのは、「過去5年間の雇用形態別就業移動」である。正規雇用から非正規雇用への移動は行われやすく、逆に非正規雇用から正規雇用への転換は容易ではないことを示している^{*1}。

だが、さらに見落としてはならないのは、5年経過後も、非正規雇用者のうち約4分の3が非正規雇用のままであるという事実である。5年前の調査であるから、現在はもっとこの傾向が強まっている可能性がある。一度非正規雇用スパイラルに入ってしまうと、容易にはそこから抜け出すことができなくなるといふ、聞き取り調査で得られた感触が、5年前の政府調査でも実証されていると考える。

[ウ] 以上を検討してみると、転職における雇用形態の安定性では、安定化に向かう押上げ圧力よりも、不安定化に向かう押下げ圧力の方がはるかに強いということがわかる。押下げ圧力が強ければ、非正規雇用の下へも、さらに押下げようとする圧力が加わる。その結果が、聞き取り調査で見えてきた、派遣・非正規の繰り返しから野宿生活へといたる道筋である。

転職を繰り返さざるを得なかった過程で寄せ場で日雇労働をすることになった、あるいは野宿生活に陥

^{*1} 平成14年就業構造基本調査結果の概要にはつぎのように書かれている。

9. 雇用形態間の異動をみても非正規化が進展

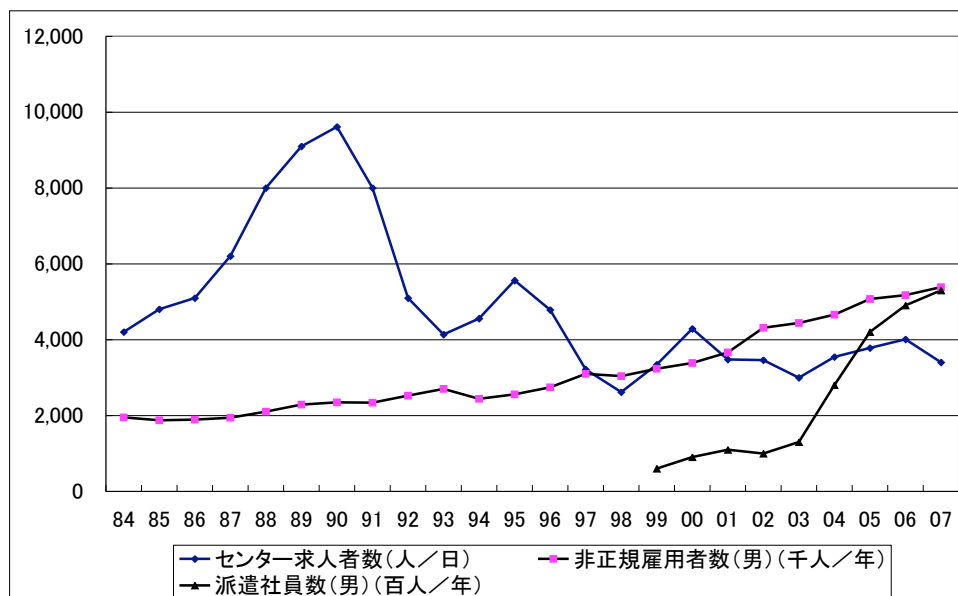
- 過去5年間の雇用者の雇用形態間の異動をみても、正規の職員・従業員からパート・アルバイトなどの非正規就業者への転換が進展
- 過去5年間に正規の職員・従業員から就業異動した者のうち、35.5%（211万7千人）が非正規就業者に転換、一方非正規就業者から就業異動した者のうち、正規の職員・従業員に転換できたのは24.8%（113万4千人）

(<http://www.stat.go.jp/data/shugyou/2002/kakuhou/youyaku.htm>)

らざるを得なくなった高齢日雇労働者や高齢野宿生活者と、転職を繰り返さざるを得なかった過程で日雇派遣や無職になり、住居を喪失してネットカフェなどに寝泊りしたり、野宿せざるを得なくなった若年不安定就労者の姿をダブらせてしまうことに、無理があるとは思えない。ここからも、「ネットカフェ難民」や若年ホームレスの問題が、自己責任として片付けられるものではないことを明らかにしている。

■労働市場の変化の影響 かつては、若年の貧困層や労働社会における底辺層が、仕事を求めて釜ヶ崎等の寄せ場＝日雇労働市場に吸引されていた。2006年の特別清掃アンケートでは、55歳以上である特掃労働者の中でも、65歳～75年の間に20歳代・30歳代で釜ヶ崎に来た人が17.5%、75歳～85年に20歳代・30歳代で来た人が16.7%いる。20年前までは確実に、寄せ場の日雇労働市場への新規参入の中心に、20歳代・30歳代の若年者がいたということである。それが現在では、日雇労働市場への新規参入の中心にその年代はおらず、学生アルバイトや主婦パート・高齢退職者を除く、派遣・非正規労働市場への新規参入の中心には、20歳代・30歳代が存在している。21世紀は、若年の貧困層や労働社会における底辺層が、仕事を求めて派遣・非正規労働市場に吸引されていると見ることができる。

その理由はきわめて明白だと考えられる。財団法人・西成労働福祉センターの集計によれば、釜ヶ崎での日雇求人数は90年を最大の山にして、95年・00年・06年の山ごとに減少してきている。他方で、総務省の労働力調査によれば、男性の「労働者派遣事業所の派遣社員」は年々増加し、2000年の年平均9万人から2007年の年平均53万人へと8年で約6倍になっている。「契約社員・嘱託」もまた、2003年の125万人から2007年の161万人へと5年で約1.3倍となっている。日雇労働市場も派遣・非正規労働市場も、同じ「流動的雇用」であり、ともに若年者が新規参入しやすい労働市場でありながらも、縮減するほうには参入が少なく、拡大するほうに吸収されていくのは必然である。



1.3.3 「国民総中流意識・終身雇用システム時代」における建設等日雇労働者と、「格差社会・『流動的雇用システム』時代」における派遣・非正規労働者の社会的状況の検討

■**寄せ場日雇労働者の社会的な位置** 日本において、高度経済成長と連関した終身雇用制の拡大・正規雇用化の進展によって、70年代・80年代においては、主婦パート・学生アルバイトを除く流動的雇用形態の中心は、建設職人層と寄せ場の建設日雇労働者であった。この時期、正規雇用が雇用形態の中心であり、非正規雇用はその付属的要素、つまり家計補助的就労であると見られていた。膨大な正規雇用者と比較的小数であれ家計補助的な非正規雇用者、その構図の中で、そこから外れる流動的労働者である寄せ場の建設日雇労働者はきわめて特異な存在だと見られ、そこから必然化される矛盾は、自己責任であるとされてきた。

建設日雇労働の結果もたらされる野宿生活に対しても、社会からは「好き好んでやっている」としか見られなかった。1983年横浜にある日雇労働者の寄せ場である寿町近くの公園で、野宿生活を余儀なくされていた人たちが少年たちに暴行を受けて殺害された事件においても、マスコミは現在はほぼ死語と化しているだろう「浮浪者」として表現した。大阪でも警察による野宿生活者の指紋採取などの人権侵害事件も起きていた。

寄せ場の日雇労働者は、「危険で汚い存在」としてしか見られず、それゆえ治安対象としての社会政策がおこなわれてきた。釜ヶ崎の街中には、「威集事案」対策として、当時はきわめて珍しかった監視カメラがすえつけられ、労働者の動きを監視していた。犯罪社会学の中には、寄せ場の日雇労働者を「粗暴な男性たち」と規定し、それを統制するには「暴力団が適している」と、堂々と表明する論文まで存在していた。「国民総中流意識」が言われる中で、終身雇用システムからはずれ、建設現場を転々と移動する日雇労働者や、住居を持つことができず路上を転々と移動せざるを得ない野宿生活者は、「社会外の存在」に追いやられてきたのである。

他方で、建設職人もまた流動的雇用の下に置かれていたが、仕事を覚えて一人前になるとそれなりの市民生活が可能になる、あるいは下請の親方になって職人を使っていく存在にもなりえる道が存在した。賃金カーブも、35～40歳までは建設職人のほうが高く、それ以降に逆転していく（職人の賃金は年齢を重ねてもほとんど上がらず、他方、サラリーマンは年功序列賃金により年齢とともに上昇していく）と言われていた。

■**派遣・非正規労働者の社会的な位置と意識状況** [ア]「雇用流動化」のもと非正規雇用者は全労働者の4割近くを占めるに至った。また労務供給制度を土台とした労働者派遣事業は合法的な存在となって、男性だけでも年平均53万人にまで拡大した。さらに厚労省調査での回答10社だけでも、1日平均50,960人の日雇派遣労働者が稼働する時代になった。その結果、派遣・非正規で働く「流動的労働者」は、雇用システムにおける底辺労働力であることにおいては、寄せ場の日雇労働者と変わりはないが、社会システムにおいては、底辺層ではあるが「社会内の存在」として、その一角を占めている。彼らは治安対策の対象とされることもなく、寄せ場という特定した地域での労働市場に集められるとともに、そこに社会的に「隔離」されることもない。

[イ]しかし、「社会内の存在」として生きることができ一方、寄せ場の日雇労働者に見られた「たくましき」や職業的誇りを持ちえず、個々に孤立した状況に追いやられていると感じるのは、私だけだろうか。寄せ場労働者の「たくましき」は、他の職業よりも過酷な肉体労働をしていることによって培われた

ものであり、「職業的誇り」は、日本経済の発展を土台で支えてきたという自負であった。労働者の自慢話の中心は仕事の時の話であり、「どんなにしんどくてもトンコ（途中で逃げ出すこと）したことはない」「どここの建物は俺がつくった」というものだった。

聞き取り調査で接した「ネットカフェ難民」や若年ホームレスには、総じて寄せ場の日雇労働者のようなたくましさは感じられず、生きるエネルギーの弱さが印象づけられた。それは、日雇であっても、建設や港湾といった特定の仕事を続けることによって培われる技能や誇りといったものが、彼らの就労形態や労働過程からは生み出されにくいからではないか。同じ製造派遣であっても、派遣先が変わるたびに工程や手法の異なる作業となって技能を蓄積することができない。（あるいはそもそも技能の蓄積が要求される労働過程ではない）日雇派遣では、「手伝い」に近い単純化された仕事しか与えられない上、派遣先がころころ変わる。建設日雇労働者以上に、さらに「代替可能な」労働力として、彼らは労働社会において位置づけられているのではないだろうか。そのことが、彼らに感じられた「あきらめにも似たひ弱さ」や職業意識の希薄さにつながっているのではないだろうか。

- 「いつまで生きていくかわからないし、別に今死んでも特に悔いはない。独り身だし、昔やりたいたくまは散々やってきたし。だから大きな不安を抱くこともない」。
- 「3~4年もこんな生活してるんだから、見通しといたってそんなもん立ってたら、こんな生活してないです」。
- 「明日自分が生きていくかどうか分からないから、とにかく今日1日を精一杯生きると、小学校くらいから思ってたんですね。明日僕は死ぬかもしれないなって。そう思ってきましたから。何か起こったら、そのときに考えます」。
- 「自分たちみたいな状況の人間は、将来への不安なんて、そういう一般的な人が考える感覚はもうない。自分は地獄を見てきた。だから今は天国のよう。人は毎日寝る場所がなくて大変だろうなんて言うだろうけど、誰にも追いかけられずに、公園の夜景みて歩いている。天国。明日身体が動かなくなるかもしれない。でも江戸時代みたいに野ざらしになることはないだろう。最低限の救済はあると思う」。
- 「派遣といえば聞こえはいいが、もとやくざがやっていたことをしているだけ、搾取しているだけ。今はしょうがないとあきらめている。いろいろ人には事情があるにもかかわらず、休んだら終わり」。

1.3.4 結論

以上見てきたように、建設日雇労働市場と派遣労働市場は、そのシステムともたらす効果においては、基本的に同じである。異なるのは、同じことが行なわれていても、表面上「法律で認められているか」「認められていないか」である。

それゆえ、派遣や非正規雇用を転々としてきたことは、彼らの自己責任と呼べるものではない。建設日雇労働と同じく労働市場が要求しているものである限り、働いて収入を得て生きるためには、半ば必然的にたどらなければならない過程である。

建設日雇における「現金仕事」を日雇派遣に、「簡易宿泊所」をネットカフェ等の深夜営業店に、飯場住込みによる「契約」を寮への住込みによる派遣に置き換えてみる。「現金・簡宿」のセットと「日雇派遣・ネットカフェ」のセットは、日払の労働と日払の宿泊先のセットとして、まさに同義語である。「契約終

了による飯場からの退出」と「雇用契約終了による派遣元の寮からの退出」は、就労先と居住先の同時喪失として同義語となる。

そうであるならば、建設日雇労働者に起きてきたことが、派遣労働者にも起きていくだろうことは、容易に推測できる。そして、実際に同じことが、流動的労働形態の下に置かれた、派遣労働者を含めた非正規雇用労働者に始まりつつあるというのが、今回の聞き取り調査から得られた結論のひとつである。

流動労働者は野宿生活に陥るリスクが極めて高く、現在はそうでなくても、時間とともに、年齢とともに野宿可能性はますます高まっていく。30歳代において、この過程を経て野宿生活に至らざるを得なかった若年層、あるいは20歳代においてもネットカフェ・住み込み・野宿を繰り返さざるを得なくなっている若年層が、決して少ないとはいえない数すでに生み出されてきていることが、今回の調査を通して明らかになった。80年代までは、寄せ場の日雇労働者や建設職人など労働者の一部に押しとどめられていた流動的労働形態が、労働社会における歴然とした構成要素として可視化するまでに拡大した結果、同じ流動労働である派遣や非正規等を繰り返さざるを得なかった労働者層の中から、新たにホームレス化せざるを得ない人たちが生み出されるようになってきたと考えるべきである。

しかしながら、労働市場のシステムと効果が必然的に生み出す野宿生活化への過程は基本的に同じであるとしても、労働市場への参入経路の違いに規定されて、若年の派遣非正規等の流動労働者には、帰るべき地域がなく孤立している場合が多かった。また寄せ場の日雇労働者よりも、学歴要因による流動的労働市場参入への圧力が、より強く働いていると考えられた。さらには「職業的誇り」を土台にした生きるエネルギーも、十分に形成されない状態に置かれている。これらの相違が、若年の派遣・非正規労働者は、寄せ場の日雇労働者よりも低年齢で野宿生活化する危険性が高く、また野宿生活をして生き抜くことさえも困難になるのではないかと危惧をもたらす。

1.4 ホームレス問題の変化と複雑化

1.4.1 高齢日雇労働者主流型から中高年失業者との混合型への変化、そして若年不安定労働者等が加わった社会的困窮者との複合型へ

社会的に可視化された「ホームレス問題」は、90年代半ばから、建設日雇労働市場の縮減と労働者の高齢化・建設作業の機械化等の要因が重なって、まず寄せ場の日雇労働者の野宿生活化と公園や河川敷等への拡大として始まった。

次に90年代の末から、倒産やリストラ等によって終身雇用システムからはじき出された主に現業部門の中高齢失業者を吸収して、地域的にも量的にも層的にも広がって行った。旧来であれば、これらの人たちは、景気の変動や産業構造の転換に伴って、正規労働市場からはじき出された後、仕事を求めて寄せ場の日雇労働市場に吸引されていた人たちだった。寄せ場における日雇求人激減し、彼らを吸収する余力を寄せ場や建設労働市場が持ちえなくなったため、「ホームレス」として全国で顕在化していかざるを得なくなったのである。

彼ら二層の「ホームレス」と呼ばれる存在は、終身雇用形態からの野宿生活化（もちろんストレートに野宿生活になるわけではなく、その間に非正規雇用を転々とする、中小零細企業で働くという過程を経ている人が圧倒的に多いが）であれ、日雇労働者として生きてきた中からの野宿生活化であれ、職業的に培われた誇りと生きる術を土台にして、自らテントを張り、遠くまでアルミ缶等を集めに行きそれを売り収入を得て生きていく意欲と能力を有していた。特に寄せ場の日雇労働者出身の野宿生活者は、屋根も仕

事も失ってもなお、たくましかった。だからこそ、施策や置かれてきた処遇に対する不信は、公園や路上で生き続けていくことを選択をも可能とし、野宿生活の高齢化と長期化が促進された。

それゆえ、現状の民間労働市場に適合できる資質を取り戻すことは困難であっても、建設労働に代わる特別清掃事業のような、道路清掃や公園や河川敷等での除草・樹木の剪定・公共施設の補修・公園管理など、社会貢献できる現業的労働に日々雇用的な形で就労することで、次に生きていく意欲を自ら増進させていくことが可能であった。就職による社会復帰と高齢者への生活保護適用による社会的自立の間を埋める第三の施策として「屋根の保証」と「社会的就労事業創出によるそこへの従事の保証」を加えて、ひとつの施策体系を指し示すことが可能であった。

しかし、現在始まりつつある第三のホームレス問題は、自立支援策をより複雑で多様なものにすることを要求している。今回の聞き取り調査に当たった他の人たちからの報告も重ねて考えてみれば、ホームレス化の第三層は、若年不安定就労者を含めた社会的困窮層である。流動的労働形態の中で働かざるを得なかったと同時に、そこに至る過程には、さまざまな社会的困難性を背負わざるを得なかった人も多かった。

もちろん寄せ場の日雇労働者にも、そこに至る背景に家庭の貧困など社会的困難が存在した人が多い。だが第三層は、社会的困難のみならず、戦後の雇用システムとそれに基く労働過程によって培われてきた「職業的誇り」を培うことができないまま、流動的労働過程の中をさまよってきたように感じられる。「野宿生活力」を見ても、聞き取り対象者のうちの野宿生活に至った人の多くは、公園や河川敷などにテントや仮小屋を作って「定住」した経験を持たず、「流動型路上生活」として「ベンチで寝る」などの方法で寝泊りするしかできなかった。日雇労働者出身層のようなたくましさを感じられなかった。

それゆえ、ただ年齢的に民間労働市場に復帰しやすいというだけで、「寮付の求人」「形だけの正規雇用」に誘導したとしても、それだけでは彼らの「流動的労働形態が繰り返されることによる野宿生活化」のスパイラルが断ち切られることはありえない。また、「社会外の存在」として放置し、野宿生活を強いたとしても、そこで生き抜く力を身につけるのは並大抵のことではない。

現在よりも安定した就労と住居に押し上げる支援努力を進めながらも、彼らの抱えるさまざまな社会的困難性を取り除く多角的なアプローチと支援が必要であり、希望を持って「こうがんばっていけばこう生きていける」ということを指し示しえる支援が必要である。

「自信の回復」ではなく「自信の創出」が必要であり、「存在意義の確認」ではなく「存在意義の獲得」が必要となる。

1.4.2 雇用システムと社会的援護のあり方（新たな層のホームレス化を防ぐために）

派遣・非正規といった流動的労働形態にある労働者を、「使い切った後廃棄する労働力」としてはならない。それでは寄せ場の日雇労働者が強いられてきた状態の再来でしかない。例え派遣や非正規雇用を転々とせざるを得なくても、最低限、住居を喪失したり野宿に陥ったりしない、またそうなることへの不安を抱えざるを得なくても良い援護システムが必要である。さらに「派遣や非正規から正規へ」押し上げるだけでなく、派遣や非正規であっても、最低限市民生活を送れるようにできる社会システムが必要である。雇用システムにおいて、正規雇用という固定的雇用形態と派遣や非正規雇用などの流動的雇用形態の分担が必要とされる限り、非正規雇用から正規雇用に行けた人の分だけ正規雇用から非正規雇用に移ってくるという循環が行なわれてしまうからである。そして「使い捨てられる存在」として自己認識させる労働社会ではなく、「必要な存在」として自己認識できる労働社会を形成すべきである。

それでは、現状において最低限とりえることができる策は何か。

1、国は、東京・愛知・大阪のホームレス就業支援センター（もしくは協議会）を通して、「住居喪失不安定就労者就業支援事業」を開始し、そこで職業紹介や求人情報の提供・就労相談窓口の開設に乗り出している。東京都も対策に乗り出している。また、就労支援関係・福祉援護関係の相談員が連携し、ネットカフェ等に出向いて相談を受ける対策を、国が進めている。

さらにもう一步踏み込んで、ホームレス対策用に設置されている自立支援センターを、「住居喪失不安定就労者」用にも開設し、あるいは旧来のセンターにも公式的に受け入れることが必要である。公式的には「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」に規定されている「ホームレス」しか自立支援センターに入ることができないということであれば、住居を喪失したとしても、寝泊りする場所さえ失って路上生活になるまで、施策の支援を受けることができなくなってしまう。

就労相談窓口だけが存在しても、実際に相談に訪れる人の多くは、今日明日の寝場所さえ失ってしまうまでに追い込まれた状況で訪れる可能性が高い。それは聞き取り調査でも見えてきた現実である。すぐに「住み込み求人」に移動できる人であれば、大半の人は求人情報誌やインターネット情報を得て相談前に自ら就労しているだろう。住み込み先を出て、仕事も住居を新しく借りだけの金銭的余裕も持っていない人にとっては、いつでも駆け込むことができ、すぐに安心して安定的に寝泊りするところがある場所が必要である。所持金を保持した上で落ち着いて求職活動でき、働きながら貯蓄できる施設や住居である。その上でこそ就労相談や求人紹介が生きてくるだろう。

2、国のニート対策として行われている「若者自立塾」に「住居喪失不安定就労者」や若年ホームレスが入れるようにすることである。自立塾は受講費は無料であっても、食費等の経費負担をしなければならない。それが彼らや貧しい家庭の若者の入塾を阻害する要因となっている。すでにニート対策は、一定の経済水準を要する家庭のみを対象とする施策では不十分な段階に入っていると考えられる。聞き取り調査においても、派遣や非正規ではなされない社会人教育・企業適応訓練を受けた方が、自信を持って次のステップに踏み出せるのではないかと感じられる人たちが存在していた。「貸付」や補助の制度を設けることによって、彼らを迎え入れる施策をおこなう必要がある。

3、すでに厚生労働省は、日雇派遣労働者を日雇労働求職者給付金の対象と認め、この制度の普及を図る方針を打ち出している。だがその対象を「① 今後、常用就職を希望している方又は② ハローワークにおいて常用就職に対する意識の喚起・支援が可能と判断した方（周知用リーフレット）」に限定している。日雇労働求職者給付金の対象と認めたことは、大きな第一歩だと評価できるが、「限定的・特例的運用」にするのではなく、通常の日雇労働被保険者の適用労働者と同じにしていくべきであろう。さらに行政指導を通して、普及の徹底を図るとともに、派遣事業者の許可要件に「雇用保険等社会保険の適正な手続きをおこなうこと」を盛り込んで、悪質な事業者には事業停止や許可取消し等を厳格に行うことを望む。

4、「住居喪失不安定就労者」対策の中に、就労福祉支援員制度を創設する。生育環境や労働環境等に起因して就労意欲や生きる目的等の減退が見受けられる、あるいは、発達障害・知的障害や精神疾患の可能性が見受けられる住居喪失不安定就労者については、支援員が関与して医療・福祉・ハローワークなどの専門相談機関に誘導するとともに、手帳申請や居宅設置等を支援するシステムを作る。

大幅な法改定を伴わなくても可能なこうした施策を積極的に打ち出して実施することを通して、まず最低限のセーフティネットを整備すべきである。さらには、流動的雇用形態に対する法規制を進めながらも、非正規雇用が労働市場の一定数を占めている実状に応じた所得・社会保障の援護策をつくりあげるべきである。規制緩和の是非はともかく、労働市場を市場原理にゆだね、セーフティネットを整備しないま

ま流動的労働形態と「流動労働者」の拡大を放置していくことは、結局社会全体の不安定化と最後のセーフティネットである福祉制度への一方での過度の集中と他方での切捨てを生み出すことになっていく。

切り捨てた社会でも給付依存社会でもなく、働くことで普通に生きることができる社会をこそ形成していかなければならない。

参考資料＝それぞれのケース事例

現在、野宿とネットカフェなどと住込みを繰り返しているケース

1. 20歳代・非正規→日雇派遣→施設→日雇派遣・野宿→派遣（寮）⇔ネットカフェ生活⇔日雇派遣⇔野宿⇔派遣（寮）の繰り返し（事例88）
2. 30歳代・正規・現業→パチプロ・サウナ生活→野宿→建設日雇（飯場）→派遣・非正規（寮）⇔ネットカフェ・簡宿生活⇔日雇派遣⇔野宿⇔派遣（寮）の繰り返し（事例89）
3. 50歳代・正規・現業→野宿→日雇ガードマン等・ネットカフェ・野宿（事例62）
4. 20歳代・家出→野宿→施設→初職＝正規・現業→派遣（施設から）→派遣（寮）→正規・現業→倒産→野宿→派遣（寮）⇔ネットカフェ生活⇔日雇派遣⇔野宿⇔派遣・非正規（寮）の繰り返し（事例65）

野宿生活に至ったケースのうち、野宿とネットカフェなどを往復する生活を送ったことのあるケース

1. 50歳代・正規営業→自営→廃業→無職で家賃滞納→非正規・ネットカフェ・野宿往復→野宿（事例2）
2. 30歳代・正規・事務→過労で退職→非正規→精神疾患で療養→非正規・正規転々→派遣（寮）→失職→ネットカフェ・野宿往復→野宿（事例7）
3. 40歳代・正規・現業→退職後に震災で住居喪失→正規（寮）転々→日雇派遣→ネットカフェ・ドヤと野宿の往復→野宿（事例32）
4. 30歳代・正規・現業→正規現業（寮）→解雇→非正規→倒産→野宿→非正規（寮）→ネットカフェ生活→野宿（事例45）
5. 30歳代・正規・現業→自衛隊→正規（寮）→母親死去に伴う精神的疲労で退職→派遣（寮）転々その間にネットカフェ・野宿はさむ→野宿（事例67）
6. 40歳代・正規・現業→自衛隊→請負・派遣（寮）転々・カプセル・野宿往復→野宿（事例73）
7. 30歳代・正規・現業→過労で退職→派遣（寮）→日雇派遣・ネットカフェ・野宿→野宿（事例95）
8. 30歳代・正規→非正規⇔日雇⇔ネットカフェ・カプセル⇔野宿→非正規（寮）→野宿（事例66）
9. 30歳代・初職＝非正規→正規・現業転々→派遣（寮）転々・その間にサウナ・野宿→野宿（事例84）
10. 40歳代・正規・現業→正規・現業→派遣（寮）⇔アパート⇔退職⇔派遣（寮）の繰り返し20年→日雇・カプセルホテル・野宿→野宿（事例71）
11. 30歳代・正規・現業→倒産→建設日雇・簡宿・野宿→野宿（事例80）
12. 30歳代・正規・現業（寮）→正規・現業（寮）転々→派遣（寮）→建設日雇（飯場）→建設日雇・簡宿・野宿→自立支援センター→派遣（寮）→無職・ネットカフェ生活→日雇派遣（簡宿）→野宿（事例81）

13. 40歳代・正規・現業（寮）→非正規転々→実家へ戻る→非正規→父死去・実家を出る→派遣（寮）転々→建設日雇（飯場・野宿）→野宿（事例86）

野宿生活に至ったそれ以外のケース

1. 30歳代・正規現業→非正規→日雇派遣→家賃滞納→ネットカフェ生活→労災→野宿（事例1）
2. 20歳代・正規現業→過労働で退職→非正規→日雇派遣→家賃滞納→建設日雇・ネットカフェ生活→野宿（事例3）
3. 30歳代・正規現業→非正規→正規現業→過労による精神疲労で退職→家賃滞納→ネットカフェ生活→野宿（事例4）
4. 30歳代・非正規→ヤクザ→服役→非正規→仕事見つからず派遣もダメ→ネットカフェ生活→野宿（事例6）
5. 50歳代・正規・現業→自営→倒産・離婚→建設日雇（簡宿・飯場）→野宿（事例25）
6. 40歳代・非正規→非正規転々→建設日雇（寮）→退職→ネットカフェ生活→野宿（事例26）
7. 30歳代・非正規→正規・現業（途中で離婚）→倒産→家賃滞納→ネットカフェ生活→野宿（事例27）
8. 30歳代・非正規→派遣・非正規・正規転々→借金か？家出→日雇（倉庫作業）・ネットカフェ生活→野宿（事例28）
9. 50歳代・正規→非正規→自営→家族関係で家出→非正規→日雇派遣・簡宿生活→野宿（事例29）
10. 40歳代・正規・現業→建設日雇（飯場）→労災→野宿→自立支援センター→日雇派遣・ネットカフェ生活→野宿（事例30）
11. 30歳代・正規・現業→正規転々→病気で退職→派遣（寮）→リストラ→ネットカフェ生活→野宿（事例31）
12. 30歳代・正規・現業→非正規転々（寮）→派遣（寮）→リストラで失職→建設日雇（簡宿・飯場）→野宿（事例49）
13. 30歳代・正規・現業→派遣・非正規→家業手伝い→正規・現業（自室）→退職→家賃滞納→日雇派遣・ネットカフェ生活→失職→野宿（事例50）
14. 20歳代・派遣（寮）→非正規転々→派遣・非正規・ネットカフェ生活→野宿（事例52）
15. 30歳代・正規・現業→退職後実家を出る→建設日雇・飯場→実家に戻る→正規・現業→建設日雇・飯場→生活保護→野宿（事例64）
16. 40歳代・正規・現業→非正規転々→正規・現業（寮）→野宿→自立支援センター→正規・現業（自室）→退職後家賃滞納→派遣（寮）転々→野宿（事例68）
17. 40歳代・正規・現業→事故で退職→派遣転々（自室）→家賃滞納→実家に戻る→日雇派遣・野宿（事例69）
18. 20歳代・正規・現業→正規・現業（寮）→派遣（寮）→解雇→正規（寮）→解雇→親戚宅→退出→ネットカフェ生活→野宿（事例70）
19. 30歳代・初職＝正規・現業→転勤→倒産→求職も見つからずアパートを引き払う→ビジネスホテル→野宿（事例72）
20. 30歳代・ヤクザ→廃業→非正規→日雇派遣・ネットカフェ生活→野宿（事例74）
21. 30歳代・正規・現業（寮）→自衛隊→正規・現業→実家に戻る→実家を処分→派遣（寮）転

- 々・間にネットカフェ→野宿（事例 75）
22. 30 歳代・正規・現業→正規・現業→正規・非正規を転々→離婚→実家に戻る→実家を出る→野宿（事例 76）
 23. 30 歳代・正規・現業→非正規→放浪（野宿）→非正規（自室）→家賃滞納→野宿（事例 77）
 24. 30 歳代・正規・現業→非正規→農業労働→非正規（映画館）→アパートへ移る→派遣（簡宿）→建設日雇（飯場）→非正規・派遣（サウナ）→野宿（事例 78）
 25. 30 歳代・初職＝正規・現業→正規・現業転々→リストラで失職→アパートを引き払う→簡宿→野宿（事例 82）
 26. 30 歳代・正規・現業（寮）→自衛隊→正規現業（寮）→派遣（寮）→野宿（事例 83）
 27. 40 歳代・非正規→建設職人 20 年→けがで退職→家賃滞納→野宿（事例 85）
 28. 20 歳代・非正規→非正規転々→父死去・実家を出る→野宿（事例 87）
 29. 30 歳代・非正規（寮）15～6 年→リストラで失職→求職失敗→日雇派遣・野宿（事例 90）
 30. 40 歳代・正規・現業→正規現業・非正規繰り返して→家族関係上トラブル→寮へ移動→退職・退寮→建設日雇・野宿生活（事例 91）
 31. 40 歳代・非正規→正規・現業→転職・リフォーム営業→父の看護で家賃滞納→非正規（寮）→野宿（事例 92）
 32. 40 歳代・正規・現業→転職→施設→派遣→契約切れで家賃滞納→非正規（寮）→野宿（事例 94）
 33. 20 歳代・派遣→正規・現業（寮）転々→非正規・ネットカフェ生活→野宿（事例 96）
 34. 40 歳代・正規・営業→派遣・非正規・正規・無職転々（自室）→家賃滞納→派遣（寮）→簡宿→非正規（寮）→退職後ネットカフェ生活→野宿（事例 97）
 35. 30 歳代・正規？ 現業→非正規・正規転々（寮・通い）→建設日雇（飯場）→日雇派遣・ネットカフェ生活→野宿（事例 98）

不安定就労や無職でネットカフェなどで生活しているケース

1. 30 歳代・派遣→途中正規もあり→派遣（寮）→過労による精神的疲労で退職→非正規・ネットカフェ生活（事例 8）
2. 30 歳代・非正規→派遣（寮）→日雇派遣・ネットカフェ生活（事例 9）
3. 20 歳代・正規・現業→退職後実家を出る→無職・ネットカフェ生活→非正規・ネットカフェ生活（事例 13）
4. 30 歳代・家業→家業破産→建設日雇・ネットカフェ生活（事例 14）
5. 20 歳代・派遣（寮）→日雇派遣・ネットカフェ生活→正規・現業（寮）→退職→無職・ネットカフェ生活（事例 17）
6. 10 歳代・正規現業→退職時滞納家賃を払いアパートを出る→非正規・ネットカフェ生活（事例 18）
7. 20 歳代・非正規→非正規転々→正規（寮）→日雇派遣・ネットカフェ生活（事例 35）
8. 40 歳代・正規事務？ →起業→倒産で失職→自宅を処分→無職・ネットカフェ生活→正規就職後もネットカフェ生活（事例 36）
9. 30 歳代・正規・現業→非正規→正規・現業→リストラで失職→非正規（寮）→退職→無職・ネットカフェ利用（事例 40）
10. 30 歳代・正規・現業→正規現業→病気で退職→非正規（寮）→非正規・ネットカフェ生活

(事例 41)

11. 20 歳代・非正規→派遣・建設職人転々→非正規（親戚宅）→リストラで失職→親戚宅を出てくる→非正規・ネットカフェ生活（事例 47）
12. 40 歳代・正規・事務→正規・現業→過労で退職→日雇派遣→自宅を処分→無職・ネットカフェ生活（事例 51）
13. 30 歳代・正規・現業→求められる資質とのギャップで退職→日雇派遣→家賃滞納→日雇派遣・ネットカフェ生活（事例 53）
14. 30 歳代・非正規→非正規転々→実家を出る→家賃に窮するのでアパートを出る→非正規・ネットカフェ生活（事例 59）

住居はあるが就労上の理由でネットカフェなどで生活しているケース

1. 30 歳代・正規・営業→正規・現業→終業が深夜で自宅に帰れないためネットカフェ生活（事例 12）
2. 30 歳代・正規・現業→正規・現業→終業が深夜で自宅に帰れないためネットカフェ生活（事例 19）
3. 20 歳代・正規・現業→収入減と精神的疲労で退職→日雇派遣（自室）→日雇派遣・自室あるが、交通費・通勤時間の関係でネットカフェで生活（事例 21）
4. 30 歳代・正規→日雇派遣（自室）→日雇派遣・自室あるが、交通費・通勤時間の関係でネットカフェで生活（事例 22）
5. 30 歳代・正規・現業→正規・非正規・派遣転々→日雇派遣（自室）→日雇派遣・自室あるが、交通費・通勤時間の関係でネットカフェで生活（事例 60）
6. 30 歳代・正規・営業事務→統合によるリストラで失職→正規・現業→日雇派遣（自室）→日雇派遣・実家があるが、仕事がきつく実家に帰るのが大変なので、ネットカフェで生活（事例 63）
7. 30 歳代・正規・現業→過労で退職→日雇派遣→日雇派遣・自室あるが、シフト調整等の勤務時間の関係でネットカフェで週2～3日生活（事例 54）

家族関係上の理由でネットカフェなどで生活しているケース

1. 20 歳代・非正規→実家を出る→非正規・ネットカフェ生活→倒産で失職→無職・ネットカフェ生活（事例 10）
2. 20 歳代・家業→家出→非正規転々・簡宿生活→実家に戻る・日雇派遣（事例 16）
3. 20 歳代・卒業後就職できず→非正規→正規→給与が支払われないため退職→家族関係が悪化→ネットカフェ生活（事例 20）
4. 30 歳代・正規・現業→正規現業転々→年齢によるのか再就職できず→家族関係が悪化→ネットカフェ生活（事例 23）
5. 30 歳代・正規・現業→非正規→正規・現業→リストラで失職→正規・非正規転々→派遣→実際関係原因で家族関係悪化→ネットカフェ生活（事例 24）
6. 20 歳代・派遣→日雇派遣→仕事減少→家族との関係上ネットカフェ生活（事例 34）
7. 30 歳代・非正規→非正規転々→家族との関係上ネットカフェ利用（事例 38）
8. 30 歳代・正規・現業→自衛隊→建設日雇→正規・現業→実家を出る→自営（収集）・ネットカ

フェ生活（事例 44）

9. 30 歳代・正規・現業→正規・現業→日雇派遣→家族との関係悪化→日雇派遣・ネットカフェ生活（事例 46）
10. 20 歳代・非正規→非正規+派遣→失職→家族との関係悪化→日雇派遣・ネットカフェ・ファーストフード店生活（事例 48）
11. 30 歳代・正規・現業→正規→社長ともめて退職→家業で働くのがイヤで家出→日雇派遣・ネットカフェ生活（事例 55）
12. 30 歳代・正規・事務→日雇派遣→家を出る→日雇派遣・ネットカフェ生活（事例 56）
13. 30 歳代・正規・営業→派遣・非正規→正規・現業→日雇派遣・ネットカフェ生活（事例 58）

第2章

「ネットカフェ難民問題」とその対策の社会的意味について

大阪市立大学都市研究プラザ 研究員
大倉 祐二

2.1 はじめに

ホームレス状態にある・あった人を紹介した、NHK 教育の番組『ハートをつなごう』（2008年2月26日）では、番組の締めくくりに出演者のソニンが現代社会に貧困のまま放置されている人がいることを知って驚いたという主旨のコメントを発していた。近年では野宿者や「ネットカフェ難民」の存在が社会問題化されるようになったとはいえ、ホームレス状態にある人々の貧困はまだまだ人々に知られるところではないままに放置されているのである。

本章では現代社会においてホームレス状態にある人々ほどのような存在であるのかを考察する。そこでまずは「ホームレス問題」の展開を明らかにし、つぎに、その存在形態のあり様を示す。そして最後に、「ホームレス対策」や「ネットカフェ難民対策」の社会的意味について問いたいと思う。

なお、以下では特に断らない限り、「生活誌」を用いる際には「ネットカフェ生活者調査」で収集した「生活誌」データを使用する。

2.2 ホームレス問題とその対応

まず、「ホームレス問題」の展開を確認する。野宿者の急増を契機に起こった「ホームレス問題」は「ネットカフェ難民」と呼ばれる人々の存在が社会問題化されたことにより、新たな局面を迎えている。

「ホームレス問題」の展開について振り返っておくと、80年代、野宿者は少なくとも寄せ場とその周辺部では見られたにもかかわらず、その存在が社会的に問題化されることはなかった*1。このことは、つぎの記述にみられる視点と無関係ではない。たとえば、社会学者の盛山（2000）は、つぎのように述べた。

産業化による経済成長、とりわけ第二次大戦後の福祉システムの構築によって、先進社会から極度の貧困は消滅した（盛山、2000: 43）

ここでは少なくとも寄せ場とその周辺部に見られた野宿者の存在は考慮されていない。また、都市社会学者の園部雅久は90年代に新宿に「ホームレス」のテントが急増したときに「ホームレス研究」を始めることの意義についてつぎのように述べた。

*1 園部（1996）と島（1998：補論1）をあわせて参照。

世間に流布した通念との関連で言えば、ホームレスというのは、必ずしも日雇い労働者あがりの浮浪者的な人や好きでやっている人ばかりではないというその意味での多様性を明示することがひとまずは重要なことである（園部、1996: 59）。

この記述から園部は、「世間の通念」は「日雇い労働者あがりの浮浪者的な人」や「好きでやっている人」、これらの野宿者の存在を（貧困）問題の範疇に含めていないため、これらの野宿者の存在を強調する意味はあまりないとみなしていたことがわかる。こうした視点や「世間の通念」が寄せ場とその周辺部に存在する野宿者の社会問題化を妨げていたと思われる。

90年代に入ると、東京や大阪の大都市を中心に野宿者が増加し、それまで寄せ場とその周辺部にしか見られなかった野宿者は以前と異なる地域でも見られるようになった。このとき、野宿者は「ホームレス」と呼称され、その存在が社会問題化されたのである。

この「ホームレス」増加の現象を、支援団体や研究者等は社会構造の変容過程のなかでおこった貧困問題であると主張し、行政に対して早急に対策を実施するべきだと求めた。また、各都市で実施された実態調査により、多くの「ホームレス」は労働市場において不利な立場にある中高年である一方で、就労による自立生活を希望していることが明らかにされた。他方で、公園に「ホームレス」が多数生活するようになった、地域の住民は「怖い」「汚い」等といった感情を背景に、自分たちの公園の使用権が犯されていると訴えた。たとえば、地域の危険・不安感情については平成13年版『警察白書』に「ホームレス対策の強化」との小見出しとともにつぎのように書かれている。「警察では、関係自治体及び公共施設管理者との緊密な連携を図りながら、地域住民が不安を訴えている地域のパトロール活動（——傍点は筆者）、緊急に保護を要するホームレスの一時的な保護等所要の活動を強化している」（p.73）。また、90年代末に大阪の長居公園周辺で女性が「ジョギング中の女性がホームレスにレイプされ、自殺した」とのデマが流れたことも地域住民の「ホームレス」に対する危険・不安感情と無関係でない（読売新聞 大阪夕刊、1999年2月15日）。これらの異議申し立てがあって「ホームレス」の存在は社会問題化したのである。

2002年8月に「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」（以下、「ホームレス自立支援法」）が制定されたが、この法律の目的をみると、「ホームレス問題」は貧困問題としてのみ捉えられているわけではないことが理解できる。

この法律は、自立の意思がありながらホームレスとなることを余儀なくされた者が多数存在し、健康で文化的な生活を送ることができないとともに、地域社会とのあつれきが生じつつある現状にかんがみ、ホームレスの自立の支援、ホームレスとなることを防止するための生活上の支援等に関し、国等の果たすべき責務を明らかにするとともに、ホームレスの人権に配慮し、かつ、地域社会の理解と協力を得つつ、必要な施策を講ずることにより、ホームレスに関する問題の解決に資することを目的とする*2（——引用中の傍点は筆者）。

このように、地域社会との軋轢、あるいは地域社会からの不満・不安な感情が「ホームレス問題」を社会問題化させ、政策的に対応しなければいけない問題にしたのである。

問題への対策は軋轢と無関係ではない。たとえば、大阪市は「ホームレス対策」として自立支援事業の実施、居宅保護制度の活用、公園仮設一時避難所の設置をおこない「ホームレス」を路上や公園等から施設に入所、あるいは「一般住宅」に入居させてきた。もちろん、このことにより多くの野宿者は路上や公

*2 電子政府の法令検索 (<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H14/H14HO105.html>) より。

園等からよりました環境で生活することが可能になった。とりわけ、これまで野宿者に対して施設収容主義をとっていたことを踏まえれば、「ホームレス対策」は野宿者が「一般住宅」で生活する機会を大きく拡大させたと言える。しかし、「ホームレス対策」が本格的に実施されて以降、元野宿者が入居・入所する「一般住宅」や施設等の環境改善があまり進んでいないことも確かである。同時に、行政は「ホームレス自立支援法」を根拠に公園のテント等を強制的に撤去し、新たにテントをつくらせないようにし、公園の「適正化」をすすめてきた*3。行政にとっては、「ホームレス」の「自立」だけでなく市民生活の「憩いの場」である公園から「ホームレス」を居なくすることが重要なのである。データがないのではっきりしたことはわからないが、結果的に、大阪市の周辺地域で野宿者が増えることになっていたとしても不思議はない。

そして、社会における貧困を把握すべき、一部の研究者や政府関係者さえもが「ホームレス」が貧困状態にあることをときに忘れるようである。たとえば、元総務相の竹中平蔵（2006）はつぎのように述べた。

八〇年代以降、先進工業国のほとんどで格差が拡大する傾向にある。日本だけで特別のことが起こっているのではないんです…格差ではなく貧困の議論をすべきです。貧困が一定程度広がったから政策で対応しなくてははいけません、社会的に解決しないといけない大問題としての貧困はこの国にはない（2006年6月16日『朝日新聞』）。

この言及に対して経済学者である橋木は各種官庁統計を用いて現代日本社会における貧困を量った上で、

竹中氏が日本には餓死に至るような貧困はない、という意味で発言されたのであれば…それは正しい。ただし、餓死は古い時代の話である。現代の貧困の性質は大きく変化している（橋木、2006：338）

と述べた。両者はともに「ホームレス」が餓死に至るような貧困状態にあることを忘れていた、あるいは知らないでいたのである。

2008年3月現在、厚生労働省は「ホームレス自立支援法」の規定に則り「ホームレス」施策を見直している。その見直しを図るための実態調査では、全国の数が4年前の同調査より6,732人少なかった。この結果を、厚生労働省はつぎのように報告している。「ホームレス自立支援特別法による就労支援や景気回復で改善したと評価する」。一方で、依然として野宿状態にある人々については「高齢・長期化が進み、就労意識が低下している」としている（朝日新聞、2007年4月7日）。行政にとって対策の拡充の必要性は低下しているかもしれない。とはいえ、2007年5月に支援者の全国組織「ホームレス支援全国ネットワーク」が設立された。マスメディア等からの訴えも含めて、支援の拡充の必要性が行政に対して説かれていくだろうと期待されている。

他方で、近年日雇派遣で働くものの「ネットカフェ」で寝泊まりする若者の存在が「ネットカフェ難民」と呼ばれて社会問題化されている。マスメディアはその存在を事実上ホームレス状態にあるとして喧伝している。たとえば、日本テレビの「NNNドキュメント ネットカフェ難民」（2007年1月28日）は「ネットカフェ」で生活する若者を「ぼくは現役ホームレス…住所はネットカフェ」というナレーションとともに紹介し、『毎日新聞』（2007年4月21日）は「土曜解説：ホームレス減少したが…」との見出し記事のなかでつぎのように述べている。厚生労働省の「ホームレス全国調査」の結果によれば「ホームレス」

*3 たとえば、2006年1月30日韮公園および大阪城公園、2006年5月2日日本橋公園、2007年2月5日長居公園で強制撤去がおこなわれた。一方で、公園に住民票を置くことを求めた裁判も起こされており、野宿する権利を求めた闘争も継続中である。

は減少したが、「ネットカフェ」で眠る若者は「ホームレス対策」の対象外のまま放置されており、これは野宿者予備軍をつくるに等しいと。さらに、国会で「ネットカフェ難民」に関する質疑^{*4}を受けた、厚生労働省は実態調査を実施し、2007年8月「住居喪失者」が推定5,400人いるとの調査結果を発表したが、『朝日新聞』（2007年8月28日）はこの発表を受け「実態が把握しにくいネットカフェで、事実上ホームレス状態の新たな貧困層（――傍点は筆者）が確実に広がっていた」と報道した。

ところが、厚生労働省は「ネットカフェ難民」は「ホームレス」でないと主張する^{*5}。2007年6月28日、厚生労働省はホームレス支援団体からの質問に対してつぎのように応えた。「ホームレス自立支援法」では「ホームレス」を「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」と定義している、それゆえ「ネットカフェ難民」は「ホームレス」ではない（藤田、2007: 63）。担当部局も異なる。「ホームレス問題」は社会・援護局地域福祉課、「ネットカフェ難民問題」は職業安定局就労支援室が担当している。

このように、行政はマスメディアや支援団体による異議申し立てをありのままに受け容れることはしなかった。行政にとってみれば、「ネットカフェ難民」の問題は公共空間を占有する中高年の「ホームレス」の問題と異なる次元にあったのである。実際、「ネットカフェ難民対策」は「ホームレス対策」の枠外で実施される予定である。新聞報道によると、対策として都市部のハローワークに専門相談員を配置し、「社員寮付き」や「住み込み」の仕事を中心に紹介することを計画している（産経新聞、2008年3月2日）。その対策は、地域社会に軋轢をもたらす「ホームレス」に対しては施設や「一般住宅」に囲い込む支援制度が構築され、「ネットカフェ難民」には囲い込まずに就労支援のみがおこなわれるというアドホックなものとなっている。

2.3 実態としてのネットカフェ生活者

つぎに、ネットカフェ生活者の生活実態を明らかにする。「ネットカフェ難民」と言うと、日雇派遣に就きながら住居なく長期間「ネットカフェ」で生活を続けている、10代後半から20代前半の若者がイメージされる。実態としてのネットカフェ生活者は「ネットカフェ難民」としてマスメディアによって流布される、そのイメージ像とは異なる。

実態としてのネットカフェ生活者はつぎのように必ずしも「ネットカフェ難民」としてイメージされる存在と同一視できない^{*6}。まず年齢については、調査協力者65人中20人が「30～34歳」でもっとも多く、つぎに「35～39歳」（14人）、そして「25～29歳」（12人）と20歳代後半から30歳代が中心である。が、40歳以上が13人、その内50歳以上が7人である。このように、ネットカフェ生活する人々には若者ばかりでなく中高齢者もいる^{*7}。

つぎに、「ネットカフェ」で寝泊まりする頻度については「週3日以上」が63人（無回答除く）中41人と多いが、「週2日未満」は22人であった。寝泊まりするところとして利用する場所は「ネットカフェ」以外に、「ビジネスホテル・旅館」（4人）、「カプセルホテル」（6人）、「簡易宿泊所」（2人）、「サウナ」（7人）、「ファーストフード店」（10人）、「その他の飲食店」（5人）、「路上」（17人）、「友人宅」（6人）、「昼間に図書館で寝る」（6人）等が挙げられている。「ネットカフェ・マンガ喫茶以外にない」のは18人であ

^{*4} 2007年3月15日参議院厚生労働委員会で日本共産党小池晃が質問。当時の柳沢厚生労働大臣は「どのような調査ができるのか検討したい」と応えた。

^{*5} ホームレスと言うと、日常生活では野宿者、あるいは路上生活者であると認識される傾向にあることも付け加えておく。

^{*6} 無作為サンプリングは不能なため、調査協力を得た人数だけを表す。

^{*7} ちなみに男性は61人、女性は4人である。

る。決して「ネットカフェ」だけを利用し続ける人ばかりがいるわけではない。また、調査協力者の多くは「住居」以外での生活期間が1年未満と短いことも付け加えておく。

そして、現在の仕事については、「仕事をしている」が65人中48人、「求職中」は14人である*8。「仕事をしている」人の内、「日雇派遣」は12人、「自営業」が4人、「常雇」が14人、派遣ではなく「直接雇用」は25人である*9。このように、日雇派遣に従事する人ばかりではない。常雇に就く人や失業中の人もいる。

したがって、ネットカフェ生活者の存在は「ネットカフェ難民」と呼ばれたときにイメージされる像と一致しない。その存在形態は多様であり、その生活過程は流動的である。

2.4 社会的排除とネットカフェ生活者

それではつぎに、ネットカフェ生活者の社会関係を個々の「生活誌」を用いて明らかにする。そこでは個人の生活を支える基本的な三要素である仕事、家族、福祉との関係が希薄になっている*10。それゆえ、ネットカフェ生活者は就業状況に左右される流動的かつ不安定な生活を送らざるを得ないのである。

2.4.1 不安定な仕事

まず、仕事との関係についてみると、ネットカフェ生活者が就く仕事は労働条件の劣悪な不安定就業である。不安定就業は「豊かな」生活機会を奪い不安定な生活に向かわせるおそれがある。たとえば、つぎのような事例がみられる。

日雇派遣に登録する30代前半男性：「(派遣会社の紹介する仕事の日数は少なく)仕事があるときとないときがある」、(就労日数についての質問に対して)「月15日以上」と応えたが、別れ際には「週2〜3日あったらいいところ。あんまり紹介してくれない」。給料は1日6,300〜6,500円。仕事場所までの交通費は自分持ち。お金はいつも手許に2,000〜3,000円しか残らない。調査当日の所持金は70円。野宿はしたくないのでお金が尽きたときは夜コンビニで立ち読みなどして6時30分にファーストフード店が開店するまで時間をつぶす。もし翌日仕事があれば一睡もせず就労する。

低賃金の上、交通費も出ない。それゆえ、就労しても「2,000〜3,000円しか残らない」。さらに就労日数も少なく、野宿することも日常的になっているようである。

日雇派遣で働く20代後半男性：日給は6,000〜7,000円で月約20日勤務している。月の収入は、約13万円である。支出は、家賃が3.8万円、食費が約4万円、ネットカフェの宿泊費が約1万円、携帯電話代が約2万円、その他ゲーム・雑誌代が約1万円で、毎月ぎりぎりの生活をしており、貯蓄もほとんどない。現在、家賃3.8万円のワンルームマンションを借りているが、この12月末位から家には帰らず、ネットカフェでの生活になったようだ。理由は、奈良・京都方面の仕事が増えて家まで帰るのがしんどいということであった。

*8 残りの3人は「求職活動をしてない」に含まれる。

*9 ここでの「常雇」とは「派遣」を含む、期間の定めのない雇用者を指す。直接雇用とは、「派遣」、すなわち間接雇用以外の雇用者を示す。したがって、両者のカテゴリーには重複がある。

*10 エスピン-アンデルセン(2000)、中村(2007)参照。

就労日数は月に20日程度と少ないわけではないが、月収は約13万円と少ない。とはいえ、貧困状態にあるかどうかはともかく、3.8万円の「住居」を借りてなんとかやりくりしていたようである。しかし、就労先が遠くて「住居」で眠ることができなくなっている。雇用主は雇用者の通勤は考慮していないのである。

20代前半女性：アルバイト扱いの期間を経て「正社員」になり、…昨年「マネージャー」になったが給料は安く、社会保障は一切なかったとのこと。4月分の給料が減って以来、5～6月分も未払いのままであり、社長とケンカして辞めた。本来20～30万はあるはずの給料が15万円にされ、翌月分は支払われないまま、その月には友人の家に泊めてもらうことになった。しかしその友人から「母に怒られている（ので出て行ってほしい）」と言われ、それ以来ずっとネットカフェ・まんが喫茶・カラオケ店等で寝泊まりしている。

彼女は「正社員」であるが、「正社員」と言えど、就労が安定しているわけではない。給与は支払われず、収入が途絶えてしまったので「住居」を失っている。

このように、ネットカフェ生活者の仕事は自宅があっても「しんどくて」帰ることができないように労働者の生活をかえりみず、住居生活の維持・継続を不可能にするものである。

2.4.2 家族関係

つぎに、家族関係について確認する。貯蓄もなく不安定就業に就く、あるいは失業中であるとしても、誰かに、あるいは家族に「扶養」されるのであれば、「被扶養者」として定住的な住居生活を送ることができる。ところが、ネットカフェ生活者は基本的に単身である。家族との関係、あるいは家族からの支援はまずはない*11。就労による「自立」という社会規範や家族の貧困は若者が「自立」する基盤を獲得していかなくとも若者を孤立（または自立）へと方向づけている。たとえばつぎのような事例がみられる。

前述の日雇派遣に登録する30代前半の男性：自宅はあるが、今年の春に両親とけんかして飛び出してきた。けんかの原因は「まとも」な仕事に就かず、日払いの仕事をしていること。親は正規の仕事に就けというが、仕事は探している、でもそうした仕事はないとけんかになった。荷造りもせず、着の身着のまま家を飛び出した。そのときの所持金は1万円。…サウナなども使ったことがある。サウナは1～3時間で会員なら500円、非会員なら1,000円のところを使っていた。ネットカフェはなんば周辺の店舗を利用している。もしも正規の職についてお金が貯まったら、家に帰るつもり。お金が貯まらないと帰るつもりはない。就職しただけだとだめ。そうしたら、親も許してくれそう。

背景に家族の貧困があるのかどうかは不明であるが、両親からの「自立しろ」という要求は、日雇派遣で「自立」の基盤を得ていないにもかかわらず、結果的に「ネットカフェ」生活を余儀なくさせることになっている。

失業中の20代前半の男性：母が再婚した昨年、（実家のある）名古屋を出た。再婚相手が自衛隊員だと知り家計は安心だと判断。昨年夏、なじみのある大阪に来た。「名古屋のものからしたら大阪は『もっと』都会だ」と都会へのあこがれを口にする。このあと冬に現在の住居を決めるまでの4ヶ

*11 なお、はっきりしない点もあるが、失業中の野宿状態の男性が飯場にいる父親から得る小遣いで生活していたという事例はある。

月間、ホテルとネットカフェで寝泊まりしていた。野宿の経験はない。親との関係は良好で週に一度は連絡するという。

母親との関係自体は良好であっても、「自立」意識により家計・世帯ともに分離し単身生活をしている。

日雇派遣の仕事は週3日程度、夏場はテキ屋をする30代前半の男性：今までは実家の前まで行き、母親が紙袋にお金を入れて窓から投げかけてくれることもあった。しかしそれが姉の知るところとなり、実家の前にいたところ警察まで呼ばれることになった。警官は実家の中に入って「母親が迷惑だからもう来ないでくれと言った」と伝えてくれた。

彼の家族は彼が貧困状態にあることを知っていながら、彼の存在をむしろ迷惑としている。警察もまた家族との縁切りに加担するのみである。

このように、ネットカフェ生活者は経済的に依存できる家族、あるいは親類・縁者もおらず孤立、あるいは自立している。

2.4.3 福祉との関係

最後に、福祉との関係についてみると、その関係もまた希薄である。現代社会では貧困に陥れば、福祉を受けることができるはずである。ネットカフェ生活者が自立を求めて福祉受給を拒否する、期待しない、あるいは行政が福祉の申請を拒否するために、セーフティネットの網の目にかからないのである。たとえば、つぎのような事例がみられる。

自立支援センター入所中の40代後半の男性：(入所前は)金が尽きてきたので、昼は大阪市内の図書館や近くの図書館で過ごし、夜は公園のベンチで寝た。テント居住者との交流や支援者との接触はなし。約2ヶ月そういう生活をしてしたが、公園管理者が出て行ってくれとい、「行くところがない」といったら、巡回相談員を連れてきたので、自立支援センターに今年の春から入所した。それまで自立支援センター等知らず、福祉事務所に言っても門前払いだろうと思っていたので、行かなかった。

この人は「福祉事務所に言っても門前払いだろう」と思いこんでいた。同じ様に福祉を受けることはできないと考える、ネットカフェ生活者は多いかもしれない。

前述の日雇派遣とテキ屋に就く30代前半の男性：体調はきっと悪いと思う。埼玉県国民健康保険はある。有効期限はこの秋までだけれども。最近の食事は1日1回そばか、うどんを食べるだけ。まともな食事はとっていない。昼は職場で食べるけど。ひどいときなどネットカフェで1日5リットルジュース飲むから糖尿病になるのではないかと不安ではある。体力も低下したと思う。相談できるところはない。福祉のところにはいったことはない。福祉に頼るのは甘えかなと思う。警察の相談所に行ったら、生活保護をうけて仕事をさがせる方法があるときいたが。住民票のことで区役所の住民票の係に相談に行ったことはあるけど、今日会えてよかった。住民票をとりよせる手続きをしてくれるんだ。住民票を実家において住民票の写しをとったら仕事できるから。

生活保護を受給できると知っていても、それは「甘え」であると考えて、あくまでも自らの力で「自立」することを希望している。

求職中の 30 代後半の女性：この春にどうしようもなくなり大阪市役所の保護課に相談にいったところ、住民票はどこにあるかと聞かれ、兵庫県にあると言ったところ、大阪市では何もできないと言われた。ちょうどそのとき...釜ヶ崎の支援団体の人が市役所に押しかけていた。その団体にも今困っているという話をしたが何もしてくれなかった。役所に行っても、誰に相談しても何もしてくれない、自分で何とかしないといけないと思った。

仕事がなく、どうにもならなくなり行政にも、支援団体にも相談しているが、その相談が拒否される事例である。

このように、ネットカフェ生活者は福祉制度に包摂されない、もしくは福祉に頼らない自立した単身生活を送っている。八木（1988）はかつて寄せ場の日雇労働者について「市民社会のあらゆる生活保障体系から切り離されている寄せ場労働者が、労働自立性においては一番高い存在であることに気づく。その意味で寄せ場労働者は、本質的には「自立労働者」と呼んでよい」（p.99）と述べたが、ネットカフェ生活者も寄せ場の日雇労働者と同じく「自立労働者」と呼ぶことのできるような存在であることがわかる。ネットカフェ生活者にとってみれば、日雇派遣、パート・アルバイト、テキ屋やダフ屋等の不安定就業からの収入に依存する以外に途はないのである。

2.5 不安定な就業

ネットカフェ生活者は社会的に排除され、その生活は不安定就業のみに支えられている。アダム・スミス（2000）が「地主、農業者、親方製造業者、あるいは商人は、職人を一人も雇用しなくても、既得の貯えで一年や二年は生活できる。雇用されずに一週間生きていける職人は多くないし、ひと月生きていける職人は数少なく、一年間生きていける職人はめったにいない」（p.121）と言ったが、ネットカフェ生活者は一週間仕事がなければ生きていけないような、無産の労働者である。それゆえ、就業と失業を繰り返し、流動と停滞を繰り返す生活を余儀なくされている。

そこでつぎに、ネットカフェ生活者はその不安定な就業状態に規定され、流動的かつ不安定な生活を送っていることを明らかにする。まず、就業条件についてみていくと、ネットカフェ生活者の賃金・収入は低位にあるだけでなく、不安定であることが明らかにされる。確かに「生活誌」をみると、そのほとんどは貧困である。しかし、ネットカフェ生活者が就く（あるいは過去就いた多くの）仕事から得られる賃金・収入は常に低賃金・低収入であるとは限らない。たとえば、日雇建築労働に就く 20 代後半の男性は「ネットカフェ」で生活する前は夜勤等「きつい」仕事をして 40～50 万円の月収を得たこともある。50 代後半の男性は建築業者の営業に従事し月 70～80 万円の収入を得たことがある。これは、賃金が獲得した契約に応じて発生する仕組みになっているからである。また、こうした収入の不安定性は自分で買ったチケットを売りさばくダフ屋のそれと同じである。ダフ屋をする 30 代前半の男性は一月に 40～50 万円稼ぐこともあるが、一月に 1～2 万円のときもあるという。「変動めっちゃ激しいよ」。日雇（派遣）やパート・アルバイトの場合も同様にダブルワーク、トリプルワークする等して、長時間就労すればある程度の収入を獲得できる見込みはある、一方で就労しなければ収入は一切得ることはできない。

これらの仕事では、賃金は就労時間・就労日数、あるいは業績に応じて支払われるだけである。そのため、市場の動向、病気・怪我、あるいは偶発的な出来事によって就労困難に陥ると収入は一定水準を下回る。このように、ネットカフェ生活者が就く（あるいは過去就いた多くの）仕事から得られる収入は常に低位にあるというよりも不安定である。上記の 20 代後半の男性は昨年頃からぜん息の影響で就労日数は

週2、3日になり収入は10万円強に落ち込んだ結果、住居を維持できなくなった。50代後半の男性は契約がとれなくなり退職し、ネットカフェ生活が始まった。

さらに、収入の不安定性は企業の提供する生活保障制度との関係が希薄であることを示唆する。「豊かな」「安定」した生活を可能とする終身雇用では、たとえば退職金や厚生年金により定年退職後の生活も保障されているように、市場の動向、病気・怪我、あるいは偶発的な出来事によって収入が一定水準未満に落ち込まないよう基本給、諸手当、社会保険等が提供されている*12。ネットカフェ生活者が就く（あるいは過去就いた多くの）仕事は異なる。その仕事は日雇や事実上基本給なしの出来高払いの雇用、時給制による低賃金・低収入の雇用、あるいは都市雑業であり、就業時間・就業日数、あるいは業績によっては必要最低限の収入さえ得られない可能性がある。

こうした就業条件は、就業時間・就業日数を延長した場合には、高収入を得る可能性を増やすが、それと同時に、病気・怪我、あるいは偶発的な出来事により就業困難に陥り収入を欠く可能性も増やすものである*13。アダム・スミスが

身心どちらにせよ、数日間ひきつづいてのはげしい労働は、たいていの人のばあい、そのあとに休養にたいする強い願望が自然に生じ、これは強制かあるいは何か強い必要によって抑制されないかぎり、ほとんど抗しがたいものである。…もしそれがかなえられなければ、結果はしばしば危険なものであり、ときには致命的なものであって、ほとんどつねに、おそかれはやかれ、その職業に特有の病気をもたらすのである（p.149）

と述べたように、過剰な労働は必然的に労働力の摩滅、あるいはしばしば病気をともないながら長期間の休養を必要とする。少なくとも、「厳しい」就業条件は長期間に渡って高収入を可能とせず、むしろ断続的に就業と失業を繰り返させるのである。

ネットカフェ生活者は仕事先の確保と体調の管理（あるいは休養）との間でジレンマに陥ることはまれではないだろう。ある派遣業者は交通費は自己負担、工作中的の火傷の治療費も自己負担とした上で自分の健康は自分の責任と言わんばかりに「自己管理が大事だ」と徹底的に教育しているという。また、教育されてなくとも実質的には同じである。労働者は自らの労働力を「自己管理」しなければならない。しかし、「自己管理」することは不可能に近い。というのも、雇用者は就労先を確保するためには資本の「言いなり」にならなければならないし、高収入を得るためには無理をしなければならないからである。それゆえ、雇用者が体調を崩し、就労先を確保できなくなることはまれでない。そもそも、不安定な就業とネットカフェ生活で疲弊する人々にとって、体調を維持し就労先を確保し続けることは容易でない。こうした労使の関係のあり様は「雇用関係」というよりも、むしろ単なる仕事の「請負関係」に近い。

ネットカフェ生活者の就く（あるいは過去就いた多くの）仕事は、労働者の生活の維持・形成、そして労働力の再生産を完全に無視・放置した、徹頭徹尾、自己責任の貫徹した就業条件である。それゆえ、多くのネットカフェ生活者は景気の動向や自らの「都合」により安定的に就業を続けることができず、仕方なく就業と失業を繰り返すことになるのである。

*12 たとえば、野村（2007）参照。

*13 マルクス（2005）参照。

2.6 不安定な生活と窮乏

つぎに、就業の不安定さが流動と停滞を繰り返す生活をもたらすことを明らかにする。こうした就業条件の下で生活するネットカフェ生活者は、「ネットカフェ」をひとつの経由地として就業のために各地を転々とするが、ときには就業困難に陥り「ネットカフェ」でつぎの就業の機会を待ち、就業の機会がないままに所持金が尽き寝泊まりする場所を欠く（野宿する）こともまれではない。たとえば、電話帳の配布・回収をする 20 代後半の男性は毎月仕事場所が変わり、西日本全域を転々としていた。「ネットカフェ」を経由しながら、雇用先が提供するウィークリーマンションを移動していた。収入は（3 ヶ月の内の 1 ヶ月は全く仕事がないが）月 50 万円ほど。仕事はひと月に 20 日間。その間は会社が借りるウィークリーマンションで暮らす、残りの 1 週間は「ネットカフェ」で生活する。前述の日雇派遣に登録する 30 代前半の男性の調査当日の所持金は 70 円。お金があるときはサウナやインターネットカフェを利用するが、お金が尽きたときは、野宿したくないので夜コンビニで立ち読み等して 6 時 30 分にファーストフード店が開店するまで時間をつぶす。もし翌日仕事があれば一睡もせず就労する。ある自立支援センター入所者（30 代後半・男性）は、「住み込み」先を転々としていたが、仕事が切れてネットカフェ生活に陥った。お金を節約するために食費は 1 日 500 円に抑え、日用品は百円均一の店で調達して凌いでいたが、お金も尽きそれもできなくなり公園で野宿するようになった。

このように、ネットカフェ生活者の生活は流動的であるが、その過程において頻繁に停滞する不安定性、あるいは脆弱性も有している。流動と停滞を繰り返すネットカフェ生活者にとって「ネットカフェ」は偶然の、あるいはひとつの「中継地点」、「休息地」、あるいは野宿からの「避難場所」である。

ところで、社会には「ネットカフェ」と同一の機能・役割を果たすことができる施設はほかにもある。たとえば、カプセルホテル、サウナ、友人・知人宅、そして仕事先の社宅・寮等である。「生活誌」をみると、ネットカフェ生活者と同じ社会階層に位置するとみなすことができるものの「ネットカフェ」を経由せずに流動し、ときには仕事がなくそれらの施設や路上・公園等に停滞する事例もある。たとえば、30 歳代後半の自立支援センター入所者（男性）は「住み込み」の派遣労働では貯蓄できる状態ではなく、「ネットカフェ」を経由せず「住み込み」の派遣労働と野宿生活を繰り返してきたという。

沖縄ではじめて派遣の仕事をした。…次は広島県。そこまでの移動費用は給与から引かれた。そこでは個室完備といわれたが行ってみると 3LDK に 3 人が入居。扉を閉めれば個室になると言われた。給与は寮費やふとん代などを引かれ手元には 7 万 8 千円ぐらいしか残らなかった。職場で全く同じ仕事をしている他の人（正社員）にどれくらい給与をもらっているかきくと、全く違った。その人はだいたい時給 1,100 円であったが自分は時給 700 円ぐらいであった。…派遣では長く続けても 1 年ぐらいだった。また、いくつもの派遣会社に登録した。

派遣では全国を転々としていた…覚えているのは沖縄・広島・福島・福井・名古屋ぐらいである。派遣で仕事をしているときは社会保険・雇用保険・健康保険はなし。…ほとんど仕事の内容が登録時に聞いたときとちがったり、寮費（6 万円）やふとん代などが差し引かれ手元にお金が残らず生活するにもぎりぎりだった。派遣会社は足元をみて、ピンハネばかりだ。提供される住居のほとんどが個室完備と謳っていても行ってみれば 3LDK に 3 人が個室を利用する形態であった。…働きだしても手元にお金がないので前借りに前借りをし、マイナスになってしまってバックレる。そして、食事を我慢しながらベンチの上に寝たりして野宿をするが、それでは生きていけないので

またコンビニに行き、フリーペーパーをみて求人を探す。その繰り返しであった。

また、派遣の登録に行くときクオカード等がもらえる。その日食べていくのが大変だったので登録をとりあえずし、クオカードをもらって1日の食費をまかなっていた。クオカードをもらうためだけに登録を繰り返したこともあった。なお、Aさんは山谷の炊き出しに行ったことがあると言っていた。そのときも派遣先からバックレて、その近辺で野宿していた。山谷ではNPOなどには行かなかったし、あることも知らなかった。また、山谷の寄せ場から仕事に行ったことはなくここからもフリーペーパーで見つけた「派遣」の仕事にいった（「自立支援センター調査」より）。

このほかにも、ふたつの調査に渡って派遣先の「住み込み」先等を流動していた人々の事例は散見される。そして、寄せ場の日雇労働者もまた寄せ場を経由しつつ流動と停滞を繰り返し、ときには野宿も余儀なくされる存在であることはすでに明らかである^{*14}。

したがって、「ネットカフェ」に限らず、就業のために各地を流動し、ときには「ネットカフェ」や路上・公園等に停滞し、流動と停滞を繰り返す、不安定な生活を送る労働者は一定の層をなし存在していると考えられる^{*15*16}。そして、加齢や病気・怪我、さらには劣悪な生活条件により労働力の摩滅と市場における労働力の価値低下が不可避であることを考慮すれば、流動と停滞の繰り返しは停滞が長期化、あるいは野宿状態が固定化していく過程であると捉えられる。ここでは流動・停滞を繰り返し、そして停滞の長期化、あるいは野宿状態の固定化へと向かっていく過程にある労働者の生活のことを「不安定生活」と呼ぶことにする。このように、「不安定生活者」は流動的かつ不安定な生活を余儀なくされているだけでなく、その先には路上での死や長期間の野宿生活が待ち受けるような「劣悪」な生活条件の下、生きている^{*17}。

2.7 対策の社会的意味について

最後に、「不安定生活者」の貧困や不安定性が社会的に注目されていないことについて考察し、「ホームレス対策」や「ネットカフェ難民対策」の社会的機能について問いたい。上記のように「不安定生活者」の生活条件は「劣悪」である。ところが、「不安定生活」における貧困は社会的に解決すべきものとして捉えられている（あるいは知覚されている）とは限らない。たとえば、元総務相の竹中平蔵はつぎのように述べている。「貧困が一定程度広がったら政策で対応しなくてははいけません、社会的に解決しないといけない大問題としての貧困はこの国にはない」（朝日新聞、2006年6月16日）。さらに、青木（2007）によれば、「ホームレス」を貧困だと考える「福祉関係者」（東京・北海道の民生委員等）と「M町住民」（北海道）はそれぞれ35.4%と29.0%である^{*18}。そこで、「不安定生活者」の貧困や不安定性は問題であると捉えられない傾向にある要因を考察し、「ホームレス対策」や「ネットカフェ難民対策」が「不安定生活者」の存在の社会的発見、あるいは社会問題化に対してどのような機能を果たしているのか考察する。

「不安定生活」における貧困、あるいは収入の不安定性は社会的に解決すべきこととみなされない、そ

^{*14} 江口等（1979）、島（1999）参照。

^{*15} ここにかつて江口等（1979）が提示したような産業や地域に共通する最下の「ベルト的階層」を発見することができるのである。ただし、比較的若者が多いネットカフェ生活者と中高齢者が多い寄せ場の日雇労働者は社会階層的には分断されている可能性がある。たえそうであったとしても、両階層は水平的に近接するとみなせるだろう。

^{*16} それゆえ、厚生労働省が「インターネットカフェやマンガ喫茶をオールナイトで定期的によく利用する」とした人数を基に「住居喪失者」数を推計したのは過小評価と言わざるを得ない。湯浅（2007b）参照。

^{*17} しかも、野宿になっても、公園にテントを張ることも難しい。ただし、「生活誌」をみると、「ホームレスにだけはなりたくない（野宿生活はしたくない）」という人は少なくない。

^{*18} 「大学生」（東京・北海道）は65.5%、「専門学校生」（東京・北海道）は63.3%である（青木、2007：198）。

の要因は、第一に、不安定就業者は職業社会や労働社会の構成員でないとみなされているからである。使い捨ての労働力として使用されており、基本給や諸手当もないだけでなく、その存在は抑圧されている。たとえば、小杉はフリーター研究の意義についてつぎのように述べた。「新規学卒就職という形で職業社会の中に若者たちを取り込んでいた仕組みは明らかに変質し、多くの若者たちがルール外を歩き、さまよいはじめている。彼らを職業社会の中に吸収する回路を再構成しない限り...新規学卒就職というルールを踏み外した代償は、彼らの今後に大きく影を落としている。ただし、「代償」は個人としての若者以上に、社会の側が支払うことになる」(小杉、2003:3)。「フリーター」は職業社会や労働社会の構成員と認められてない。さらに、「フリーター」の問題について、個人の就業・生活、あるいはキャリアに対する負担よりも、社会の側の負担が重視される。ここでもまた、「フリーター」個人の生活は軽視されている。また、80年代には女性のパートについて平成元年版『労働経済の分析』(1989)はつぎのように述べていた。

労働省「就業形態の多様化に関する実態調査」(62年)によると、女子パートタイム労働者の92.9%は自発的にパートタイム労働者という就業形態を選んでおり、非自発的な選択であつた者は7.1%である。...すなわち、パートタイム労働者の大多数は自発的に選択したものと見える。こうしたことを反映して、今後ともパートタイム労働者を続けたいとする者が多い。

パート労働は自主的に選択されており、女性の結婚前の家事手伝いとしての、あるいは結婚後の主婦としてのひとつの働き方とみなされてきた。ただし、こうした「自主的」という言葉はその待遇の劣悪さをごまかすことに一役買ってきたことも確かである。このように、パートやアルバイト、派遣等の「非正規雇用者」は雇用条件が劣悪であるだけでなく、職業社会や労働社会では「二級市民」のように扱われているのである。

第二に、「不安定生活者」の窮乏や抑圧、苦痛は「自己責任」観や定住生活を前提とする社会制度によって排除される傾向にある。ひとつに、「不安定生活者」が自ら今の貧困状態から脱したい、「正規雇用」されたいと訴えても、住民票がないこと等を理由にその訴えは社会から無視されることがある。

入所前「住み込み」の派遣と野宿を繰り返していた、前述の自立支援センター入所者：派遣をはじめからでも正規で働きたくてハローワークに何度か行ったが「住所がない、住民票がない、公園で生活をしている」と言うと職員からは「住所が近くにないと難しいですね」と拒否される。「派遣でこんな生活を続けていくのは無理だし、キツイことはわかっているがこんな状態の自分でもすぐ働けるのは派遣しかなかった。やるしかなかった...」。...Aさんは行政にも相談に何度か行っている。しかし住民票がその地域になかったり、対応できる場所がその地域になかったりと話ができなかった。...弁護士に話をしたことがあるが選んで仕事をしているのだから仕方がないというようなことを言われた。...(Aさんは)「自分らはモノなんです。モノ」と何度も繰り返していた。「モノ以下。自分たちはゴミである。派遣先の営業はゴミを拾いにきて、そして工場等派遣先に落としていく。自分たちはゴミだ」とも言っていた(「自立支援センター調査」より)。

もうひとつに、自分自身の意識・考えが自らの貧困状態を社会の問題、あるいは福祉を受けるべき状態とみなさないことがある。たとえば、30歳代後半の自立支援センター入所者(男性)は、野宿者が存在することを知っていたからこそ、自身が野宿に陥ったときの境遇をそのまま受け容れ餓死するかもしれない。

宝石の営業会社が倒産した時に20万くらい持っていた。その後、(仕事先が倒産して)仕事を探す

が見つからず、アパートを引き払ってビジネスホテル（5千円くらい）に宿泊して仕事探しを行う。5軒くらい面接に行くが決まらなかった。求職活動は書店で求人雑誌を買って職安には行かなかった。日に日にお金だけが無くなっていった。ネットカフェのような所では料金が時間制で荷物を部屋に置いておくことができない。そこで荷物を持って移動することになるため、面接などに荷物を持っていくようなことになる。このような光景は常識的に「おかし」な光景となってしまう。指で四角を作って「画としておかしいでしょ。大きな荷物もって面接行ったら」。そのため、ビジネスホテルにお金を最初に入れ、一室借りっぱなしにして、荷物を置いて帰って休んだり、求人雑誌を読んだりしていた。求職先は資本金をみて安定した経営を続けてるかどうかが判断するので、簡単には決められないので決めるのに時間がかかるとも。...ホテルは3軒くらい変わった。2週間もしないうちにお金はなくなり野宿をする（後で、入院してる人から20万あったら西成でどれだけ生活できるかと笑われたが、西成の事や行政などのサービスについて大阪の事は全く知らなかった）。...2日ほどして持っていたバッグを盗まれた。携帯電話、保険証、面接の履歴書、その他証明書などが全てなくなった。「この時、人生終わったな」と思った。警察に届けには行った。連絡先のこともあるので野宿生活をしている状況も話したが、警察の管轄ではないので福祉事務所のような所があるぐらいの話で具体的な所についての説明がなかった。...「ホームレスがいることは大阪に来て知っていたし、みんなこんなもんなかと思て」。その後も1週間ほど何も食わず、水道の水だけで野宿をしていた。巡回の警察官は毎日同じ人がいると思っていたが、野宿してるとは気づかなかったようだった。「ふつうの格好（服装）してるし...」。...腹を下して体調が悪くなったため、派出所に行く。顔も真っ青だったため警察官がすぐに、救急車を呼んでくれ、医療業務センターを通して医療扶助を受け入院することとなる。...胃カメラを飲んで胃のなかを見ると胃がズタズタの状態になっており、2週間くらい入院する。1週間はお粥を食べて、その後病院食になった。「最初は（病院食も）おいしかったけどな〜」。その後も通院を行うということで自立支援センターに入ることとなった（「自立支援センター調査」より）。

このように、「不安定生活者」は労働社会や職業社会の一員と認められていない傾向にあるためその就業条件が改善される見込みは少ない。そして、その存在形態は、不安定就業以外の常雇の仕事に就き難く、またたとえ貧困状態にあったとしても「一般施策」により包摂され難い。そして、そうした傾向は「なんとなく」にしる理解される。また、住居生活をしていない「不安定生活者」は官庁統計等の統計的データから排除される傾向にある。先述の橘木の引用は、官庁統計データを基に日本社会における貧困を測定した著書の「あとがき」によるものである。このようにしてみると、わたしたちの社会における法・制度、あるいは社会規範・社会秩序は定住的な住居生活を暗黙の内に前提として構成されていることが垣間見えてくる。しかし、定住生活を安定的に送るためには景気の変動や病気・怪我、偶発的な出来事が起こっても、就業のために移動を余儀なくされないよう、さまざまな社会制度に包摂され、リスクを回避できなければならない。にもかかわらず、多くの社会制度から排除され、景気の変動や病気・怪我、偶発的な出来事に全く抵抗できない人々がひとつの社会階層として形成されている。問題はこれらの人々が「自主的」に今の生活を選択したかどうかではない。これらの人々には定住生活する自由はほぼなく、その上、その多くは貧困なままに不安定な生活を送っているということである。

そうしたなか、「ホームレス問題」が社会問題化されることは、「不安定生活者」の存在が社会的に発見される契機になるはずである。しかし、実際にはそのようにはなっていない。むしろ、行政の対応は「不安定生活者」の存在を隠蔽し、その問題を解決せずに放置し続けようとしているかのようである。入所前

「住み込み」の派遣と野宿を繰り返していた、前述の自立支援センター入所者は福井県のある市の役所に相談に行くと「ここでは対応ができないので京都か大阪、名古屋には対応できるところがあるからどこがいいか選べ」と言われ、役所からお金を借り大阪へ向かった。そして、大阪市のある区役所に相談し自立支援センターに入所した^{*19}。これは法・制度、あるいは社会の仕組みや構造が、ホームレス、あるいは「不安定生活者」を基本的に「一般施策」から排除しており、「ホームレス対策」という「特別」な回路を通じてしか包摂しないためである^{*20}。

ここで予定されている「ネットカフェ難民対策」を振り返ってみると、「ネットカフェ難民対策」は、就労の機会を拡大させ、「ネットカフェ」で生活する人数を減少させることに「貢献」するかもしれない。しかし、その対策はネットカフェ生活者、あるいは「不安定生活者」の貧困や生活の不安定性に対処するものでもなく、ネットカフェ生活者、あるいは「不安定生活者」を社会的に析出する構造を変容させるものでもない。このようにみれば、「ホームレス問題」の当事者を野宿者に限定し、野宿者の問題を「ネットカフェ難民」の問題と分断させることは「不安定生活者」の存在を問わせないことにつながっており、また、野宿者やネットカフェ生活者の人数を減らすことに重点をおく対策は既存の社会規範・社会秩序あるいは社会体制を維持・継続しながらの「問題解決」を志向しているのである。

ただし、貧困に喘ぐ「ホームレス」や「ネットカフェ難民」の存在が喧伝されるようになっており、「不安定生活者」の存在が今後社会問題化されないと限らないことも忘れてはならない。

2.8 まとめにかえて

このように、「ホームレス対策」が実施されるようになっており、野宿者が「就労自立」する可能性を拡げているが、もう一方で「不安定生活者」の先の見えない予測不能な生活は残されたままである。ところが、「不安定生活者」の実態は統計的に把握することが困難なこともあってこれまで明らかにされてこなかった。他方で、不安定就業はつぎのような主張によって拡大されてきた。派遣労働への規制緩和を訴え続けてきた八代尚弘はつぎのように述べている。

女性の高学歴化等による質の向上、働きやすい専門的サービス職種の拡大等を背景に、女性の職場進出が高まり、その結果、結婚後も就労を続ける共働き世帯も増加した。また高年齢で働く男性労働者も、時間に縛られない弾力的な働き方を求めている。こうしたなかで、雇用保障よりも職種や労働時間、働き場所にこだわる新しいタイプの労働者が増加してくるとともに、働き方の多様化が進んできた。これに対応した働き方は、有期雇用や派遣労働であるが、いずれも終身雇用と対比される「不安定雇用」と見なされてきた。また、そうした「望ましくない」働き方の雇用機会の拡大は、結果的に「良い働き方」の雇用機会に代替することから、労働者に「痛み」を強いるという批判がある。しかし、これは言い換えれば「良い雇用機会でなければならない方がまし」ということに等しく、その就業機会を求めている労働者に大きな犠牲を強いるものといえる（八代、2003）。

問題は働き方自体にあるのではない。「不安定雇用者」に対する社会保障の脆弱さが問題なのである。

^{*19} もちろん、各自治体によって対応のあり方は異なるだろうが、野宿者が福祉を受けることは比較的容易でないことは確かである。

^{*20} なお、「ホームレス対策」が実施されるまでは、野宿者や「住所不定者」に対しては施設収容主義をとっていた（岩田、1995）。

問題は放置できないほど深刻かもしれない。まず、「非正規雇用」や派遣労働の拡大、さらに若年の単身世帯の増加*21という全国的な傾向は、家族を形成せず、不安定就業をしながら生活する人が増えていることを示唆していると思われる。つぎに、厚生労働省が「住居喪失不安定就労者調査」（ネットカフェ生活者を対象にした調査）と同時期に実施した、「日雇い派遣労働者の実態に関する調査」の結果によると、主婦・学生以外の「日雇派遣労働者」は少なくない。この調査は東京、大阪労働局管内において日雇派遣等の短期派遣をおこなっている事業主 10 社に対する調査と 10 社に登録する「短期派遣労働者」698 人への二つの調査を内包している。事業主 10 社に対する調査では 10 社の「日雇派遣労働登録者数」は平均 50 万人（1 日当たりに派遣される労働者数は約 5 万人）である。10 社に登録する「短期派遣労働者」（内「日雇派遣労働者」は 84.0 %）への調査では、「ネットカフェ等をオールナイトで利用する」ことがあるのは 37.9 %。内、「住居がない又は住居に帰れない事情があるために、ネットカフェ等に寝泊まりする者」は 1.7 %である。しかし、「短期派遣労働者」の平均就労日数 14.0 日、月収 13.3 万円である上、「現在の状況」が「短期派遣のみ」53.2 %、「短期派遣以外にも、正社員・自営業など、主たる職業がある」25.5 %と「主に主婦」（2.9 %）、「主に学生」（13.2 %）以外がほとんどを占める。雇用・家計の詳細は不明だが、これらの数値からは「ネットカフェ等」では寝泊まりしてないが、「住み込み」先、カプセルホテル、サウナ、路上、公園、さらには友人・知人宅を流動・停滞する人々もある一定数いると想像される。このようにみると、現代社会においては社会的に排除され不安定な生活を送る人々は少なくない上に、その規模はますます増大しつつあるかもしれないのである。なんにせよ、わたしたちは、誰もが「豊かな」「安定」した生活を送れるよう、新たな社会保障制度の構築に向けて議論を開始すべきである。

参考文献

- アダム・スミス 水川洋監訳、杉山忠平訳 2000 『国富論』（一）岩波文庫
- 青木紀 2007 「社会意識：現代日本の貧困観」青木紀・杉村宏編『現代の貧困と不平等』明石書店
- 江口英一・西岡幸泰・加藤佑治編 1979 『山谷：失業の現代的意味』未来社
- エスピノ-アンデルセン 渡辺雅男・渡辺景子訳 2000 『ポスト工業経済の社会的基礎』桜井書房
- 藤田五郎 2007.8 「山谷から」ピープルズプラン研究所『ピープルズプラン』39 号、現代企画室
- マルクス、K 山中隆次訳 2005 『マルクス パリ手稿』御茶の水書房
- 中村健吾 2007 「社会理論からみた「排除」」福原宏幸編『社会的排除／包摂と社会政策』法律文化社
- 野村正實 2007 『日本の雇用慣行』ミネルヴァ書房
- 盛山和夫 2000 「階層システムの公共哲学に向けて」高坂健次編『日本の階層システム 6 階層社会から新しい市民社会へ』東京大学出版会
- 島和博 1999 『現代日本の野宿生活者』学文社
- 園部雅久 1996 「ホームレス調査をめぐる方法とデータ」『日本都市社会学年報』14 号
- 橋本俊詔・浦川邦夫 2006 『日本の貧困研究』東京大学出版会
- 八木正 1988 「国内出稼ぎ労働者と寄せ場労働者」日本寄せ場学会『寄せ場』第 1 号、現代書館
- 八代尚弘 2003 「重要性高まる派遣の社会的役割」日本人材派遣協会『人材派遣さらなる飛躍 人材派遣白書 2003 年版』東洋経済新報社
- 湯浅誠 2007a 『貧困襲来』山吹出版
- 湯浅誠 2007b 「「ネットカフェ難民」調査、その意義と限界」『賃金と社会保障』No.1453（2007 年 11 月上旬号）賃社編集室

*21 平成 17 年度版『国民生活白書』（p.4）より。

第3章

中卒者、高校中退者の就業実態

大阪市立大学創造都市研究科 研究生
後藤 卓己

3.1 はじめに

聞き取りを行った不安定就労・不安定住居者のほとんどの学歴は、高等学校卒業以下の学歴であった。現在では、大学卒業と言うだけの学歴では就職に不安を感じ、大卒の学歴とともに何らかの資格をも取得しようと考えている学生も存在する。そのような現状の中で、就業条件の最も厳しいと思われる高校卒業未満の学歴で就業していかざるをえない人たちを中心に、その問題点について今回の聞き取り調査から考えてみたい。高校卒業未満で就業していった人たちの割合は以下のものであった。

最終学歴がはっきりしない人もいたが、全聞き取り調査者 100 名中の 22 名が中学校卒業者であった。年代別に見ると、20 歳代 5 名、30 歳代 13 名、40 歳代 2 名、50 歳代 2 名であった。高等学校の中途退学者は、9 名であった。年代別に見ると、10 歳代 1 名、20 歳代 3 名、30 歳代 3 名、40 歳代 1 名、50 歳代 1 名であった。ともに 20 歳代から 30 歳代に集中しているが、どの年齢層にも高校卒業未満の学歴の人が存在していることがわかる。全員が男性であった。大阪府出身者は 30 % くらいで、他府県出身者も多く存在していた。高等学校卒業未満で働かざるをえない人たちの存在は、全国的、全世代的に見られる状況と考えてよいのではないだろうか。全員、何度も職を転々としているが、最初にどのような経緯で就業していったのかという部分に焦点を当てて見ていくことにする。

3.2 中学校卒業者の実態

3.2.1 就業先について

中学校を卒業し、就業している人たちがどのような職に就いていったのか、その実態を年代別に見てみたい。

20 歳代の人たちの場合 「鳶の仕事に就いた」、「トヨタ系列の会社に就職した」、「親の決めた新聞配達を行った」、「両親から就職を勧められ、居酒屋に正社員として勤めた」、「求人誌を見て、吉野家のアルバイトを始めた」。

30 歳代の人たちの場合 「アルバイトが多く、就いた仕事の多くは建設関係であった」、「親戚の所で大工、鳶の仕事を行った」、「家業の解体屋を手伝った」、「学校の紹介でいくつかの職業に就くが、正社員

ではなかった」、「兄の知り合いの居酒屋に就職し、板前として住み込みで働いた」、「タレントとしてレポーターなどの仕事を行った」、「学校の紹介でゴルフ場に正社員として就職した」、「水道管を作る工場に勤めた」、「料理の仕事に就いた」、「親戚が自営している自動車整備工場に働いた」、「学校の紹介で松下電器下請けの会社に正社員として就職した」、「担任の紹介で、従業員 25 人くらいの大阪の紡績会社に就職した」、「学校の紹介で自動車部品の製造会社に就職した」。

40 歳代の人たちの場合 「父親とともに神奈川で出稼ぎの仕事を行った」、「自分で見つけた紙加工会社に就職した」。

50 歳代の人たちの場合 「従業員 20 人くらいの規模の板金屋に正社員として勤めた」、「縫製工場へ就職した」。

50 歳代の人の場合は、一応 2 名とも正社員として就職できているようであるが、正社員として就業できていないケースが全体の半数以上にのぼるとみられる。正社員として就業していない人たちは、アルバイトや親の縁故による就業というケースが多いことが伺える。正社員として採用されている者も、中小の会社、個人経営と思われる職場がほとんどである。

給料の面については、「中卒なので残業をさせてもらえず、月 7 万円ぐらいの収入だった」、「親戚が自営をしている工場だったので、給与は特に決まっておらず、必要な時にもらっていた」と語る人がいたが、他の人たちの中にも厳しい状況があったのではないかと推測される。

地方都市である長野県と大都市である大阪市の現役中学校の中堅教師に中学校を卒業し、就業していった生徒たちのことについて話を聞いてみた。長野県の教師の話によると、ほとんどが高校へ進学し、中学校卒業時に就業していく生徒は、その教師の担任経験の中ではほんの少数名しかいなかったとのことであった。就業希望者については、ハローワークを通すようにしているが、ハローワークで中学校卒業の生徒を受け入れるような就職先はかなり少ないとのことであった。長野県の場合は、工場が多いとは言えない上に、交通のアクセスが悪いため、自動車免許が取得できない中学校卒業時の生徒にとっての就職先はかなり限定されてくるようである。親の縁故で就職先を見つけてきた場合であっても、就職後の労働条件などの事も考えて、できるだけハローワークを通すようにしているとのことであった。技術専門学校などに進学を考えている生徒にとっては、中学校卒業の学歴で受け入れ可能なコースが減少してきているという厳しい実態があるようである。大阪市の教師の話によると、若干名は中学校卒業時に就業していく生徒がいるとのことであった。その場合、ハローワークを通して就業していく場合と親の縁故でそのまま就業していく場合があるようである。

中学校教師の話から、正社員として就業していかないケースがみられるが、ハローワークを通した就業であっても、実態は親の縁故による就業と思われるケースが存在していることが伺える。

3.2.2 家庭環境について

中学校を卒業し、就業していった人たちの家庭環境について見てみたい。

- 「小学校の時に両親が離婚し、夜逃げをすることとなった。父親に付いて行くが、夜逃げをしてからは学校に通っていない」。
- 「就職した時期に両親が離婚し、二人とも自分を残して行ってしまった」。
- 「学力的には県内の有名私立高校への進学も可能と言われたが、ちょうど母親が離婚し、母のパート勤めだけでは経済的に厳しいことを知り、働き始めた」。

- 「中学校の頃、児童相談所が介入して、児童福祉施設などに半年ほど入所していたことがあった」。
- 「父親が仕事もせず酒ばかり飲んでいたので、小学校5年生の時に母親が家から出て行った。父親の暴力等のため家出をした。警察に補導され児童養護施設に入った。中学校の卒業式後、再婚した実の母親が迎えに来た。親の決めた新聞配達の仕事をするようになったが、家にお金を入れさせられ、親はそのお金で遊んでいた」。
- 「両親が離婚し、生活保護を受け、母親の実家で生活していた。施設に入所していた時期もあった」。
- 「中学に入ってから家の借金のため夜逃げ同然に引っ越した。両親共にギャンブルとお酒が好きだった。中学卒業後、親の勧めで就職をした。給料から5万円は家庭に入れていた」。
- 「父は酒の量が多く、酒乱だった。母親はそれが理由で離婚し、3,4歳の頃に出て行った。酒乱の父が嫌いだったため、中学卒業後、家を出て働きに行った」。
- 「父親のギャンブルが原因らしく、小学校の頃には借金があり、現在も借金を抱えている。お金がなかったので高校には行けなかった」。
- 「父親は無職で、母親は水商売をしていた。中学卒業までのことについては、顔が曇り話しながらない」。
- 「4、5歳の時に両親が離婚し、祖父母に育てられた。生活保護を受けていた。経済的な理由で高校には進学できなかった」。
- 「中学3年生の時に、母親がサラ金から借金を作って蒸発した。その頃から父は暴力を振るうようになった。自分もグレ始め、友人宅に入り浸ったり、暴走族に入ったりした。シンナーも吸引した」。

中学校卒業で就業して行った人たち全員から家庭の状況について詳しく話を聞いた訳ではないが、少なくとも22件中の12件のケースが家庭に事情を抱え、就業せざるをえない状況にあったことがわかる。そして、“両親の離婚”、“借金”、“家庭内暴力”などの問題が多いことが伺える。

3.3 高等学校中途退学者の実態

3.3.1 就職先について

高等学校を中途退学し、就業している人たちがどのような職に就いていったのか、その実態を年代別に見てみたい。

- 10歳代の人の場合 「定時制高校に進学し、色々なアルバイトを経験した。定時制高校中退後、ブラブラしていたが親の知人の紹介でプラスチック工場に入社した」。
- 20歳代の人の場合 「高校中退後、数年遊んで暮らした。その後、仕事が見つからず父親のトラックの荷物運びの手伝いをした」、「高校に通いながら、朝は新聞配達、夜は焼き鳥屋のアルバイトをした。高校を中退し、焼き鳥屋で働いた」、「高校を中退し、16歳からスナックで働いた」。
- 30歳代の人の場合 「高校に進学するがいじめにあい退学した。17歳より仕事に就いた」、「在日に対する差別のことで高校を中退した。すし屋の見習いとして働くが親方の差別的な言動もあり辞めた」、「小学校6年生の時から新聞配達のバイトを始めた。高校は自分のお金で通っていたが中退した。その後、求人誌で見つけた居酒屋の住み込みの仕事に就いた」。
- 40歳代の人の場合 「高校に進学するが、父が体を壊したこともあり、職安で飲食店の仕込みの仕事を見つけ、退学した」。

50 歳代の人の場合 「中学卒業後、親戚を頼って他県の高校に行くが中退した。17 歳から東京でパーティーの仕事に就いた」。

高等学校中途退学者の場合は、どの年代の人たちを見てもほとんどが正社員として就業してっていないと思われる。仕事の内容は飲食店ばかりで、自分で仕事を見つけたり、アルバイトの延長といたりした形で仕事に就いているケースが目立つ。中学校を卒業し、就業していている人たちと比べると、高等学校を中途退学して就業していく人たちの方が就業する上で厳しい状況にあると言える。

3.3.2 家庭環境について

高等学校を中途退学し、就業していった人たちの家庭環境について見てみたい。

- 「東南アジアに生まれ、3 歳の頃日本に来た。定時制高校に進んだ後は色々なアルバイトをした。その時、家計は別々で食費も自分で稼いでいた」。
- 「高校在学中、北朝鮮に対する差別が原因でケンカとなり退学になった。その後、就職先の親方にもお前ら北朝鮮のもんはとイヤミを言われるのが嫌で退職した」。
- 「幼い頃から両親がおらず、祖母に育てられて来た」。
- 「父親が 16 歳の時に亡くなった」。
- 「子ども時代は、姉や長男が優遇され、自分は放置されていた。家が貧しかったので、小学校 6 年生の頃から 4 年間、新聞配達を行った。ある時、集金したお金が無くなっていた。母が勝手に持って行き使い込んでいた。しかし、そのお金で遊んだわけではなく、家計に入ったと思うこともできずに黙っていた。高校は自分のお金で通っていた。学費は土日や夏休みに旅館のアルバイト等をして稼いだ。お金も欲しい、新しい服を買っておしゃれもしたいと思い、高校を中退した」。
- 「幼いうちに両親は別居しており母の面影は記憶にない。親類の所や父の知り合いの所に預けられることもあった。父は毎日のように仕事場でも朝から酒を飲んでいて、暴力も当然のようにあった。高校進学後、父が体を壊して入院したため、仕事をみつけて高校を中退した」。
- 「母親は家におらず他の男性といる。父親はその筋の人でフィリピン人の経営する店に入り浸りだった。父には借金もあった。中学生の時に、児童相談所を通して児童養護施設に入所した。そこで偶然、実の弟に会った。弟は親戚の間をたらいまわしにされていた。高校には入学したが、1、2 週間でめんどくさくなくなって辞めた」。

高等学校中途退学者の少なくとも 9 件中の 6 件のケースが家庭に事情があったことがわかる。そして、“差別”、“貧困”、“暴力”、“借金” など家庭が抱える問題が多いことが伺える。

3.4 おわりに

中学校卒業で就業していった人たち、高等学校を中途退学して就業していった人たちともに、本人の意思というより、家庭に何らかの困難な状態を抱えていたがために就業せざるをえない状況が生じていたと言える。それらの人たちの家庭が抱える問題の多くは、離婚による経済的困窮、借金、暴力などであった。

そして、高校卒業の学歴を取得できなかった人たちに対する就業状況はとても厳しいものがある。多くは正社員としての採用ではなく、アルバイトというような実態であった。就業の第一歩から不安定就労状態でスタートして行っていると言える。特に、中途退学をせざるをえない人たちにいたっては、中学校卒

業者よりも厳しい状況にある。そして、その後ほとんどの人たちが派遣、野宿といった道筋を辿っている。

今回、聞き取りを行った人たちの中に結婚経験があり、子どもがいるという人がいた。その子どもの環境は、聞き取りを行った人たちが子どもの時と同じような家庭環境にある。まさに、厳しい環境が再生産されている現状がみられる。

第4章

「ネットカフェ生活者」の析出に関する生育家族からの考察

大阪市立大学都市研究プラザ 研究員
堤 圭史郎

4.1 はじめに

マスメディアにおいて「ネットカフェ難民」としてクローズアップされた若年不安定就労・不安定居住者（便宜上「ネットカフェ生活者」とする）の現状を把握すべく、我々の調査は行われた。その結果我々は、ネットカフェでの寝泊まりには、不安定就労による貧困、長時間労働等、経済のグローバル化が進む中で企業が行う労働条件の悪化が背景にある事、また、マスメディア等を介してイメージされたような、長期間にわたりネットカフェを起居の場としている人は少数であり、多くの場合ネットカフェは不安定就労・不安定居住の生活を辛うじて支える一オプションに過ぎないことを明らかにしている。ネットカフェに限らず、彼／彼女らはその時の仕事、所持金等事情にあわせてカプセルホテル、サウナ、ビデオ試写室等々を利用しているのであり、一泊1,000円前後で利用できるネットカフェは野宿を回避するギリギリの選択肢なのである。既に野宿経験をもつ人も少なくなく、彼／彼女らの生活は野宿と隣り合わせなものとしてある。「ネットカフェ生活」とは、野宿生活と大きく重なり合うものなのであり、「ネットカフェ生活者」とは広義の「ホームレス」とであると位置づけることができる。

彼／彼女らが生み出されている社会的背景には、日本社会で急激に進行した非正規雇用の拡大がある。不安定就労・不安定居住層の究極の生活として語られる「ネットカフェ生活者」の背後には膨大なる「フリーター」をはじめとする非正規雇用労働者の存在がある。安定的な仕事に就けていない人々が増える中、定住的な環境の下で仕事を選べない人々は、自分が就ける仕事があるならばそこへと移動し、仕事が無くなればさらに移動を繰り返すという、流動的かつ不安定な生活を余儀なくされている。例えば、2003年に放映されたNHKドキュメント『フリーター漂流』に登場する人々は、実家こそあれど、失業率の高い地元（北海道）で就職することもままならず、就労のために栃木県の携帯電話工場、愛知県の自動車工場へと移動を繰り返していた。本調査においても、多くの人々の生活史において度重なる地域移動と転職が繰り返されていることがわかっている。「ネットカフェ生活」（もしくは野宿生活）とはこの様な流動的な不安定な生活の延長線上にある。旧来ならば寄せ場の日雇労働者に見いだすことができたこうした流動的な貧困生活が、若年層を中心に拡大しているのが「現代的」貧困問題の特徴なのである。

非正規雇用と貧困の拡大が社会問題化する中、既に幾人かの論者が、現代の貧困の特徴について言及している。例えば岩田正美は現代の貧困を「独りぼっちな貧困」と表現し、それが社会的排除のあらわれであると説明している（岩田, 2008, p.88）。また、湯浅誠によれば、5つの排除（教育課程／企業福

祉／家族福祉／公的福祉／自分自身からの排除）が重なりあって、人は生活困窮に陥るのだという（湯浅, 2007, pp. 9-37）。現代的貧困とは、個々人の生活歴における種々の社会的局面での排除と、そのプロセスが導く「孤立」によって特徴づけられるというわけである。したがって、貧困や社会的排除に陥る危険性は、誰にでも平等にあるわけではない。貧困に陥りやすいのは、それと結びつきがちな「不利な状況」を抱え生活してきた人々である。例えば、急激に増加する「フリーター」の全てが困窮状態に陥らないのは、彼／彼女らが親と実家に同居している、仕送りをしてもらっている等、家族福祉に守られているからだと言われている*1。しかし、家族からの援助を受けられない人々は、不安定雇用のもつ不安定性がダイレクトに、不安定な生活をもたらすことになる。そうした家族からの援助を受けられない人々の生育家族との関係性とはいかなるものか。また、何故援助を受けられない／受けないのか。

本稿では、この激しく流動的な不安定な生活に至った人々の生育家族の諸相を記述し、彼／彼女らの抱える困難のバックグラウンドの把握を試みる。依拠するデータは「ネットカフェ生活者調査」「自立支援センター調査」において聞き取った生活史である。ただし、データには制約がある。本調査の主眼は、ネットカフェ等で生活している／していた人々の現状について把握することにあつたため、生育家族の状況について具体的な情報は、それほど多くは聞き取られていない。例えば、生育家族の経済的状況については具体的な聞き取りが成されているケースは少数であり、また親の職業や学歴等、世帯の貧困との相関が指摘されている指標についても十分聞き取られていない。以上のような制約はあるものの、聞き取りの過程では調査協力者が語った生育家族におけるエピソードが幾つも聞き取られており、そこからは彼／彼女らの生育家族における「困難」を読み取ることができる。それらのデータをもとに、調査対象者の生育家族の状況について概観し、最後にそこから見いだされる論点について議論する。

4.2 生育家族における困難

まずは、30代後半男性の事例である（事例78）。父親は自営の船員、母親は内職のボタン付、仲居、日雇の土工、農作業、パートなど、何でもして家計を支えていた。父親の賃金は低く、母親は昼も夜も働いていたという。世帯の状況は彼も新聞配達をして支えるような状況だった。

5人兄弟の3男である。和歌山県の観光地で育った。バイトをしたり、家事をしたりと家のことを色々お手伝っていた。小中学校時代は、薪集め・薪割り・風呂焚きや買い物などしていた。「薪割りというよりも枝折りの方が近いかな？——母親が山に行って薪にするための枝を集めてきて、それを折っていた」。家が貧しかったので小学6年生のころ新聞配達を始めた。新聞配達は4年間続けた。

配達、集金、営業をしていたが、あるとき集金したお金がなくなっていた。母親が勝手に持っていき使い込んでいた。しかし、そのお金で遊んだわけではなく、家計に入ったと思うこともできずに黙っていた。その後は借金返済のために、新聞屋で「ただ働き」をしていた。自分としては2年分くらいの給料しかもらっていない。とはいえ、借金は新聞屋を辞めるまでに全額返済できたわけでもなかった。勤め先の新聞屋は地元の営業所であったため、あるとき父親に事情を話したようだった。「そのとき、家の中こんな（混乱）なってたけどね」（事例78：30代後半・男性）。

*1 例えば湯浅, 2007, pp.13-4。

次の事例 24 では、母子世帯で育つ中、友達はあるものの家庭においては「ひとりぼっち」だった様子が語られている。

祖母と母親の 3 人暮らしだった。「父は気づいたらいなかった」。母親からは、父親のことはあまり聞いておらず、「死んだからいない」「今テレビに映っているのがそう」などと言われていたという。「現在、父親がどこにいて、どこに住んでいるのかわからない」。

母親はパートの仕事をし生計をたてていたため、休みの日は寝ているか、好きなことばかりしていて、どこかに連れて行ってもらったことはないという。祖母も連れて行ってはくれなかった。母親は夜遅く帰宅することが多く、朝帰りもあったという。お金が家に置いてあり、コンビニやスーパーで夜ごはんを買って食べていた。小学校 6 年生のときに、祖母が母方の兄夫婦が住む名古屋に引き取られたことをきっかけに、家でひとりぼっちになってしまった。「一人で寂しいし、こわいし、そういうのが今につながってるんちゃうんかな」。母親も祖母がいなくなったことが寂しかったらしく、近所の人の家にいりびたっていた（事例 24：女性・30 代前半）。

両親の離婚は必ずしも直接的に世帯の貧困や本人の困難に結びつくわけではない。しかし、貧困が離婚を促すこともあれば、離婚という状況が貧困を招くこともある。とりわけ母子世帯について言えば、離婚後の生活が親族等の援助がなければ経済的に困窮しがちであり、社会的に不利な階層を形成しがちである事が知られている*2。事例 24 の場合も、母親のパートがどの程度の収入だったかは不明だが、生活が決して楽なものではなかったことが本人の経験から伺える。

事例 81 の男性は、両親の離婚後、母親が病気であるため生活保護を受けて暮らしている。

福岡県に生まれる。父は車の板金塗装の会社に勤めていた。母（現在 50 歳代後半）は病気がみで働けなかった（発作が出る。心臓ではないが、詳しくは「話したくない」とのこと）。妹（現在 20 歳代後半）が 1 人。

アパート住まいだったが、中学 2 年生の時に、両親が離婚し、母に引き取られて、近くに祖母や親戚のいた団地に移る。母の生活保護で暮す。

公立高校の受験に失敗し、私立高校に行くお金がなかったため、夜間高校（5 年間）を卒業する。父は 10 年ほど前にガンで亡くなってしまった。高校時代の 16 歳で原付の免許、20 歳で車の免許を取得する。免許取得に関する費用は、父がだしてくれた。その他、生活費も入れてくれていたらしい。高校時代からアルバイトをしていた（事例 81：30 代前半・男性）。

両親が離婚後、祖父母の下で育てられた事例もある。事例 93 では、父親が養育費を払っていたのだが、経済的には困窮していたという。

堺市に長男として生まれる。姉がいる。4、5 歳の時に、両親が離婚し、すてられて以後、祖父母に育てられた。生活保護を受けていたらしい。現在は 2 人とも亡くなっている。父から養育費はもらっていた。父は再婚している。中学校卒業の夏までは、祖父母と暮らし、以後、姉と 2 人で市内でアパート生活を始めた（事例 93：30 代前半・男性）。

*2 例えば青木紀,2003。また青木は、その子どもについても低学歴・不安定就労という形で困難が移転しがちであるとも指摘している。

事例3では、親の借金が原因で家族が離散している。借金による困難はそれ以外にも、両親のギャンブル・酒が原因と思われる事例70（20代後半・男性）や、本人も手伝う家業が傾いたために、連帯保証人になっていた自身も多額の借金を背負うことになった事例14（30代前半・男性）などにおいて見られた。

東大阪市の出身。家族は父、母、本人、弟。家族は行方不明。母親は借金をかかえて蒸発、父親は体調を崩して会社を退職、母親の債務の督促がイヤになり退職金をもって姿を消した（事例3：20代後半・男性）。

生育家族の困難は経済的困窮だけに留まらない。それはしばしば家族関係の変容や生活様式をめぐる葛藤を促す。事例94では母親の借金を契機に家族内に激しい葛藤が起き、しんどい家族関係に陥っている。

生まれは大阪市西部。きょうだいは3人、姉が2人いる。母親は中学3年生のときにサラ金から借金をつくってそれが父親にわかり、蒸発した。父親は20年前に亡くなった。母親が何にお金を使っていたのかはわからない。市営住宅に住みながら父親はもともと別の仕事をしていたが、母親が蒸発してからは道路の舗装関係の仕事をするようになった。母親がいなくなって姉たちに父は暴力をふるうようになった。

また中学生のとき母は父から生活費をもらっていたにもかかわらず、給食費を払ってくれず、みんなの前で自分だけ給食費をはらっていないと言われてつらかったが、父にはとてもそんなこと話をするのができなかった。中学校3年生になって母がいなくなってグレた。ほとんど家に帰らず、友人宅に入り浸り、暴走族に入ったり、シンナーも吸引した。シンナーは父親にしかられてやめた。鑑別所にも入ったことがある（事例94：40代前半・男性）。

また、経済的困難について具体的には語られていないが、事例18では家族揃って食事をとったことがない程の冷え切った家族関係が述べられている*3。

東南アジアで生まれる。姉が2人いるのだが、うち1人が日本人と結婚したのを機に、既に結婚していたもう1人の姉を国において、家族で日本に移住した。彼が3歳の頃のことである。移住先は兵庫県である。父親は自動車製造の会社でショベルカーを作っていたという。移住後の家族生活は解体的なものだった。家族で集まって食事をとることも、「ないですね。腹が減ったら、みんな各々冷蔵庫の中から適当に食べてました」。家族とは連絡をとっておらず、とくに家族の心配をしていない様子だ。「家族、生きてるんじゃないすか」。

定時制高校に進んだ後、様々なアルバイトを経験する。主な仕事はラーメン屋、飲食店、ゲームセンター、コンビニなどである。コンビニでは夜10時から朝8時まで働き、時給は950円だった。コンビニでの1番安い月給は16万円。バイト料は1番高くても、時給で1,050円だった。また、家族とは同じ家に住んでいたが、このころから家計は別だった。「高校に入ってから食費も自分で稼いでました。自分の部屋にしかいませんでしたね」。そのうち高校にもあまり行かなくなった（事例18：10代後半・男性）。

ここまでにおいて確認できるのは、既に幼少時から家族関係において葛藤を抱えながら生きてきた人々が多数存在するということである。その中身は、生活上ある一時期の「アクシデント」が困難をもたらした事例もあったが、むしろ本人が生育家族にいるほとんどの期間、経済面においても家族関係において

*3 彼は初職を退職後、一旦実家に戻るも、家には入れてもらえなかったという。「姉ちゃんにカギを閉められた」。

も困難な状況にあったという事例が多く見られた。困難を抱える生育家族において、ある者は経済的困窮から幼少からアルバイトに従事し、ある者は搾取され、またある者は親からの暴力やネグレクトが日常的である環境の中を生きてきたのである。このように語られた経験は、彼／彼女らが、生活史の原点においても不安定性に規定された生活を送ってきたことを示唆している。

そして本調査で出会った人々において、児童養護施設に入所経験がある人が5人、児童自立支援施設に入所経験があると語った人が2人もいたことは重視すべきである。

高知県で出生。父親とは、小学生のころに死別。母ひとり子ひとりとして育つが、母親は2005年に亡くなっている。16歳より18歳まで児童養護施設で生活。親戚関係とは、没交渉（事例45：30代前半・男性）。

埼玉県で6人兄弟の3番目として生まれた。子供の頃から両親が共働き（母親は水商売、父親は恐らくテキ屋）で食事は家族別々で会話も、ほとんどなかったという。

小学校1年生のとき兄がイジメっ子で、それが元で、イジメられるようになった。小学校5年のとき何の報せもなく、両親が離婚（母親が1人で出て行った）。原因は父親が仕事もせず、酒ばかり飲んでいたので見捨てられたそう。姉は中学2年の頃から家族のために飲食店等でアルバイトをするようになった。翌年、父親の暴力及び姉と兄の下の兄弟へのイジメが始まり、ひどくなっていった。

中学2年生頃から、「登校拒否」が始まり、家出（10～11ヶ月間）をする。1週間後に、家出をした2歳年下（当時小学6年生）の男の子と出会い一緒に過ごすようになった。寝場所は人目につかないマンションの貯水槽等で、食事は2人で万引き等で調達していた。野宿を始めて2ヶ月後位に、20代後半のホームレスの男性と知り合い、3人で過ごすようになった。それから8ヶ月位は、ターミナル駅や神社で野宿するようになった。この時に野宿の仕方など、いろいろと教わったようだ。翌年（14歳）、2人とも警察に補導され児童養護施設に入った（事例65：20代前半・男性）。

京都府に生まれる。父親は1949年生まれで、2度の離婚を経て現在はトラックの運転手をしている。本人は1人目の妻との間の長男。母を同じくする弟と、2人目の妻との間の弟がいる。生みの母は現在再婚しており、2人目の元妻はガンで既に亡くなったようだ。祖父母も、既に他界。

幼稚園の頃に大阪市内へ家族で転居。そこで小学校に入ったが、「いつの間にかおらんかった（離婚していた）」ということで、低学年のうちに兄弟で大阪府内の生みの母のところへ行き、その小学校に何年か通った。その後父が再婚して住んでいたところ（大阪市）へ移り、一時期その小学校へ行くが、2人目の母の言うことを聞かず、家出を繰り返していた。家出中は、友達の家でご飯を食べさせてもらったり、コンビニの店員にただで飲み物をもらったり、歩き回るうちに現金を拾ったりしていたという。家の外では大人にかわいがられたようだ。2人目の母には叩かれたりもしていた。この頃に親が家出のことなど児童相談所に相談したらしく、児童養護施設に入れられ、そこで小学校と中学校を卒業（事例77：30代前半・男性）。

島根県で生まれ育つ。母親は家にはおらず他の男性といる（いつからいないのかは不明）。父親は、あまり家になかった。「いわゆるその筋の人」であった。本人が小学生の頃は、会話は無いが親子で食事をとることもあった。たまに弁当だけ置いてあることもあったそう。中学生の時、児童相談所を通して児童養護施設に入所した（事例87：20代後半・男性）。

Aさんは、和歌山県の施設で育つ。「家に事情のある人の入る公立の施設」。母親が育てることができず、おそらく生まれて早い時期に施設に預けられたのだが、施設での記憶があるのは、小2の頃くらいからだそうだ。そのことでAさんは、母親はたぶん「自分勝手」で、子どもを施設に預けた時点で「失格」、親には「裏切られた」と思っている。実家は、現在和歌山県の別の市にある。施設では中学校卒業くらいまで暮らす（事例83：30代後半・男性）。

厚生労働省が行った『児童養護施設入所児童等調査』によると、2003年2月1日現在、全国の児童養護施設児数は30,416人である*4。この数字と2003年10月1日現在の同世代推計人口（21,105,000人）との比を算出すると、およそ1対700となる。サンプリング調査ではないとはいえ、調査を通して5人の児童養護施設経験者に出会ったことを偶然と片づけることはできない。社会的に厳しい状況におかれている人々ほど、未就職・無業の状況になりがちであるという報告は既に成されている。家族という資源を活用することができない／難しい児童養護施設経験者が、職業達成や社会生活において極めて厳しい状況にある事を、これらの事例は示唆している。

4.3 低い学歴達成・不安定就労層としての析出

経済的困窮や家族内の種々の葛藤——生育家族におけるこれらの困難は、本人の学歴達成にも影響を及ぼしている。「ネットカフェ生活者調査」を参照すれば、調査協力者の学歴構成は35歳未満において中卒が20%、高校中退が20%、高校卒が50%、35歳以上において中卒が23.8%、高校中退が19%、高校卒が33.3%と、明らかに低学歴に偏ったものとなっている。調査対象者の低学歴傾向の背後には、前節で示した生育家族の相対的に低い社会階層的背景があったことが考えられる。以下に挙げるのは、そうした背景が本人の進学に直接的もしくは間接的に影響したと考えられる事例である。

事例4では、両親の離婚が本人の就学状況に影響した結果、不就学のまま就労生活に入っている。

福岡県出身。4人兄弟。20年ほど前（おそらくAさんが小学生の時）に、両親が離婚、夜逃げすることとなる。その際、彼だけ父親について広島へ。福岡にいたときまでは小学校に通っていたが、それ以降は学校には通っていない。父親については「亡くなったらいいですね」（事例4：20代・男性）。

事例13では、進学できる学力はあったが、本人が家庭の状況に鑑みて高校進学を諦めている。

両親と姉2人と妹1人、両親は本人が16歳のときに離婚。中学校卒業後、学力的には県内の有名私立の高校への進学も可能と言われ、模試でも良い判定が出たが、進学しなかった。ちょうど母親が離婚した時期で、母のパート勤めだけでは経済的に厳しいことを知り、16歳で働きはじめた（事例13：20代・男性）。

事例68では、高校には進学できたものの、経済的困窮から中退している。生育家族の経済的困窮は、圧力となって本人の学歴達成を不利な方向へと導いている。

広島県出身。父は同じ町内にある造船所勤務、母は主婦。兄3人、姉2人の六人兄弟の末子（順に長兄、次兄、長姉、三兄、次姉）。長兄とは14才、一番近い次姉とは6才差。幼いころ既に長兄

*4 また同調査で自立支援施設児は、全国で1,657人と報告されている。

は「蒸発」しており、存在も知らなかった。小学校6年生のときに父を亡くす。既に20代だった三兄も父と同じ造船所に勤めていたので、その働きで家族を養ってくれていた。

小中学校にはまじめに通っていたが毎日あそんでいた「悪ガキ」、いじめられもいじめもしなかった。私立の高等学校に進学したが、自転車と船とバスに乗る通学のために朝5時すぎには家をでる生活で、家が貧乏だったこともありはやく働きたいと考えて1年で中退（事例68：40代後半・男性）。

事例66では、本人が進学しないことに姉と弟が反対しているものの、両親から進学を勧められることはなかった様子が語られている。

大阪府で長男として生まれる。父、母、姉、弟の5人家族。父は土建会社の部長までなった。母親は大阪市出身で無職。子ども当時の生活はあまり裕福であったとは思っておらず、「生活は貧乏だったと思います」。

小学校時代は、勉強は嫌ではなかった。特に得意、不得意という教科はなく、弁護士になりたいと思った。中学校でも普通に暮らす。部活動には入ってなかったが、水泳部から誘われたりした。水泳は小学校の1年生から50mくらい泳いでいた。

中学校卒業時、進学は考えなかった。理由を尋ねると、おそらく高校は卒業できないだろうと思ったから、とのことであった。進学しないことについては、両親は特別反対せず、本人の好きなようにすればいいという考えであった。しかし、姉、弟は本人が高校に進学しないことには強く反対した。姉、弟ともに高校を卒業している（事例66：30代前半・男性）。

高等学校への進学率が9割を超える現代社会において、中学卒は圧倒的に少数派であり、それは本人の社会生活への移行において不利な条件となる。事例13とともに、多くの若者が当然のように高校に進む中、本人に進学を躊躇させる状況が彼らの生きる環境にはあったのである。

また、事例91のAさんは大学進学を希望していたが、それを諦めさせたのは本人の高校進学時に取り交わした親との約束である。

本当は高校を卒業後、大学に行きたかったが高校が私立だったために諦めた。高校を受験する際、両親は公立高校への進学するものだと思っていたが、Aさんにはその高校に行きたいという思いがあった。両親との交換条件で私立の高校へいくなら大学までの資金は諦めてくれと言われた。Aさんは勉強もできて大学の推薦ももらったけれども、先生には事情があつていけないと断った（事例91：40代前半：男性）。

以上取りあげたのは、生育家族における経済的困窮および葛藤が、本人の学歴達成に、直接的もしくは間接的に影響を及ぼしたと考えられる事例である。もちろん、それらの進学自体を考えなかった人もいる。勉強が嫌いである、意欲がなかったと語る人もいた。しかし、高学歴社会においては、大学進学をとってみても学力が問題となる場合はほとんどないと言ってよい。「いまや高校から上級学校への進学は、威信の高い少数の四年制大学を別とすれば学力が決定的な重要性をもっているわけではない。むしろ、上級学校への進学に耐えるだけの経済力があるかどうか、進学可否かを決める重要なポイント」なのである（耳塚, 2001, p.100）。高学歴社会において、望めば多くの人々が上位の学校に進むことができる中で、高校進学を断念した、大学進学を断念した上記の人々は、それを望めない状況にあったのである。

低い学歴達成は、その後の職業生活への移行にも影響する。とりわけ中卒者、高校中退者を取りまく雇

用環境は1990年代から2000年代初頭にかけて急速に悪化している。就業構造基本調査の大阪市についての特別集計を参照し、最終就学が「小学・中学」の若者（15歳以上34歳以下）の失業率を見ると、全体では1992年が5.5%、1997年が7.7%、2002年が10%となっているのに対し、最終就学が「小学・中学」の若者においては1992年が5.2%、1997年が8.2%、2002年が16.9%とより加速度的に悪化している事がわかる*5。本人が望む／望まないに関わらず、中卒者に「なった」人々を取り巻く雇用環境は、彼／彼女らに対してより不利な動向を示している。

学校生活から職業生活への移行について見ると、初職においては正社員の身分で働いた人も多数確認されたが、そうした人々においてもここまでにおいて確認した社会的に不利な条件の蓄積と結びつくかたちで転職や解雇を経ている。紹介した事例4の男性は中学卒業後、アルバイトも含め30にも上る仕事を渡り歩き、5年前に仕事を求めて来阪している。事例13の男性は、鳶職に就き、親に自立を促され一人暮らしをはじめたが、その後離職、来阪し水商売に就いている。事例68の男性は、職業訓練校卒業の後に外食産業を転々とする中で単身で来阪している。事例66においては、中学卒業後一旦ゴルフ場に正社員として勤め比較的安定的な生活を送るも、プロ試験に受からなかったことを契機に転職するが、その後常雇の仕事には就けていない。

得られる仕事の種類が限定的である彼／彼女らは、その直接的な契機は様々なれど生育家族を離れることになり、次第に不安定就労・不安定居住的生活へと収斂していったのである。

4.4 援助してくれる相手の欠如

ここまでにおいて確認されたのは、調査対象者の多くが、ある時点からであれ、長期的にであれ生育家族の困難を経験していることである。児童養護施設への入所経験がある者も多数確認された。そんな彼／彼女らが家族に対して保持する情緒的感情は様々なのであるが、とりわけ指摘できるのは彼／彼女らにおいて生育家族が自分を生活上の危機から守るものとして認識されていないということである。それは家族の困難な状況が現在に至るまで連綿と横たわっていることにも起因している。

事例78では、家族に対する情緒的不満が語られるとともに、実家の状況が本人を援助してくれる状況にはないことが語られている。

自分は父親と兄とは折り合いが悪く、会いたい気持ちもない。「あんなやつ（父親）早く死んだらええねん」。今は実家とは何の連絡もとっていない。30歳になる直前に大阪に出てからは兄弟姉妹とも連絡をしていない。連絡してもけんかになってしまうから。しかし、近所の人や同級生に連絡をして、母親の3回忌の粗末さや姉の熟年離婚などの情報は得ている。現在、父親は年金暮らし、兄は4年前に自殺した。妹は離婚して子どもを連れて実家に戻っている（事例78：30代後半・男性）。

事例27の男性は、親とケンカして家出した後は生育家族とはほとんど交渉していない。「たまたま」知り合ったクリーニング店の社長の計らいでアルバイトを始めて以降はアルバイトを転々としてきたという。現在は自立支援センターに入所している。親族関係から完全に排除されているわけではないが、それでも現在の彼に対する援助は携帯電話の支払い程度のものである。

*5 内田, 2007 を参照。また、他の年齢層も含めた場合の失業率は、全体では1992年が3.7%、1997年が6.2%、2002年が8.4%となっているのに対し、最終就学が「小学・中学」では1992年が3.3%、1997年が6.8%、2002年が11.7%となっている（内田, 2007, p.15）。

東京生まれの A さんは、高校生の頃に、「親とケンカして家出」。ヒッチハイクで大阪に来ている。この「親とのケンカ」については多くを話さず、親とは「折り合いが悪かった」と語っている。クリーニング店で 2 年間ほど働いていた後、いろいろの仕事を転々としたそうで、そのほとんどはアルバイトだったとのことだがその詳細は不明。

A さんは、家出をして 3~4 年後（20 歳前後の頃）に、一度実家に電話をしたそうである。しかし、父親から「一族の恥さらし、早く死ね」と罵られたそうで、それ以来一度も実家と連絡は取っていないとのことである。「弟が 1 人いる」が、この弟さんとも 20 年来音信不通であり、また東京時代の友達とも一切連絡をとっていないとのことである。ただ、大阪の北部には「同じ歳の親戚」がいて、その人は A さんが大阪にいることを知っており、「何かと心配してくれる」らしく、現在 A さんが所持している携帯電話の料金もその「親戚」の人が払ってくれているそうである（事例 27：30 代後半・男性）。

事例 9 では、一時的な援助を母親から受けたものの、家族との確執から最終的には「勘当」を言い渡されており、事例 64 では、母親に電話で「親子の縁を切る」と言われている。困窮する中で一時でも援助してもらえたのは、同じく困窮する「ホームレスの人」であり、公園で会った「おばさん」である。

実家は大阪市内。泊まっているネットカフェの近所。だけど転出証明書を実家に送ってもらうことはできない。受け取ることができない。勘当されているから。父親は離婚してどうなっているかわからない。母親は現在 70 歳代前半。母親は 60 歳代後半まで仕事をしていた。お金がなくなったとき母親に援助してもらったこともある。家族は母、姉、兄、自分、弟。姉は結婚してその夫のついでで兄に仕事を紹介した。弟は 30 歳手前で彼女がいてそろそろ家を出て独立するのではないかと思う。今までは実家の前まで行き、母親が紙袋にお金を入れて窓から投げつけてくれることもあった。しかしそれが姉の知るところとなり、実家の前にいたところ警察まで呼ばれることになった。警官が実家の中に入って母親から「迷惑だからもう来ないでくれ」と言われたと伝えてくれた（事例 9：30 代前半・男性）。

平成 19 年、横浜での生活保護を打ち切り、京都の一時保護所に 1 週間入る。京都で生活保護の申請をしたが、「母親に少しでも援助をしてもらうように」と言われ、母親に電話をしたが「親子の縁を切る」と言われ申請を断念。その後、ホームレスの人に空きテントを勧められ 1 週間入居。その間はアルミ缶収集をした。9 月中頃、高知に帰ることも考えフェリーターミナル付近の公園で野宿、その時は、公園を利用するおばさんから食べ物ももらったりした（事例 64：30 代後半・男性）。

この様に、生育家族における葛藤に起因して、家族からの援助が受けられないという事例が多数見受けられた。そしてこれらの事例が示すのは、生育家族が多少家計を削ってでも家族成員を支援すべきという社会規範とは裏腹に、既に経済的困窮に陥っている家族が、生家を出た彼／彼女らを受け入れる余裕がないという事である。

むしろ、そうした困難な状況にある親やきょうだいを、不安定な生活にあり収入も少ない中で支えてきた人々も見られる。母子家庭で育った事例 24 の女性は高校卒業後、当初は正社員として働くもリストラを期に派遣社員を転々とするようになった。母親は 10 年弱前に手術をして以降働いておらず、その間の生活費は彼女が工面していた。親と同居しながら働く同年代の若者の中には、将来に備え貯金をする者もいる。交際する男性もあり、現在妊娠中である彼女も、将来のための貯蓄をしたいと言うが、彼女においては 10 万円の貯金を作るのも楽ではない。

また、親が子どもやその周辺に金を無心し続け、本人に愛想を尽かされているという事例も見られる。児童養護施設を経験した事例 87 の男性は、父親の借金も背負っている。

父親は、「フィリピン狂い」でフィリピン人の経営しているお店に入り浸りだった。父親は借金もあった。高校を退学して後、保護観察処分を受けたとき、父親が身柄引受人になったため実家にいなければならなかったのだが、住み込みで水商売の仕事をしていたので、それを理由に父親が給料を持って行った。また自分が付き合っていた彼女の実家からもお金をひっぱって迷惑をかけた。総額で 2,000 万円くらいになったのではないかと。2007 年に事故で亡くなった。45 歳だった。父親が亡くなってからは「カネ返すんが筋じゃねえか」と金融屋からも親戚からも言われて、それ以外にも理由はあったが島根から出てくることになった（事例 87：20 代後半・男性）。

また、彼は児童擁護施設で偶然実の弟にはじめて出会う。弟は親戚の間をたらいまわしにされていた。現在、弟は進行性の障害を抱えており施設に入所している。彼は「弟は唯一の家族」で、「ぼくがみるしかない。て言うか家族だし」と強い責任を感じているのだという。家族の誰もが様々な形で困難な状況にある中で、彼はむしろ自分が支える立場にあると認識しているのである。

同じく幼少期から施設に預けられた経験をもつ、事例 83 の男性は、自立支援センター入所後、親族との連絡は頑なに断っている。彼は施設に預けられた時点で親には「裏切られた」と思っている。

母親と一緒に住みたいと言ってきたので、和歌山県の親元に戻る。13 年経って、母親は変わっているかと思ったけれど、結局変わっていなかった。家には借金があり、父親（母親の再婚相手？ 仕事なし）は闇金からも金を借りるほどであったが、すでに借金を清算していた A さんに対し、「のんきでええな」「借金をどうにかしろ」などと言ってきた。自己破産を勧めたりもしたが、聞き入れられなかった。3 ヶ月ほど居たものの、結局家を出ることになる。この時のことで A さんは、「親に 2 度裏切られた」と思っており、2 度あることは 3 度あるし、もう裏切られてはたまらないと思うので、親にはもう二度と会いたくないとのことであった。したがって、親は現在も同じ所に居るが、「探すな」と言っているらしく、また会いに行く気もゼロであると言う（事例 83：30 代後半・男性）。

以上に取りあげた事例から、生育家族での困難にはじまり、不利が不利を呼ぶ形で不安定就労・不安定居住的生活に陥った人々においては、家族から援助を受けることが困難な立場にあると言える。上記の事例以外にも、親が既に他界している場合（事例 4）や、長年家族と音信不通だったが、困窮したため久しぶりに家に連絡をとろうと思ったら誰もいなかったという人（事例 3）、実家とは連絡を取っているものの、小さいアパートのため本人が帰っても生活できるスペースがないという人もいる（事例 96：20 代後半・男性）。

困ったときに相談する相手の有無について「ネットカフェ生活者調査」ではアンケートをとっているが、5 割以上の方はそうした相手をもっていない。彼／彼女らの中には、乏しい人的ネットワークの中から緊急避難的に友人の家に居候したり、職場に寝泊まりしたりしてその場を凌ぐ人も見られたが、それも相手の迷惑を考えれば長居はできない。経済面においても人間関係においても困窮した彼／彼女らが、野宿を回避するギリギリの手段として見いだしたのが、ネットカフェやサウナ等の非住居的スペースなのである。

4.5 おわりに —— 「家族」と「自己責任」についての若干の考察

先行研究は、相対的に低い社会階層的背景にある者が「フリーター」として析出されがちであることを指摘している*6。妻木進吾は、「フリーター」である当事者が生まれ育った家族の状況に着目し、生育家族の困難が不利が不利を呼ぶ形で、彼／彼女らの不安定就労層としての析出と滞留を促していることを明らかにしている。

フリーター層全体のボリュームが拡大していく中で、相対的に重みを失い、ますます見えづらくなっているのは、低階層を出自とするフリーターである。……これまで記述してきたのは、生育家族における様々な困難が、そこで生まれ育った若者自身の困難——低学力や低学歴、不安定就労——へと変換／移転され、不利が不利を呼ぶ形で困難が重層化していくプロセスであった。それは、社会的不平等、貧困が世代を超えて再生産されるプロセスを意味する。「フリーター」としての彼／彼女らの現在は、そのような不安定・貧困階層に生まれ育った若者が、労働市場の底辺へと、選択の余地が非常に狭められた状況で送り出されているという、彼／彼女らが抱える困難の一断面としてある（妻木、2005, p.63）。

妻木が指摘するのは、彼／彼女らにとって生育家族が、読み書き能力から学歴まで、そうした社会生活を円滑に営む諸条件を蓄積する場と成り得ていないということである。逆に蓄積された不利な状況と結びつくかたちで、彼／彼女らは「フリーター」に「なる」。

本稿で行った検討から確認されたのは、まず「ネットカフェ生活者」の多くにおいて、経済的困窮および激しい家族間の葛藤がある生育家族の下で育った経験が語られたということである。そして注意すべきはこうした困難が、ある一時点からというよりも、彼／彼女らの幼少期から現在に至るまで連綿と続いているという事である。それが意味するところはここまでにおいて示したとおりである。つまり、こうした種々の困難が彼／彼女らの進学や職業生活へのスムーズな移行に影響を与え、また社会に出た後には生活上の困難を援助するにはほど遠い家族の状況、家族との関係性が彼／彼女らの現在の生活を「孤立」したものへと促しているのである。安定的な雇用から排除され、福祉制度からも排除された状況において、家族の援助を受けられない彼／彼女らは、他の報告が示唆するように、過剰な程に「自立」した生活をせざる得ない状況に追い込まれている*7。

彼／彼女らにとって家族はセーフティネットとは見なされていないし、事実上その様な機能を期待できるような状況にもない。野宿者問題においてもしばしば耳にする「家族が面倒をみればいいのか」という意見は、彼／彼女らにおいては無意味である。

*6 例えば耳塚寛明は若者の雇用についての調査研究において、「同じ高卒者の中でも、1990年代末期に、一層多く非典型労働市場へ参入したり無業者となったのは、相対的に低い社会階層的背景を持った者たちだった」と述べている（耳塚、2002, p.147）。

*7 本稿で取りあげた以外の事例においても多く聞かれたのは、安定的な仕事が見つかるまでは実家とは連絡したくない、帰りたくないという意見であった。長期の失業状態から同居する親との確執が生まれ、暴力の果てに家出をした事例48の男性（20代後半）は、「ちゃんとした仕事をして、お金を貯めてから実家に帰りたい。それまでは絶対に帰りたくない」と述べている。また、実家には住んでいるが、調査当時において家にほとんど帰らなくなったという事例34の男性（20代前半）は、「仕事が無くなったことはまだ家族に話していない。仕事がないと、家族とも話づらい」と答えている。実家に帰るときも彼は仕事をしてきたように装いながら家に入るのだという。この様に、家族に依存して生活することを快く思わない人々においては、一方では恐らくは本人を心配して問いかけているだろう家族の言葉が、強迫的な「自立」への圧力としてはたらいているのかもしれない。

むしろ、このような日本社会において多くの人々に受け入れられている意見に見いだされる家族依存的志向性こそが、彼／彼女らを過剰に「自立」した生活に追い込んでいるのではないか。日本の社会制度は家族福祉に多くを依存することを前提に構築されている。生活保護制度においては「家族扶養義務」条項、教育においては他の先進国に比して圧倒的に高い家庭による学費負担に典型的に見られるような家族に強く依存した制度が、私たちの社会を特徴づけている。個人に降りかかる様々な困難への対応を家族に対して過剰に期待する社会において、そうした困難は社会の人々においてもプライベートに解決されるべき——「自己責任」の問題と見なされがちである*8。だからこそ私たちの社会は様々な生活リスクについて、「個人の問題」「自己責任」といった問題系へと回収しがちなのである。このような観念のありようは、当然「ネットカフェ生活者」自身をも支配している。当事者において家族の困難は単なるプライベートな事情とみなされ、家族への依存が困難な状況においても自身の生活上の困難は「自己責任」として捉えられるのである。彼／彼女らの生活を支えるのは、「できるだけ誰にも頼らず」「自分の力で」どうにか生き抜くという——家族イデオロギーと通底した——自立主義的生活規範なのである。

自立主義的生活規範とは、それを「当然」とする社会だけでなく「ネットカフェ生活者」自身をも取り巻く根深いイデオロギーである。ここに「当たり前の家族のありよう」（近代家族）を前提に対応しようとする社会のありようと、家族に援助を求められない困難な立場にある人々との奇妙な交錯を確認できはしないか。本稿で取りあげた様々な生育家族のありようは、私たちの日常経験において決して遠いところにあるものではない。それにも関わらず、私たちはこれからも「健全な」家族のありようを所与のものとし、「そうではない」家族のありようを視界から脱落させたまま、彼／彼女らについて議論し続けるのだろうか。それは私たちが自らの生活リスクに対して常に高度な対応を要求されていること——家族福祉に過剰に依存した既存の社会制度——に対して無関心であることに他ならない。そして「家族」を媒介に、社会と当事者がこの規範を相互に確認しあうことで生成される「自己責任」のリアリティもまた、「ネットカフェ生活者」を「孤立」へと追い込んでいるのではないか*9。

だからこそ、今私たちに求められているのは、目の前にいる他者の抱える困難を即時的に「個人の問題」「自己責任」と捉えることではなく、「家族が面倒をみればいいではないか」と皮相な見解を示すことなく、彼／彼女らとの対話を通して当事者が抱える貧困の中身について理解し、彼／彼女らの生活が様々

*8 家族イデオロギーは、「自己責任」と密接に結びつく。山田昌弘は、日本社会が家族に期待する社会的機能の1つとして生活リスクから家族成員を守る機能を挙げつつ、それが「近代社会において、家族に特権的に期待されているものである」と指摘している。そして「この期待を裏返せば『家族以外の人を助ける義務はない』ことを宣言している。身近に生活上困った人がいても、彼（女）が自分の家族でなければ、助けなくても社会的に非難されることはない」と述べている（山田, 2005, p.27）。

*9 平川茂は、野宿者（「浮浪者」）が置かれている「自虐的かつ自閉的な被差別空間」の構造を、資本主義社会の業績主義・能力主義イデオロギーの根底に潜む「自業自得」観念から説明している。本稿における議論は、この平川の論考から強い示唆を受けている。

もちろん、現実には、わがくにもにおいても、「生得的属性」に基づく差別は厳存している。部落差別しかり、在日朝鮮人差別しかり、性差別しかり、障害者差別しかり。だが、これらの「生得的属性」は「タテマエの下での潜在化の圧力」をこうむる。「民主主義」の原理からして、被差別の側からの反差別の声を、人々は完全に無視することはできないからである。

だが、「浮浪者」差別の場合には、人々は、“同じスタートライン”から出発した「競争」の「落伍者」というラベル貼りを行う。そして、〈底辺労働者〉たちの反差別の声を、「自業自得」として一蹴するのである。タテマエのレベルでも、差別が“合理化”されてしまう差別、それが「浮浪者」差別なのであり、ここに「浮浪者」と呼ばれる人たちの底知れぬ「苦境」がある（平川, 1986, p.40）。

「家族イデオロギー」もまた、資本主義社会を駆動するイデオロギーの1つである。「健全な」家族のありようが社会制度においても人々の意識においても前提とされているからこそ、「ネットカフェ生活者」のおかれた「苦境」もまた知覚されがたいのではないか。

な困難に対応できるようになる条件について慎重に探ることなのである。そして、家族福祉に過剰に依存した社会制度について絶え間なく批判的な検討を加えていくことである。その際には、現在様々な「社会的弱者」への対策に用いられている「自立」という言葉の中身について、深く検討されなければならないだろう。なぜならばここまで述べたように、現代社会が奨励している自立主義的生活規範を、「文字通り」に（「誰にも頼らず……する」「自分で……する」で全てが説明されるように）体现しているのが、実はネットカフェ等で生活している人々なのであり、彼／彼女らが現在送っている生活について、私たちの社会は決して「望ましい」とは考えない「はず」だからである。

参考文献

- 青木紀, 2003, 「貧困の世代的再生産の視点」青木編『現代日本の「見えない」貧困——生活保護受給母子世帯の現実』明石書店.
- 平川茂, 1986, 「『浮浪者』差別と『自業自得』観念」『解放社会学研究 1』明石書店, pp.75-82.
- 岩田正美, 2007, 『現代の貧困——ワーキングプア／ホームレス／生活保護』ちくま新書.
- 岩田正美, 2008, 「分断された人々をどう救うか」中央公論 4月号 (特集 いま隣にある貧困), pp.86-91.
- 耳塚寛明, 2001, 「高卒無業者層の漸増」矢島正美・耳塚寛明編著『変わる若者と職業世界——トランジションの社会学』学文社, pp.89-104.
- 耳塚寛明, 2002, 「誰が「フリーター」になるのか——社会階層的背景の検討」小杉礼子編『自由の代償／フリーター——現代若者の就業意識と行動』日本労働研究機構, pp.133-48.
- 妻木進吾, 2005, 「本当に不利な立場に置かれた若者たち」部落解放・人権研究所編『排除された若者たち』解放出版社, pp.24-65.
- 内田龍史, 2007 「大阪市内における若者の就業構造とその変遷」『大阪市「若年者の雇用実態に関する調査」報告書』, pp.11-46.
- 山田昌弘, 2005, 『迷走する家族 戦後家族モデルの形成と解体』有斐閣.
- 湯浅誠, 2007, 『貧困襲来』山吹書店.

第5章

不安定労働における時間・空間・生計の破綻

大阪市立大学大学院創造都市研究科
櫻田 和也

5.1 労働力の「再」商品化

働けどはたらけど生活できない——しんどい。そのような困難を「ワーキング・プア」の問題として広く世間に知らせたのは、2006年の夏に放映された「NHKスペシャル」だった*1。しかしその現実はおそらくこうして「社会問題」化するずっと前から、多くの人々の生活において実感されていたことではないだろうか。また、この問題の背景に非正規雇用の拡大があることはこれまでも指摘されてきたとおりであるが*2、「若年不安定就労・不安定住居者聞き取り調査」では、その困窮が住居の喪失と地続きの問題であることが確認されたということができる。事実、筆者も本調査を通じて一人ひとりの生活経験を聞かせてもらうなかで、生育歴や学歴、差別、福祉といった様々な観点から問題を複合的に把握しなければならぬことをあらためて学んだのであるが、その一方で単に「非正規」というだけではとらえきれない労働そのものの困難があることも指摘しておかねばならない。

本稿では「不安定就労・不安定住居者」のたどってきた労働生活の諸相を記述することから、その生活を基礎付けてきた物理的諸条件を分析したい。それをふまえて、いったん崩れかけた生計をたてなおすために働こうとすることでかえって生計の破綻を招きかねないという逆説的な事実——それは本調査協力者の多くの経験が示している、まぎれもない事実だ——に、多少なりとも理解可能な説明を試みるのが本稿の目的である。そのためまずはじめに、非正規雇用とはどのような雇用のことなのか、概括的に説明しておこう。

図式的に説明するなら、非正規雇用とは1. 直接（使用者による労働者の直接雇用）、2. 無期限（期間の定めのない常用雇用）、3. フルタイム（通常の労働時間による就労）という三条件を満たさない雇用形態のことである（伍賀, 2000）。具体的には3を満たさないパートタイム、2を満たさない各種の有期雇用などのことだ*3。戦後の職業安定法においては1の直接雇用は基本原則であって、使用者と労働者の間での

*1 NHK 総合テレビ（2006）。

*2 たとえば、伍賀（2005）など。

*3 とはいえ、世帯単位でジェンダー化されている扶養基準等の制約もあって、単身者であってもパートタイムの時間給単位で直用フルタイムの長時間・長期間労働者もいるという現実が「ワーキング・プア」問題の根本にあることも、これまで度々指摘されてきたとおりである（伍賀, 2005、江原, 2007 など）。これは社会保障や最低賃金制度の根幹にかかわる重大な問題であるが、ここではとくに間接雇用に注目して議論を進めたい。

直接の労働契約があらゆる雇用の前提とされており、間接雇用は明確に禁止されていた*4。サラリーマンをひとつの典型的モデルとして、男性の正規雇用労働者をいわば「世帯の稼ぎ手」とするような諸制度が社会的にも定着する背後で非正規雇用は「家計補助的」ないし港湾荷役や建設日雇が労働関係法において例外規定されたように、いずれにせよ周縁的なものとみなされてきたのである。そのような体制において「労務供給」のようにインフォーマルな間接雇用は「あってはならないもの」として外部化（違法化）あるいは隠蔽（黙認）されてきたのだ*5。

ところが、労働者派遣法（1985年）はこの直接雇用の大原則をくつがえし間接雇用を合法化するものだった。民法上の請負契約に基づく業務請負においては、たとえそれが建前であったとしても、労働者に対する指揮命令は雇用主でもある請負事業者（受注企業）が執り行うのであり、発注企業にその権限はない。これに対して派遣法は、雇用主責任を派遣元に課すことで、派遣先（発注企業）が労働者を指揮命令するという間接雇用を合法化したのである。これは労働力商品の「リース」であるとともに「雇用主責任代行サービス」（伍賀，2005）の商品化でもあった。こうして合法化された労働力の「再」商品化は、指揮と責任を分離する三者関係において雇用責任が十分に果たされるかどうかよく確認されないままに限定業務の拡大を経て原則自由化されるに至り、その後広く一般化して労働力商品の「不当廉売（ダンピング）」（中野，2006）ともいわれる状況を招いたのである。

本調査協力者の多くも、「ネットカフェ難民」*6として報道されたようなワンコール・ワーカー（登録型の日雇派遣）だけでなく、合法・違法、（偽装）請負・派遣の別を問わず様々な形で間接雇用を経験していた。次に、聞き取り事例を通じて間接雇用の実態がどのように経験されているのかを検討したい。

5.2 間接雇用における労働時間・労働日

まず、間接雇用ではたらく仕事にはどんなものがあるのだろうか。本調査できかれた労働現場としては、工場、物流センターや倉庫などが多く、作業内容としては製造ラインでの組み立てや検品、仕分けや運搬などが多くあげられた。典型的な例をあげると、次のようなものだ*7。

事例 32：求人誌を見て、大阪府北西部にある派遣会社 G に登録した。行き先は、大阪府北部にある「Y 倉庫」。食品倉庫で、伝票に基づいて商品を取ってくる〔ピッキング〕に従事していた。……朝 9 時～午後 5 時で、日給 5,775 円。経費等の引きはなかったが、交通費はなし。（40 代前半・男性）

事例 53：派遣登録は現在 1 社のみ。……事務所に直に行って……仕事を探してくる。仕事はピッキングや運送会社の仕分け。夜勤は 14 時から 23 時までの実勤 9 時間 6,500 円（源泉徴収済）で毎日ある。3 月から派遣をはじめたが仕事の量は波がある。（30 代後半・男性）

事例 68：派遣会社を通じて仕事をみつけ、大阪市内の工場で働いた。携帯電話ボディのバリとり（表面仕上げ）、5 人 1 組のグループ作業、朝 8 時半から夕方 5 時までの定時、ノルマに届かなかった時など残業が入り 19 時まで。手取り月 14～5 万円。（40 代後半・男性）

事例 81：派遣会社に初めて登録し、未経験者でもできる仕事ということで三重県の工場に行く。プ

*4 ただし労働組合が無料の労働者供給事業を行うことは例外的に認められていた（職業安定法 第 45 条）。

*5 従来、釜ヶ崎に寄せ集められた人々は、重層的な下請け構造の底でこうしていわば例外化された「日雇労務者」だった（原口，2003 など）。

*6 日本テレビ（2007）ほか。

*7 以下、聞き取りデータからの引用中、適宜〔書式〕で補足、「……」で中略。句読点や語尾の微調整は明示しない。

リンターの組み立ての作業で、従業員は数百人の大きな工場だった。住み込み代を引かれて、月給15万円くらいだった。(30代前半・男性)

事例 84：派遣（滋賀だけの小さな派遣会社）の仕事は、滋賀の工場で、サンヨーの製品の組み立てや検査の仕事であった。検査は、完成した製品にスイッチを入れ、ちゃんと動くかどうかを調べるというものだったが、仕事は「しんどかった」……住み込みで働き、給料は1日8,000円。(30代後半・男性)

事例 88：求人情報誌を見て、5～6回寮付の派遣に言った。ワンルームマンションや3LDKで3～4人のルームシェアが多い。よく覚えているのは、パワーショベルのキャタピラの製造。部品の仕分けをし、伝票に基いて個数を確認してその部署に持っていく仕事。……寮費などを引かれて手取り15万円ほど。健康保険証をもらったことはない。(20代前半・男性)

その他にも土日が多いイベント設営・撤収（事例 30、32、33、46、48、88）や季節変動の大きい引越（事例 1、30、33、53、88、95、98）などの臨時的な力仕事の他、警備*8、「冷凍うどんの製造及び袋入れ」（事例 65）をはじめ、胡麻（事例 68）、アイスクリーム（事例 75）やチョコレート（事例 1）、パンなどの飲食料品加工・製造工場も多くみられた*9。また、上にあげた事例からも分かるおと、非正規雇用だからといって必ずしも短時間労働だとは言えない点に注意しなければならない。むしろ夜勤を含む長時間労働に従事している場合も少なくないのである。ここで、その労働時間に注目してみたい。

事例 8：大阪に来る前、最後に働いていたのは食品・飲料加工工場への派遣で、愛知や岐阜の現場で働いた。時給1,000円程度、定時は8:30～17:30。寮費は月1万5千円程度引かれた。(30代後半・男性)

事例 17：トヨタ子会社の派遣〔請負か〕で自動車の修理工場で働きはじめた。……検査した車体を台車にのせてトラックまで「人力で押す」という重労働、また6時～16時、18時～翌朝4時という2シフトの一週間交代勤務……社会保険・厚生年金ナシ。(20代後半・男性)

事例 42：それから1年半、派遣で働く。……勤務形態は2交代制。契約当初はAM 8:00～PM 5:00の契約だったが、毎日残業が2.5時間ぐらいはあり、PM 8:00ごろまで働いていた。休憩も契約時には10時と3時に10分間、2回あると初めは言っていたが、入ってみると5分間休憩。10分のうち5分休憩、残りの5分でラインに戻る準備をする。結局5分の休憩しかない。昼も1時間といわれたが5分はラインに戻る時間とされた。(事例 42：40代前半・男性)

事例 67：〔自動車、半導体などの製造業など多数の間接雇用で働いた経験から〕派遣の形態は3交代制が多かった。5勤3交代制。1直AM 8:00～4:30、2直PM 4:30～0:00、3直0:00～AM 8:00、1直を4日続けて次2直…というような形態でかなりきつかった。(30代後半・男性)

事例 73：家電メーカーTのブラウン管をつくる工場。日払い期間雇用に1年半、これもアルバイト情報誌で見つけた。ここでも期間工用の寮を利用。寮費は取られず、日払いで7,000円程度もらっ

*8 警備業務は改正後も労働者派遣法で禁じられている業務のひとつであるが、聞き取りのなかで本人が「派遣されていた」と認識している場合もあったことから、実態としてはなんらかの間接雇用があるものと思われる。

*9 女性の場合には事務（事例 79）、住込の仲居（事例 7）などの例があった。おそらく派遣労働者に占める一般事務職の割合は相当大きいものと思われ、またジェンダー差も大きいものと思われるが、その分析は本稿の範囲をこえる。

ていた。残業はないが、2交代制（7:00～19:00・19:00～7:00・月～土：1週間毎の昼夜交代）で働いた（正社員は3交代制）。休憩は同じ部署に少し多い目に人が配属されて交代で1時間半毎に10分ぐらい休憩をとった。夜もこのペースで働く。この仕事を辞めたのは、……請負会社自体が工場から引き上げた（T社が契約解除したものと思われる）。このときの給与は……請負会社からもらっていた。（40代前半・男性）

事例95：2006年ごろまで「派遣」の仕事を続けた。「住み込み」の「派遣」仕事である。仕事の内容は工場内作業。電子部品を作ったり、車の部品を作ったり、マシンオペレーターをした。……勤務体系は12時間の2交代制か、3交代制。2交代制なら4勤2休でだいたい残業が2、3時間つく。3交代制なら残業ができることはほとんどない。……収入は勤務体系によって変わる。（30代後半・男性）

特に24時間稼働することによって「生産性」の向上をうたう製造工場等においては、このように長時間労働のシフト制交代勤務がとられており、こうした仕事も請負契約の解除や生産拠点の移転、生産量の変動などによって「いつまであるか」わからないものである。間接雇用で寮に住み込む仕事は、多くの場合に1ヶ月～6ヶ月の契約期間に基づくもので、「飯場」によく似た働き方だといえることができる。なかには20年間にわたり複数の派遣会社に登録して機械加工や製造ラインなどの仕事を続けてきて、記憶しているだけでも20ヶ所以上の現場をわたり歩いたという人もいた（事例69）。一方で、いわば「現金」仕事に相当する日雇の間接雇用（いわゆる「スポット派遣」）があり、こちらも1日あたりの労働時間は長時間である場合も多いのだが、週あたりの労働日数が安定しないという問題がある*10。

事例9：現在仕事は派遣で週3～4日働いている。同じ仕事をしていても完全日払い制の人は時給900円、週払いの人は1,000円になる。自分の場合は完全日払い制なので夜22時から翌朝10時まで、7,000～9,000円くらい。仕事に就けるかどうかは早い者勝ち。（30代前半・男性）

事例27：派遣会社を通じて週に1～3日働きに行っている。仕事は「パン屋」での「仕分けと出荷の仕事」で、夜8時半から朝8時半までの「夜勤」である。日給で7,000円～8,000円で、日数も多い週で3日、少ない週では1日しか仕事がないときもあり（だから月収は「10万円をはるかに下回る」）、決して安定した仕事ではない。（30代後半・男性）

事例48：派遣会社に昼間携帯電話で連絡すると、もしも仕事があれば、次の日の集合場所・時間など連絡がくる。派遣会社の方から仕事がくることは減多にない。職場は毎回違っており、倉庫内作業や荷物の仕分けが多い。……大阪や神戸で仕事をしている。神戸での仕事の方が若干多い。日給7,000円前後だが、交通費は自分持ち。例えば神戸まで行くと往復で1,500円くらいかかり、250円の保険と税金140円も引かれる。また、残業になるとその税金は倍になって280円引かれる。結局手元に残るのは5,000円程度。仕事も毎日あるとは限らず、「週3～4回あればいい方」（20代後半・男性）

事例90：日払いの派遣は大手ではないところで、週3回くらい。倉庫からパソコン関連の小さな部品をピッキングしてくる仕事をしていた。日給6,400円で交通費は自分持ち。（30代前半・男性）

*10 人によっては「飯場（契約）」や「現金仕事」と「派遣」を繰り返し経験している場合もある（事例6、71、73、80、81、86、88、89、95、98）が、現代の飯場と寮付き派遣の差異や共通性についてその実態はよく知られていないように思われる。本調査で感じられた傾向としては、自立支援センター調査の場合に飯場の経験者が多かったということは指摘できる。

事例 95：日払いの仕事は日給は 7～8,000 円。交通費はでも 500 円で、交通費は要るし、そこにネットカフェ代〔宿泊費〕とかを含めると、手許に残るのは「半分ぐらいになってしまう」。1 週間続けて仕事を就けたら、2 万円ぐらい貯まるかもしれないが、……週に 2、3 日ぐらいだった。(30 代後半・男性)

ときに短時間の仕事があったとしても「4 時間で 2～3 千円の仕事に交通費込みで行ってほしいと言われた」という人(事例 30)がいたように、決して労働者の希望というよりも使用者の都合でしかない。むしろ現実には、ここにあげたように、1 日あたり労働時間が「長く」かつ週あたりの日数が「少ない」という傾向がみられ、その結果として、労働強度が高い*11 のにもかかわらず賃金が生活に足りないという事例が多いのである。

本節でみてきた間接雇用の労働時間・労働日数の実態は、図式的な正規性の三条件に基づいて説明するならば、雇用責任と指揮命令が分離されたことから、労働者が労働「時間」と労働「期間」において、派遣先と派遣元双方の都合によって二重に支配されているということができよう。すなわち、パートタイムや有期契約によって実現されているのは労働者が「働きたいときに働きたいだけ働く」という自由ではなく、派遣先と派遣元の双方が労働者を「働かせたいときに働かせたいだけ働かせる」という事態になっているのである。指揮命令の現場を担う派遣先には雇用責任が問われず、雇用責任を担うべき派遣元は指揮命令に関知しないという〈分離〉の実現が、こうした事態を招く諸条件の形成に寄与したのではないだろうか。本節では間接労働における労務支配について、その時間性に注目してきたのであるが、この支配体制を深く理解するためには、その空間性にも注意しなければならない。次節では、調査協力者の地域移動と職住のあり方から、間接雇用の空間的な側面を検討する。

5.3 間接雇用における地域移動・職住分離

住み込みの間接雇用であってもほとんどの場合に数ヶ月単位の有期であるため、次々と仕事を探さねばならず、よほどの事情でもなければ*12、たいていの人が複数の派遣会社に登録している。なかには同時に 4 件(事例 3)や 5 件(事例 55)とかけもち登録している場合もあったが、多くの場合には「仕事が終わるたびに、求人誌で探していろいろな派遣会社を利用して仕事に就いた」(事例 75)とか「派遣期間が終了して、条件が悪かったり、今紹介できるところがないと言われたときには、別の派遣業者に登録して働いた」(事例 95)とかいう事情である。「今では何社に登録したか、何社で仕事をしたかもよくわからない」(事例 84)という人もいた。

こうして幾度も異なる派遣会社を利用して、少しでも割の良さそうな仕事を求めて働く労働者は、その仕事に応じて日本全国をわたり歩いている。派遣先毎に、地域移動を繰り返さねばならないのである。

事例 8：〔福岡県出身〕東京に出て以降……派遣を通じて、製造業のラインで働いて……今取り沙汰されている「偽装請負」の問題など色々トラブルを経験し、大阪に「流れ着いた」。……十年以上も寮生活を続けてきて、これまでに東京や北陸、愛知、岐阜などを転々としてきた。(30 代後半・男性)

*11 たとえば単に「ピッキング」といってもマイナス何十度にもなる冷凍庫のなかで食品の塊を運ぶ作業(事例 21、86)や重い金属製部品(事例 88)を運ぶ場合もあり、従来の港湾荷役にも等しい重労働である場合が少なくない。コンテナ化の浸透によって港湾機能のうち労働集約的な部分が物流拠点・配送センターに移転したとすることができるだろう。

*12 たとえば、家庭の事情により 18 歳未満の時分から働くため年齢を偽っていた場合があげられる(事例 88)。この人は身分証明に「うるさくない」一ヶ所だけに登録していた。

事例 9：派遣先はいろいろ、最初は山口（マツダ）、香川の宇多津（YKK）、岐阜の中津川（YKK）、埼玉県（日産）。6ヶ月契約で移動していく。……遠いところに行く場合は、新幹線のチケットと時刻表を渡されて入り口まで派遣の人が送ってくれるといったら言葉はいいけど、見張ってる。（30代前半・男性）

事例 67：沖縄ではじめて派遣の仕事をした。……同じ派遣会社で次の仕事を紹介してもらった。次は広島県。そこまでの移動費用は給与から引かれた。……いくつもの派遣会社に登録した。派遣では全国を転々としていたのであまりどこに行ったか覚えていない。覚えているのは沖縄・広島・福島・福井・名古屋ぐらいである。派遣で仕事をしているときは社会保険はなし。（30代後半・男性）

事例 75：[北海道出身、中卒後自動車整備工場を経て自衛隊、神奈川での運送会社を経て]北海道で求人誌をみて派遣の仕事を探し、北海道にある派遣会社の事務所に面接にいき、岡山での仕事が決まった（2001年頃か）。派遣先は岡山の三菱自動車で、車の組み立ての仕事であった……北海道から岡山までの移動費は派遣会社から支給されたが、契約途中でやめたら給与からその分は差し引かれると言われた。勤務形態は夜勤・昼勤の交替で日当1万円ぐらい。……岡山の仕事の後は岐阜、名古屋に行き自動車関係の派遣の仕事、その後静岡で製紙工場に勤め、一番最後（大阪に来る直前）の仕事は滋賀県の製菓会社の工場でのラインの仕事で、アイスクリームなどをつくっていた。（30代後半・男性）

事例 95：[北海道出身、千葉県でのパン工場を経て]「派遣」の仕事に就いた。時期は1997年のバブルがはじけた不況期であった。仕事は有料の求人雑誌を使って探した。2006年ごろまで「派遣」の仕事が続いた。「住み込み」の「派遣」仕事である。仕事の内容は工場内作業。電子部品を作ったり、車の部品を作ったり、マシンオペレーターをした。……派遣先は転々とした。埼玉、栃木、群馬、長野、山梨、愛知、1回だけ滋賀県に行った。派遣期間は短いところでは3ヶ月。だいたい半年～1、2年。派遣業者もいくつか変わった。（30代後半・男性）

この他にも大阪—新潟—岐阜—滋賀と移動した例（事例 68）や福岡—東京—名古屋—大阪と来た例（事例 81）もあるように、数ヶ所程度の移動は珍しいことではない。こうした移動は、住居を失うこと、ないし持たないことを前提とした労働というべきではないだろうか。また、寮がある場合には「寮と工場間は毎日バスによる送り迎えがされていた」（事例 75）というように職住の近接が図られている例もあるが、必ずしもそんな常識的に理解できる話ばかりではない。

事例 89：住み込みでT貨物に契約で入ったが、寮が高槻で職場も高槻でという話だったのが、1万円みの給与のプラスで、福井県の若狭町のほうに行かされた。寮から片道で1時間半、往復で3時間もかかるので、通勤にしんどくなり、1ヶ月もたたないで辞めた。（30代前半・男性）

このように過剰に長い通勤時間や「現在のシフトは朝10時から夜22時まで。それが2週間続いて日曜日休みでシフトが交替になり、夜の22時から翌朝10時のシフトが2週間続く」（事例 54）というような労働時間の不規則性、週に数日、しかも毎日勤務先が変わるような労働日の不規則性、また現場がその都度毎にかかわることなどの要因が複合的に重なることで、家賃を支払っている住居を維持したままでもいながらも、毎晩そこに落ちていて帰ることのこなわない人もいた。

事例 21：12 月末位から家には帰らず、ネットカフェでの生活になった。理由は、奈良・京都方面の仕事が増えて家まで帰るのがしんどい。今までに、大阪府北東部のヤマト運輸、松下の電池工場、おもちゃの工場、大阪市内の冷凍倉庫などで仕事をしたことがあり、家から近い現場の場合は、家から通っていた（20 代後半・男性）

事例 78：大阪の事務所から滋賀の現場に行き、帰りに途中にある京都のカラオケボックスに寄り、そこで寝て、翌日大阪の事務所に行くというようなことをしていた。毎日……朝 1 番に事務所に行き、前日の賃金をもらいその日の指示を受けるという形態で仕事をこなしていた。（30 代後半・男性）

資本の実現しようとする時空間的フレキシビリティ（24 時間いつでも必要なものを必要なだけ必要なところに！）のために、こうした勤務地や住居などの空間的な不規則さが労働時間や労働日といった時間的不安定さに輪をかけて重なることで、職住も分断され、人間的な慣習的生活は打ち砕かれているというべきだろうか。はじめに説明した非正規雇用の図式的な三条件は、時間の不安定性についてはある程度説明することができたが、空間的な側面を十分にとらえることはできなかった。しかし、実際の労働においては住居と職場の距離が毎日の循環的な労働力再生産過程——生活時間——にも重大な影響を及ぼすのであり、また、生産拠点の移転による失業や、派遣先と派遣元の都合次第で労働現場間の長距離移動を余儀なくされることによって、中・長期的な生活計画の根拠となる時間的規則性にも幾度も繰り返しくさびが打ち込まれるのである。

このようにして、労働者の生活構造そのものが時・空間の立体的な制約の下で不安定労働で働くためにもろく壊れやすい条件にさらされているのだ。そして、こうした物理的な諸条件が、労働そのものの矛盾をあらわにして、一人ひとりの生計の破綻に帰結することになる。

5.4 労働による生計の破綻

住居喪失に至る過程において、働くこと[・][・][・]によって生計が破綻するという矛盾があった。ある 30 代前半の男性は、飯場で毎日働いているのにもかかわらず、服代や寮代などで「2 万円の赤字」になり、しまいには「交通費だけ貸してやる」と言われて飯場から出てきた（事例 1）。「貸してやる」、本来であれば事業主の負担すべき諸経費を労働者一人ひとりに責任転嫁する論理である。その後かれは派遣の仕事をするのだが、登録する人が多くなり、仕事がまわってこなくなりはじめたのだという。

事例 1：派遣会社に仕事の申込をするのは前日の午後 3～6 時、その間こちらから電話をかけて仕事を紹介してもらおう。できれば毎日仕事があるところを紹介してほしいと会社に言うと人間関係が大変な職場にまわされたりして嫌がらせをされたこともある。人材派遣会社から紹介された会社から靴・手袋・作業着などが必要ということで 6,000 円購入したが 1 日だけしか仕事なかったこともあった。門真の工場に仕事にいったとき、現場まで交通手段がないのでタクシーを使ったら交通費が 1 万円を超えたこともあった。このときは交通費の半分を返してもらったが、ひどいときなど現場まで行って仕事がキャンセルになったので別の現場に行つてほしいといわれ、仕事もせず交通費だけ自己負担することもあった。（30 代前半・男性）

「派遣会社の方から仕事がくることは滅多にない」（事例 48）「仕事は待ってても来ない」（事例 55）のであり、「仕事に就けるかどうかは早い者勝ち。つまり早く電話した人から決まっていく」（事例 9）。派遣

会社に電話をして「もしも仕事があれば、次の日の集合場所・時間など連絡がくる」（事例 48）ということであり、完全に買い手市場のようだ。その結果、不当にも労働者が「諸経費」を負担させられている。

不安定から逃れる手段であるはずの仕事の可能性を手に入れるために、仕事につくための費用を「持ち出し」せざるをえず「赤字」を背負うはめになり、生計は破綻してますます窮乏化するのである。このように不当な論理に抵抗しない／できないのは、そうすることで状況が改善しないばかりか、むしろ被害の拡大することを予期させられているからだ。交通費の自己負担に抗議したならば、おそらくは二度と声がかからないだろう。仕事の可能性そのものを奪われるということだ。

ひとたび住居を喪失することになると、住民票を基盤とする行政サービスを受けるのにも求職活動の上でも様々な困難に直面させられ、そこから抜け出すことは容易ではない。ある 40 代後半の男性（事例 68）においては、20 年勤めた住み込みの仕事を辞めたことから住居を喪失するに至り、派遣で工場をまわらされたあげく 1 円も残らないという。

事例 68：ミナミにある派遣会社を通じて岐阜県の黒板工場で木枠に釘を打つ仕事をしたが、給料は残らなかった。時給 1000 円で 1 日 6～7 時間労働なのだがいろいろ「経費」が引かれる。一週間でやめた。つぎに岐阜で胡麻をとかして（油？）缶でうけて出荷する仕事があったが、作業が遅くやり直しが多いということで一日で首になった。さらに紹介を受けて滋賀県の住宅建材を切断する工場で働いた。寮から車で工場までの送迎があった。2 人 1 組での作業、黙ってやめた。この 3 つの仕事で 3 枚の明細を見せられたが、「これでもうち赤字ですわ」と言われ、1 円も振り込まなかった（40 代後半・男性）

こうして不安定労働・住居喪失と自立支援センターを往還することになった。しかし、働いているのにもかかわらず 1 円も残らないというのはどういうことだろうか？ 先に広島までの移動費用が給与から引かれた 30 代後半の男性（事例 67）を紹介したが、そこではじめて「ピンはね」されていることに気づいたという。

事例 67：そこでは個室完備といわれたが行ってみると 3LDK に 3 人が入居。扉を閉めれば個室になると言われた。給与は寮費やふとん代などを引かれ手元には 7 万 8 千円ぐらいしか残らなかった。職場で全く同じ仕事をしている他の人（正社員）にどれくらい給与をもらっているかきくと、全く違った。その人はだいたい 1,100 円/時間であったが自分は 700 円/時間ぐらいであった。そこで社員に「派遣はピンはねされてるんや」と教えてもらった。（30 代後半・男性）

それでもかれは、先に紹介したとおり「別の地域にうつり、自動車製造の仕事に派遣で働いて、いくつもの派遣会社に登録し「全国を転々と」したのだった。他に仕事がないのである。そうして派遣を続けるなかで、文字通り「1 円も残らない」経験を繰り返していた。

事例 67：派遣で働きだしてからの 5 年間は、コンビニにあるフリーペーパーを見て住み込みでできる派遣の求人を見つけ電話をし、派遣会社に迎えに来てもらう。そして登録をし、派遣先に連れて行かれ住み込みで働く。しかし、ほとんど仕事の内容が登録時に聞いたときとちがったり、寮費（6 万円）やふとん代などを差し引かれ手元にお金が残らず生活するにもぎりぎりだった。派遣会社は足元をみて、ピンハネばかりだ。……これまで派遣では月給制だったので途中で逃げた場合、振り込まれない場合もあった。また、月給の金額と寮費、ふとんや他レンタル代などの総計が全く同じ金額にされ振り込まれないときもあった。（30 代後半・男性）

本当に1円も残らないのでは「ぎりぎり」どころか、もはや生活できないというべきである。しかしこれは、決して特殊な少数例ではない。働くことによって赤字になるという経験は多くの証言で語られたことだった。

事例7：派遣会社からコピー機のドラムの検品の仕事を住み込みでしていたが、寮費が6万円＋光熱費でお金がほとんどたまらないのでやめた。(30代後半・女性)

事例84：基本的に住み込みの仕事をしていたため、給料から寮費（場所によっては食費）がひかれることになるが、もっともひどかったのは、派遣会社Xであった。2DKの部屋に2人で住んでいたが、寮費が1人10万円だったそうである。これは部屋代だけで、食費、光熱費などはさらに引かれていったそうである。給料が手元に「残ればいい方」ということで、働いても借金を抱えることになり、その借金は残業などの「体で返していた」そうである。(30代後半・男性)

「赤字」＝不当廉売買の実態は、生きて行く上でぎりぎりの「トントン」という意味ですらなく、文字通りに身を削ることを強られる事態になっているようだ^{*13}。かつて「カッコ良い仕事に就くために、カネをはらって仕事をファッションとして買うような、倒錯した時代がくるのではないか」という趣旨の冗談があったが、そんな呑気な話ではなく労働力商品は買ったたかれ、価格競争にさらされている。どうせうまくいかないことがわかっている、なお仕事の「可能性」を求めてどんなことでもしようとするのは、ピエール・ブルデュー（1977=1993）の指摘した「失業者」のハビトゥスである。

日常の時間は、仕事を探すとことと、臨時の仕事をするに当てられるが、週や月は、働き口のあるかないかの偶然により、就業日と失業日とに分かたれる。こういったことが、生活の不確かさを示している。規則的な時間表や、きまった職場というものはない。こういった不連続性とも言える事態は、時間も空間も同じだ。仕事を探すことは、偶然によって動かされる生活のつねなのだ。そしてまた、探すことに失敗することも、日常のつねである。(ブルデュー, 1977=1993:116)

ブルデューの場合には、アルジェリアの下層プロレタリアを支配していた「現状に対するあきらめ」や「悲観主義的感情」が形成される唯物論的根拠を説明したのであるが、現代日本社会において採算があわないにもかかわらず働こうとする人々の姿勢は、愚直なまでに労働を求めているというべきだろう。つまり、しばしば誤解されているのは反対に、人は働かないから住居を喪失する（ホームレスになる）のではなく、いかなる条件であっても、ただ働くことによってのみ生き延びようとするのである。どこまでも個人的な努力として。

5.5 個人化される失業

求職活動にはげみ仕事を見つける以外に失業者の存在を認めない社会において、たとい身を文字通り削ることになるとしても、ただ「働く」という命題だけが失業者一人ひとりのうえに作動する。そのことに

^{*13} 必ずしも間接雇用の場合だけではない。たとえば「住み込み」で新聞の勧誘の仕事をしていた30代後半の男性（事例6）は「基本給なし、歩合＋賞金のみ」という条件で契約をとる仕事をしていた。もちろん簡単に契約がとれるわけではないので、新聞をとってもらうために「1万円置いていく」、つまり「一万円の赤字を覚悟して賞金の獲得を目的にする」わけだ。そして最終的に「(月5万円の)寮費分を稼げず、このままでは赤字になるというところまできたので辞めた」。また別の30代前半の男性（事例81）は、ハローワークで見つけたという「独立運送」の仕事をはじめるときに「300万の軽トラックを買われ」たが「仕事を回してもらえるのははじめだけで、借金だけが残った」という。こうした事例は、もはや働かせるつもりさえなく、むしろ一人ひとりの「信用資本」をはぎ取ることを目的としているかのようだ。

より、いかに不当で劣悪な仕事であっても受け入れざるをえない就労圧力下におかれ、労働力商品は不当に廉買される。そこで不当性を申し立てたとしても、再び存在を否定されるだけなのだ。

事例 84：あまりにも待遇が求人情報と異なっていたので会社に文句を言ったら、「そんなもん信じるヤツがどこにおる！全部嘘に決まってるやろ！」と言われたので、今度は職安にそれを言いに行くと、「そんなこと言われてもこちらでは（内情までは）把握できない。自己責任ですから」と言われ、それではということで労働基準局にも相談に行くと、「そんなこと言われても、いちいちそんなこと言ったらこの世から仕事はなくなる」と言われた。（30代後半・男性）

このような仕打ちをうけて失業するような経験は何度もくりかえし数多くの人に共有されていることだが、その度毎の失業の理由は多様である。そして失業給付の受給に係る場合には形式的に「自己都合」であるか非自発的であるかが分別され、統計的にも記録されているが、そこで自己都合とされる場合であっても、客観的には理不尽に条件づけられている場合が少なくない。

ある 20 代後半の男性（事例 33）は高校卒業後、コンピュータ関係の専門学校を出たものの卒業時に決まった内定先の評判があまりにも悪かったために辞退して、派遣労働やアルバイトを繰り返してきた。ハローワークも何度か利用したものの「あそこは倍率が高い」ため仕事が見つからず、たいてい求人情報誌で仕事を見つけたという。少しでも割の良い仕事を求めて見つけたなかには、かれにとって耐えがたい業務があった。

事例 35：ブロードバンド・モデムの無料配布キャンペーン、派遣会社 G の登録型派遣（日払い）、「悪徳系」のテレアポ（週払い、電話機かインターフォンの法人向けの販売、タウンページの片っ端から電話をかけた）など [いろいろな仕事をした]。その頃（今から 4～5 年前）「やったらあかん」ような営業もした。求人情報誌には「誰でもできる！」とか「月収 30 万」などと聞こえの良いことが書いてあったのだが、配管の汚物清掃やシロアリ駆除などの、「強引」な営業だったらしい。「完全出来高制」だったが「結構成績は良かった」、しかし罪悪感に苛まれ 2 週間くらいで辞めた。（20 代後半・男性）

「やったらあかん」ような営業ノウハウというのは、いわゆる「悪徳」リフォーム業者と同様の手口だった。「よかったら無料点検させていただきます」などと言いながら、汚れていないところを汚すなどして、清掃を売り込むのである。この仕事を続けなかったかれは、次に派遣の仕事で自動車シート工場へ行った。その現場ではトヨタやダイハツなど色々なメーカーのシートを作っていたのだが、納得のいかないことがあって住居の喪失に至る。

事例 35：そこで「気にいらんことがあった」。「ひと月前に入った奴と給料が 5～6 万もちがった」という。仕事が少し異なるとはいえ、同じ現場でこのような差があることに「やってられん」と思い、辞めた。寮住まいだったので、そこを出るはめになった。辞めた翌月支払われるはずだった給料も「結局入ってなかった」。（20 代後半・男性）

寮住まいだったために、失業と給料の不払いが住居の喪失に直結するのである。強く自立を求められる条件の下で、自分が「悪徳」を働くか、あるいは悪徳（不当な差別待遇や給与の不払い）を黙認ないし我慢する以外に生き延びることのできないジレンマがここにある。このような二者択一は強いられた選択と

いうべきであり、それがたしかに選択であったとしても、決して自発的だとはいえないだろう*14。また、選択肢のないなか不当な条件の下で働き続けているうち事故にみまわれ、それを原因として失業することもある。

「交通費だけ貸してやる」といわれて「ケタおち飯場」を抜け出し、派遣の仕事が続けるなかで1円にもならない経験を繰り返した30代前半の男性(事例1)は、終に家賃を払えなくなり住居を喪失してネットカフェやドヤで生活しながらも仕事を続けた。そして最後に働いた製菓工場で熱いチョコレートを足にかけてしまい、大火傷を負って、次の日から仕事に行けなくなった。また、ある40代前半の男性(事例30)は、飯場で指を骨折したが労災にならず治療費も一切出してもらえず、役所に相談に行ったところ生活保護の医療単給を支給され飯場から1ヶ月通院したのち大阪に戻ったが仕事がなく、河川敷で野宿した。また別な20代後半の男性(事例47)は、三菱の仕事で派遣されている勤務中にケガをしたときに治療代はすべて会社がもってくれたが労災の話はなく、手を動かさないのでは仕事ができないから辞めるようにと言われたなどの例があった。どの場合にもケガの労災責任を不当にも押し付けられたうえに、しかも結果的に失業させられたのだ。

時空間的な諸条件の上に生計の破綻が重なり、こうして労災のケガを理不尽にも自分一人で背負い込まされたあげく、それでも失業者はひとり仕事の可能性を求めて働きつづけるのである。

5.6 潜在的失業の拡大

ここまで、とくに日雇いや寮住まいの派遣労働といった間接雇用を中心に不安定労働の実態をみてきた。そこでの生活は労働時間や労働日、地域移動や職住分離といった時間的・空間的な諸条件に規定されており、そのうえ不当な諸経費を負担させられることによって「働くことによる生計の破綻」という矛盾にさらされるということがわかった。さらにその困難をあくまでも個人的な問題として解決するために次の仕事を探し、それがいかに劣悪なものであっても人々は働きつづけることを選ばされているということを説明してきた。最後に、この事態の背後には個人的な努力ではどうにもならない構造的な社会問題があることを確認しておきたい。

不安定労働の多様な形態は「流動化」「自由化」などの名目の下で順次制度化されてきた。しかし誰の自由のことだろうか？ 西欧社会においては1970年代から、国際競争の激化、生産拠点の海外移転、産業構造の転換(サービス産業の拡大)といった経済的変動のなかで、失業が増大し、雇用が不安定化し、「経済」の挫折とともに「社会」が不安定化するという事態が生じたという(水町, 2001)。この不安定化(*précarisation*)は、失業と不安定雇用の増大として現れ、長期化・固定化する状況に至った。賃労働者の「完全雇用」と福祉政策を両軸とする社会的国家が前提としてきた正規雇用の賃労働モデルが崩れる「社会性の危機」(カステル, 1995=2008)にこたえるようにして、各種の非正規雇用は合法化・制度化されてきたのである。

不安定労働という言葉は、この時代に西欧社会で定着した概念だった。不安定労働(*travail précaire*)は、当時既に「専門研究者はもとより政策担当者、労働組合役員などによって広く使用」されていたという(三富, 1986:1)。これは、単に非正規雇用の諸形態が合法化されたというだけではなく、研究・政策・運動などの様々な立場による諸実践を通じて、社会的に制度化されてきたということである。この概念の内包する労働形態も幅広く、派遣労働をはじめとする非正規労働、国および自治体の臨時職員、パートタ

*14 こうした認知的不協和に耐えることはほとんど不可能というべきであり、客観的にも福祉を活用すべき状態の精神疾患のうたがわれるような場合にも、必ずその根底には社会的条件の不条理があるということを忘れてはならない。

イム、家内労働、および下請労働者などが含まれていた。

日本社会においても 1985 年の労働者派遣法以来、90 年代にかけて労働市場は急速に「流動化」した。まず、労働者派遣と併行して職業紹介事業が自由化され、1947 年以来職業安定法により原則禁止とされてきた有料の職業紹介事業が限定職種において許可され、その限定職種の拡大を経て、1997 年の職業安定法施行規則改正によって終に原則自由化に反転、1999 年には労働者派遣法も原則自由化の方向に改正されたのである。その後も度重なる施行規則等の改正によって、民間の有料職業紹介も登録制の労働者派遣事業も急速に拡大し、実態としても派遣労働が定着したのだった。

他方では裁量労働制の拡大、有期雇用契約の上限延長、さらには「男女共同参画」の理念を援用ないし濫用する形での女子保護規定の撤廃など、労働を巡る全面的な規制緩和が断行されてきた。このような政治的・経済的過程を通じて、本来の「労働者保護」法制は順次弱体化、労働組合の組織率も著しく低下した。こうして「労働力商品」たる人間の価値も一貫して低下してきたということがいえる。それでも、「ふつうの商品であれば在庫保有や生産調整ができるのだが、人間を冷凍保存することはできない」（中野, 2006）という唯物論的な事実にはなにも変わりはない。そしてまた、本稿で分析してきたような人間の生活構造に課せられた時間的・空間的な物理的諸条件が重くのしかかる。労働時間や労働日の問題はいまこそ社会的調停の求められる問題であり、また地域移動や職住の立地という空間的条件も、以前にも増して問題となっているのである。

こうした不安定労働の制度化の裏側では、失業対策事業の「効果」が否定的に問われるようになり、80 年代に失業対策制度調査研究会が「基本的には終息する段階にある」という報告を行い、失業対策の根拠法となってきた緊急失業対策法は 1995 年に廃止された。日本政府は「社会的国家」たる大きな理由のひとつだったはずの失業対策をまるごと放棄してしまったのだろうか。失業はもはや問題ではなくなったのだろうか？

「非自発的」な非正規雇用の拡大は失業者を吸収して統計上失業率を低下させる、つまり労働者保護の原則に基づいて禁止されていた民間職業紹介や派遣労働を順次合法化することは、論理的には数字の上で失業率を下げる要因となるはずだった。ところが、完全失業率は 1990 年代後半に全国で 3 % を超え 2002 年には 5 % を突破したのである。長期間にわたり 2 % 程度にとどまっていた時代とは、明らかに水準が異なる。その背景で雇用者率（労働力人口中に占める雇用者数の割合）は長期的に上昇しており、1965 年に 60 % だった雇用者率は 1980 年に 70 %、1990 年に 75 % を突破、2003 年には 80 % に達してなお一貫して上昇し続けている（労働力調査）。こうした統計数値の意味するのは、就業者の 8 割以上がなんらかの形で雇用されており（そのうち 1/3、女性に限るとその 1/2 以上が非正規）、その割合がますます増大すると同時に失業率が高どまりしている、すなわち現代日本社会は戦後かつてない大失業時代を迎えているということだ。だが、数字だけの問題ではない。

その数字の背後には、本稿で考察してきたように、働くことによって生計が破綻するような、そしてどこまでも個人的に働こうとし続けるような一人ひとりの生活——マイクロな構造——が存在するのである。このことをつぶさに観察するならば「失業者の流動化が不安定労働者として誘導され」不安定労働に従事することは失業者にとっての「唯一の『選択』結果」（三富, 1986:20）になっており、失業と不安定労働の期間がしばしば連続し、一人ひとりの生活においては断続的な失業として経験されているということだ。またマクロには間接労働が「失業を基礎にして発展した」ため「ひとたび拡大再生産の経済的・法的な支柱をあたえられるや、ここでは失業を拡大された規模において再生産する要因に転化する」（三富, 1986:67）と指摘されていたとおりなのである。こうした条件の下、多かれ少なかれ諸制度のはざまにおかれて、絶えざる失業の日常生活を営むのにもかかわらず失業給付を受けることすらままならないような

「プレカリアート」が階級的存在として現れている（櫻田, 2008）。不可視の住居喪失層（ホームレス）の背後には、潜在的失業の拡大があるのだ。

こうしてみると、本調査は一貫して「不安定労働 = 断続的失業」のミクロな構造性を確認する作業であったといえるだろう。そして、失業生活を営む人々が「どのようなことでもしようとして」（ブルデュー, 1977=1993:123）生き延びようとする、不安定な生存条件の現実を記録する作業の積み重ねであった。すなわち本調査の意味は、次のような経済的原則の科学的認識に努めること、このことに他ならない。

労働の生産性が一般的に高くなれば社会全体としてより大量の生産手段をより少量の人間力によって運転しうる、という経済的原則は、資本主義的生産様式のもとでは、労働の生産性が高くなればなるほど、労働者が自分自身の雇用手段に加える圧力は大きくなり、資本の価値増殖のために労働力を売るといふ彼らの生存条件はますます不安定になる、ということに表される。（岡崎, 1976:138）

参考文献

- ピエール・ブルデュー, 原山哲訳, 1977=1993, 『資本主義のハビトゥス——アルジェリアの矛盾』藤原書店.
ロベール・カステル, 前川真行訳, 1995=2008 予定, 『社会問題の変容』.
江原由美子, 2007, 「労働破壊の原点としての『主婦のパート労働』」『現代の理論』明石書店, 13:56-63.
伍賀一道, 2000, 「非正規雇用」『大原社会問題研究所雑誌』法政大学大原社会問題研究所, 501:13-29
伍賀一道, 2005, 「雇用と働き方から見たワーキング・プア」『ポリテイク』旬報社, 10:46-65.
原口剛, 2003, 「『寄せ場』の生産過程における場所の構築と制度的実践——大阪・「釜ヶ崎」を事例として」『人文地理』55-2: 17-27.
厚生労働省, 1953-2007, 「労働力調査」.
三富紀敬, 1986, 『フランスの不安定労働改革』ミネルヴァ書房.
水町勇一郎, 2001, 『労働社会の変容と再生——フランス労働法制の歴史と理論』有斐閣.
中野麻美, 2006, 『労働ダンピング——雇用の多様化の果てに』岩波書店.
NHK 総合テレビ, 2006/7/23, 「ワーキングプア——働いても働いても豊かになれない」『NHK スペシャル』.
日本テレビ, 2007/1/28, 「ネットカフェ難民——漂流する貧困者たち」『NNN ドキュメント』.
岡崎次郎, 1976, 『資本論入門』大月書店.
櫻田和也, 2008, 「プレカリアート——現代のプロレタリア階級」『共生社会研究』3: 26-37.

第6章

不安定就労・不安定住居者と「障害」をめぐる政治

大阪市立大学大学院文学研究科
佐々木 洋子

6.1 不安定就労・不安定住居者にみる「障害」

近年、就労の問題と「障害」との関わりに関心が向けられつつある。もちろん、障害概念の歴史をひもとけば、障害と社会・経済的要因とは密接に関連しているのではあるが、ここでいう両者の関わりとは、たとえば障害学が指摘するそれではない。

ホームレスと障害——とりわけ知的な障害を抱えつつ、路上や更生施設で生きる人びとの存在——が、注目を集めている。この引き金の一つとなった書籍に、山本譲司による『獄窓記』（2003, ポプラ社）や『累犯障害者』（2006, 新潮社）があると思われる。これらの書籍で描き出されたのは、路上や刑務所で「暮らす」知的な障害を抱える人びとの存在であり、彼／彼女らの生きづらさ、行き場のなさや孤独、そして彼／彼女らをサポートする福祉システムの整備が不十分な日本社会の現状である。山本は、刑務所の福祉施設化すら構想している（山本, 2006: 204-235）。

また、2008年3月14日の朝日新聞（九州版）では、北九州市のホームレス自立支援センターによる、知的な障害が疑われる入所者に対して知的障害手帳（療育手帳）の取得手続きをとるという支援のあり方が紹介されている。記事によると、2006年と2007年度中に退所した入所者のうち、3割以上となる54名が、実際に療育手帳を取得しており、同センターと連携するNPO法人の会員は、センター入所者の4割以上が手帳を取得できる人である、との実感を持つという*1。

たしかに、「見過ごされやすい」軽度の知的な障害をもつ人びとに対し、福祉的なサポート制度を構築することは、セーフティネットが十分に整っていない日本社会において必要かつ急務かもしれない。本調査においても、ネットカフェ等での生活を余儀なくされていた人びとのなかに、知的な障害を抱えている人びと、もしくは抱えているのではないかと感じられる人びとの存在が少なからず確認された。一方でこうした取り上げ方がなされることで、ホームレスと「障害」があまりにも安直かつ強固に結びつけられてしまいはしないだろうか。本章では、調査に携わった経験をふまえ、不安定就労・不安定住居の当事者や支援者とはやや異なる視点から、不安定就労・不安定住居といった不安定な生活と「障害」の問題、そしてそれに関わる医学の政治性について若干の考察を試みたい*2。

*1 資料1、資料2を参照。

*2 これに先立ち、調査上の制約についてあらかじめ述べておきたい。まず、該当するケース数の問題がある。本調査は、全体でも100ケースであり、そのうち本章が対象とするような事例については、ケース数そのものは非常に限られたものとなった。

6.2 「障害」の可視化と「問題」の所在

2007年6月から12月にかけて、NPO 釜ヶ崎支援機構が主体となって「若年不安定就労・不安定住居者聞き取り調査」が行われた。ネットカフェ等店舗での前半調査が進められるなかで、調査者の多くが、対象者——究極の貧困状態での生活を余儀なくされている人びと——の中に、もしかすると、軽度の知的な障害を抱えているのではないか、もしくはその「ボーダーライン」ではないか、と思われる人が少なからず存在していることに気が始めた。もちろん調査の際に、医療専門家による「医学的な判定」が行われたわけではなく、これらは、あくまでも調査者らの主観に基づくものとなる*3。また、少なからずとは言うものの、ケース全体から見れば、それらはわずか数ケースであり、ことさらに取り上げるほどではないと思われるかもしれない。しかし、これらのケースは、おそらく現代社会に潜む大きな問題の氷山の一角に過ぎないのではないだろうか。はじめに紹介した山本による「告発」などもまた、その一つとして捉えられる。

不安定就労・不安定住居者と「障害」をめぐる「問題」には、実に多様な形態が見られる。それらは、当事者の置かれた状況や心身の状態、社会制度、さらに支援上の戦略などと複雑に絡み合って形成されている。

その一つの形態として、これまでの生活史においてすでに療育手帳などの障害者手帳を持ち、そのことを調査対象者自身も認識しながらネットカフェ等での生活を余儀なくされているケースがある。彼/彼女らは、いわば、社会的配慮が必要であると公的に認定されながらも、実際には十分な支援や配慮を受けることができている*4。手帳を用いるにしても、せいぜい必要最低限の薬を入手するためか、その必要もない場合には「障害者手帳は実家に置いてあります」というケースすらあった（事例 44）。彼/彼女らにとって「障害者手帳」や「社会的・行政的支援」とは果たして何なのであろうか。

また、障害者手帳は持っていない（または持っていることを本人は知らない・わからない場合も含む）が、会話やコミュニケーションをとるなかで、もしかしたら手帳を取得できるのではないかとと思われる人びとのケースがある。たとえば、冒頭でも紹介した北九州のNPOでは、ホームレス自立支援の一環として、知的障害が疑われる人に対し、療育手帳の取得を手伝うという支援が行われているが、こうした取り組みの対象となるのが、おそらく彼/彼女らであると思われる。新聞記事では、このような取り組みは、

さらに、聞き取りの過程で生じる問題もある。療育手帳の有無については、まずその事実の聞き取りが難しい。たとえ手帳を取得していたとしても、そのことが本人に告げられているかどうか、そのことを把握しているか否かは別問題である。また、話題がデリケートなものとなるため、回答をパスしたが対象者がいても不思議ではないし、話題を切り出す側の調査者も少なからずためらいを持つため、どこまで「事実」を確認出来るかは調査者やその場の状況に大きく依存している。

本調査を行った調査者の中には、NPO 釜ヶ崎の福祉部門のスタッフや施設職員など、日常業務のなかで支援を行うにあたり、療育手帳の取得が可能かどうかの検討・判断を常に迫られる、専門的な知識をもつ者もいた。その場合は、「その後の支援において療育手帳の取得を検討」などと明記されている一方で、多くの調査者は、そうした専門的知識を持っておらず、調査の過程で「もしかすると、何らかの障害を抱えているのでは？」と思ったとしても、不確実な（しかも偏見と紙一重の）事柄をあからさまに生活誌に記入することにためらいがあったことも想像される。

こうした状況から、本調査が不安定就労・不安定住居者における障害の問題を把握するのに必ずしも十分であったとはいえないかもしれない。しかしながら、そのような調査においてさえ、この問題について多くの調査者が言及せざるをえなくなるほどに現状は切実であると感じられたことは記しておくべきだろう。

*3 言うまでもないことであるが、調査者の多くは、釜ヶ崎やそれに連なる失業・就業問題に対する少なからぬ関心と基礎的な知識を持っており、差別的な関心からいたずらにこのようなまなざしを向けたわけではない。より重要なことは、おそらく、この時調査者らが感じたある種の「違和感」は、一般社会においては、よりはっきりと感じられてしまうものではないか、ということである。

*4 もちろん、個々人の状態や、認定状況すなわち手帳の等級によって受けられるサポートは異なっている。そもそも制度上の支援がほとんど得られないという可能性もあるだろう。

他の自立支援センターを有する自治体ではほとんどなされていない、画期的なものとして紹介されている*5。そして、岩田正美が記事中で「ホームレス支援に障害者支援の視点が含まれていないなか、療育手帳取得を勧める北九州市の取り組みは画期的だ。ホームレスに対し『就労自立』を強調する前に、ホームレスになる多様な背景への認識を深める必要がある」とコメントしているように、「就労自立」のみが強調されがちな現状において、「ホームレスになる多様な背景」の認識を深めるための一つのきっかけとなるかもしれない。

だが、果たしてこうした取り上げ方は、本当に「ホームレスになる多様な背景」への認識を深めるのに役立つのであろうか。かえってその現実を覆い隠してしまう恐れはないだろうか。現代社会において、医学的な解釈枠組みは、人びとにもっとも受け入れられやすい科学的知識・実践として流通している。人びとを不安定就労やホームレス状態へと向かわせる要因の一つにすぎないはずの「障害」が、あたかも主要因であるかのように思わせてしまう危険性がありはしないだろうか。

同記事によると、北九州市の取り組みの結果、手帳を取得した人の年齢は50～60代が8割以上だが、厚生労働省が05年度に実施した調査では、手帳の取得時期は一般に20歳未満までが68.6%で、50歳以上で取得した人はわずか2.8%だという。そもそも野宿を余儀なくされている人びとには50代が多く、単純に比較することはできないが、それでもこの50代以上の人の割合の高さのうちには、軽度の知的障害が見逃されやすいという「現実」だけではなく、現在不安定就労・不安定住居や野宿を余儀なくされている人びとは、これまでの生活史において、社会的に排除され続けてきた人びとであったのではないかと、いう可能性をも同時に見ることができる。なぜなら、彼／彼女らが、現段階において手帳取得の申請をしなくてはならないということは、少なくともこれまでに手帳を取得する機会を持たず、また、仮にこれまではその必要がなかったのだとしても、今になって手帳を取得しなくてはならなくなる程にしか、支援や教育を受ける機会を持ち得なかったからではないか、と思われるからである。

50代にして初めて療育手帳を取得することになるという一定の帰結は、周囲の人びとや制度との相互作用のなかで生じたものである。厚労省の調査に見られるように、多くの人が20歳までに手帳を取得しているのは、おそらく家庭や学校教育現場などにおいて、その必要性が認められる機会があったからであろう*6。しかし、本報告書からもうかがえるように、今回調査に応じてくれた対象者の多くは、障害の有無に関わりなく、生育家族においても様々な困難を抱えており、そのなかで、彼／彼女らには、社会的な制度へと接合される機会や余裕は、ほとんどなかったのではないだろうか。たとえば発達障害の一つであるADD（注意欠陥障害）について、D.K. シプラーは次のような小児科医の言葉を紹介している。

低所得世帯にしばしば見られるのは、高所得世帯に比べ、親が、子どもの注意欠陥障害に対処する助けとなる手段をわずかしかもっていないことです。貧しいと、生活に優先順位をつけねばなりません。何もかもやるのは不可能です。……二人の子どもの間には劇的な差が生じます。(D.K. シ

*5 ただし、実際には他都市でもこうした支援が行われていないわけではないと思われる。本調査においても、療育手帳の取得が見込まれる場合においては、調査終了後、生活相談を行うなかで療育手帳を取得したケース（事例1）や、自立支援センター入所中に手続きを行ったケース（事例52）などが見られる。さらに、生活保護の問題と同様に、たとえ支援者が手帳の取得を勧めても、当事者がそれを拒否するケース（事例6、事例7）なども示されている。取り組みの際の詳細な経緯については、第7章を参照いただきたい。

他自治体によるこうした取り組みは、北九州市のそれと比べた場合、手帳の取得割合が相対的に低く、「就労による自立」が第1に目指されるホームレス支援政策のもとで、主要な支援方法として前面に出てきていなかった、ということかもしれない。

*6 手帳を取得することがすべてであるとか、良いことであるなどと述べるつもりはないが、ここでは、まず、調査対象者らの中には、そもそもそうした機会すら得ることのできなかった人がいるという現状を指摘したい。

プラー, 2004 = 2007: 328-9)

今回調査対象者となった人びとが、これまでの生活において「助けとなる手段」をほとんど持っていなかったことは生活誌からも明らかである*7。それは、障害の有無とは関わりなく感じられたことでもある。しかし、ホームレスになることの原因としての障害を特に強調することで、このようなより深刻な背景については、隠蔽されてしまう可能性があると思われるのである。

もちろん、障害が直接的な原因となって、職や住居が得られなかった可能性もある。しかし、それ以上に「障害がある」＝「ホームレスになる／なりやすい」との認識を生み、強化してしまう恐れがあるのではないだろうか。とりわけ、この記事に見られるように「退所者のうち約4割が……」*8との数字を見れば多くの人はその割合の高さに目を奪われてしまいはしないだろうか。

6.3 不安定就労・不安定住居者における「障害」者支援：医学モデルの罫

それでは、ネットカフェ等で生活している人びとに対する医学的枠組みによる解釈や介入は控えるべきかといえば、そうではない。障害の有無にかかわらず、ネットカフェ等で生活している人びとのなかには、医療上のサポートを必要とする人も多数存在している。

彼／彼女らの多くは、劣悪な雇用条件のもとで働いているため、社会保険・医療保険等の社会保障を十分に受けることができないことも多い。また、彼／彼女らの経済状況では、自分でこうした保険に加入することも困難である。それゆえ仕方なく、多少の無理には目をつぶり、病院に行くことや、薬を買って飲むことは控えられる。

調査対象者の多くは、十分に食べることができない、寝ることができないという人間の心身にとってもっとも苛酷な状態であるにもかかわらず、体調について尋ねると、「体は丈夫だから心配ない」と回答する。これは、障害の有無とは関係ない。こうした回答は、調査に協力してくれた人の多くは、何とか体が大丈夫だからこそ、ネットカフェ等での苛酷な生活が可能となるのだ、という意味においては当然の回答でもある*9。しかし、身体に不安を抱えつつ日々をしのぐ者にとっては、体調はもっとも大きな心配事となる。その日その日の生活費を日雇いで稼ぐ彼／彼女らは、体調を崩すことで仕事に行けなくなるという、生活の行き詰まりに直面する。まして、日々の生活費以上に必要となる治療費を払うことなどできないだろう。

また、身体も臍臓が悪いらしい。原因が不明だが、ストレスが続いたり、不規則な生活が続くと臍臓を発症する。今まで、大きなものは、2回ほどあり、そうなると1ヶ月くらい入院しなくてはならない。ネットカフェ生活時代は、病院にいくお金もないし、この臍臓のことが本当に不安だったとのこと。(事例 28：男性 20 代後半)

彼は、幸いにしてネットカフェで生活している間に発病することはなかった。だが、ネットカフェ等での苛酷な生活は、確実に身体に対し負荷を与えるし、こうした心配を抱きつつ日々を送らねばならないこ

*7 また、それはネットカフェ等での生活や野宿に陥った後も同様である。

*8 もちろんここでは、野宿者のうち、どのような人びとが自立支援センターに入所する傾向にあるのか(そうした傾向があるかどうかも定かではないが)についても言及されることはない。

*9 そうでない場合の多くは、すでに福祉的なサポートを受けている可能性が高いのである。しかし、これもまた当然であるが、医療的処置・福祉的サポートが緊急に必要であるにもかかわらず、これらを受けないままネットカフェ等で生活する調査対象者も存在する。彼／彼女らには、NPO 釜ヶ崎による医療相談・生活相談等において、できる限りのサポートが試みられている。

とそのものもまた、ストレスを生む。

こうした点から見ても、不安定就労・不安定住居者の「問題」への対処において、健康上の問題を考え、医療上の処置やサポートを行うことは重要かつ必要である。また、障害が原因となって就労が困難であるならば、その状況を改善するために福祉的サポート制度を整備することも必要であろう。今後こうした支援は拡充されていく必要がある。

だが、医療的処置や福祉的サポートの重要性を理解しながらも、本章で検討したいのは、このような何とか生命を維持するための日々の営みそのものについてではない。むしろ着目するのは、当事者や支援者らが目前の生命の危機に日々対処していくなかでは忘れられがちな側面——彼／彼女らの健康状態や障害を生み出しているのは、実は社会構造によるところが大きい——であり、不安定就労・不安定住居の「問題」と距離を置く〈われわれ〉にそのような側面を忘れさせてしまう医学のもつ政治性である。

病や障害とは、往々にして、個人個人の身体における生物学的な異常であり、それらには特定可能な生物学的原因がある、という近代医学の前提である特定病因論に基づいて理解されがちである。だが、たとえば結核は、診断や治療という医療的な技術よりも、栄養状態や生活環境などとの関連がより強くみられるというように、病や障害を抱える個人をとりまく環境にも注意するべきであることを忘れてはならない。近年の格差社会における問題について健康という側面からのアプローチを試みた近藤克彦ら(2006)は、「健康における不平等 (inequality in health)」として、社会階層による死亡率の違いや所得と抑うつとの関わりなど、社会・経済的要因が健康へと与える影響を明らかにしている。

しかし、こうした健康や病と社会構造上の要因との関連性は、しばしば忘れられがちである。コンラッドらは、社会の医療化^{*10}の帰結の一つとして、社会問題の個人化を指摘している。

複雑な社会問題は社会体系よりも個人に原因があり、その解決も個人の中に見出されると考えられがちである。……「問題」は社会体系の構造の中にあるのかもしれないという可能性を真剣に考えさせなくしてしまう。(コンラッド&シュナイダー, 1992 = 2003, 473-4)

つまり、「就職できない」「仕事が継続できない」「家がない」といった、一般社会で標準的とされる生活から逸れるような状態を引き起こす原因として、資本主義に孕む矛盾や問題、就業構造が変容したことによる「標準」そのものの限界、そしてその帰結として、ある特定の層の人びとが不利益を被りやすくなっている可能性などではなく、個人の「病理」(ここでは「障害」だろうか)が想定されてしまうのである。

こうした傾向は、近年の発達障害者に対する支援政策にも見られるのではないだろうか。発達障害は90年代以降日本社会でも着目されはじめているが、とくに知的な障害をとまなわない、日本でいうところの「軽度発達障害」に対する関心が高まっている。就労との関連性でいえば、発達障害をもつ人は、主に社会性の障害やコミュニケーション上の問題を抱えていると指摘されている。

厚生労働省は、発達障害の疑いのある若者に対する就労支援として、臨床心理士らによる「就職チューター」をハローワークの就職相談窓口派遣することを決定した。これを伝える記事には、「厚労省は、障害を抱える求職者が自身の特徴を認識することでより良い就職活動が可能になり、職場定着にもつながる」として、就職活動の入り口であるハローワークの窓口で早期に障害に気付かせる配慮が必要と判断した(圏点は筆者、時事通信社、2007年5月2日)と書かれている。ここに見られるのは、就労上の困難の原因としての発達障害という捉え方である。たしかに、実際に職場でコミュニケーションなどの問題が生じ

^{*10} ある問題を扱う際に、その問題を医療的な観点から定義し、医学用語で記述し、医療的な枠組みを採用して理解し、医療的な介入を行うことが社会で主流となってゆくこと。

ることはあるだろうし、その原因に発達障害があるかもしれない。それらをあらかじめ回避させようとするこのような取り組みが、ある一人の状況をわずかでも改善するために有効である可能性は否定しない。しかし、これはまた、明らかに不安定就労の原因を個人の内部——障害あるいは性格——に求めるものではないか。

このような厚生労働省の方向性を受けてかどうかはわからないが、現在、就労の問題を考えるに際しても、「発達障害」に対する意識が非常に高まっていることは間違いないだろう。たしかに本調査においても、「この人は、場所が場所なら発達障害だと言われそうだなあ」と思うこともあったし、調査者間でそのような話をすることもあった。

だが、ある就労問題についてのシンポジウムに参加したとき、パネリストであった NPO や支援団体、あるいは当事者やその親らが、あまりにも一様に「不安定就労者のなかには発達障害者が多い」「障害に応じたサポートを考えなくてはならない」と口を揃えて言っていたことに驚きを覚えたことがある。たしかに、本人に適した支援を考えるうえで、個人の特性の理解は欠かせないものであり、むしろパネリストらの発言は、厳しい現状において社会的支援を受けるための戦略であったか、不安定就労者らに向けられる自己責任論を回避するための戦略^{*11}ではなかったかと思われる。しかし、あまりにもある一面のみが、強調され過ぎているように感じられたのである。

本人の特性に合わせた仕事を探し、適した仕事に就くことができれば、本人も周囲も幸せであるに違いない。しかし、一方でこうした認識枠組みのみが強調されれば、誰も社会構造のもつ矛盾や問題点について注意を払わなくなってしまい、既存の体制が無条件に維持され続けてしまう。また、そもそも障害という概念が、社会の生産様式との関わりの中で、「働けない人」と「働かない人」との差異化を図るために生み出された装置であるという側面^{*12}も忘れ去られてしまう。こんなにも多くの不安定就労・不安定住居者や野宿者を生み出す社会が最善のものであるはずはないし、障害のない不安定就労や不安定住居を余儀なくされる人が、援助するに値しないはずもない。個人の状況改善を目指すとともに、社会構造を意識し続けることも忘れてはならないのではないだろうか。

6.4 不安定就労・不安定住居者への支援と政治

本章では、調査に参加した際に感じたことをもとに、不安定就労・不安定住居者と「障害」をめぐる、いわゆる当事者とも支援者とも異なる立場から述べてきた。

不安定就労や不安定住居での生活を強いられる人びとのなかには、様々な障害を抱える人がいる、という〈発見〉は、これまで見過ごされ、必要な支援を受けることのできなかった人びとに対し、制度的サ

^{*11} 医療化の潜在的メリットの一つに、責任の免除という側面がある（コンラッド&シュナイダー、2003：第9章）。つまり失業の原因を病気に帰することは、それが本人の意思に基づく選択ではないことが保証され、その状態に陥ったことに対する責任が免除されることとなる。しかし、同時に治療の義務を生じさせることや、自分の責任を問えない第二階級市民として見なされることとなることにも留意すべきだろう。

^{*12} マイケル・オリバー、1990 = 2006。歴史的発達モデルによる理解では、封建社会での経済的基礎となる農業や小規模工場では、大半の障害者はそれが部分的であれ、生産過程に組み込まれ貢献することが可能であった。その意味で、障害者は薄幸の人と見なされることはあっても、社会から隔離されることはなかったという。しかし、産業化が進展するとともに、工場での作業のスピードや、規律の強制、時間の拘束、生産の規範などが変わり、労働者としてみなされることがなくなったという。つまり、個人ができる範囲で生産過程に参加する共同システムから、工場を基礎として賃金労働者個人を組織化したシステムへの変化が、ハンディキャップをもつ人びとを市場の底辺へと追いやったのだという。オリバー自身は、こうした理解が過度に単純化されたものであることを指摘しているが、日本においても産業化の進展が共同体の連帯に基づいた伝統的な生産様式を弱体化させ、これまで何とか包摂されていた軽度の知的障害をもつ人びとの労働現場や社会からの排除を進めた可能性があるのでないだろうか。

ポートを提供する契機となる可能性を持つ点においては非常に有意義だと思われる。しかしながら、本章では、こうした取り組みが拡大解釈される危険性について述べてきた。医学を用いた解釈枠組みは、現代社会でもっとも受け入れられやすく、一人ひとりが抱えた「障害」という個人的要因こそが、不安定就労や不安定住居を生み出すという考えを誘発する可能性をも同時に含み込んでいる。医学的な説明の強調は、日本の社会構造までを含んだ「背景の多様性」から人びとの目を逸らしてしまう恐れがあるのではないだろうか。

おそらく現場で多様なケースを目の当たりにしている支援者らは、実際にはそうした危険性については十分承知しているのだろう。ブラウンらは、健康に関する社会運動の形態について、既存のシステム内における（医学）モデルに依拠した権利擁護指向の運動組織と、現在の（医学）パラダイムに異議を唱えるシステム外で行われる活動家指向の集団とが両極としてあると指摘している。そして、健康に関する社会運動では、前者のタイプが多くなる、という。なぜなら病に苦しむ人の多くは、自らの身体状況に応じて、緊急のケアが必要であったり緊急のケアを求めたりする。それゆえ、たとえそれが自分達のニーズには十分応じるものではないと感じながらも、既存のシステム内で解決を追求することを強いられるのである。

不安定就労・不安定住居に対する支援活動も病に苦しむ人びとの活動と同様の性格を持っているのではないだろうか。調査で明らかになった調査対象者たちの深刻な貧困状態は、健康の問題——より深刻には生命の問題——と直結しているため、当然といえば当然である。

支援者らは、明日の、いや今日の食事や寝る場所さえも確保できないほどの緊急事態において、社会構造や社会制度レベルでの改善を待つことはできない。どうにかして生き延びるためのやむなき選択として、現状で利用可能な制度を戦略的に用いているのだろう。ましてや、日々流動的な生活を強いられる当事者らの抱えている困難は言うまでもない。

だとすれば、最初に指摘したような社会構造上の問題の隠蔽という結果を免れるために、現状の緊急性を理解しながらも、それ以外の要因——たとえば就業構造や社会制度など——に対する意識を持たねばならないのは、そういった現場の緊急性とはやや距離を置いてこの問題を考えることのできる〈われわれ〉ではないだろうか。そのためには、現場の文脈から切り取られてしまった一面的な理解や、〈われわれ〉の生活から切り離された別の問題として捉えるのでは不十分だろう。本調査における調査対象者は、この社会で生きる誰もが被っているはずの現在の社会構造の矛盾や問題をもっとも鮮明に体現している人びとであり、決して〈われわれ〉と異なる例外的存在ではないのである、ということに気付かねばならない。

本調査で得られた貴重なデータが、人びとを不安定就労や不安定住居へと追いやる「多様な背景」について少しでも明らかにし、そこから少しでも多くの人が構造上の矛盾に目を向けることができるように、今後もより詳細な検討が必要であろう。

参考文献

- 近藤克彦, 2006『健康格差社会』医学書院。
ディヴィッド・K・シプラー, 森岡孝二・川人博・肥田美佐子訳, 2004=2007『ワーキング・プア アメリカの下層社会』岩波書店。
マイケル・オリバー, 三島亜紀子・山岸倫子・山森亮・横須賀俊司訳, 1990=2006『障害の政治 イギリス障害学の原因』明石書店。
P. コンラッド/J.W. シュナイダー, 進藤雄三監訳, 1992 = 2003『逸脱と医療化 悪から病いへ』ミネルヴァ書房。
Phil Brown, et al. 'Embodied health movements: new approaches to social movements in health', Sociology

of Health & Illness Vol. 26 No.1 2004, pp. 50-80.
山本讓司, 2003 『獄窓記』ポプラ社.
———, 2006 『累犯障害者』新潮社.
朝日新聞 2008.3.18 (九州版)
時事通信 2007.5.2

資料 1

ホームレスに「知的障害」手帳 北九州で入所の3割超、救済 福祉へ橋渡し (朝日新聞 九州版、2008年3月14日: 1面)

北九州市で、ホームレスの人たちの多くに軽度の知的障害があることが分かった。市のホームレス自立支援センターに入所して06、07年度中に退所した人のうち、3割以上の54人が軽度の知的障害があると判断され、「療育手帳」を取得した。今回明らかになった実態は、ホームレスになる背景に、見過ごされやすい知的障害があることを浮き彫りにした形だ。(木村司) = 29面に関係記事

専門家によると、ホームレスに知的障害が多いというデータが明らかになったのは初めてという。福祉関係者らは支援策として就労支援に限らず、「障害者福祉への橋渡しが急務」と指摘する。同センターによると、05年度から入所者の手帳取得支援を始めた。手帳取得で障害者年金受給が可能になり、「半就労・半福祉」を実現させたり、障害者向け作業所での仕事を見つけたりするなど、多様な対応が可能になった。手帳取得支援の取り組みは他自治体にはないという。同市でセンター入所をきっかけに手帳を取得した人の数は06年度が102人中29人、07年度(12月末まで)は67人中25人となった。年齢は50～60代が8割以上。自立支援センターはホームレスに宿泊場所や食事を提供し、就職を支援する施設。ホームレス自立支援法に基づき、東京都と八つの政令指定市が開所。北九州市以外の8自治体では療育手帳取得はほとんどない。北九州市では、04年度開所のセンターの運営の一部をNPO法人に委託。その会員でセンターの生活相談員になった人が、入所者の知的障害に気づき、手帳取得支援に力を入れ始めたという。

<療育手帳>知的障害が認められると交付される。税の控除や交通機関の割引などが適用され、作業所やグループホームなどの福祉サービスにつながりやすくなる。国の通知に基づき都道府県と政令指定市が交付するが、認定基準はまちまち。

資料 2

ホームレス、見逃される知的障害 58歳、初めて療育手帳 (朝日新聞 九州版、2008年3月14日: 29面)

人間関係につまずく。仕事が続かない。借金を重ねる。体をこわす。アルコール依存症など心の病を患う。ホームレスに至ってしまう悪循環の背景に、見逃されやすい知的障害が隠れていた。NPOと行政が連携してホームレス支援に熱心に取り組む北九州市の現場から、課題が浮かび上がった。(木村司) = 1面参照

07年10月3日、福岡県内出身の男性は療育手帳を手にした。58歳になって初めてのことであった。障害の可能性を指摘されたのは、知能テストの点数が低いと言われた小学3年のときだけ、と記憶している。結局はそのまま進級。中学の成績は「1」ばかりだった。「親には『勉強しない子』と決めつけられていた」。一方、小学校高学年から中学まで新聞配達をして、家計を支えた。卒業後、集団就職で東海地方へ。だが、4年ほどで帰郷。「その後は、鉄鋼や土木など職を転々とした。仕事ぶりが認められて難しい業務を与えられると挫折することが多かった」と振り返る。野宿生活をするようになったのは50代半ばを過ぎた05年秋。「知人を信用して虫の良い話に飛びついてしまった」ため住居をなくしたという。白内障で片目はほとんど見えなくなっていた。その冬、初めてNPO法人「北九州ホームレス支援機構」の炊き出しに行った。そこで異常に高い血糖値と血圧が判明。「命にかかわる」と言われ、入院した。06年4月、市の自立支援センターへ。11月には就職が決まり、生活資金を蓄えて翌年1月、アパートで一人暮らしを始めた。だが重度のアルコール依存症にな

る。部屋で倒れているところを発見され、再び入院した。入院中、支援機構のメンバーは療育手帳の申請を勧めた。知的障害のある人が仕事がうまくいかず、精神疾患になるケースを見ていたためだ。男性は市による聞き取り調査を受け「軽度の知的障害」と判断された。今は支援機構が所有する山口県下関市のアパートで暮らす。今月から障害者向けの作業所に通い、病院のタオルやシーツをたたむ仕事に汗を流している。

◆「4割以上は取得可能」

支援機構の青木康二さんはセンター開所時から、入所者の生活や就職活動を手助けしてきた。その実感から「手帳を取得できる人は実際は4割以上」とみる。厚生労働省が05年度に実施した調査では、手帳の取得時期は20歳未満までが68.6%。男性のように50歳以上で取得した人はわずか2.8%だった。北九州市のセンターはNPOと行政の連携が機能し、就労自立率は全国平均の約2倍。ただ、そうした同市のセンターでも、知的障害の人がこれほど多いとは予想していなかったという。青木さんは「生活困窮者に軽度の知的障害がある人が多いとみられ、生活保護の相談窓口などにも詳しい知識を持った人が必要」と指摘する。近年、公的な福祉サービスにつながる療育手帳を持たずに犯罪を繰り返してしまう「累犯障害者」の問題が浮上している。この問題に注目を集めるきっかけとなった「獄窓記」の著者で、元衆院議員の山本譲司さんは「知的障害がある人は、社会や人と折り合いをつけることが十分にはできないため、貧困や虐待など悪条件が重なったときに、ホームレスになりやすいのではないか」と話す。

◆横断的な施策を

国の「ホームレスの実態に関する全国調査検討会」で座長を務めた岩田正美・日本女子大教授（社会福祉）の話 ホームレス支援に障害者支援の視点が含まれていないなか、療育手帳取得を勧める北九州市の取り組みは画期的だ。ホームレスに対し「就労自立」を強調する前に、ホームレスになる多様な背景への認識を深める必要がある。支援策には、あらゆる福祉分野につながる横断的な体制が欠かせない。

第7章

「ネットカフェ難民」を含むホームレス問題をどのように捉え直し、支援していくべきか

——野宿者支援を行う福祉相談部門スタッフによる事例紹介——

NPO 釜ヶ崎支援機構・福祉相談部門スタッフ
尾松 郷子

7.1 はじめに

ネットカフェの前で声をかけ調査に協力してもらった人たち、他の調査員が聞き取りをしたケースを読みながら、何をどこまで支援できるのかと悩む。開き直ってはいけないのだが、勉強不足ゆえ、「当然」現在ある社会制度、社会資源をすべてわかっているわけではない。ただ、聞き取り調査に参加した調査員という立場と釜ヶ崎支援機構福祉相談部門スタッフという立場、二つの立場が入れ替わり顔をのぞかせる。聞き取りの途中で「無意識」のうちに相談業務は始まっている。自立支援センター入所者もそうであるが、ネットカフェで寝泊まりしている人たちの置かれている脆い状況をきくと、今すぐにでも何かしなければならぬと焦る。それは私自身がこの仕事をしているからだけではなく、調査に参加した他のメンバーからも、「何とかならないのか」という言葉を何度となく耳にした。「何とかならないのか」という思いは、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門で日常業務を行っているスタッフが毎日感じていることでもある。

そもそも、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門*1は、2000年度より特別清掃*2の輪番登録労働者や夜間宿所(シェルター)*3利用者の中でも「非労働力」としてみなされる人たちに対して、「路上死から遠ざける試み」として、生活状況をたずね、事情に応じて入院や施設入所、アパート入居と生活保護申請の支援を始めた。相談業務開始当初は釜ヶ崎の日雇い労働者の割合が高かったが、ここ数年特別清掃に登録している相談者の割合は、平成16年度で半数以下となり、平成18年度で38.7%まで減少している。一方で、釜ヶ崎に仕事を探すために来たわけではなく、野宿しているかどうかは別として、「一般社会」から排除され流れてきた人たちの割合が増えたと実感する。

今回の報告では、ネットカフェや自立支援センターで聞き取りをした人たちをホームレスにとらえ、具体的な事例を紹介しながら、彼らと同様、複雑で多岐にわたる問題を抱えて釜ヶ崎支援機構に相談に来た

*1 釜ヶ崎支援機構福祉相談部門のHP (<http://www.npokama.org/welfare/index.html>)

*2 基本的に、釜ヶ崎の55歳以上の日雇労働者を対象にしている。詳細は、HP(<http://www.npokama.org/>)の事業概要の中の就労機会提供事業／高齢者特別清掃事業を参照。

*3 詳細は、HP(<http://www.npokama.org/>)の事業概要の中の寝場所提供事業／夜間宿所運営事業を参照。

若年者（特に40歳未満*4）に対してどのような支援を行ったかも同時に紹介し、現在の貧困問題をどのように捉え支援したらいいのか考察していく。

7.2 支援の限界 —— 社会の「建前」と「本音」の狭間で

1990年代に入って、東京や大阪など大都市を中心に、ターミナルや公園で野宿を余儀なくされる人たち（ホームレス）が増加し、社会問題化されるようになった。1998年大阪市立大学都市環境問題研究会が行った「大阪市内における野宿生活者（ホームレス）の概数・概況調査」では8,660人もの野宿生活者が確認された。さらに同研究会が1999年に行った「野宿生活者（ホームレス）聞き取り調査」により、大半が男性で、平均年齢が50代半ば、約6割が日本最大の寄せ場（建築・土木を中心とした日雇労働市場）である釜ヶ崎で働いた経験をもち、約8割が廃品回収に20日以上従事しており、仕事に就いて自立（野宿から抜け出）したいと思っているホームレス像が浮き彫りになった。他方で、ホームレスの増加・拡散にともない、ホームレスを「一般社会」から排除する動きがすすんだ。公園が「不法占拠」されているという「一般市民」の圧力による行政代執行などはその一例である。

このような流れの中、ホームレス問題の解決をめざし、2002年8月には「ホームレスの自立支援等に関する特別措置法」（「ホームレス自立支援法」）が制定された。「ホームレス自立支援法」の中でホームレスは、

「ホームレス」とは、都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者をいう。

と定義されている。

2003年1～2月に行ったホームレスの実態に関する全国調査の結果を踏まえ、厚生労働省は同年7月に「ホームレスの自立の支援等に関する基本方針」を策定し、この基本方針に基づき、雇用、保健医療、福祉等の各分野にわたって施策を総合的に推進している。大阪市においては、法に基づく国の基本方針などに即して、野宿生活者の自立を積極的に促すとともに、新たに野宿生活になることを防止するなど、野宿生活者に関する問題の解決を図るため、平成16年度から5年間を計画期間とする「大阪市野宿生活者（ホームレス）の自立の支援等に関する実施計画」を策定した。このようにホームレス問題を解決するために、既存の法制度（生活保護法など）の活用に加え、新たな法の設立、施策の策定がすすんでいる。

その一方で、1999年の派遣法改正*5により、今や労働者の3人に1人までが非正規の職員・従業員で、

*4 40歳未満の相談者の状況は、平成14年度4.3%:33人、平成15年度2.6%:28人、平成16年度2.6%:23人、平成17年度5.0%:29人、平成18年度3.8%:21人。

*5 高井晃は「失われたくハケンの品格」を求めて」（『ワーキングプアの大逆襲』洋泉社、2007年、p.155）の中で派遣法「改悪」について以下のように述べている。

「99年の派遣法改正では、原則どんな職種も派遣を活用していいという、ネガティブリスト方式に変わりました。ネガティブリスト方式というのは、派遣の活用を禁止する職種を指定し、それ以外の職種はすべてOKとすることです。現在では、港湾運送業務、建設業務、警備業務、医療関係業務の一部、人事労務に関する業務などが禁止されています。それ以外の職種は皆OKとなったことで、非常に幅広い職種で派遣が活用されるようになりました。

ちなみに、以前の方式はポジティブリスト方式と呼ばれますが、こちらでは逆に派遣を活用していい職種が限られ、ソフトウェア開発、機械系、放送機器操作など、専門26業種に限定されていました。

ですから、冒頭でも述べたように、同じ派遣法といっても85年に成立したものと99年のものとは、似て非なるものです。それまでは、派遣というのは技能を持った強い労働者だから、悲惨な状態にはならないという前提で、社会保障も考慮されていなかった。その枠組みを残したまま、幅広い職種に広げてしまったから派遣システムの底が抜け、その結果、日雇い派遣のようなものまで生まれてしまったわけです。」

低賃金で、いつ解雇されてもおかしくない、不安定な雇用状態、その雇用状態に規定されて不安定な生活状態に置かれる労働者が増える傾向にある。このような人たちの中には、アパートなどを借りて生活するのではなく、派遣先の寮やネットカフェなどで寝泊りし生活の拠点を転々とせざるをえない、ホームレス状態に追いやられる人たちもいる。お金がないときなどは、公園などで野宿せざるをえないこともある。

しかしながら、国をはじめとする行政は、「ネットカフェ難民」に代表される若年の貧困層を、「ホームレス自立支援法」で定義されているホームレスと異なった別の枠組みで捉え問題解決しようとしている。このように「既存」のホームレス問題の解決を目指す施策が策定される（社会の「建前」）反面、新しく生み出された若年貧困層（新しいホームレス）を「既存」のホームレス層と分断し、結果として様々な社会制度から排除している現状（社会の「本音」）がある。

7.3 終身雇用が崩れて —— 仕事をして生活できない

仕事に就いていれば、安定した生活をおくれると思っていないだろうか。安定した生活とは、例えば、病気になって休んでも解雇されることはない、給料がその分減らされることもない、家を購入して住宅ローンを組めるだけの将来の見通しがたつ、定年退職したら退職金をもらって、年金を受け取りながら老後を安心して暮す、等々。雇用条件の二極化がすすんだ現在、このことは終身雇用のある一部の正規社員に限定されたことである。正規社員でも、資本の利益追求のため、過酷な労働に追い込まれ、自分の生活を省みることもなく猛烈に働かざるをえないか、「強度」が弱ければスクラップになって捨てられるかということも少なくない。ましてや正規社員よりも待遇の劣る非正規社員の場合は、働いても報われることのない「ワーキングプア」と呼ばれる貧困層に固定され、今月、今週、今日をどう生きていこうか考えることで精一杯、将来の夢や希望などさらさら考える余裕もなく毎日を流されていくしかない状況がそこにはある。ネットカフェで聞き取りした A さんはその典型的な事例である。

【30代後半男性：Aさん】大阪府の出身。両親は離婚している。母と弟と一緒に生活していた。高校を卒業して運送会社に就職。運転助手を経てドライバーとして15年ほどこの会社に勤める（正規雇用）。数年前からセールスドライバーとして営業力も求められ、チームを組まされるようになった。成績は給与にも反映されるので、できるやつにおんぶになることがとってもつらかったし、それがプレッシャーになった。いずれリストラでクビになるという恐れがあったので、それなら自ら辞めようと思い、辞めた。当時のことを今振り返ると、朝から晩まで何のために生きていたのかと思った。

Aさんは、1ヶ月前までは家賃4.3万円の部屋を借りていた。家賃を払えず住むことができなくなったとき、行ってもどうにもならないと思い、役所には行かなかった。それからシャワーがあるこのネットカフェを週4~5日、ナイトパック（6~10時間）で利用している。これまでトラック内で寝たりしていたので寝るのに問題はない。これからの季節は野宿もできると思っている。

派遣登録は現在1社のみ。携帯はとまっているので事務所に直接行って話しをする。最近の企業は派遣がいなければ工場は回らないが、登録しているだけの派遣労働者なので強い発言権はない。夜勤は14時~23時までの実勤9時間6,500円（源泉徴収済）で毎日ある。3月から派遣をはじめたが仕事の量は波がある。3~4月は引越しが多く5月は少なかった。引越しは実勤7時間で7,000~8,000円。現在1日の収入は6,500円、支出は職場までの交通費、タバコ代、食事代、銭湯代合めて2,000円弱。それに加えネットカフェ代が1,000円。食事は100円均一やコンビニで買う。仕事

は1週間働いて日曜は休む。身体は元々強いので今は健康であるし体調はいつもよい。だから、今はやっつけていける。今月はずっと同じところにはいつているが、この仕事も今はあるがこの先はわからない。

もし今、正規の仕事に就職をしても目の前の生活が成り立たない。就職してしまうと給与は1ヶ月後に入ってくるので、就職するなら2か月分の生活費+家賃を貯めておかないとだめだ。そう考えるとなかなかお金が貯まらないので就職するのはしんどいと思う。家を借りても払っていけない。また、家を借りるのも怖い。保証金には最低20万円必要になる。そんなお金はないし、何ヶ月無理して働いて貯めて家を借りる必要が今はない。結婚もしていないし恋人もいない、家族もいないのに家はいらぬ。

自分が今から就職をするには40歳では難しい。バブルのころ、求人はあったけれど今は雇ってくれという若い人の方が多から会社も選んで若い子をとる。そうなるとう就職は厳しい。縛りや残業などを考えなければ働けない。だけど、もし縛りや残業を我慢してもそれで生活できるのかはわからない。今の世の中、就職しても安定はないから。

Aさんは、若干年齢が高いものの、マスコミなどが報道する「ネットカフェ難民」の典型例だと思われる。新聞報道によれば、「ネットカフェ難民」対策として、東京などの都市部のハローワークに専門相談員を配置し、「社員寮付き」や「住み込み」の仕事を中心に紹介することを計画していると書かれているが、それは単に、ネットカフェに滞留しないようにするだけであって、仕事と同時に生活する場所も失ってしまう不安定な状態、貧困状態にあることには違いないのである。生活が保障されることがない泥縄的な政策は、根本的な問題解決を考えているとは到底思えない。たとえ不安定な就労であったとしても、安定した生活をいかに保障するかが課題ではないだろうか。

さらに、ネットカフェで聞き取りをした人たちや最近釜ヶ崎支援機構に相談に来ている若年者は、今まで私たちがイメージしてきたようなホームレス、具体的には、(元)労働者「層」として一括りできない、労働問題だけでは解決できない個別具体的な問題をかかえている「個人」としてしか捉えることができない、新たな「ホームレス」と言えるのではないだろうか。

7.4 社会の中で生きるためのレッテル貼り

生活困窮状態で釜ヶ崎支援機構に相談に来たとき、仕事だけで野宿から抜け出せた事例は多いとは言えない。実際は1割にも満たないので「ほとんどない」というのが正しい。また、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に相談に来て、生活保護(病院入院・施設入所・居宅保護)で野宿から抜け出せる割合は3~4割程度にすぎない。割合がこれだけ低い理由として、援助者の能力不足もあるが、それ以上に困窮した相談者に対して「その場で」「すぐ」野宿から抜け出すための社会制度、社会資源がなく、継続して相談していく必要があり、その中でこぼれ落ちてしまう結果になっていることがあげられる。

釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に来た場合、まず体調はどうなのかという話が出る。もちろん野宿して体調を崩している場合が多いので、病院受診をまずすすめるということもあるが、生活保護には「補足性の原則(生活保護法第4条)」があり、

資産(預貯金・生命保険・不動産など)、能力(稼働能力など)や、他の法律による援助や扶助などその他あらゆるものを生活に活用してもなお、最低生活の維持が不可能なものに対して適応され

る。民法に定められた扶養義務者の扶養、その他の扶養は生活保護に優先して実施される。

どのくらい仕事ができるのかどうか、稼働能力を医師に判断してもらう必要性がでてくる。ここ2、3年、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に相談に来る若年者は、軽度の知的障害、発達障害、人格障害、アルコール依存症など何らかの精神疾患を抱えている場合が多い。しかし今までの生活の中で、適切な治療を受けることもなく、療育手帳や精神保健手帳を取得するための援助を受けてこなかったため、精神科受診の話をすると拒否反応を示す。彼らのこの反応は、当然のことなのではある。精神病患者に対する隔離・収容すべきであるという社会規範・差別意識が存在する社会に問題があるのだから。ただ、マイナスのラベル（レッテル）を貼られることを受け入れない限りは、野宿からぬけだし安定した生活を確保・維持していくことができない、私たちはこんな「おかしい」社会の中にいるのである。

【30代後半女性：Nさん】ある市民団体からの紹介で、Nさんが釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に来たときはすでに野宿を余儀なくされていた。ただ、派遣に登録していて面接先も決まっておき、面接を受けその結果が出るまでの間、緊急的に泊まるところを何とかしてほしいということだった。最初に会ったときから、声を荒げて興奮して話をする場面が多く、また不眠を訴えていたので、体調の面と今後の支援のことを考え精神科受診をすすめるが、「自分は精神を病んでいない」と忌避が非常に強かった。

高校を卒業して、2年間デザインの専門学校に通い、卒業後地元の広告代理店に正社員で就職するも、拘束時間が長くとれる睡眠時間はわずか2時間で、また極度のプレッシャーの中での仕事で、ストレスでさらに不眠、拒食が進んで、結局半年間で辞めた。その後1年間は病院に通うことなく自宅療養する。

20代半ば、顔が痺れ、頭の後ろで音がする「奇病」になった。それから10年弱は自宅で療養をしていた。この間流動食しか食べられず、下半身不随で歩けなくなった時期もあった。また家族に頼っているのでこのような病気になるのではないかと思い、30代前半、一人暮らしをはじめた。当初はアルバイト（食品販売）を掛けもちで10万円の収入、足りない分を親から援助してもらっていた。その後は職安や派遣に登録して住み込みの仲居の仕事に就く。ただいろいろな旅館・ホテルで仲居の仕事をするが、労働条件が異なる、「嫌がらせ」を受けるなどの理由で、退職せざるを得なくなった。

約1年前大阪に来た当初は蓄えもあったので、ウィークリーマンションに滞在する。この間フリーペーパーでピッキングの仕事などスポット求人を数回しただけだった。生活費が底をつき、ウィークリーマンションを出て住み込みの仕事に就く。しかし住み込み先の寮の隣人が自分の部屋の壁をどンドンたたくので苦情を言ったところ、隣人に頭を殴られるトラブルになる。それを近所の人が見ていて警察を呼ぶが、Nさんが公務執行妨害と傷害で警察に拘留される。自分は悪くないと話をしても誰もきいてくれなかった。大阪にもどってきて再び派遣会社に登録するも仕事がほとんど見つからなかった。その間、約1ヶ月ネットカフェに寝泊まりをしていた。これではいけないと思い職安にも行ったが住むところがないので住み込みの仕事しか探せなかった。残りの生活費がわずかになってきて消費者金融からお金を借りようと思ったけれども、結局どこも審査で断られ、お金を借りることができなかった。大阪市役所の保護課に相談にいったが、住民票はどこにあるかきかれ、兵庫県にあると言ったところ、大阪市では何もできないと言われた。

その後約2ヶ月間、お金があるときは24時間営業のファーストフードでコーヒー1杯だけで、またお金がないときは野宿をしていた。夜は2、3時間うつらうつらとしか寝ることができなかつ

た。それでも仕事を探さなければと派遣会社に登録する。自分で田舎を出てきているし、一人暮らしをしないと親に甘えてしまうので連絡はしていない。

相談に来た日は疲れていることもありドヤ（安いホテル）に泊まってもらう。翌日、内科の受診をすすめるも自分は体の悪いところはないと激しい語気で拒否、役所に相談に行くことも、前回の大阪市の対応があったため行きたくないとは最初は言っていたが、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門のスタッフと一緒に緊急保護してもらうために相談、大阪市内にある女性の施設に2週間限度で入所することになる。その後、仕事が決まったので職場に出発しますと電話があった。その3日後に彼女から「自分は何も悪くないのに、仕事やめなければならないことになった」と電話があった。一方的に相手（ホテル側と派遣会社）が悪いと早口で興奮しながら話をする。ホテルの社員と話をしたとき、こちらは「冷静に」話をしているにもかかわらず、相手がわあわあ言ってきたので「私にも考えがある」と言って部屋を出たところ、派遣会社の人が出て、「ここでは働けない」と言われた。

もどってきて何があったのか話をきこうと思うが、感情のコントロールがきかず興奮して事務所に飛び出してしまうことが重なった。そのうち所持金もつき、体調もさらに悪くなり、何とか精神科受診することに同意してもらい、一緒に受診した。薬を処方、病名をつけてもらい、本当は入院してもらうのが一番だが入院を拒否したため、現在就労できる状況ではないので1週間ドヤに泊まりながら服薬してもらい、もう少し興奮がおちいたら部屋を探して居宅保護の準備をしようという話になった。しかしドヤに泊まってしっかり食事をとってもらい体調が回復してきたNさんは、「精神病」というラベルを貼られた、自分は仕事ができないダメ人間というレッテルを貼られたという思いが強くなり、福祉にかかるくらいであれば、野宿してでもいいので派遣に登録して仕事を探すと言って姿を消した。

野宿せざるをえない状態は異常なことだと思う。その異常な状態から抜け出すためにNさんが使える制度は生活保護法以外にはない。ただ、「私たちのいる社会」は、生活保護を受給することと引き替えにスティグマを付与する。それに加え、失敗しても何度でも生活保護を申請すればいいという考え方もあるが、「失敗した」というラベルは確実に貼られる。生活保護を受ける権利は当然あるから、失敗したからといって再度申請できないわけではない。ただできるならラベルを貼られないように、前もってどのような支援が必要か、使える社会資源は何があるのか考える。Nさんの場合は医療（治療）がどうしても必要で、「人格障害」というラベルをはらなければならなかった。その一方でNさん自身、「一般市民」が持っている負のラベル（具体的には「精神病」＝「きちがい」、「生活保護受給者」＝「ダメ人間」）に対して激しく拒否した。

【30代後半女性・Kさん】Kさんは、仕事を探すため職業カウンセラーと話しをしたところ、すぐ仕事を見つけるよりは生活の安定の方が先ではないかと言われ、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門を紹介された。

兄妹はいない。母親は本人が生まれてすぐ亡くなる。Kさんが幼稚園にあがる前に、父は再婚をするが、再婚相手にも連れ子がいて、関係が悪くなり親戚に預けられていた時期があった。子どもの頃から父からの干渉が激しく、常時監視されているのではないかと感じていた。そのことについて母親がわりにあたる親戚に相談にいったら、そんなことはない、思い込みだと言われ否定された。2年前にその父も病気で亡くなり、Kさんは結婚をしていないので独りぼっちになる。

高校を卒業して、学校の紹介で製作所に就職する。印刷会社に6年間パート（年金あり）で働いたのが最長職で、このとき職場の人間関係で悩み、2,3時間しか眠れなかった。あまりにもしんど

かったので、心療内科に受診、服薬するが副作用が大きくなりしんどくなった。5年前からはいくつかの派遣会社に登録する。そして英語検定やコンピュータの資格などを取得するために、ビジネススクールにも通った。自分の持っている資格を活かすために、職安で探す仕事は貿易事務、派遣では貿易事務かコンピュータ関係の仕事のみの職種に限っていた。しかし最近は職安に行くも「どうせまた落ちる」という不安・恐怖から、面接に行くも採否の結果をまっている間に過食になってお金が急激に減るようになる。またお金が減るとそれが不安になり、面接に行くことができなくなるといふ悪循環に陥った。さらに全身が痺れて、動悸が激しくなり、過呼吸状態になることもあった。

この間生活費が少なくなってきたので、福祉事務所に行ったところ「まだ若いし、仕事ができるでしょう」と言われ何もしてもらえなかった。それで困り果てて幼少の頃世話をしてくれていた親戚の所に行く。しかし連絡をとらないでほしいと言われた。それがショックで再び不眠がひどくなった。

釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に相談にきて、精神科の病院に受診、仕事を探すよりも「治療」をすることが優先であると医師に判断され、生活保護が開始された。

Kさんは「発達障害」というラベルを貼られたことにより、社会に「適応」するために様々なサポートが必要であるということがはっきりした。ただ、独りぼっちの彼女にとって、「障害」という理由で生活保護を受給し、生活の安定を確保しても、社会から排除されていることに変わりはない。現在、定期的に病院に受診をしてカウンセリングを受けながら、仕事に就くということが、唯一社会の中での自分の位置を確認することなので、資格取得のために勉強をし、再び職安に通って求職活動をしている。釜ヶ崎支援機構福祉相談部門では、Kさんにとって生きやすい環境をつくることはできなかった。

7.5 犯罪に荷担してしまった知的障害者

最近、生活が困窮したため軽い罪を犯し刑務所に服役する知的障害者や高齢者の割合が増えて、刑務所が福祉施設化しているという話をいろいろなところで耳にする。確かに、釜ヶ崎支援機構に相談に来る人たち（生活困窮者）の中で、療育手帳所持者もしくは療育手帳取得可能と医師に判断されるケースが増えた*6。その中には拘置所、刑務所に入ったことがある人たちもいないわけではない。罪を犯すことは反社会的なことなので矯正教育をすべきだと言うことは簡単なことである。ただ、結果として犯罪に荷担することになったが、その背景に何があったのかを考察しなければ根本的な問題解決にはつながらない。

今回のネットカフェ利用者の中にも、知的障害者で犯罪に荷担してしまった事例があった。聞き取り直後逮捕され、国選弁護士から連絡があり、裁判に関わることがあった。裁判での詳細なやりとりを書くことはできないが、今後どのような支援が必要なのか、現在社会全体ですすすめられている「累犯知的障害者」に対する処遇に問題はないのか考えていきたい。それに加えて、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に相談に来た知的障害者に対してどのような支援を行い、その過程で析出してきている問題についてもふれておく。

【30代前半男性：Fさん】おしゃれなめがねをかけ、帽子をかぶった色白な人。ただ着ている薄い色のジャージは汚れて荷物はビニール袋一つ、頻繁に野宿をしている様子。大阪府出身で、両親は今も大阪府に住んでおり、二人いる独身の兄が面倒をみている。家を出てから帰ったこともある

*6 平成20年3月14日の朝日新聞によると、「ホームレスに『知的障害』手帳 北九州 入所の3割超救済」というタイトルで、ホームレスに陥る人たちの多くに軽度の知的障害があることがわかったという内容の記事が載っている。

が、兄とは話をしていない。親からお金を家にいれろと言われたこともあった。最終学歴は中学校卒業。中学生のとき児童相談所が介入して、施設に半年ほど入所していたこともある。療育手帳 B1 を所持。てんかんの持病をもっており、病院（精神科）に受診しているというが、ここ 1 年受診できず頻繁にてんかんの発作をおこしている。最長職はパチンコの店員を 10 年間した。他には、タレントや先物取引の営業をしていた時期もある。2 年前から実家を出てダブ屋の仕事をしている。生活に困りだした 6 年ほど前に消費者金融 4 社から元金 170 万円ほど借りた。

聞き取りをした後も F さんは病院受診、居宅保護のことで何度か釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に顔を出していた。一時来ない時期があったが、再び連絡があった。しかしその連絡は、彼が犯罪をおかし逮捕されたという弁護士からの知らせだった。弁護士からはいろいろ質問をされた。療育手帳をどこで取得したのか、てんかんの発作が拘置所で頻繁におきているがどこで薬をもらっていたか、どのようなかわりがあるのか、自分に不利益になるような作り話をするのかどうか*7、そして F さんが連絡をとってほしいと言っていると。その後弁護士と何度かやりとりしていく中で、情状酌量の証人として裁判所に出席してほしいという F さんの希望があるということを書いた。

情状酌量の証人として、① 事件の背後にはその日の生活にも困り野宿せざるをえなかった貧困状態があったこと、② てんかんがあるので規則正しい生活・服薬が必要なこと、③ 今後犯罪を繰り返さないためには生活保護を活用して安定した生活を確保、継続的な支援が必要で、F さんが釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に来たら支援を約束することを伝えた。一方検察側の発言の内容は、釜ヶ崎支援機構では F さんを「労働力」として「矯正」し、社会の中に組み込むことはできるのか、それだけが問題とされていた。「労働力」になり得ない存在は社会の中では必要ないと言われているように見え、憤りを感じた。

貧困の存在を放置し続ける現在の社会が、立場の弱い者にしわ寄せを強いていることを、社会秩序を維持しようとする検察側に理解してくれというのは無理な話かもしれない。ただ言えることは、再び彼に罪を犯させないこと、それは再び貧困状態になることのない生活を保障し、排除されない社会をつくることではないだろうか。

【30 代後半男性：T さん】北陸出身。父親は酒乱で、飲酒しないときも T さんや母を殴ることが多かった。兄弟は、姉 1 人、弟 1 人、妹 2 人いるがいずれとも折り合いが悪く、絶縁状態で、平成 15、16 年母、父が亡くなるも葬儀にはよんでもらえず。

小学校、中学校と特殊学級にいた。中学校在学中に「悪いこと＝万引き」をして施設に入所、中学校を卒業してからも母が面倒をみられないということで少年支援施設に入所していた。療育手帳取得（B）。ゲームセンターに行きたい、飲酒したいなどの理由で無断外出・外泊が多く 2 年目に退寮。退寮後は北陸地方で、皿洗い、配達、掃除、建築土木に従事、派遣にも登録するが、約 10 年前から失業状態になる。職安で相談しているとき、職探しではなく、施設（障害者の施設）をすすめられ入所、一ヶ月で退寮。実家に帰るも勘当される。15、6 才からビールを飲み、記憶をなくすことも多数、二日酔いで職場からクビにされること数回、飲酒の問題があるにもかかわらずアルコール依存症の病識はない。またお金を遣いすぎ、債務をつくることもあった。野宿生活を余儀なくされている 8 年間は、万引、窃盗、飲酒しての傷害など累犯を重ねる。

約 2 年半前、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に来て、更生施設（生活保護法の施設）に入所、再度

*7 高岡健は「やさしい発達障害論」（批評社,2007,P.145）で「とくに、IQ が 57 から 75 程度の軽度知的障害を合併している場合は、誘導尋問の影響を受けやすいことから、被暗示性・作話・黙従が生じやすいという事実が、学術的にも知られています」と述べている。

療育手帳取得（B2）、警備の仕事に従事するが、仕事中の一度の失敗（自転車を倒しておきた物損事故）が原因で自分から仕事を辞め、同時に施設を8ヶ月で退所してくる。施設退所後、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に相談に来るが、物損事故をおこしたことで損害賠償を請求されるのではないかと情緒不安定になる。この間、病院（内科・精神科・整形外科など）受診するが、規則正しく服薬できない、また、計算が苦手でお金をうまく遣うことができないことがわかった。「本人の希望」は居宅保護、役所は、社会資源（ここではすぐに使える社会資源が釜ヶ崎支援機構福祉相談部門しかなかった）の援助なしでは居宅保護が困難と判断、本人も渋々ではあるが、金銭管理、服薬管理を同意して、約1年半前、居宅保護が始まる。居宅保護が始まって1週間後、社会福祉施設の清掃の仕事（4時間×週3、4日）に就職する。

また、支援していく中でいろいろなことがわかった。野宿している間に、携帯電話・銀行口座の名義貸しで僅かなお金をもらい犯罪に荷担していたので警察と一緒に相談に行った。また自分名義の携帯を2社で9台契約しており1ヶ月の支払が5万円近くなった。担当C.W.と連絡をとりながら生活費の話をして何とか説得して携帯電話1台を残し一緒に解約に行く。居宅保護が始まって1ヶ月位の頃、警察、福祉事務所などにいき、金銭管理・服薬管理の不服を申し立て、被害届をだしたいと訴えたこともあった。

約1年前、9ヶ月間続いた仕事を辞めた。仕事に就いた最初の頃は、時間内にうまくできないので辞めたいと言うこともあったが、職場のスタッフのきめ細かな声かけで何とかのりきっていた。最終的に仕事を辞めた直接の原因は仕事に関係することではなかったと思われる。今まではお金を自由（＝無計画）に遣っていたのにそれができない、アルコールの問題、好意をもっている女性に自分の気持ちが受け入れられない、…など様々な要素があったと思われる。

その後も継続的な支援は行っている。現在Tさんが使える制度は生活保護法と障害者自立支援法である。障害者自立支援法ができて「措置制度」から「支援費制度」に転換され、選択できるようになったと言われるが、利用できる社会資源がないことには選択の自由はない。今のTさんの状況を考えると、使える具体的な社会資源は、仕事を探すための援助である就労移行・継続支援（通所授産施設）だけである。Tさんのように、釜ヶ崎支援機構に相談に来ている人たちの中には、使える既存の社会資源がほとんどない知的障害者が実に多い。アルコール依存症の治療も考えているのだが、一般的に行われている治療プログラムの枠組みでは難しいのではないかと悩んでいる。

再び野宿にもどらないための支援として、金銭管理、服薬管理を釜ヶ崎支援機構では行っているが、一民間団体の支援だけでは当然不十分であることはわかっている。社会的に排除されないということは、生活保護を受給して現金給付を受けるだけではなく、社会の中でどうやって居場所、ゆっくり話をきいて個別対応できる環境をつくるのかということになる。

7.6 家族が支えてくれるという「神話」

家族は当たり前存在していて支えてくれるものと、みなさん思っていないだろうか。核家族化がすすみ、単身世帯がこれだけ増えたにもかかわらず、まだ「家族は支えてくれる」という「神話」を信じていることができるのか。ただ、現在の日本社会は、この「神話（家族の援助）」を前提として様々な制度がつけられていることだけは確かである。介護保険も障害者自立支援法も、家族が介護・援助して足りない部分だけ、すべてにおいて最小限のサービスしか提供されないのが現状だ。では支援してくれる家族がない場

合はどうなってしまうのか。

今回話を聞いた事例をみると、調査対象者の年齢が20代から30代が多かったこともあり、家族とは主に親や兄弟になるが、社会が前提としていない家族（崩壊した家族）が存在していた。

施設で育った、小さいときに両親が離婚して片親の場合は、不利益を被ることはあきらかである。

【30代後半男性】福岡県の出身。4人兄弟で小学生の時に、両親が離婚、夜逃げする。その際、一人だけ父親（「亡くなったらしいですね」とのこと）について広島へ。福岡にいたときまでは小学校に通っていたが、それ以降は学校には通っていない。

また、親はいるけれども長い間連絡をとっていない、様々な理由から親との関係が悪い場合も援助は望めない。

【20代後半女性】父親は普段、真面目だが、酒癖がわるく、呑むと人が変わったように暴力を振るう。

【30代前半男性】父親は離婚してどうなっているかわからない。母親は現在70歳代前半。家族は母、姉、兄、自分、弟。姉は結婚してその夫のついでに兄に仕事を紹介した。今までは実家の前まで行き、母親が紙袋にお金を入れて窓から投げつけてくれることもあった。しかしそれが姉の知るところとなり、実家の前にいたところ警察まで呼ばれることになった。警官が実家の中に入って母親から「迷惑だからもう来ないでくれ」と言われたと伝えてくれた。

親との関係が悪いわけではないが、援助できるだけの金銭的な余裕がない場合も然り。それに、

【30代後半男性】家族との関係性は良好なので、最終的に実家を頼ることはできるだろうが、この年齢になって親に頭を下げて帰ることはしたくない

というように、プライドというか世間体もある。

今回話を聞いた人たちの中に、妊娠している女性がいた。彼女が置かれている状況は過酷という言葉だけで簡単に表現できるものではない。出産するにしても墮胎するにしても支援していきたいと申し出、話をする機会が2回（うち1回は電話）あった。しかしそれ以降彼女が利用していたネットカフェに行ったが会うことはできなかった。

【30代前半女性：Cさん】Cさんは、幼少の頃は祖母と母親の三人で暮らしていた。兄弟姉妹はいない。物心ついた時から父親はいなかった。祖母が伯父のところから引き取られてからは、家でひとりぼっちだった。母親はパートの仕事をしており、夜遅く帰宅することが多く、お金が家に置いてあり、コンビニやスーパーで夜ごはんを買って食べていた。小学校から中学校にかけていじめにもあった。高校を卒業後、正社員、パートの仕事に就き、母親が病気になったため一人で生計を維持していた。2、3年前からは派遣の仕事をしている。最近の1ヶ月はネットカフェから派遣先の現場に通っている。

ネットカフェを利用するようになったのは、1年ほど付き合っている男性から家を出て自立しろと言われたため。そもその原因はお互いの親の関係が悪いことにある。お金が貯まったら一緒に暮らす部屋を借りようという話もあったが、Cさんの貯金は男性がパチンコでつくった借金返済に充てられている。

産婦人科受診も付き添ってくれるという約束をしていたにもかかわらず、一人で受診、妊娠して

いることを伝えると「(墮胎するのに) なんぼかかるの?」と言われた。「ほんというたら、大切な命だから、殺すわけにはいかない。貯金が100万200万あったら…。がんばりたいのに…。」「子供がいる、いないに関わらず、部屋を借りたい。しんどい、しんどい、しんどいよ。ほんまに部屋借りしたい。1週間は我慢できるけど、そこからは…。」

Cさんと話をしている中で、これ以上ネットカフェで生活するのは、精神的にも肉体的にも限界なので、子どもを生むかどうかも含めて男性と話をし、①一人で生活するために生活保護の相談に一緒に行く、②男性と一緒に暮らす、③実家に帰る、のいずれかを選ばざるをえないということになった。もし一人で生むとして、生活保護を受給するとなれば、母親や付き合っている男性には連絡がいくのかという話になった。母親には扶養義務の照会がいくこと、子どもの父親のこともきかれることになるだろうが、今の状況を勧告してほしいと話をするつもりであると伝えると、自分は貯金も何ももっておらず困っているのに、みんなはなぜ自分を苦しめるのかともらした。生活保護法に限ったことではないが、これだけ家族の形態がかわっているにもかかわらず、かわらない制度の枠組み。世帯(家族)を前提とした社会制度から個人を前提とする社会制度への早急な移行が必要ではないだろうか。

一方、ネットカフェを利用していただけではないが、同じように単身で妊娠していた女性が不動産屋に紹介され、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に相談に来たことがある。現在もかかわりは継続しているが、支援する家族がない彼女の出産・育児をどのように社会が支援していくか、その過程の中でどのような社会資源を活用し、どこに問題があったか、この機会に整理しておく。

【20代後半女性：Iさん】妊婦の定期検診をうけてない状態で、アパートを紹介した不動産屋が心配して相談に連れて来た。釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に来たときはすでに生活保護を受給しており、妊娠6ヶ月の状態だった。

Iさんは、九州の出身で4人姉妹の末っ子として生まれた。父親は離婚して物心ついたときには家にはおらず、現在田舎に母親がいるはずだが音信不通、姉妹とも連絡をとれない状況である。子どもの父親と大阪で知り合い、妊娠を知らせるとぶつ切り連絡がとれなくなり、住み込みで働いていたが解雇され、途方にくれて死のうと思ひ死にきれず警察に相談して緊急保護してもらえる施設に入所、居宅保護になって一人暮らしをしていた。

近所の産婦人科の病院に定期検診に行ったとき、「お父さんは?」と言われて、父親がいないと出産できないと思ひ込み、その後一切病院に受診していなかった。まずは出産の援助から。釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に来る相談者は、ほとんどが男性で女性の相談者はめずらしく、今までの相談業務で初めて経験することが多かった。最近母子手帳をもらったらどこで出産するか分娩予約を病院にとらなければならないことを初めて知った。Iさんと生育歴・生活歴の話をするなかで、軽度の知的障害があるのではないかと疑い、本人も不眠を訴えていたので、公立病院の精神科に受診し、精神科の医師からの紹介で公立病院の産婦人科受診、ベッドを「無理矢理」確保した。確保した後は、担当区の保健師にIさんの状況(援助してくれる家族も知り合いもないこと、軽度の知的障害があること)を伝え、全面的な出産の援助を、福祉担当者にもIさんの生活歴、病院受診での医師とのやりとり、出産後の支援体制などの話し合いを何度も繰り返した。無事出産した後は、関係機関(福祉担当者、保健師、児童相談所担当者)と調整・連携をとりながらの育児の援助。当初は母子寮だったが、子どもの発育が悪く、母子分離をして子どもは乳児院、母親は居宅保護になった。また、精神科受診して主治医と相談しながら療育手帳(B2)取得、障害者自立

支援法を活用して、ヘルパーを導入、通院同行、家事援助などの支援を行っている。同時に、大阪市の社会福祉協議会が行っているあんしんさぼーとを利用した金銭管理の手続きの開始、それ以外にも現在中断中だが、戸籍を悪用されて偽装結婚、だまされてつくった債務の問題などで弁護士への相談同行など、まだまだ問題は山積している。

去年の冬に、本人から久しぶりに電話があり、ボランティアの女性に部屋の様子を見に行ってもらった。そのとき、お金を貸してほしいとの申し出があったので、食物(現物)だけを購入して帰ってきてもらった。何か問題が発生しているのではないかと考え、最近の状況をあんしんさぼーとのメンバーとヘルパーからおしえてもらい、酒量が増え、お金の遣い方にも問題があり生活が乱れているとのことで、福祉事務所、保健師、あんしんさぼーとのメンバー、乳児院のスタッフ、ヘルパー、釜ヶ崎支援機構スタッフでケース検討会議が開かれた。そして現状報告とそれぞれがどのような役割を担いIさんの生活を援助していくのかという確認がなされた。

Iさんの場合、一番の問題は、初期の段階で社会的責任を担うべき公的機関の人たちが役割を果たさなかったことだと考える。Iさんのケースワーカーではないが、現金給付や医療券発行の事務作業だけをしてあげばよいと考え、ケースの置かれている状況を把握する責任を放棄し、それを「自己責任」、「自己決定」という言葉で片付ける(言い逃れをする)ケースワーカーが増えている。Iさんは自分が困っていることを相手にうまく伝えることができない。それも含めて担当ケースワーカーは把握していたし、保健師もIさんが定期検診を受けていないことをわかっていたにもかかわらず、動こうとせず、支援する人間が入ってはじめてうごきだすという有様だ。一人のケースワーカーが抱えているケース数が多く大変な状況であることは理解できるが、本来は福祉担当のケースワーカーが中心になり、使える社会資源の連絡調整、開拓を行わなければならない。Iさんの場合は、当初は釜ヶ崎支援機構スタッフ、出産、療育手帳取得後は保健師やあんしんさぼーとのメンバーが中心になって支援を行っている。支えてくれる家族がいない人たちにとって、最後に支えてくれるのは社会しかない。現在の社会において活用できる社会資源は、質も量もまだまだ不十分であることが言える。

7.7 おわりに

ネットカフェや自立支援センターで聞き取りをした人たち、釜ヶ崎支援機構福祉相談部門に来る若年者は、仕事があるが収入が少ない「労働者層」、仕事なくなったため貧困状態に陥っている「失業者層」とひとくくりにはできない、家族(もしくは地域社会)が解体するまでは、家族や地域が何とか支えてきていた、病気や障害などをはじめとする個別具体的なそれも複雑で多岐に渡る問題をかかえる「個人」だった。そのため貧困状態から抜け出し安定した生活をおくるためには、仕事を斡旋するだけではなく、あらゆる面での生活の保障が必要になってくる。そこでまず生活保護を受けて最低の生活の保障という話になるのだが、生活保護を受ければそれで問題(「事件」)は解決したと考える人たちも多い。しかし、上で紹介した事例をみてもわかるように、一番の問題は、生活保護にかかってから、今までは家族が支えていた部分を社会の責任で、如何に連携をとりながら社会資源を活用し継続的な支援を行っていくのかということになる。ただ、家族を前提としている現在の社会制度では限界がある。支援していく中で明らかになっていく社会資源の貧しさをもっと訴え、考えなければならないのではないだろうか。

今の世の中の仕組みでは、貧困状態に追いやられる人たちがいなくなることはない。それどころか貧困状態に追いやられる人たちが大量生産され、ホームレスの中心は40代半ばだと言われるまで5年も必要ないのではないと思う。30代後半の若者の一人として、こんな救われない社会の中で生きていくのは絶

対にイヤである。この押し付けられた社会の中で生きていくしか仕方がないとあきらめるのではなく、今の社会構造・制度を疑って、誰もが安心して生きていける社会を目指すためには、少しずつでも現場から声をあげていく以外ないのではないだろうか。

第8章

「不安定就労・不安定住居者」に「既存の施設」は対応できるのか？

「保護施設」職員
山下 銀二

8.1 はじめに

約3年前、当時求職中であった私は、無料の求人情報誌で見つけた「日払い」の仕事に就いていた。大手家電メーカーの工場で、新製品の電子レンジのドア部分を組み立てる仕事だった。工場全体では大きく5つのラインに分かれていて、それぞれ30人くらいの労働者が働いていた。年齢はまちまちで、男女20歳代から50歳代までまんべんなく働いていたように思う。

私より先に働いているので、長く働いているのかと思っていたが、よく聞いてみると、長い人でも3か月くらいで、このラインが出来てから働き始めたということであった。仕事の継続は流動的で、生産目標によって人員が決められ、明日からは仕事が無いということもしばしばで、工場で働いているが基本は「日雇い労働」なのだ。

メーカーの下には製造を請負うための子会社があり、その下に比較的大手の派遣会社が入っていて、もうひとつ下に労働者を供給する会社が入っている。雇用形態は、「派遣」ではなく「業務請負」である。指揮命令はメーカーの子会社の社員が行っており、問題になっている「偽装請負」。おまけに「二重派遣」だ。

私が登録していた会社は、派遣業の登録もしておらず、「業務請負」という形の労働者供給を行うことを専門にしている会社だった。交通費も出ないうえに、「安全協力費」という名目で1日につき200円ピンハネをされており、実質手取りは5,800円（税込み）ほどにしかない。そんな低賃金のうえに不安定な労働に従事し、その収入がすべてだという労働者がたくさんいることに驚いた。

遊んでいても仕方が無いので、小遣い稼ぎのつもりでいた私などは少数派で、30年ほど昔に働いたことのある日払いの製本のアルバイトを思い出した。「ワケ有り」の人が働いており、お互い会話も無く、疲れ果てうらぶれた雰囲気のある漂う職場を思い出した。家電メーカーの工場との違いは、大きな印刷会社だが直接雇用されている「臨時工」だったことだ。

私が働いていた家電メーカーの工場もそんな雰囲気、昼食などは社員とは別の薄汚れた食堂をあてがわれるなど区別されていて、みんな無口で、工場の床にダンボールをひいて休憩するというのが当たり前だった。1か月ほど働いたが、突然、「明日から待機して下さい」ということで、仕事をクビになったのをきっかけに、そこを辞めることになった。

こんな悲惨な前近代的な労働を強いられている現状を見て、このようなことが当たり前になっていくと大変な事態になるなあとには思ったが、当時は、「日雇い派遣」や「ワーキングプア」ということに、それほど深く考えることもなかった。しかし、現在の職（ホームレス自立支援施設や生活保護施設の）に就き、「生活困難な人たち」の支援をする側になって、マスコミなどでの「ネットカフェ難民」の取り上げられ方に違和感を持ちつつ、しかしながらも、テントや小屋がけなどで生活する野宿者問題とは違うかたちで現れた「新たなホームレス問題」として看過することは出来ないな、と思うようになった。

そんなおり、大阪における「不安定就労・不安定住居者」の「聞き取り調査」が行われ、調査から野宿直前か野宿状態にある、「ホームレス予備軍」としての層の存在が見えてきたことなどや、また最近、「保護施設」などの入所者に野宿経験が短いかまったく無い人が少なからずいることもあり、積極的な対策を急ぐ必要があり、それに対して既存の「保護施設」などが、どう役立てるのか考えていく必要があると思った。

分析的あるいは研究的な報告については、私の能力の許容を超えるので、もっぱらここでは、現場からの「声」というか、私が働くような「保護施設」などに何が出来るのか、あるいは何が足りないかについて述べてみたい。

8.2 「保護施設」あるいは「自立支援センター」では何が行われているのか

ここで取り上げる「保護施設」とは、生活保護法第三十八条が定めるところの「救護施設」「更生施設」「医療保護施設」「授産施設」「宿所提供施設」のうちの、「更生施設」である。特に、大阪市では「釜ヶ崎対策」としての役割が大きかった。「大阪市立更生相談所条例」の改定があり、各区保健福祉センターよりの直接の入所が可能になり、釜ヶ崎を拠点とする日雇い労働者だけでなく、詳しくは述べないが様々な生活困難をかかえる人たちの受け入れの割合が増えつつある。

「教科書」的にいうと、「身体上または精神上著しい障害があるために日常生活を営むことが困難な要保護者を入所させ生活扶助を行うことを目的」とするのが「救護施設」で、「身体上または精神上の理由により養護及び生活指導を必要とするよう要保護者を入所させ生活扶助を行うことを目的」とするのが「更生施設」で、文面ではその違いがよくわからないが、要するに障害の重さや生活困難の度合いの違いがあり、「更生施設」の場合には就労自立にむけた指導にも努力しているのが特徴的である。

独自のルートで開発した就労への援助があり、職業紹介所との連携などもある。なかには就労指導の専門部署を設けている施設もある。入所者へは就労のための「貸与金」制度や、就労に伴う「食費」の補助などもある。生活指導や援助では、借金問題や法律問題の解決のための援助や、施設への住民票異動により住所を定めるなどもしている。また退所時には、新たな住居を確保する援助や、どうしても就労自立が困難な人には居宅保護申請の援助も行う。また、退所後のアフターケアとしての「通所事業」もある。専任の相談員が配置され、退所者への継続した援助にあたっている。高齢に伴い介護が必要になった退所者に対して介護事業所の情報の提供、日常生活の見守りや、アルコールやギャンブルで生活破綻寸前になった退所者への援助などもある。なかにはOB会を組織し地域でのボランティアや、施設を地域の行事に提供している施設もある。

このように、ありとあらゆる利用者のニーズに応える態勢がつくられている。また、様々なニーズに対応するための社会資源とのネットワークを作る努力もされているのも大きな特徴である。それに「施設」という、物理的にも人的にも「拠点」としての機能を持っていることである。

ちなみに大阪市内には、「市立更生相談所一時保護所」と公設民営の「大淀寮」「淀川寮」の3か所の「更生施設」があり、定員は395名だ。また、「救護施設」は10か所、1,068名の定員がある。大阪府下や、大

阪に本部がある法人が持つ他県にある施設を入れると 3,000 名近くなる。

次に、「自立支援センター」ではどうだろうか。

大阪市では、「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」が 2002 年に施行される以前の 2000 年には 3 か所がオープンし、2006 年に 2 か所増設され、全体で 490 名（大阪市健康福祉局の発表による）の定員となっている。入所期間は基本的に 3 か月で 6 か月までの延長があり、就労による自立をめざしている。

公共職業安定所からの出張窓口や、運転免許証やホームヘルパー資格の取得のための技能講習があり、就労開拓員も各自立支援センターに配置され、就労自立のためのサポートが行われている。また、「更生施設」で行われているような様々なサポートも行われている。就労のための住所（住民登録）設定や、借金問題の解決など法律問題も「大阪弁護士会」の協力で各自立支援センターでの法律相談や、健康問題でも単給による医療扶助があり、多様なサービスがおこなわれている。自立訓練のためのサテライト型の施設も、今年度から 2 か所になった。詳しくはふれないが、そのサービスについても各自立支援センターのもつノウハウにより、それぞれ特色があり、利用者の各種のニーズに応えられるようになっている。

長々と、「更生施設」と「自立支援センター」が行っていることについて述べてきたが、「聞き取り調査」などからみた「不安定就労・不安定住居者」のニーズに即応できる能力が蓄積されているということだ。うまく「使えば」、有効な施設だということがわかる。

8.3 では、どう使うか使えるか

さて、これをどう活かすかである。こういう施設は、当事者にとっては「敷居」が高い（実はそうでもないのだが）。自分で福祉の窓口へ直接行くか、公園などにいるときに「運よく」巡回相談員に声をかけられなければつながらない。また、入所条件でも「自立支援センター」入所は、当事者が現在「野宿状態」であることが原則条件とされているため、「ネットカフェ」や「サウナ」や「ファーストフード店」などに居ると巡回相談員から声をかけられることも無い。また、大阪市では、「野宿者巡回相談室」から「舞洲アセス」へ、そして各「自立支援センター」というルートが確立されているため、緊急性のあるケースに即応するのは難しい。

また、「保護施設」へのルートは、「体調の不調」を訴えて窓口へ行くか、言葉が悪いが「運よく(?)」病気で倒れでもしなければ、なかなかつながらないだろう。

どちらも区役所へ行くか公園など「巡回」に遭遇しなければならない。ましてや、市立更生相談所は釜ヶ崎の中にあり、気楽に行ける様な所に無いのが現状である。梅田や難波の地下街などに相談窓口があれば身近になる。コンビニやネットカフェなどに、相談窓口の案内や使える施策などを載せたフライヤーなどが置いてあれば、もっと身近になるだろう。

宿所提供や食事の提供など緊急対応の必要性がある時など、施設の「本領」が発揮できる。すぐ対応できるベッドはあるし、食事も用意できる。24 時間対応の態勢ができています。母子施設などにあるような「緊急枠」を行政が認めれば、すぐに実行できる。

新たなものでなくても、既存のものに「潜り込ませれば」よいのではないかと。何度も言うようだが、施設には「就労」「生活」「医療」「法律」に関するノウハウが蓄積されている。

困ったときの「生活保護」はその通りなのだが、一時的に「羽を休める」必要がある場合もある。いかにフォローを継続できるかを考えると、「保護施設」や「自立支援センター」の機能を使わないというのは、今ある施策を活用するという点で、得策ではないと思う。

8.4 おわりに

良いことばかりでないのは承知だ。既存の「施設」には、様々な問題点もある。「相部屋」「規則が厳しい」「自由が無い」など、管理・運営面での批判。「保護施設」は、生活保護法による「施設保護」で入所することになるために、「気軽に」入ることが出来るわけではない。テント・小屋掛けでないので、巡回相談に「遭遇」する機会が少ない。自立支援センターには入所期限があるため、ゆっくり出来ない。などなど。

いま、必要（福祉的対応を）としている人がいるなら、「入りやすく（福祉が）」「出やすい（プイッと出るのでなく）」ものが必要だと思う。もっともっと議論を。

この「調査」にしても、すべてではない。大阪における不安定就労の実態、そこに働く労働者の人数や賃金や雇用形態、住環境、地域分布、家族関係など、「不安定就労・不安定住居者」のニーズはどこにあるのかを知るための調査が必要だ。

すでに今年度から、「住居喪失不安定就労者サポート業務」が始まっている。施策が「不安定就労・不安定住居者」にとってより良いものとするために、さまざまな立場からの議論を深めていく必要がある。問題は「入口」と「出口」だ。どちらも結局のところ、この「社会」だということだ。言いたいことは山ほどある。

第9章

なぜ「彼ら」はそんなにも語ってくれたのか

大阪市立大学大学院創造都市研究科
都市共生社会研究分野
菅原 智恵美

今回の調査は、前半（6～7月）に深夜営業のネットカフェ・漫画喫茶（24時間営業のファーストフードを含む）を利用している人たちを中心に、後半（10～12月）は自立支援センター利用者を中心に聞き取り調査を行った。これら前半・後半の調査を通じて私が感じたことや私なりに見えてきたことを、まだ未整理のままだが、覚書として記しておきたい。

9.1 前半（ネットカフェ等利用者へ）の聞き取り調査を通じて感じたこと

9.1.1 調査のようす

私自身、ネットカフェの利用は一度しかなく、また漫画喫茶については一度も利用したことがないので、そこがどういう場所で、どういうシステムなのか、どのような人々が利用しているのか、こうしたことについては全く知らなかった。今回の調査で店舗前に立ち、意外に思ったことは幅広い層の人が利用しているということだ。若者も多いが中高年層の人たちや高齢者の人たちなども多く利用していた。また旅行で利用している人もいれば、会社へ行く前に、あるいは会社帰りに利用しているなど様々であった。会社帰りの利用者の中には自宅が遠く、仕事の終わる時間が遅くて、帰宅するための交通手段がなく、仕方なくそこに泊まっているサラリーマンの人もいた。想像していたよりも利用者層の幅の広さに驚いた。

前半のネットカフェ深夜営業利用者への聞き取り調査は、大阪府下にあるネットカフェ店舗の出入り口や店舗に通じるエレベーター前に極力店舗営業の妨げにならないように立ち、利用者への調査依頼を行った。対象者となる人は見た目では判断できないので、旅行者等、対象者として明らかに該当しない人以外に調査依頼の声をかけていった。私の場合、闇雲に声をかけたため、こともあろうにマンガ喫茶の店長に声をかけてしまい、その後その店舗の前では調査協力依頼がしばらくできなくなってしまった。

調査の時間帯は夜間と早朝だった。夜間はナイトバック（夜間の決まった時間に受付が開始され、朝までの利用料金が割安になるサービス）開始時間の午後10時か11時ごろに駆け込む人たちや店舗前の料金表を確認している人を中心に調査依頼の声かけを行った。早朝の場合も夜間同様、店舗前に立ち出てくる人に声をかけた。時間帯はナイトバックを利用し延長しなかった場合の時間帯である午前6時ごろから行った。朝の調査の場合は、これから仕事に行く人、派遣会社に仕事を探しに行く人も多く、その人たちは足早に私たちの目の前を通り過ぎてしまい、調査への協力を依頼しても断られることが多かった。また

「後日ならいいよ」と調査依頼のチラシを受け取り、後日の協力を約束してくれた人もいたが、しかし実際に後日聞き取りを行えたことはほとんどなかった。早朝・夜間の時間帯に限らず、調査依頼に対しては「うるさい」「面倒くさい」「ちがう」という返事や、無視したり怒鳴ったりなどし、協力依頼を断る人も多く、聞き取りがまったくできない日もあった。見ず知らずの人にいきなり声をかけられた時のそういう対応はごくごく当たり前の反応だろう、とも私は思った。

9.1.2 調査協力者の「無防備さ」

しかし一方では、調査に協力してくれた人たちがいた。私が今回の調査に従事して強く感じたことのひとつ、それは調査に協力してくれた人たちの「人の良さ」というか、ある種の「無防備さ」である。調査協力の理由に関しては、抱える課題が困難で「相談する人がほしかった」という人もいたので簡単に「人の良さ」「無防備さ」とひとくくりにはできないのかもしれないが。

調査員は調査を依頼する際、自らの所属や調査の趣旨などを説明する。しかし、声をかけられた側にしてみればいきなり見ず知らずの人に、それも紙袋や調査票を片手に持った人たちに「ちょっとそこでお話を聞かせてください」と言われる。そして近くのファーストフード店などに連れて行かれて、自分の生い立ちやこれまでの仕事、家族関係など、私的な事柄について質問をされる。「普通感覚」からすれば、警戒してそんなものは相手にしない、そのようなシチュエーションである。

しかし実際には、調査に応じてくれた人たちが少なからずいたのである。もちろん、調査員による事前の説明を聞いて一定の「安心感」はあったのかもしれないが、それにしても、近くのファーストフード店まで足を運び、自らの生い立ちやこれまでの経緯、現在の心境や当時の心境、困っていること等についてかなり詳細に話してくる人がいるということ、このことは私にとっては驚きだった。私は「なぜここまで丁寧にそれも詳しく話してくれるのだろうか」、調査依頼をしておきながら勝手なことを思ってしまうが、このことが不思議でならなかった。ある人は自分の家族関係について、また酒気帯び運転でつかまり裁判所にも出向いたことなどを話してくれたり、住民票や手帳の中身や携帯電話の使用料金明細の控えなども調査員に見せてくれたりした。また、家族との不仲や借金、病気、さまざまに抱えている「私的な」問題などについても話してくれた人もいた。なぜそこまで、しかも街中で初めてあった人に、「無防備に」接することができるのかが不思議でならなかった。

人と人との関係が薄れている今の社会のなかで、人間関係や生活のしんどさ、身内のもめごとや借金など、「私的なことがら」については他人には話さず、隠しておきたいというのが「普通」なのではないかと、私などは思ってしまう。それをなぜそこまで無防備なまでに話ができるのか。見ず知らずの私たちになぜ語ってくれるのか、それとも見ず知らずの人たち、その場限りの関係だからこそ話すことができることなのだろうか、不思議でならなかった。

この「人の良さ」というか、「無防備さ」は彼らにとってプラスにもマイナスにもはたらいているのではないだろうか。実際にこの「人の良さ」や「無防備さ」が関係しているかはわからないが、調査協力者の人たちの中には借金や騙されてお金を取られたという人も多い。逆に、「偶然飲食店で隣に座った人に仕事を紹介してもらって助かった」、「飛び込みでお願いしたコンビニで雇ってもらえた」などプラスにはたらいているのではないかと思うようなこともある。

9.2 後半（自立支援センター利用者へ）の聞き取り調査を通じて感じたこと

ネットカフェ前での調査後、自立支援センターに入所している人たちへの聞き取り調査を行った。この後半の調査も前半同様、調査協力者の人たちは自らのことを丁寧にそれも詳しく語ってくれた。

そしてかなり強く印象に残ったことは、現在の派遣の渦に巻き込まれているためか全国各地、様々な地域で様々な仕事をしている人が多いということだ。派遣会社の面接後、＜岡山―岐阜―名古屋―静岡―滋賀＞に移り渡り、産業も自動車工場から製紙工場、製菓工場等様々な分野の仕事に就いている人もいる。契約期間が満期になれば次に移る、また雇用条件がはじめに聞いていたものと違ったり、人間関係のこじれから途中で逃げ出したりし、次の仕事を探すという人も多かった。また、もう一つ印象に残っているのが出身地と従事してきた職業についてだ。私が聞き取り調査のメモを担当した人の出身地も様々だったが印象に残っているのは地方出身者が多かったということ、また仕事でいえば自衛隊や住み込みで働けるパチンコ店、新聞配達所で働いている人が多かったように思う。北海道出身で父親は炭鉱の労働者、そして酒乱。酒乱の父親が嫌で中学を卒業後、家を出て働きはじめた人。また、親が昆布漁の漁師であり中学を卒業してからは漁の季節以外は父親と出稼ぎで働いていたという人もいた。生活の困窮のため母親と一緒に生活することができず施設で幼い頃を過ごしたという人など様々な背景を抱えている人たちにであった。生活史のメモを取りながら、個人の意志で選り出したものではなく社会が必然的に生み出したしんどさを抱えた人たちが多いのではと感じた。また、今の社会はこの人たちの層を組みこむことで成り立っている。しかし、その社会は彼らを守ることもせず、関係性が絶たれている——そう感じた。

彼らの生活はとても過酷だ。多く的人是は住み込みで働ける派遣の仕事に従事していた。何とかそこでがんばって働いたとしても、住み込みであれば寮費・食費等・ふとん代等さまざまな名目で給与から天引きされ、手元に残るのはわずかなお金であったり、マイナスになったりするときもある。また契約が切れたり逃げ出したりした後、次の仕事に就くまでのあいだは住む場所がなく野宿する。そして食べるものがなくしんどくなれば、フリーペーパーに載っている派遣会社に電話し、迎えに来てもらう。その生活の繰り返しである。社会の制度やシステムそして家族や友人等、誰にも守られず、逆に制度や人に傷つけられ様々な機会も奪われている。傷つけられちからを削ぎとられている人があまりにも多いのではないか。

9.3 共通して感じたこと

9.3.1 人とのつながりのうすさ

前半、後半ともに共通して感じたことは、人とのつながりが希薄な人が多いのではないかということだ。家族、友人、知人、社会とのつながりが絶たれている。ネットカフェで寝泊りをしている人は、同じ空間で寝泊りをしている人たちに対して関心や関わりを持たないようにしながら生活をしているように感じた。仕事をみても週単位、月単位というような継続的なものもあるが短期や日雇いでその日、その場限りの仕事や人間関係というものが多い。1日の生活を聞いてみても他者とつながる、関わる機会が少ない。あるネットカフェ利用者からは、「人との関係の煩わしさから今の派遣の仕事が楽でいい」「家族がいないときに自宅に戻り着替える」「ネットカフェ内では話をしたり、仲良くなったりということもない」といった声もあった。また借金のために居場所がばれないよう住居を持たず、世間から少し身をひいたところで生きていかざるを得なくなっている人もいる。また、ある住み込みで派遣の仕事に就いていた人からは、各部屋に鍵もない3LDKの寮に3人で生活をさせられたという話も聞いた。そこでは盗難やケンカなど

もあって、「人とつながる」どころか日々の生活で隣人や他人を疑いながら、そしていがみあいながら生活を送らなければならない。そのような生活の中で、誰かと気楽に話す機会があったのだろうか、ましてや自分がしんどいと感じることを話せるような人間関係をもつことなど可能だったのだろうか。聞き取りを通じて垣間見た「彼らの」生活からは、そのような「人間的な」関係性をうかがうことはほとんどできなかった。それどころか、これまでの生活で感じたしんどさ、辛さ、また現在の人間関係や社会に対する諦めなどを抱えたままで生きている。自分の置かれている現状のもたらすしんどさをすべて自らの「個人の問題」として抱えこんでしまっている。私は生い立ちやこれまでの経緯を語る人たちの話を聴いてそう感じた。

また、前半の調査で「必要な支援は？」という質問に「声をかけてほしかった」という回答があった。「困ったことを相談できる人は？」との質問には「いない」「家族は頼れない」「相談できる人はいない」という声も多かった。「住民票がない、住居がない、仕事がない、何を優先すれば安定した生活がおくれるのかわからない」という悩みを持った人もいた。ちょっとした悩みやしんどさを話せる友人や知人、家族とのつながりもない、そして生活や仕事で困難に陥ったとき相談する場も知らない人が多いということも強く印象に残った。翻って、それでは私自身の場合はどうだろう、と反省もさせられた。仕事を失い住居も失えば、田舎の親の元に戻るだろうか、誰かに相談したり助けを求めたりすることができるだろうか。もしかしたら親に相談するかもしれない、しかしその親もおらず一人であればどのようにすればいいのか、私もまたどこへ相談に行けばいいのか情報をもちあわせてはいない。また「本当に」困ったときに「相談」できる人など、私にあるのだろうか。

今回の調査ではNPO職員の人が、それぞれの医療相談、生活相談にもり社会資源へつないでいったケースもある。聞き取りをしていても、もっと早くにそういった機関に相談に行くことができればよかったのと感じることが多々あった。しかし、実際はそういう相談機関へたどりつくことも難しいということも、聞き取り調査を通じて知った。そしてもう一つ共通して感じたことは前述した調査協力者の「人の良さ」「無防備さ」ということだ。

9.3.2 聞き取りの場

もちろん今回の聞き取りは、以後の「持続的なかわり」を前提としたものではなく、1~3時間ぐらいの「つかの間」の、「その場限り」の「関係」のもとで成り立ったものだ。しかし、このはかない「関係」性の中で、彼らはたくさんのことを丁寧に語ってくれた。聞き取りをしながら、「彼ら」にあっては家庭、地域、さらには社会との関係が切れてしまい、これまでの生活はあまりにも孤独だったのかも知れないと感じた。これはもちろん私の勝手な想像でしかないけれども、その孤独な生活の中で、彼らには「人とつながりたい」という欲求がどこかにあったのではないだろうか。調査協力者と調査員の限られた時間、場の中での「関係性」ではあるが、その「場」の中に彼らは「人とつながる」ということを、その実感を、求めていたのではないか、とも私は感じた。そして私もまた、このつかの間の「関係」のなかで、彼らの「無防備さ」や「人の良さ」を感じたのかもしれない。

9.4 識字とつながる

私は聞き取りのメモをとりながら「ああ、識字と同じだ」と感じていた。私は、被差別部落から生まれた識字教室に参加している。そこでは様々な背景をもった人たちが集い学んでいる。識字では、参加者の

生い立ちを丁寧に聴き、そこからその人が受けた抑圧や差別を対象化していく。自分の中に押し込めてしまいたい、怒りや悲しみ、苦しみ、その人が抱えるしんどい部分に自身が、また周りの人がともに丁寧に向き合い、ちからに変えていく作業を行っている。識字は読み書きを学ぶだけでなく、自分を取り戻す場でもある。今回の聞き取りは「調査」であり、抱える問題に向き合い、自分を取り戻す識字のような場所でも機会でもない。しかし聞き取りの中で、自分のことを丁寧に語っている人たちの話を聴いていて、自分（彼ら）でも気づかないしんどさや、辛さ、親や幼少のころの生活に対する思いなど、その「しんどさ」を「対象化」して吐き出しているのではないかと感じた。

ネットカフェ前で調査の依頼をし、聞き取りに協力してくれたある人は調査員の「なぜ近くにある実家で生活しないのか？」という質問に対して、少し考えてから、「今まで考えなかったし、気づかなかったけど、帰らないのは家にいづらいというものもあるかもしれない。正社員で働いているわけでもないし、両親は心配しているのでそのことで気詰まりがあるのかもしれない。こうやって話すまではそんな風に思わなかったけど、それが大きい原因だと思う」と。何気ない質問と何気ない答えかもしれない。しかし、その何気ないやり取りのこの過程は、これまで私が「識字」の現場で見てきた光景と重なるものだった。日常の生活についての語りの中から聴く側があることに焦点をあて、そして語る側は自分の気づかない内にあるものに向き合い、振り返る。これはこれまで識字で行われてきたことなのだ。そしてこの作業はひとりでは決してできない。人とつながることがなくては、そしてつながることを可能とする「場」がなくては、不可能なのだ。

9.5 自らを取り戻し、連帯していく場の必要性

私は調査に参加しながら「識字のような場」がもっとあればと思った。自分の内にあるしんどさを無防備に語るができる場、そしてそれを受け止め、つながっていくことが、そしてもっといえば「連帯」していくことができる場（人）が必要ではないかと。自分のことを語り、対象化することで自分の立っているところを確認できる、そしてその背景にある問題もみえてくる、その問題に対しては、一人で向き合い、闘っていくのではなく、話を聴き、その「しんどさ」を「共有」した人たちが連帯しともに闘っていく、そのような場が必要なのではないか。

調査協力者の中に、子どもの頃の施設で生活していたときの記憶と、今はもはや亡くなってしまった「自分を捨てた」母親への思いと、さらには「怒り」「うらみ」を抱え込んだまま、それらを背負ったまま生きてきている人がいた。このような彼だけではなく、聞き取りに協力してくれた多くの人が、多かれ少なかれ、人にはいえない「重荷」を一人で背負って生きています。このような「彼ら」にとってこそ「識字のような場」は必要なのではないか。これまで自らを語る、振り返ること、他者と共有するということが、そのような機会と場を持つことがなく、抱えきれないほどのしんどさを「一人で」背負って生きていく人があまりにも多いからだ。

生活をしていくための仕事やそのための住居などはもちろん必要だ。しかし、それと同じように切れてしまった、削がれてしまった人間関係を紡ぎなおすことも必要ではないかと思う。聞き取りをしてきた人たちはこれまでさまざまな生き方をしてきている。家族、家族以外の多くの人たちとの、「あたたかな」とまではいなくとも、それなりの「人とのつながり」があるならばまだいい、そうではなく、一切の人とのかわりを絶たざるをえないようなところで生きることを強いられている人たちが大勢いる、このことを知らされた。

こんな感想では甘ったるいかもしれないが、傷ついた人とのつながりや心身に受けた傷や痛み、断たざ

るを得なかった人とのつながりの修復こそ必要なのではないかと思う。そういった場も、支援の中に必要なのではないだろうか。

資料「生活誌」

ネットカフェ生活者調査

1. 男性 30代前半

派遣会社に登録。携帯電話を持っていないので公衆電話から派遣会社に連絡をする。ミナミのオープンスペース5時間500円というインターネットカフェに泊まっている。深夜2時に入店して朝の7時に出る。それまではファーストフード店で100円のコーヒーを飲んでいる。なぜこのインターネットカフェを選んだかという、仕事場（派遣先）に歩いていけると近くに警察があり治安面でも安心なので。このネットカフェには自分と同じような立場の人が何人かいる。しかし声をかけたことはない。

インターネットカフェでは他の利用者が置き引きされたと2回聞いたことがあるのでなかなか眠れない。昼間は大阪市内の図書館をまわったり、あまりにも眠れなくてしんどいときは、デパートの洋式トイレで市販されている眠剤を飲んで「無理矢理」10時間眠ることもある。

食事はファーストフード店で100円のコーヒーを何回か飲む、それ以外は百円ショップで食パンなどを購入、コンビニで食事を購入することはない。体調のことは心配であるが、国民健康保険の期限はきれている。よく下痢をするので「正露丸」は常備薬、「自己管理が大事」なのでサプリメント（ビタミン剤など）を購入して飲んでいる。

最後に仕事に行ったのは2007年4月、食品製造会社。ここは1ヶ月続いていた。日給7,200円で交通費は自分持ちなので手取り6,800円だった。最後の日に熱した食品を足にかけてしまい翌日から仕事にいけないようになった。

この時点で貯金は7万円あった。仕事にいけなくなって数日してから火傷のことで西成労働福祉センターに相談、大阪社会医療センター受診をすすめられ、生活に困っているのであれば大阪市立更生相談所に行くように言われ、三徳ケアセンターに泊まる。その後大阪市立更生相談所からNPO釜ヶ崎お仕事支援部を紹介され求職相談に来る。

しかし仕事が見つからず貯金を食いつぶし、現在所持金は1,200円。

仕事があるときで1ヶ月約12~15万円の収入、宿泊代が約2万円、食費は1.5万円、携帯電話代が0.5万円、それ以外にもサプリメント購入代数千円、交通費や仕事に必要な物の購入する費用などもかかる。何に使っているかわからないが、タバコもお酒もギャンブルもしないがあまり残らない。

実家に両親は健在であるが、30歳を過ぎた男が面倒をみてくれと言うわけにはいかない。

山口県出身。高校を卒業して地元の警備会社に就職。雇用保険、年金はあった。2年でその仕事を辞めてアルバイトの仕事を転々としていた。この間のことは話をしてもらえず。ただ24、5歳で免許取消しされている。

27歳で初めて大阪に来る。しかし大阪でうまくいかず、すぐに実家（山口）に戻る。実家にもどってからアルバイトをして給料16.8万円もらっていた。28歳のとき荷物を実家に置いて当面必要な衣類などをもって再び大阪へ出てくる。

テレビなどであいりん地区のことは知っていた。あいりん地区の敷金なし、家賃2.3万円のアパートに入居、北区の人材派遣会社に登録していた。

いろいろな職種の仕事をした。一番賃金よかったのは携帯の組立（10,500円/日給）、それ以外にも引越、冷凍庫内作業、ビデオの組立・洗浄、製本の仕事など。日給がもっとも安かったのは3時間で3,800円。派遣会社から仕事を紹介してもらえないときは、労働福祉センターから飯場に行った。毎日仕事をし

ているにもかかわらず、服代、寮代などで2万円の赤字になり、交通費だけ貸してやると言われて飯場から出てきた。

しかしその派遣会社に登録する人が多くなり、仕事がまわってこなくなり始める。派遣会社に仕事の申込をするのは前日の午後3~6時、その間こちらから電話をかけて仕事を紹介してもらおう。できれば毎日仕事があるところを紹介してほしいと会社に言うと人間関係が大変な職場にまわされたりして嫌がらせをされたこともある。人材派遣会社から紹介された会社から靴・手袋・作業着などが必要ということで6,000円購入したが1日だけしか仕事がなかったこともあった。大阪府北部にある工場に仕事にいったとき、現場まで交通手段がないのでタクシーを使ったら交通費が1万円を超えたこともあった。このときは交通費の半分を返してもらったが、ひどいときなど現場まで行って仕事がキャンセルになったので別の現場に行ってみようと言われて、仕事もせず交通費だけ自己負担することもあった。「立場的に弱く、仕事をせかされるのは仕方がない」。

仕事が減少してきて、家賃を払う分だけのお金はあったが、これから仕事がなくなったらどうしようということで余裕がなくなってきて、家賃1ヶ月分を滞納、大家と交渉して家賃を待ってもらうようにした。しかしある日仕事から帰ってきたら、勝手に部屋の鍵が開いており、荷物はなくなり、大家からのメモ（家賃を支払うまでは荷物は預かるという内容のもの）があった。すぐに大家に、「これはひどいのではないか」と電話をする。その日の午後、2人の男性が部屋にきて扉をガンガンたたき、「屋間えらい口のききかたしたらしいな」と言われ、結局家賃滞納分を支払って、2006年夏ごろ部屋をでた。

その後はインターネットカフェとドヤで寝泊りをする。お風呂に入って洗濯するときはドヤ、それ以外はほとんどインターネットカフェで泊まる生活をしている。

仕事の減少、先行きの不安から部屋は借りていない。部屋を借りるお金があったのだが、当面の生活費が必要だったので部屋を借りることはしなかった。また、家賃を滞納して勝手に退去させられるのもしんどいと思っている。

人材派遣会社に登録していたときは、仕事の後、ハローワークで求職活動をし、賃金を派遣先までもらいに行っていた。希望としては正社員で本が好きなので印刷（製本）関係の仕事を探しているが、免許がない、住所がないなど条件が合わない、勤務地が遠い（摂津・旭区・東大阪市など）ので交通費、当面の生活費をどうするか見通しがつかないのでどうすることもできない。

その後、支援が始まる。自立支援センターに過去入所していたことがわかる。

お仕事支援部の内職センターで仕事をする。内職センターでは一生懸命がんばっているものの、作業のスピードアップがなされず、もしかしたら療育手帳を取得できるレベルではないかと考えられる。そして、住吉・住江公園就労体験事業（1日6,000円+昼食代+交通費、8:30~17:00（7.5時間）、13日間×2ヶ月）に参加就労体験事業で貯まったお金をもとにアパートを借り、そこに住民票を設定、療育手帳B2を取得した。しかし、最後の就労日に姿を現さなかった。彼の部屋に来た郵便物を確認したところ債務の督促状があった。

2. 男性 50代後半

「冬場寒いのが大変だった」。今いる自立支援センターの近所のネットカフェに泊まっていた。今年に入ってから2、3月頃、延べで1ヶ月くらい利用していた。いわゆる広義の「ホームレス」状態はおよそ1年ぐらい。友人に教えてもらってネットカフェを利用していた。そのときの収入源はパチンコ。パチンコは今日1万円買っても次の日は2万円負けていた。「それほど甘くないから」。お金がなかったり、暖かい

日は野宿をして過ごしていた（あまりにも暑い日はヤブ蚊がいるので逆に野宿できない）。7時間のナイトパックで1,200円。だいたい0～7時まで利用していた。ネットカフェを利用する時間までは、遅くまで営業しているスーパーマーケットや銭湯に深夜までいた。スーパーは午後9時をまわると総菜が半額になるので、それを購入して夕ご飯にすることもあった。

そのネットカフェではフリードリンクで飲み物は飲み放題、朝になると100円のサンドイッチが売りに出される。携帯電話の充電するための差し込みがある。まんがは読みたい放題。CDもDVDも、TVもインターネットもみたい放題。インターネットは使い方がわからないが、「18禁」もあって寝不足になってしまう。

利用していたのはマッサージのついたイスのところ。1畳のたたみの個室もあるが畳が苦手なのでイスのところにしていて、1.5メートルくらいの高さの囲いがある「個室」。洗濯機もあった。洗濯機を使うのは無料だが、洗剤は100円必要だった。洗濯機は2、3台あったがつねに動いていた。乾燥機もあって20分100円。だいたいそれで乾く。シャワーも無料である。自分が行っていたネットカフェを利用している客層は20～30歳代の人が多かった。「ネットカフェ難民」にあたるかどうかはわからないが、よく見かける顔の人はいた。数は少ないが。

ネットカフェに泊まっているときは求職活動をしていなかった。面接に行くにも交通費がいる。その日の生活も困っていて日銭もない状況では就職活動もできない（借金があることも職安に行くことを止める要因のひとつかもしれない）。また体調も悪くなり、右肩が50肩になり、右が治ったかと思ったら今度は左肩の調子が悪くなり、白内障にもなりかけている。顔にできたしみは図書館で調べて、ビタミンCをとったら、3ヶ月でとれた。

ネットカフェに泊まっていたときの生活は、朝は7時に「ネットカフェ」を出てモーニングに行って350円、昼食はなし、夕食は300円、安売りのスーパーで安い総菜を購入していた。鰯のフライなど他で買ったなら100円するのがその安売りのスーパーでは50円で売っていた。パチンコ屋に行ったついでに、大阪市内（南部）の安売りスーパーで買い物をしていて（買い物のためにわざわざそこまではいけないが、ついでがあれば...）。他のスーパーの定価は安売りのスーパーより2、3割高い。もちろん、原価割れのタマゴなどの「おとり商品」もあるが、「ほかで儲けるからな」。「主婦は高いの買ってって思うけど...総菜なんか定価で買えない」。

タバコは1箱。「わかば」。1箱10本入りのタバコを吸っていたときもあった。携帯電話は昔営業の仕事をしていたときは2、3万円かかったが、今はプリペイド式の携帯を使っていて、それほどお金はかからない。一回3,000円で3ヶ月使えるから、月々1,000円で使えるようにしてもらってる。「（プリペイド分がなくなって）どうしようもなくなったら公衆電話使うけどね」。

去年から家賃が支払えず、1年以上分の家賃を滞納して部屋を追い出された。その間まったく家賃を支払っていなかったわけではなく滞納している分を支払ってはいたが、滞納していくペースに支払いが追いつかなかった。ある日部屋に戻ったら何もなくなっていた。家賃は37,000円だった。

借金はできない。昔自営していたときの負債が残ってるので「ブラックリスト」に載っていて、どこからも借りることはできないと言う。一度、友人の家に免許の更新のために住民票を移したところ、「付録」（督促はがき）がやってきた。それ以降、住民票は動かしていない。

20年くらい前になるけれども石川県で自営で7年間くらい「訪問販売」の仕事をしていた。そのとき倒産したのでその負債が残っている。自己破産しようかと思ったが子ども（娘2人）のためには自己破産しない方がいいとの忠告を受け、離婚して「夜逃げ」した。債務に関して兄弟が保証人になってるのでその兄弟は自分には「いくらか返しておく」と言っていたが、「そんな債務は知りません、（本人以外が）返す

必要はないし、本人を捕まえてどうにでもしてくれと言っている」と聞いた。

石川県の出身で、普通科の高校をでた。実家は農業をしていて、土地もいくらかもっている。働き始めたころ、初任給が2万円程で「おい、あそこの土地1万8,000円らしいで、買うか」と言われたが「土地なんかいるか」と思って買わなかった。「チャンスを逃してる」。

高校を卒業して地元の家電を売る店に10年間営業で働いていた。この当時年金に入っていたか調べに一度いったら、2ヶ月かかると言われ諦めた。月30万円以上の給料があり、ボーナスも70万円くらいもらっていた。

その後独立して家電を売る仕事をはじめると倒産。このとき不渡りをだしてしまっただけで信用がなくなってどこのカード会社からもお金は貸してくれない。10年たったなら時効になるというのが「ブラックリスト」に載っているから「だめ」。20年前廃業して「夜逃げ」して大阪にでてきた。

債務を抱えて、なんとかお金を大阪でつくってくるとでてきたけれどもお金は貯まらない。一度家族に連絡したが、「娘が思春期で（父親に対して）反抗期なので電話してこないでくれ」と言われ、それっきり連絡していない。「お金でもあったら、帰れるけど...」。

大阪に来てからはスポーツ新聞をみて営業の仕事を経験としていた。「塗り替え」や「塗装」、「屋根瓦の滑り止め」の建築仕事の営業一本。「最近は解体の仕事が多いみたいやけど」。

何百万円もするようなサッシをいれる、そのような営業をするためにはいろいろなテクニックがある。玄関のところで「奥さんお金が落ちている」と自分で10円玉を玄関において出てきてもらったり、サッシ入れ替えたら芸能人が宣伝に来る、ここはモデルになりますなどと言ったりする。「信じ込ませたらいいからな」。とはいえ、自分は「誠実」にずっとやってきた。

この仕事は歩合制である。歩合制の場合、基本給があるけれども、行動費として3,000～5,000円もらうことはあっても、基本給など全くない。契約をとってその売買差益が給料になる。景気のいいころは70～80万円くらい稼いだこともあった。しかし翌月同じように稼ぐことはできない。こういう会社はたくさん雇い入れて、たくさん解雇していく。その代表は、スポーツ新聞の求人広告には必ず載ってるアルミの会社である。とはいえ、どこにも必ず「おぼけ」いうのがいて、毎月100万円ぐらい稼ぐ。そういう「おぼけ」だけが会社に残って人を使うようになっていく。一度、「おぼけ」の後をついていったことがあるが、どんなにすごいかな思っただけでいっていったら、地道に一軒一軒同じセールスを繰り返していた。

サラリーマンは9時から5時まで座って決まった給料をもらう。「金魚鉢にえさをもらっているのと一緒に」。職人とはちがうが、デスクワークでじっとしていることはできない。営業は会社でたら自由。家帰ってもいいし、パチンコ行ってもいいし。

一度、和歌山の住宅街、喫茶店もパチンコ屋もない、川しかないようなところに車をつれていかれて、夜何時に迎えに来るから営業するようにと置いていかれたこともある。「左遷、窓際に追いやられるのといっしょ」。スポーツ新聞に求人を出して次から次へと新しい人をいれて営業成績の悪い人間にはこんなことをしてやめさせるようにしていく。

釜ヶ崎には行ったことがない。ここと同じような自立支援センターがあるというが、釜ヶ崎では鍵をかけていても荷物をとられると聞いた。このあたりは静かでもいい。

ここに入るきっかけは大阪府内の区役所に相談に行ったことである。「このままだったら警察に捕まるか死ぬか（しかない）何とかしてほしい」と訴えた。そこで自立支援センターを紹介された。

3. 男性 20代後半

東大阪市の出身。家族は父、母、本人、弟。家族は行方不明。母親は借金を抱えて蒸発、父親は体調を

崩して会社を退職、母親の債務の督促がイヤになり退職金をもって姿を消した。弟とは連絡をとっていたが、弟には彼女がいたし、ここ5年間景気もよく稼ぎもあったので連絡をとらなかつた。困って久しぶりに家に連絡をとろうと思ったら誰もいなかった。

地元の工業高校機械科を卒業、高校では、製造工場などにある機械の修理、CADなどの勉強をした。高校を卒業して、学校の紹介で港湾関係の仕事に就く。具体的には倉庫内の整理、荷物を積んだり降ろしたりする玉掛けの仕事で、社会保険も年金もあった。1ヶ月の給料は手取りで14、5万円だったと思う。ただ仕事時間は8時から17時までであったが、実家からの通勤に約2時間かかったのに加え、サービス残業があり、結局、朝4時30分に起き、家に帰ってくるのは23時頃で睡眠時間が3、4時間しかとれず体調を崩して1年間で退職せざるを得なくなった。その後コンビニの店員を夜勤で1年半していた。アルバイトで1ヶ月22、3万円の収入にはなつたが、オーナーと店長だけが社員で他は全部アルバイト。これから先、社員になることもあり得ないだろうと思ひ辞めた。20歳からは派遣会社に登録して建築日雇の仕事をしている。5、6年前は稼ぎがよく、彼女ができたこともきっかけとなり実家から出て部屋を借りることになる。

三徳ケアセンターは6月初旬から利用している。三徳ケアセンター利用や自立支援センター入所の申し込みは西成区福祉事務所で頼んでいる。申し込みをしたときは、実は堺市内で野宿をしていた。あいりん地区は知っていた。ドヤに泊まったこともある。西成労働福祉センターで建築日雇仕事を探そうと思ひ行ったこともあるが、センターの下をうろうろしただけで、どうやったら仕事に行けるのか全然わからなかつた。手配師から声をかけてくるということもなかつた。「西成」(釜ヶ崎)に行けば、炊き出しがあることも、シェルターがあることも知っていたが、自分は若いし、噂で聞いていたのだが、長時間列に並ばなければならぬなんて考えられなかつた。

なぜ西成区福祉事務所に相談に行ったのかというと、野宿している人が多く慣れていると思ひつたから。生活が困窮状態になってから友人が「数日部屋に泊まってもいいよ」と言ってくれたがそんなことできなかつた。また他の友だちが役所に相談に行けと言ってくれたが「まだなんとかなる」と思ひつたのですぐには相談に行かなかつた。野宿をはじめて1週間目の日、食事もほとんどとれていない状況で、小学生か中学生の子どもが寝ている自分に花火を向けるという事件があつて、「これではだめだ」と思ひつて西成区役所に、「何とかしてくれ」と相談に行った。自立支援センターがあるというのはテレビを見て知つていた。

平成18年に入って夏場と年末に大きなぜん息の発作が起きた。それまでも若い頃からぜん息の発作はあつたけれど、1日仕事を休んで病院で薬をもらえば翌日には普通に仕事に行けた。ただ今回は、病院に通院、2、3日の入院をしなければならぬほどの発作が続いた。住民票は当時住んでいたアパート(大阪市西区：家賃5.6万円/月)においていたが、病気になることなんて考えていなかったので国民健康保険もつくっていなかつた。また病院にかかるようになってからも、1日、2日の通院で済むと思ひつたので国民健康保険をつくらうとは思わなかつた。その結果十数万円の治療費が必要になって経済的に困窮状態になった。

また建築現場で仕事をするとはこりが原因でぜん息の発作が起きるので、仕事に行く回数が減つてきた。当時は、北区にある派遣会社に登録していた。派遣会社は有料の求人誌で見つた。今でも毎週その派遣会社は求人誌に求人を出すような大手である。仕事に行く前日、携帯電話にどここの現場に行つてくれという電話がかかつてきた。仕事が終わつたらお金をもらつて。解体の仕事や荷あげ(ボードあげ)が多かつた。1日9,000円。

現場先の中には派遣会社を通さず直接来ないかと声をかけてくれるところもあつた。派遣会社を通すこ

とで半分くらいピンハネされているのではないかと思う。派遣先を通さない場合、9,000円よりも高い給料をもらうことも多かったが、現場としては少ないお金ですんだと思う。一番多く登録していたときで4社かけもちをしていたこともある。20歳から派遣会社に登録して建築関係の仕事をしているが、夜勤などのきつい仕事もして一番稼ぎのよいときで1ヶ月40~50万円稼いでいた。ただ建築関係の仕事は季節変動があり4、5月など仕事の少ないときは月20万円くらいの稼ぎしかないときもあり、不安定ではあった。

平成19年5月、G.W.明け、家賃を3ヶ月滞納してロックアウトされ退去せざるを得なくなる。その時の所持金はわずか2、3万円だった。その後難波のネットカフェに泊まるようになった。ナイトパックが22時から5時間で個室で1,000円程度だったと思う。だいたい23時から0時から店に行っていた。そこはシャワーもあり、フリードリンクもあった。60~70人くらいのスペースで自分の家のようにそこで生活していると思われる雰囲気の方は4、5人いた。それ以外にも梅田のネットカフェに泊まったこともある。ネットカフェがいっぱいのときは、お金があるときは「西成」のドヤに1泊(1,400~1,500円)、お金がないときはファミレスにいた。だいたい1週間に4、5日はネットカフェを利用していたのではないだろうか。1ヶ月弱くらいネットカフェで生活していた。その間も派遣会社から建築日雇の仕事はしていた。1日仕事をして9,000円で、週に2、3日、1ヶ月10万円弱の収入しかなかった。最後に仕事をしたのは6月の初めだった。10万円弱の収入は食費が1日2,000円、宿泊代は1,000~1,500円くらいでほとんど消えた。携帯代はプリペイドカードなので月1,000~3,000円くらい。タバコはもともと吸わないが、お酒はアパートを追い出されてから完全にやめた。それまではお酒を結構飲んでいて、その酒代も含めて、大手の消費者金融から200万円借りている。生活費にもいくらかは使った。今はどこからもお金を借りることはできない。自己破産できないかなと思っている。

自立支援センターに入所してからも派遣会社からは仕事に来ないかという電話はくる。ただ今はまず体調を整えたいと思っているので仕事に行く気持ちはない。また体のことを考えて建築日雇以外の仕事をこれからは探していきたいと思っている。職安にはネットカフェにいる頃に行ったことがあるが、自分に合う仕事、できる仕事がどれかわからない。それにどうしても日銭が必要だったので手取り早くお金を稼げる派遣にどうしてもなってしまう。収入が不安定なことはわかっているがどうしても生活していくにはすぐお金が必要だった。自分の年齢で福祉の世話になるつもりはないが、早く仕事を探してもう一度やりなおしたいと思っている。

4. 男性 30代後半

福岡県出身。4人兄弟。20年ほど前(おそらくAさんが小学生の時に)、両親が離婚、夜逃げすることとなる。その際、Aさんのみ父親(「亡くなったらしいですね」とのこと)に付いて広島へ。福岡にいたときまでは小学校に通っていたが、それ以降は学校には通っていない。5年前に大阪へ来るまで、広島でずっと生活している。

これまで就いた仕事は数多く、アルバイトを含めると30ぐらいはあるだろうとのこと。半年から1年の長期アルバイトで、当時は派遣ではなく、会社による直接雇用であった。就いた仕事の多くは、建設関係の仕事。製パン会社の夜間工場にも勤めていたこともある。広島での正社員歴は10年で電気工事関連の仕事である。当時広島で「厚生年金」に加入していたかどうかはよくわからない(「払っていたような、ないような」とのこと)。

広島から大阪に出てきたのは、5年前。その理由は、仕事の求人が多いだろうということ、また仕事の単価が広島に比べて高いこと(広島で8,000円の仕事→大阪では9,000円~10,000円くらい)であった。しばらく生活出来るだけのお金を持って大阪に出て来て、1カ月くらいで電気工事の会社に正社員として

就職。大阪での正社員歴は5年とのことなので、大阪ではこの会社にのみ勤めていたと思われる。大阪市内にあるパチンコ店を専門に改装を請け負う会社で、事務員を含め10人くらいの規模だった。月給は24～25万円（正社員時）、寸志あり。雇用保険に加入、「厚生年金」にも加入、年金手帳もあるが、支払いは会社をやめた時点でストップしている。医療保険には、加入していない。当時は住居も会社の近所であり、会社が保証人となっていた（借り上げ社宅）。住民票は大阪市内に置き、現在も市内に置いている。

正社員として雇用されていたが、上司とのトラブルを機に（「会社は辞めさせようとして」）常用雇用（日給月給）へ。給与形態が、月給24～25万円から1日1万円程度へ。仕事の中身は全く一緒。残業も多かった（30時間/月）ので、金銭的にはとくに収入が減ったわけではなかった。

2006年秋に会社を辞める。理由は、「仕事が忙しく精神的に疲れた」とのこと。会社はパチンコ店専門だったため、改装のために許された期間も短く、短期間で仕事を仕上げるために2、3日寝ずに仕事することもあった。会社を辞めると家も出て行かなくてはならず、11月中に出て行けと言われた。とりあえず急いで探して、大阪市内の別の場所に新しく住居を見つける。古いマンションを改築した所で、広さ4.5畳くらい、UB、ミニキッチン付で家賃37,000円。礼金のみ必要。2006年秋から冬に入居。Aさんは「値段相応のマンション」とのこと。ねずみも出た。敷金や保証人もなかったので、月末までに次月の家賃の入金がなかった場合は、そのまま鍵をかけて閉め出されてしまうという契約。チラシ等で連絡のうえ、入金のための猶予期間は3日間。

会社を辞めた後は、2、3カ月精神的にしんどく食事もできなかった。2007年冬くらいからは、職安に行ったり、求人情報を調べたりしながら、家財道具（パソコンなど）の一部を売りつつ生活。結局家賃が払えなくなり、2007年5月のGW明けには、家の鍵を閉められ、着の身着のまま放り出されることになる。服、テレビ、冷蔵庫、洗濯機などは家に置いたままの状態だった。服はその時着ていた服と、上一枚になってしまい、上着はそれを洗濯しつつ着ていた。

1～2週間、ネットカフェや公園のベンチなどで寝泊まりした後、自分で大阪市内の区役所に相談に行く。そして2週間ほど三徳ケアセンター（「あそこまでひどいとは思っていなかった。びっくりした」とのこと）に入り、その後自立支援センターへ入所する。翌月には別の自立支援センターへ移る予定になっている。

住居がなくなる以前のネットカフェ利用は、ほとんど喫茶店代わりとして利用していた。喫茶店では1杯400円くらいするが、ネットカフェでは300円/時間程度で、飲み放題、個室でインターネットが利用でき（パソコンは好きで、MS-DOS時代から利用してきた）、煙草も吸えるから。宿泊の利用は、センター入所直前の1週間程度のみ。数万円持って生活していたが、宿泊、シャワー、コインランドリー、食事を1日1、2食（コンビニのおにぎりなどにして切り詰めていた）、1日3,000円強使っていた。ネットカフェは、知っているところ（夜間3時間1,000円）を利用。探せばもっと安いところもあったのかもしれないが、他に探すのも面倒くさかった。

また、4、5日は、街中の小さな公園のベンチで仮眠をとったこともある。「あんなにしんどいとは思わなかった」とのこと。釜ヶ崎や路上で寝ると、「身ぐるみはがされる」というような悪い噂を先に聞いていたし、横になれないので、路上では寝たことがない。

困った時の相談先としては、役所やセンターを用い、個人的なネットワークは持っていない。NPOは利用していない。広島には、以前は知人がいたが、すでに結婚していてもおかしくない年齢であり、今ではおそらく電話番号なども変わっているだろう。大阪では、友人も知り合いも特におらず、結婚もしていない。家族とも音信不通であり、最終的に頼れるような人はいない。住居を追い出された際、もしもネットカフェがなかった場合は、カプセルホテルを用いたのではないだろうか。ドヤについては、利用経験も

なく、「出来れば利用したくない」。

現在入所している自立支援センターでは、食事と1日300円の煙草代（一週間分まとめてもらう）がある。することが何もなく、本を読んでいるくらい。「あまりこういう所にはいたくない」。

今後は、「普通の生活」をしていくために、とりあえず仕事と住む場所が必要。次の自立支援センターに移ったのちは、住民票を動かし、仕事を探して家を見つける予定。「出来るだけこういう所には長く居たくない」とのこと。仕事さえ見つければ、月々の家賃負担は問題なくなるので、初期費用が一番のネックとなる。入居のための初期費用として25万円くらいが必要。保証人については代行の会社が必ずあるので、心配していない。

仕事については、特にやりたい仕事があるわけでもないが、電気工事関連の仕事の経験が最も長く、手っ取り早く就職するためには、電気関係の仕事をするだろうとのこと。電気工事の資格の二種を持っている（「第二種電気工事士」ではないだろうか。他に、「一種」と「管理」のための資格が様々あるとのこと。「二種」の資格自体は、電気工事組合の講習を2日間受けるとその中で試験に出る箇所を教えてくれ、比較的簡単に資格は取れるものらしい）。

就職して住居を持つという目的を持っている一方で、「将来の生活」について尋ねる中では、「いつまで生きているかわからないし、別に今死んでも特に悔いはない。独り身だし、昔やりたいことは散々やってきたし」とのことである。それゆえ大きな不安を抱くこともないと言う。

現在最も困っていることは、携帯電話が使用出来ないこと（お金を払っていないので発信ができない）。仕事をするにも携帯は必要である。「住居」を確保することに関する行政の相談窓口などについては、インターネットにもかなりの情報があるし、保証人などについても、今はどこでも代行業者があるので問題はなく、それほど必要性は感じていない。

現在の健康状態は、コレステロール値が少し高いとのこと。障害などもなく障害者手帳は持っていない。

借金については、10年くらい前に信販会社に借りた70万円が残っている。サラ金からも、300万～400万程度の借金があったが、昨年返済し終えた。広島時代から返し続け、大阪に来てからは150万円分返した（5～6万/月の返済）。現在ではギャンブル関係は辞めている。

これまでに、釜ヶ崎での就労経験や、ドヤの利用経験はなく、釜ヶ崎に対する抵抗感もある。三徳寮に入った時に初めて行った。「出来る限り近寄りたくない」と考えている。また、釜ヶ崎を知る労働者たちに対しても苦手意識があるようで、つぎに行く自立支援センターは釜ヶ崎も近く、釜ヶ崎の労働者も多くいると聞くと「そうなんですか」とやや不安そうであった。

ネットカフェについては、市内の繁華街、日本橋のネットカフェを利用。ネットを利用して検索。一昨年くらいからネットカフェについての書き込みが見られた。

利用していたネットカフェには、ネットカフェ難民はまあまあいたようだった。大きな荷物を持っていたり、着替えの音が聞こえたりした。ネットカフェでは、他の利用者との会話はまずない。挨拶もしない。店員は、受付に1名。店員との会話も必要最低限しかしない。店員の方も宿泊のために来ている客はわかるだろうが、特に何かを言うわけでもない。

5. 男性 20代後半

大阪市で生まれ、現在まで大阪市で生活してきた。家族は父母と弟の4人である。大阪市内の高校（普通科）を卒業後、印刷工場で10ヶ月間アルバイトをする。やめたのは「精神的にしんどかった」。その後飲食店の調理補助など幾つかの場所でのアルバイトを経て、20歳を過ぎた頃からタコ焼き屋（チェーン店）でアルバイトをする。時給は800円で月に14～15万円の稼ぎだった。この仕事は5年くらい続けた

のだが、その間様々な店に移される。

このタコ焼き屋で勤めている間に彼は実家を離れる。両親との仲は良くなく、弟ともそりが合わなかったという。「実家には帰りたくないですね」。自分でアパートを借りることはできず、その後現在の自立支援センターに入るまで、カプセルホテルやネットカフェ、24時間レストランなどで寝泊まりしていたという（3年以上）。これらの場所から仕事に通う生活を続けてきた。「(カプセルホテルに泊まっていることを職場には) 言えませんよ。家から通っているということになってるんですから」。お金を貸してくれたり頼ることのできる友人もおらず、この間は友人宅に泊まった経験もないという。一番困ったのは食費である。寝泊まりするだけで給料の多くがなくなってしまう。食事はうどんや安い定食で済ましていた。身だしなみについても時々金を貯めて銭湯に通えるくらいであった。私物もあまりもてず、捨てるなどしていた。

2006年冬、勤めていたタコ焼き屋の会社が倒産し、職を失う。「前々からあやしいとは思ってたんですが、いきなりでした」。その後もカプセルホテル等に泊まっていたのだが、手持ちの金がだんだんなくなっていき、最後の方は24時間レストランで寝泊まりする日が続いた。路上生活の経験はないという。「住所がないと仕事が見つけられない」ので、大阪市内の区役所に行って相談すると、自立支援センターを紹介され、2007年に入所した。

2007年現在、彼は派遣会社に登録し、事務用品の卸会社に就職している。就労期間に定めはなく、給料は月に18～19万円。社会保険にも加入している。既に3ヶ月間働いており、住居も確保している（風呂付・家賃45,000円）。現在もアパートから通っていると会社には言っており、自立支援センターにいることは内緒である。「理解ある会社があればいいのに」。仕事はきついが、同僚や上司と酒を呑みに行くこともしばしばで、今度スポーツ観戦に行くことになっているという。これはタコ焼き屋時代にはなかったことだという。

2007年夏中には退所する見込みである。

20代前半からカプセルホテルやネットカフェで寝泊まりするようになり、3年以上その生活を続けた。寝泊まりするのは大阪ミナミ周辺である。仕事のない（仕事を失った）日中は大阪市内の図書館で本を読むなどして時間をつぶすこともあった。

カプセルホテルは一泊2,700円。サウナも利用していた。ネットカフェはナイト料金で700円。お金に余裕のある時はカプセルホテルに泊まっていたが、余裕のない時はネットカフェを、さらに余裕のない時は24時間レストランを利用する。彼が主に寝泊まりしていたネットカフェは、難波のネットカフェである。ネットカフェを利用するのは2週間に1回くらいだった。ネットカフェで寝るのはしんどい。パソコンは職探し等で利用するという。利用客に同じように寝泊まりしている人が多いかはわからない。「他の人と顔をあわせないので」。

「ネットカフェのことはあまりよくわからないんですけど。それよりレストランが多いです。レストランを調べなきゃだめですよ。私もついて行って案内しましょうか。はっきりわかるから。土日じゃないとだめですけど」。自立支援センターに入る前はレストランに泊まるが多かったという。店員に注意されたりしないかと聞くと、「おとなしくしてたら何もない」。市内のファーストフード店や24時間レストランによく泊まっていたという。「24時間レストランは多いですよ」。ドリンクバーだけを注文して朝を待つ。泊まっている人は若い人から中年以上まで幅広く、女性もいたという。

また、深夜営業をしているレコード販売店でも、ホームレスの人がいるという。

今からネットカフェ等で寝泊まりしていた頃を思い返すと、「二度と戻りたくない、やりたくないです

ね。カプセルホテルやネットカフェで寝るのはしんどい」。どんな支援があったらよかったかを聞くと、「声をかけてほしかった」。

6. 男性 30代後半

1年ほど前、東京で精神的な病と診断される。落ち着きがなくて、心臓が圧迫され、偏頭痛がして身体も動かず、仕事が続かないので病院で調べてもらったところ、レントゲンやMRIなどをもって何の異常もなかったのが精神的な病と診断された。投薬され、薬がないとやっていけない。「(その病名の場合は)障害者手帳とかあるんですか?」の問に対しては、「(障害者手帳を)とらないかとも言われたけども、自分としてはこうやって話もできるし、落ち着いて仕事をしたいと考えている」とのこと。

何年前までは関東の刑務所にいた。それまではやくざ稼業をしていたが(30歳代で足は洗ったが、結局やくざ仲間と同じような商売をしていた)、いろいろなことを見てきたので人間不信になり、やり直そうと決めた。やくざ仲間と連絡もとらず全うにやっていくことにする。しかし、入れ墨やこれまでの経歴から仕事に就けない。

出所したときは刑期が短かったので仮釈ではなく満期で出た。お金もあったので、大丈夫だろうとそのまま出る。お金がなかったり、仮釈で出ると施設に入ったりすることもあるが、そうではなかった。

その後、「住み込み」の仕事を探して新聞の勧誘の仕事に就く。この仕事は最初の2週間は3,000円をもらえるだけで基本給はない。歩合+賞金という形で、「1、2、3」という歩合になっている。つまり3ヶ月の契約で千円、6ヶ月で2千円、1年で3千円という歩合。これに賞金がつく。契約は簡単にはとれないので、営業先に新聞をとってもらうために1万円置いていく。1万円赤字にして賞金の獲得に期待するのである。もちろん、販売店から支給されるビール券などは自分のポケットに入れるのでだいたい8千円ぐらいのマイナスになる。最高100件/月として20~25万円の給料をもらったこともある。ただし、ここから寮費として5万円/月とられる。寮費分を稼げず、このままでは赤字になるというところまできたので辞めた。

去年の暮れまでは東京にいた。このころは派遣に登録しようとするもすべて蹴られていた。最近の派遣は身元をきっちりするので、履歴書などでふるい分けする。とりわけ、やくざ稼業をし、入れ墨も入っている。入れ墨が入っていると派遣は登録させてもらえない。携帯電話ももっていないので、それも登録できない要因のひとつ。

お正月に一度、あやしい派遣業者で旅館の厨房の仕事に就いたりした。ひどいところは2日だけで首を切られた。また近畿地方で駅手配から飯場にも入った。このころは人間不信と継続性がなくて遊びに逃げてしまって仕事が続かなかった。「住み込み」の仕事の合間にネットカフェに泊まる生活をしていた。

仕事に就けないので、東京を離れて、四国の実家に帰る。実家に帰るがもともとの家はなかった。ネットカフェで暮らしつつ、兄弟姉妹を頼るが、経済的に苦しく頼ることもできなかった。姉妹とは何か誤解があったのか電話をかけてもとってくれなくなった。

地元の昔のやくざ仲間とはもうつきあいたくないと考えていたので、連絡は一切とらず、大阪に出ることにする。高松から大阪に出ようとしたが、その途中、高松で置き引きにあつて洋服などの荷物をすべて盗られた。1ヶ月ぐらい前に大阪に到着した。

大阪には昔10歳代後半に遊びに来たことがあった。そのときに釜ヶ崎を見て知っていたので、釜ヶ崎に行けば、仕事があると思っていたが、全く仕事がなかった。どうにもならなかった。釜ヶ崎で警備の飯場仕事(7,000円/日、飯代2,700円)が見つかったが、「入れ墨入ってるけど大丈夫か」ときいて、手配師が確認とったところ「だめだ」との返事が返ってきた。また、「兄ちゃんやったら若いからセンター歩

いてたら声掛かるよ」と言われて、何日か早朝西成労働福祉センターに行つてぐるぐるセンターを回つたが、手配師から声が掛かることはなかった。

また、ハローワークには元やくぎの自分がつけるような仕事はない。「99%仕事は（ハローワークに）ない」。求職活動は新聞の求人欄などをみて探すが見つけたことはない。希望する仕事は、人間関係が苦手なので人と対面しない倉庫など工場の仕事を探している。フォークリフトの免許は機会があつてもっている。また、自動車の免許は失効していたが、自立支援センターでは免許の手続きができるということでトラックの運転手の仕事なども考えている。

ネットカフェにはずっと泊まっていた。漫画喫茶は昔から好きで名古屋にいた当時からよく利用していた。名古屋は漫画喫茶発祥の地で20年ぐらい前からあつた。その当時は今のような形態ではなく、350円/時でコーヒーがでるような形態だった。今は本当に便利になつた。フリードリンクで、個室があつて、インターネット、DVDなどが揃っている。シャワーもあつて居心地がいい。いくらでも遊び続けられるので若い子は「30時間ぐらいぶつとおしで遊んだりできるんじゃないか」。ちなみにドヤはまったく知らないで泊まらない。ただし、ネットカフェでは寝にくい。最近は毛布も貸し出してくれるのでよくなつてきているが。

ネットカフェは東京の池袋や新宿にいけば腐るほどあり、大阪とは違う。とはいえ今やネットカフェは全国にある。地元に戻つたときも利用した。東京で利用していたときは、日雇派遣の人が多そうというよりも、パチプロの人が多くのように思えた。自分自身、よくパチンコをしていたので、パチンコで勝つたときは高いところ、負けてお金がなかつたときは安いところを使っていた。また、ウィークリーマンションを利用していたときもある。ウィークリーマンションは10万円/月で、2万4、5千円/週ぐらいかかる。

大阪で利用したネットカフェは大阪ミナミの店舗である。また、ビデオBOXも利用していた。料金が6時間で880円のところや11時から8時間2,000円のところである。

ネットカフェで暮らしていた、当時のお金の使い方はコンビニでお弁当を使って食べていた。朝はパンとコーヒー、お昼はカップラーメンとおにぎり、夜は格安のスーパーを利用して、食費は500円/日ぐらい。日用品は「百均」を利用した。利用者は若い子が多く、30代、40代の方は「ネットカフェ難民」に見える人が多いが、数は少ない。40代を超える人はほとんどいない。だいたい、どのネットカフェにも「盗難注意」と書かれてある。

大阪では仕事も見つからなかつたので食費ほどしか残らず、ネットカフェに泊まることもできなくなつた。2、3日梅田などうろうろしていたが、公園のベンチに座っていたところ、巡回相談員に声を掛けられて、生活ケアセンターに入り、自立支援センターに入所することになつた。

中学を卒業して、10代まで大工・鉄筋とびをしていた。その後やくぎ稼業の道にはいる。20歳代半ばまで実家にいたが、その後やくぎ稼業をしつつ転々として東京へいく。何年か前に刑務所を出るまでやくぎ稼業を続け、その間何回か刑務所に入った。九州の刑務所に入っていたとき、免許を失効した。30代で足を洗つたが、その後もやくぎ仲間と同じようなことをして、その後、「全うに生きよう」と考えるようになった。

借金は40万円あつて、「飛ばしてる」。それは昔何年も前に消費者金融から借りたもの。友達などからの借金もあるが...。以前もっと前にお金を作る必要があつて各地から借金をしたことがある。でもそれは、40万円借りようとしたときに調べたら、10年たつて時効になつていた。

年金は中学を卒業して大工・とびをしていたときにかけていた。それと刑期が合計5〜6年あるのでその期間は免責である。

7. 女性 30代後半

NPO 釜ヶ崎支援機構に2007年6月某日午後、ある市民団体から野宿状態にある女性の相談を受けてほしいと電話があった。その後、彼女が登録している派遣先の社長のご主人から夕方5時すぎ電話があった。現在彼女は大阪で野宿をしている。派遣先として他府県のホテルの仲居の仕事を紹介しているのだが、直接現地で面接をするかどうか先方からの返事待ちである。面接に行くまでの交通費は採用になったとき必要なので支度金を準備することはできるのだが、その間の泊まる場所の援助は難しい。今日は一晩ネットカフェに泊まるだけのお金とNPO 釜ヶ崎に行くまでの交通費くらいは貸すことができると。今日一日は何とかしのいでもらって、翌日9時以降に釜ヶ崎支援機構に来てもらうように伝えてほしいと願う。彼女はプリペイド式の携帯をもっているのだが、新しいカードを入れることができず待ち受け専用になってしまっているが、連絡をとることは可能であると。

翌日朝9時すぎ事務所に電話がかかってくる。日曜日はNPOのスタッフは2人で業務を行っているが、1人が出ていたため電話で場所を案内するが来ないため本人の携帯に電話をして最寄り駅まで迎えに行く。身長は150cmと小柄でガリガリ、紙袋を3つと肩からバッグをかけて立っていた。最初は静かに話をしていたが、途中から興奮して話をする場面が多くあった。聞き取りをしていくなかで、現在不眠がひどく、イライラ、顔面がひきつりだすなどの症状がみられるので、今後支援をしていくなかで心療内科（または精神科）受診が必要と思われたためすすめるも、「自分は精神を病んでいない」と忌避が非常に強かった。

北海道の出身。来年定年を迎える父と洋裁の内職をしている母の3人家族。一人っ子である。中学校、高校を卒業、2年間デザインの勉強をするために専門学校に行く。

専門学校を卒業後地元の広告代理店に正社員（年金・社会保険あり）で就職する。仕事内容は広告の版下、色見本の確認という細かい仕事であった。営業の人が仕事をとってきて、デザイン、色見本の打ち合わせなどをして、版下があがってくるのが夜の10時、それから仕事を始め、翌朝の4時までかかることがざらであった。またその日の間に仕事がすべておわらず、前日の残っている仕事を朝の8時30分から午後10時までにするのも当たり前のようにあった。結局、朝の8時30分から翌朝の4時まで仕事をしており、家に帰るとれる睡眠時間はわずか2時間であった。職場でも忙しく食事をほとんどとることができず、家に帰っても食事をとるぐらいなら睡眠をとりたいということで食事をとらなくなり、そのような生活が続くと体が食べ物を受け付けなくなっていった。そして、色見本のチェックは作業が非常に細かく、少しでも色がずれるだけで100～200万円くらいの損益がでるというプレッシャーの中で仕事をしなければならず、ストレスでさらに不眠、拒食が進んでいった。そのような厳しい状況のもとで、誤植に気づかず版下をだしてしまい会社に大きな不利益を出すことがあった。それをきっかけに半年間でこの会社を辞めた。

その後1週間、病院に通院することなく自宅療養をして次の仕事を探す。

地元でまず体調を整えることを目的に、アルバイト（年金・社会保険なし）で食品の販売の仕事で1年半する。もっと他の場所で経験を積みたいと思い、前職を退職して2、3日後には面接をし、ホテルの中の店で食品販売の仕事でアルバイトではじめた。しかし、ホテルの責任者からホテルの他の業務も勉強してほしいと言われ、自分は今の仕事を続けたいという「嫌がらせ」にあい半年で退職する。精神的に辛くなっており、自分のペースでゆっくり仕事を探したいと思い失業保険を3ヶ月もらいながら、実家で1年間療養する。その後地元のケーキ屋から仕事を手伝わぬかということで販売の仕事でアルバイトをする。しかしこの仕事も体調を崩して退職せざるを得なくなる。

25歳頃から「奇病」になったと言う。「ノドに血豆ができ、胃潰瘍ができ、顔が痺れ、頭の後ろでわん

わん、さわさわ音がした。異様な汗をかいた。急に熱くなったり、寒くなったりすることもあった」。脳梗塞ではないかと思い病院に行き検査をしたが「あなたみたいな健康な人がきたら迷惑です、みたいなことを言われた」と言う。ストレスによる心療内科的な病気は疑わなかったのですかときくと、「自分は精神を病んでいない」「自分はおかしくない」と興奮して何度もこの言葉を繰り返した。心療内科・精神科を受診したことはないと言う。自傷行為をしたと思われる傷の痕が腕にある。それから10年弱は自宅で療養をしていた。この間流動食しか食べられず、下半身不随で歩けなくなった時期もあった。後半の2年間は整体に行き体の神経をやわらげる施術をしてもらったのでこれまでに回復できたと。また家族に頼っているのでこのような病気になるのではないかと思い、30代前半から一人暮らしをはじめた。

一人暮らしをはじめた当初は親からの援助を受け、職安に通った。しかし10年近くのブランクは大きくなかなか仕事を見つけることができなかった。正社員の仕事が難しいと思い、アルバイトの掛け持ちをした。例えば販売や営業の仕事など。しかし収入は月10万円程度で生活は苦しかった。そのような生活を3、4年間続けた後、対面販売ではなくもっとちがったサービス業をしたいと思い、職安で紹介された住み込みの仲居さんの仕事を正社員とする。このホテルは山の中にあり、客室も少なく、職員みんなが家族ぐるみのようなつきあいをしていて、先輩の仲居さんもやさしくいろいろ仕事を教えてくれた。住み込みであったが仕事の時間はきちりしている職場であった。ここでずっと仕事をしていこうと思った矢先、家族のことでどうしても実家にもどらなければならず1ヶ月で退職。その後3ヶ月アルバイトで食いつないでいた。そしてお金を貯め再び実家を離れて仲居の仕事をするために関東の派遣会社に登録するも、派遣会社の世話役が「うっとおし」だったのですぐ辞め、大阪に来る。大阪に来てからは関西圏の温泉地をまわり、仲居の仕事をしたいと直接ホテルの女将さんと交渉をして住み込みで雇ってもらっていた。しかし仕事の条件や他の仲居さんとの関係で「嫌がらせ」が続いたので、仕事をやめて実家にもどる。もどってから、やはりもう一度仲居の仕事をしたいと思い、アルバイトで旅費を貯めながら、今までのトラブルがあったので職安を通さないといけないと思い、職安に通い仲居の仕事を探した。

去年の秋頃職安の紹介で関西にある有名なホテルの正社員として就職する。見習期間が3ヶ月であったが、そのときからシフトが無茶苦茶で就業時間が朝の5時30分から夜の10時30分まで実に17時間労働しなければならない状態であった。それに加え残業代もなし。先輩の仲居さんからは「自分の休みは自分で確保してとらない」と言われた。雇用条件が違うのではないかと文句をいうもかけあってくれず、退職、今年のはじめ、大阪に来て派遣会社に登録、仲居の仕事を探す。

今年の初め派遣会社から和歌山県のホテルの仲居に行くが、ここでも雇用条件が異なっていた。ホテル側からは暴力団が関係している会社から派遣されていると言われ「嫌がらせ」も受けた。条件があまりにも違うので1、2日間で大阪に帰ってくる。

大阪に帰ってからはいくらかの貯えがあったのでウィークリーマンションに滞在する。その間、大阪の派遣会社で知り合いになった女性にだまされお金をとられる。またそれ以外にも仲居の仕事をするのに必要な物も盗られた。ウィークリーマンションにはその月いっぱい生活費が底をついたので出た。この間フリーペーパーでピッキングの仕事などスポット求人日雇の仕事の数回だけだった。

ウィークリーマンションを出てからは、派遣会社から検品の仕事(1時間850円×8時間)を住み込みでしていたが、寮費が6万円+光熱費でお金がほとんどたまらないのでやめた。それから別の派遣会社に登録、三重県の工場に行く。工場に行くといついつ工場見学して説明するからと言われ待機しているも、その日の朝から待っているが声をかけてもらえず、夕方に社員の人に声をかけると今日は工場の見学をする予定は入っていないといわれた。担当者に今日工場見学であったのではないかとときくと、逆切れされる。その様子を工場長がみていて今仕事がないので他の工場にいかないかと言われる。そして他の工場に

いったところ派遣の法律が厳しくなって女性の派遣社員を雇えるところは、前の工場しかないといわれたらい回しにされる。またその工場の寮（普通のアパート）の隣人が自分の部屋の壁をどんどんたたくので苦情を言ったところ、隣人が出てきてケンカになり頭を殴られた。それを近所の人が見ていて警察を呼ぶが、警官が来たときちょうど相手に手をあげたときで、警官をたたいたため、公務執行妨害と傷害で夜 22 時から翌朝 2 時まで警察所で拘留される。自分は悪くなくて相手がけんかをふっかけてきたと話をしても誰もきいてくれなかった。釈放されてから荷物をまとめて翌日部屋を出る。

大阪にもどってきて再び派遣会社に登録するも仕事がほとんど見つからなかった。その間、約 1 ヶ月ネットカフェに寝泊まりをしていた。利用していたネットカフェはナイトパックが 22 時からで 5 時間 980 円、シャワーがある。仕事は日雇のスポット求人、製造工やピッキングの仕事が主だった。これではいけないと思い職安にも行ったが住むところがないので住み込みの仕事しか探せなかった。住み込みの仕事でなければ自分のできる仕事は色々あるのと思ったことも何度もあった。

残りの生活費がわずかになってきて消費者金融からお金を借りようと思ったけれども、仕事をほとんどしていない状況では結局どこも審査で断られ、お金を借りることができなかった。「自己破産すればお金を借りることができる」と思いこみ、債務が全くないにもかかわらず自己破産の手続きの仕方、生活が困窮しているが何とかしてほしいと大阪市役所の 1 階で聞いたところ法律扶助協会に相談に行くように言われた。春にどうしようもなくなり大阪市役所の保護課に相談にいったところ、住民票はどこにあるかきかれ、兵庫県にあると言ったところ、大阪市では何もできないと言われた。ちょうどそのとき西成区内の住民票が職権消除されるかもしれないということで、釜ヶ崎の支援団体の人が市役所に押しかけていた。そのとき来ていた団体にも今困っているという話をしたが何もしてくれなかった。役所に行っても、誰に相談しても何もしてくれない、自分で何とかしないといけないと思った。

その後約 2 ヶ月間、お金があるときは繁華街にある 24 時間営業のファーストフードでコーヒー一杯だけで泊まることもあった。しかしそこで寝ていたとき、中年の男性や外国人が来て「一晚いくら」と売春行為を強要されかけたことが何度かあった。このときは店員が助けてくれた。ネットカフェでも同じような経験を何度かしたことがある。自分でも「何考えているのよ」と声をだして怒ることもあった。自分はそういう嫌がらせを受けやすいのではないかと思う。

またお金がないときは野宿をしていた。どこで野宿をしていたかという、病院の敷地の隅っこで。路上で野宿するのは怖いし、あまりに人通りが多すぎても、少なすぎても不安で、真っ暗でも怖いし、ちょうど病院内の自動販売機の明かりがもれ、ぼっと明るかった。それでも夜は 2、3 時間うつらうつらとしか寝ることができなかった。それでも仕事を探さなければと派遣会社に登録する。これだけ困窮状態になって家族には連絡をしようと思わなかったのかときくと、自分で田舎をでてきているし、一人暮らしをしないと親に甘えてしまうので連絡はしていない。

現在は派遣会社からの紹介で他府県にあるホテルの仲居の仕事の面接で、現場かこちらで面接するのか連絡待ちである。今度の仕事は請負の正社員で給料は 18 万円/月、それから保険料がひかれる。ただ今度のところは寮費をとられることがないので貯金も貯められると思う。年金や社会保険もある。ただこの仕事をずっと続けようとは思っていない。ここで貯金を貯めたら働きたいと思っているホテルで仕事をしたいと思っているがどうなるかわからない。

その日は大阪市西成区の女性でも安心して泊まることのできるドヤを紹介、食事代も貸し付けで一泊してもらおう。

翌日少しは眠れましたと疲れた顔で答える。大阪社会医療センターで内科の受診をすすめるも自分は体

の悪いところはないと拒否をする。役所に相談に行くことも、前回の大阪市の対応があったため行きたくないと言っていたが、NPO 釜ヶ崎支援機構のスタッフと一緒に、緊急保護してもらうために市立更生相談所に相談をして、大阪市内にある女性の施設に2週間限度で入所することになる。

入所する前に再度本人と話をする。今後は派遣登録で就く不安定な住み込みの仕事に就くのではなく、病院受診をして体調を整えること、アルバイトやパートで仕事をみつけ、施設もしくは部屋から仕事に通うことを考えてはどうかと。収入が8万円程度だったら仕事だけでは生活していくのは大変であろうから、足りない分を補ってもらう福祉（施設保護、居宅保護）を考えてはどうかと。また保証人、保証金なしでも入居できるアパートはあるので説明する。本人は住むところがないので、住み込みの仕事を探す以外方法はないと思込んでいた。施設入所中に職安に行ってアルバイトやパートでもいいので仕事を探し、またNPO 釜ヶ崎支援機構に来ますと紙袋をかかえて出発した。

その後施設入所中の彼女から電話、仕事が決まったので職場に出発します。ありがとうございました。しかしその翌日、交通費がないので貸してもらえませんかと言った。派遣会社での待ち合わせ時間は10時であるにもかかわらず、電話がかかってきたのが9時30分頃だった。会社に遅れることを連絡して、NPOのボランティアの人に最寄り駅まで行ってもらい交通費を貸し付けする。

就職しましたと出発して3日目に彼女から「自分は何も悪くないのに、仕事やめなければならぬことになった」と電話があった。どのような状況でそうなったのかわからないが、一方的に電話で話をする。一度事務所に来るように伝える。翌日事務所に来て、ことの次第を説明する。荷物を着払いで寮に送ったところ、お金の支払いがもとでトラブルになって、「自分は誠意をつくしているのに」、「自分は最善をつくしているのに」、一方的に相手（ホテル側と派遣会社）が悪いと彼女は早口で興奮しながら話をする。ホテルの社員と話をしたとき、こちらは「冷静に」話をしているにもかかわらず、相手がわあわあ言ってきたので「私にも考えがある」と言って部屋を出て、その後、荷物の料金を支払ったので問題ないと思って部屋にいたら派遣会社の人に来て、ここでは働けないと言われた。派遣会社もおかしい。話している間、顔がひきつってきた。

8. 男性 30代後半

福岡県出身。大学中退（マンモス私立の人文学部）。

現在路上販売員。この仕事をはじめから現在まで約3ヶ月間、ほぼ毎日ネットカフェで寝ている。大阪市北部のネットカフェ。夜11時から朝9時のナイトパック10時間で980円（オープン席）。販売員をはじめた頃、梅田で3~4泊した。そこでインターネットを検索して（インターネットを使うようになったのはごく最近のこと）、よりきれいで時間が長く割安な大阪市北部のネットカフェを見つけ（梅田は夜11時から朝6時の7時間で700円）、このカフェに移った。他にも常連の宿泊客がいるとのこと。フリードリンク制で、置いてあるポットのお湯も使える。カップ麺などの食料は持ち込みOK。ただし、パック時間中は途中で外へ出られない。また、オープン席はとても狭く、混んでいる時には周りの客の気配もあり落ち着かない。売上げの良いときには1,890円の個室を利用することも。また余裕のあるとき「ごくたまに」3,000円程のカプセルホテルに泊まった。釜ヶ崎のドヤには「入りたくない」。商品の仕入れなどで（日曜日に）釜ヶ崎へ行くことがあるが、（休日だとはいえ）真昼間から路上で酒を呑む光景は「外部から見ると『なんじゃこら!』という驚きもあり、やはり抵抗がある」とのこと。

住居・住民票は大阪にはない。名古屋や岐阜を經由して、今取り沙汰されている「偽装請負」の問題など色々トラブルを経験し、大阪に「流れ着いた」。故郷は福岡県。両親（年金生活者）と弟、弟は結婚して

いる。「帰ろうと思えば帰ることも出来るのだろうが、でもまた結局派遣や請負に戻るだろう」とのこと。「例えば学校に行くなどして、やりなおしたい」と考えているが、親元に帰ったとしたら「そんな勝手なことも出来ないだろう」とも語る。以前は、請負会社の寮に住んでいた。そこは仕事を辞めると出なければならぬ。最後に離職したのは昨年春。大阪に来たのはそのころ。大阪には遊びに来たこともあり土地勘があった。現在の仕事のことも知っていて、どうしようもなければこれしかないと思っており、大阪に来てすぐに販売員をはじめた。今後住居を確保するとしたら、大阪で良いと考えている。そのための貯金も「少しずつ」しているが十分には貯まらない。保証人も問題になるだろう。十年以上も寮生活を続けてきて、これまでに東京や北陸、愛知、岐阜などを転々としてきた。寮や住み込みはもう「いや」だ、「人に使われるのももういい」とのこと。ネットカフェがなければ、野宿しか無い。事実、今春大阪に来た直後公園で1日野宿した。昨年の夏にも、滋賀の公園で野宿して蚊に悩まされた経験がある。

大学を中退して、東京に出て以降の職歴の大半は、派遣を通じて、製造業のラインで働いていたとのことである。12~13年前の20代半ば、4年程T自動車系列のメーカーで正規雇用の職に就いていたこともあった。その正社員時代は、手取りで月給30万円程ありボーナスもちゃんと出たとのこと。その頃は、いま憶えばぜいたくなことだが、入れば入るだけ使っていた。しかし、この仕事は条件は良かったが、昼夜の交代勤務、油による手荒れ、絶えないケガなど、とてもキツイ仕事でもあった（本人も機械に指をはさまれて怪我をしたことがあると言っていた）。そうしたこともあってこの仕事を退職。その際少しだが退職金は出た。次に、全国展開している大手の派遣を通じて、大手電気機器メーカーSの愛知県の工場でブラウン管の製造工程の仕事に入った。ここでは工場内に派遣会社の事務所があった。ここは拘束時間は長いものの、まだ仕事はやり易かったという。だが、その製造ラインの事業縮小でこの仕事は終わった。大阪に来る前、最後に働いていたのは食品・飲料加工工場への派遣で、愛知や岐阜の現場で働いた。時給1,000円程度、定時は8:30~17:30。寮費は月1万5千円程度引かれた。派遣で働いているときの住居はつねに派遣会社が用意している寮であり、そこでは職場の同僚とのつきあいもあり、寮の設備も一応整っていたとのことである。また、派遣でも厚生年金に加入していたが、それは本人の選択によるものとされており、社会保険加入を選択すると基本給10%ダウンという仕組みであった（大阪府内に本社がある大手派遣会社の場合）。派遣の仕事もキツイ。大手電気機器メーカーS系列で携帯電話やデジタルカメラの検査をしたときにも、社員と派遣が混在している現場だった。非常に細かい検査工程を分担するが、社員と派遣の仕事に明確な違いはなく、同じ作業をしていることも多かった。現場で働く期間が長くなると、見込まれてリーダー役や新規事業をまかされたりすることさえある。が、それに応じて社員並みの権限や賃金が伴うわけでもなく、仕事の線引きが難しく精神的にもきつかった。そして離職、35歳を超える年齢になり求職活動も困難のため、現状に至ったとのこと。

現在の路上販売員をはじめて3ヶ月、平均月6~7万円程度の売り上げ。先月は売り上げが良く、10万円くらいあった。固定客は多くないが、たまに大阪に来る人がバックナンバーをあわせて一度に数冊買ってくれる場合が結構あって、（販売場所としては）悪くない場所だとのこと。しかしそれでも平均6~7万、多くて10万円の収入ではギリギリの生活である。どうしても外食になるので月に2~3万円程度の食費、ネットカフェ等での宿泊に3~4万円かかるので、だいたい毎月収入のほとんどはそのまま支出。衣類は百円均一のもの、風呂はネットカフェで無料のシャワーで済ませるが、それでも月に1万円弱貯金するのが精一杯。借金は「少しある」とのこと。家族との関係も良くない。たまに電話連絡をとることはあるが、故郷に帰ったところで親と喧嘩になるだろうし、ここで帰ったら負け犬だと思っている。帰るのであればせめて自分の生活を立て直してからだ。本当に困ったら、会社に相談することは出来るはずだが、

販売員もたくさんいて実際にはなかなかそれもしないだろう。現在のところ日常的に生活のことや困ったことを相談できる人はいない。支援してほしいのは、まずなによりも住居の面。日々の「帰るところがない」ということの不安が大きい。特に、夜 11 時のナイトパック開始時刻を待つために夜遅くまで販売を続けたり、事務所で夜 11 時前まで雑談をして時間をつぶしたりすることが多いが、このような無為な時間つぶしで疲労が増える。まる一日の休日であれば図書館で本を読んだり、在来線で鉄道旅行に出かけるなど好きな過ごし方が出来るのだが、土日の夕方などに中途半端な空き時間があると、その時間をつぶすのが難しく、かえってつらい。だが希望はもっているとのこと。当面は、いつ販売員を卒業できるだろうか？ その展望を持ちたい、と締めくくった。

9. 男性 30 代前半

大阪市北部のネットカフェをよく使う。午後 6 時に 10 時間のナイトパックで入りその間は起きていて、早朝 4 時にさらに 10 時間ナイトパックを継続して昼に起きる。パック料金は、 $980 \text{ 円} \times 2 = 1,960 \text{ 円}$ になる。一日の生活費は 3,000 円程度で始末できるようになった。

現在仕事は派遣で週 3、4 日働いている。同じ仕事をしていても完全日払い制の人は時給 900 円、週払いの人は 1,000 円になる。自分の場合は完全日払い制なので夜 22 時から翌朝 10 時まで、7,000~9,000 円くらい。作業服 1 着夏は 1,200 円、冬は 1,000 円かかる。土・日は運送会社が休みなので平日に 1 週間分の生活費を稼ぐ。仕事に就けるかどうかは早い者勝ち。つまり早く電話した人から決まっていく。例えば仕事の途中でとんこした人がいた場合、携帯電話をもっている人のところに呼び出しがかかって仕事に行くことになる。僕は携帯電話をもっていないので不利である。仕事は、大阪市内にある会社に集合して現場まで車で連れて行ってくれる。仕事が終わったら給料をもらって現地で解散。

ちゃんとした仕事に就くため面接に行こうと思うがこっち（大阪）の身分証明書がある。今現在住民票は埼玉県においてある。普通の会社に面接に行こうと思ったら住民票がこちらにないと落とされる。

今の派遣会社は 2005 年から働いている。最初は 3 ヶ月週払い、その後現在は日払いになっている。寮費（3.8~5 万円）と社会保険料や税金などをひかれると、手元に残るのは 3、4 万円程度。これじゃあやっけないよ。

派遣先はいろいろ、最初は山口県（大手自動車製造会社 A）、香川県（大手鉄鋼会社 B）、岐阜県（大手鉄鋼会社 B）、埼玉県（大手自動車製造会社 C）。6 ヶ月（半年）契約で移動していく。半年以上なぞ契約をしないかという、それだけ時給があがるから。半年契約にしていたらずっと安い単価で使えるわけ。A 社とか B 社とか会社はちがうが、人材を何人もってきてくれと言われていく。いやだったらやめてくれと言われる。遠いところに行く場合は、新幹線のチケットと時刻表を渡されて入り口まで派遣の人が送ってくれると行ったら言葉はいいけど、見張ってるわけ。最後の埼玉県から帰りの切符は買ってくれたが、退職金はなかった。それだったら、大手自動車製造会社 D で期間工の方がよかったなと思っている。そしたら退職金もあるし。工場の現場でも派遣かどうかはわからない。現場のなかで知り合いはできるけど、自分はあまりつまらない。ひとりのほうが落ち着く。

一番困っていることは定職がないこと。住民登録を大阪にもとさないで面接できない。ある派遣会社に電話したら、自分の経歴をきいて、すぐ働ける現場はあるけれども住民票が大阪でないと、つまり履歴書書類の住所と住民票の場所が同じでないとお得意さんが受けてくれないと言われた。

実家は大阪市内。泊まっているネットカフェの近所。だけど転出証明書を実家に送ってもらうことはできない。受け取ることができない。勘当されているから。

父親は離婚してどうなっているかわからない。母親は現在 70 歳代前半。母親は 60 歳代後半まで仕事を

していた。お金がなくなったとき母親に援助してもらったこともあった。家族は母、姉、兄、自分、弟。姉は結婚してその夫のついでに兄に仕事を紹介した。弟は30歳手前で彼女がいてそろそろ家を出て独立するのではないかと思う。今までは実家の前まで行き、母親が紙袋にお金を入れて窓から投げかけてくれることもあった。しかしそれが姉の知るところとなり、実家の前にいたところ警察まで呼ばれることになった。警官が実家の中に入って母親から「迷惑だからもう来ないでくれ」と言われたと伝えてくれた。

中学校を卒業して高校に進学するも、高校でいじめにあい退学、時期をあまりあけず17歳から仕事をしている。

5年前に兄の紹介で大阪市内の居酒屋さんで働いているときに免許（原付）をとったが現在は失効している。調理師の資格はもっていなかったが、調理の仕事をしていた。その店から市場まで魚を仕入れたりするのに原付があったら便利かなということで、この店を紹介してくれた兄がいなくなって、自分もいづらくなりやめた。それから派遣に登録しながら仕事をしている。

夏場はテキ屋の仕事をしている。1日3食ついて日払いで1日1万円。朝の9時から夜の10時ごろまで。これも兄の紹介で働くようになった。トウモロコシ焼き、イカの姿焼き、飴細工、風船などいろいろできるが、祭りの時期が7～9月で、冬と春がないので本業とはしていない。どこかの公園でずっと店をだしているようなテキ屋にはなりたくないの。ちょうど明日、明後日は仕事がある。

毎日仕事がある方がいいと自分では思っているけど住民票を異動しないことには…。貯金もなくなったけど、1日2,000～3,000円くらいに節約できるようになった。前までは仕事をして1ヶ月で7、8万円パチンコなどのギャンブルに使ったこともあった。自分は借金をするのがいやなので借金はしない。日払いの仕事は「自分にお金を借りているようなもの」である。派遣会社からお金を借りて高額な利子を払うのはいやである。お金がないなら、ないりの生活をしていた。

体調はきつと悪いと思う。最近の食事は1日1回そばか、うどんを食べるだけ。まともな食事はとっていない。昼は職場で食べるけど。ひどいときなどネットカフェで1日5リットルジュース飲むから糖尿病になるのではないかと不安ではある。体力も低下したと思う。有効期限はこの秋までだけれども、埼玉県の国民健康保険はある。

相談できるところはない。福祉のところにはいったことはない。福祉に頼るのはあまえかなと思う。警察の相談所に行ったら、生活保護をうけて仕事をさがせる方法があるときいたが。住民票のことで区役所の住民票の係に相談に行ったことはあるけど、今日会えてよかった。住民票をとりよせる手続きをしてくれるんだ。住民票を実家において住民票の写しをとったら仕事できるから。

ネットカフェは30～40軒利用している。カラオケはいかない。何もないから。ネットカフェなら、情報が入手できるから。ネットで仕事も探せるし、マンガもあるし。24時間のファーストフードは眠れない。ネットカフェならお金さえ払えばその間何をしてもかまわないわけだから。

遠いところでは香川県のネットカフェ12時間パックで1,600円、大阪では難波にあるネットカフェには24日間連続で泊まっていた。（メンバーズカードを見せて）ハンコが押してある。ここにいつもいる人は5人くらい。よく顔をみるから声をかけるようになる。安くて長くいれるところに行くようになる。

ネットカフェの中だけでの関係で、ネットカフェからでるとき「お疲れさま」といったらあかの他人になる。自分のプライベートな時間を邪魔されたくない。自分の時間をもっておきたい。

今、よく利用するネットカフェにいる人は30歳前後。若い子は18歳とか22歳とか。いろいろな理由で泊まっていると思うよ。例えば家のトラブル。家にいて親からぐちぐち言われるとおもしろくない。仕事の鬱憤を面と向かって他の人に言うと角がたつけど、ゲームの中で暴言を吐いたり、暴力をつかって、うっぶんやもやもや感をはらすことは問題ないでしょ。オープン席にいる人はゲームで時間を使えばい

い。ゲームをしているときは見ているかまわれないが、(派遣に)登録をしているときに画面をのぞこうものなら怒られる。

個室にいる人の方が必死度が高いのではないかなと思う。個室は他の人に見られたくない派遣会社への登録をメールで送っていたり、次の仕事(短期・ド短期)をさがしている場合が多いから。個室が多いところは、仕事に対する執着心の強い人が多いのではないかなと思う。ネットカフェを利用していたら太陽をみないこともある。土・日はスポットでしか仕事がない、仕事がないのとはほぼ等しい。平日仕事をして土・日にリフレッシュで次の週にそなえるために個室に入る。

好きで仕事をやっていないわけではない。「なさない方面」で仕事をやっている。早く脱出したいと思っている。住居と仕事の問題かな。

転出証明書の郵送先を NPO 釜ヶ崎お仕事支援部にできること、自立支援センター入所もできることを説明しわかる。

10. 男性 20代前半

調査協力者(以下 A さん)、あと友人の B さんと C さんもインタビューの場に同席。愛知県出身。

大阪市北部のアーケード街にあるネットカフェの階下のフロアで座り込んで話していた(ファーストフードが広げられ、タバコを吸いながら、一見「ヤンキー風」の格好で話をして)3人の若者に声を掛ける。階上のネットカフェを利用したことがあるか、そこでいわゆる「ネットカフェ難民」と呼ばれているような人たちを見かけることはあるかと質問をする。「時たま利用することがある」。そこを寝場所にしているような人がいるかどうかについては「よくはわからないが多分いないと思う。そんな連中はたいてい別のネットカフェにいるのではないかな」との返事。そこで、座り込んでこの3人としぼらく談笑。3人から「何をしているのか」と聞かれたので、名刺と調査協力依頼のビラを出して調査の趣旨を説明。すると、「自分たちの親しい友人の一人が、もう2年以上もネットカフェで暮らしている」とのこと。その人と連絡がとれないかと聞くと「取れる」ということで、その友人(Sさん)に携帯で電話をしてくれた。Sさんに電話で調査の趣旨を説明して協力を依頼するも、「忙しい」とのことと断られる。その後もしぼらく3人と雑談をしている中で、3人の中の(多分)最も若い(20代前半)Aさんは、1年ほど前までは3年間ほど大阪市北部のネットカフェを転々としながら生活していたという話が出る(一番年上の「兄貴分」と見えるBさんが「こいつは1年くらい前までネットカフェで暮らしていた」と述べると、Aさんはすこし照れ笑いしながらそれを肯定)。そこで、「じゃあ話を聞かせてくれませんか」と頼むと「いいよ」とのこと、その3人と一緒に隣の喫茶店へ入って話を聞く。

Aさんは20代前半で、現在は近所のマンションで暮らしているとのこと。そのマンションはワンルームマンションだが家賃は6万円。「ここあたりは家賃がめちゃくちゃ高い」との話。「ネットカフェやファミレスなんかで寝泊まりしていれば月3万円くらいで済むのに」とAさんは言う(「ファミリーレストランの300円程度のフリードリンクで一晩過ごせる」と話していた)。現在、そのマンションでは女性と同棲しているらしく、「その女がうるさくてかなわない」「何にもせずいつも文句ばかり言う」「部屋代は自分が払っているし、食事を作ったり掃除洗濯も自分がやっているのに」としきりと同棲中の女性に関して愚痴・文句を言う(そして他の二人に同意を求める)。その女性と一緒にいるとイライラしてストレスがたまるので、現在でもしばしばネットカフェやファミリーレストランで寝ることがあるとのこと。平均して週に3日ぐらいいはネットカフェ、「ひどいときには1週間ぐらいマンションに帰らず、ネットカフェで寝泊まりすることもある」と話していた。インタビュー中も何度かその女性から携帯に電話が入っ

ている様子で、それを無視しながら「オニデン」ですと言っていた。それらは、半分は照れ、もしくは冗談なのかもしれないが、「今、一番困っていることは」という質問に対して「女と別れたい」「女に出て行って欲しい」と答えているので、もしかしたら同棲中の女性との関係はかなり深刻で、Aさんの負担になっているのかもしれない。そもそもその女性と同棲し始めたのが現在のマンション入居と同時期で、入居の際の初期費用（40万円くらい）は、その女性が負担したらしい。

Aさんは現在「内装屋」で働いている。「雇用形態」はあまりはっきりせず、ただ大阪市内にある「内装屋で働いている」と語るだけで、本人たちもあまり自覚していない様子である。ただ、全体の話から推測すれば、いわゆる「正社員」ではなく、日給月給の「日雇い」か、もしくは「手間請負」ではないかと思われる（この現在の仕事についての質問に対しては、Aさんは首をかしげることが多く、「仕事上の先輩」であるBさんが代わりに答えることが多かった）。Aさんは、この仕事に就いてまだ1ヶ月ちょっとで、今は「見習い」待遇であるようで、「雇用形態」や「労働条件」等についてはほとんど分かっていない様子で、またあまり関心もないようだった。収入は月によって変動はあるが、平均で20万円くらいにはなるらしく（とこれもBさんの答えで、ただし「ボーナスはない」とのこと）、拘束時間もそれほど長くなく（仕事によって大きく変動するとのこと、これもBさんの話だが、ごくまれには15分ぐらいで1日の仕事が終わってしまうこともあるらしい）、きつい仕事でもないで「この仕事が気に入っている」とのこと（これはAさんの言葉）。働いているその内装屋には全部で20人ほどの人が働いていて、Bさんは中学校卒業直後からそこで10年働いていて、Aさんをこの仕事（内装屋）に誘ったのもBさんである。「雇用保険はないと思う」、「国民健康保険には入っている（保険料を払っている）」、年金については「年金は払うべきではない、どうせ受け取れないのだから」（これはBさんの言葉で、Aさんも横で頷いていた）。仕事の面だけではなく、遊びや生活の面でも、Aさんは友人であり仕事上の先輩でもあるBさんをとて信頼し、また頼っている様子で、Bさんがいる限りずっと現在の仕事を続けたいと話していた。10年勤続のBさんは手取りで30万円ほどの収入があるとのこと、Aさんと私に対して「この仕事は続けていれば給料はだんだん上がっていくから」と言っていた。そもそもAさんとBさん（ともう一人のCさん）は、パチンコ屋で知り合ったらしく、仕事の後や休日には「いつも3人でつるんで遊んでいる」とのことである（ちなみにCさんは「そのパチンコ屋」で店員として働いているとのこと）。

Aさんは愛知県出身で、中学卒業と同時に地元の「X」という「大手自動車製造会社Dの系列会社」に正社員として就職した。ネット上で調べてみるとこの「X」という企業は本社を名古屋市に置く、資本金30億円ほど、従業員数1,000人超の大企業である。しかしAさんは入社半年後にこの会社を辞めて、その後は「トビの手元」をやったと語っている。離職の理由も含めて、この頃のことについてはあまり語りたくない様子で、ただしきりと「親に捨てられた」と述べている。具体的には、この時期に、Aさんの両親が離婚して、両親ともがAさんを残して去っていったという事情があったらしい。ともかくも、「親に捨てられた」Aさんは、大阪の「おばあちゃん」をたよって来阪したとのことである。しかし、この「おばあちゃん」のところでも「いろいろあって」結局はそこを「飛び出して」マンガ喫茶やネットカフェを転々とするようになったと語っている。この「おばあちゃん」のところを「飛び出した」経緯や事情についてもはっきりとは話してくれなかった。それ以後、ホストクラブのホスト→居酒屋の店員→パチンコ屋の店員として3年近く働いていたが、その期間は「定まった住居」はなく、マンガ喫茶、ネットカフェ、ファミレス等を転々としながら生活していたとのことである。3人は、Aさんがこのような生活をしてきたところからの知り合いであるらしく、そのころのAさんのことや女性と同棲することになった事情などもよく知っている様子で、たとえば、借金の有無の質問に対しては「ある」と答えて、その額を聞くとAさ

んは「それはちょっと言えない」と言ってBさんの方を見やり、Bさんも「ウンウン」といった風にうなずいていた。

11. 男性 60代前半

ワンカップをもっていた。ネットカフェで一杯ひっかけて眠るという。インターネットはしないので、店ではお酒を飲んで眠るだけという。家族は奥さんは死亡、子どもは男ふたり、女の子がひとり。

仕事は魚をおろす仕事。住居は大阪市内にある。仕事が朝早い日には家に帰るのが億劫（しんどい）なのでネットカフェを利用する。他にサウナも利用することがある。サウナは一日2,200円。ネットカフェやサウナはだいたい月に2回ほど利用する。ネットカフェは友達とこの辺りで飲んでいたときに、友達に教えてもらって知った。それまではサウナを利用していたという。

ネットカフェを利用している若い子たちは、ゲームをしていていわゆる「ネットカフェ難民」にあたるような人たちかどうかはわからない。常時いる人がいるのかも月に2回の利用なのでわからないという。

仕事は朝早く、4時、5時にでかける。会社は大阪市内にある。毎朝電車に乗っている人は同じような人で、ビジネス街の清掃員らしき人が多い。給与は30万円ほど。各種社会保険あり。労働時間は10時間。仕事はきついが、子ども達は独立しているし、お金に困っていることはない。「自分ひとりだけだから気ままに暮らしている」。もし何かあれば、子どもの世話になろうと思っていると、あっけらかんと言っていた。

これまでは有名私立大学（おそらく商学部）を卒業して、当時は今ほど全国展開もしてなかった大手小売店に就職する。「流通革命」のはしりの時代だったらしい。その小売店では就職して数年間は実地研修で魚をおろす仕事をした。その後は魚を仕入れる管理をしたり、現場の人に魚を（見栄え良く）どう切れとか指導する仕事をしていた。何年間かその小売店で勤めた後、会社の先輩に誘われて「独立」。会社を設立する。マーケティングやコンサルティングを行い、全国をかけずり回っていた。

5年ほど前に奥さんが亡くなってからは好きなことをして行こうと思い、会社を辞める。辞めて仕事を探して、派遣の仕事に就いた。そこではいろいろ毎日仕事はあった。が、保険とかもなく条件は悪いので「あれでは若い子たちは不安になると思う」という。「こういう調査はこれまでされてこなかったからいいんじゃないか」。ただ、条件の悪さから他の仕事を探して今の仕事をこの人は見つけたので、「身体動く人は別だけど、身体動く人で野宿とかしてる人は怠け者なんちゃうかなあ」とも。

数ヶ月派遣で働いた後、新聞の広告で今の魚をおろす仕事を見つける。「昔、魚をあ一切れ、こう切れ」と言っていたけど、「理論と実践」は違うと実感。「最初は思うように切れずに苦労した」。

12. 男性 30代前半

妻子あり。大阪府南部に住居あり。住民票、免許証あり。

学校卒業後（最終学歴は不明）営業の仕事に就く。営業の仕事を辞めた後、警備の仕事に就く（アルバイト）が一度その会社も辞め、現在は、別の警備会社の警備員として働いている。アルバイトから始め、現在は正社員である。現在の仕事に就き、4年になる。保険に加入している。

ネットカフェを利用するきっかけは「もともと漫画が好きだった」。

現在の仕事はシフト制であり、仕事が遅く終わる日にはネットカフェを利用する。自宅が大阪府南部にあるため、22時30分頃仕事を終え、家に帰ると24時近くなり、次の日の朝始発（5時位）で仕事に向かうことがしんどい、とのこと。始発に乗るには4時には起きなければならないので、家に帰り仮眠をとる

よりかは、ネットカフェで過ごすほうが楽である。

ネットカフェをずっと利用しているわけではない。週1回のペースで利用している。このネットカフェは以前に、2、3度利用している。

スーツ姿、片手に仕事用のバッグと、スーツを一着持っていた。荷物は少なめ。大柄、タバコを吸う。

13. 男性 20代前半

出身地は愛知県。学歴は中学卒業。両親と姉2人と妹1人、両親は本人が16歳のときに離婚、数年後母親が現在の父親（自衛官）と再婚。姉2人はそれぞれ2歳、3歳離れている。妹は現在の父親と母親の子である。

中学校卒業後、学力的には県内の有名私立の高校への進学も可能と言われ、模試でも良い判定が出たが、進学しなかった。ちょうど母親が離婚した時期で、母のパート勤めだけでは経済的に厳しいことを知り、16歳で働きはじめた。名古屋で親方につき鳶の仕事をおぼえ、正社員（社保・年金あり）に。そのうち、「頭」で行ける（現場責任者を任される）ようになった。受注量にもよるが、「頭」で日当1万5千円、月給35万円くらい。毎月母に3万円渡していた。親にも自立を促され、名古屋で一人暮らしをはじめた。仕事のないときには社長の知り合いの会社を手伝いに回されるのだが、その回数が増えてきた。

母が再婚した年、名古屋を出た。再婚相手が勤続年数30年近い自衛隊員だと知り家計は安心だと判断。祖父母が大阪市南部に住んでいることもあり、なじみのある大阪に来た。「名古屋のもんからしたら大阪は『もっと』都会だ」と都会へのあこがれを口にする。ギターを担いで来たからか、大阪駅の前の陸橋で音楽プロデューサーを名乗る人物に声をかけられて知り合った。音楽志望と間違われたが、本人は鳶の会社を興したいと思って大阪に来た。このあと冬に現在の住居を決めるまでの4ヶ月間、ホテルとネットカフェで寝泊まりしていた。野宿の経験はない。親との関係は良好で週に一度は連絡するという。

その頃、丸一日一戸建て住宅の足場を組む現場を見ていたところ、夕方になって仕事上がりの職人から声をかけられた。丁度、経験者募集中ということで、すぐに採用。しかし、いざ働いてみると作業手順や道具の呼び方など、名古屋での習慣と異なることが多く、仕事に戸惑った。しかも名古屋では午前中に済ませたような一軒家の足場に丸一日かかるなど、大阪の仕事は「遅い」という。そのうえ新入り扱いなので「頭」で行かせてはもらえず、賃金も低い（日当1万円）ため、1ヶ月で辞めた。この間もホテルやネットカフェで寝泊まりしていた。

知り合った音楽プロデューサー（梅田界限によくいるらしい）の伝手で、現在の仕事を紹介してもらい、年明け早々から働いている。水商売（本人の言葉では「キャバクラの反対」、ホストクラブのような業態か）の正社員（社保・年金あり）。現在の月収は約20万円。「ヒマな店」であり、店長の言い分ではテナント賃料もひと月遅れのように、給与支払いが遅れることもあるが、今のところ、ひと月待っても払ってもらえないことはなかった。

本人に借金はない。名古屋時代からの貯金がある。週5日、夕方から深夜～早朝の勤務。職場の定時は午後5時～11時と午後2時～11時のシフト。今の職場には住居のない店員が他にもいて、店泊していることもあるという。

仕事を紹介してもらった昨年冬、住居を探して4件目の不動産屋に紹介された器具類備え付けの2つのうち、風呂トイレ別で広い方の物件を選んだ。「荷物が多い、友人を泊めてやることもできる」のが選択理由。職場から徒歩15分で家賃53,000円。部屋を借りた現在も週5回以上ネットカフェを利用する。ゲームや仕事で頼まれた作業をするのが目的で、そこで寝ているわけではない。「家から出なくなる」可

能性があることを自覚しているので、家にコンピュータやゲーム機を置いていない。そのネットカフェは30分間無料のチケットがあって880円で8時間半使えるので安い。ネットカフェを出て午前7時頃に帰宅、風呂に入って寝る。帰るのは明るい時間で電気を点けないため、光熱費もほとんどかからない。携帯電話料金に毎月3~5万円かかるが、現在も毎月5万円は貯金しているという。

休日や仕事の早いとき、月に三度くらいは大阪市南部の祖父母を訪ねるが、泊まりはしない。

食事は職場のまかないで済ませるので日に1食。勤務時間帯や仕事内容のせい、鳶職時代のように腹が減らないというが、最近になって、発熱やダルさで寝込むことがある。体力が落ちた自覚があるが、病院が好きではないので、体調不良のときには家で寝て治すとのこと。

今の仕事をいつまでも続ける気はない。資金を貯めて、能率の良い名古屋流のやり方で鳶の会社を興せたいと考えている。名古屋に帰れば鳶の「頭」で行けるのはわかっているが、あと5年は大阪で、一人でやってみたいと語る。親も健在で大阪には祖父母もいる、そんな安心感もあると言った。

その後、店長が自己破産。テナント賃料三ヶ月滞納により店舗差し押さえとのこと。借りていた部屋も実は名義が別人のもので、名義人本人が入るといって出ざるを得ない状況になる。聞き取りをした同僚2名とあわせて3名が路頭に迷う。

14. 男性 30代前半

福岡県で生まれ、中学に入る頃に大阪府北部に越してきた。福岡県にいる頃、父親は雇われの身（建設業）だったが、引っ越してからは自営の解体屋を立ち上げる。中学卒業後、彼は家業を手伝うようになる。家族従業員として働き、給料はあつてないような感じだったという。従業員も5~6人いる時もあればいない時もあったという。国民健康保険料はかつては払っていたが今は払っていない。「震災の頃は仕事も沢山あったんですけど、解体の仕事は少ないです」。仕事もないので、20代前半から通いで土工の日雇仕事に就くようになる。20代後半、解体屋は倒産する。それに伴い、彼は数百万円の借金を背負うことになる。彼は実家の借金の連帯保証人になっていたのである。「ある日家に帰ったら両親がいなくなっていた」。その後借金から逃れるため家を離れ、日雇労働をしつつネットカフェなどに泊まる生活を現在まで続けている。両親とはそれ以来連絡をとっていない。きょうだいについては聞いていない。住民票は動かしていない。

今日も仕事帰りだった。日雇仕事はスポーツ新聞で探したり、釜ヶ崎に行くなどして探す。いい時は週5日ほど働くことができる。単価は8,000円。よくて9,000円。「解体の仕事はあまりないですし、特別な技能もないですから、土工となるとやっぱり安いです」。現場は神戸に行くことが多く、現場にバスで送ってもらえることもあるが、現場直行で交通費自腹であることもしょっちゅうである。「普通に1,000円くらいは飛んでいきますね」。一ヶ月の平均収入は多い時で17~18万円。少ない時では10万円前後。貯金はできない。飯場に入ることもあるが、諸式を引かれ、いくら金が残らないのであまり好まない。最近携帯電話の料金を滞納しており、携帯で業者に連絡をつけることができない。携帯での求人アクセスもできない。また、これまで知り合いと仕事の情報交換をしていたが、それができなくなり、自分から公衆電話で聞く。インターネットでの職探しはしない。「登録制の所が多いので、利用しづらいです」。ハローワークも昔は行っていたが、今は足が遠のき何年も行ってない。「身分証明書もないんです。だから難しい。原付免許があったんですが、外で寝ている時にひたたくられて。再発行も金がなかったのでできませんでした」。

将来の仕事の希望は「登録の派遣に変わりたい」。具体的な職種については「サービス業はやったことないし…。建設仕事が安定してあれば」。仕事面の支援について聞くと、「住居を確保したいです。住民

票がおける所がほしい」。自立支援センターについては知っているが、入りたいとは思わない。

寝場所には主にネットカフェを利用している。ビデオ試写室を利用することもある。よく利用するのは大阪市北部のネットカフェ。ナイトパックで1,500円。ゲームをするスペースだと安いとのこと。シャワーがあるのが利点だ。また、今日利用するネットカフェは安さが利点。しばしば利用する。100円多く払うと個室に入れ、そこでは横になって寝られる。ただしシャワーがない。大阪市北部の別のネットカフェも利用するがここもシャワーがない。しかし漫画を読むところはリクライニングがついているのがいいのだという。

彼は釜ヶ崎で仕事を探すこともあるのだが、ドヤは利用しない。しかし、ネットカフェがもしなかったら「ドヤに泊まりますかね」「周囲からあまりいい話を聞かないので。危ないイメージが」。収入が途絶えると野宿である。「ええもう、何回も。公園で。やっぱりキツイです」。泊めてもらえるような友人もない。「実家にいる頃の友人とは家を離れてから全く連絡とってませんね。知り合いは仕事で知り合った人くらい」。何か相談できる相手もそういう人くらいである。

収入のうち、食費にさけるのは2~3万円。吉野家をよく利用する。ネットカフェ利用に4~5万円。衣服等日用品はそのつど調達する。下着は百円均一で買う。服もボロボロになると、西成区の古着屋で買う。作業着も同様である。酒は週に1回、明日仕事がない時に500mlを一本飲む。タバコは1日1箱。貯金が難しいこともさることながら、アパートを借りるについては保証人のことが心配だという。

健康状態は良好。ただ寝不足で目が赤い。障害等はない。

将来の生活については、「3~4年もこんな生活してるんだから、見通しと云ってそんなもん立ってたら、こんな生活してないです」。

借金のことや他のことについても、NPOに相談した方がいいと強く勧め、自立支援センターについても紹介しました。

15. 男性 20代前半

社会人一年目、千葉県の実家で親と同居している男性。千葉県内の理系の大学を卒業（大学には実家から通っていた）。大学時代より飲食会後、電車等が無くなった場合は、ネットカフェを利用していた。友達の中にもそういう人はいた。安い、シャワーが使える寝ることができる、ドリンク自由などが利用の主な理由である（インターネットを使うことはあるが、雑誌などはほとんど読まない）。大学在学中にインターネットや友達との情報交換、合同説明会などにより就職活動を行い、4年生の早い時期に今勤めている千葉県内の地方銀行に就職が決まる。その年度に、自転車で大阪まで旅行をしている。旅行中の宿泊にはサウナやネットカフェを利用していた。

今回は、会社の長期休暇をとり、新幹線を使って大阪に遊びに来る。特に大阪での目的地はなく、大阪の友人と1日食べ歩いてきた。帰る日程や今後の行動予定ははっきりしていない。

勤めている銀行は、実家より電車で30分くらいの所にある。4月、5月は研修などもあったが、徐々に現場が多くなってきた。残業なども少し行うようになってきている。現在の収入は、1ヶ月17万円ぐらいになる。そのうち、5万円ぐらいを現在の生活費や大学時代の生活費という理由で実家に入金している。また、大学4年生の時期に、兄に借りたお金があり、その分を兄に返している。手元に残ったお金で飲食などに使っている。飲食で遅くなった場合、ネットカフェを利用する。月平均にして、1~2回程度利用。実家からの生活なので、経済的に困ることはない。今のところ特に貯蓄は行っていないが、定期的な貯蓄については今後考えている。

現在特に困っていることはない。大学時代サッカー部に所属し、嫌なこともあったが、今は職場の同僚

にとっても恵まれていて楽しい生活を送れている。何かあった時は、同僚を中心に相談している。職場での仲間に恵まれたこともあり、仕事を中心にがんばっていきたくて考えている。今後、親のもとを離れて、一人で暮らしてみたいという思いがあり、インターネットなどで物件を見たりしている。

16. 男性 20代後半

調査員らが、ネットカフェ前で待機中に、調査協力者自ら声をかけてくる。「何してるのかなあと思って声かけさしてもらいました」とのこと。長く話し込む中で、ネットカフェを利用していた経験があるということ、ドヤに住んでいた経験があるということ、日雇い派遣で仕事をしてきたことなどから、調査協力依頼をした。しかし、ドヤに住んでいたのは7年ほど前のことであり、現在は大阪府北部の実家に住んでいる。今日は、原付バイクを少し離れたところに置き、大阪市南部まで来ていた。

大阪府出身。在日。実家は、工場を経営している。祖父が起業。父親、兄と仕事を継いでいるようである。父親は、有名私立大学出身で「エリートにもなれるはずだったが、在日ということで差別もあった」とのこと。父親も別に今の仕事をやりたかったわけではなかったとのこと。Aさん自身も、兄に言われて「家の助けにもなるし」、条件も割とよかったので(8,000円/日×20日/月)、工場を手伝った経験もあるようだが、60歳までずっと働くように言われ、辞めていく職人の代わりとしてどんどん仕事を任されていくことが嫌になり辞めた。父親がとてつもない人だったらしく、そのため家族との折り合いが悪く家を出た時期があり(20代初め頃)、その際ドヤ住まいを含めた生活をしていらしたらしい。

その際は、とび職、配管工、引っ越し屋など様々な仕事を体験する。正社員で働いた経験はなし。大阪市西成区で働いた時には、6畳一間に3人で住まわされたこともあったが、その割に家賃が高かったし(天引き?)、他人と一緒に嫌だったので、いっそ住居を探そうと思い、より安い所を求めて不動産屋に紹介されたドヤ街周辺に住んだ経験がある(45,000円/月)と言う。1Kの部屋(電気コンロ付きミニキッチン、風呂トイレセパレート)。

当時行っていた仕事のみでは生活が苦しかったため、仕事を探すために釜ヶ崎に行ってみたこともあるが、「とても汚かったし、『にいちゃん』『にいちゃん』と言って声をかけられたりするし」そこで仕事を探すことはしなかった。

結局1ヶ月くらいで、「親に怒られて」実家に戻ることになった。折り合いが悪かった父親も「厳しくしすぎたと反省」したらしく、その後はうまくいっているようである。

現在は、基本的な生活費は全部実家に頼り、服、ゲームその他などの「自分で使うためのお金」を稼ぐために日雇い派遣の軽作業(倉庫内作業や、事務)の仕事をしている。1ヶ月に10万円ほど稼ぐ。十分あまりあるほどの金額とは言えないが、体力的な負担を考えると、それ以上無理に働くつもりはない。

日雇い仕事は、基本的に有料の求人雑誌を用いて探している。仕事は、自分の希望する条件に基づき選択しながら行っている。連絡には携帯でインターネットを使っており、登録するとメールが入ってきて、その日仕事に行く。仕事に行ってみると、雰囲気の良い現場に当たることもあるが、しばらくすると慣れしてくる。

そろそろ30歳になるし、「親にもそう言われるので」定職を見つけようとするものの、体力的に少し不安があるのでどうしようかと思っている。ネットカフェに通った時は、ゲーム目的だったようだが、あまりに熱中しすぎて現実との区別がつかなくなるような感覚を持ったり、「ゲーム脳の恐怖」を知っていたこともあり、現在は行かないようにしている。その時にだいぶ精神的に参ったらしく、現在でも少し不安を抱えている。

また、占い師に見てもらったところ、「クリエイティブな仕事」がいいということなので、そのような

仕事を探そうかとも思う。一方で、「資格マニア」でもあり（現在のところ特に持ってはいないようだが）色々資格を持っておきたい。そうすると、時給が上がるから。簿記3級を持っているが、2級へとレベルアップしたり、フォークリフト、ヘルパーなどの資格も欲しい。

学歴としては、高卒。健康保険は親の国民健康保険（自営業なので）に加入。年金は、郵便局で働いていた時期に2年間ほど払っていたようだ。雇用保険はなし。困った時の相談相手となるような行政、NPOなどはないが、人権団体には加入している。基本的に「頼れるのは自分だけだから」と考えていると言う。

自立支援センターは、「ホームレスの人のための施設」として存在は知っていた。「あの人達はなぜ野宿させるのでしょうか、行政は何とかするべき。憲法を見ても基本的な生活を保障すると書いてあるのに」とのことであった。

17. 男性 20代後半

現在の職業は水商売、正社員（社保・年金アリ）。名古屋で遊んでいたときに通っていたバーの元店長（50代後半）と大阪で偶然出会い（大阪に移ったことは知っていた）、先月からその店長の店で雇ってもらっている。まだ先月分の給料をもらっておらず、現在も住居喪失期間継続中。また離婚して、子どもが一人いる。

北海道出身。両親は北海道で共働きをしており、父親はトラックの長距離運転手、母親はスナック経営。兄弟姉妹はいない。父親の勧めで中学卒業後すぐから、溶接、塗装、鳶職、危険物取扱（乙四種）などの資格を取得したという。高校生の際に、バイク免許の取得が高校に知れ没収されたことをきっかけに高校を中退。既にパチンコ屋で働いていた中学時代の友人を頼って名古屋へ行き、19歳まで「遊んで」暮らした。この頃にも友人宅の他、ネットカフェ等で寝泊まりしていた。ギャンブルは21歳で働きはじめて卒業したという。

20歳前後で北海道の実家へもどって仕事を探すが見つからなかった。父親のトラックの荷物運びを手伝った。1年後再び名古屋へ。大手自動車メーカーD子会社の派遣（請負か？）で自動車の修理工場に働きはじめた。このとき求人情報をみて直接応募したが、ハローワークの求人票を持ってくるように言われ、ハローワークを通した。月収は手取り35万、「皆勤手当」も出た。しかし、検査した車体を台車にのせてトラックまで「人力で押す」という重労働、また6時～16時、18時～翌朝4時という2シフトの一週間交代勤務で身体がきつく、2年経たずに辞めた。社会保険・厚生年金ナシ、退職金もなかった。

北海道へ帰省の後、再び愛知県内で1年以上、日雇い派遣をして食いつないだ。そして20代半ばに大阪へ来て、コインロッカーに荷物を預け（夜0時に200円課金される）、ネットカフェ等に寝泊まりする生活を2ヶ月ほど続けた。その間仕事を探し、大阪市北部のパチンコ屋で正社員として雇われた。店舗2階の社員寮に住み、月収25万円（社保・年金アリ）の待遇。

昨年秋、トラブルによりパチンコ屋を辞めた。上司から、特定の客に便宜を図ったのではないかと嫌疑をかけられたのだ。これは言いがかりで「防犯ビデオを確認すれば良い」と主張したが、受け付けられなかった。このときに「(社員を)信用しない上司にキレて」辞めた。後日上司から電話があり、実際には「ゴト師」の仕業であったことが発覚したが、てのひらを返したように謝ったりひらきなおったりする態度も気にいらず、戻ることも考えなかった。成り行き上、退職金ももらわなかったという。

このときから現在に至るまでの半年以上、住居喪失状態のままである。

昨年秋に社員寮を出てから、大阪市北部で、ネットカフェ・マンガ喫茶、サウナなどを転々とする生活を続けてきた。たとえばあるサウナでは朝5時～17時、または夜22時～朝9時のフリータイムで1千円の割引券、また別のサウナでは1時間1千円のところを500円で入れる割引券（フリータイムは2千円）

などを利用している。ネットカフェではゲームをしたあとに寝るが、ナイトパックの終わる時間（30分延長券を利用して朝6時半）には出るため、睡眠時間は短いようだ。

先月、社会保険事務所からの連絡（実家経由で携帯電話に直接連絡）をうけ、愛知県の役所へ行き、国保・国民年金の手続きをしてきた。翌日、大阪に戻って来たところ偶然名古屋でよく遊んだバーの元店長（50代後半）と出くわし、仕事がないことを知って声をかけてくれたので、元店長が大阪で経営している現在の店で働きはじめた。まだ給料が出ていないので現在も住居のない状態であるが、3日に1度くらい店に泊まる。社保・年金申請中。名古屋のままの住民票も大阪に移す予定である。勤務時間は平日17時～23時、土日は14時～23時が定時で、シフトで週1日の休みがある。

名古屋時代に「出会い系サイト（携帯）」で大阪の女性と知り合い、住所を交換した。以来手書きの文通を続けたこの女性と名古屋で結婚し、一児をもうけた。「子どもがいるから心配なのはわかる」とはいえ、女性の両親から無職であることを責められ、今年冬に離婚。そうした事情から現在大阪の実家に帰っているはずの女性とは会えないが、携帯電話で連絡をとり続けており、双方復縁するつもりでいる。携帯電話の請求書が女性の両親に見られては困るため、自分からかけている携帯電話代は月8万円（最高17万円）に達するが、この料金は女性が支払ってくれるらしい。

そのためにも、部屋を借りるより先に（20万円まで減った）貯金を100万円くらいまで増やすことを目標にしているという。将来のことは、たとえ日雇い派遣の仕事に戻っても40歳までは自分ひとりでやってみたいと語る。また、鳶職の経験をもつ職場の同僚とともに、二人で鳶をはじめの計画を話すこともあるとのこと。

18. 男性 10代後半

Kさんは現在無職。主にネットカフェで寝泊まりしており、収入はホスト時代の客からもらう金である。

1980年代後半に東南アジアで生まれる。姉が2人いるのだが、うち1人が日本人と結婚したのを機に家族で日本に移住した。移住先は兵庫県である。父親は自動車製造の会社でショベルカーを作っていたという。移住後の家族生活は解体的なものだった。家族で集まって食事をとることも、「ないですね。腹が減ったら、みんな各々冷蔵庫の中から適当に食べてました」。

定時制高校に進んだ後、様々なアルバイトを経験する。主な仕事先はラーメン屋、飲食店、ゲームセンター、コンビニなどである。コンビニでは夜10:00から朝8:00まで働き、時給は950円だった。コンビニでの1番安い月給は16万円。バイト料は1番高くても、時給で1,050円だった。また、家族とは同じ家に住んでいたが、このころから家計は別だった。「高校に入ってから食費も自分で稼いでました。自分の部屋にしかいませんでしたね」。そのうち高校にもあまり行かなくなった。

高校を中退し、ブラブラするようになると、親からちゃんとした仕事につけと言われるようになり、それが煩わしかったという。家を出ることにしたが、その際親の友人の紹介で大阪府南東部のプラスチック工場での仕事を紹介され入社する。それが去年の夏のことである。車のエンブレムや携帯の画面に使うプラスチックを扱う工場だった。正社員として入り、社会保険料は自分で払うという形だったという。仕事は、昼勤務と夜勤務を繰り返す形で、「休みの日も休んだ気になれない」。月給は16万円程度だった。「やった割には安かったですね」。給料を前借りする形で職場の近くにアパートを借りた。親は当初、彼のアパートに家財道具を送ると約束したのに、3ヶ月経っても一向に送られてこない。まともに生活できない上に、重労働も相まって、怒りのあまり仕事を辞め、アパートを飛び出した。月4万円ずつ前借り分を返していたが、アパートを出る時に残額を返し、給料はほとんど残らなかった。何もすることがないから大阪府南東部から実家まで自転車で移動したこともあるという。「ヒマじゃないですか。金もないし。実

家に向かって」。実家の付近に戻るも家には入れない。「姉ちゃんにカギを閉められた」。仕方がないのでダメもとで近所のコンビニに入り、「1週間でいいので働かせてください」と言ってみると働かせてもらえた。その時のコンビニの店長には今でも恩を感じており、「一番信頼できる人」なのだという。

その後彼は大阪市内のホストクラブに入店する。「実家に向かう時にミナミを通るじゃないですか。ここでホストの人を見かけて、『かっこいいな』って」。源氏名も付けた。ホストの仕事はハードだ。開店は夜10時から朝の8時まで。ただし、9時には店に入って掃除をしなければならない。睡眠時間は昼3時から7時の4時間だけ。起きたら30分かけてセットして、知人に営業のメールをしまくる。1ヶ月目の月給は3万円。2ヶ月目は10万円だった。それほど大きくない店であったため、その店にはボーイがおらず、飲み物をつくるなど、ボーイの分の仕事もする必要がある。毎日飲むアルコールの量は尋常でなく、気分が悪くなるまで飲んで、トイレに駆け込んで指でノドをついた。液体しか出てこず、本人曰く「バリきつい」そうだ。また、上客にアルコール度数が90のテキーラを一気飲みさせられたこともあった。Kさんは笑いながら「いじめられてましたね」と言っていた。年下でも先輩のホストには敬語を遣い、顔を立てなければならない。「ただし売り上げで追いついたら、その必要はなくて、『俺に追いついてみる』とも言える」。アルコールを飲みすぎ、体調が悪いときは、優れない顔を隠すため、ファンデーションなどでメーキャップしたこともあった。ホストの仕事をはじめた当初は、幼少時代、姉にいじめられていたこともあって、女性客が怖かったのだという。「今は大丈夫ですけどね」。体がしんどくなり、2ヶ月でその店を辞めた。それから今まで無職である。

ホストクラブを辞めて以来、半年間無職の状態が続いている。今についてKさんは「高校時代から働きづめだったから、たまには今みたいに楽をするのもいいのではないか」と明るく言っていた。野宿はしたことがない。「それは嫌ですよ。そこまではおたくくない」。寝場所は専らネットカフェ等である。大阪市北部のネットカフェを2店舗ほど使う。一つの店舗にはシャワーがある。釜ヶ崎のドヤのことを話すと、「ネットカフェがいいですね。パソコンがある。チャットもできるし、仕事の情報もある。女の子の情報も大事。流行のブランドや化粧品のこと知っとくと女の子と話すのにいい。チャットもやってみるといいですよ。僕も最初は『こんなこと書いてもいいのかな』とか思っていましたけど、向こうも僕のこと知らないじゃないですか」。寝心地について聞くと「住めば都っていうじゃないですか」。昼は街をブラブラしたり、人通りの少ない小さな公園のベンチにいますという。

今収入はホスト時代の客が頼りである。携帯に入っている女の子の連絡先に電話をかける。知人女性の数は、ケータイの電話帳を見てもわからないほど多いという。週に1回くらいの頻度で、かわるがわる知人女性からお小遣いを貰っており、今は「ヒモ」状態だと笑いながら語っていた。いくら貰っているかは数えてないので不明とのこと。彼女らの家に泊まることもある。衣服や荷物は、何人かの知人女性宅にバラバラに置いている。本人も誰の家に何があるのか、わからなくなるときがあるという。もしネットカフェがなかったら、ホスト時代の友人宅に寝泊りするだろうと言っていた。

彼女らからもらう金で、節約しつつやりくりする。食事は100円ショップなどで、安く栄養価の高い食品（カップラーメンなど）を選ぶ。食費は1日千円程度だという。

一番仲の良い女性は、20歳前の風俗で働いている娘である。今仕事を探しているが、その動機として、彼女の親が彼女に押しつけた借金を返してあげたいのだという。彼女が好きなのかと聞くと、「そんなじゃない」と否定した。

これまで、釜ヶ崎で日雇の仕事は探したこともなく、その存在も知らない。自立支援センターは、利用したことはないが、知っているという。健康状態はよい。借金もない。

家族とは連絡をとっておらず、とくに家族の心配をしていない様子だ。「家族、生きてるんじゃないす

か」。頼る人も少ない。本当に信頼できて何でも打ち明けられるのは、実家の近くのコンビニの店長だけだという。あとは先輩のホストに相談をするくらいである。必需品や貴重なものは、先輩のホストに預けることもある。友人は同席していた二人くらいしかいない。実家に居た頃の友人とはつきあいが無い。

今、仕事を探しているが、求職に関しての支援は特に必要ないという。新しく仕事を始めるとしたら飲食関係か製造関係に携わりたいそうだ。「高校が機械科だったんで。機械いじりが好き」。

しかし、一番したい仕事は、やはりホストで、できるならもっと大きい店で働きたいという。大きい店で働けば、よりいい客がつく。そうして稼いだお金で、女性の借金を返してあげたいそうだ。

今不安なことや将来について聞くと、「明日自分が生きていられるかどうか分からないから、とにかく今日1日を精一杯生きると。小学校くらいから思ってたんですね。明日僕は死ぬかもしれないなって。そう思ってきましたから。何か起こったら、そのときに考えます」。だから、将来に対しては特に不安はないという。

19. 男性 30代前半

ミナミの風俗店に奈良県の実家から通っている。11:00～23:00までの12時間勤務。奈良に帰るための終電は23時30分発だが、勤務終了後も引き継ぎ等があるためなかなかすぐには帰宅できず、終電を逃すことが多々ある。その時に、ネットカフェを利用したり、カプセルホテル(3,200円)、ビデオ映写室など(1,500円)に宿泊することがある。

出来る限り布団で寝たいと思うので、ネットカフェでは泊まるというより、ネットで野球の結果を見たり、風俗店の情報収集をするなどして時間(1時間ほど)を潰した後、寝る場合はカプセルホテルに移動し、シャワーを使ったり(夏は特にシャワーを使いたい)、寝たりして始発を待つ(どうも見栄を張ってネットカフェには泊まっていないと訴えたようで、話が終わりかけのところに「ネットカフェ難民やったら、PよりもQやで。あそこめっちゃおんで。あそこ最近できて安いねん。(自分も普段は)Q使ってるねん。(Qのスタンプカードを取り出して)見て、めっちゃ泊まってるやろ。これやったら「ネットカフェ難民」とかって思われるかなあと思って今日はPにしようと思ったら(調査員につかまってん)。やっぱり今日はQに行くわ」と言い、ナイトパック1,000円(未満)が一つの値段の規準になっていると主張していたので、過去はともかく最近はおそらくQに泊まってる模様)。始発で奈良に戻り、6時頃に家に帰って一度寝る。母親が出勤する8時頃に起こしてもらい、出勤の準備をし、11時にはまた店に入る。このようなサイクルの日々が2年ほど続いている。家にきちんと帰れるのは、週に2日くらいである。休日は週1日。朝10時頃から1日パチンコをして過ごす。

奈良県出身。現在実家で親と同居している。ひとり息子。小学校から高校までスポーツをしていた。

高校卒業後は、調理の道に進みたいと思い、就職先も決まっていたが、それを蹴ってパチンコ店に就職。数年間働いた。20歳のころは「めっちゃくちゃ悪かった」ため「警察に捕まったこともある」とのことであった(ただし、捕まった理由を尋ねると、友達と一緒に自分の出身小学校に入り込み、プールで泳いでいたら怒られたとの話がなされた)。

その後は、大阪に来て風俗業界で働く。求人情報は、スポーツ新聞の求人広告で見つけた。広告では、月給35～40万円ということだったが、実際に行ってみたら、20万円くらいだった。最初は、大阪に住んでいたが、「大阪は誘惑の多い街だから住む所ではない」と、途中から実家に戻ってはいる。大阪自体は好きで、大阪で働きたいと思っているので現在でも奈良県の実家から大阪に通っている。

大阪に出てきた頃は、「大阪の誘惑(=キャバクラの呼び込み?)」に負けることが多かった。何年前にはキャバクラのためだけに借金数百万円を抱える。金融会社は、最初の限度額は20万円程度だが、き

ちんと期日に間に合わせて返済していたら、徐々に限度額が引き上げられるので、ついつい限度額まで借りてしまい、借金は数百万円にまで膨らんだ。このままではダメになると思い、1年間で借金を返すことを決意する。その1年間は、仕事が終わった後、コンビニで3~4時間働き、毎月25万円から30万円くらい返済していった。当時の睡眠時間は3時間。当時は会社の家に住んでいたので家賃はかからなかった。現在では借金はない。

現在の店（店長は30歳代半ば。他に20歳くらいの子が2人いる）には勤めて5年近くになる。今では、それなりに地位も上がり役職もついているので、給料は手取りで36万円。ボーナスはなく、寸志が多い時で5万円ほど出る（入り立ての頃は、こうした寸志ももらえないらしい）。よく手取りで36万円は多すぎるとも言われるが、社会保険等は一切なく、そのため医療保険は、自分で国民健康保険に加入しており、こうした出費もある。年金は、一切払っていない（「年金は、まあいいかなと思って」とのこと）。家には、毎月10万円入れている。「やっぱ洗濯なんかしてもらってるし」とのこと。何やかんやと使ってしまう、結局手元にはあまり残らない。

これまでスポーツをしていたこともあり、身体は丈夫である。風邪なども年に1回ひくかひかないかである。それでも、仕事は体力的にしんどいことや、「30にもなって風俗店勤務とは言いにくい」こと、結婚したりや親の老後の面倒をみていかななくてはならないことも考えると、そろそろこの仕事を辞めて、別の「朝の仕事」に就きたいとも考えている。ちなみに、長期間彼女もおらず、具体的に結婚の予定があるわけではないが、親戚はみんな結婚しているらしく、自分もそろそろしなくては、と考えている。親にはこれまで色々面倒をみてもらっており（とりわけ、高校時代は遠征などで金銭的に大きな負担をかけてきたと思っている）、一人っ子なので、自分が親の老後の面倒をみなくてはならないと考えている。仕事をしつつ実家で親の面倒をみるということは両方中途半端になりそうだと思うので、老人ホームみたいな所にきちんと入れたいと考えている。その方が、自分は仕事に専念でき、親もきちんと介護されるだろうとのこと。

「普通の仕事」「朝の仕事」をしたいということであるが、具体的な求職活動を開始しているわけではない。自動車の免許は持っているので、トラックの運転手もいいかなと思っているとのことであった。しかし、最近では違法駐車取締への対応のために、トラックにもうひとり同乗させることで、給料が下がっているという話もあるし、いまいち踏ん切りもつかない。テレビなどでも、40歳を過ぎたら仕事がないというし、できれば30歳代半ばぐらいには仕事を見つけない。しかし、今さら手取り15、6万円では働くことはできない。結局、給料が多いことが働くための動機付けとなる。

ネットカフェは基本的にQを使っている。そちらの方が安い。Qは、ナイトパックが980円で1,000円をきる。それくらいが相場とのこと。しかし、スタンプカードの日付が毎日続くことが恥ずかしいので（直近では、5日、6日、8日と続いていた）、今日はたまたまPへきた。結局、時間のこともあり調査終了後には行き先をQに変更していた。

ネットカフェQは、席数も多いため色んな人がいて、「ネットカフェ難民」のような人もおそらくいるだろうとのこと。ネットカフェを選ぶ基準は、やはり安さだという。

20. 女性 20代前半

父親は普段、真面目だが、酒癖がわるく、呑むと人が変わったように暴力を振るう。中学の頃から「アカの他人」のような感じで父親との関係は悪く、18歳の頃から口を聞いていない。仕事はかつて不動産関係だったようだが現在「よくわからない」。仕事上のストレスを家族に「八つ当たり」したり、男は「男ら

しく」女は「おしとやかに」と言い、「しつけ」と称して暴力。「活発で男好きする」ところが気に入らないらしく、妹にまで手をだす始末だという。本人がかばってきた。母親は昼夜働いており、夜はスナックで働いているようだ。昼間の仕事は「よくわからない」とのこと。高校卒業後の進路を決める際、大学進学を望む母親と意見が合わず、関係が悪くなったようだ。姉（長女）は30歳手前大卒。結婚し実家を出たが、現在は夫と別居状態。兄（長男）も大卒。登録型派遣会社に登録しており、現在は警備の仕事をしているが、最近仕事が減っているようだという。弟（次男）は現在大学生。本人は次女。一番下の妹（三女）は現在高校生。学年トップの成績で、有名国立大学進学も可能と先生に言われているらしい。兄弟姉妹の仲は良い。

小学校低学年まで親戚のいる四国で育ち、小学高学年～中学1年までは兵庫県、中学2～3年は再び四国。兵庫県で「服飾の高校」に通い、「裁縫とか好きやから」将来も服飾の仕事がしたかったという。元来「勉強はきらい」なので大学に進学するつもりはなかったが、母親には進学を促され、そのことがきっかけで母親との関係が悪くなった。高校を出る時に情報処理と簿記の資格をとり就職活動するも、就職先が見つからなかった。就職先の決まらないまま高校を卒業し、ハローワーク面接を5、6回受けるも就職には至らず。高校卒業後、四国にいる親戚の介護のため、約10ヶ月を再び四国で過ごす。

関西に戻るも就職が出来ず、10代後半で「お水」の世界に入る。アルバイト期間を経て就職し、今年の夏まで4年以上働いた。就職した会社は関西圏に多数の店舗を経営しており、梅田、難波、京橋、神戸に計14店舗あるとのこと。会社の都合で時期によってあちこちの店舗に行かされるという。本人も、これまでに全店舗で働いた経験があり、昨年20代前半でマネージャーになったが給料は安く、社会保障は一切なかったとのこと。4月分の給料が減って以来、5、6月分も未払いのままであり、社長とケンカして辞めた。

消費者金融に利子を含めて約100万円の借金があった。母親がいくらか立て替えてくれたが、これが原因で母親との関係はますます悪化した。母親には給料から返すつもりでその後も仕事を続けたが、本来20～30万円はあるはずの4月分の給料が15万円にされ、5月分は支払われないまま、5月からは幼なじみの自宅（友人の実家）に泊めてもらうことになった。ただでさえ気を遣い日に5千円を「食費」としてわたすと先方も「気を遣うからやめて」と言われたが、5月半ばまで居たところその友人から「母に怒られている」と言われ、それ以来ずっとネットカフェ・マンガ喫茶・カラオケ店などで寝泊まりしている。両親の寝ている間または母親が夜の仕事に出ている間、たまに実家に帰り睡眠や食事、入浴、着替えをしていたとのこと。

母親に事情を説明しても、「(給料を支払わないような) そんな会社あるか」「せやから水商売はやめとけ」などと言われ、取り合ってもらえず、余計にケンカになる。6月には兵庫県の公園ベンチで野宿もした。この日はどうしても兵庫県に帰りたい事情があって、ガソリン代を払い友人の車で送ってもらったのだが、財布の中身を見ずにコンビニでお弁当とペットボトルの飲み物を買うなど「フンパツ」した結果残金25円、どこにも泊まれなくなったのだという。

6月に振り込むと言われた5月分も翌6月分も支払われず、店のママに話をしても「(不景気で?) あんたも払われへんのわかるやろ」などと言われ、社長にかけあったところ「逆ギレ」されてビール瓶を投げつけられ、その欠片が片足のスネに刺さりケガをした。そうすると今度は手のひらを返したように謝りはじめたが、5月分と6月分の給料が支払われる様子もないので、「話を持っていくところに持っていく」と言い残し、7月で辞めた。事実、友人の父が「弁護士かなにか」であり、「娘の友人」ということから無料で相談にのってくれる予定だという。ただし、本人はあまり当てにならないと感じている様子。

その後もインターネットカフェやマンガ喫茶で寝泊まりしている。昼夜の仕事で土日は母親が不在なので、この聞き取りの週末も実家へ帰っていた。また、姉には相談ができるのだが、迷惑をかけたくないので世話にはなっていないという。現在は、たまに数時間だけ兵庫県にあるスナックのアルバイトに行くくらいである。インターネットカフェはシャワー付きの店に行き、金銭的に余裕が無いときは24時間営業の喫茶店で過ごすこともある。よく利用する店舗は大阪市北部のネットカフェ、大阪市内の喫茶店、兵庫県のネットカフェなど。兵庫県では4軒利用しているが、どこも毎日清算する仕組みで、連泊は断られるとのこと。食事はコンビニのおにぎり一個の時間がほとんどであり、現在少し風邪気味である。現在はプリペイド式携帯の通話残高がなくなり、貯金もない。聞き取り当日も所持金1,000円。

今後は「お昼間の仕事」を探したい、すぐにでも「住み込みとかあれば」と語った。

21. 男性 20代後半

大阪市内のネットカフェ（5時間：490円：オープンスペース）への入店前に声をかけ、近くのファーストフード店にて聞き取りをした。

現在の仕事は、日雇い登録派遣で、主に倉庫や工場での検品や仕分けの仕事である。主な派遣会社は、派遣会社Pと派遣会社Qである。携帯のメールに求人情報が入り、仕事を受ける場合は、担当者に直接電話連絡をしている。1つの現場には、1週間くらい連続で行くとのことである。求人情報誌をよく利用し、ネットカフェで日雇いサイトの検索をすることもあるとのこと。

日給は交通費込みの6,000円～7,000円で1ヵ月に約20日勤務している。軍手等の消耗品は派遣会社が用意してくれるとのこと。月の収入は、約13万円である。

支出は、家賃が3.8万円、食費が約4万円、ネットカフェの宿泊費が約1万円、携帯電話代が約2万円、その他ゲーム・雑誌代が約1万円で、毎月ぎりぎりの生活をしており、貯蓄もほとんどないとのこと。

現在、大阪府北東部に家賃38,000円のワンルームマンションを持っているが、平成18年の12月末位から家には帰らず、ネットカフェでの生活になったようだ。理由は、奈良・京都方面の仕事が増えて家まで帰るのがしんどいということであった。

今までに、大阪府北東部の大手運送会社、大手家電メーカーの電池工場、おもちゃの工場、大阪市内の冷凍倉庫などで仕事をしたことがあり、家から近い現場の場合は、家から通っていたようだ。

よく利用するネットカフェは、大阪市内のネットカフェXで、安いという理由からナイトパックの5時間で490円を利用。たまにネットカフェYに行くとのことである。時間が早い時は、本屋で立ち読みをしたり、ネットカフェ内で食べる食料品の買出しをコンビニですりして時間をつぶしている。ファーストフード店は利用しない。

悩み事を相談できる人は、仕事で知り合った20歳位の男性が1人くらいである。その男性は、大阪府東部で親と一緒に住んでいるとのこと。

自立支援センターのことは、元利用者の中年の男性から仕事場で少し聞いたことがある。今のところ、利用するつもりはないとのこと。

神奈川県出身。工業高校を卒業後、大阪での就職を希望していたが、親から反対され断念、高校の担任の先生の紹介で地元の重機メーカーの造船部門に正社員として就職。仕事は、溶接作業であった（特にしたい仕事ではなかったとのこと）。

勤めて約3年後に、その時の共同企業体であった会社に出向。約5年間、勤めたが給料は下がる一方で、手取りで月10万円、ボーナスを含めても年収が約160万円にしかならなかった。また、正社員のた

め、責任も負わされ精神的にもきつくなり退職した。ここでの仕事は何もいいことがなく、もう少し早く辞めたら良かったと後悔している。

それからすぐに大阪に出て来た。何も考えずに出て来たため、とりあえず、日雇い派遣の仕事をするようになった。それ以来、親との連絡はしていないし、今後もするつもりはないとの事。

今の仕事は身分的には安定していないが、正社員で働いていた時よりも気楽である。

将来的には今のままでは良くないと考えているが、現在は就職活動をしていない。

今は、健康で特に困っている事はないが、健康保険に加入していないので、病気になったらと少し不安。しかし、現在、貯金もほとんどなく、正社員に就くのは金銭的に困難とのこと。

22. 男性 30代前半

インターネットカフェでオールナイト利用のため、入店しようとしていたところ声をかける。

派遣会社に登録。大阪市南部のインターネットカフェ（PM 11：00～フリータイム 1,080 円：オープンスペース）に泊まる予定。

職場に近いことから、この近辺のインターネットカフェを週に5日くらい利用している。

自宅は大阪市北東部で賃貸住宅に住んでいるが、週1回ほどしか帰っていない。家賃はもったいないと思っているが当面はこの状況でかまわないと考えている。

食事はほとんど外食をしており実家には年に数回帰る程度。

現在はネットカフェの近辺の倉庫内の荷物の仕分けの仕事についており、日給 7,000 円程度、借金はないが貯金もない状況。

現在までは体調を崩すことなくなんとか生活を続けており、国民健康保険に加入しているが、必要最低限（資格証にしかならない程度）しか保険料は納付していない。

他の仕事も考えたいが、ハローワークは利用の仕方がよくわからないし、どこでどのようにすれば情報を得られるのかわからないので、情報が必要なときは求人情報誌やインターネットを利用して情報を得ている。釜ヶ崎については聞いたことはあるがいくつもりもないし、行きたくはない。

将来に対して、現在まではどうにかなってきたので、今後もどうにかなると思っているため漠然とした不安がないわけでもないが、そう不安に感じているわけではない。

住居については、今は大阪市北東部に賃貸住宅を契約しているが月4万円の家賃であり、通勤が面倒なのと交通費もかかるという理由であまり帰っていない。現在の仕事が長く続くようであれば住居の場所も考えたいという思いもあるが、考える余裕がなく、漫然と今の状況となっている。

実家に両親は健在であるが、迷惑をかけたくないという思いがあり帰るつもりもない。

経歴について。「プライバシーにかかわることはあまり詳しく言いたくない」。

他府県出身。18歳のころから23歳ごろまで正社員として働いていたが退職後、派遣労働を続けている（短期間の正社員期間もあった）。

23歳以降、いくつかの職場を経験している。今の仕事が十分とは思わないが、今まで何とかやってきており、必要に応じて仕事を変えることもしてきたため、今後もどうにかなると思っている。

求職活動について。人材派遣会社に登録し、現在の仕事に就いている。今は求職活動の必要性を感じていないが、派遣会社から仕事をもらえなくなったときは求人情報誌を使って仕事を探したこともある。インターネットを使うこともある。

23. 男性 30代前半

調査協力者（以下 A さん）。ナイトパックが始まる 30 分前の午後 10 時 30 分頃に、入店しようとした A さんに声をかけ、調査への協力を了承してもらい、ファーストフード店に入り話を聞かせてもらう。A さんはきゃしゃな感じの人で、声も小さく、少しうつむき加減でぼそぼそと話す。

ネットカフェ等で寝泊まりするようになって約 2 ヶ月である。現在は「午前中に就職活動を行い、午後からは本を読んだりする」ような生活を続けている。このような生活に入った原因は 2 ヶ月前に仕事を失って、実家（大阪市）の両親との折り合いが悪くなり、「勘当状態」になって家を出たから。前々から両親との関係は悪かったのだが、2 ヶ月前の失職を契機に関係は悪化した。以後、両親とはまったく連絡を取っていないが、家には、時々、両親がいない時を見計らってこっそり帰って、着替えを持って来たりしている。ここ 2 ヶ月は基本的にネットカフェに泊まっているが、ネットカフェが満席の場合は、24 時間営業の本屋の店の前で夜を明かす事が多い。しかし、「すりなどが怖い」ので基本的には眠らず、寝ても 1 時間ほど仮眠を取る程度。そうした時は、始発電車が出るまで待って、その後、環状線をぐるぐる回りながら眠ることがあるとのこと。

ここ 2 ヶ月仕事をしていない。だから現在は収入が無く、手持ちのお金で生活している。2 ヶ月前まではパチンコ店で「正規の従業員」として働いていた。そのパチンコ店を辞めたのは「他所のチェーン店に飛ばされそうになったから」とのこと。A さんは高校中退以後、主にパチンコ店の「正規の従業員」として働いて来たとのこと（通算すれば 10 年以上）、これまでに複数のパチンコ店を転々として来たらしく、パチンコ店の内情にはかなり詳しくあった。パチンコ店で「正規従業員」として働いている時は、おおよそ 25~6 万円程度の収入があったらしい（「役職につくと 30 万円くらいにはなる」とのこと）。しかし、A さんの話によると、最近はパチンコ店の従業員採用でも「年齢制限」がきつくなって、「30 歳以上はお断り」という店も増えて来たとのこと、30 歳をこえている A さんにとっても、パチンコ店に再度就職することは難しくなっているようだ。パチンコ店以外では、「倉庫内作業」に従事していたこともあり、「リフトの資格」を持っている。この二つの業種以外の仕事の経験はなく、それ以外の仕事についてはまったく勝手がわからず、「仕事を探しにくい」と話していた。これまで、パチンコ店で仕事を探す場合は、大抵、店頭の従業員募集の「貼紙」を見て仕事を探していたらしいが、現在はネットで仕事を探したり、職安に行ったりしているが、「行ってもなかなか仕事がない」とのこと。また、「健康だがきゃしゃなので、肉体労働などは厳しい」し、「口べたで対人関係が苦手」とのこと、A さんとしては「パチンコ店」か「倉庫内作業」（具体的にはリフトのオペレーターか？）で働きたいという希望を持っているが、なかなか仕事が見つからないらしい。そこで、とりあえずは、バイトで「サービス業・軽作業などをやりたい」と話しているが、しかし、「派遣の仕事も考えたが、評判も悪いしなんとなく嫌なので登録していない」ので、現在はまだ無職である。その結果、「午前中に就職活動を行い、午後からは本を読んだりする」生活が約 2 ヶ月続いているとのことである。

食事については、「1 日 3 食は食わず、1 食か 2 食。チェーン店の安い丼などを食べることが多い」ので 1 日の食費は 500 円程度（月にして 1.5 万円程度）。ネットカフェの料金は、月に約 2 万円強（ナイトパック代 1,080 円 + バスタオルレンタル代 100 円 = 1,180 円で、それを月に 20 日ほど利用）。衣服は、時々こっそりと自宅に帰って着替えている。携帯電話は利用しているが、その料金は「姉名義で姉の夫と一緒にファミリーパックに入っているの、姉に払ってもらっている」とのことである。A さんには二人の姉がおり、その二人は大阪に住んでいて、この姉とは連絡があり、彼女らは A さんのことを何かと気にかけてくれているらしく、「いざとなったら、二人に頼る」と A さんは話していた。国民健康保険の保険料は「親が払ってくれているらしい」とのことだが、年金は払っていないらしい。

全体の印象としては、まじめそうだがかなり「ひ弱い」感じの人であった。仕事探しに関しても、未経験の職種につくことや、役所で相談することなどに関しても、かなり「臆している」風で、「～はできないから」「～は無理だから」といった発言が耳についた。それでも、現在の状況については、かなりの「あせり」と「不安」を覚えている様子で、「将来の見通しは？」という質問に対しては、「将来のことなど考える余裕はない、今を生きるので精一杯」という返事が返って来た。

24. 女性 30代前半

前日の早朝、ある調査員がネットカフェの前で出待ちをしていたところ、リュックひとつをかかえて出てくる女性に声をかける。今日は仕事で、晩は友だちのところに泊まるので、明日ならかまわないと。明日、調査員の携帯電話に連絡すると別れる。翌日、電話がかかってくる。仕事が終わったので今からなら構わないですが…。ネットカフェの前で19時に会うことを約束して電話を切る。18時45分、梅田のビックマンの前でもう一人の女性の調査員と一緒に待ち合わせをして19時少し前ネットカフェの前に行くと、彼女はTシャツにバッグ1つというラフな格好ですでに待っていた。声をかけると緊張した表情で返事をしてくれる。近所のファーストフードの店に行き話をはじめめる。

兵庫県東部で生まれ育つ。祖母と母親の三人で暮らしていた。兄弟姉妹はいない。物心ついた時から父親はいなかった。「父は気づいたらいなかった」。母親からは、父親のことはあまり聞いておらず、「死んだからいない」。「今テレビに映っているのがそう」などと母親に言われていた、という。「現在、父親がどこにいて、どこに住んでいるのかわからない」。

小さい頃（小学校1、2年生頃）から、母親には間違っただけをするとたたかれていた。「普通おしりとかたたくでしょ。蹴ったり殴ったり、頭たたか、背中たたかだったからね」。

母親はパートの仕事をして生計をたてていたため、休みの日は寝ているか、好きなことばかりしていて、どこかに連れて行ってもらったことはないという。祖母も連れて行ってはくれなかった。母親は夜遅く帰宅することが多く、朝帰りもあったという。お金が家に置いてあり、コンビニやスーパーで夜ごはんを買って食べていた。小学校高学年のときに、祖母が母方の兄夫妻に引き取られていったことをきっかけに、家にひとりぼっちになってしまった。「一人で寂しいし、こわいし、そういうのが今につながってるんちゃうのかな」。

小学生の頃、いじめられっこだった。「髪の毛がくせっけでしょ。それやから中学くらいまで髪の毛のことでいじめられてて、中学の時、社会科の先生がいじめたらあかんって言うてくれて、いじめはなくなったかな」。

高校を卒業後、食品製造会社の製造・包装の仕事で正社員として働く。しかし3ヶ月で「人間関係でだめだった。仲良しの子とがんばっていたけど」辞めた。失業保険をもらって求職活動をしていた。一般事務の仕事に就くが、経験がなかったため3ヶ月でくびになる。その後1年～2年、パートで家電メーカーのPHSの組み立ての仕事に就く。その後3年間大阪市内で製造の仕事に就く。正社員として働くが、会社の人員削減によりリストラにあい、くびになる。再び失業保険をもらいつつ仕事を探す。この間経理の仕事の職業訓練を受ける。「事務の仕事ががんばりたい」。しかし簿記3級程度の資格をもっているにもかかわらず実際の仕事はできない、と同じように職業訓練を受けて仕事をしている先輩から言われあきらめる。2001年冬から2003年冬「ちょこちょこ派遣の会社に登録をして、仕事に行ったり行かなかったりの繰り返し」が3年間続く。その仕事を辞めて3ヶ月くらい、保険の外交員の仕事（正社員）をしていた。これは大阪市の職安に来た帰りに歩いていたところ声をかけられてこの仕事に就くことになった。しかしもともと内

向的な性格であったため、契約になかなかむすびつかず、歩合制だったので契約をとらないことには仕事にならず、しんどくなり、もめて辞める。

最近、フリーペーパーで大手派遣会社 X も見つけて、登録し、工場の仕事をしている。その派遣会社に登録する以前は、別の大手派遣会社 Y に登録していた。「(以前登録していた派遣会社) Y はぱっとしない」。

現在は、朝の 8 時から夕方 5 時 15 分まで働き、忙しいときは 1~2 時間残業をしてから帰る。日払いで、金銭的には満足している。時給 800 円で、1 日 8 時間働いて 6,400 円の稼ぎが得られる。余裕がでてきたら、銀行振り込みに変えてもらおうと思っている。契約期間はなく、ずっと働くことはできる。休まず、遅刻しなかった場合は、ランクが上がり、時給も上がる、とのこと。現在の職場では、社員と派遣社員の区別はついているという。

ネットカフェ利用以前は、実家から働きに出ていたが、ここ 1 ヶ月、ネットカフェを利用している。今年 4 月に家出をして 1 週間ほどネットカフェに泊まっていた。「私も悪いけど、2 週間くらいネットカフェから仕事に行ってた」。ゴールデンウィークで仕事がなく、一度は実家に帰ったが、また家を出る。「(親に) 連絡はしてない。心配はしてるはず」。現在の派遣会社 X に登録する以前に、また別の派遣会社 Z にも登録していた。その時、派遣会社 Z の事務所にまで、母親が連れ戻しに来たが、彼が引き離すかたちで、それ以来母親とは連絡をとっていない。彼は「もう連絡するな」という。また学校の先輩から祖母がこの春に亡くなったというのを聞いた。そのときも実家に帰ろうかどうしようか悩んだのだが、祖母の葬儀に行くだけの交通費の蓄えもなかったので帰らなかった。

ネットカフェ P を利用するようになって 1 ヶ月になる。

母親と二人暮らしをしていて、上記で述べたような彼の両親と自分の両親の関係が悪く、彼から家にいるのではなく「自立しろ」と言われたため。そのとき、約 1 年付き合う男性が「大阪では P (ネットカフェ) が一番安い」と、ネットカフェ P を紹介した。その彼も、以前、両親と喧嘩したときに P を利用していたという。「(ネットカフェ P は) 22 時から 6 時まで 980 円、個室にしなければ 880 円。30 分延長すると 130 円いるけど、サービス券があったら、(追加料金が) いらなくなるの」。仕事の関係で、朝の 6 時半にはネットカフェ P を出るようにしている。このように話してくれたが、「しんどいし、あそこは寒い。ゆっくりして落ち着きたい。精神的にまいる」と語る。お風呂は 400 円くらいで銭湯に通う。先週の日曜日はサウナのただ券を彼にもらい、宿泊した。ネットカフェで何が困るかということ、トイレが一番困るとのこと。他のネットカフェで、兵庫県にある店舗は 10 時間コース、トイレがきれいなので利用したが、2,000 円は高いと感じている。「一回ためしに 1 時間入ったけど、380 円して高い。それに会員制だし。カードは 200 円いるし」。他にも、兵庫県の商店街の漫画喫茶は、オープン席、個室関係なしで 23 時から 6 時まで 980 円なので利用したことがあるという。ネットカフェ P の個室は狭く、毎週木曜日と金曜日の夜に出勤するオーナーや女性の店員がいるときは安心して寝ることができるという。

深夜の 12 時くらいに寝て、4 時など、変な時間帯に目が覚めてしまうことが多く、3、4 時間しか寝ることができないため、眠くなり、次の日の仕事がつい、とのこと。「熟睡はできない」。また、個室だが、入り口はカーテンで、周りは壁(板)で囲われているが、上がオープンなためプライバシーが守られていないと感じる。人が通るたびに覗き込んでくる。

1 ヶ月間ネットカフェにいて感じることは、いろいろな人がネットカフェを利用しているということ。「若者だけじゃない。サラリーマンやネクタイはずした人、50 代くらいの人もある。昨日の朝は、年いった人が泊まってた。へえ女の人が、って思ったこともある」。1 日フリー 1,700 円。土日にたまに 1 日利用するという彼女は、結構人間観察ができるという。「どういう人がいるのかな。最近テレビで(ネット

カフェ難民) やり始めて、私の中に何通りかの考えがあるんですよ。小さいころから虐待されて親から離れた人。自立したい人。借金があって帰れない人。おもしろ半分で作る人。人間っていろんな考え方があって、事情はいっぱい抱えている」。

彼(30代後半)とは以前職場が同じで、彼から映画に誘うようになり交際することとなった。1年ほどの付き合いである。彼は現在、ハローワークで工場関係の仕事をしている。お中元シーズンで今は忙しいとのこと。「今朝、事情があって会うことがあったが、忙しくて会う時間がなくなってきている」。「今週の日曜にあった時に、(ネットカフェに泊まるのも)もう限界か? って聞かれたけど、本当は(つらいって)言いたかったけど、プライドで、負けたくない、絶対自分で抜け出そうって思って…」。

お金が10万円くらい貯まったら(一緒に住む)部屋を探そうって話していたときもあった。(今は)携帯電話を持っていないため、公衆電話で(彼と)連絡を取り会う約束をしているという。今の彼との状態をどう思いますか? とときと「つきあっているんかわからない」と下を向いて答える。

調査当日の朝、体調の不調から病院に出向いていた。仕事を休むことでその日の収入もなくなる。「当日仕事を休むと給料はもらえないが、前日に(休むことを)言っていたから(ペナルティーを科されることはない)ので大丈夫」と話をする。病院にかかるとなると医療費は大きな負担になる。紛失したということにして(母親と一緒に世帯の)国民健康保険証を再発行して持っているのだから、自己負担は3割だがそれでも現在の状態では大変である。ちょっとお腹が痛い、風邪をひいた場合などは薬を買ってなんとかしていた。しかし今回はそういうわけにはいかなかった。

現在妊娠している。前日彼に会って病院に付き添ってくれると思っていたのに、朝電話をしたら、22時まで仕事をしていたのでしんどいと言われ一人で病院の産婦人科を受診した。妊娠していることは彼に伝えている。「(子ども堕ろすのに)なんぼ、かかるの? 」という。次のチャンスがいつあるのかもわからないことであるし、体の問題もあるので、子どもを産めないからだになるのは怖い。受診したときにいつまでなら子どもを堕ろすことができるのかきいた。彼女に残されたタイムリミットは1ヶ月もない。病院で2時間待たされ、その間電話をしたところ、「母親と出かけるから21時に電話しろ」という返事だった。電話だけの彼、待つ自分もだめなんだと言いきかせていた。「ほんというたら、大切な命だから、殺すわけにはいかない。貯金が100万200万あったら…。がんばりたいのに…」。

貯金は4万円あったが、現在はゼロ。

「彼がギャンブル(パチンコ)好きで、やめてくれっていつてるけどやめる気配はない」。4万円の貯金を借金返済に使われ、10万円を返すつもりで、彼は残りの6万円を必死にあつめている。

理想の男性として、「ギャンブルしない人がいい。お金に関係なしに、何でも頼りになる人がいい。俺についてこいと言ってくれる人がいい。一緒に笑って、泣いてくれる人がいい」と語る。

彼がこの春にネットカフェを紹介したときには、お水で働けと彼女に言った。面接に一回行ったが断られた。パチンコ店は時給がいいからと、勧めてきたこともある。パチンコ店にも面接に行ったが、経験なしの30代は無理だった。「(雇ってもらえないと)わかって行く私も何考えているのかなって思うけど」。

大阪から仕事場までの往復500円くらい。お昼ごはん等に1,000円。朝、夜はコンビニでパンなどを買う、昼は現場で食事をする彼女は、使ったお金をノートに記入し、3日間ごとに彼に見せているという。「3日間のたまったお金を彼に見せ、使いすぎて言われる。洗濯して200円使っただけで無駄使いと言われた」。

母親や身内からは見放されたと考えている。「今年春に宗教家と会って、母親と話し合うことをすすめられた」。母親は10年弱前に手術してから仕事をしておらず、生活費は彼女が出していた。今年に入ってから働き始めた母親は、現在50歳代後半。

「部屋を借りてゆっくりしたい。『あなたは頭打ちしいひんかったら別れられない』って母親や親戚から言われていた。でも今は実家に帰る気はない。自立してるでって言えないから無理。自分は今の段階では負けになってしまう」。

今回この調査に協力しようと思ったのは、友達や相談できる人がいなかったからだという。内向的と周囲から言われ、現場の先輩からも、おとなしいと言われ、相談する人がほしかった。

「子供がいる、いないに関わらず、部屋を借りたい。しんどい、しんどい、しんどいよ。ほんまに部屋借りしたい。1週間は我慢できるけど、そこからは…」。

彼女は調査員と一緒に食事をした。その後何度か電話があっってお腹の中の子どもをどうするか話をしたが、ぷつぷつ電話がかかってこなくなった。

25. 男性 50代後半

自立支援センターに来て数週間経つ。今の自立支援センターには春に入所した。

フォークリフトの免許を落としたので、再交付の申請をした。再交付を受けるには1,000円かかるのでこれまで申請したくてもできなかった。自立支援センターは再交付にかかる費用を肩代わりしてくれない。毎朝250円もらえ、自立支援センターの「よろず」の仕事をして2時間すれば5,6千円もらえる。先日自立支援センターの「よろず」の仕事をしてお金ができたのでフォークリフトの免許の再交付申請をした。この免許を頼みにフォークリフトの仕事を探すつもり。自立支援センターに掲げてある職安の求人情報には一日に14、15件あるが、その内の1、2件はフォークリフトの仕事。

自動車の免許証は、住民票が他県にあるので再交付を受けようにも受けられないため検討中である。

大阪へは去年の春に愛知県からやってきた。西成労働福祉センターで仕事を探して、飯場契約を繰り返していた。飯場とドヤ、そしてシェルターを転々としていた。今年の春になると急に仕事がなくなってたまにしか仕事に就けなくなった。春に三徳寮の生活ケアセンターに入所。ここで、自立支援センターの情報を得た。市更相（大阪市立更生相談所）へ行って、自立支援センター入所を希望した。そして初夏に面接するまで、シェルターやケアセンターを転々とした。シェルターは毛布にダニがいてよくない。いびきもある。ケアセンターは3、4日しか入れない。ケアセンターに入るにはまず市更相で医療券をもらって、大阪社会医療センターでみてもらってからになるので手間がかかる。身体は健康。

愛知県出身。去年まで愛知県にいた。高校を卒業して、3つほどの会社で働いた。最初に印刷工として3年間勤める。会社を辞めて半年間北海道に旅行にでかける。寝袋をもってヒッチハイクをしながら北海道を旅行した。「北海道の人はやさしい」。このころ北海道に旅行するのが流行っていてお金がなくなると、泊まってる旅館やユースホステルにビラが貼ってあり、それをみてバイトをすることができた。バイトをして「ただでめし」を食べていた。このころは会社を辞めた合間に旅行にでかけていた。

その後、20代半ばに大手飲料メーカーのフランチャイズ店に就職。新聞で求人を見つけた。営業の仕事でコーヒー豆を仕入れる卸仕事をしてた。少しすると、フランチャイズ店だったのが、直営店にかわった。雇用条件がよくなった。給料、ボーナス、厚生年金もあった。

30歳代のはじめに結婚。子どもは三人。最近の冬に離婚。「以前から仲が良くなかった」。慰謝料がきつかった。

約10年ほど前に、脱サラして喫茶店を始める。そして去年の春に倒産。このときに作った、愛知県の友達からの借金が120万円ある。「やっぱり返さないと…」。その後大阪へ。

大阪では仕事がないので以前から知っていた釜ヶ崎に赴いた。「どこで知ったんですか」の間に「山谷

や釜ヶ崎言うたら、有名」。携帯電話は愛知県にいたころに放棄したが、仕事は西成労働福祉センター経由でしかいかない。賃金がセンターなら9千円から1万円だが、携帯電話経由なら7,000円だからだ。

住居は飯場とドヤ、そしてお金がなくなるとシェルターを利用するというパターン。ネットカフェは愛知県の友達とメールのやりとりをするために利用する。1週間に1回メールチェックのために利用し週刊誌なんかを読む。フリードリンクもよい。大阪市南部のお店などを利用していた。料金は1,200~1,500円/6時間(ナイトパック)、お昼は300円/時間。「メールがなければ利用しない、寝るだけやったらドヤの方が安い」。ドヤは安いとこで800円。高いとこは2,000円。だいたい1,200円のところを利用していた。そのほかお金はビール、弁当、たばこに使っていた。

シェルターに泊まっていたときは一日一食。乾パンと釜ヶ崎の安い100円ほどのうどんを食べていた。炊き出しはあまり利用しない。最初のころは利用していたが、知り合いからおごってもらうようになって利用しなくなった。「自分があるときはおごるけど…」と小声でつぶやいた。ファーストフードのお店に泊まったときは、ハンバーガー一個頼んで何時間も朝まで利用するが、眠ることはできないので、お昼は今宮文庫で仮眠をとる。

求職については、職安の情報を中心にみているが、求人情報誌もみている。職安の方は「正社員」と「契約」・「派遣」の仕事が半分ずつ。どちらでもよい。これまで年金は26年かけたので、60歳か65歳から受給できる。それまでとにかくどんな仕事でもいいので食いつないでいければいい。住居もこだわらない。ドヤでもいい。このまえ、職安の前にネットカフェがあるのを見つけた。職安に出かけたついでにそのネットカフェに行こうと思ってるという。友達とメールをやりとりするのが楽しいようだ。

26. 男性 40代後半

これまでの経緯

① 関東で生まれ、中学を卒業後理容専門学校に行って理容師になった。個人営業の理髪店を転々としていたため、雇用保険や年金はなかった。正社員経験はない。

② その後、工場関係やサービス業などいろいろな仕事を転々とし、建設業の経験も1年くらいある。その間に借金を1,000万円ほど作っているが、事業の失敗や連帯保証人によるものではなく、理由については口を濁す。

③ 今年の2月まで名古屋で建設会社の借り上げアパートに住んでいた。仕事が少なくなったので、やめて出てきてから、名古屋で1ヶ月弱おり、主にサウナに泊まり、ネットカフェには4~5日泊まった。店名は覚えていない。サウナより安いから。

④ 西のほうに行ったことがなかったので、大阪に行って仕事を見つけようと思って大阪に来た。簡易宿泊所の事はそれなりに聞いていたので、国道沿いの1泊2,000円のドヤに20日間ほど泊まった。釜ヶ崎で働いたことはない。

⑤ 金が尽きてきたので、昼は大阪市内の図書館や近くの図書館で過ごし、夜は公園のベンチで寝た。テント居住者との交流や支援者との接触はなし。約2ヶ月そういう生活をしていたが、公園管理者が出て行ってくれといい、[行くところがない]といったら、巡回相談員を連れてきたので、自立支援センターに今年春から入所した。それまで自立支援センターなど知らず、福祉事務所に行っても門前払いだろうと思っていたので、行かなかった。

ネットカフェおよび野宿生活について

① ネットカフェは名古屋で、一泊1,200円くらい、仕切りがありリクライニングシートはあった。安い

ところを選んだが、ナイトパックとか詳しいことはあまりよく分からない。

② 大阪に来たときは12〜3万円持っており、携帯電話もあったが、仕事がなかったので、生活費・宿泊費に消えてしまった。日雇い派遣などはしていない。

③ 大阪市内の公園での野宿生活のときは、最後の何日間かはアルミ缶も集めたが、自転車がないのでほとんど集められなかった。その金で100円の食パンを買ってきてそれで数日間食いつなぎ、その他はゴミ箱をあさる生活だった。

④ 釜ヶ崎などで炊き出しにはいったことはない。知っていたが、自分は健康だし身なりもまだきれいだったから、何で来てるんだと思われて浮くんじやないかと思っていかなかった。

その他

① 血圧は上が160くらい。糖は+2。

② きちんと仕事をしてアパートで暮らしたい。

27. 男性 30代後半

調査協力者（以下Aさん）。Aさんは37歳で、現在は自立支援センターに入所している。昨年の秋にこれまで10年弱正社員として勤めていた工務店が倒産、ある日出勤すると会社はからっぽで社長は夜逃げしていたとのこと。その前の月は給料が全額出なくて「あぶない」とは思っていたそうである。その会社は15人ほどの従業員をかかえた工務店で、Aさんはそこで主として「資材の運搬や組み立ての仕事」をしていた（「けっこうキツイ仕事だった」とのこと）。給料は「20万あるかないか」程度で、夏と冬のボーナスはあった。

その当時Aさんは大阪市内の家賃6万8千円のワンルームマンションに一人で住んでいたのだが、会社が倒産して1ヶ月後の冬、手持ちの100万円弱の現金と「身の回りの物だけ」を持ってマンションを引き払い（「家賃が高かったから」とのこと）、以後、梅田・難波を中心として、ビジネスホテル→カプセルホテル→ネットカフェ・マンガ喫茶・ビデオ試写室等（「ビデオ試写室を一番多く利用した」とのこと）を転々として（「定まった宿泊場所はなかった」とのこと）、ハローワークなどで仕事を探し始めたとのことである。

ところで、会社が倒産したとき、Aさんには貯金が200万円近くあったそうであるが、そのうちの100万円弱が残っていたローン（車のローンが中心だったそうであるが、その車は「会社がつぶれる前に手放していた」とのこと）をすべて支払って、残りの100万円弱を持ってマンションを出たとのことである。しかし、Aさんにはこのローン以外にも「サラ金」からの借金が数百万円あるそうで、この借金は「10年ほど前」（すなわちこの「工務店で働き出す前の運送会社で働いている頃」）に作ったものだそう。それ以来、会社が倒産するまではずっと「利子を入れてきた」と語っているが、いくらか話の「つじつま」が合っていないところもあり、あまりはっきりとしない。しかし、数百万円ほどの借金があるのは事実のようで、会社が倒産して以来、利子も入れていないらしい。現在、「弁護士さんと相談して清算の手続きを始めている」とも語っている。

しかし仕事は見つからず（仕事の選り好みはせず「何でもいいと思って探したがみつからなかった」とのこと）、春に入ると持ち金も尽きて（マンションを出て最初の頃は、1泊6,000円程度のビジネスホテルに泊まっていたとことで、所持金は急速に減っていったらしい）、その後は1ヶ月近く公園で野宿生活を送ったとのことである。そして、いよいよ「しんどくなって」区役所に「駆け込み」、そこで巡回相談員に引き合わされて、自立支援センターへ入所。そこで数週間ほど過ごしたあと、現在の自立支援センター

へ移って来た。

東京生まれの A さんは、高校生の頃に、「親とケンカして家出」、ヒッチハイクで大阪に来ている。この「親とのケンカ」については多くを話さず、親とは「折り合いが悪かった」と語っている。また、特段に大阪を目指して来たわけではなく、「たまたまヒッチハイクで乗った車が大阪行きだったからここ（大阪）に来た」とのことである。「もしも、乗った車が九州行きだったら、今頃は九州にいるだろう」とも語っている。大阪に着いた時、所持金は2万円だったそうで、行く当てもなく「たまたま」ある食堂に入って食事していたら、隣の席に座っていた「社長さん」が「どこから来た、働くあてはあるのか」と話しかけて来て、いろいろと話しているうちに、その「社長さん」がやっているクリーニング店でアルバイトとして働くようになったのだそうである。その「社長さん」が最初のアパートの世話などもしてくれたとのこと、で、「もしもあの時社長さんに会わなければ、大阪のことなど何も知らなかったの、あの時に、のたれ死んでいたかもしれない」と語っている。このクリーニング店では2年間ほど働いていた。その後、いろいろの仕事を転々としたそうで、そのほとんどはアルバイトだったとのことだがその詳細は不明。ただ「パブルの頃に「西成」から何回か日雇いで仕事に行ったこともある」らしい（「西成」から他県にも仕事に行ったことはおぼえている」と語った）。しかし「ドヤに泊まったことはない」とのこと、釜ヶ崎に対する「拒否感」はけっこう強そうだった（ちなみにしばらく野宿しているときにも炊き出しなどは「一切利用しなかった」らしい）。そして A さんは、20 歳代後半に初めて運送会社に「正社員」として勤め始めている。ここでは数年間、働いていたとのことである。その後、運送会社を辞めて、次に「ゲーム機メーカー」でやはり2年間ほど働いていたとのことである。この時は正社員ではなくある派遣業者を通じて派遣社員として働いていたとのことである。その後、30 歳代に「大阪市内のハローワーク」を通じて先の「工務店」の仕事に就いている。

ところで A さんは、家出をして一度実家に電話をしたそうである。しかし、父親から「一族の恥さらし、早く死ね」と罵られたそうで、それ以来一度も実家と連絡は取っていないとのことである。「弟が一人いる」が、この弟さんとも20年来音信不通であり、また東京時代の友達とも一切連絡をとっていないとのことである。ただ、大阪には「同じ歳の親戚」がいて、その人は A さんが大阪にいることを知っており、「何かと心配してくれる」らしく、現在 A さんが所持している携帯電話の料金もその「親戚」の人が払ってくれているそうである。

A さんは「運送会社で働いていた頃」に結婚しており、子供も一人いるとのことだが、子供が生まれるとすぐに奥さんは「子供を連れて家を出ていった」とのこと、だから「子供の顔もほとんど見ていない」と話している。「子供さんに会いたくありませんか」と聞くと「向こうが会わせてくれないだろう」との答え。「離婚の手続きはすんでいる」と語ったが、離婚に至る事情については話してもらえなかった。

自立支援センターに入所してから数ヶ月。現在 A さんは、センターから派遣会社を通じて週に1~3日働きに行っている。仕事は「パン屋」（パン工場か？）での「仕分けと出荷の仕事」だそうで、夜8時半から朝8時半までの「夜勤」である。日給で7,000円~8,000円で、日数も多い週で3日、少ない週では1日しか仕事がないときもあり（だから月収は「10万円をはるかに下回る」）、決して安定した仕事ではなく、A さん自身も「今のこの仕事で自立するのはとても無理。体を慣らすつもりでこの仕事をしている」と語っている。だから、現在も積極的に仕事は探しているとのこと。仕事を探す上での大きなネックは「年齢」と「住所」とのこと、特に、就職活動の際にセンター入所中であることがわかると断られるので相手先からの連絡を直接受けられるように「携帯電話は絶対に手放せない」とも話していた。働いて得たお金は貯金しているとのこと。「将来の見通し」については、「何でもやれるし、仕事は選ばない。今努力し

ているので何とかなるのでは」、「何か安定した職に就けて家が確保できたらなあ」と語っていた。しかし「お金がないので、大きな病気にかかったらどうしようという不安はある」とのこと。

Aさんは比較的若くて、話の内容も明瞭であり、また健康についても「大丈夫です」とのこと、全体として「明るい」印象を受けた。ただ、インタビュー中に何度か、「もっと早くこのような施設（自立支援センターのこと）があることを知っていたらよかったのに」「こんな施設があることをまったく知らなかった」という趣旨の発言があった。Aさんはいよいよ「耐えきれなくなって」区役所に駆け込んだのだが（それも「どうしよう」と区役所付近で逡巡しているときに、近くを通りかかった中年の女性に「どうしたの」と声をかけられ、「困っている」と事情を話すと、その女性が「すぐに区役所に相談しなさい」とすすめてくれたので、やっと相談に行ったとのこと）、もっと早く（たとえば所持金が残っている間に）支援の仕組みと接触できていれば、現在の状況はもっと良くなっていたのではと想像される。

28. 男性 30代前半

調査協力者（以下Aさん）。現在は自立支援センターに入所している。去年の秋頃に「色々あって家を出なくてはならなくなった」（具体的な内容については中身は話してもらえなかったが、数百万円ほどの借金があり、それ関係か？）とのことで、そのまま家を出た。手持ちのお金も全くない状況だったが、秋から冬までは、運送会社の倉庫内の作業（積み荷を降ろしたり、振り分けをしたりしていた）の日雇いの仕事をして稼ぎつつ、ネットカフェに宿泊する生活をしていた。ちなみに、運送会社の仕事では、18:30から9:00くらいまでの夜勤（14時間以上労働）で、日給12,000円くらいであった。保険等はなし。行きたい時に連絡をすれば仕事があったので、仕事をしたらパチンコに投資、ネットカフェに寝泊まりし、またお金が足りなくなったら日雇い仕事に行くという生活をしていた。ネットカフェ以外には、大阪市北部にあるサウナを利用したり、ごくたまにはあったが、友達の家泊めてもらったりしたこともある（しかし、現状を知られたくないので、友達の所に泊めてもらうことは、めったにしなかった）。また、大手自動車製造メーカーなどで、入寮して仕事をすることも考えたが、地元を離れるのが嫌でやはりやめた。

ネットカフェは、以前にも遊んだ後に終電を逃した時など利用したことがあったので、知っていた。長期的にみれば、絶対家賃よりも高いのだろうが、ネット、ゲーム、漫画といった物が全部揃っているところが魅力の一つであった（自分で家を借りれば、パソコンも、ゲーム機も自分で買わなくてはならないが、それは到底無理だったから）。大阪市北部の10時間1,000円程度の所に宿泊していたが、頻繁に利用していると何となく顔なじみも出来たりして居心地が良くなるので、最後の方はずっと同じ場所を利用していた。また、店員とも顔見知りになると、椅子を3つ並べて横になっていたりしても注意されることもなかったもので、そうやって仮眠をとっていた。しかし物音などで目が覚めるのでやはり熟睡はできない。

年が明けた頃から、運送会社での仕事は暇になり、以前は入りたい日には必ず仕事に入れたが、手が余っていると言って断られはじめた。仕事自体は、年末の半分くらいになっているらしい。

そこで、どうしようもなくなり、以前知り合いから生活保護を3カ月受けたり出来るというような話を聞いた記憶を頼りに、4月の頭に大阪市の区役所に相談に行く（ちなみに、野宿するのはどうしても嫌だった。とはいえ、ネットカフェなどがなく、お金もなくなってしまっていたら野宿せざるをえなかったかもしれない）。そこで、自立支援センターに入ることになる。1週間は三徳ケアセンター、その後舞洲に1カ月おり、自立支援センターに入所することになった。自立支援センターに入所する際に、これまではネットカフェで寝泊まりしていたと話しており、今回の調査協力を求められた。

Aさんは、大阪市の出身。高校卒業後、Aさん自身は別に大学にはいきたくなかったが、「親がいけと

いうので、大学に進学した。しかし、大学に行くには時間がかかること（自宅から最寄り駅までは電車、最寄り駅から大学まではバス）、大学の授業よりも、アルバイトの方が楽しかったことなどから、大学へは最初の2カ月ほど通った後、行かなくなり1年間在籍した後に退学する。アルバイトは、大阪市内でウェイターをしていた。基本的には、人と接する仕事が好きのため、運送会社で仕事をしていた以外は、接客業や営業に就いていた。正社員の経験は、携帯電話販売会社時代の1年間（その会社は、一年くらい勤めた時に、社長が脱税で捕まり、給料が3カ月ストップしたので、困って辞めることとなった）と、大手派遣会社（各会社に、派遣社員を使ってもらおうよう営業をして回る仕事）時代の4カ月である。正社員時代には、「厚生年金」もしくは「国民年金」に加入していた。また、それ以外にも「国民年金」は、猶予（免除）の申請をした時期もある。

ハローワークで仕事を探したこともあるが、見つからなかった。特に資格も持っていない。

春頃から、自立支援センターから、家電メーカーに派遣で通っている。精密機械の清掃の仕事。仕事は週6日で、水曜日が休日である。1日の勤務時間は、朝の8時半から17時半までだか、20時半くらいまで残業をする。時給は、1,000円、残業時間帯は、1,250円。まだ2ヶ月間の試用期間中だが、20万円台後半くらいの収入はあると思われる。精密機械の扱いなので、空調も整っており、肉体的にも楽。「こんなに楽な仕事があったんや」と思ったとのこと。正社員への登用もあるようで、もし機会があれば、そのまま正社員として働きたい。朝が少し早いので心配だが、とりあえず自立支援センターでは、清掃のため必ず6時半には起きるので、問題ないだろう。とりあえず、今年いっぱいちゃんと通えば、いい年が迎えられるかな、とのことであった。

現状については、基本的には誰にも連絡をとってなく、家族にも言っていない。兄弟もいるようだが、詳しくは話してもらえず、やはり連絡は取れないとのこと。一人だけ、全てを知っている友達がいる。

もっとも困っているのは、借金の問題である。今月から、法律相談を行ってもらっているが、現在、数百万円の借金を抱えている。そのうち、金融会社からは（2年くらい前の時点で）4割程度、友人・知人からのものが6割程度ある（家にいられなくなった理由はこの借金か？）。借金の大きな理由は、パチンコのようなものである。パチンコでは、10万円から20万円くらいの勝ち（負け）は当たり前であり、「勝った（負けた）」と感ずるのは、5万円くらいかららしい。

この借金のために、住民票を動かすことはできない。また、今後家を借りて住むためにも、親との関係を修復することができないと、保証人にもなってもらえないので、まずはこの問題をどうにかしたい（保証人会社などはやはりお金を余分にとられるわけだし、友達には頼みたくもないし、頼めないで親しくない）。

また、身体も臓器が悪いらしい。原因が不明だが、ストレスが続いたり、不規則な生活が続くと膵炎を発症する。今まで、大きなものは、2回ほどあり、そうなると1ヶ月くらい入院しなくてはならない。ネットカフェ生活時代は、病院にいくお金もないし、この臓器のことが本当に不安だったとのこと。

これまで釜ヶ崎へは行ったことがない。釜ヶ崎という地域のことはもちろん知っていたが、あそこにいる人たちは、「自分とは違う人間だ」というように思っていた。

今回自立支援センターに入るまで、こういった施設やNPOなどの相談機関については全く知らなかった。もっと早く知っていればなあとのことであった。生活に困る以前の「普通の生活をしていたら」自立支援センターにしる、NPOにしる、知る機会はなかった。ネットカフェでもチラシ等置いてあればいい

のではないかと、とのことであった。「住居」の確保にあたっては、一般の不動産には借金の事など相談するわけにはいかないもので、行政機関でそうした窓口を欲しいと思う。

また現在、就労しているので、自立支援センターでは資格訓練を受けることができない（自動車の免許をとりたいと思い、申請はしていた）。就労か、訓練かの二者択一ではなく、仕事をしながらも資格をとれるような施設があればいいのと思うとのことであった。

29. 男性 50代前半

Aさんはネットカフェに寝泊まりしていたわけではなく、ネットカフェは主に仕事の情報収集に利用していたという。ビデオ試写室では寝泊まりした経験があるが、それも基本はドヤ住まいで試写室は「お金のある時に（ドヤで寝る方が安い）」ビデオを見てついでに寝るという形で、週に1回程度だったという。その時期については後述。

Aさんは、兵庫県で生まれた。大人数きょうだいの5番目である。実家は酒屋を営んでいた。高校卒業後、食品の卸会社に就職したが、すぐに辞めて、その後いくつかの酒屋に丁稚で勤める。まず大阪市北部で勤め、その後大阪市北部の別の場所に移り、すべて住み込みで働いていた。「全部自分で決めて勤めました。子供の頃から親の言うことは聞きませんでしたし」。給料は安かったが、勤めたところには社会保険を支払ってくれたところもあったという。その後、父親の酒屋でしばらく働いていた。そして30代半ば、酒屋ののれん分けみたいな形で大阪市北部でコンビニを構え、店長となる（聞き取り忘れたが、おそらくこの前後に結婚をしている。彼には娘が1人いる）。その仕事を12~3年くらい続ける。

40代半ば、父親が亡くなる。それまでそれなりのつきあいのあったきょうだいは、遺産の配分をめぐる激しく対立した（これを機に、それまでのあまり「波のなかった人生」は激変していったようである）。その結果、彼は嫌気がさし、コンビニを手放し、妻と離婚し、単身で西に向かった。「店の権利が兄貴と半々であったんでね、『もうやるわ』いうて出たんですわ」。以来、妻子とは連絡をとっていない。彼はまず岡山のパチンコ店で1年間働き、その後広島のパチンコ店でも1年働く。住み込みである。50代に入って、彼は沖縄に向かう。単純に行ってみたかったのだという。そこで3~4年間働きながら生活する。しかし、沖縄で根を張ることはできなかった。「ムラのつきあいがどうしてもできなかったですね。家族で共同で仕事しててそれ手伝ってたんですけど、酒がキツイ。毎晩のようにやりましたからね。勧められたら断りにくいですし」。これは体がもたないと思い大阪に帰ってきたのが2、3年前だという。

大阪に帰ってきてからは、大阪市北部の派遣会社を通して運送会社で働いていた。夜間の荷下ろしとコース別の仕分けである。この頃から「西成」のドヤで寝泊まりするようになる。「土工？ しませんでしたね。自分には向かないと思いましたから」。しかし作業中にリフトが脇腹に当たり、肋骨を骨折した。その際に市更相（大阪市立更生相談所）に相談し、市の福祉（更生）施設に入所し、1年半を過ごす。その間にも運送屋の荷下ろしの仕事に就いてお金を貯めていた。大阪市内にアパートを構える準備もしており、手付けも払っていた。そこで相談員から貯金の50万円を渡され、アパートに行こうかというところだったのだが、温泉等へ遊びに行ってしまう。「私はこらえ性がないというんですかね、なんとなしに」。その後ドヤで寝泊まりしながら、派遣会社Xから日雇派遣で卸会社をまわり、ピッキング（品出し）の仕事をする。文具や食品や酒の品出しである。派遣会社Yにも登録していたが、そこから仕事をしたことはない。パチンコに興じることもあったが勝てはしなかった。「あれはもう二度としない。あれはやってはダメや」。この間に東京へも行ったがそこでお金を盗まれ手持ちの20万円をなくしてしまう。10日間、公園で野宿して過ごす。「東京にも市更相や（自立支援）センターみたいなんがないかと思ったんやけど、

見当たらないんでね」。友人にお金を無心して何とか大阪には戻れたが、どうにもならなくなり、再度市更相に相談し、去年6月に自立支援センターに入所する。

自立支援センターで3ヶ月を過ごした。借金もいくらあったのだが、この時期に法律相談を受け、精算した。求職活動によって9月からスポーツ施設の外周清掃の仕事を得る。しかし、住居は「西成」のドヤだった。最初2ヶ月は試用期間で3ヶ月目から正社員になった。仕事も比較的楽で休憩時間もあったというが、給料が月11万8千円と安く、正社員になった3ヶ月目で「すいませんが」と言って辞めた。その後大阪市内のリサイクル会社に勤めるが、ここも給料は10万円程度。「試用期間中に辞めました。同僚とウマが合わなくて」。1ヶ月で辞めた。

その後フリーパーやネットの情報から日雇仕事や日雇派遣を探すも収入は不安定だった。「まとまった金がないですから、日払いの仕事しかダメなんですよ」。荷物はコインロッカーに預け、基本はドヤ暮らしである。しかし、「お金の余裕がある時はビデオルームを使ってましたね。何回かあります。土曜の晩とか。週1回程度。ついでに寝て帰る」。しかし、手持ちの金が乏しいと厳しい状況に。「この頃がしんどかったです。市更相行ったら『自立支援センターには半年経ないと無理や』言われたんで、半年耐えたです。野宿はしたくないです。東京で初めて10日間しましたが、とてもじゃないが無理」。いよいよ追い込まれたという時(去年の冬)には、「思い切って電話しました。兄貴に。10万借りました」。金がない時はどうしたのかと聞くと「夜通し歩きました。店が2時に閉まるんです。そしたらミナミに歩いて。ぐるぐると徘徊してました。ですから極力寝なかったですよ」。寝るのは昼間で「図書館使ってたね。大阪市内の図書館や今宮文庫。くさいけどそんなん言ってもらえんから」。寝るとはいつでも1~2時間、体を休める程度だったという。「もう極力寝なかったです」。「西成」のシェルターも使ったことがある。三徳の短泊も「うまいこと調整して」利用したという。

そんなこんなで半年が過ぎ、再度市更相に相談し、今年の春に自立支援センター舞洲に入所し、1ヶ月後、現在の自立支援センターに移り、現在に至る。

自立支援センターに入所して数ヶ月。以前はあばらが痛んで仕事のできる状態ではないこともあったが、健康状態は良好で、現在は求職中である。資格は運転免許とリフトがある。大阪市中部のハローワーク2つほどに通う。調査日の明後日に面接がある。弁当の配送の仕事である。給料は安く、職員からも「これで大丈夫なのか。あまりよくないよ」と言われるも、「とにかく仕事に就いて、ここで金を貯めます。ここにいる間に金を貯めて条件のいい仕事を探せるようにしたい」。手持ちの金がないと、月給制の仕事には就けないからだという。求職活動で気にする条件は、年齢不問で経験不問かどうかである。

「今の希望ですか。本当に自立したいです。それまできょうだいや子どもとも会えませんよ。小さなアパートでも借りられれば会えるけど、それまではコツコツとやるしかないです。そうでないと恥ずかしくて顔向けできませんよ」。ポケットのゴールデンバットを指さしながら「今はタバコもやってるけど、これもやめないとね」。アパートを借りるにあたっては、年1万円で加入できる保証人協会で何とかする。「フロなし2万5千円から3万円の物件が目標です」。「月1万でも貯めてね、給料のいいところを探すためにも。同じ轍をふまないようにしなきゃ」。目標はそれに加えて介護ヘルパー2級と二種免許を取ることがある。

今一番困っていることは「3ヶ月が目安なんですよ、ここは。期限があるのでそれがプレッシャーですね」。

30. 男性 40代前半

自立支援センターに去年の冬に入所。この自立支援センターに来るのは2度目である。1度目この自立

支援センターに来たのは今年の春頃。1ヶ月半ほど経った頃から仕事をしている。スーパーむけの食品の仕分けで、週5日、時給800円で8時間労働で残業が平均して1~2時間ある。通勤時間が1.5時間なので朝の8時に出て帰ってくるのは夜の11~12時くらいになる。結構しんどい。この求人新聞に載っていた。社会保険も年金もかけることができるが手取りがへるので加入していない。

前の自立支援センターに入所したときはドラッグストアの商品の整理の仕事で倉庫内でした。1ヶ月12、3万円だった。入所して1ヶ月で仕事を職安からの紹介でみつけた。この仕事は5ヶ月働いたが、自立支援センターに入所していることがばれたのではないかと思い、いづらくなって辞めた。みんなの態度がかわったのでそう思っているが、確実にばれたという証拠があるわけではない。ただ、電話番号とか当時食中毒があり住所が新聞にのったのでそれからばれたのではないかと思う。1回目の自立支援センターを退所したときは、期限が来たためその時は仕事をしていなかった。貯金は50万円たまっていた。その後徳島の友人のところに行って、すぐ東京に行き友人宅に住民票を置かしてもらい。身分証明書をつくり、携帯電話をつくり、日払いの仕事につくため大手派遣会社3ヶ所に登録する。引越しやイベントの設営、リサイクル業者の手伝いなどが主だった。昼間の時間帯の仕事で6,700~8,000円の収入になった。その頃は電話がかかってくるので毎日仕事があった。東京のドヤやペットハウスは汚くて高いので利用しなかった。雨が降ったときは、ネットカフェで平日8時間でフラットタイプで1,700~2,000円くらいだった。ポイントカードがあつたりすると1,000円から利用することもできた。お金がないとき、天気がいいときは公園で野宿していた。東京では部屋を借りたことはない。なぜなら部屋を借りるとき誰も保証人がいないので保証人協会を利用しようかと思うが、審査で落とされるのではないかと思っているので。

しかしずっとそのような生活をしていたら当然のように体調が悪くなって体調を整えるためのSSS（福祉法人が運営する第二種福祉施設）にいた。もともと会社の寮を改造し、2人1部屋で生活していた。しかしここは宅配の材料を調理した（温めた）だけの食事でごはんがまずかったこと、また求職活動などを行っているときに夜遅くなる仕事は困ると責任者から言われたので出てきた。ここにいたのは数ヶ月。

それ以降は派遣の仕事をしてきた。ただ月末は仕事が多かったが、月初めは少なく、4時間2,000~3,000円の仕事に交通費自分で払って行ってくださいと言われることもあった。

ネットカフェを利用していたとき、お金がないときは4、5時間のパックも利用することもあったが、熟睡できないし、出入りがあるのでゆっくりすることはできなかった。この当時必要な生活費はタバコ1箱、朝は食べない、昼弁当、晩は食堂で食べ、あとはフロ代くらいだった。1日2,000円もかからない。また国民健康保険もなかったので体調が悪くなったら東京の区役所に行って医療単給してもらっていた。

東京にも自立支援センターはあるが入らなかった。その理由としては、まず期間が短いということ。ただ敷金の援助をしてくれるという利点はあったが、東京で住もうと思っていなかったため利用はしなかった。

2年前の冬頃はまだ東京でネットカフェは週1、2回利用で寒い時期であったが都心の公園で野宿していた。22時頃までは通行している人がいるが、それ以降は静かであった。交番が近くにあって治安面は安心していた。

その後なんとか大阪にもどってきた。大阪の知り合いのところに住民票を置かせてもらい住民基本台帳カードをつくり、大阪で派遣会社に登録し仕事を探した。しかし東京のように仕事は無く困った。大阪の「西成」に来て建築日雇の仕事をしたことは全くなかった。「西成」にはアルミ缶を回収して寄せ屋に売りにいくくらいだった。そんなとき2回目の再チャレンジができるときいて区役所に相談にいき、当日巡回相談員との面接、翌日には自立支援センター舞洲に入所していた。

徳島県の出身で高校を卒業して大阪で就職をする。最初の仕事は大阪の出版社で倉庫内の出荷作業を3

年間していた。ここは年金も社会保険もあった。仕事の時間は9～17時だったが、高校を卒業してすぐ都会に来たせいか疲れを感じて退職、田舎に帰る。徳島にもどってからは、親戚の家（雑貨の配達）を数年して、実家（酒屋と雑貨販売の小売業）の配達・営業などの手伝いをずっと続けていた。しかし、30代半ばスピード違反や駐車禁止を度々繰り返し、累積がたまり免許停止となる。田舎で免許がない、つまり車を運転できないということは仕事ができないということで、生活も不便なため再び大阪に出ようと思う。

その後大阪に来て建築関係の仕事に就く。大阪から岡山の現場（飯場）に行きそこで指を骨折、労災にならず治療費も一切出してくれなかった。それで困って岡山の役所に相談に行ったところ飯場から医療単給で1ヶ月病院に通院する。通院が必要でない状況になって大阪にもどってきた。しかし全く仕事がなく、4、5年前からアルミ缶を回収して大阪市北部にある卸に行き、河川敷でテントをはった。ちょうどそのとき大阪市役所前で反矢連が野営闘争をしており炊き出しもしていた。野営闘争が終わり、河川・土木の役所の人々がテントに来て自立支援センターというところがあるからそこに入所しないかと声をかけられ、1回目の自立支援センターに入所することとなった。

31. 男性 30代後半

Mさんは来阪前は愛知県内の自動車工場で派遣で働いていた。来阪後、大阪市内のネットカフェを寝泊まり等に利用していた。現在、医者からは就労不可能と診断され、居宅保護の準備中である。

Mさんは北海道で生まれた。在日朝鮮人である（何世かは聞き取れず）。妹が2人いる。生まれ育った地域は在日朝鮮人の小さな集住地域であり、幼い頃から「同胞」とばかり遊んでいたという。「少しはずれた所」。そんなMさんが高校進学時、親に「いじめもあるかもしれないけど、日本の名字で生きてみる」と言われる。「その方が（日本社会で生きていくには）よいだろうとのこと」。これまで小中学校と地域の公立学校に通ってきたが、Mさん自身は朝鮮学校に行きたかったのだという。しかしそれには通学にも時間がかかる。親の意向を受けて朝鮮学校には行かず、高校に進学したものの、Mさんが直面したのは、高校の生徒達と朝鮮学校の生徒たちとの間にある差別に基づく関係性だった。「両校の生徒間で乱闘事件があったんですよ。でその時、朝鮮学校の女生徒のチョゴリをカッターで切る事件があって。それで僕はやりきれなくなって、…」その事件が原因で、彼は半年で高校を退学した。

高校の頃のエピソード。「反戦・反核運動が北海道でもあって、高校の頃。自民党の本部が放火された頃だったんですけど、中核だか革マルだかがやってきましたね。『君は在日だろ』って。どっかで調べてくるんですかね。『君の力になりたい』って」。

退学後、Mさんは寿司屋の見習いとして働く。有限会社で家族経営。それに学生3人程度雇うくらいの規模の寿司屋だった。仕事には実家から通っていた。「近所の目があるでしょ。『あいつは学校に行くとらん』て。その頃は趣味で無線をやっていたんですが、その仲間の薦めもあって」。寿司屋では主に雑用を任せられ、米をとぐことが多かった。「基礎からやりました。キツかったですね。朝早くて夜遅い」。雇用保険はかけてくれていたという。給料はその多くを実家に入れていた。その仕事を3年くらい続けて辞めた。「親方は北朝鮮というのがイヤみたいで。中国や韓国や台湾はいいみたいなんですけど、あの頃も北朝鮮の疑惑とか報道されてて、『お前ら北朝鮮のもんは』みたいにイヤミを言うんです。それが嫌でしたね。それだったらというんで、はい」。

その後、親に頼んで金をもらい、自動車免許を取り、警備会社に就職した。Mさんはここから3社の警備会社を渡り歩く。「1カ所目は所長が夜逃げして倒産しました」。1年間勤める。「2カ所目は、警備業法違反で警察が入って。アルコール中毒や薬物依存者が勤めてたので、これが法に触れたみたいです。マリ

ファナ吸ってる奴もいましたしね。倒産しました」。ここでは1年半勤めた。次の就職先を紹介されたが断る。3カ所目の警備会社では4~5年勤めた。この頃は実家から仕事に通うこともあれば、アパートを構えることもあったという。

その後北海道で建築会社に勤め、現場監督をしていた。記憶が定かではなく6~8年くらいは勤めたという。この頃に肝臓を患う。「接待ばかりでしたからね。『ゼネコンとの打ち合わせにカントクがいなければ困る』いうので。酒の飲み過ぎもありましたね」。日雇の人夫出しの会社でもあったようだが、「労働者を集めることは自分ではタッチしていません。求人広告とかで募集してましたね」。長く勤めたのだが、社長とケンカして辞める。「社長がヤクザもんでしてね。僕、目つきが悪いしガタイもいいというので、『いれずみ入れんか』『うちに正式に入らんか』とかしつこく言われて」。ここの社長が辞めた矢先に倒産したという。「所得隠しが見つかったみたいで」。

「北海道は冬は仕事がないのが定番でしてね」。「僕の生まれたあたりは自衛隊の街でね、仕事他にないんですよ。みんなは札幌（中心部）か、苫小牧、千歳に働きに行く」。仕事を辞めたのが冬だということで、Mさんは派遣会社に登録し、愛知県内の大手自動車製造メーカーの下請けの会社で働く。「北海道で面接して。そしたら向こう（愛知）の担当者がセントレア（中部国際空港）で待っているというので飛行機で」。「冬になったら一斉に求人情報が出るんですよ。仕事先は東海や近畿が多いですね」。この会社では車のAT・トランスミッション専門のラインで働いていた。労働条件も楽だったという。「休憩も適度にありましたし、下手な建設仕事よりはよかったです」。給料もまずまずで、週休2日とれた。勤務は昼勤務ならプラス2時間、夜勤ならプラス1時間の残業があった。社会保険は整っていたという。実家への仕送りもできた。しかし1年半勤めた時点で「リストラです。5~60人一斉に辞めさせられた」。この時、リストラということにカットとなって、社会保険関係で正式な手続きもせず飛び出してきたことは、少し悔やんでいるという。「失業保険やら雇用保険やらで、ちゃんとしておけばその後いい方向につながりやすいので」。リストラに遭ったのが1年前の春だったという。

この会社をリストラになったのを機に、Mさんは大阪へ向かった。「朝鮮人の多くいる大阪に前から行きたかったんですよ」。「大阪来てからも、仕事のためにフリーペーパー見てただけで、住むところをちゃんとしなかった。大阪自体を全く知らなかったんで、生野の場所も知らなかったですし、まずは大阪を知ろうと思ってうろろしてたんですが、それがよくなかったです」。当初は大阪市南部にある一泊6,500円~8,000円のビジネスホテルに宿泊していたのだが、「金額が高いことに気づいて」、以後ネットカフェやネット喫茶を利用するようになった。北海道にいた頃もネットカフェは利用していたのだという。「通勤に1時間半かかるんで、呑んだ後はネットカフェを使ってみました」。ネットカフェでは仕事を探す。土木関係の日雇を主に探していたのだが、電話で問い合わせても年齢ではねられる。「『35歳くらいまで』というので電話したんですけど、向こうは『一応35歳までのつもり』と。僕も肝臓が悪いとかいらんこと言ったのもいけなかったんですね。『体力いるし、あなたには無理』と」。あまり仕事が見つからないので、携帯のネットオークションで自分の荷物を売るなどして金を稼ぐこともあった。「愛知にいる頃からやっていたんですけど、だめもとで。落札してもらったらその金で新たに出品してみたりして。それを繰り返してました」。しかしそれも長くは続かなかった。

釜ヶ崎にも初めて行った。「その時ラジオをイヤホンで聴きながら歩いてたんですよ。それでドヤに入ったら『お前らデコスケが来るとこじゃねえ』と言われて。その後もホームレスみたいな人がずっとついてくるんです。何か手で合図を送りながら」。自立支援センターに入ってからの事を入所者に話して、自分が警察と間違われたことがわかったという。しかし釜ヶ崎は追い出されたという印象が強く、「『西成』はきらいです」。

野宿もベンチで寝るなど、2~3日経験した。「いわゆるアオカンはそのくらいです」。どうにもならない状況で、駅でへたり込んでいた時に巡回相談員に声をかけられ、去年三徳のケアセンターに3日滞在した後、自立支援センター舞洲1に入所する。舞洲1にはその年の冬までおり、その後自立支援センターに今年初夏まで滞在していた。その後通院している病院があるため、通院に便利な自立支援センターに移り、現在に至る。

Mさんの健康状態はあまりよくない様子である。相談員からも「今は体を治せ」と言われている。自立支援センターに入って病院に行ったらC型肝炎と言われた。人のカミソリを間違っただけの時に、北海道にいたということもあり、キタキツネのフンを媒介に飲み水から感染したのかもと言われたという。それに加え、現在Mさんは躁鬱病の症状が深刻なのだという。躁鬱病の診断を受けたのが8~10年前である。「結婚ですか、そういう話もありましたけど、彼女もいましたね。その娘の家にあいさつに行ったこともあります。その時忘れ物をしまして、その中を見られたんですね。外国人登録証を入れてたんで。そしたら『お前どういうつもりだ、なぜ隠してた』と散々怒られて。お父さんが役所勤めでお母さんが教員をしたこともあって、ちょっとお堅い家だったんですね。その頃から、こりゃ日本人の女性は信用できんとなって、イライラしだして。初めて病院に行ったのが8年か10年前だったと思います。そしたら躁鬱病だ」と。「(別の)自立支援センターにいる頃は、80人くらいいたんですけど、ヤクザもんにもちょっかい出されて。こんななりで目つきも悪いですし。それで応戦しちゃって。集団生活だからこそ、感情の起伏が多くなるんで。1人暮らししてた頃はそんなことなかったです」。今いる自立支援センターは4~50人とごちんまりしていることがMさんにとってはいいのだという。「他の人とも仲良くしないことにはね」。今は薬を48週間打ち続けるという治療を行っており、立ちくらみもよくするのだという。医者には「就労不可」と言われ、現在居宅保護の申請中である。

日中は基本的に部屋で過ごし、1人で本を読んでいる。前記の治療のため1日中ボーッと横になっていたり、しんどかったりである。調子のいい時はセンター内の内職をして気を紛らわせる。指導員がつき、洋服につけるタグつけ(1枚60銭)や箱の組み立て(1個3~5円)などに従事する。午前9時から午後3時半までが規定の作業時間で、キリのいいところまで延長する。

現在居宅保護の申請中で、大阪市内の在日が多い地域のアパートを探している。「不動産屋にそう言ったら嫌な顔をされたけど、事情を話したら一応理解してくれた」。Mさんはこれまで在日朝鮮人であることで様々な差別を経験してきた。日常生活の中での細々としたものから結婚差別まで、そうした差別経験から自分が在日であることに少し肩身の狭い思いをしてきたという。民族アイデンティティを強く意識することもあり、Mさんはここ20年くらいの韓国・北朝鮮について報じられた数々のニュースについてよく覚えており、詳しく語っていた。自立支援センターに入所してから、在日の中学生の事件(詳細は不明)に関する裁判などで人と知り合い、生野にも時々足を運ぶようになった。「ワンコリアフェスティバルにも行きました。感想ですか。うれしかったです。僕は民団にも総連にも加入していない。北海道にいる頃も近所に日本人の友人はいなかった。何千人とかの同胞がそこにいて会うことができたことが感動でした」。病気を治したら、生野のNPOに連絡をとって現状を伝えて、今後のことを考えたいのだという。そのNPOとも既にコンタクトがある。今考えてるのは、インターネットでキムチの販売をすることである。「大阪で生きていきたいですね。これまで自分の性格とか不況のあおりとかで負い目を感じて生きてきたけど、今日もこうして話してますけど、自分が在日だということもここに来て堂々と話せるようになりました」。

今一番困っていることは、実家に仕送りができなくなったこと、病気の治療期間が長くかかっていることである。相談できる相手といえば、自立支援センターの所長、それにNPOを相談相手と考えている。

両親には昨年1回手紙を送った。「大阪に来たが、病気になって今福祉施設にいる。仕送りできずすまない」という内容だった。「それからアボジから電話がありました。元気そうでした」。妹二人とは連絡をとっていない。かつての友人とも連絡はない。

32. 男性 40代前半

経緯

① 福岡県で中学卒業後、職業訓練校に行き〔自動車整備士〕を目指すが約半年で中退。その後5年間縫製工場で働く（正社員）。給料は10万円くらい（年収180万円）で、人間関係（特に上司との）がイヤで離職。

② その後、20代前半に都会に来れば仕事があると思って兵庫県に単身移住（家族は、両親と5人兄弟の3番目）。お金は持っていたのでアパートを借り、ある企業Xの品を扱う倉庫で、正社員（雇用保険社会保険あり）として13年間勤務。フォークリフト等で作業。月給18万円＋賞与で年収256万円。

③ 倉庫会社が親会社との吸収合併に伴って希望退職を募集したので、それに応じて退職。雇用保険で生活していたときに95年の阪神大震災で家を失った。震災後は実家とは連絡を取っていない。

④ その後は住み込みのパチンコ屋3件を移り変わり（勤務合計8年）、最後は大阪府北部のパチンコ屋で3年前の初夏から正社員（本人が言うには、ただし年金はなし、雇用保険は未確認）として働くが、去年の冬に自主退職。住民票はそこにおいている。

ビデオ試写室生活

① 住む所がなくなったので、大阪市北部のビデオ試写室で主に生活。3月～6月（3～4ヶ月間）。週3回～5回。金土は高いので泊まらず、大阪市北部のターミナル周辺を歩いたりベンチに座ったりして夜をすごした。ビデオ試写室を知ったのは、スポーツ新聞に広告が出ていたので。

ビデオ試写室 ナイトバック PM11時～AM10時 平日1,500円～（割引券50円引きで1,450円）
金・土・祝日前1,800円～ シャワー30分200円～ インターネットは接続しているが自分は使えない。完全個室（天井に達するまで仕切りがある）、1畳半ぐらいで、リクライニングシート。常連客は10人ほどはいるだろう。大きい荷物を抱えている。年齢層は20代～50代まで。

② 6月～7月（1ヶ月）は、どこからともなく釜ヶ崎のドヤの方が安いと聞いたのでドヤに住むようになり、ビデオ試写室に週2～3回、ドヤに週2～3回、その他は大阪市北部のターミナル周辺のベンチ等で野宿、という生活をしていた。

日雇い派遣

① ビデオ試写室に泊まるようになってから、求人誌を見て、大阪府北西部にある大手派遣会社に登録した。行き先は、大阪府北部にある「Y倉庫」。食品倉庫で、伝票に基づいて商品を取ってくる〔ピッキング〕に従事していた。

② 月～金曜に仕事があるが、大阪府北部の事務所でお金をもらうときに次の予約を1週間単位でしていた。ただ、休みたいときもあるので休みを入れた後で次の予約を入れようとしてもいっぱいだめなときもあった。

③ 朝9時～午後5時で、日給5,775円。経費等の引きはなかったが、交通費はなし。軍手とカッターマジックペンは自分もち。倉庫には、いくつかの派遣会社から30人くらい派遣できていた。自分と同じ派遣会社からは10人くらい、年齢は18～40歳代まで、荷物が大きく自分と同じような生活をしている人と思える人も何人かいたが、詳しく話したことはない。

④ 土日には仕事はしていない。土日の仕事はイベント関係ばかりで力仕事だったので、自信がなくなってきた。6月頃から仕事が減ってきた。他の派遣会社は、求人誌を見たら〔年齢 40 歳まで〕と書いてあるところばかりだったので、あきらめて探さなかった。

⑤ パチンコ屋をやめたときは 30 万円ほど貯金があり、18 万円ほど派遣で稼いで 5 ヶ月弱暮らしたが、残り少なくなると、仕事を探そうと、お仕事支援部に相談に来た。

その他

- ① 将来のことについては、20 歳くらいからあまり考えないようになった。
- ② 携帯電話はプリケーだったが、10 日前にトイレに落として使えなくなってしまった。
- ③ 酒は少し、タバコは 1 日 20 本くらい、ギャンブルはスロットを少し。

33. 男性 30 代前半

現在の職業はネットカフェの看板持ち。この仕事をはじめて以来、釜ヶ崎のドヤを常宿にしている。当日用リュックの荷物を背負って大阪市北部のターミナルの広場脇の植え込みに腰かけていたところを、調査員が声をかけた。聞き取りの結果、糖尿病の治療が必要と判明。翌朝にも NPO 釜ヶ崎支援機構の福祉相談部門を尋ねるよう紹介。

奈良県の出身。両親は離婚して、別居している。姉が一人、一人暮らし。5～6 年前に家出をして名古屋へ行き、寮付きのガードマンの仕事を 2 年ほどした。名古屋には約 3 年間いた。糖尿病を患い奈良県の病院に 1 年間入院（半年で一度退院したが再入院）。父親と一緒に住んでいたが、父親とケンカして昨年冬に再び家出。父親は大企業に勤務、暴力をふるわれることはないが酒癖はわるい。家出のあと住居喪失期間を経て現在の仕事に就いた。

高等専修学校卒業後、18 歳から 4 年間正社員として働いていた。その勤務先は親の伝手で、セキュリティサービス会社。防犯センサーの取付け業務をしていた。社保・年金アリで月収は手取り 15～17 万円くらい。ボーナスもあった。その会社には出向で来ている人も多く、親の知り合いも沢山いて人間関係のストレスもあって辞めた。24 歳くらいからずっと派遣やアルバイトの非正規で働いている。ハローワークで求職したこともあるが、なかなかみつからなかった。派遣などの仕事は無料の求人情報誌でみつけた。インターネットで仕事を探したことはない。派遣会社には登録されたままだと思うが、携帯電話を変えたので現在派遣会社からの連絡はない。大手派遣会社 2 社に登録していて、派遣会社で仕事を選び、当時は実家から通勤していた。仕事の内容は引越や居酒屋、カラオケ店、イベント設営、土工の補助、工場内作業など色々経験した。

昨年末の家出から現在の仕事を得た 2 月末日までの 3 ヶ月くらい住居を喪失していた模様。当時よく「まんが喫茶」で寝泊まりしていた。公園で寝たこともある。また、契約機ブースが奥にある消費者金融のキャッシングコーナーに銀行のカードで入り、安全を確保して毛布にくるまり寝ていたこともある。大阪市内のそこは警備員があまり巡回していなかったらしい。その当時も、公園内の施設で料理の配膳など、派遣の仕事をしていたとのこと。

この冬からネットカフェの看板持ちの仕事をしている。8 時～20 時、休憩時間 1 時間の 11 時間労働で日当 7 千円、現金日払い。時給換算すると 750 円から税引きという説明。750 円 × 11 時間 = 8,250 円、1 割の源泉徴収で 7,425 円となる。収入は月 15～20 万円。毎月食費に 4～5 万円、宿泊費に 4 万 5 千円（一泊 1,500 円のドヤ、安い部屋の家賃よりも高い自覚がある）、生活必需品に 1 万円、携帯電話代に 1～2 万円かかる。酒は病気になって控えている、タバコも吸うが少し。生活費がぎりぎり遊ぶ余裕はない。借

金はない。住居を確保したいが貯蓄もできない。休みたいときに休めば良いと言われているが、ほぼ毎日出勤。「1日休んだら、翌日は出勤しないと（もたない）」とのこと。

糖尿病にもかかわらず、家出してから半年以上、病院に行けていない。昨年までは父親の扶養で社会保険に入っていたが、今は国民健康保険に加入している。家出した手前、家族には相談できない。インスリン注射もなく、薬も切れて体調がわるい。夜中には足腰が痛む、自律神経もおかしい。看板持ちの仕事中でも、前のめりになると倒れそうになる。この仕事を始めてから、Big Issue 販売員のおっちゃん知り合い、いろいろ相談にのってくれている。生活保護の可能性やNPO 釜ヶ崎支援機構のことも、おっちゃんが勧めてくれたところだった。だが、ドヤの人にNPOの場所を聞いても知らないと言われた、とのこと。釜ヶ崎の炊き出しや手配師経由の日雇い経験はなかった。

今はとにかく収入の心配をせずに身体を治したい。生活保護を活用して半就労・半福祉の形でも良いので、人間関係の煩わしさや肉体労働のない仕事をできれば、と考えている。将来の希望としては、店を持ちたいと思うことがある。「それこそ、ネットカフェもいいなあ」。

釜ヶ崎支援機構に来て大阪社会医療センター（内科）受診した。しかし糖尿病の状態が悪いため、大阪市立大学附属病院を紹介され通院、大阪市立更生相談所から敷金支給をされてアパートを借りる。

34. 男性 20代前半

現在失業中の派遣労働者。ネットカフェの前の路上にぼつんと座り込んでいる。話しかけても反応がうすいが、横にしゃがみ何気なく話をきくと返事はする。そこで協力を願うが、食事や飲み物もいらないと断る。しゃがんだまま話をきいていると、ほぼ票が埋まった。謝礼を支払い、困ったら相談窓口連絡するよう伝えた。座っていたのは、今日はネットカフェに何時に入るかを考えていたらしい（料金を気にして）。両親は健在とのこと。

7月に入って、派遣会社からの仕事がまわってこなくなった。大阪に実家があるが、先週から2回くらいしか帰っていない。それも、夕方～夜、仕事をしてきたように装って帰宅する。仕事がなくなったことは、まだ家族に話していない。仕事がないと、家族とも話づらい。

高校を卒業して以来正社員の経験はなく、ずっと派遣で工場の仕事をしてきた。派遣の中で時給が良い工場の仕事を選んできた。液晶テレビなどの組み立てラインで働いた。雇用期間は派遣先によってばらばら。健康保険証は実家にあると思うが社会保険や年金がどうなっているのかは「よくわからない」。派遣会社から<データ整備費>などの不正経費が取られていたかどうか「よくわからない」。派遣会社とは、携帯電話で連絡をとる。求人情報誌をみて、派遣会社数社にかけもちで登録していた。インターネットで仕事を探したことも何度かある。今も無料の求人情報誌などをみて仕事を探しているが、ハローワークを利用したことはない。

いま連絡をとる友人は、職場で知り合った一人だけだという。半年前にも二週間くらい仕事がなかった時期があり、その友人宅に何回か泊めてもらったことがある。そのときにはネットカフェに泊まらなかった。今回は逆に友人宅には泊まっていない。ネットカフェ暮らしをすることには、まだ貯金もあるので困っていない。借金もない。これまでの仕事では、平均17～18万円くらいの月収があった。実家住まいなので食費や家賃もかからなかった。

現在は外食なので日に1千円程度の食費、ネットカフェでの宿泊に2千円くらい（10時間パック）かかる。ネットカフェを出た朝も繁華街にいる。携帯電話料金は月に2万円くらい。タバコは日に半箱も吸わない。パチンコで勝つ。「(大当たり確率) 97分の1」などの機種を選んで、負けることはないという。

パチンコの話のあとどれか選べと言われたら「いずれどうにかなると思う」を選択。最後に今一番困っ

ていることを聞くと、「話し相手がいない」と応えるので、自分の名刺をわたした。

35. 男性 20代後半

現在工場正社員。「コンクリートを枠に流し込んで固める工場」、いわゆる「プレキャスト・コンクリート」製造か。住民票は現在も実家の兵庫県のままで、とのこと。専門学校で大阪に下宿していた以外、賃貸で部屋を借りたことはない。現在京都府在住、住居は「社宅」。当日も最寄りの駅まで帰れたら良いとのことで、聞き取り後すぐ終電を案内した。偶然、一時間くらい漫画を読もうかと思いネットカフェに立ち寄ったところ、調査員が声をかけた。昨今の今頃の季節に住居喪失期間があった。少し風邪気味、顔色がわるい様子。

高校を出て一年間フリーターをした（電気関係の仕事など）。学生時代は「打ちっぱなし」の球ひろいのバイトくらいで「世間知らずだった」と。大学進学も考えており、1校受かったものの、希望する大学とは違ったので「めんどくさくなった」という。高校を卒業して一年後にコンピュータ関係の専門学校に入り、大阪で下宿生活をした。卒業時に内定先があったが、その会社の評判があまりにも悪く、内定を「けた」とのこと。その後、20歳過ぎまで派遣労働やアルバイトを繰り返した。仕事は求人情報誌をみて探した。ハローワークも何度か利用したことがあるが、「あそこは倍率が高い」ため、なかなか仕事が見つからなかった。

ブロードバンド・モデムの無料配布キャンペーン、大手の登録型派遣（日払い）、「悪徳系」のテレポ（週払い、電話機かインターフォンの法人向けの販売、タウンページの片っ端から電話をかけた）など。その頃（今から4～5年前）「やったらあかん」ような営業もしたと語る。求人情報誌には「誰でもできる！」とか「月収30万」などと聞こえの良いことが書いてあったのだが、配管の汚物清掃やシロアリ駆除などの、「強引」な営業だったらしい。「完全出来高制」だったが「結構成績は良かった」。しかし罪悪感に苛まれ2週間くらいで辞めた。その後、親戚の伝手で今と同じ会社の兵庫工場で2年くらい働き、次いで派遣で自動車シートの工場で働いた。その現場では大手自動車メーカーなど色々なメーカーのシートを作っていた。

そこで「気にいらんことがあった」という。事情を聞くと、「ひと月前に入った奴と給料が5～6万もちがった」ということらしい。仕事が少し異なるとはいえ、同じ現場でこのような差があることに「やってられん」と思い、辞めた。寮住まいだったので、そこを出るはめになった。辞めた翌月支払われるはずだった給料も「結局入ってなかった」とのこと。そして、住居喪失期間を経て、現在の仕事に就いた。

昨今の今頃の季節、派遣の仕事辞めてから一ヶ月くらい、寝泊まりする場所に困りネットカフェやビジネスホテルを利用していたという。よく使ったネットカフェは、大阪市北部のターミナルにあるいくつかのネットカフェ。新大阪周辺へ行っただころのネットカフェも利用したが「あそこは高い！」らしい。ビジネスホテルは大阪市北部の一泊4～5千円。

その当時は手持ちの「あり金」をつぶして生活していた。食事は「テキトー」で、すうどんやカップヌードル、大手の丼チェーン店などで済ませた。ネットカフェにたいがいあるシャワーも使用した。その当時大阪へ来たのは、仕事もあるかな？ という考えも「多少はあった」という。

住居喪失期間のあと、現在に至るまで約一年間働いている。「とくに希望もなく」この仕事に就いたという。以前、兵庫で働いたのと同じ会社の京都工場（プレキャスト・コンクリート製造）。困り果てた結果、親戚の伝手で入ったようだ。「基本」一日9時間労働。7時～17時。休憩は各自とるということになっているが、忙しいときにはそんなヒマもなく「しんどい」。遅いときには20時、21時になることもあるが、残業手当ては出ない。日曜日と第二・第四土曜は休み。「正社員」で、社保・年金はあるようだが、ポーナ

スはなく「きつい」。出来高払いといわれ、給与も不安定である。受注量の季節変動も大きいようだ。今の時期は仕事が少なく秋冬の方が忙しい。とくに災害があった場合などは非常に忙しい、とのこと。月給は税込みで最高 33 万円、最低 22 万円程度。手取りで月平均 20 万円くらいか。

借金は現在「ない」。が、かつてあったと語り始めた。「じいちゃんが肩代わりしてくれた」のだという。ふりかえれば営業時代（テレアポか配管清掃・シロアリ駆除のことか）、「ねずみ講」のようなことをしている人に出会ったらしい。セミナーに連れられて勧誘され、消費者金融のキャッシングマシンに連れて行かれた。断ったが、その時に「借金することを覚えてしまった」と悔いる様子。そして一発逆転狙いのパチンコ・スロットを繰り返して多重債務を抱えたようだ。「はじめ 30 万だったものが 300 万にふくらんだ」と告白した。実は、住居喪失期間の「あり金」といったのも「借金だった」とつぶやいた。現在の職場の親戚には、借金のことを知っている者もいるが、困ったことや悩み事を相談するような相手はいない。実家にも 3 ヶ月に 1 度帰ることがある程度。「ネットカフェ難民なんかみんな『ひとり（孤独）』なんじゃないですか」とも。おもむろに「そういえば、『ねずみ講』の人に出会う前には『出会い系サイト』で他人が信じられなくなった」という話もはじめた。サクラや、あの手この手の「うまい話」に乗せられて人間不信に陥った様子で、現在もそれが堪えているようだ。謝礼の封筒をあけたときにも、中身のあることに驚いた様子をみせた。

36. 男性 40 代後半

現在、ネットカフェでほぼ毎日寝泊まりを 2~3 ヶ月くり返している。寝泊まりするネットカフェはだいたいここに決めている。なぜならあちこち行って見たが、ここは店員の教育もされている方だし、気に入っている。

今日はここに来るまで公園で時間をつぶしていた。実は今日はもうその公園で寝てしまおうかと思ってもみたが、蚊がひどくて耐えられなくて結局ここに来た。なるべく出る時間を遅くしたいのでナイトバックが始まって（22:00）少したってから入るようにしている（当日は 23:00 頃入店）。

出身は和歌山県。大学は東京だった。大学卒業後、サラリーマン生活を 9 年。最初は大阪で 3 年（食品の卸売り、営業職）、転職後同じく大阪で 3 年（同じく食品の卸売り、営業職）、その後兵庫県で 3 年。最後の会社は先輩と他の 1 人（オーナー）と一緒に 3 人で作った会社（衣料雑貨を取扱い）で働いた。自分はそのほとんど実務、貿易を担当した。この時の先輩は今でもおつきあいがあり、精神的には頼ることもできるが、お金は借りられない。彼もお金では大変苦労した人。最後の会社を辞めるときオーナーともめたりもした。最終的にのれん分けはしてもらえなかったが、最後の会社の続きのような形で自分の店を持つことにし、故郷の和歌山に戻って独立した（91 年頃か？）。衣料の小売店だが作業着の取扱い。バブルが崩壊したあたりから事業が傾き始めて、最後の 3 年ほどは店の看板はあげたままだったが、別の仕事をして生活費と借金を返そうとした。その 3 年間の最初の 1 年間は、朝 02:00 頃~07:00 頃まで、新聞配達をやり、昼頃から知人で支援してくれた運送会社の社長のところで建材の運送をするトラック運転（運送の中でも建材は重くて危険なもの）、夜は 21:00 頃~02:00 頃まで代行運転手をやった。寝る時間はなかったし、アパートには債権者が来るし戻らないことも多く、だいたい車の中で仮眠をとって、建材の運送の仕事がない土日に 40 時間くらい寝るくらい。さすがにこんな生活は 1 年くらいしか続かなかった。しまいには幻覚が見え始めたりして、トラック運転中に事故を起こして車 3 台、人間 4 人けがをさせて運転手はやめた。それだけ働いても「手取りは 40 万そこらいったけど、借金は全然減らなかった」。しかし（自営のときのように）資金の調達の心配をしなくていいから、働いた分お金をもらう生活でそのほうが精神的に楽だった。

仕事が傾き始めて知人で先輩から資金提供を受けて（750万円くらい）事業を続けたりしたが、やっぱりダメだった。最後は金を返せとかいう話になって彼とはもめた。最終的に借金はあちこちで7,000万円くらいにふくらんだ。そして、店を廃業、和歌山を出て大阪にでてきた。

最後は家も処分した。家は父親が苦勞して建てた家だった。父親は、後のことはまかすと言って何年か前に亡くなったが、まさかこうなるとは思わなかっただろう。残った借金は約半額強ほど。県がやっている信用保証協会を通しての有利子負債は7,000万円のうちの5割ほどで数千万円くらい残ったが、それは連帯保証人に請求がいつていると思う。連帯保証人は昔の知人だが、信用保証協会には返済はしないが、知人には少しずつでも返済していこうと思っている。借金はそのままにして大阪に出てきた。まわりからは「自己破産しろ」とよく言われた。「楽になれ」と、「まだ先があるからやり直せる」と。地元には母と姉がいる（家族は本人入れて3人）。本来なら地元でもう一度がんばるべきだとも思う。けれど残ることは、自己破産を選ぶしかしなかったろう。自己破産はしたくなかった。それに自殺するしかなかったと思う。自殺をする人は借金が苦で自殺するわけではないと思う。まわりに迷惑をかけていることがつらい。ぼろくそ言われる方が楽でいい。逆に温かく見守られるとつらい。母に借金して迷惑をかけて本当につらかった。大阪や東京でなら違うかもしれないが、和歌山みたいなところでは、事業に失敗したり借金をつくったりすると、居づらい。最後に、親戚の人に「おまえなんか、この土地には一生帰ってくるな、もう顔見せるな」と言われた。「そいつ、親戚やってんけど、今まで嫌いやってん、でもそのとき、助かった、って思った」。「それで大阪行くこと決めたんや」。親戚がぼろくそに言ったのは、母親の面倒は見るからという意味にもとれると思っている。多分親切で言ってくれたのだと思う。母親の面倒は見てくれるという意味だと。今、母親は姉（未婚の姉がおる）といっしょに暮らしている。でもどこに住んでいるか知らない。連絡もとっていない。多分母親が死んだ時は知らないままだろうし、自分は母親の葬式には出られないだろう。地元にはもうだから帰れない。債権者もいるし、母親にはどんな顔して会いに行けばいいかわからない。

和歌山にはアパートは残してある。車検を通してない車も置いたまま。大阪に出てきてからは、知人の土建屋の社長の厚意で、その会社の土木作業員をやって、日雇いで1日7,000円、土日は就職活動をする生活をしばらくしていた。生活費とか和歌山のアパートの家賃とかでだいたい1日4,000円くらい残った。就職活動はハローワークも使ったが、最終的には求人誌。最初、京都のある会社の面接で、その社長に今までのことをだいたい話して断られた。この社長はそれなりに苦勞していろいろ経験しているだろうから、自分の話をある程度聞いたらほとんど察するような感じ。それで次からはあたりさわりのないことを言うことにして、やっとこの夏から大阪市内にあるゴルフ会員権販売の会社に就職することができた。面接をした人は今の上司で優秀な人だが、やはりサラリーマンだから自分の今の状況まではやっぱり察することはできなかったようだ。今、毎日営業している。その給料は10日シメの25日払いだから、今度の25日には最初の7日分の給料が入ると思う。そのお金で安いアパート（敷金、礼金のないところ）を大阪でかりて、こういう生活から脱したいと思うが、営業で車を使うので和歌山に残してある車をどうにかしようとも考えている。新しい会社は、今はまだ3ヶ月の見習い期間。ちゃんと正規の職員になれば額面で35万円くらい（固定給は25万円）。翌月の25日には100%の給料がもらえるはず。16年ぶりのサラリーマン。

釜ヶ崎は前に何度も見たことがあるし、あそこの生活はだいたい知っているつもり。大阪に来て最初に思いついたのは釜ヶ崎に行くことだった。知人の土建屋の現場で作業員できたから来ずにすんだ。今日公園にいたとき思ったが、以前はホームレスの人たちが多くいたのにみんないない。彼らはどこかされたのか。それで一体どこに行ったんだろう。どこか行く場所があるの？「西成」の朝っちゅうのは活気ある

わなあ」仕事にあぶれるかもしれないのに、その中の誰かがあぶれるはずなのに、活気がある。あれには「頭が下がるわ」毎日仕事探して、仕事して、終わったら酒のんで、ああ言う人たちは自殺しないだろう。しかし釜ヶ崎に行っても救済されない人たちもいるはず、障害者など、彼らはどんな生活をしているのか。

最後に頼る人はだれなのかという質問に対し、「それはすごい臨場感ある質問や」。実は今日ネットカフェで支払ったらお金が残らん。さすがに新しい会社に給料前借りはできないし、それでたった一人友達といえる女性にさっき電話しようと思って公園にいるとき、携帯でもうちょっとで鳴らそうとしてやめた。

お金は最初はわりと簡単に何とでもできる。金融屋ならノンバンク系であちこちまとめて200万くらいまではいける。その下は町のいろいろなサラ金があって、その下にマチキンがあって、その下がトイチとか、ヤミキン。誰が金の苦しさをわかるかという結局最後はヤミキンの人ら。銀行の人間には事情はわからない。あるヤミキンの人に「オマエ今飛ぶんやったらこの貸した10万円はもうええ」と言われたこともあるし、食べるもの必要やろと言われて1万円くれたこともある。その人とは別にヤミキンやっている女性社長がいて、この人とは長い付き合いになって友達になった。この人が今のところ最後に頼れる人。和歌山の人だが、大阪に出てくる前にあいさつをしに行っただが、そのとき彼女はちょうど入院していた（今はもう退院しているだろう）のだが、手持ちの全財産4,000円やったが1,500円の花を買って見舞いに行った。

今の生活費はだいたい1日6,000円くらいか。食費その他で2,000円くらい、泊まり賃で3,000円くらい（ネットカフェに来る前はサウナを利用したりした）。営業経費もとりあえずたてかえ。それにタバコ吸ってしまうし（お酒はもともと飲めない）。

大学をでてサラリーマンははじめた頃はまさか自分がこうなるとは夢にも思わなかった。でも「こうなるんやなあ」。サラリーマンになった頃、まちでホームレスのおじさんが寝ころんで文庫本読んでいるのを見た。本なんか読んでる場合ちゃうやろ、働かなあかんやろと思たけど、その人がいったいどうしてそんな生活をしているのか聞いてみたかった。今でも釜ヶ崎に行っても救済されない障害者の人とか、そういう人についてチャンスがあったら聞いてみたいと思う。「僕ほんまに聞きたいわ」。

（調査用紙を見て、「不安」という言葉を見つけて）自分たちみたいな状況の人間は、将来への「不安」なんて、そういう一般的な人が考える感覚はもうない。自分は地獄を見てきた。だから今は天国のよう。人は毎日寝る場所がなくて大変だろうなんて言うだろうけど、誰にも追いかけられずに、公園の夜景みて歩いている。天国。

明日身体が動かなくなるかもしれない。でも江戸時代みたいに野ざらしになることはないだろう。最低限の救済はあると思う。

現在、国民年金も国民健康保険も払っていない（払えない）。仕事を変わったりして年金、保険の支払いに空白が生じている。

37. 男性 20代後半

現在は変則的な仕事に就いており、ネットカフェは仕事の合間に利用する。現在の仕事は電話帳の配布・回収である。仕事場所は毎月代わる。電話会社が配送業者に依頼して、その配送業者に雇われるという形態であるが、配送場所は電話会社の管轄地である。ただ、東京に年2回ほど「応援」で行くこともある。仕事はふた月して、ひと月まるまる休み。仕事のある月は20日間連続して働いて、1週間まるまる休みという形態。仕事のあるときは配送業者がウィークリーマンションを借りてくれるが、休みの日はウィークリーマンションはない。休みの日は大阪の実家（実際はほとんど帰ってなくネットカフェが多い

ようだが、詳細は不明)。仕事場所は西日本全域に渡るので、休みの日と仕事の日の合間はネットカフェに泊まる。調査のときも明日から名古屋だから、ネットカフェに泊まって、翌朝 10 時ごろに名古屋に向かう予定であった。

この仕事はほとんど個人請負のようなもので、給与は基本給なく一冊配布して平均 60 円もらえるというもの。回収してもいくらもらえるようだが、不明。だいたいひとつの地域で 6,000~7,000 件のノルマがあるので、ひと月の収入は 50 万円ほどある。明日からの名古屋のノルマは 1 万件でノルマを達成できるかどうかは怪しいという。「ちょっと難しい、名古屋は苦しい」。ノルマを達成できなくても、何か「罰」があるわけではないが、業者と電話会社の契約に問題が生じるのでやっぱりいい加減にはできない。

仕事は、業者の車で電話帳を配布・回収する。仕事時間は朝 5 時ごろに出かけて、15 時 30 分には配布・回収を止める。その時間を過ぎると「道が混んでくるから」。仕事はそこで終わりではなく、そこからウィークリーマンションに帰って、翌日の経路を作成する。効率良く配布・回収しないとノルマは達成できないからだ。この準備時間を含めると、仕事時間は 10~12 時間に及ぶ。

効率よく配布・回収するには都市がいい。集合住宅などは 100~200 件一度に済む。留守宅は朝、配布・回収のピラをポストに入れ、翌日玄関先に古い電話帳をおいといてもら。ただ、すべての家が同じ会社の電話回線を使ってるわけではないので該当しない家もある。経路作成のときにはこのことを注意しないとけない。名古屋の後は一週間和歌山(田舎)なのでこれも嫌だ。年 2 回ほど「応援」で東京を担当することがある。この仕事は「おいしい」。一冊 90 円ほどもらえるし、集合住宅も多いので配布・回収に回りやすい。

この仕事は家族に紹介されて就くことができた。家族も同じ仕事をしていて紹介してもらった。家族はこの仕事の「資格」のようなものをもっているので単価も高い。しかし、本人は将来ずっとこの仕事を続けていくつもりはなく、他の仕事をしたいと思っている。今は他の仕事のために割のいいこの仕事をしてお金を貯めているところである。「この年(年齢)でこんな(賃金の高い)いい仕事ないから」。ただ、具体的には何をしたいということもないかもしれない。「将来したい仕事は？」に対しては「うーん」というので「自営とか？」の質問に「うーん、そうやなあ…」言いたくないのか、それとも具体的には何もなしなのかははっきりしなかった。

大阪で生まれ育ってきた。高校を卒業して友人のついでで建設業の会社についた。そこで鉄筋工(正社員)として 3 年間働いていた。その後人材派遣に登録してバイトをしていた。このとき、クラブに行って、知り合いのついででプロのダンサーと知り合いになり、その人から(もちろんお金を払って)ダンスを教えてもらう。ダンスを教えてもらってダンスのインストラクターになる。ダンスのインストラクターになるには、誰でも 3、4 ヶ月教えてもらえればなることができる。ただインストラクターとして食べていくのは簡単ではない。授業料は一人 1,500 円。平均 1 日 10 人いたので月給 30 万円ほどもらっていたが、生徒を集めるためには競技会にでて名前を挙げていかないとけないのがつらい。だから授業だけをしていけばよいわけではなく、授業が終わると競技会にでるといふ毎日がきつかった。ダンスの仕事は 8 年間続けた。

そして、2 年前に家族の紹介で割のいい電話帳の配布・回収の仕事についた。年金などは未成年のとき親がかけていたため、実際は払ったことがないと思われる。

なお、給与は多いが保険などは一切かけてないので将来については不安を抱えている。

38. 男性 30 代前半

調査員らが、調査協力依頼のピラまきをしている所に、「ネットカフェを宿泊に使うし、よく知っている」と声をかけてくる。「定期的に仕事後寝泊まりしている」とのことだったので、そのまま調査のお願いをした。基本的には、自宅の門限に間に合わない日、両親が外出・外泊する際にネットカフェで寝泊まりしているらしい。調査当日はネットカフェに宿泊する予定はなく、家に帰る予定だった。門限等のためか、急に「次の電車で帰る」と言い出したため、聞き取りも不十分なまま終わった感がある。

障害者手帳・療育手帳はないとのことだったが、たとえば領収書に記入する際、自分の名前の一文字が漢字で書いていなかったことや、話し方、食事のとりかたなどに彼の「社会の中での生きにくさ」を感じた。また、卒業後も長期にわたって、学校が職業探しをしてくれているという。また、門限があることや「両親が家にいない日は家に帰れない」とのことから、家の鍵を持っていない可能性もあるのではないだろうかと思われる。

大阪府出身。中学校卒業後、学校の紹介で就職する。調理、パワーショベルの運転、自動車の部品作り、ペットボトルの部品作り、工場でセメントでブロックなどをつくるなど、様々な仕事を経験してきたとのこと。これらの多くは「学校の紹介」で仕事に就いてきたらしい。ハローワークも利用している。また、自分のノートパソコンを所有していて、それを使って仕事探しもするという。

これまで正社員の経験はないようだが、最も長いのは、調理関連の仕事のようだ。20代前半から30代前半までの10年間は、都市銀行の社員食堂で調理の仕事に就いている。今年の春からは、現在の料理店にアルバイトとして就職、調理の仕事をしている。ハローワークで紹介されたらしい。時給800円で、シフト制がしかれている。「21時半まで勤務」と言っていたが、シフト表を見たところ、実際は勤務時間も勤務時間帯も、かなりのばらつきがあった。月収は、約13万円で、雇用保険はなし。仕事の忙しさは、「お客さん次第」であるが、今の仕事には収入も含めて満足しているらしく、続けたいと考えている。調理関連の歴が長いが、仕事上は特に資格は必要ではなく、持っていない。両親からは、(調理)学校に行くように勧められているが、今のところは忙しいので、行く予定はない。

現在、大阪府下にある実家で生活をしている。ネットカフェは、週2回くらい利用。住居は、実家があり、基本的にそこから職場へと通っているが、現在の職場が24時まで営業なので、自分の勤務時間が終了した後も、他の従業員と話をしていると遅くなることもあるという。実家に門限がある(23時か23時半だったような…)ため、予定の時間をすぎることがあると、ネットカフェを利用するという。両親が旅行に行ってしまうときも、家に帰ることができなくなるため利用する。ネットカフェは、大阪市南部のネットカフェは料金的に高いとのことで、大阪市北部のネットカフェを利用している。友人が近所にいるというのも大きな理由のひとつである。朝8時頃に出発するために、5時間のナイトパックから逆算して、店への入店は、たいてい2時か3時である。それまでは友達の家(バー)へと行って遊ぶ(「一応、女の子です」とのこと)。この友達には、相談事などを行っているらしい。

また、ネットカフェ以外にも漫画喫茶をよく利用する。5時間870円と安いと泊まることもあるという。寝泊まりするのは、ネットカフェか漫画喫茶である。ほか、友達の家泊まることはない。テレビで、ハンバーガーショップなどのファーストフード店で寝泊まりする人がいることを知ってびっくりしたこと。

ネットカフェ等に泊まらない日は、だいたい決まった時間の電車で自宅まで帰る。「いつもは21時38分の電車で帰る」とのこと。今日は、調査協力のために、予定の電車に乗れなかったため、「58分の電車で帰ります」という趣旨の電話を(おそらく)実家にしていた。丁寧な口調であった。

門限や、「両親がいない時は家に帰れない」という語りのみからでは、Aさんの家族関係はどのようなものなのかはわからなかったが、実家で生活している。兄弟もいるが、自立していて家にはいない。実家で生活しているため食費等はかかっていない。衣服等もあまり買わないとのこと。携帯電話は、2台持っている。メール用と電話用、また、テレビを見ながら他のことをするためにも2台ある。月々約2万円ほどかかっている。それ以外は、基本的にネットカフェなどでの寝泊まりの費用と、友達との交際費に使っている。「1ヶ月10万くらい使う。すぐなくなっちゃう」とのこと。よく友達とクラブやバーに行ってお酒も飲んでいるらしい。パチンコなどのギャンブルはしていない。借金もない。むしろ、友人に10万円貸したが、2万円しか返金してもらえず、8万円を踏み倒された経験があるとのこと。

バイクの免許を持っていて、身分証代わりにしている。また、医療保険は、国民健康保険に加入している。年金は払っていない。

現在、困っていることはなく、体調もよい。障害者手帳も持っていないとのこと。

39. 男性 50代前半

経緯

① 徳島県出身。中学卒業後、20人くらい規模の板金屋（空調のダクト）に正社員として2～3年勤める。その後は徳島県内でホテルの調理見習（3年）やスダチ・ワカメの収穫、農作業や瓦張りの手伝い、屋台のラーメンなどの職を転々とする。結婚歴・離婚歴があるが、詳しくは聞けなかった。父親は20代の初めに、母親も後を追うように死去。姉や妹には連絡は取っていない。

② 田舎のほうでは、季節的に農作業の収穫の手伝いの仕事があるので、通いで時々そういう仕事をしてきた。今年の春にはにんじんの収穫を手伝い、多少何万円かは持ち合わせがあった。

③ その後ハローワークにも行って職を探したが見つからず、家賃も払えなくなり、電気・水道・ガスも止められてしまったので、夏に大阪に高速バスで出てきた。保証人がいないことが就職活動の妨げになった。大阪には20代のときに遊びに来ていたので、少しは知っており、大阪に出れば何とかなると思って出て来た。

ビデオ試写室→サウナ→野宿生活

① 大阪に着いたときの所持金は約1万円。何か求人募集の広告や張り紙が出ているかと思ってうろろろして、ビデオ試写室を見つけた。午後11時～翌朝10時までで1,500円～。1昼半ほどでリクライニングシート、テレビとパソコンみたいなものがあった。

② 翌日、ハローワークに行ったが仕事はなかった。今度は別の場所で探そうと思い、移動してサウナに泊まった。名前は覚えていない。夜8時～翌朝9時までで雑魚寝は1,000円～、仮眠室（個室）は+500円～で1,500円～。仮眠室で眠った。その辺で一番安いということらしく、泊まっている人は2～30人はいたと思うが、年齢層は自分と同じくらい（40～50歳代）で若い人はあまりいなかった。

③ 翌日に近くのハローワークに行くがそこでも職は見つからず、検索用のパソコンの隣の席の人が「持ち合わせや住む所がなく仕事を探している人は、天王寺のほうに行ったほうがよい」「炊き出しもあるし」といってくれたので、そこに向かった。

④ とはいっても、どこに行けば分からなかったもので、その日は駅で野宿。12日に、駅でうろろろしている人に無料で泊まれるシェルターがあることと行き方を聞いたので、釜ヶ崎に来てシェルターに泊まった。

⑤ 翌日、西成労働福祉センターで座っている人が「仕事の相談ができるところがある」と、NPO釜ヶ

崎のお仕事支援部につれてきてくれた。

その他

① 借金は150万円くらい。屋台のラーメンをするための改造費のために300万円ほどカードローンで借りた。今年の春までは返済していたが、残金が150万円ほどあるが返済できていない。

② 就職して安定したところに住みたいが、「住所がない」ので困っている。自立支援センターのことは知らない。

③ 自立支援センター入所のため巡回相談室に連絡して面接してもらったが、3週間後になるというので、たまたま住之江公園住吉公園での就労体験で補欠があったので、それに従事してもらうようにした。

④ 当人は「大阪はそういう支援が厚い」と感謝していたが、たまたまうまくNPOにたどり着いて、仕事も短期であるが、就労できた珍しいケースである。

40. 男性 30代前半

沖縄県出身。兄1人、姉1人、妹1人。Aさんより11歳年上の兄は16歳で家出。兄は戸籍を「家」から抜いている。しばらく見つからず、死亡したと思っていたが家出したから10年後に見つかった。父親はまだ兄のことを許しておらず、Aさんが兄のところに行くことをよく思っていない。

Aさんは高校卒業後、集団就職で神奈川県（大手自動車メーカーN系列の自動車部品会社）へ。しかし1年もたず、移動。ここでは新聞配達をしながら専門学校へ通う。新聞配達はお金が多かったので1年と少し働き、一度沖縄へ戻りそして岡山へ。岡山では7年間、大手自動車メーカーMで期間工から正規社員として働く。住居は、はじめの1年間は寮（社宅）、その後は自分で借りて生活（寮は1年までしか使用できないため）。その後リコール問題がありボーナスは1年間なし、給与は-5%になった。そのとき早期退職の話がでた。退職金や慰労金などが割り増し、または慰労金などがつく期間勤務してなくても考慮されるということでそれにのった。当時M社はもうだめだと思って退職したが、今は盛り返してきているので…とAさんは（考え込むほどではないが）少し複雑な表情だった。その後、愛知県の大手自動車メーカーTへ。そこでは2年11ヶ月間期間工として働いた（期間工は最高この期間しか働けないため。また、戻りたいと思って辞めてから半年たたないと戻られない）。働きはじめてからの半年は日給9,000円、半年後からは10,500円。手取りは25万円くらい。慰労金は半年で78万円・保証金20万円がつく。Aさんが辞めたときは給与・慰労金等含め120万円ちょっとを手にした。現在はそのお金で生活をしている。

これまでは正規社員または期間工として働いている。Aさんは保障がないから派遣では働きたくないと言う。働いている間は雇用保険・厚生年金・社会保険等加入。辞めてからはすぐに切り替わり、通帳から国保等引き落とされている。住民票は一度岡山のM社勤務時に移したが、名古屋では期間工だったので必要ないと思い沖縄県のままである。

Aさんは沖縄県で働いたことがない。こっち（沖縄県外）で働いているから沖縄の時給620～650円で働く気にならない。沖縄で一日働くのがこっちだと4時間程度で同じ金額になる。そう考えると沖縄で働くのがばかばかしく感じる。「いくら物価が安くても、お金をもらってなんぼだから」と。また、沖縄では週休2日がない。公務員は週休2日だが沖縄では週6日働かねばならない。それでもお金にならない。

よく行く居酒屋があり、そこに「西成」で生活をしている人がいて、その人から月3万6,000円で生活できると聞いた。それでもいいなと思い電車ではなく線路にそって歩いていった。着いてかなり驚いた。ハローワークみたいなのにたくさん寝ている人がいた。難波でも寝ている人を見てびっくりしたが

それ以上、たくさんの方が寝ていてびっくりした。これまでも名古屋で少し見たことがあるがほとんど見ることがなかった。昼間から酒飲んでいるし、怖かった。それからネックレスや時計は身につけなくなった。「今はこうやって隠して持っている」といって小さいショルダーバッグからネックレスや時計などを見せてくれた。

釜ヶ崎の中を歩いて寝ている人の多さにも驚いたが、宿泊施設の多さ、安さにも驚いた。とりあえず、どんなところかもわからないので一番安い部屋 1,200 円、3 畳一間に泊まった (1,200 円・1,400 円・2,000 円 (?))。そうしたら鍵もないし、冷房も扇風機もないので驚いた。鍵がもらえなかったので共同の風呂にも行く気もせず、寝るときも寝た気がしなかった。そういう生活もあると思っていただけ、自分には合わないと思った。あと、歩いていてびっくりしたのが自動販売機のジュースの安さ。

仕事を辞めて関西に来たときはほとんど兵庫県で生活していた。その間、駅前のネットカフェも使ったことはある。はじめは兄の家だったが、兄は長距離トラックの仕事をしているためあまり家にはいない。朝の 6 時頃帰ってきて、そして寝てから夕方 4 時頃また出ていく。家には寝に帰ってくるだけだし、兄は休みの日しか家にはいない。そんな状態で自分は家にいづらい。それで、ネットカフェやカプセルホテルに泊まるが多くなった。洗濯はカプセルホテルです。ネットカフェを使うのは「インターネットが好きだからネットが使えるのがいい。何でもできるから」だと A さんは言う。ただ、週末 (金・土曜) は酔っ払いが多いのでうるさいからあまり使わない。頻度としては、だいたい週 3 回程度。少ないときは週 1 回も使わない。そのときはカプセルホテルを使ったり、兵庫県にも帰ったりしている。(ほとんどカプセルホテルとネットカフェ) カプセルホテルは 3,200 円で楽だ。ネットカフェでの生活は、朝 3~4 時ごろまでゲームやネットをしてから寝る。だからどうしても朝は延長になってしまうことが多い。利用するときはいつも 1,800 円のプランにするので結果 1,800 円 + 1,000 円 (延長料金 500 円/時間) = 3,000 円ぐらいになる。よく使うネットカフェは週末かなり混みあって空いていないときがあるのでその場合はカプセルホテルに行く。A さんは、几帳面な性格なのか、手帳にいつどこ (カプセル・ネット・兄宅) に泊まったかを丁寧に書いてあった。「こんなの見せるのもなんだが…」と言って調査員に見せてくれた。住民票も持ち歩いていて見せてくれた。

普段の手荷物は 2、3 日分の衣服を持ち歩く (小さなショルダーバッグと 2、3 日分の衣服が入りそうなバッグを持っていた)。大きい荷物 (夏物) は大阪市南部にあるコインロッカーに置いている (1 日 200 円)。冬物は兵庫県の兄のところにある。いざとなればそこに帰る。「困ったときに相談できるのは」の質問には親。また、現在は兄が籍を抜いているので自分が長男となっているのでいずれは沖縄県に戻るだろうと A さんは言っていた。健康に関してはとても不安がある、一番困ったと言っていた。以前熱が出てかなりしんどく動くこともできなかった。ネットカフェでは眠れないし。一番困ったと。

1 日 10,000 円は使わないようにしている。パチンコもあまったお金でするようにしている。たとえば一日 8,000 円ですんだら、その残り 2,000 円をパチンコ代にする。食費も 1 日 1,000~1,500 円ぐらい。ファーストフードのスタッフが朝、街中で配布しているチケットをもらって利用している (小まめにきれいに切り取って財布に入れていた)。宿泊は、カプセルホテルを使うと 3,000 円程度、ネットカフェは 1,800 円程度になる。春から 85 万円程使っており、その大部分は宿泊代である。携帯は今月 6,800 円、安く 4,900 円、よく使って 8,700 円 (携帯の料金表示をみて正確に答えてくれた)。酒は 1 週間に 1 回程度で 5,000~6,000 円ぐらい。多くて週 2 回、月 30,000 円程度の出費。T 社を辞めた際、沖縄の親に頼んで失業保険 (?) の申請、希望就職願いを出してもらっている。沖縄のハローワークに取りに行けば補助金ももらえる。

春、愛知から大阪に来る際に酒気帯び運転で捕まった。免停で 120 日間 (裁判もあったので若干期間が

延びてしまった)免許証がない。そのためこれまで経験のある自動車関係で働けない(自動車関係は免許証がないと働きにくいらしい)。お金はまだあるけどどんどん減っていくばかりで不安だ。仕事を辞めてからこの間、大阪を見て回ってきたけど大阪はいい。名古屋は物価が高い。大阪はモノが安いし、人が接しやすい。できれば大阪で仕事を見つきたい。だが、現在免停中だし住む場所もない。住民票も沖縄県なのでハローワークに行っても紹介状を書いてもらえない。兵庫県で大手家電メーカー関係の仕事に面接にいったが免許証がないため、いろいろと聞かれた。どこへ行っても身分証明代わりに免許証がないことを聞かれるのでそれが嫌になってきた。

住居は保証金もなく生活できるところがいいと考えていてウィークリーマンションがいいかな...とAさんは言っていた。以前不動産屋にいったとき、学生ならともかく社会人が借りる時大阪に住んでいる人が一人、保証人となる必要があるといわれ困った。すると不動産屋が保証人代行会社というのがあると言ってきた。しかし、そのときは怪しいと思って辞めた。「とにかく部屋がほしい」。ネットカフェでは朝もゆっくりできない。心も落ち着かない。免許証が戻るまで仕事はいいかと思うが、ゆっくりできる部屋はほしい。不動産屋も仕事をしていないから、借りにくいと繰り返しAさんは言っていた。

日中はすることがなく映画はほとんど観た。電車に乗ってふらふらして京都にいったりして戻ってくる。

住居の情報はネットや街中の不動産によるもの。ネットは情報が古かったり、物件が少なかったりする。今もネットやまちの不動産屋を見てまわるが敷金・礼金保証人なしのところがない。「(この春に)家を借りておけばよかった。また、寮のあるところに勤めればよかったと思う」とAさんは言う。Aさんの中では、アパートを借りてから仕事、または寮のあるところを探して仕事をするか。免許もないしどれを優先していけばいいのかわからないまま今に至っているというようだった。

Aさんは「もう自動車はいいかなと思う。趣味でいいかなと思う。自分は汗水流して働いて何ぼだと思っているのでサラリーマンは無理だと思う。あと、ネクタイは嫌だ」と言っていた。そして海の仕事にあこがれていて、大手自動車メーカーM(岡山)を辞めたとき、小型一級船舶の免許を取りに学校に行った。一度沖縄での募集があったが、募集定員が1名程度だったため、書類選考でだめだった。また、旅行も好きだから観光業やツアーコンなどもしてみたい。希望する仕事に就けていない。資格はかなりいろいろ持っている。小型船舶や自動車整備士。聞けなかったが他にもいくつか持っているようだった。

なんとか仕事をしたいが、ネットや街中にある案内は派遣ばかりである。自分では「免許証が返ってくるまではいいかな。それか講習(4時間)4万円を受ければ免停期間が短くなるから受けようかとも思っている」と。いざというときのためにお金は貯めているので問題はないが、使ってなくなっている、そのことへの不安は大きいとも言っていた。

これまでは車が好きでかなりつぎ込んできた。車は兵庫県にある。また、結婚に関しては、「仕事もしないのに女だ結婚だって言えない。仕事を見つけてから」とAさんは言っていた。

41. 男性 30代後半

0時過ぎごろ、ファーストフード店内に一人にいる男性に対して、「このような調査を行っています。知っている方がいれば電話連絡して下さい」と、簡単に一声かけてピラを配っていった。ある男性が、「ホームレスの調査? どこがやってるの?」と、質問してきたため簡単に答えて、店を出る。調査員が本部に着いた数分後、ピラを受け取った中の一人の男性から電話が入る。行ってみると、質問してきた男性からで、もう一人の友だちも一緒だと告げられる。二人の調査員で行ったため、本部に連絡を入れ、それぞれ分かれて聞き取りを開始した。

神戸市出身の30代後半の男性であった。誰が何のための調査を行っているのかということが気になったようで、ネットカフェ等で夜を過ごしている人の生活の様子についての調査であることを説明した。その際、「好きでこんな生活をしているのではない。国が雇用についてちゃんとしてくれない。外国人が多く働いている。そのうち外国人にのっとられてしまう」などと、現状に対する不満を話す。

高校を卒業後、大阪のチェーンの飲食店に正規社員として勤め始めた。今は、いくつも支店があるが、当時はまだ店舗数は少なかった。大阪の社員寮に入っていた。バブル当時で就職には困らなかった。そこで3年ほど勤務したが、兵庫へ帰りたかったため、自分から辞めて実家へ帰る。神戸に帰ってからは、運送の運転手の仕事に就いた。全国の色々な所へ行った。家に帰ってくるのは、週に1回くらいであった。車の中で寝たりもしていたが、車の運転は嫌ではなかった。月20～30万円くらいの収入があった。実家で生活していたが、飲食、タバコ、競馬やパチンコなどのギャンブルにお金を使ったりもして、貯蓄はあまりできなかった。大阪の飲食店に勤めていた頃、飲食や遊びのためにカードで10万円くらいの借金があったが、運送業中に全て返済した。運送業で10年ほど勤めたが、最後の1年くらいは、ヘルニアで腰を悪くし、病院に通ったりしながら勤務を続けていた。通院したり、休んだりということもあったが、最終的には、自分で体がもたないのではないかと考え、辞める。

両親については、「昔風な考え方で、父親はとて怖かった。サラリーマンを退職して年金で暮らしている。仕事もせずに家でごろごろしていられた」と、話していたが、後の話で、運送業に勤めていた時に、両親は離婚し、父は九州の子どものもとに行き、神戸の家は母だけとなったようである。兄弟はいるが、結婚し別に生活している。みんなバラバラの状態になっているようである。親も仕事をしているわけではなく、いい歳をして家で仕事もしない状態では居づらかった。しっかり職に就かないと家には帰れないと思っている。

とにかく、運送業を辞めた後、長野・東京へ行く。そんなに、お金を持っていなかった。東京では仕事をするわけではなく、通過点という感じであった。その頃は、宿泊にネットカフェなどを使っていた。アルバイトニュースなどで職を見つけ、長野県の高原レタス作りのアルバイトを行う。住み込みで月10万円くらいであった。とても仕事は辛かった。外国人が400人くらいいて、とてもよく働いていた。残業も含めて、早朝2:00頃から夕方6:00ごろまで労働していた。外国人は、借金があったようで、残業手当が収入となり、とにかくよく働いていた。長野や東京にいる時からとても世間の目が気になっていた。5年ほど前、東京から、神戸の母親に電話し、「東京で無事にやっているから」と伝えた。その後は、母と連絡はとっていない。

長野・東京にいた後、2年ほど前から大阪に来た。アルバイトニュースなどを見て、日当の出る仕事を探した。連絡は、携帯電話でとっている。大阪に来た頃、同じように日雇いのアルバイトをしている友だち（一緒に聞き取り調査を行った人）が出来た。仕事などで知り合ったのではなく、夜うろうろしている時になんとなく話をするようになり、友だちになった。それ以後、仕事を紹介し合ったりすることもある。電話で連絡をとって、夜一緒に話をしたりすることはあるが、宿泊などは別々のことが多い。

大阪へ来てからのアルバイトは、警備員・交通量調査・テキヤ・DVD（海賊版）の販売などを行った。海賊版の販売については「ちょっと法に触れる物を買っていた」と、はっきりは言わなかったが、聞き取りを行った友人の話からわかる。一番お金がよかったのは、交通量調査で、24時間（交代制）で2万円、12時間で1万円もらえた。交通量調査は、友人を誘って一緒に行ったりした。お金がある時はネットカフェなどを使うが、お金がなくなると、飲食店、本屋などを使って夜を過ごす。夜寝ていない日もよくある。

正規雇用に向けての就職活動を行いたいが、就職できても、給料が入るまでの生活費がないために活動を行っていない。また、世間の目がとても冷たく感じてなかなか面接などを行うことに抵抗を感じる。派

遣の社員についても、派遣会社はただ人を使い、そのお金で儲けているだけで、会社への設備投資をせず、人材の育成をすることもなく、とても嫌な仕事だと感じる。そんな所で働くのはアホらしいと思う。警備員などのバイトをしていてもとてもきつく言われることがある。

あまり大阪の土地はなじめなくて嫌な感じがする。とにかく人間も冷たく、周囲の人の目が気になる。中国のような海外や沖縄のような島国に行って生活してみたい。今のところ、健康状態は悪くないが、とにかくその日の生活もままならないという状態で困っている。正規で働いていた頃は保険などに入っていたが、今は加入していない。年金を確認したが、過去に13年分ぐらいは入っていた。あと12年ぐらい働かないと年金ももらえないのでもったいない。釜ヶ崎についてはよく知らないが、神戸で言うと新開地のような所で怖いイメージがある。

とても謝金の3千円が助かったようで感謝された。

42. 男性 40代前半

鳥取県出身。一人っ子。「子どもの頃からよく年上に見られる」とのことであったが、歯もなくなったりしており、たしかに実年齢よりも年上に見えた。

ネットカフェ近くのビデオショップか何かを利用していたところ、調査員が声をかけた模様（声をかけた調査員から引き継いだため、経緯についてははっきりしない）。近くの食堂で聞き取りを始めたが、閉店時間の12時を過ぎたため、別の店に移動して調査を行う。

コンピューターが使えないからネットカフェはあまり利用しない。漫画喫茶には行くが、泊まることはあまりない。

障害者手帳については、あまりピンとこないらしく、回答から「もっていない」としたものの、生活上いろいろ「生きにくさ」を抱えているように見受けられた。現在基本的な生活は父親（現在60歳代前半）に依存している様子。

Aさんは、鳥取県の出身。最近は野宿をしている。

3歳の頃に、鳥取から両親とともに大阪方面に出てきた。これまでは、父親の仕事に応じて引っ越しを重ねてきた。幼稚園時代は、兵庫県西部に住み、小・中学校時代は神戸で過ごした。その後、18歳くらいに大阪に出てきて、20、21歳くらいから仕事を始め、飯場での生活を始める。基本的には、父親と一緒に飯場で就労・生活を送ってきたようである。主な仕事は、「建築」の仕事（仮枠解体）をしてきた。父親は仮枠解体の職人のようである。父親と一緒に入っていた飯場は、30歳くらいの時に、足が悪くなったことをきっかけに辞めることとなった。工作中に、足（の表面？）に異変があることに気付き、病院に行ってみたものの医師も「わからない」「見たことがない」といって、治療ができなかった。原因不明である。「（片足のすそをまくって見て、）今でも後残ってるやろ」「両足ともある」と言っていたが、シミなどはあるもののどれのことを指しているのかよくわからなかった。ちなみに、医療保険は父親が「国民健康保険」に加入している様子。父親は現在は大阪府南部の飯場で働いている模様。

その後は、「西成」の労働福祉センターで仕事を探し、土工仕事をしつつ飯場を転々としてきた。ドヤにも寝泊まりしていた。しかし、Aさん自身は、釜ヶ崎や日雇労働についてはあまり知らない様子で、飯場のことを「寮」と言い、「飯場ですか」と聞き返すと「…」。聞き取りの後半では「その、なんやったかな、（調査員を指しつつ）その言った」と調査員に問い、「飯場ですか」と応えると、「そう」と返事し、その上NPOや自立支援センターなどについては全く知らなかった。また、顔なじみの手配師などもない。

10年前までは仕事があったが、それから仕事がなくなった。「直近の仕事は？」という質問に対しては

GW明けに2週間ほど親戚のついでで飯場に入ったという（聞き取り中は今年と解釈したが、10年前か?）。そこでは、「明日から仕事がない」と言われ出てきた。また、Aさん自身、人間関係などの問題から、飯場を出てしまうこともある。低血圧のため朝に弱く、迷惑をかけるとのことで、人とトラブルになったりもするようである。飯場を出た後は、何週間かドヤに宿泊したようである。

基本的には、センターから飯場に入って仕事をしていたようだが、飯場を出た後、仕事を探すためにハローワークを利用したこともある。職安で職業相談をしたこともある。コンピュータを使って「適性仕事」の診断などをしたこともあるが、実際には見つからなかった。資格も特に持っていない。32、3歳の時にも面接に何度か行ったが、年齢などを理由に全部断られたようだ（職安にいった後は仕事に就いてないようで、飯場（直近の仕事）→職安→現在野宿（約10年間）だと話が通る）。

現在の生活は、父親の援助によって成り立っている。父親とは、週一程度で会っており、その際に食費などの費用として、5千円から1万円もらっている。電話などはもっていないので父親とは、電話等で連絡をとるのではなく、会った日に次に会う日時・場所を約束するという形をとっている。食費は、1日400～500円（月に1.2万から1.5万円）ということであったが、実際はそれ以下ではないかと思われる。というのも、基本的には食パンとコーヒーを99円ショップで買って食べているから。一日一食で、夜のみ食べており、たまにおにぎりを一つ買う。食事量については「身体は慣れている」とのこと。タバコは吸う。現在の健康状態は「よい」と答える。

今後は、父親と一緒に家を借りて住む計画があると言っていたが、父親がなにげにそう言っただけなのか、具体性・実現可能性には欠ける。現状では、「住居をかまえるための問題は？」と尋ねると「持っている金額でやっていくしかない」。また、その上で、具体的には「父親が決めるだろう」とのことであった（もしかしたら父親が生活保護を受けるつもりなのかかもしれないが、不明）。

現在雇用保険には加入していないが、以前働いていた時は白手帳をもっていたとのこと。医療保険は、父親が「国民健康保険」に加入。年金については「よくわからない」。

特に頼りにできる行政やNPOもなく、頼みの綱は父親のみであるようだ。将来の生活については、あまり考えられない（考えたくない?）ようで、「どっか何かしていると思うけど、（父親との関係もあるし）まだ決められない」とのことであった。

今、最も困っているのは、時間をもてあましていること。公園などで野宿しているが、公園で寝泊まりすると、朝早く起きて動き出さざるを得ない。暇つぶしをする百貨店やスーパーは10時以降にならないと開かないので、それまでの時間が長い。ずっと歩いたりしている。

43. 男性 30代前半

和歌山県で生まれ、両親は健在。兄がいる。地元の中学校を卒業後、兄の知り合いの居酒屋に就職し、19歳まで板前として住込みで働くが、店でトラブル（本人は自分の不始末と言っている）を起こして辞めざるを得なくなる。

大阪に行けば何とかかなると思いやって来たが、所持金が無くなり野宿生活を始める。約3か月間の野宿生活の中で知り合った30歳くらいの男性から、兵庫県の飯場で仕事があると聞き、その飯場で約2年半働く。阪神・淡路大震災の直後で、建設業界も景気がよく、日当は13,500円が相場でけっこう羽振りがよかった。

22歳ぐらいまでそこにいたが、次第に仕事が少なくなり、釜ヶ崎に来れば仕事があるだろうと思ってやって来た。その後は飯場と釜ヶ崎を行ったり来たりの生活で、大阪府東部や南部にある飯場にはよく行った。大体が土工仕事だった。センターに来る「手配師」の仕事にもよく行った。

金が有る時は簡易宿泊所（簡宿）に泊まり、カプセルホテルからサウナ、漫画喫茶やネットカフェ、ファーストフード、最後は釜ヶ崎のシェルターにも何回か泊まったこともある。この間、家族とは連絡を取っていない。

しかし、仕事が少なくなり飯場に行っても金にならず、金に困って3か月前に起こした窃盗事件で逮捕されたことによって、10年近く続いた釜ヶ崎での日雇労働者としての生活は終わった。

2か月の拘置の末、初犯ということもあり執行猶予（彼は「弁当を持っている」という表現をした）になり出てきた。街でフラフラしていた時に声をかけられ、1週間前から海賊版のDVD販売の店番のアルバイトをやっている。貯えも無く日払いなので、ネットカフェやファーストフードですごしている。

家族のもとへはもう何年も帰ってはいないが、母親には連絡が取れる。兄には顔を合わせる事が出来ない。兄は元ヤクザで現在は足を洗っているが、最初に働いていた居酒屋は兄からの紹介で働くようになったにもかかわらず、そこを辞めざるを得なくなった自分の不始末は、兄の顔に泥を塗った結果になった。兄とは喧嘩をして和歌山を飛び出しているし、住所も無く、ホームレスを続けているので今は実家に帰ることは出来ない。

飯場も多かったが、センターでの求人です工に行ったこともある。飯場は以前には1万円を超えるときがあったが、最近では9千円が相場で、仕事が続けばよいが1週間続けてあるのは少なく、その中から飯代（宿泊費など）が大体3千円から3千5百円を引かれて、タバコや酒代などを引くと手許に残る金は僅かだそう。窃盗事件を起こすことになったのも、飯場での10日間の契約がきれて追い出され、金に困ったことによるものだった。

簡宿は金の有る時はよく泊まった。いつも使う簡宿は長期契約すれば1泊1,000円で泊まれる。釜ヶ崎にいたころは、簡宿に泊まる金が無いときは野宿をやり、シェルターにも何回か泊まったこともある。炊き出しには並べなかったという。「炊き出しに並ぶようになったら終わりや」と彼は言っていた。

約5年前に、白手帳を取るために「釜ヶ崎解放会館」（彼は「釜共」と言っている）に住民票を移している。「住民票の問題が騒がれているが、俺のも消された（職権削除）やろな」と言っている。簡宿でも登録が出来ることを教えると、「金が出来たら行ってみる」という。

この（5年前）住民登録を行った頃に、消費者金融から約30万円借りたが、返済を1回もしないまま現在に至っている。借金はこれだけで、「危ない」のは借りていないという。借金については、最後に返済した日から5年が経っていると「消滅時効の援用」という法的処置を使うことができることを教えたが、この借金について彼は深刻に考えておらず、「何とかなる」で済ませている。

ここ1週間は、海賊版DVDの販売員をやっている。街をうろついているときに声を掛けられ、金がほしかったこともあり、すぐにとびついた。15:00~22:00の7時間で最低保証が8,000円で、売り上げが一定額以上あると「いろ」がつくそう。意外に売れ行きは良い。最近は取り締まりが厳しいから危ないのではと聞かけると、ビルの1室を借りて販売を行っていて、常連の客ばかりなので大丈夫とは言っているが……。

彼には夢があって、当分はDVDの販売で金を貯めて部屋を借りて、「ちゃんとした」仕事に就きたい。将来は、自分も経験のある「鷹の仕事の会社」を始めたいとのことであった。

「今までに土方以外の仕事を探そうとは思わなかったのか?」「日払いでも工場での仕事があるのではないか」などの質問をするが、「今まで土方しかやったことがないので他の仕事をやるなんて考えたこともない」と言う。

自立支援センターや福祉のことも知らなかったと言っているが、「釜ヶ崎解放会館」への住民登録は誰

からの情報であったかについては、「白手帳を作りセンター（あいりん労働福祉センター）の窓口」であそこなら登録できると言われたとのことだった。

44. 男性 30代前半

大阪府出身。大阪市北部のネットカフェ利用者（泊まりはじめて約1年間）軽度の知的障害があり、「知的障害者の手帳の2級」を持っているとのこと（ただし、療育手帳だった場合は2級ではなく、Bになるらしい）。調査をするうえでの基本的なコミュニケーションについてはそれほど問題は感じなかった。

Aさんは、大阪府の出身。大阪市北部のターミナル周辺のネットカフェに泊まりはじめて約1年になる。18歳の時に、大阪府内にあるコンピューターの専修学校を卒業する。その後、初めて就いた仕事は、兵庫県東部にあるバネの部品を作る工場であった。100人程度の規模の工場であり、Aさん自身は正社員として働いていた。月給は、18万円程度、ボーナスはなし。3ヶ月ほど勤め、この会社を辞める。辞めた理由は、知的障害もあってか、「物事をうまく記憶することが出来ない」とのこと。それゆえ、周りのペースについていけなくなり、しんどかったようである。

次に、陸上自衛隊に入る。場所は、京都。入隊経路については、はっきりしなかったが、知人の勧めか紹介のようであった。自衛隊には、4年間ほど勤める。その期間中に大型免許を取ろうとし、仮免許まではとったが、実際に免許を取得するには至らなかった（その理由については不明）。

自衛隊を辞めた後は、1～2年間土工仕事をする。その後、家に帰って大阪府南部で遺跡ぼりの仕事を1年ほどする。続いて、堺市のハローワークで見つけた造園業者に正社員として就職する。公園の整備などをしてきた。給料は「わりと良かった」が、半年ほど勤めた後辞める。

結局、合う仕事がなく、無職になった後は家を出て、現在は粗大ゴミや電化製品を集めて生計を立てている。

実家は大阪府内にあり、実家以外には頼るところもないのだが、現在の家族との折り合いはよくない。Aさんの実の両親は離婚しており、現在実家は、父親（元公務員）と、父の再婚した女性と、再婚相手との間に息子が一人いる。Aさんには、実の姉妹もいるが、彼女たちはすでに自立していて実家にはいない。また、連絡もとっていない。現在の両親の間に実子がいるために居場所がないのか、義母との関係があまりよくないのか、とにかく実家は近寄りたところであった。そのうえ、昨年、ちょっとした問題を起こして逮捕・収監される。詳しいことはわからなかったが「ボールを持っていて捕まった」ということである。4カ月程度、収監される。この際に両親が怒ってしまい、現在では勘当状態にある。5年間ほど連絡をまったくとっておらず、電話もしていない。

ネットカフェで寝泊まりし始めて約1年になる。ずっと同じネットカフェを利用。路上で寝たことはあまりないが、たまに寝る時は、大阪市外の地域で寝ることがある。もしもネットカフェがなければ、安いビジネスホテルに泊まっていたらと思うとのこと。

ネットカフェでは、個室に泊まっているため1日1,700円必要となるが、面白いゲームがあるからという理由でネットカフェでの生活を選ぶ。好きなゲームは、アーケード系のゲームである。「西成」のセンターからもちよくちよく仕事に行っていたため、「西成」にある安いドヤの存在も知ってはいるが、「ドヤにはゲームがないし、ネットカフェの方が生活しやすい」とのこと。「西成」には、週に3回ほどの洗濯や銭湯に行くが、炊き出しは利用したことがない。基本的には、「西成」での生活はあまり好みではないようだ。

現在は、粗大ゴミや電化製品を回収し、それらを回収業者に売ることで生計を立てている。回収業者に

は、軽トラックでの回収時に渡したり、自転車を持っているので自分で回収業者まで持って行く。重い物も運んでいる。1日、約3,000円程度の収入となり、1ヶ月で約10万円弱になる。ちなみに、最も高く売れるのは、MD付きのCDコンポらしい。単なるCDコンポではダメで、MD付きがいい。そうして稼いだ10万円弱のうち、ネットカフェの寝泊まりのために約5万円(1,700円/1泊×30日)、食費約1万円(300円/1日×30日)、洗濯・入浴など生活必需品に約1万円(990円/1回×10回)、タバコ代として約5,000円(320円/2日×15)、最低計7万5千円から8万円程度を消費する。酒は呑まない。借金もない。

住居は欲しいと思うが、「現状は厳しいです」とのこと。現在貯金はないし、当面は貯金をしているような余裕もない。初期費用や、家賃の問題に加え、家族と折り合いが悪いため保証人がいないという住居を持つには厳しい状況にある。しかし、住み込みや寮つきの仕事はあまりやりたくないと思っている。

仕事をする気はあるので、探している。しかし、同じく「現状は厳しいです」とのこと。世間では、景気は良くなっているというもの、それは実感できない。仕事は、ハローワークでも探したことはあるが、ちょうどいい仕事はなかった。これまでインターネットは使ったことがなく、職探しには活用できない。基本的に「西成」で土工仕事を探している。「西成」に週に1回程度仕事を探しに行くものの、希望する「現金」の仕事はない。ほとんどが「飯場」の仕事であり、飯場には「食い抜き制」があるので嫌である。

行政には、もっと待遇のいい仕事を用意してもらいたいし、職業訓練なども受けてみたいと思う。そういう点では、これまでは利用したことはなかったが、自立支援センターにも「まあ入ってみたい」と言う。現在、相談する行政機関やNPOはないようなので、NPO釜ヶ崎をお知らせしてきた。

現在は、雇用保険には加入していないが、正社員時は加入していた。医療保険については、よくわからない。障害者手帳は、実家に置いてあるとのこと。年金の加入についてもよくわからない。

45. 男性 30代前半

失職中に足首を骨折し、救急搬送で入院。治療終了ということで退院させられ、行くあてもなく困りはて区役所に行く。巡回相談室につながれ、自立支援センターを経て、療養しながら生活の立て直しを図るため更生施設に入所。現在に至る。

高知県で出生。父親とは、小学生のころに死別。母ひとり子ひとりとして育つが、母親は2年前に亡くなっている。親戚関係とは、没交渉。

16歳より18歳まで児童養護施設で生活。高校を卒業と同時に施設の紹介で、滋賀県にある紡績会社に就職。約4年間、正社員で工員として住み込み就労。22歳、工場閉鎖により静岡県にある系列の紡績工場に就職。そこも正社員で工員として住み込み就労し、約6年働くが、社員寮自治会費の使い込みがばれて解雇になり、丁度そのころ付き合っていた恋人の実家のある宮城県へ。

5か月くらいまでそこにいたが、結局、彼女や彼女の実家にたかるヒモ暮らし。パチンコ店の店員、新聞購読の勧誘などのアルバイトをするが、彼女の親に愛想を尽かされ、逃げるようにして彼女と共に母親のいる高知県へ舞い戻る。

しかし、高知では約1年間警備会社で働くが、会社倒産で失職。その間には、彼女にも捨てられ、半年後、金銭の蓄えもあつたため、全国放浪の旅に出る。岡山、京都、石川へ。石川で金を使い果たしてしまい、残っていた金額がちょうど富山へ行くバス代に間に合ったので富山までたどり着く。野宿をしていた公園でテキ屋に「拾われる」。

そのテキ屋で半年間やっかいになっていた。奈良や京都など、年末から正月にかけて忙しい毎日だったが、2、3月は仕事が少なくなりテキ屋を逃げ出す。

4年前に喧嘩で傷害事件を起こし、2か月間拘留されるが起訴猶予で出所する。また、高知県に戻り友人の家など転々とするが、3年前に大阪に出てくる。京都に向かう途中で、道に置いてあった自転車を盗み職質にあって捕まる。警官に「仕事が無いなら「西成」(大阪周辺では行政区の西成区ではなく釜ヶ崎を指して使うことがある)に行け」と言われ、釜ヶ崎にやって来る。

兵庫県西部の飯場に行き大手製鋼メーカーなどで働く。その後、大阪府東部の飯場で「賄い」の仕事に就く。1か月15万円で働く。ここでは宿代や飯代もいらず、約30万円を貯めることが出来た。そこを辞めて、貯めたカネで「豪遊」。カネが尽き、釜ヶ崎で日雇い労働に。この時に、炊き出しやシェルターを経験する。

3年前、大阪府内で住み込みで清掃の仕事に就くが、根気が続かず夏に離職。サウナ、ネットカフェを転々とする。カネが続かずに野宿へ。

年夏に、野宿をしていたビルの階段で転び右足首を骨折。痛みにも耐えきれず自ら救急車を呼び、病院へ入院するが約1か月で治療終了という理由で病院を出されるが、痛みも引かずリハビリも出来ないまま途方にくれ、区役所の支援係へ相談に行き、野宿者巡回相談室につながり、自立支援センターから翌月、更生施設に入所。

なお、借財がこの間にサラ金など5、6社から約500万円近くある。時効をむかえるものもあり、「消滅時効の援用」も考えている。

骨折による痛みも和らぎ、ハローワークでのカウンセリングを受け、スキルアップのためパソコン技能講習を学んでいる。自分で何をしたいのかよくわからないが、学んだパソコンの技能を活かせる仕事に就きたい。市場調査みたいな仕事もいいかなと思っている。

ネットカフェに泊まるようになったのは、以前からマンガ喫茶に泊まったこともあり、その延長線だ。料金も安く、他人に邪魔されることもない。図書館も行くが時間がくれば追い出されてしまうしネットカフェだったら、マンガもありネットもありゲームもできるし、何といっても眠っていても注意されない。

自分はずうっと寝泊りしていたわけではないが、簡宿(釜ヶ崎の)に抵抗があった時はよく使った。

46. 男性 30代前半

大阪生まれ、大阪育ち。住居なく、ネットカフェやファーストフード店を利用するのは毎日。今日の所持金は70円。ただ、公園などで野宿したことはない。24時間のファーストフード店を利用した場合は、夜2時以降になると「そうじするんで」と言われて追い出されてしまう。またうつぶせになって寝ても注意されるのでファーストフード店では眠れない。そのため、ネットカフェに泊まらないときは、コンビニに行って立ち読みなどして時間をつぶして、朝6時30分に開店するファーストフード店に行く。このように、お金がなくなると、お店を転々として徹夜して野宿をさける。それゆえ、翌日仕事があれば徹夜明けで仕事する生活をしている。

自宅はあるが、今年の春に両親とけんかして飛び出てきた。けんかの原因は「まとも」な仕事に就かず、日払いの仕事をしていること。親は正規の仕事に就けという。それに対して仕事を探しているのにそうした仕事はないと歯向かってけんかになった。荷造りもせず、着の身着のまま家を飛び出した。そのときの所持金は1万円。サウナなども使ったことがある。サウナは1〜3時間で会員なら500円、非会員なら1,000円のところを使っていた。ネットカフェは大阪南部のターミナル周辺のネットカフェを利用して

高校を卒業して、大阪府北部のミシン部品を作る工場に常雇で就職した。給与は15万円前後で手取り

は13万円ほど。5万円は家に入れていたので、自分の小遣いは残りの5万円ほどだった。最初は貯めていたが…。ギャンブルはたまにやっていたが、その工場には自宅から「通い」であった。自転車で自宅から通っていた。通勤時間は40～50分。交通費全額でないので自転車通勤をしていた（もしかしたら電車嫌いなかもしれないが、後述するように求職条件として「通勤時間の短いところ」を挙げている。聞き取り中は気付かず…。）。通勤がしんどいので就職して4年で自己退職した。社会保険あり。

次の仕事したいと、条件の良いところ（通勤時間の短いところ）を探した。職安では見つからず、新聞の求人広告でみつけたコンピュータの基盤を作る会社に就職した。その給与は14、5万円。社会保険あり。常雇。ここは勤めて3ヶ月で辞める。ここは自宅から会社が近くて良かったが、上司との人間関係が悪くて長続きしなかった。

そして、つぎに現在まで日払いの人材派遣の仕事に就くようになった。「求人があまりなかったから」。人材派遣の仕事は朝準備をして仕事に出かけようと思ったときに、「今日（の仕事は）なくなりました」と言われて仕事なくなることもまれではない。

大手派遣会社に5～6年登録していたが、あまり仕事が回ってこないで、家を出てから別の派遣会社に登録した。求人情報誌をみて登録した。しかし、この会社も就労日数は大手派遣会社と変わらない。「仕事があるときとないときがある」、「15日/月以上」と言うが、別れ際には「2～3日/週あったらいいところ」。「あんまり紹介してくれない」。給料は6,300～6,500円/日。一番良かったのはイベントの手伝いで8,000円/日。仕事場所までの交通費は自分持ち。もし仕事場所までの交通費がなければ、会社から貸してもらいが日当から引かれる。お金はいつも2,000～3,000円しか残らない。仕事の内容は引っ越しや工場の仕事。引っ越しはとりたてて日給はよくなく他の仕事と同じだった。直近の仕事はこの金曜にデザートを作る会社で働いた。仕事の連絡は携帯電話に電話がかかってくる。なお、この携帯電話の番号は家族に知らせていない。

人材派遣が紹介する仕事が少ないので苦しんでいる。この前の朝、6時30分ごろに地下鉄なんば駅周辺を歩いていると、駅手配で声を掛けられたので仕事のないときに一度行ってみようと思っている。

しかし、日雇の仕事が続けたいと思っているわけではなく、常雇の仕事に就きたいと思っている。求職方法については、ハローワークには行かず、求人情報誌をみて仕事を探している。30歳を超えているが、年齢制限にはなんとか引っかからない。「年齢はぎりぎり」とはいえ、自分の希望する求人はなかなか見つからない。「求人は多いが（通勤時間の短いところなど自分の希望に）あてはまるのが少ない」。住民票は面接に必要なので問題ない。問題は勤務地である。勤務地は「大阪府内がいい」。これまで6社で面接を受けたが、どこも受からなかった。「だめでしたと言われる」。家出をする前になるが、直近の面接は配送業務やゼリーをつくる会社だった。もしも正規の職についてお金が貯まったら、家に帰るつもり。お金が貯まらないと帰るつもりはない。「就職しただけだとだめ。そうしたら（就職してお金を貯めたら）、親も許してくれそう」。

常雇の仕事がみつかってお金が貯まるまでは不安。住居はアパートを借りることができたらと思っている。しかし、常雇の仕事に就いて、つぎの月給までどうするかは考えておらず、そうした質問に対しては「決まったら前借りかなあ」と。借金はなし。

家族は両親と妹（就職している）。父親は自動車の整備士をしていて、大阪市内で暮らしている。

相談相手はいない。借金はなし。

現在は健康。

別れ際に、「困ったことがあったら連絡してください」と、あいあいサポートセンターとNPO釜ヶ崎の連絡先のかかれた名刺を見せると、「賃金未払いって書いてありますけど…」と言う。今年初めに無料の

求人情報誌を通じてスーパーの食品仕分けの仕事に就いたが、そのときの賃金は今でもまだ支払われてはいない。この仕事の賃金は病氣して2週間ほどで辞めてしまったので、まだ支払われていないのである。

47. 男性 20代後半

Aさんは、今回Bさんの紹介で聞き取りに協力。商店街内の飲み屋でアルバイトをする仲間。岡山から昨晚でてきたばかり。そして住居は知人宅。

福岡県出身。姉がいる。姉は現在結婚して岡山に住んでいる。Aさんは幼い頃から両親がおらず、祖母に育てられてきた。ご飯も何もかもおばあちゃんが用意してくれていたのも何も考えず、仕事もしないといけなとあまり考えていなかったが、祖母が亡くなってはじめてどうかしなといけな、自分の力で生きていかないといけなと思った。「大事な人がおらんくなってはじめて気づいた」「今の若い子らは親がおって、何とかしてくれると思っている。みんなは帰る家があるから、危機感もないと思う」と言っていた。

リストラにあった人たちが家庭をもっていたら家庭を守らなといけなと思っている。そういう人たちは危機感がある。そういう人を国がみてくれないといけなと思う。偉い人たちは、自分は仕事をしていて家もある。自分の子どもがリストラになったらと考えることもないだろう。でも国がそういう人たちを何とかしていかないといけなと思うと、Aさんはしっかりとした口調で話していた。

Aさんは10代の頃は高校に行きながらアルバイトをしていた（AM3:00に起きて新聞配達⇒学校⇒PM6:00~12:00は焼き鳥屋）。その後高校を中退し、焼き鳥屋の店長や板前をしていた。店長の頃は仕事がない人や若い子でもやる気のある人を雇っていた。そのときはまず、その人の個性を大切にしていた。働く人の健康をまず一番に考え、やる気を育てるようにしていた。店長だからといって命令することも一度もしなかった。従業員は30人ぐらいいた。今はその中でも信頼できる人に店を頼んでいる。

20歳を過ぎてから姉のいる岡山にでてきた。岡山では姉のところで生活していたので姉の家から仕事に通っていた。姉の住むところの管理人が派遣会社をしていたのでその紹介で大手自動車メーカーへ。給与は23万円/月から派遣会社が間をいくらとり、手取りは18万円程度（残業代含む）。勤務形態は2交代制。契約当初はAM8:00~PM5:00の契約だったが、毎日残業が2.5時間ぐらいはあり、PM8:00ごろまで働いていた。休憩も契約時には10時と3時に10分間、2回あると始めは言っていたが、入ってみると5分間休憩。10分のうち5分休憩、残りの5分でラインに戻る準備をする。結局5分の休憩しかない。昼も1時間といわれたが5分はラインに戻る時間とされた。大手自動車メーカーの仕事を派遣で半年したところ、勤務中にケガをした。ちょうど同じ勤務場所に親戚がいたので相談したところ、会社の上の人に言ったほうがいいということで、伝えるとかなり深く切っているので病院へ行くべきだという話になり、そのまま病院へ行った。筋肉や筋を切っており、しばらく手を動かすことができなかつた。仕事ができなくなり掃除しかできなかつた。病院の治療代はすべて会社がもってくれたが、労災の話はなかつた。仕事ができなないので辞めるようにと言われて辞めた。

その後仕事（ホスト）をした。友達がとびの仕事に誘ってくれたのでホストととびの仕事をした。ホストとの両立は辛くホストは4ヶ月で辞めた。とびの仕事は1年半続いたがヘルニアになり、動けなくなり辞めることになった。重いものを持ちたりすることが多かつたのが原因なのかひどいヘルニアになり、このまま続けると歩けなるといわれて辞めた。1週間ぐら動けずとてもはがゆかつた。それが20代半ばのとき。仕事はできななし、姉に迷惑ばかりかけた。一人でおきることもできず、結局プータロウになり姉に悪かつた。

姉には子どもがいる。世話になりっぱなしだし、子どもにも何も買ってあげられない。できることをし

てやりたい。それが人間としてそれが当たり前だと思う。だからできる仕事はしていきたいと思っている。当時は家に6万円入れていた。

その後再度、大手自動車メーカーへ。それから1年半、派遣で働く。自分の勤務場所ではブラジル人・中国人も含めて50人程度。そのうち正社員は20人。工場は第1~5工場まであって1,000人以上いたが、リコールの時、派遣社員から切られて500人は辞めさせられた。その後また新しく若い子を入れていた。退職金等はなし。普段はあるらしいが、リコールにより赤字のためか、なかった。リコールでまず一番にきられたのは派遣社員。納得がいなくて、上の人間に話をしに行った。「退職金や手当てなんかをちゃんとつけて年配の人に渡して辞めてもらい、若い子を入れた方がええ」と言いに行ったが聞いてもらえず、結局赤字のため若手が退職金や慰労金などなしに切られた。

その後、配管・鉄骨・とびの仕事ができる場所で働いた。住み込みではなく姉の家から通う。この仕事は休みがなくずっと働いていた。熱など体調が悪くても休めず使われつづける。Aさんは焼き鳥屋の店長のときまず従業員の健康を考えたのでこのような対応が本当に人として、従業員のことを考えているとは思えなかった。また、とびの親分は元やくざの人も多く手をあげる人たちも多い。従業員を人間として扱っていないし、どう思っているのかがわからない。このまま勤めても進歩がないと思っていた。ちょうど会社からもしばらく仕事がなくなるということを知ったのでそれなら辞めるといって大阪に出てきた。自分はここでは無理だと思ったら辞めて自分で仕事を探す。

Aさんは福岡にいるときからとびの仕事を他の仕事と掛け持ちなどでしている。重量とびの仕事で景気のいいときは日当が16,000円、安くて7,000円だったと。

「西成」は聞いたことがある。10代の頃大阪に来たとき、ホームレスが多くて驚いた。九州でも見たことがあるが大阪は多くて驚いた。ホームレスの人たちは自分(A)達ができないこともできることがあるし、同じ人間だ。駅の高架のところにかくさんの人がいた。驚いたが、自分にできることを考えた。コンビニなどでパンなどを買ってきて配った。16人ぐらいの人に集まってもらって「がんばって」といって渡した。他にもAさんは公園でホームレスの人たちが蹴られたりしていたので助けたと。Aさんはそういうのが本当に嫌だと言っていた。

地元福岡に戻ったとき、県に抗議に行った。「同じ人間なんやけえ、この世に生まれた人なんじゃけえ、命のあるかぎり生かさんといけん」。知り合いの県職員の人と話し合いながらすすめ、3軒ほどホームレスの人達用の施設をつくってもらった。ホームレスの人たちの方が今の若い子より真面目だ。若い子はお金さえもらえたらいいという考えがある。

自分の足跡を残したい。20代でどこまでできるか限界までやってみたい。ホストをして朝3時にはおきて新聞配達その後とびの仕事をするなど自分がどこまでできるのかできることをやってきた。大きい夢は自分で会社をつくっていろいろな人を雇いたい。ホームレスの人、やくざも、リストラされた人もOK。一人では何もできないから、支えあいたい。しかし、将来には夢と同時に不安もあり、「これから自分が本当に何がしたいのかわからない。本当に何をしたいのか、何が自分にあっているのかわからない」とも言っていた。

ネットカフェは福岡でも利用。また最近では大阪に遊びに来たときホテル代がもったいないからネットカフェを利用。居心地はよかった。

48. 男性 20代後半

Aさんはファーストフードの店にて配ったピラを見て連絡。現在は、大阪市南部のネットカフェに寝泊まりしている。

大阪府出身。高校卒業後から現在にいたるまで、短期的にいくつかの仕事に就いてきたが、どれもあまり長続きすることはなく、失業期間の方が圧倒的に長い。高校時代もやりたいことや、希望の仕事などはあまり思いつかなかった。

高校卒業後は家にいたが、初めて就いた仕事は、運輸関連の荷物の仕分けの仕事であった。広告を見て行った。勤めていた期間は、約3カ月。その後も荷物の仕分けの仕事を主にいくつかのアルバイトに就いてきた。時期は不明だがスーパーのお肉屋さんで品出し・販売のアルバイトを3カ月ほどした。その後、大手派遣会社Gの支店で事務のアルバイトをしていた。時給800円の1日8~9時間勤務であった。シフト制で週3回ほど入っており、一月に9万円くらい稼いでいた。ユニフォームは貸し出しだった。これと同時に、別の派遣の仕事で倉庫内作業の仕事を掛け持ちしていた。4、5カ月続けたが、両方合わせても収入は18万円以下であった。結局、時間的にあわなくなったので、G社の仕事を辞めた。最も長く就いた仕事は、倉庫内作業の派遣の仕事らしい。

G社の場合は、時間的な問題のために辞めたが、他の仕事は基本的に人間関係が問題となって辞めている。「しっかりしろ」等そのほか色々注意されるが、一生懸命やっているのに注意されると腹が立ったり、嫌になったりするとのこと。職場で友達もできるので、友達がいると辞めにくいと思うことはあるが、我慢しきれず辞めている。

失業保険をしばらくもらった後、失業期間が5、6カ月続いていたが、仕事が見つからないことを理由に親と揉めて今年の冬頃に家を出る。親は、子どもの頃は特に口うるさかった記憶はないが、高校卒業後から「しっかりしろ」など色々と言いだした。特に父親。「どつかれる」こともあるらしい。

失業期間中、家では音楽を聴いたり、スポーツを見たりして過ごしていた。広告や、情報誌以外にハローワークでも仕事を探していたが、なかなかないとのこと。条件は、場所(交通の便)と給料と保険を見ながら探しているらしい。できれば、経験のある倉庫内作業か、製造関係か。

2月の終わりに家を出て、約半年になる。最初、お金のあるうちはサウナなどに泊まっていたが、後の4カ月はほぼ毎日ネットカフェで寝泊まりしている。いつも使っているのは、大阪市南部にあるネットカフェである(ちなみに「他に寝泊まりしている人はいるか?」と尋ねると「わからない」とのこと)。個室、オープンスペースがあり、Aさんはいつもオープンスペースを利用している。ナイトパック5時間で490円である。ネットカフェでは、ゲームをしたり、調べ物をしたりする。仕事を探したこともある。シャワーはないので、シャワーを使いたい時には、サウナに行き、その時に洗濯もしている。荷物は買い物袋に入れた手荷物のみである。服は、すぐボロボロになるので頻繁に買い換えているとのこと。携帯電話も持っている。その支払いは、携帯会社の窓口まで直接行って払っている。だいたい月1万円くらい。食事は、コンビニでラーメンなどを買って食べている。1日1食の時もある。

収入は、月8万円程度。現在は、大手派遣会社に登録している。派遣会社に昼間携帯電話で連絡すると、もしも仕事があれば、次の日の集合場所・時間など連絡がくる。派遣会社の方から仕事がかかることは滅多にない。職場は毎回違っており、倉庫内作業や荷物の仕分けが多い。パチスロ機の解体、積み上げなどもあった。建設関係の仕事はほとんど経験ないが、1度だけ、マンションを建てる際のキッチン運び込む仕事をしたことがある。大阪や神戸で仕事をしている。神戸での仕事の方が若干多い。日給7,000円前後だが、交通費は自分持ち。例えば神戸まで行くと往復で1,500円くらいかかり、250円の保険と税金140円も引かれる。また、残業になるとその税金は倍になって280円引かれる。結局手元に残るのは5,000円程度。仕事も毎日あるとは限らず、「週3~4回あればいい方」とのこと。特に今月はキツイ(今日は夕方からイベントの片づけ作業に行く。17:00から23:00。それより遅くなるとタクシーチケットが出るとの

こと。明後日も仕事あり)。この中から貯金するのは無理であり、生活費が貯まらないことが求職活動をするうえでも大きな障害となっている。

ネットカフェに泊まるお金のない時は、ファーストフードのお店で時間を潰していた。店員には起こされる。これまでファーストフードのお店にすら入れない日というのはなかったし、「何かあったら困る」ので野宿は経験ない。公園で寝たこともない。図書館に行くことはあった。日中、仕事のない時は、仕事の情報誌を見ている。映画館の中のフリーのスペースで見ているらしい。「普通に映画館で」とのこと。特に注意などされることはない。

資格を取ったり、職業訓練を受けたりしたいとは思っているが、今は、仕事のない日もハローワークへは足が向かない。唯一持っていた資格であり、身分証明書となる原付の免許は、実家に置いてきてしまったので、現在は身分証明書がない。家を出て以降は、ハローワークには行ってない。ネットカフェに入れるのは、家を出る以前に作った会員証があったためである。住民票は実家。「せめて免許証だけでも取りに行った方がよいのでは？」と言ってみたが、どうしても実家には帰りたくないとのこと。家を出てからは全く連絡をとっていないし、親からも連絡はない。

当面の目標は、ちゃんとした仕事をして、お金を貯めてから実家に帰りたいと考えており、それまでは絶対に帰りたくない。もちろん不安はあるようだ。家を出てからは、連絡をとる相手も特にいない。職安以外に、仕事を紹介してくれるような人もいないし、今の状況をあまり知られたくないため友達とも連絡をとっていない。保証人になってくるような人も、両親以外にはない。また、相談出来る行政や、NPOなども全く知らない。住む所がないためお金が貯まらないので、職業訓練をしたり、寝泊まりするための施設などの支援が欲しいという。

釜ヶ崎も、聞いたことはあるが場所も知らず、当然炊き出しも利用したことはない。自立支援センターも知らないとのことなので、情報は伝えてきた。

家族は、大阪府の北東部に住んでいる。父親、母親と、妹がいる。誰とも連絡をとっていない。実家の暮らし向きについては、「そんなにきつくはなかった」とのことである。父親は、コピー機の営業をするサラリーマン、母親はパートをしている。学生時代に塾に通うことはなかった。

雇用保険、健康保険には未加入。年金についてはよくわからないとのこと。

現在の健康状態はよい。お酒も飲まず、タバコも吸わない。借金も特になし。

49. 男性 30代前半

シェルター入りを並んで待っているところを声をかけて調査に協力して頂くことに。Aさんは、基本的にはドヤ住まいなのだが、時々ネットカフェに泊まることがある。

Aさんは大阪府で生まれた。母親は病気がちで入院したりしていたので、彼が生まれて間もなく母親の実家のある香川県に移り住んだ。父親は造船所で仕事をしており、母親は最近まで医療関連の仕事をしていたという。母親は体が弱く以前連絡とったときは入院していたので今は仕事を辞めているかもしれない。両親ともに健在で、60歳を超えている。しばらく(ここ1年ほど)連絡をとっていない。弟がいる。弟は就職して働いている。

香川県内の高校を卒業後、地元の就職相談を経て、とある会社に就職した(正社員)。しかしその会社はすぐに辞めた。「あの頃のことはあまり思い出したくない」。正社員期間は2年くらいと話していたが、この頃のことだと思われる。香川にいる頃は運送会社の荷物の仕分けをしていたこともある。しかしその社員とケンカして辞めた(これが初職ですかとの間に、顔を曇らせて回答拒否)。香川にいた頃は一時

期全然働かなかった時期もあった。「『怠け』というか……働く気が湧いてこなくて」。実家にいたのだが、時々 A さんの状況に業を煮やして母親が「やいやい」言うこともあったという。しかし、家族との仲は特に悪くはなかったという。

働いたり辞めたりの繰り返しの中で、「地元にも仕方がない。外に出たいな」と思い、7年前、A さんは東京に向かった。東京に着いてから求人雑誌（フリーペーパー）で仕事を探した。アパートを借りる金もなかったので、住み込みの仕事を探していると、すぐに新聞配達の仕事が見つかった。「やってみたかったですよね」。荷物は実家から後で送ってもらった。その後 A さんは4つの配達所を転々とする。その間に居住地も東京から神奈川県横浜市へと移った。

4件目の横浜市での配達所を辞めた後、新聞広告で見つけた人材派遣会社に登録し、愛知県の自動車部品メーカー（自動車部品・AT トランスミッション部門）を紹介され、愛知県に向かった。待遇についてはあまり覚えていない。「日給…だったかな…？ 10,000円くらいだったかな？」。雇用保険はあったが、厚生年金には入っていなかった。健康保険は国民健康保険である。寮に入っていた。しかし、3、4年前、リストラされる（自動車部品メーカーにいたのはおそらく半年弱くらい）。クビになった後はしばらく名古屋で建設日雇に従事した。飯場にも入っていた。その頃名古屋では愛知万博やセントレアの需要があり、建設仕事は比較的多かったという。この頃にはファミレスで夜を明かすこともあったという。しかし、名古屋で仕事が減ったわけではなく「こっち（名古屋）じゃもうええかな」と思い、大阪に向かった。名古屋はまだ万博やセントレアの仕事があったので「大阪の方が仕事なかったんちゃうかな」。名古屋にいたのは6~7ヶ月くらい、もしくは1年弱くらいだという。A さんもそのあたりについてはあまり覚えていない様子だった。

今から3年前に大阪に来て、そのまま釜ヶ崎に向かい、しばらくの間はドヤに住みながら現金仕事をしていた。その後去年、大阪市北部の飯場に入る。その飯場には半年近くおり、住民票は今でもそこにおいてある。この頃からネットカフェを利用するようになった。使うのは休みの日の夜で、ゲームをしたり mixi をするために行くついでに泊まっていくのだという。

今年4月、ゴールデンウィーク前に仕事がなく、飯場で赤が出たので人間関係（労働者との）も悪くて「追い出された」。賃金は働いた日数分はもらった（トンコではない）。その前から仕事はあまりなかったのだという。その後釜ヶ崎に帰り、他の飯場を経て現在に至る。

東京と横浜にいた頃は新聞配達をしていた。仕事の内容について聞くと、「条件悪いですよ。拘束時間も長いし、安い」。A さんは集金はせず、配達だけだったという。月給は20万もなかったという。横浜で勤めた4件目の配達所はそこが借りているアパートに入っていたため、家賃が相当かかった。月50,000円。6畳の1Kである。

新聞配達は1日150件かけて2~3時間を原付や自転車（だいたい原付）で配る。夕刊は件数が少ないから1.5時間程度。チラシを挟む作業があるから時間がかかる。自動でやるところもあるが、「そんないいもんはないですよ」。配達を終えると当番で昼まで電話番（苦情係）をする。苦情はノートに書き留めてその地域を配達する担当者に連絡する。「だから（他の配達員に）嫌われるんですよ」。

新聞配達所は「半年いる人が珍しいくらい」なのだという。客からは様々なニーズがある。チラシを抜くとか時間指定（「日曜日は遅めに入れて」）とか玄関まで入れに来てとか。オートロックのマンションでのそうしたニーズは大変なのだという。そうした細かいニーズと配達の道順を、就いて2~3日で覚えることが求められる。入れ忘れも出てくる（不配）。一種類の新聞だけを入れていけばいいのではなく、営業所によっては毎日新聞や朝日新聞のように違う会社の新聞も取り扱っており、それにスポーツ紙等もあって、不配も出てくる。不配の場合、一件につき1,000円の罰金を科される。「だからみんな長続きし

ない。入れ替わりが激しい」。Aさんは4件目の横浜がもっとも長く2年間勤めた。

また色んな人が辞める理由として、経営者が変わることも挙げていた。「入ったところによその経営者が入ってきて、途中でかわった。それで古くからいた人が『合わない』と言って辞める人もいた」。

Aさんは先週まで名古屋の飯場に入っていた。1週間働いたのだが契約満期になる前に帰ってきた。その理由は聞かなかったが、手元に残った金はわずかだという。今月の収入は6万円くらい。「きびしい」。今日の食事もカップ麺と朝食べ残したパンである。食費にける金は一日千円もかけられない状態だ。風呂は銭湯かシャワールームを利用する。ネットカフェのシャワーも利用したことがある。健康状態はまずまずだという。ギャンブルはしない。「そんな余裕はないです」。酒はたまにビールを呑む。普通免許をもっているが、先日サイフを落としてしまい、手元にない。今年が更新の年なのだが、「11月までは大丈夫」。キャッシュカードについてはちゃんと手続きをしたという。

釜ヶ崎での暮らしについては、「他人のことを気にしないでいいのはいいけれど、(自分が) いるにはいるんだけど、浮いてる感じがして」。「最初はどうかと思ったけれど、慣れてしまうと怖くもない。物価も安く、金がかからないのがいい」。

Aさんはドヤ住まいか飯場くらしが主であり、ネットカフェはその合間に利用するくらいである。それもパソコンを所持していないからであり、ネットカフェは生活の中で必要な位置を占めている。パソコンをやりに行くついでに泊まって帰るわけである。大阪市内にあるネットカフェを利用したことがある。現在は大阪市南部のネットカフェが主である(店名はよくわからないそう)。パソコンではmixiで日記を書くことが主である。「コミュニティ」にも幾つか参加しており、母校のコミュニティでは、その頃の友人たちと偶然出会ったりするのが新鮮なのだという。「『今沖縄にいる』なんてわかったりしてね」。しかし、元々友人は少ないほうで、そうした人ともmixiでのつきあいに留めている。日記では「現実問題にはふれていない」。

パソコンは仕事探しには使わない。携帯電話はもっていない。「金払えなくなって止まった」。携帯で派遣会社等とのやりとりもできない状況にある。大阪に来た当初は職安や無料職業紹介所を利用したこともあるが、最近行っていない。「何年か前までは求人票には『女性のみ』って書いてたんだけど、それがなくなったんですよ。軽めの仕事を探して問い合わせ、女性が対象だとはじめてわかる。求人誌とかだったらイラストとかついていて何となくわかるんだけど、それがややこしい(女性を募集することの多い仕事に求職することが多い模様)。現在は求人情報誌かセンターで仕事を探す。最近現金仕事がサッパリだという。「カオツケができないんで」。飯場に入っても日給は9,000~10,000円だが、そこから飯代3,500~4,000円を引かれる。手元に残る金はいい時で12~3万円程度だが、そこまでいくことはほとんどない。「悪い時で7~8万」。今月のように仕事なくなって貯金もなくなると、シェルターを利用する。

市更相に相談に行ったこともある。そこでは「自立支援センターに入ってみんかー?」と言われた。Aさんは興味を示したようなのだが、「でも時間がかかると言われたので、そのまま」。

現在も横浜時代に消費者金融から借りた借金が200万円弱残っている。実家に相談しないのかと聞くと、「実家にも金借りっぱなしやし、金貸せとはよう言えん」。アパートを借りる際の保証人に関しても同様で、「(家族に) 頼れるかもしれないけど、でも今時保証人いらないところも多いから。実家には頼りたくないですね。それよりも今のままじゃ家賃さえもいけない」。

希望の仕事は、「...ていうか、何でも。でも前やっててうまくいかなかったのはやめようと思う」。それが若い頃やってた運送会社の仕分けなのだという。

現在不安なのは、「仕事をしていないことと、金がないことですね。求人て大抵『35歳まで』って書いてあるでしょ。そこ超えたら相当キビシくなるんで」。「今話題になってる大手派遣会社のやつを見ても

ね、とてつもなく安いじゃないですか。日雇も年をとるとね。常雇がいいです」。

50. 男性 30代後半

Aさんは千葉県出身。大阪に来て約2ヶ月。ネットカフェは、東京にいた時に頻繁に利用していた（特に川崎のネットカフェ）。現在は、シェルターに寝泊まりしている。

千葉県で高校を卒業した後、学校で紹介された千葉にある製造業の会社Xに正社員として約6年半勤めた。その会社は、現在、土地の半分を売り（半分はショッピングセンターになっている）、規模を縮小しているそうだが、当時、従業員は派遣も合わせて1,000人くらいの規模であった。そこでは、洗濯機の組み立てをしており、三交代制がとられていた。月給は、手取りで24万円。雇用条件などは良かったものの、東北地方に転勤の辞令がおり、辞めることを選んだ。Aさんの人生のうち、「大きな分かれ道の一つ」であったとのこと。

その後、半年間は失業保険で暮らす。続いて、派遣会社から派遣で、製造業の会社Yに勤める。そこでは、アルバイトとして3年間勤める。引かれるのは所得税のみで、月給は30万円くらいあったものの、勤務は三交代制の12時間労働だった。毎日勤務。社会保険はなし。

会社Yを辞めた後、土工・日雇いの業界に入る。「落ち始めたのはこの頃から」。アルバイトや派遣で会社に行ったり、「西成」から仕事に行ったりもする。

その後また東京に戻り、派遣で東京にある化学工場Zに勤める。水道管を作る会社だったとのこと。ここでは、正社員として約1年半勤める。社会保険、厚生年金にも加入。しかし、鉛も扱ったりする化学工場であり、においなど体が続かないので仕事を辞める。このときは、東京都で初めて自分で住居を借りて住んでいた（それまでは実家）。家賃は4万円。2年ほど住んでいたが、会社を辞めると家賃を払うことが出来なくなり、家を出ることになる。

その後はまた日雇いの仕事に行く。東京の日雇いに行く人は誰でも知っている派遣会社から、梅酒のビンを作る工場にも行った。20時から翌朝8時までという夜勤の12時間労働で、日給1万円。週に3日ほど働いていた。

X、Y時代は、実家に住んでいた。実家には、3~4万円のみ入れて、他は全部遊び（麻雀・パチンコ・スロット）に使っていた。また、21歳から23歳までの2年半は、結婚していて子どもも娘が一人いる。しかし、遊びすぎを理由に奥さんが怒り、子どもが生まれてすぐの頃に離婚する。Aさんの人生で「もう一つの大きな過ち」。現在元奥さんらは、東京都に住んでおり、元奥さんには内緒で、年に2回ほど娘さんと会っている。携帯で連絡をとっている。「10代半ばくらいで、生意気」とのことであるが話をする時は嬉しそう。娘さんと会う時は、それなりに「お金持っていないと」とのことであった。

不安定な日雇いの仕事をしていた期間は、住み込みの場合もあれば、川崎や新宿のネットカフェやサウナに寝泊まりに利用していたこともあった。Aさんは主に川崎辺りのネットカフェを利用していただ。1泊1,500円程度。当時は、食費に月3万円程度（1,000円/1日2食）、寝泊まりのために5~6万円かかっていた（1,500円/1泊）。ネットカフェは明るいので、サウナの方が寝やすいとのことであった。

サウナなどに泊まるためのお金がない時には、ファーストフードの店で寝ることもあった。また、東京発の夜行列車の最終に130円の切符で乗り込み、電車の中で寝ることもあった。翌日そのまま始発で東京に14時頃帰ってきていた。Aさんによると、土日はディズニーランドなどに行く観光客が多いものの、平日は7割くらいの人が同じように電車の中で仮眠をとる人たちだったという。そのため、指定席になったとも。電車の中は、「洗濯していないにおい」で、すごかったらしい。

大阪に出てきて約2ヶ月である。今回の来阪は、4回目。川崎辺りでも釜ヶ崎の情報は入る。これまでも、会社勤めを辞めて仕事がない時に「仕事があるから」というので大阪に来ていた。初めて来たのは、5、6年前。その頃もすでに仕事は多くなかったが、それでも正月や盆といった時期には「そこそこあった」とのこと。仕事で神戸に行ったりもした。大阪に来た時は、だいたい1~2カ月滞在していた。センターで仕事がない時は、バイト・人材派遣・友達のつてなどで仕事をしていた。

6年前に両親が千葉から実家の宮崎へと戻り、現在では宮崎に家を構えているので、実家との行き来の都合上、大阪に来ているが、もし実家が九州になれば、今、大阪には来ていないだろうとのこと。両親は、千葉でも宮崎でも畳屋をしていたが、高齢になったことなどから約5年前に店をたたんだ。30歳の頃、約2年間ほど畳の運搬などで店を手伝った経験はあるが、Aさん自身は、畳屋の仕事は出来ない。「もし畳屋の仕事ができれば食っていく分くらいは困ることはなかつただろう」とのことだが、Aさんは、基本的には会社勤め（製造業関連）を選んできた。今後も会社勤めをして自立していきたいという。

2カ月前に7万円ほど持って東京から大阪に出てきたが、今回大阪に来てからは、一度も仕事に行けていない。こちらには、知り合いの手配師も数人いる。かつて仕事があった時は「兄貴兄貴、現金あるで」と声をかけられていたので、仕事さえあれば今でも声をかけてくれるはずだが、仕事がない。

親にも仕送りをしてもらった。その時は銀行や郵便局を使う。実家の方では、おそらくAさんが今大阪にいることはわかっているだろうとのこと。家族との関係性は良好なので、最終的に実家を頼ることはできるだろうが、この年齢になって親に頭を下げて帰ることはしたくないし、特に今は何らかの理由があって、一年間は実家に帰ることができないらしい（「母親が具合悪くて、まあ色々あって」とのことだがそれ以上は話してもらえなかった）。連絡だけは現在も内緒でとっている。

サウナやドヤに泊まったりしていたが、現在ではお金もなくなりシェルターに泊まっている。シェルターにはすでに10日ほど泊まっている。特にシェルターにおいて耐えられない時は出て行って、ミナミのファーストフード店で過ごしたこともある。完全な野宿、路上で寝た経験はない。

今もっとも困っているのは、仕事がないことと家がないことであるが、今後は、できるだけ早く自分で仕事を見つけて自立して落ち着きたいと考えている。これまでは、出身地であり、友人も多い千葉で働きたいと考えていたが、最近では、仕事さえあれば大阪でもいいと考えている。千葉に未練はあるものの、結局どこに行っても一からのやり直しであること、また千葉の友達でも多くがすでに結婚して落ち着いた生活をしており、自分の状況とは「天と地ほどの差があって」会っても肩身が狭く落ち着かない。自分が自立さえ出来ればどこでもいいので、まずは早く落ち着きたい。

また、いくら「仕事」といっても日雇い派遣の仕事は嫌である。安定した収入が確保出来ないような仕事は考えられない。特にアンコ（建設日雇い）は嫌だとのこと。「西成」の労働者のような生活スタイルには絶対に馴染みたくないし、「馴染まない」。日雇いが嫌なので、派遣会社にも登録していない。特に大手派遣会社などのサービス業関連の派遣会社はもつてのほか。やはり（製造業関連の）会社（工場）勤めをしたい。

まずは、少しのお金を貯めて、住民票を動かし（現在は宮崎にある。取り寄せ可）、職安等で仕事を見つけないかと考えている。現在は、求人情報誌などで仕事を探している。職安には行っていない。「家がない」こともあるが、何より東京と比べると大阪ではどのように探せばいいかがわからないからである。職安は「あいりん」の職安以外、場所を知らない（職業紹介はない）。しかし、相談できる行政やNPOなどは全く知らない。友人・知人もほとんどが千葉なので、大阪には頼れる人もいない。自立支援センターについても知らなかったが、「できればお願いしたい」とのことであった。

現在は、雇用保険にも医療保険にも年金にも加入していない。正社員時代は、厚生年金も加入していたりしたこともあるが、4年前くらいから支払っていない。トータルで6年半くらいのブランクがあるが、早くそれを全部支払っておきたい。

お酒はあまり飲まない。夏の暑い日に缶ビール1本飲む程度。タバコは2年前にやめた。なのでマクドなどでは、においがつらい。ギャンブルはスロットのみ。麻雀もあるが、お金もないし、今はやれない。たとえやったとしても「はまることはないだろう」とのこと。

借金は、15年ほど前に150万円ほど作った。街金から、小口で50万円くらいずつ何口か借りた。もはや時効だろうから、住民票を動かしても問題ないとのこと。

今は、手と足に怪我をしているのと、扁桃腺が少し腫れているとのことだが、それを除けば大きな病気や怪我はなく、健康状態はよい。手と足は、転んだ時の傷なのか、化膿してひどく腫れており、NPOで手当てした。足は歩くのも痛いほどで、手も腫れ上がっており、仕事をしようにも重い物などとても持てない状態。前日も（センターかどこかで？）尋ねてみたところ、市更相などに行くように言われたが、「西成」についても詳しくは知らないので、何のことなのか場所もよくわからなかった。

51. 男性 40代前半

毎日のように、ネットカフェ等を使っている。以前は、大阪市北部のターミナルのネットカフェを使っていたが、閉店したために別の店を使っている。客の中に、前の店でよく見た常連そうな人もいる。本人曰く、料金は他と比べて安い。メール会員に入っていて、10%引かれ、ポイントがたまっていくらしい。ネットカフェを使うのは、睡眠のためというより、夜すごす場という感じで使っている。

ここ1ヶ月近くは、仕事をしていない。収入は、パチンコ店のメダルを拾い集め、換金している。以前仕事をしていた時には、パチンコにも行っていた。大阪市北部の人の入りの多いパチンコ店に行くことが多い。朝の早い時間、夜の遅い時間などの人の入りが少ない時間帯をさけ、一店舗に長時間いないようにして、スロット台の下などに落ちているコインを数枚集めていく。一日6~7店舗を回る。同じ店に時間をかけて入ることもある。ある店では、コインを拾い集めていることに気づかれ、回収されたため出入りしていない。店によってコインの換金率が違うため、率のいい店を最後にして換金する。違う店のコインは、最後の店のスロットに入れ、返却ボタンを押し、その店のコインに変える。一日1,500円~2,500円くらいの収入になる。換金の際に余ったコインは翌日にとっておく。日中にパチンコ店のトイレの便座を下ろし、座って寝ている（経済的にネットカフェなどが使えない状態になった場合でも、夜寝ないで済むように、睡眠の時間帯を逆転させている）。クーラーは効いていて、おしぼりもあり、音楽でいびきをかいていてもわからないだろうから居心地はいい。一日二食ほど食事はとる。ナイトパックの時間帯に合わせて、ネットカフェを使用し、わりと規則正しい生活のリズムになっている。

大阪府北部の出身。高校を卒業後、大学経済学部で夜間部に進学する。昼は、大手学習塾の子会社の倉庫関係のアルバイトを行う。3年ほどアルバイトをし、その後、正規の社員（大阪勤務）として採用される。その会社で7、8年勤める。その間、実家から社宅に生活の場を移す。大学には、6年ほど在籍したが、8年で卒業できそうな見込みがないことより、中退する。20代半ばに結婚する。父親には相手の人柄（雰囲気）などのことで反対された。その会社では、転勤があり、埼玉に4年ほど、その後、広島で1年ほど勤める。

妻は大阪から出たことがなかったため、埼玉勤務の辺りから少し精神的におかしくなってくる。広島に勤務していた時は、所長となっていて年収600万円くらいはあったが、転勤によって妻の様子がおかしくなってきた事（子どもの面倒も見ない）を社長に相談した。その時、常務に相談せず、社長に相談したこ

とから、常務との折り合いが悪くなる。そして、職場にいづらくなり、常務から退職も勧められ、自主退職という形をとって辞める。辞める時は、そんなに先の事は心配しなかった。

次に、大阪府内の運送業の会社に正規社員として就職する。ここでの仕事が一番きつかった。関係の機関に変則労働の届けのような書類を出させられ、朝の5:00～夜の11:00ごろまで働いていた。残業手当は出なかった。月19万ほどの給料で、アパートを借りて生活していた。宅配が夕方頃に終わるが、その後、引き取りの仕事があった。角材や100～200kgもある鉄線など（大手の会社が宅配で扱わない物を宅配として運送していた）を一人で運んだりした。運送のトラックは古く、クラッチの調子などが悪くなると自分の給料で修理させられた。重労働のため体を壊し半年ほどで辞める。最後の月の給料は半分にされた。

その後、求人広告で大手精肉会社の子会社に事務職として正規に就職が決まる。2000年問題の前で、コンピューターも少し扱っていた経験があり、気に入られた。小さい会社で早い時期に係長になる。この会社に入って3ヶ月ぐらいで、大阪府北部の辺りで中古マンションを購入する。1千万弱で、頭金100万円を払い月々2万円ぐらいを払った（本人曰く、よく銀行がローンを組ませてくれたと思う）。ここを辞める頃に妻を大阪の実家に帰す。二人子どもがいたが、その子は自分で引き取った。子どもの事もあり、自分も大阪北部にある実家に帰ったが、父との折り合いが悪くなっていく。父は、早期退職し、事務所を開き、実家の一部をその事務所に使おうと考えていたが、自分が帰ってきたために、マンションを購入して事務所を開くことになってしまう。母親との折り合いはそんなに悪くはなかった。子どもは母親が見てくれていた。その後、実家を売ってもう一つマンションを購入し、今は父と母が別々に住んでいる状態になっている。

大手精肉会社の子会社を辞めてから、大手派遣会社の仕事をした。派遣で行っていた「運輸会社」から直接声をかけられ、倉庫の仕分けや梱包のアルバイトをするようになる。2年ほどやっていたが、仕事以外の事でケガをしてしまい、辞めるようになってしまった。派遣の仕事は3年ほど行った。派遣で200～300回は仕事に行ったので賃金ピンハネ問題になっている金額を返してもらえそうである。登録する派遣会社には連絡をとった。

派遣の仕事をやらなくなってから4ヶ月ぐらいパチンコ店のコインを拾い集めて生活をしていた。その間、手配師から声をかけられていた。そして、大阪市北部にある建設会社に住み込みで働くようになった。食・住付であった。前借ができ、タバコを一日、1箱支給された。13日くらい働いたが、仕事中にケガをし、2週間くらい部屋で休んでいた。結局それで辞めることになるが、食・住代、前借代、タバコ代など引かれてもらったお金は1万円だった。それぞれにいくら引かれているかは知らない。仕事の日当もはっきり聞いていなかったが、後で聞いた話だと一日7千円だったそうである。

建設会社を辞めてから現在のコイン生活を行っている。とりあえず、何とか一日生活ができているのでそんなには困っていない。できれば、住み込みで生活できる所に勤めたい。

購入したマンションは、お金が払えなかったため、競売にかけられた。残ったお金はそのまま払っていない。妻とは数年前に正式に離婚した。子ども二人（現在、中学生）は2年ほど前から施設に入っている。子どもの事は母親が見てくれていて、何年か会っていない。来年は、高校となるし、子どものことは心配である。

52. 男性 20代後半

現在の寝場所

あいりんシェルター

経緯

① 就職相談に来たところを聞き取り。昨年 11 月にも就職相談に来ており、NPO 釜ヶ崎の福祉相談にも何回か訪れている。

② 福島県で生まれ、高校卒業するまで福島県にいた。両親はおらず児童養護施設で高校卒業まで育った。そのため、兄弟がいるかどうか分からないと話していた。

③ 療育手帳の B2。20 歳頃手帳の交付を受けて、その後紛失したが、自立支援センターに入っていたときに再発行してもらい、現在は持っている。

④ 高校は普通科、高校卒業とともに地元では就職せず、東京に行って仕事を探した。東京に行きたかったからというのが理由で、東京に行った後にハローワークで探して派遣会社で働くようになった。派遣会社といっても大手ではなく個人でやっているとのことで、会社の借りたアパートに住み込みで、物流のターミナルで商品の仕分けの仕事で 3~4 年働いた。時間給制で 900 円~1,000 円。早出のときは午前 8 時半~午後 5 時半だが、残業で 7 時~8 時までではしていた。遅出のときは、昼頃から夜 8 時~9 時まで。週休 2 日だが、社会保険に入っていたかは分からない。「健康保険証をもらったか」と聞いても「よく分からない」と答える。弁当代がいくらかは覚えていないが結構高かったことは覚えており、寮費も引かれて手取りは 1 ヶ月に 10 万円あるかないかだった。

⑤ それでは生活がきついで、20 代前半にやめて、誘われて住み込みで 3~4 年ホストをした。結構金回りは良かったといっているが、ホスト家業は店の入れ替わり（開店したりつぶれたり）が激しいので、続かなかった。

⑥ ホストを辞めた後、埼玉や東京で 24 時間の一時保育の保育所で働く。ハローワークでパソコン検索して見つけた。1 年契約で時給 750 円~800 円。2 年間で 3~4 箇所働いたが、チェーン店の名前は覚えていない。社会保険はなかった。

大阪と東京の往復生活。漫画喫茶⇄野宿⇄施設。

① 水商売で働いていたときに仲良くなった客の女性が大阪に住んでいたため、時々大阪に遊びに来ていた。その人が「大阪は住みやすくいいところだ」といっていたので、保育所をやめた後、数万円もって大阪に来た。仕事や住居のあてがあったわけではないが、「大阪に行って住もうかな」と思った。

② 2~3 週間ほどカプセルホテルや漫画喫茶を転々として寝泊りしていた。大阪市内や兵庫県など数箇所の数店舗に行って泊まった。漫画喫茶はナイトパックで 1,000 円くらい。大阪市南部の 24 時間のファーストフード店も安いので何日か夜を過ごしたことがある。仕事は探したがなかった。金が底を尽いてしまったので野宿することになった。

③ 初めての野宿は、大阪市南部のターミナルで数日間。野宿している人が教えてくれたので、ダンボールで囲いをして寝床を作った。数日後、巡回相談員が廻ってきて、自立支援センターを紹介してくれたので、3 ヶ月間自立支援センターに入った。数社の面接を受けたがすべて不採用だったので、センターを退所した。このときは期限満了と本人は言っていた。

④ 3 ヶ月間タバコ代をためていたのので、その金で東京に行って新宿などで野宿生活をした。東京にいたときに 3 ヶ月間ほど宿泊施設に入っていたが、「年寄りばかりであわなかったので出てきた」。1 室 6~8 人の大部屋で 2 段ベット。

⑤ 昨年、やっぱり大阪のほうがいいと思って戻ってきた。すぐに野宿したが、「西成」はこわいので大阪市南部のターミナル周辺でした。何日かして、何も食べていなかったのでめまいがして倒れて救急車で病院に運ばれた。近くに交番があったので、交番から呼んでくれたと思う。病院に巡回相談員が面接に来

て、三徳寮のケアセンターに移り、再度自立支援センターに入った。

⑥ 自立支援センターは「勝手に出た」自己退所。その後また東京に行く。東京には3ヶ月間おり、この間は求人誌で探して登録派遣でのべ30日間ほど働いた。会社は1社だけに登録し、物流の仕分けの仕事をした。時給で900円～1,000円。最初は交通費が出たが、後のほうは出なかった。携帯電話で自分から連絡したり会社から連絡が入ったり。この間は新宿池袋渋谷などの漫画喫茶に泊まっていた。ナイトパックで900円くらい。店の数泊まっている人の数は、大阪に比べて格段に多い。

⑦ その後年末にまた大阪に戻り、更生相談所に相談に行き一時保護所から別の施設に移った。イヤになって春には出て、また東京に行った。3月か4月頃。野宿をして、炊き出しとかで食いつないだ。仕事はしていない。新宿の福祉事務所に行って「東京でも仕事はないし、大阪に戻ったほうがいいかな」と相談したら、「高速バス代を出すから大阪に帰ったほうがいい」とバスの切符を買ってくれたので、また6月頃に大阪に戻ってきた。

今後の希望

① 借金はない。携帯電話は今も生きている。子供の頃から施設で暮らしてきたから施設での集団生活はイヤだといっている。仕事が見つかったらアパートで定着して暮らしたい。仕事は慣れているので物流関係がいい。

② 現在はシェルターと友人のところに泊まっている。

53. 男性 30代後半

Aさんは、学校を出てから運送会社に就職。運転助手を経てドライバーとして16～17年ほどその会社に勤める（正規雇用）。2～3年前からセールスドライバーとして営業力も求められるようになってきた。これまでも営業は求められたがそれほどきつくなかった。営業も含む仕事になってからはチームを組まされた。成績は給与にも反映されるのでチーム内でも差がつき、できるやつにおんぶになることがとつてもつらかったし、それがプレッシャーになった。いずれリストラでクビになるかも、という恐れがあった。それなら自ら辞めようと思い、辞めた。今はどこの運送業者にいっても営業をしなければならないのもうドライバーはやりたくない。体力的なことは大丈夫だけれども営業は苦手なので、それも含めたセールスドライバーはやりたくない。当時の手取りは15～22万円で荷量の差により変動があった。

ネットカフェは週4～5日、ナイトパック（6～10時間）を1ヵ月半前から利用している。現在利用しているネットカフェは、ここ以上安いところはないのでここしか使わない。シャワーもあるし、掃除もちゃんとしているので使いやすい。サウナやビジネスホテルは高いので行かない。ネットカフェは料金も安いし、チェックインしてもその都度氏名等書かなくていいからいい。また、寝るところにはこだわらない。布団がなくても気にならないし、どこでも眠られる。とりあえず寝られればどうでもいい。これまでトラック内で寝たりしてきているのでどこでも問題ない。これからの季節は野宿できると思っている。

派遣登録は現在1社のみ。携帯はとまっているので事務所に直に行き話しをする。昼ぐらに行き、夕勤一夜勤の仕事を探してくる。朝行くときもあり、そのときはだいたい2日後の仕事を探しに行く。仕事はピッキングや運送会社の仕分け。夜勤は2時から23時までの実勤9時間6,500円（源泉徴収済）で毎日ある。3月から派遣をはじめたが仕事の量は波がある。3～4月は引越しが多く5月は少なかった。引越しは実勤7時間で7,000円～8,000円。現在1日の収入は6,500円、支出は職場までの交通費、タバコ代、食事代、銭湯代合せて2,000円弱。それに加えネットカフェ代が1,000円。食事は100均やコンビニで買う。仕事は1週間働いて日曜は休む。身体は元々強いので今は健康であるし体調はいつもよい。だか

ら、今もやっていける。

Aさんは、1ヶ月前までは家を借りており家賃は43,000円だった。家賃が払えず住むことができなくなったとき、役所には行かなかった。行ってもどうにもならない。

もし今就職をしても目の前の生活が成り立たない。就職してしまうと給与は1ヶ月後に入ってくるので生活できない。就職するなら2か月分の生活費（家賃4万円×2ヶ月＝8万円、1,500×60＝9.0万円）を貯めておかないとだめだ。そう考えるとこういう生活をしている人が就職するのはしんどいと思う。家を借りても払っていけない。また、家を借りるのも怖い。保証金なしのところは怖い。今度借りるときは保証金があるところを選ぶようにする。保証金を払うところは何かあってもすぐに追い出されない。それには最低20万円必要になる。そんなお金はないし、何ヶ月無理して働いて貯めて家を借りる必要が今はない。結婚もしていないし恋人もいない、家族もいないのに家はいらぬ。

生活や仕事を国が面倒見てくれるかといったらみてくれない。施設をつくって一時的な面倒は見てくれるけどそれが終わって出たあとはフォローがない。施設に入ったとしてもいつかはでなければならず、その期限が強迫観念に変わると思う。

調査員の「大阪市の施設（自立支援センター）が利用できるのであれば利用するか」という問いには、Aさんは「おそらく使わないだろう」と。今の生活は縛りが無い。生活を安定させるために入ったとしても自立支援センターで生活することは半年後には金を貯めて出なアカンという強迫観念がでてくる。自由が削られてしまう。それだったら入所しても結局一緒である。ネットカフェや24時間営業の飲食店で生活するようになるだろうと思う。施設に入ると、ゆとりがなくなり「早く金を貯めなアカン、帰宅も早くしなアカン」と縛りがでてくる。また集団生活でおりあもつけないといけなくなる、だったら入らぬ。

正規で就職したとしても自分だと条件が限られてくる。夜勤を入れて手取り15～16万と考えたら、派遣で6,000円×25日＝15万の方がいい。正社員は給与から税金も引かれて手取りも少なくなる。保証はないけれど手取りではだいたい一緒になるなら派遣のほうがいい。

生活保護を受けながら再就職へは考えられないかという質問には、生活保護を受けると贅品はだめ、貯金もできなくなると思いこんでいる。保護はええけどそういうのができないし、縛りがでる。それなら受給したくない。テレビや車バイクなんかの娯楽品は使えないのは困る。国は生活保護受給者・ホームレスを把握しただけで、そのような状態の人たちをなくすために何かしているのか。実際にホームレスの人たちのことを考えていないのではないか。逆に、ホームレスの中には不動産屋と組んで家を借りる敷金だけもらって逃げる人もいるんじゃないか。

Aさんの両親は離婚している。離婚の際、父親は母親に「生活保護を受けたらどうか」と言ったが母は受給すると貯金も生保（生命保険）もかけられないなど縛りがでることが嫌で受けなかった。

行政は、働けと働けと尻をたたくが給与を2～3万円上げることがどれだけ大変かはわかっていない。

自分が今から就職するには年齢で難しい。派遣は縛りが無いけど正規の仕事は35歳を過ぎるとなくなる。大型免許をもって長距離の仕事ができるのならばいいけどもっていないし、あえて40歳以上の人間を採用することはない。バブルのころ、求人はあったけれど今は雇ってくれという若い人の方が多から会社も選んで若い子をとる。そうなる就職は厳しい。縛りや残業などを考えなければ働けない。だけど、もし縛りや残業を我慢してもそれで生活できるのかはわからない。今の世の中、就職しても安定はないから。

最近の企業は派遣よりになっているし、派遣がいなければ工場は回らないが登録しているだけの派遣労働者なので強い発言権はない。しかし、正規雇用で長時間拘束され安い賃金で使われるよりも今の派遣労働の方がましである。また、正規で就職しても給与が安いからといって二次就業が認められていない

め、加えて派遣で働くことはできない。今は休みなしで働こうと思えば働けるが正規になるとそれはできなくなる。そういう面で就職は迷うとても迷う。よっぽどいい条件がないと正規では働けない。

実家の母のところからは通えないのかという質問に対しては、今更こんな状況で顔を出せない。しばらく顔をだしていないし弟にも言えない。家からは消えるように出てきたからほとぼりがさめるまで帰られない。

以前住んでいたのは大阪府北部。ハローワークは遠かったので毎日通うと交通費がかかるので、だから行かずに派遣を شدした。ドライバーを辞めたときは失業保険ももらっていない。手続きしてから4ヶ月もかかるので面倒くさかった。受給する資格があるのになぜ受けなかったと親に怒られた。

派遣は年齢の縛りがないからやろうと思った。これまでずっとトラックのドライバーをしてきたのでつぶしがきかない。派遣はいろいろなことも体験できる。これまでの仕事はラインで容器に印刷するものや、ピッキング、引越し、運送会社の仕分けなどをやった。今月はずっと同じところにはいつているが、この仕事も今はあるがこの先はわからない。

Aさんは、北摂でしか生活をしたことがない。住民票も大阪府北部にある。

正規の仕事での求人を見るが、たいがい見込みの金額と実際違う。求人に記載してある最大の支払い金額は残業があったときの金額などが書かれていることが多い。実際掲載されているより2/3ぐらいしかもらえないと一度就職をしたという派遣の仲間にいろいろきいた。派遣は時間の縛りがなくて楽だ。正規で働いているときは朝から晩まで何のために生きているのかと思った。今はしんどかったら休める。だが休むためには倍の蓄えが必要になる。

お金が貯まっても家は借りない。わずらわしさがなくてネットカフェを使う。家だと家賃を期限内に払わねばならないし、捻出できるかどうかかわからない。払えない場合困る。今就職しても年齢的に高収入は望めないので手取り14~16万円だと思う。

世の中、昔は「住」だけは守って「食」を減らすというカタチだったが、住居があれば税金も国からとりにくし、借金とりも転居したらすぐに見つけてやってくる。ホームレスは住居がないからとりにくい。

国が調査してどうするのか、何を考えているのかわからない。大阪に無料の施設をつくるのか、それともどれくらいの間がこうなっているのかを調べて、どれだけの人が税金を払っていないかを調べているのか、考えていることがわからない。

今年免許の更新があるのでそれは行くようにする。現在はゴールドなので更新したら5年は使える。免許と住民票はまだあるので免許の更新だけには行きたい。

またAさんは債務がある。200万円前後の利息を含めてある。引越しをすると住所がばれるので住所不定がいい。親や友達にも相談できない、していない。相談したって、貸す金はないから。

54. 男性 30代後半

ジャージによれよれのTシャツをきて疲れ切った顔をしていた。バッグは一つだけ持って。

もともと大阪府北部の生まれ。その後大阪市内に引っ越してアパートをかり、また出身市にもどってきた。

「西成（動物園前）」は知っている。「萩之茶屋はやばいところだ」。

高校を卒業してすぐ就職した。定時制の高校に通いながら昼間は八百屋でアルバイトをしていた。

今の仕事は2、3年前からしている。それまでは接客、販売の仕事が主であった。

今は小さな派遣会社に登録している。隣接の市にあって個人経営のようなところ。下請けの下請けとい

うかんじ。業務請負の形ではないかと思う。大手家電メーカーで日給1万円、いろいろひかれて手取りで8,000円。12時間（うち2時間休憩なので実質10時間労働）の場合、夜勤で10,500円～11,000円、時給1,000円ちょっとくらい。健康保険も年金も何の保障もないけど。

ほかにも派遣会社に登録はしている。大手派遣会社もしていた。今はここともう一カ所登録しているだけ。

家は大阪府北部にある市営住宅。シフトの調整で家に帰るのがめんどくさいときなど、1週間に2、3回ネットカフェに泊まる。アパートもひとりで親がいるわけでもないので気兼ねなく泊まることができる。親は大阪市内にいる。

ここ2年はずっと同じ派遣先で働いている。スポット求人に入って、現場で実績をつんで大きな会社に入ることができる。最初から長期のところは考えたけど無理だった。請負として入ったとしても辞める1ヶ月前には言わないといけない。会社から首をきるのは簡単なのにね。遅刻を1回でもしたらクビ。体調が悪くて休みますと前もって連絡をしても次から代わりはいるからいいと言われる。「そいつやないと仕事ができないわけではないから」。そのため体調が少し悪くても無理して仕事に行く。知人でアルバイトをかけもちでして、昼の引っ越しの仕事が長引いて夜の派遣の仕事が遅れると連絡したにもかかわらず、ライン（長期）の仕事からはずされた。派遣といえば聞こえはいいが、もとやくぎがやっていたことをしているだけ、搾取しているだけである。今はしょうがないとあきらめている。いろいろ人には事情があるにもかかわらず、休んだら終わり。

スポット求人でも最初年齢ではねられた。せいぜい30歳までですよ。どんなに体力があってもはねられる。40歳でもO.K.と書いているけど無理。

朝の8時集合なのであるが、7時には会社に着いている。派遣会社の人が人数のふりわけをするのだが、だらだらして結局1時間事務所で待たされる。段取りが悪くてイライラする。工場に社員は来ているけれども、何にせよ効率が悪い。仕事の現場（工場）にいくと、社員とリーダーが指示をしてくる。朝のふりわけが遅いのは外の業者とのかねあいがあるからかもしれないけれども段取りが悪い。

もう2年間働いているけれどもまだまだベテランではない。特殊技能もない。プラスチックの成型は1年間したこともある。オートメーションのコンベアだから、何かあった場合は正規職員の人がする。今は液晶画面のインクの色むらがないかどうかパーツ（チップ）をみている。

企業にしたら同じ働くのであれば安い方、社員ではなくて派遣の方がいいのではないかな。都合もいいし。企業と請負の温度差はあると思う。

その工場にはうちの派遣から15人入っている。朝・晩両方入れると30人くらいいるのではないかな。外の派遣会社からも仕事にきているけれども、大きいところと競合している。だから小さい派遣会社は少しでも安い値段で労働力を提供する以外ないのではないかなと思う。

派遣から作業服は無償で借りている。作業靴は1日200円かかるので1,980円で安いところで購入した。今のところは保険料など払っていないし、天引きされていない。大手の派遣は補償費としてとられるみたいだけど、もともと給料の設定のちがいがから、大手は8,000円、今のところは7,500円。所得税をひかれるだけ。保険関係もよっぽど長く働いたらかけてもらうこともあるけれども、働きはじめのときにしっかりした雇用契約をしていないので。

正社員の仕事と言えば、高校を卒業して八百屋で働いた。この仕事は半年間休みがなく、12時間休みなしで働かなければならず、体調を崩して辞めた。その後しばらくは自宅療養をしていたが、その後工場に働くようになる。工場に行くようになった最初の頃は、技能を身につけようと思わなかった。職安で技能講習があるのであれば受けてもいいかなと思う。正社員で働こうという意欲はあるけれども、12時間働く

のはしんどい。

現在のシフトは朝 10 時から夜 22 時まで。それが 2 週間続いて日曜日休みでシフトが交替になり、夜の 22 時から翌朝 10 時のシフトが 2 週間続く。2 週間に一度の日曜日でシフトが変わる。

体はきついけれども少しずつ慣れてくる。すわって目視で機械を使って検品する仕事で、そんなに神経を使う仕事でもない。ラインではないのでできた製品を 100 ずつためて整理して次のところに流していく。

食事は自分もち、晩ご飯、昼ご飯は会社で食べる。自分の家で食事をとることはほとんどない。ほぼ 100 % 外食である。休みの日は前の晩から飲みに行って昼まで飲んでいることもある。中途半端な時間を調整するためにネットカフェを利用しているだけである。ネットカフェでは眠れないし、体を休めることもできない。少し休憩してシャワーを利用しているくらいである。

父親はすでに亡くなっている。母親は大阪市内で結婚した妹と一緒にいるのでさびしくないと思う。全然連絡はとっていない。

この仕事をずっと続けるつもりはない。体がしんどいので。これから先どうしたらいいのかと思っているが、先立つものがないのでどうしようもできない。この仕事ではお金がなかなかたまらない。貯金がなかなかたまらない。仕事はほぼ毎日あるが、派遣にいたら不毛である。結局社員になることはないし、給料があがることもない。

母親が八百屋で働いているときに国民年金をかけていてくれた。営業の仕事をしているときは、厚生年金に加入しているときもあった。

現在、1 ヶ月の稼ぎが 26 万円で、市営住宅の家賃が 2.4 万円、食費が 1 日 1,500 円として 4.5 万円、貯金を 10 万円くらいしている計算にはなる。

2 年同じところで働いて顔見知りはできた。名前はしらないが顔は覚えている。悩みを相談するような相手ではない。自分は誰かと群れて生活するわけではない。自分ひとりであることが大事なのである。基本的に人に何かを頼むことがあるわけではない。ネットカフェでも顔見知りはいるが声をかけるようなことはない。声をかけるとしたら店員だけ。利用するのは専ら個室である。個室でないと行く意味がない。オープン席を利用するくらいなら喫茶店で食事をとっているほうがいい。他に利用したことがあるのはネットカフェ Q。ただネットカフェ Q は漫画がほとんどなく、ダーツとかビリヤードとか日焼けサロンなどいらないものが多い。それだったら一つのブースをおおきくしたらいいのと思うことがある。シャワーは必要だと思うが。ネットカフェ P をいつも利用している人？ いると思うけど、まわりのことをあまりみないからわからない。お互い干渉されたくないし。ネットカフェを利用して 1 年くらいになる。ここ最近大阪府北部の駅にも漫画喫茶ができてはじめた。

販売（商売）をしていたころは忙しくて利用したことはない。

現在体の調子は悪くない。隙間産業で搾取されているわけだから、派遣に不満はあるが、次の仕事をみつけるための準備期間である。

将来やるのであれば営業はいまさらと思うので商売（自営）を考えている。以前やっていた魚屋さん？ 例えばスーパーの鮮魚は給料が少なく新卒を希望してるし、何人でも人が来るので難しい。個人店では利益は高いが食品の足がつくのが早いので収入は少ない。賞味期限が長くて人件費が安い商売、99 円ショップみたいなを考えている。99 円ショップなら年間の広告費もいらないし、お客さんが 1 個だけ物を買うようなこともないし、客数も多いし。安売りのスーパーも考えたが親方がやくぎなのでやめた。

いずれにしても商売をするには貯金をためて資金を準備しなければはじまらない。

「ネットカフェ難民」という言葉が悪い。自分のお金でやっているのだからかまわないのではないか。

マスコミが勝手に作りあげているだけである。

55. 男性 30代前半

8人のネットカフェの客に早朝から声をかけて、確実に対象者と思われる人は3人いた。1人は身長170cmくらいの男性で、水色のポロシャツにリュックサックという格好。鼻に吹き出物が沢山できて赤くなっている。ネットカフェにはほぼ毎日泊まっているとのことだが、元気もなく「もう疲れているんで」と断られた。20代前半と思しき男性2人連れに声をかける。二人とも身長165cmくらいでやせ形。調査員が聞いた彼には家がある。話を聞きながら、自転車のカギを開けながら、連れの方を指さし「彼はそうだ」と合図をしてくれた。指さす方を見ると細い三白眼に長細い眼鏡をかけ、白いサマーセーターを着た彼が近づいてくるところだった。彼は一言だけ、「いらない」。翌日、彼らは大阪市南部のターミナルのネットカフェに泊まっていた。

9人目に声をかけたのがAさんである。身長170cmくらい、軽いオールバックパーマをあてており、赤いポロシャツに四角いバッグを肩掛けしていた。調査員Bと同じ年。しかし我々からは十は老けて見えた。当初は調査員Cと同じ年ということで話が進んでいたこともあり、Aさんは「うそ～、年下（に見える）やん」。現在日雇派遣で生活しており、ネットカフェは週2回程度、「酔っぱらって終電がなくなったときに使っている」という。しかし、彼の現在の住居は大阪市北部のウィークリーマンションである。

Aさんは大阪府北部で生まれた。実家は建設関係の会社をしている。男3女2の5人きょうだいの長男で一番年長である。高校卒業後、夜間の短大に進んで設計を学び、1年で卒業した。「短大卒業ということになってる」。

20歳の時、ベルトコンベアを製造する会社に就職した。本社は兵庫県だが、勤務先は大阪市北部。寮に入っていた。寮費は2万円だが、住宅手当が2万円出っていたので、実質タダだった。基本給は月14万円に残業等の手当がついて20万円くらい。夏冬とボーナスが出た。製造工程に携わっていた。「設計がやりたくてね。社長が『設計部作ろうと計画してる』言うから入社したんやけど、結局計画で終わったみたい」。

1年で辞め、設計会社に転職した。プラントの配水（上下水道）の電気部門の設計等を担当していた。CADを使うのかと聞くと、「CADは女の子がやんねん。俺らはその下書きを手で書く」。給料は基本給は当初18万円、辞める前で22万円だった。それに諸手当がついて、多い時で30万円。月の残業時間は100時間を超えることもあったという。「事務所で仕事するぶんには残業はあまりせんかったな。だいたい5時に帰れる。遅くても9時かな。現場でやる時は徹夜になる。そこで採寸を変えたりするとその場で設計し直すから。現場に入れるようになるまで夜中まで待機することもあるからね」。しかし、ヒマな時はとことんヒマなのだという。2年に1回程度で海外での勤務があった。3ヶ月は現地に留まる。「去年は南米やったな。大変？ いや、楽やったよ。外国の方が楽やね。1人でいろいろできるし。海外では携帯したくなくてね、契約せんかったよ、あえて。いらん連絡が来んように。そしたら1週間したら携帯送られてきた。電話かかってきて『もっとけ』て。『なんで』『連絡できるように』。それから1日2回はかかってくる。それもしょーもない用件で。『あのプログラム教えて』とかな。自分で調べろっちゅうねん」。ただ、設計についてわからないことがあっても誰にも聞けないのが不便だったという。海外赴任時には山ほど本を持って行く。海外に勤務する時にアパートの家賃はどうなるんだと聞くと、「3ヶ月分まとめて払う」と（おそらくこれは赴任先の話。日本でのことを聞いたのだが、後述のように昨年12月までは実家暮らしだったようである）。従業員は7人程度で（労働者の出入りは激しく先輩は一人だけだったが）かなり居心地の良い職場だったという。「3ヶ月続く人は長年おる。居心地がいい職場。仕事さえこなせば文句は

言わん」。社長とは口ケンカすることもしばしばだったというが、周囲の社員は「親子喧嘩せんといて」と言っていたという。「基本給上げろ」「ボーナス少ない」などと言うと、翌月に10万円振り込まれていることもあったという。「あそこは言わんと上げてくれへんからな。言ったもん勝ち」。この会社に10年以上勤め、去年で辞めた。辞めた理由は、「社長ともめたから」。引き留められなかったのかと聞くと、「引き留めない会社やから。去る者追わず。俺もアツケラカンとしとるよ」。

それまで実家で生活してたのだが、両親に会社を辞めると話すると、『お前もうちで働け』言われて。イヤやったから家を出た」。親は職人で工事を請け負っており、既に次男と三男は親の会社で仕事をしているのだという。実家から荷物をこっそりと運び出し、兵庫県のトランクルームを借りて置いてある。「ロッカーよりもトランクルームの方が安いよ」。その後、現在滞在している大阪市北部のウィークリーマンションに住み始めた。

退職金は100万円あったのだが、「5ヶ月間で遊びきった」。「彼女が何を勘違いしたんか、俺が休みやと思って『遊びに連れて行け』言うてな。色々行ったよ」。「車でウロウロと」。ハローワークには失業保険受給の手続きのために行った(120日分受給)。しかし、金が減るので派遣の仕事を始めことにし、現在に至る。

現在、派遣会社には5件登録している。大手派遣会社からの派遣が多いという。先週まで2週間は休みなく働いていたという。「仕事は待ってても来ないよ。予約制やから。電話すんねん。『ないか〜』って」。聞き取り当日は、人材派遣業の2支店に話をしたため、ダブルブッキングが発生したようで、その相談に行く前だったのだという。

現在は主に家電量販店などの配送助手の日雇派遣をしている。週6回仕事に就いている。この仕事は木曜日が休みなのだが、その日は別の派遣の仕事をすることもある。「今クーラーのシーズンやから、忙しいねん」。エアコンを取り付ける職人について、エアコンや室外機を運ぶ仕事である。1日に6~7件廻る。「楽よ。俺からすれば楽やねんけど。就く人少ないねん。若い子はイヤみたいやね」。仕事は8時半から6時までだが、大概は残業があり、9時まで働く。日給8,000円だが、残業がついて11,000円になる。「残業つくからええわ思うてやんねんけど。若い子は重いもん持つのと残業があるんがイヤみたい。この前来た子は室外機落としてね。それで職人さんは怒ったんやけど、会社には元からキズいってたと報告したんやけど。それで次の日に『梱包といて』言うたら、ダンボールくくってるヒモをはさみで切るだけで置いとんねん。何しとんねんて、職人さん怒るわな。そしたら『帰る』って」。「もっとあかんのがこの前おったな。車乗ってしばらくしたら『車に酔いました』言うて帰ってった。そんなん最初にわかるやん。何でそんな仕事選んだんかな〜」。「職人さんも車乗ってる時は気さくなええ人多いで。せやけど仕事の時はしっかりせんといかん思うて厳しくなるんや。それがわからん子が見とったら多いな」。「休憩も多いし、車乗ってる時はすることないやん。楽な仕事やで。俺、野球部やったからな」。体力には自信があるようで、「風邪ひとつひかん。せやから時々会社は『風邪ひいた』いうて休んでたな」。今は寝不足で体調はいまいちなのだという。

今年の2月には、手配師に声をかけられ、2日だけ飯場に入ったこともあるという。「ちょっと興味あって。探検みたいなもの」。日給8,000円から諸式3,500円を引かれる。帰りの交通費も出すと言われたが「俺の都合で辞めるんやから断った」。

現在住んでいるのはウィークリーマンション。1月から住んでいる。不動産賃貸仲介業者で見つけた。1LDKで月75,000円払っている。家賃が遅れたらやばいのはと聞くと「そうやね。普通に住もうと思っで借りるもんやないな、あれは」。ネットカフェは専ら酔っぱらって帰るのが面倒な時に使うのだという。

それで週に2回は利用している。「テレビでやっとな。『ネットカフェ難民』か。おるよ。この前も家出しとる子がおったな。22歳と23歳。片方は派遣でもう1人は風俗やっとな言うてたな」。「ネットカフェの前やうて、派遣会社の前で声かけた方がええよ。その方が見つけやすいやろ」。

聞き取りの当初は「仕事見つけよ思うたら、見つかんねんけどな」と言っていたAさんだったが、話をしているうちに「それでもやっぱ派遣に登録する時は、決心やったよ。この前梅田でホームレスの人と話したんやけど、若くてな。30代後半くらい。服装もきれいやったけど、カシコイねん。大学も出てるし、俺なんかよりずっともの知ってる。でもプライドがあるんやろな。理想が高いんやろう。派遣の仕事もある言うたんやけど。俺も登録する時はちょっと迷ったよ。そこで一歩踏み出せるかどうかなんやろな」。「正直、若い人やったらまだわかる気もするけど、俺くらいの歳で派遣というのは、やっぱ軽蔑するよね。俺は差別するわ」。彼は就職活動が爽り8月から再就職する。つい最近に内定が出たそうで、「正直、ここで見つからなかったら、愛知の（派遣の自動車）工場に行こうと思ってた。きつかったな」。「住み込み」の仕事が決まったこともあり、彼の口調も滑らかだった。

新しい就職先は前の会社よりも大きい規模の（「中規模くらいの」）会社である。社会保険は完備している。給料は前と同じくらいだという。同じく設計会社である。「試験があったけど、よう通ったわ。国語が苦手やねん。特に漢字が。対義語はどれか言うねんけど、20問くらいあって確実にわかるのは2問しかなかった。高校受験も国語さえできたらもっと別の高校やってんけどな〜」。「今度の仕事は俺も勉強せな、覚えることが多い」。寮にはいることが決まっておき、引越の準備を進めている。

現在借金は500万円くらいあるという。「マンション買ったんやけど、1,500万の。妹が1人暮らした言い出してな。貯金とミニロトで当てた450万で払って、あと残ってるのがそんなくらいかな」。彼が結婚するまでは妹に住ませるのだという。つきあってる彼女は「お嬢さん」のようで、親からの小遣いで生活しているという。「金ない時は頼った時もあったよ」。

現在親との連絡は特にないが、連絡は取ろうと思えば取れる様子である。「前にサイフ落としてな、免許の再発行に門真に行った時、親から搜索願が出とった。もうそんな歳かいなて」。

20代前半の頃は、パチスロに興じていたこともある。「月に10万くらいは勝ってた。でも飽きた。おもんなくなった」。

56. 男性 30代前半

Aさんは大学（大阪）卒業後、横浜にあるプラントエンジニアリングの会社に就職し10年ぐらい勤めた（正規雇用）。仕事の内容は主に発電所をまわりタービンの設置（？）を行う。新潟県・静岡県にも行ったことがある。あるとき会社の健康診断で肺の影が大きくなっているのが見つかった。大学生の時に健康診断で肺結核とわかったが、普段症状が出るわけでもなく健康だったし影もそれほど大きくなかったので放っておいた。それがまた見つかって休職扱いになり仕事をさせてもらえなくなった。そのとき大阪への転勤話があったのでそれを受け大阪に戻り病院に通いながら治療し、半年後に完治した。半年間の薬の服用はかなりしんどかった。特に朝食を食わずに薬を飲むので身体がかなりしんどくなった。しかし、普段見た目は元気なのでまわりの人からは「さぼっている」と思われてとても嫌だった。その後、主査に昇進し部下も2~3人から20~30人となり責任も出てきた。Aさんは、「昇進するより仕事がやりたかった」と言う。管理職になると自分のやりたい仕事をするができない。部下が来れば手を止めなければならないし、管理をしなければならない。管理よりも仕事をさせてほしかったがそれもできなくなり辞めた。退職する際、会社側からは「もう次が決まっているんやろ？」と言われたので「うん」と答えて、必要な書類をもらわなかった。退職金は出たが会社から必要書類はもらえず失業保険はもらっていない。派遣の仕

事は人付き合いがなく昇格がないのでとても楽である。現在の派遣先は制御盤の製作をする工場内での仕事。1日8,000円(3日に1回支払い)+交通費+残業代は1,000円強。業種は電気工事士などの資格があるので比較的電気関係が多い。現在の仕事の前は電気関係ではないが製薬会社の工場でも働いた。現在登録している派遣会社は関東方面に強い会社らしい。現在の派遣の仕事をするまでは正規で1年ぐらい勤めた。派遣で働く仕事は製薬関係や電気関係の求人は割りと多くある。大学を卒業したときの方が仕事探しは大変だった。

週4回利用しているネットカフェは毎日違う店舗をまわり、同じところは連続して使わないようにしている。同じ金額でカプセルホテルなどがあっても、ネットカフェの方がマンガも読めるしネットもできるのでネットカフェしか使わない。Aさんはネットカフェでは1,000~1,500円のオープンスペースを利用する。オープンスペースが空いていなければ個室も使うが基本はオープンスペースを使用する。個室でなくても別にしんどくない。大阪北部にある実家には着替えに帰るぐらいだが帰った日は家にいる。実家には両親がいるが兄弟は実家から出て大阪で生活している。Aさんは、自宅よりネットカフェのほうが寝やすいし楽であるという。調査員から自宅でなぜ生活をしないかという話が出たときに、Aさんは少し考えて「今まで考えなかったし、気づかなかったけど帰らないのは家にいづらいというものもあるのかもしれない。正社員で働いているわけではないし、両親は心配しているのでそのことで気詰まりがあるのかもしれない。こうやって話すまではそんなに思わなかったけど、それが大きい原因だと思う」と言っていた。

Aさんは横浜から大阪に戻ってきた後に結婚を1度している。現在は離婚している。

Aさんは実家を出て家を借りて生活をするということは考えていないのでそのための貯蓄はしていない。家を借りない理由は家賃も高いし、それ以外に光熱費や電話やネット代などのお金がかかるということ。それを考えるとネットカフェには何でもそろっているのでそちらを使った方が便利である。身体がしんどくなったり、ネットカフェがなければ実家に戻るなのでその辺の心配もない。仕事はクビになることがないので仕事がある限り、この生活を続けていく。自分の中では今が楽だし、正規雇用になるメリットも月給にするメリットもない。

より安定した仕事に就きたいかという質問には、「昇進のない会社であれば正規で働いてもいいかとも思う」とのこと。また、現在は週6日勤務で日曜しか休みがないのでハローワークに行く時間もないし、これまで行ったこともない。以前(正規雇用のとき)に比べたら楽ではないけど精神的には楽であるので求職活動をする必要もない。

Aさんは、白髪が多いせいか実年齢よりかなり老けて見えた。またかなり痩せていた。朝食はとらず、他の食事もあまりとらないので体重は48kg以上になったことはないという。

◎収入：20万円ぐらい 日給8,000円(3日に1度の支払い)

◎支出：ネットカフェ代3万円弱、タバコ代(?円)、食費3万円弱(昼：弁当350円・コンビニ弁当500円)、親へ1~2万円を渡しあとは貯金、携帯電話代あまり使わないのでプランの最低料金。借金なし。国保・年金未払い

57. 女性 不明

Aさんは北海道出身。大学(福祉関係)進学で大阪に来て以来大阪で生活をしている。住居は自宅(大阪市南部)中心でネットカフェ(ナイトパック)の利用はmixiを使用するため週1度ぐらい、翌日が休みの日に利用している。現在の仕事は知的障害者のための少人数入所施設。その施設は大学在学中からボランティアで参加し、卒業後そのまま正規の職員として就職した。ボランティアも含め10年以上そこで

働いている。勤務体系は2交代制で、1ヶ月のスケジュールをシフトで組む。Aさんは介護福祉士の資格を持つがその職場では19人中、有資格者が4名で他はアルバイト。現場では無資格者が介護をしたりしており若干の問題がある。

職場までは最寄り駅まで歩き、電車で20分。職場付近でも家は探しているが高くてなかなか見つからない。また、実家にはたまに帰るけれども何もなければ遠いので帰らない。支出は食費ぐらいで特に余暇として何か使うようなことはなく、たまに付き合いで飲みに行く程度であとは貯金している。姉が2人おり現在は北海道にいる。

現在の仕事を続けるならずっと大阪だけれども、どこかいいところがあれば転職・住居を変えたい。しかし年齢もあるので他の仕事は無理だと思っている。

現在困っているのは家賃(47,000円)が高いということ。他の支出は携帯代8,000~9,000円と食事(自炊)3,000万円程度。収入は20万円弱。

58. 男性 30代後半

島根県出身。大阪市南部に親戚名義のマンションがあるがほとんど帰っていない。

きょうだいは、妹が一人いる。高校へは野球で進学、商業高校へ行っていた。その後、公立の大学へ進学(法律関係)したが、大学2回生の頃に、父親が亡くなり、学費の負担などを考えて中退する。その後、20代半ばまで九州で働く。主にパチンコ店関連の仕事をしてきた(契約:九州のパチンコ屋をまわって営業をする。たまに東京出張もあった)。しばらく九州にいたものの、やはり仕事が少ないので大阪に出てくる。大阪に来てからは、派遣やコンビニのアルバイトなどの仕事をする。

その後、30代半ばに明石に移る。明石では、パチンコ屋で正社員として働く。マンションを借りて生活をしてきた(2年くらい働いたとのことであったが、明石には4年間ほどいたよう)。パチンコ屋は、「給料はいいけど、しんどい」とのことであった。明石にいた頃、妹さんの姉貴分の人の店に飲みに行った時、ヤクザに絡まればこぼこにされた。この時に、Aさんもやり返しているので、前科がついた(執行猶予つき、猶予期間はもう終わっている)。この事件をきっかけに明石を離れ、大阪に移る。この事件がなければ、きっと今も明石に住んでいただろうとのこと。大阪に移ったのは30代後半で、現在に至る。

今年の4月頃からネットカフェでの生活を始める。昼間、近くにある先輩の自動車関連の店で仕事をするために店から近く安い所を選び、「帰るのがめんどくさい」のでネットカフェに寝泊まりをしているとのこと。ほぼ毎日、大阪市南部のネットカフェに寝泊まりする。5時間で980円でシャワーあり。

家は、大阪市内の親戚名義のマンションがある。家にはAさんもあまり帰らず、妹さんも、昼間はOLとして働き、夜は飲み屋で働いているためあまり帰っていないとのことで、4LDKほどの広いマンションだが、ほとんど使われていない。妹さんはもうすぐ結婚して東京に行く予定。Aさんは、家賃として月5万円ほど入れ、定期的に洗濯などのために帰っている。妹さんとの折り合いは、決して良くはないようだった。

Aさんは、現在、先輩の店での仕事、派遣の仕事、競馬による収入で生計を立てている。

島根県時代に、親しくしていた一つ上の先輩が、車のネット販売の店をしている。本社が横浜にあり、注文が入ったらFAXで連絡がき、客に連絡をして現地での契約の手伝いをする仕事。「フラフラしてるんやったら、給料出すから」ということで誘われ、今は、自分の行きたい時に行っている。「アルバイトのようなもの」ということ。月に10日から14日くらい行って、4~5万円稼いでいる。

他には、梅田にある派遣会社に、2、3登録しており、たまに行っている。月に4~5回程度。工場関係

や、自動車の部品製造などの日雇いの仕事が主で、日給は7~8,000円。交通費は自腹。仕事自体は、それほどしんどいわけではないとのこと。

また、「土日は競馬でしのぐ」とのこと。競馬は15年くらいやっていて、月10~15万円ほど稼いでいる。どの馬が勝つかは、「パドックに行って馬の筋肉を見ればわかる」らしく、「かたいレース」「勝てるレース」しかしないので、稼げるとのこと。

以上の3つの仕事(?)をあわせて、現在の収入は月25万円程度。そこから、食費約4~4.5万円(1,500円/日)、家賃5万円とネットカフェでの寝泊まりに約3~4万円(1,000~1,500円/日)、さらに、現在、保険証を知人に勝手に使われて50万円ほどの借金を抱えており、仕方がなく、月5万円程度その返金をしている。返金は、元本だけでいいと言われている。服などは、家に定期的に戻り洗濯などをするので、特にお金はかからない。携帯電話もこれまでに6台ほど紛失しているのもう持たないことにしている。お酒は飲まず、パチンコもしない(パチンコ屋で働いた期間は長い、たまたま経験があっただけで、自分ではしないらしい)。ギャンブルは競馬のみ。以上のような内訳で、ひと月に約18万円程度の出費があると考えられる。残った分は貯金をしているとのこと。来年には、現在付き合っている彼女と結婚する予定であり、貯金するお金の半分は彼女に渡している。

彼女は、東京に在住、レコード会社に勤めており、マネージャーの仕事をしているらしい。Aさん自身も彼女の担当する歌手の大ファンらしく、すごく嬉しいとのこと。彼女は、外国籍の人らしいが、一時的に日本に来ているだけなのか、それともずっと日本にいたのか、などについてはよく知らないらしい。しかし、現在のところ、彼女は「こっち(日本)にいる予定」とのことである。将来的には、彼女が居酒屋などの自分の店を持ちたいと言っているらしく、将来についてはそのようなことも視野に入れている。

当面は、来春(3月の頭頃)には東京に行く予定。付き合っている彼女の紹介で、レコード会社の雑用の仕事が決まっている。現在もその研修には時々行っているとのこと。東京移住後の住居についても、会社の方で準備してくれるとのことだが、その具体的な費用等についてはまだわからない。

これまでには、職探しのためにハローワークにも何度か行ったことがある。そこで、紹介は受けるのだが、どうしても面接で落とされる。14~5回落ちたらしい。前科があるせいか、とも思ってハローワークの人に尋ねてみたこともあるようだ。調査員が「何がネックになってると思う?」と尋ねると、「30過ぎてもフラフラしているせいじゃないですか」とのことであった。大阪は、採用面接の際に、即決することがないらしい。受かるにしても落ちるにしても、返事が来るまでの期間が長く、そのことが、現在一番困っていることでもある。その点、東京は返事がはやいらしい。

また、生活保護を受けることを考えて、区役所にも相談したことがある。しかし、保険などの支払いをしているので、生活保護にかかるのは難しいのではないかと言われたとのこと。現在、雇用保険には加入していないが、医療保険は「国民健康保険」に加入、年金も「国民年金」には加入している。

行政の窓口以外に、NPOなどの相談機関は全く知らない。「NPO」という言葉も知らなかった。また、「西成」関連のことも全く知らない。困ったことなどの相談は主に彼女にしているという。妹や、仕事を紹介してくれた先輩にも相談はあまりしない。母親は、現在入院しているとのこと。

59. 男性 30代前半

おしゃれなめがねをかけ、帽子をかぶった色白な人。ただ着ている薄い色のジャージは汚れて荷物はビニール袋一つ。

声はかすれている。耳鼻科に通っていた。その診察券をみせ、「有名な先生のおところ」という。病院で撮った、のどの写真もみせ、ポリープができていて、のどに穴があいているため、声がかすれてると

の説明がされる。

保険は国保。大阪府にある精神・神経疾患の病院にも通っていて、一度の受診で 3,000~4,000 円かかる。中学生の頃児童相談所が介入して、児童福祉施設などに半年ほど入所していたこともある。療育手帳 B1 を所有。

仕事は？との質問に、「普通の仕事やで」。「普通…」と言うが、ダフ屋である。去年の年末は年越しライブをはしごしていた。終わったときは 1 時前。だから「紅白歌合戦」は見なかった。

この仕事は始めて 3 年ほどになる。基本的に仕事は土・日。しかし、最近はひまになってきたので引き上げようと考えている。コンサートとかが多い時期は週に 4 日ほど働くが、最近、大阪ではコンサートが少なくなっており、ひまである。東京の方はコンサートとかが活発な様だが、シャバがあつて、立っていると警察がすぐきて取り締まられる。ダフ屋で食べていくのが難しくなってきたのでやめようかと考えている。

収入は、月にすると 40~50 万円稼ぐこともあるが、少ないときは 1、2 万円。「変動めっちゃ激しいよ」。一日の売り上げがこれまでで一番多かったときは、250 万円/日だった。そのときは何千枚ものチケットを売った。イベントの中身については必ずしも詳しいわけではなかった。

チケットの購入はチケット発売当日に 2 台の携帯電話を使って、電話を掛けまくる。固定電話の方がつながりやすいが、現在は固定電話を利用できない環境にあるため携帯電話を利用している。ジャニーズのチケットはジャニーズのファンクラブに入っていた方がとりやすい。ほかの手段としては Yahoo オークションでチケットを競り落とすこともある。そのときはネットカフェのコンピュータを利用する。チケットの情報はネットカフェのコンピュータを使って普段は収集しているが、お金がなくて、ネットカフェに泊まれなかったときは、チケットの情報はコンビニや本屋で雑誌をみて収集する。

チケットの売却は会場で「ハト」を雇う。1 日、1 万 3 千~1 万 5 千円で女の子を雇って、その子に「チケット要りませんか？」という看板をもった「売り子」(ハト)をしてもらう。大阪市南部に住んでいたころに釜ヶ崎の西成労働福祉センターに行って「売り子」をしてくれる人を探したこともある。

チケットを売る前に挨拶しておかないといけないような人はおらず、売り場を仕切っている人はいない。

チケットは当日会場で不特定多数の人に売却するだけではない。直接、携帯電話に連絡をしてくる顧客もいて、顧客の代わりにチケットを購入することもある。顧客からの要望に対してはどんなチケットもとってくる。今日もチケットをローソンで発券する予定である。先に顧客から代金をもらってからチケットを購入するので、今は顧客からの待ち合わせについての連絡が来るのを待っている。

携帯電話のメモリーには 487 件の電話番号が登録されている。そのほとんどはチケット購買を頼む顧客である。「(メモリーの数はダフ屋としては) そんな多ないよ」。

「有名」な芸能人の携帯電話番号も何人か登録されている。電話番号はマネージャーが教えてくれたものである。会場からホテルなどの送り迎えのために、マネージャーは関係者に電話番号を教えることがある。そうした経路で電話番号を入手する。

そのほかのものも売ることがある。自分に処方される、向精神薬を自分で服用せずに売ることもある。

ネットカフェには、(最近はネットカフェにも泊まれず深夜公園でいることも多いが) 週に 4、5 日利用している。睡眠時間は短い方で 3、4 時間ほど。ネットカフェに深夜の 1~2 時入店、5 時間バック、10 時間バックを利用して、早朝に出る。

サウナを利用したり、カプセルホテルを利用することもある。カプセルホテルは朝 11 時までいれるからよい。3,000 円弱。ネットカフェに比べて高いが、カプセルホテルはお風呂に入るために利用する。

ネットカフェは「シャワー使わしてくれへん」。

ネットカフェには寝る、涼む、社会勉強のために利用しているというが、最近は売り上げが芳しくないで、1ヶ月半ほどの期間のうち、ネットカフェなどに泊まらず、夜中公園でぶらぶらして時間をつぶしたのは通算で10日ほどある。そんなときは翌日の昼間、図書館やイベントスペースなどに行ったりして、椅子で睡眠をとっている。

利用するネットカフェは一箇所に決めておらず、会員証は複数持っている。「週末は（ネットカフェは）うるさい（ので寝られない）」。利用するブースはフラットブースが多い。フラットブースかリクライニングでない、それでなくとも寝にくいのに、より寝にくい。昨晩はテレビと喫煙のできる部屋を希望したが、案内された部屋にはテレビはなく、禁煙席だった。「それで1,080円（そのままとられた）。（文句）言わなかったけどな」。

食事はたいい500～600円でファーストフードを食べる。嫌いなものは青魚に、牛乳。

借金はあと1年半で時効になる。借りたのは6年ほど前。消費者金融4社から借りた。「時効は5年やけど、履歴からきれいに消えるのが7年」。借りた金額は170万円ぐらい。お金を借りたときは1ヶ月の収入、「うそついたな～」。借入金額の制限は最初50万円であったが、何度も利用していると、どんどんと上がっていく。最後には、金額の制限を「500万にしましょうか」と言われたが、「100万で止めた」。あと、ジャニーズのタレントのチケットを専門に売っているダフ屋の友人からの借金が40万円ほどある。その友人はお互いに仕事を融通しあったりしている。

去年の10月ぐらいから、のどのポリープの治療のために病院に3～4週間通った。治療のためには全身麻酔してあごを外して手術しないといけないが、手術するには1泊2日の入院が必要で、声がでるまで2週間かかる。手術は8月初旬に予定されている。ただ、内科の病院にも通っておく必要があるが、お金がなく診察代を払うことができないので、通院していない。仕方なく、8月初旬の手術はキャンセルしようと思っている。

昔からてんかんをもっているが、近頃（去年の夏頃から）は薬を飲んでいない。しんどいときはその場に座り込んでやり過ごす。痙攣を起こすこともあるが、医者が「なぜといっしょで、薬で治すもんじゃない。精神的に治すもん」と言ったことを信じて実践している。街中で痙攣を起すと、周りの人が心配して声を掛けて救急車を呼ぼうとしてくれるが、お金の持ち合わせがなく治療費を支払うことができないので、そのときは救急車は呼ばないでくれとお願いする。てんかんは緊張すると起こることが多く、気分がそう状態のときも、うつ状態のときもしんどいという。

たばこはやめられない。昔はショートホープを吸っていたが、今は6mgのたばこを吸っていて、多いときは1日に6箱にも及ぶ。

パチンコとスロットは今ほしくないが一時期はよくした。最近はやる気がでない。というのも「5号機」になってしまったからだ。「面白くない」。やるときは、だいたい1台に5万円投入する。「勝つときは勝つけど、負けるときは負ける」。いろいろな手段でお金を稼いでいるが、パチンコやスロットはあくまでも娯楽。パチプロになって生活したことはない。「逆に、（パチプロが打つのを）見とった」。

大阪府北東部出身。中卒。高校はスポーツ推薦で決まっていたが、肉離れでだめになった。陸上の短距離走の選手で、11秒2の記録をもっていた。

中学卒業して高校進学をあきらめた後は、2年ほどタレントとしてテレビでレポーターをしていた。芸能プロダクションに所属し、番組に出演していた。現在でもプロダクションに所属はしているが仕事の話はこない。その後、友達の紹介で電気工事の会社に勤めた。

最長職はパチンコ店のホール。4～5年勤めた。実家から通った。社会保険はなし。店がつぶれてやめる。パチンコ店は合計で3、4店舗勤め、勤続期間は10年ほどになる。

ほかには先物取引の営業をしていた時期もある。給料は基本給18万9千円で、残りが歩合で、一口の契約をとるごとに5万円もらえた。ひとつの契約が何百万円もすることもあった。価格が下がるとわかっていても、契約をとるために顧客を「だました」こともあった。契約は多いときでひと月で20口ほど、収入は150万円にもなった。このときは丁度、コーヒー豆の値段が急激にあがったときで、たくさんの契約がとれたようである。今ならコーヒー豆は200円/gだが、当時は600円/gにも跳ね上がっていた。

実家を出たのは今のダフ屋を始めてから。実家を出た後は、友達の家にしばらく居候をしていたが、2年弱前から大阪市南部にあるアパートでひとり暮らしを始める。家賃は3万8千円。ふるなしだった。実家をでる頃には貯金が300万円ほどになっていたのもっとよい物件を選ぶこともできたはずだが、ダフ屋の収入が安定しないのでこのアパート以外は考えなかった。今年の6月の頭には収入が減って、家賃を払うのももったいないとそのアパートを引き払った。

両親は今も大阪府北東部に住んでいる。親は61、2歳。兄が面倒をみている。兄がふたりいて、上は5つ、下が4つ年上。ふたりとも独身である。家を出てから家に帰ったこともあるが、兄弟とは話はしない。親からお金を家にいれろと言われたこともあったが、「あー、(家賃で、今手持ちが)ないわ」と言ってごまかした。家族は今でもアパートで生活していると思っている。最近には家に帰っていないようで電話で連絡をとっている。

最近では仕事がうまくいっていないので、ダフ屋の仕事を引き上げようかと考えている。「仕事のないときは先行き不安」。「やっても埒あかんときあるもん」。「この2週間で7kg痩せたもん」。別の仕事をしてお金を貯めて部屋を借りようとも考えている。ただ、部屋を借りるには保証金が必要なので、40～50万円ほど貯めないといけない。と言っても、この仕事をやめないとつぎの仕事はできない。ダフ屋なら「(部屋借りるための40～50万)早かったら1ヶ月で貯まる」が、今はそれも難しい。

求職活動に職安は利用していないし、これまでも利用したこともない。ただ、アパートを借りる前、実家にいた頃にいったことがある。「見に行っただけ」という。

ダフ屋を辞めた場合は、着ぐるみを着てキャラクターショーに出演する、仕事に就こうかと考えている。この仕事は友達に教えてもらった。派遣に登録すれば就けるらしい。給与は日給1万円。「派遣行ったらあるで一聞いて」。

お金を貯めて新たに部屋を借りるときにはつぎの条件を満たした部屋にしたい。オートロック、風呂・トイレ別、エレベーターがついていて、見渡しのいいところ。「ぜいたくかなあ」。

60. 男性 30代前半

朝9時前に、大阪市南部にあるネットカフェで声をかけ、調査協力をお願いする。最初は、「これから仕事に出かけるので時間がない」と断られるが(仕事は10時から)、そこを「30分で済みますから」と無理をお願いして、調査に協力してもらおう。短時間の聞き取りで必要最小限のことしか聞けなかった。

Aさんは高校卒業後、大阪で自動車の塗装の仕事に就き、7年間働く(正規雇用)。しかし上司ともめ、けんかして辞めた。失業保険はもらったが退職金はなかった。当時働いているときは健康保険と年金は支払っていたが現在は国保のみ支払い、年金は未払いになっている。この辞めてからの仕事は派遣で働いたり正規で働いたりを繰り返し現在に至る。Aさんは現在大阪市内にワンルームマンション(家賃4万円)の住居がある。しかし、現在登録している派遣会社(「このすぐ近くにある派遣会社」と言っていた)と職

場が自宅から遠いので1ヶ月前からネットカフェで生活をしている。ネットカフェのあるミナミから職場までは原付バイクで30分。現在の派遣先は商品のピッキング（仕分け）作業をしている会社である。勤務期間の定めはなく、勤務日数は週6日、勤務時間は朝10時～夕方17時までで、残業なし。日給7,000円（日払い）と一部交通費（バス代）が支給される。ガソリン代とバス代は大差ないがAさんは、バス代をうかすためにバイクで通勤している。Aさんには、大阪府中北部に実家があり両親は健在。兄弟は家庭をもち大阪で暮らす妹と京都に住む弟がいる。実家には「いつでも帰られる」という気持ちがあるのであまり帰っていない。だが家族への電話連絡はよくしている。今の派遣会社は一つの業務が終わればすぐに次の仕事を紹介してくれるので心配はない。ハローワークは昔使っていたが最近使っていない。また、以前インターネットで仕事を探したことはあるが実際行ってみるとネットに掲載されている条件とはかなり違うものが多いので信用できず、現在ではあまり使わない。行政の支援で何か必要なことはあるかという質問には、ハローワークだけだと限られてしまうのもっと「情報」がほしいとのことだった。また、「自立支援センター」ということばは聞いたことはあるがどんなところかは知らないとのこと。Aさんは現在健康であるし、特に困っていることはない。困ったことがあれば職場の友人に相談できる。もし、ネットカフェが空いていなかったりしたファーストフードなどの飲食店を利用すると言う。また住居は、現在ネットカフェが中心だが派遣先が変われば自宅から仕事に行くようになるかもしれないし、またほかの地域のネットカフェを使うようになるかもしれない。ネットカフェを利用する理由は職場・派遣会社が近く、ホテルより安いというのもあるが、ネットができたりゲームができてりするのを利用する理由の一つである。仕事については、正社員に就きたいと思うけれど、給与面など条件が厳しいと感じる。正規雇用の場合、保険料などを差し引かれると現在の派遣で働くよりも安くなってしまうため。

◎現在の支出は家賃（ワンルームマンション）4万円、ネットカフェ代5万円（1泊2,000円）、食費3万円。収入は月収16万円ぐらい（日給7,000円・日払い）

61. 男性 50代前半

住居は大阪市北部の駅から徒歩25分のところにあり、9.11同時多発テロの年（2001年）からこの住居で暮らしているが、暑くて「6～9月はやってられない」。そのため、ネットカフェで寝泊まりしている。

住居は築40年の木造アパート。部屋は本間づくりで2畳（都市部のアパートなら3畳分ぐらいになる）。部屋には冷蔵庫、テレビ、パソコンがあり、足の踏み場がなくそれで部屋はいっぱいになっている。寝返りをうつこともできない。また、建物が密集して建っており、夏場は周りの飲食店から出る廃棄熱で部屋のなかが40℃以上になり、自宅のクーラーをつけても廃棄熱が返ってきて効かない。そのため、部屋にいたることができない。住居はあるが、ネットカフェ暮らしが続いている。

部屋の家賃は2万円/月。あと1万円ほどだせば、4万円ぐらいだせば（共益費などで1万円かかっているためか？）、別の部屋で暮らせるが、広い部屋で暮らすには「収入がないと...（新しく借りることはできない）」。敷金、礼金のことも考えると、30万円ぐらい貯めないと新たに部屋を借りることはできないので、引っ越しは難しい。また、これまで大阪以外で暮らしたことはない。「大阪市は離れたくない」。なお、家賃を滞納して1回だけ鍵を掛けられたことがある。

ネットカフェの利用は夜勤のないとき、とりわけ夏場に多い。平均2回/週、3日に1回。ネットカフェの利用料金は月に1万円ほどかかる。ただ、これはお金があるときであって、お金がないときは外で過ごしている。

仕事は工事現場のガードマン（交通整理）をしている。道路工事のガードマンや住宅建築で路上に大型重機が入るときのガードマンをしている。この仕事は職安で見つけ、勤め始めて1年4ヶ月たつ。

会社は大阪市北部にあり、5、60人従業員がいる。若い人もいるが、高齢者が多い。

雇用の名称は「契約社員」だが、雇用は安定しておらず日雇仕事である。仕事は前日の「夕方6時」に電話でこちらから会社に連絡をとって明日仕事があるかどうか確認する。ただ、当日になって電話がかかってきて仕事がキャンセルになることもある。

賃金は1日6,000円、半日なら3,000円、残業や夜勤があると大手の場合、7,500円である。月払い。年金、健康保険、雇用保険はない。交通費は支給されている。賃金はだいたい多い月では12万円、少ない月は5~6万円ある。これまででもっとも多かったときの額は夜勤が多かったときで27万円である。

夜勤は、7時から朝5時までの10時間労働である。ただ、現場によって労働の状況は異なり仮眠がとれる現場もあり「いろいろ」である。

今月の就労日数については、今日(29日)と明日は仕事がなく、もしも明後日月曜日に仕事があると19日になる。ただ、その内の三分の一が半日仕事である。そのため、今月の月給は10万円ほどになる。

生活費用については、食費は5万円前後/月。ネットカフェの代金は1万円/月ぐらい。その他はコインランドリー800円/日、銭湯代、夏場は水分を3リットル/日ほどとるのでその代金。携帯電話はパケホーダイにしているので、8,000円/月。そして住居費2万円/月、電気・ガス、共益費1万円/月ぐらいかかる。アルコールやたばこはしない。パチンコはやめている。

出身は大阪府である。以後、「(大阪府は)離れたことがない」。中学校を卒業して、はじめて就いたのはスーツやブレザーをつくっている縫製工場であったが、ここはすぐにやめた。その後、保険の外交員など転々としている。

25歳のとき、はじめて印刷工の仕事に就いた。印刷工として2、3の会社で働いた。もっとも長かったのは35歳まで勤めた印刷会社である。この会社は、印刷業者としては大きく従業員は100人を超えていた。主に電話帳の印刷を請け負っており、元請けの兄弟会社は西日本最大の製本会社である。ここでは10年間正社員として働いた。月給は26、7万円あった。この会社を辞めたときは退職金はでた。本来100万円のところ6割の60万円である。住居は会社と同じ市にあった。

印刷会社ではオフセット印刷や活版印刷、樹脂板印刷を担当してきた。印刷業界については営業をしていたわけではないので詳しくないが、これまでの経験から印刷技術については詳しい。印刷会社をやめたのは、「背が小さいから、肉体労働でしんどかった」。印刷会社をやめてからはハローワークで仕事を探していた。

今から10年ほど前に、4年間、スーパーマーケットの食品冷蔵庫のなかで作業するアルバイトに就いた。会社はそこから請け負っている食品会社である。

7、8年前、白内障になる。自分の目を通して見える映像が「すりガラス越しにみるぐらい」になった。「これでは仕事できない」ので健康保険があったので、なんとか片目だけでもと右目だけ手術した。お金がないので左目は今でも手術しないまま放置してある。左目は「すりガラス越しにみるぐらい」にしか見えない。「すりガラス越しにみるぐらいになると、それ以上は(病状は)進まない」。

その後、「ちょっと、印刷屋行ったけど」、会社が赤字続きで解雇される(ちなみにこのころ現在のアパートに移ったと思われる)。「(自分の)技術が未熟で、(勤めている会社の)経営が不安定で、毎月100万ぐらいずつ赤字で」解雇された。職安で就職活動をするも再就職は難しく、その後「3年半ぐらい何もやってない」。食費は月1万円ぐらいに抑えて凌いだ。

そして、1年4ヶ月ほど前に今のガードマンの仕事に就いた。

このようにいろいろな仕事を経験してきたのである。「履歴書に書ききれへんぐらい(いろんな仕事し

てきた)」。とはいえ、「全部自分から辞めたんじゃない(経営が不安定なため解雇されたこともある)」。結婚経験なし。

困っていることは、住居である。「普通に住める部屋に住んで」暮らしたいと考えている(ちなみに、住居をさがすのは不動産屋にこれまで任してきた。「選ぶのは苦手)」。しかし、「将来は？」の質問に対しては、「普通に住める部屋に住んで」「もうちょっとましな生活に戻りたいと思う」ものの、期待はしていない。「無理だと思う」。

行政の支援は「あんまり…(期待していない)」。相談機関も行ったことはなく「(これから)行こうとも思わない」。なお、自立支援センターは知っている。

仕事については就職活動を繰り返してうまくいかなかったので諦めているようである。「ガードマンはあまり向いていない」と考えるものの、「転職は難しい、考えていない」。「今は気楽にやっている」。

おそらく気持ちとしては長年やってきた印刷の仕事にあるのだろうが、食品会社の後の3年半の間、印刷の仕事を職安で探したがうまく見つからなかったようである。面接では年齢が高いと断られ、また年齢が問われない場合は技術がないと断られたようである。求職活動の困難さについてはつぎのように述べる。「一番はやっぱりその、あの、求人と求職のバランスがあれなかったら、あの…年齢とか職歴とか、あの、何十件(面接に)行っても、年齢的にも…ベテランでも職探しやっていますから」。「(印刷工については転職して勤める)会社が変わったりして、機械によって(習熟する技術が)違うから、今は技術が(新しくなって。自分の技術は転職を繰り返したこともあって)中途半端で」。

相談相手はいない。家族とも長い間連絡はとっておらず、友達もいない。

「ネットカフェがなければ」との質問に対しては「雨ふってないときは外の方が…」。

62. 男性 50代前半

来所経緯：大阪市北部のターミナルの漫画喫茶で「調査協力のお願いチラシ」をもらった友人から紹介されて来た。

現在の生活拠点は大阪市北部のターミナル周辺で、収入は友人から紹介される、日給6,000円くらいの日雇い警備(最近ではお祭りの警備に2日行った。2日で15,000円だった。)と日給2,000円くらいの並び屋(大阪市内の電器屋など)の仕事と最近はしていないが、交通調査の仕事などで月に7万円くらいになる。警備は、大阪府内のイベントなどのスポットが多いようだ。

寝場所は、週に4~5日をネットカフェのナイトバック(午後8時から9時間680円)を利用。この周辺では、最もリーズナブルとのこと。形式はオープンスペースで、大きめのソファとフリードリンクが気に入っている。シャワーはない。お金があれば週に1日は風呂に入りたいので、サウナ(午後12時から翌朝7時まで1,050円)を利用。お金がない時は、野宿している。

物を捨てられない性格で荷物がロッカー3台分ぐらいある。無料のロッカーに午前6時から午後6時ぐらいまでいれている。無料のお茶もある。出し入れするのが大変で友人に手伝ってもらったりする。現在の唯一の悩みとのこと。以前は、ボウリング場の無料のロッカーを利用して今は利用できない。近所に100円ロッカーがあり、たまに利用していたが200円に値上がりしてから利用しなくなった。

ここを生活の拠点にしているのは、長い間、ここにいるので慣れているというのが一番の理由。昼間は大阪市内の図書館など時間を潰すところがたくさんあるし、夜は人が多く賑やかで寂しくない。「西成」の噂も、友人(輪番登録者が4人いる)から聞くが、慣れていないし、夜は人が少なくて怖そう。西成労働福祉センターから日雇いの仕事に行ったこともない。友人から便利だと聞くが、社会医療センターを利

用したこともない。ドヤは、利用したことがある。

最近、ネットカフェにも 30 代ぐらいの若い人が増えてきたが、話をしたことはない。昼間もどこにいるのか、わからない。若い人たちは、自分たちと違って、オタクっぽい人が多い。

出身地は大阪で身内は、京都に糖尿病の母親と弟が同居しており、妹も居場所は聞いていないがいるとのこと。父親は 16 歳の時に亡くなり、兄も一人いたが亡くなったそうだ。中学を卒業後、家を出たいという理由で、親戚を頼って長野県の高校に行ったが中退。20 代半ばまで、当時流行っていた東京のパーティーの仕事に就いた。最初は、会社の寮で生活し、何年かしてマンションに移った。その後、友人と 2 人で京都に出て来て、40 代半ばまでサパークラブ（簡単な食事付きのナイトクラブ）の仕事をしていた。住居はマンションだった。

その後、ある言えない事情があり、大阪に戻って来て、野宿をするようになった。仕事は古本を集めて売ったりしていた。当時は中ノ島の炊き出しや、キリスト教の配給などをよく利用していた。

そして、ビルの警備が厳しくなり、現在のような生活になった。その頃は、サウナをよく利用していたとのこと。

時々、母親と妹からは、携帯（プリケー）に電話があるが、弟からはない。また、自分から掛けることもない。弟には、自分の生き方が理解できないと言われている。そんなこともあり、たぶん親・兄弟を頼ることはないだろうとのこと。

30 代の時に A 型肝炎とアルコール性肝炎で大阪市の北東部にある病院に入院。現在は、糖尿病（血糖値 230）と高血圧（投薬前 200/140、投薬後 140/90）で医療券を福祉事務所から出してもらい、別の病院に通院中だが現在の生活になってから入院はしていない。

現在の体の状態では、週に 2~3 日ぐらいの労働しかできないし、する気もない。また、今の生活が長いので毎日働くのが苦手になった。それと、収入が増えても、友人への振る舞い酒も含めてアルコールが増えるのと、ギャンブル（競馬）に使ってしまうだけなので今ぐらいがちょうどいいのではとのこと。現在の食生活は、井かラーメン。自炊はしないのと、お金がないので野菜は、ほとんど食べない。コンビニも利用せず、買い物は「99 ショップ」を利用。激安の「〇〇スーパー」は、友人が腹をこわしたとことで、利用はしない。酒は 1 日にビール 1 本とワンカップ 1 本、タバコは 1 日に 20 本、ギャンブルは競馬を少しする。月の生活費は、食費 2.7 万円、宿泊費 1.8 万円、携帯電話代 0.5 万円、飲酒・ギャンブル代 2 万円。

生活保護については、以前、中ノ島のスタッフにも勧められたが断った。何事にもしぼられるのがイヤなので、今も受けるつもりはない。自立支援センターの利用については、知人から人間関係がわずらわしいなど、良いうわさを聞かないので入所する気はない。アパート自立については、積極的には考えていないが、たまに不動産を見に行くことがある。仕事については、めんどうくさがり屋の性格なので、ハローワークや求人誌などで探したりするのがいや。世話をしなければいけないので人に紹介するのもいや。今は、友人から紹介される仕事だけで充分だと考えている。警備会社から常用の誘いもあったが断った。就職支援についても、不義理をして迷惑をかけるのがいやなので、今はいない。

借金は、カード会社への 100 万円がある。信じてもらえないかもしれないが、水商売の時の後輩の借金の保証人を頼まれて、それを断った代わりに、自分のカードで 100 万円を貸した。その時、20 万円はもらった。現在、住民票は大阪にあるが、借金の督促がくるので移せない。

63. 男性 30代後半

調査日以前の平日にネットカフェから出て来るところにビラを配ったが、今から仕事に行くので聞き取りするのは無理と断られた人であった。「調査協力のビラをもらったんですが、何をきかれるんですか、どのくらい時間かかるんですか、本当に謝金はもらえるんですか」と電話がかかってきた。

現在週3、4回ネットカフェを利用している。1週間で6,000～7,000円かかるけれども、仕事があまりにもきつく家（実家）に帰るのが大変なので、体のことを考えたら仕方がないかと思っている。2ヶ月前に離婚してから父親がいる大阪府東部から大阪市北部まで原付バイクで1時間近くかけて通勤している。家族は高齢の父、実家の近所に結婚した姉が2人いる。離婚したのは2ヶ月前で子どもが一人いて月1回会うことができる。

現在の仕事は無料求人誌でみつけた。派遣会社に登録して、集配の仕事、サービスセンター内で台車をつかって荷物を運び仕分けする仕事をしている。仕事内容は社員がしているのと同じ。月曜日から金曜日働いて週末は家に帰る生活をしている。賃金は日払いで週4回（火・水・木・金）、時給1,000円で朝の8時から午後5時まで、残業もあるが1日1万円ちょっと、20日働けば21万円程度の稼ぎにはなる。今の仕事はスポット求人ではないのでその日で仕事が終わるということもないが、半年と期限がきられているわけではない。相手が「もういい」と言われたときに仕事を辞めるときになる。近所に派遣会社の責任者がいるので仕事が終わったら毎日勤務時間をメールで送るようにしている。聞き取りをさせてもらっている最中にも携帯電話に派遣先から電話で荷物の確認などをしていった。

職安で仕事を探したこともある。インターネットカフェで仕事を調べたこともある。ただ現在は求職活動をしていないが、今後は求職活動をしようと思っている。

現在働いている会社に「正社員にならしてください」とお願いすれば、いける感じはあるが、年齢的にすでに今の仕事はしんどいし、これからのことを考えるともっと難しくなっていくことはわかりきっている。だからもし、求人誌を見て、条件がよかったらいつでも移るつもりである。ただ求人誌をみても、年齢の問題（35歳まで）や給料の面でなかなか希望する条件のものがないので転職も難しい状況である。今の仕事も経験があるから35歳過ぎても面談の上採用になったが他の仕事をみつけるのはこれから年齢を重ねるとさらに難しくなると感じている。

仕事につくために、大型免許をとりたいと思っている。もし職業訓練で免許取得に必要なお金を援助してくれるのであれば活用したいと思っている。

できたら職場の近所で部屋を借りたいと思うこともあるが、アパートを借りるとなると敷金などを含めて初期費用だけでも20万円はかかるので、金銭的な余裕がないので住居を確保できるとは思わないし、それに加え長い目でみるとそうだが、この仕事が継続できるかどうか不安なので、この職場の近所に部屋を借りてもいいのか悩む。ただ住居を確保する際相談できる場所があったらうれしい。

ネットカフェを利用する以外はビジネスホテルならどんなに安くても6,000円くらい、サウナも結構するので、それなら家まで帰ろうかと思う。ただ体がいよいよしんどいときは、もしネットカフェがなかったら利用する回数は週2、3回に減るかもしれないがサウナを利用しているのではないだろうか。

現在の生活費は収入が21万円、朝・昼・晩の食事と熱いのでジュースを3、4本飲むし、タバコを吸ったりするので食費で1ヶ月9.0万円、ネットカフェ利用はフラットタイプで1回2,000円なので2.5万円、携帯電話代が0.6万円で計12万円くらいになる。それ以外にも一番負担になっているのは養育費が1ヶ月5.0万円かかる。これが敷金をたためない原因となっている。「ただこの年齢でなんで蓄えがないのかと言われたらそうなんですけどね」。何でつくった債務かまではきけなかったが、債務を少しずつ返金し

ているためそれも家計に重くのしかかっている。

健康状態は今は問題ないが、頸椎のヘルニアがあり、重労働はきつい。

高校を卒業して、金融関係（信用組合）に15、6年勤めていた。その間、2度の統合・経営破綻を経験し、3回目で退職することになった。30歳を越えてからは運送関係の仕事をする。それまで営業などのホワイトカラーの仕事をしていたので、30歳過ぎてからのブルーカラーの仕事が大変であった。その仕事は今のような派遣ではなく、正社員で保険もあった。その仕事を辞めたのが今年で、それまでは厚生年金に加入していた。まだ国民年金にぎりかわっていないのではないか。

大阪にいたので「西成」に来たことはあるが、仕事を探しにではない。自立支援センターというところが大阪にあることも知らない。

将来は年齢も正社員として自分がどういう仕事をしたいかわからない。今の仕事は敬遠したいと思っている。やはり肉体労働はつらいし、厳しい。デスクワーク、せめて営業でないと体力的に難しいのではないだろうか。それと金銭的なことでゆとりがないので、せめて月30万円くらいの稼ぎはほしいと思っている。そのくらいの稼ぎがあれば、部屋も借りることができる。ただ今の派遣では給料があがることがないのは確実である。ただ今の仕事、もし正社員になるとしたら朝の7時から夜の9時まで拘束されることになるので大変である。

自立支援センター調査

64. 男性 30代後半

高知県出身。小学生のときからイジメに遭う。小学校に通っていたころ、両親が離婚、父親などは大阪に行く。自分は母親と一緒に生活する。母親はその年のうちに再婚している。小学校高学年のとき、イジメから逃れるため放浪するようになる。岡山県に無賃乗車で行ったが1日で保護される。その後は、3日に1回位のペースで放浪するようになる。中学校のとき、初めてフェリーで大阪に行く。その後、放浪癖を治すため一時、施設（児童養護施設）に入る。

高校を卒業後、地元の家具製造会社に入社、2年間で、同社自己都合により退社。2ヶ月後にフェリーで大阪の姉の家に行くと言って実家を出る。大阪キタで人夫出しに誘われ初めて契約仕事に就く。仕事は大阪府北部のコンクリート工場で高速道路の橋げた製造。日給6,000円、飯代2,500円、寮は6人部屋であった。

その後、初めて大阪の「西成」に行った。震災がある平成7年までは主に飯場に入り建設土木や警備の仕事をしていて、ドヤにも泊まったことはある。震災後は警備の仕事で神戸に行った。カジヤの手元をしていて溶接の火の粉が右目に入り失明、労災保険は母親が受け取ったと聞いたがはっきりは知らない。

20代後半で、地元高知に帰った。初秋に地元の警備会社に入社。冬に自己都合で退社。翌年に地元の別の警備会社に入社。そして派遣会社に登録、警備の仕事に就くも、警備会社の経営が悪化して2ヶ月後に倒産。給料未払いもあったが、籍だけは置いていた。しかし仕事ができないため、再び大阪に出てくる。

平成15年初頭に、野宿していたら、テキ屋の人に誘われ仕事をしたが仕事がキツかったため半日で逃げた。平成17年に横浜に行った。街で偶然にテキ屋の時の同僚に会い、店の売り上げ2万円位を持ち逃げした事になっているので、大阪では夜、テキ屋の人に誘われた場所をうろろしない方がいいと忠告された（それをきっかけにそのあたりを避けている）。その知人は横浜で生保を受けており、何日間か居候させてもらったそうだ。横浜では、日雇い仕事を少しした。療育手帳を見せるのがいやなので、証明書代わりに日雇い手帳を寿で作った。夏に簡宿で生活保護を受給。

平成18年理由はわからないが、生活保護を打ち切り大阪に戻った。同年自立支援センターに入所、イジメを受け1ヶ月後に退所。2ヶ月後に再び横浜に行き簡宿で生活保護を受ける。

平成19年、理由はまたわからないが、横浜での生活保護を打ち切り、関西の一時保護所に1週間入る。その県で生活保護の申請をしたが、「母親に少しでも援助をしてもらおうように」と言われ、母親に電話をしたが「親子の縁を切る」と言われ申請を断念。その後、ホームレスの人に空きテントを勧められ1週間入居。その間はアルミ缶収集をした。初秋に高知に帰ることも考えフェリーターミナル付近の公園で野宿、その時は、公園を利用するおばさんから食べ物をもたらしたりした。1ヶ月後、市立更生相談所で生活保護の相談、NPOで就職活動をするように勧められ来所。翌日、紹介された警備会社に面接。採用となり翌日から警備の講習に入った。この間はケアセンターに入る。

65. 男性 20代前半

埼玉県で6人兄弟の3番目として生まれた。生まれつき斜視で、右親指がバネ指（完治）であった。また気管支喘息になったこともある。子供の頃から両親が共働き（母親は水商売、父親はたぶんテキ屋）で食事は家族別々に会話も、ほとんどなかったそうだ。

2年前に大阪市北東部に住んでいる母親に電話連絡をしたが両親と継父以外の消息は不明。それ以後

は、連絡していない。

小学校時代の得意科目は社会、国語、算数、理科、体育で、不得意科目は音楽。中学校時代の得意科目は社会、国語、数学、理科、体育で、不得意科目は音楽、英語。トライアスロンに参加したこともある。

ネットカフェ等の利用状況は15歳の頃からで、最初はゲーム（ファイナルファンタジー11）がしたくて、新聞配達夕刊の配達後に3時間パック580円（1日1～3時間）で利用していた。理由はストレスの解消である。場所は大阪市北区。その後も、チャットやゲームと寝場所が目的で利用している。サウナやカプセルホテルは、値段が高いから利用しない。

野宿は13歳の時が最初で、20歳の時に京都の児童公園や大阪の商店街及びビルの階段の前等でした。

現在の健康状態は良好。他の支援団体の利用はなし。シェルターは怖いので利用したことがない。炊き出しは知人と一緒に10回位利用。

小学生のとき兄がイジメっ子で、それが元で、イジメられるようになった。また、小学生のときに、何の報せもなく、両親が離婚（母親が1人で出て行った）。原因は父親が仕事もせず、酒ばかり飲んでいてから見捨てられたそう。姉は中学の頃から家族のために飲食店等でアルバイトをするようになった。翌年、父親の暴力及び姉と兄の下の兄弟へのイジメが始まり、ひどくなっていった。

中学校に入り陸上部に所属する。途中から登校拒否が始まり、家出（10～11ヶ月間）する。1週間後に、家出をした当時小学生の男の子と出会い一緒に過ごすようになった。寝場所は人目につかないマンションの貯水槽等で、食事は2人で万引き等で調達していた。野宿を始めて2ヵ月後位に、20代後半のホームレスの男性と知り合い、3人で過ごすようになった。それから8ヶ月位は、駅や神社で野宿するようになった。この時に野宿の仕方など、いろいろと教わったようだ。翌年、2人とも警察に補導され、児童養護施設に入った。児童養護施設では、いくつかのクラブに所属していた。

中学校の卒業式の後に再婚した母親が突然迎えに来て、兄弟全員を大阪市に連れて来た。継父の仕事は魚屋。両親が決めてきた新聞配達の仕事をするようになった。給料13万円の内、家には最初3万円を入れることになっていたが、その後、10万円になった。両親はそのお金でパチンコ等のギャンブルをしていたようだ。母親は、大阪に来てからは働かず遊んでばかりいたそう。自分の遊ぶお金が欲しくて、朝刊と夕刊の間の時間で喫茶店のアルバイトを両親には内緒でしていた。この頃から、ゲームをするためネットカフェの3時間パックを利用するようになった。利用目的はストレス解消であった。中学を卒業して2年後の年末に左ひざを痛めて新聞配達と喫茶店のアルバイトを辞めた。

その後の半年間、大手飲食チェーン店でアルバイト。家出をしたが1週間で補導され、少年鑑別所に送られた。そして家には帰りたくなかったため施設に入った。施設に入っている時に、施設の知人の知り合いの弁護士に勧められてトライアスロンをするようになった。大会にも一度参加した。そして、施設から通いで施設の知人2名と一緒に派遣会社から派遣の仕事に行った。その後、施設から2時間かけて希望していた調理の仕事に就く。行きは始電、帰りは終電だったそう。寮を用意してくれるように頼んだが聞き入れてもらえず退職。そして、20代のころに施設の知人2名と一緒に派遣会社を渡り歩き、住み込みの派遣に行くことになり施設を退所した。ラーメン屋でアルバイト、その後ホールチーフから副店長までなったが倒産。その年の年末に施設の知人2名と派遣会社で知り合った知人と計4名でNPO釜ヶ崎のお仕事支援部に相談に来た。相談の結果、当所登録求人他府県の派遣会社に連絡、当所で面接をしてもらい年明けから赴任することになった。赴任までは、内職仕事の提供をした。

今年の年明けから晩春まで他府県の派遣会社で冷凍うどんの製造及び袋入れの仕事に就いた。しかし、新しい仕事がうまく出来ないという理由で解雇（先輩や上司が新しい仕事を教えてくれなかったのが原因

だそうだ)。そして、次の仕事を派遣元の社長に相談したが、なかなか決まらず、また、その当時、オンラインゲームで知り合った関東の女性の事もあり、派遣会社を退職した。再びお仕事支援部に来所。自分で見つけてきた関東の製造派遣の仕事に応募するための履歴書の作成支援をした。採用され夜行バスにて赴任。夏に同じ派遣会社の他の作業者が機械を壊したためラインが止まり。8日間、待機したが退職。そして、待機中に探した住み込みの解体の仕事に就く。日勤8,000円、夜勤10,000円、寮は2DKで55,000円だった。その後、現場責任者になり日勤10,000円、夜勤15,000円になったが、自分の下の作業者が必要のない物まで解体したことで解雇された。そして本日再び、お仕事支援部に来所。

66. 男性 30代後半

Aさんは、大阪府に長男として生まれる。父、母、子ども3人の5人家族。父は土建会社の部長までなった。母親は無職、宝塚音楽学校に行っていたことが自慢である。父、母の年齢はよくわからない。姉は愛知にいる。弟は東京にいる。子ども当時の生活はあまり裕福であったとは思っておらず、「生活は貧乏だったと思います」とのことであった。

4、5歳の時に大阪市内へ引っ越す。小学校、中学校当時はマンションに住んでいた。小学校時代は、勉強は嫌ではなかった。特に得意、不得意という教科はなく、弁護士になりたいと思った。中学校でも普通に暮らす。部活動には入ってなかったが、水泳部から誘われたりした。水泳は小学校の1年生から50mくらい泳いでいた。友達との関係も普通ということであったが、特別に親しい友人などはいなかったようであった。

中学校卒業時、進学は考えなかった。理由を尋ねると、おそらく高校は卒業できないだろうと思ったから、とのことであった。進学しないことについては、両親は特別反対せず、本人の好きなようにすればいいという考えであった。しかし、姉、弟は本人が高校に進学しないことには強く反対した。姉、弟ともに高校を卒業している。

就職については中学校が10以上の就職先を紹介してくれた。給料や場所のことから大阪府内のゴルフ場に正規社員として就職する。住み込みで、月25万円（バブルの頃で給料はよかった）ぐらいの給料をもらい、保険にも入っていた。家にはお金を入れなかった。ゴルフ場の仕事をしながら、自らもゴルフを始め、プロを目指しつつ、レッスンのアシスタントも行うようになった。また、仕事終了後など空いている時間は、無料でゴルフの練習が行えた。19、20歳ぐらいまでゴルフ場に勤める。その頃ゴルフのプロ試験に挑戦するが受からない。だめで再度挑戦というのは嫌だったので、試験は1回しか受けなかった。プロ試験に受からず、プロになる事も諦めたためゴルフ場においてもという気持ちになり自分からゴルフ場を辞める。その時に、3つ通帳があり、600万、200万、50万円ぐらいの貯金があった。

ゴルフ場以後は、正規の職に就いていない。水商売、テキ屋、土建現場などの色々な仕事をしてきたが、それぞれについてははっきりとは覚えていない。初めに行ったのは、駅の手配師の仕事であったが、これは条件や内容などよくなかった。ほとんどお金はたまらず、15人部屋に入れられたりしていたので、すぐに辞めた。それ以降、駅手配で仕事に行くのは嫌で、センターを通して仕事に就くようになったそうである。他にも、飲み屋で友達になった自営業の社長から仕事を紹介してもらったりもしていた。土建現場が多かった。「西成」のセンターからも仕事に行った。仕事内容は給料と場所で決めていた。その時の日当は9,000円くらいだった。4、5月はセンターでも全く仕事が無く、その時は新聞配達のアルバイトなどもした。20代前半には市役所に仕事の相談にも行った。当時は若く、深刻に考えておらず軽い気持ちで相談に行ったが、市役所の対応がよくなかった。テキ屋や水商売の仕事も行った。お酒が好きでかなり飲み歩いており、飲んでいた際に、その暴力団に紹介されて店に勤めていたこともある（店に住み込んでい

た。近くていいが、しんどかったとも。また、Aさん自身は暴力団には「所属してはいなかった」とのことであった)。しかしママが借金を作った日いなくなってしまう。他にも他府県で水商売の店にいたこともある。

また、土建の仕事をしていて、声をかけられ別の現場に誘われてそちらへ行く(前の現場では、日給9,000円程度であったが、そこは寮に入れ、日当15,000円と条件がよかったため)。その現場で働いている時に、仕事の関係上アーク溶接の免許を取る(現在も免許証を持っている)。その現場には、従業員が3人いたが、誰も溶接ができる人がいなかったそうである。

最後の仕事は、東海で現場のガードマンの仕事を2年ほど行った(日当7,500円、部屋代2,000円、食事代は自分で)。不規則な仕事で一日に2回くらい出勤することがあり、月50回くらい出勤することもあった。給料は月給で、多いときは30万円くらいになった。この秋に辞めた。原因は、上司との人間関係で、給料の値上げの交渉を行ったが、みんな同じ額(条件)で働いているということで聞き入れてもらえずに自分から辞めた。

その後、大阪市内の場所を転々と変えながら10日ほど野宿を続ける。「区役所の前で寝てたら何とかしてくれるやろ」という気持ちで、意図的に区役所の前で野宿することに決めた。区役所前で野宿をしていて、区役所の人に声をかけられ現在に至る。かつて(20代前半の頃)、市役所に相談に行ったことがあったが(本人も冷やかしのようない気持ちでもあったそうだが)、その時の職員の対応が悪かったらしく(「とにかく仕事を見つけろ」しか言われなかった)、二度と市役所に相談に行く気はなく、今度は区役所にしようと思ったそうだ。

仕事を転々としている時に、市更相を通じて三徳寮に入ったことがある。「西成」のセンターで仕事をしている時、シェルターに1日だけ入ったことがあるが、炊き出しを利用したことはない。住み込み仕事以外の時は、友だちの家、マンガ喫茶、カプセルホテル、野宿などをしてきた。現在の住民票は東海地方にある(住民票を移した時に、10日間以内に転居届け(か何かの手続き)をしていなかったため、罰金で裁判所に3万円とられたという。Aさん自身は、確かに裁判所だったと言い、「(そこは)そういうことに厳しいらしい」と言っていた)。

2、3年に1回は、現在両親の住んでいる市営住宅に帰ることはあるが、それ以外に電話などで連絡をとることはしない。生活の援助を求める事はしない。父親は、数年前に交通事故に遭い、現在は入院している。実家に帰った時は、病院にお見舞いにも行く。父親は、結婚してきちんと生活をという考えがあるようで、今でもAさんに結婚するように言ったりする。これまでも20歳代の時に結婚話があったが30歳くらいまでは結婚したくないと思い断り、弟がその人と結婚した。Aさん自身はこれまで結婚経験はなく、前回父親と会った時も(数年ほど前か)、結婚するように言われたが、結婚なんてとても無理な状況だと思っていた。母親はあまりうるさくなく、本人なりにという考えでいる。

街中で肩がぶつかったことが原因で、相手を殴ったところ、私服警察官で2日間拘留されたことがある(2日間拘留されることは「ヨンパチ」というらしい)。

現在まで健康状態は良い。タバコは吸うし(1日10本程度)、お酒も飲んでた。10歳代からタバコを吸ったり、お酒を飲んだりしていた。両親ともにお酒は飲まないが、母親が、こそこそせずに「飲む(吸う)なら堂々と飲め(吸え)」という考え方を持っていて、家でお酒を飲んでた。お酒はかなり飲む(飲み代を作るために仕事をしてたようなものだ)とも言っており、ほとんどのお金は酒代となった)。お酒は、いくら飲んでも酔わないようで、10万円、15万円と飲み代がかかっていたそうだ。それでも手が震えたりすることはなく、飲まない日があっても別に平気だが、一度飲み始めると止めることはできず、とことん飲むとのことであった。よくお酒を飲み、友達の間も奢ったりしていたので、カードの借金がで

きた。1回目は80万円、2回目130万円くらいだった。その借金はゴルフ場の仕事で貯金をしていたお金から（一括で）払った。現在、借金は無い。

かけごとはあまりやらない（馬券300円など）。趣味はサーフィンやジェットスキーなどマリンスポーツをやった。現在、携帯電話は持っている。

「アーク溶接」の資格以外には、車の免許を持っていたことがあった。10代のころに車の免許を取り、車を10万円ぐらいで譲ってもらって乗っていた。しかしゴルフ場を辞めた後、20歳ぐらいの時に、スピード違反（オービス）の減点が重なり、免許取り消しとなる。文句を言ったりしたが、証拠写真があってだめだった。気にいらなかったので裁判を起し、訴えたが負けた。Aさん自身は、再度免許を持ってきつと無茶をするだろうから、30歳くらいになるまで持つのを辞めようと思ったとのことであった。

振り返ってみると、20代前半には、すでにゴルフ場で貯めた貯金が無くなってしまったが、20歳の時は将来についてあまり不安はなかった。30代前半くらいから「ヤバイ」とか「このままでいいんだろうか」と思うようになったそうだ。また、「本当に生活に困ったと思いはじめたのはいつか」、と尋ねると、「ガードマンを辞めた後、手持ちのお金がなくなってからの10日間だ」との回答であった。

67. 男性 30代後半

Aさん。東京都に生まれる。両親は離婚、物心ついたころには父とは別居しており、子どものころは母の実家に預けられていた。母親はAさんが子どものころから生活保護での生活。Aさんは施設に入所していたようだがそのことについてたずねると「話さないでだめですか…あまり思い出したくない」と話してもらえなかった。そのため入所していた年齢などは不明。小学生のころまでは東京で生活していたが、その後茨城県に移り中学校は茨城県の学校に通った。学生のころ部活などは特にしていない。

中学校卒業後、水道管をつくる工場に勤めた。炉のそばで作業をする仕事なので暑い、かなりキツイ仕事だった。中卒なので残業をさせてもらえず、お金にはならなかった。月7万円ぐらいの収入であった。住み込み・食事付で、4年弱、20歳まで働いた。母の身体の具合が悪化し入院したので、仕事を辞めて看病のため東京で暮らすことにした。母一人子一人で、母親に対する「思い入れ」は強いように見受けられる。

ハローワークで仕事を見つけ東京で調理器具の売り子をした。母親の自宅で生活はせずに住み込みの仕事に就いていた。ここでは2年ぐらい勤めた。

その後、駅で自衛隊入隊の勧誘を受け、お金がいいので入隊。2年間勤める。月25万円ぐらいの収入があった。自衛隊ではお金の価値観が少しおかしくなっていた。手元に入る金額が大きくなったので給与をもらおうと、（彼女がいる人は休みに会いに行ったりするけれどもそうでない人は）お金の使い途もないので休みになるとみんなであそびに行ったりほとんど使っていた。みんなで行けば帰りには飲みにも行くのでたくさん使っていた。また、自衛隊にいる間に資格は取れなかった。資格を取るには輸送隊に入隊しなければ取れなかったが、学校出のエリートが配属されるころなので駅手配の「ペーパー」はそういうところには配属されなかった。4年勤めるとその経験を活かして、海外での求人も得ることできるが、ほとんどの人が2年の任期で辞めていた。「訓練しんどいのに、あんな給料がいいからだけ。最初の2年超えて（自衛隊おるやつなんか）おらん。同期ではひとりやったんちゃうかな。「戦争が始まるわけでもないのに、なんで鉄砲打つ練習してるんやろって寂しいなって（辞めた）」。

その後、自衛隊内にある「ハローワーク」で電機会社の求人を見つけ正規社員として就職。自衛隊の「ハローワーク」には全国各地の求人がたくさん掲載されていた。その会社に就職して東京で2～3年ほど働く。給与は月17万円で、ここも住み込みで働く。この人はずっと住み込み仕事を続けている。このこ

ろに、自衛隊の退職金 50 万円（2 年間・満期まで働く）と退職金 50 万円がでる）うちの 30 万円を使って運転免許を取っている。

求人条件は電機会社で勤めるのは最初の 2~3 年だけで、その後は町場の電器屋で勤めることになっていった。町場に移ると、収入がだいたい半分に減るので、「自分はこれ以上、続けるのは無理だ。もういいです」と言って退職した。その後、千葉県の新聞販売店に勤務する。ここでは住み込みで 4 年半ほど働いた。この仕事をもっとも長く、本人としても厳しいなりに生活は安定していたという。

業務は新聞配達・営業（拡張員）・集金などをして収入はだいたい 18 万円ぐらいあった（基本給あり）。当時の収入は、多いときで 27 万円。配達のみだと収入が月 7 万円程度（住み込み代はなし）で、それでは生活できないので集金と営業（拡張員）もしていた。配達は朝刊と夕刊をして、1 回の配達で 300 件配っていた。新聞の配達は雨の日も雪の日も道路が凍ってるときも、どんな天候のときも配達しないといけないので大変。道路が凍っていて、バイクで転んでも配達したときもあった。今、また「新聞配達の仕事をやるか」と聞かれても「体力的にももう無理だと思う」、「若かったからあれだけできた」。

営業はノルマが厳しく、かなり「大変」だった。ノルマは到底達成不可能なもので、契約件数が 10 件しかない地域に 20 件の新規契約の獲得を期待するようなものだった。ノルマ達成のために自分自身で新聞をとらなければならなかった。が、本人が担当していた地域はまだ「良い」（契約がとりやすい）地域だったので継続して仕事を続けることができたという。

千葉県は新聞の激戦区であったため「大変」だった。「新規」や「継続」で契約者を確保するために自分で大量の金券（ビール券）を購入して各家庭に営業をかけなければならなかった。映画券などでは相手にしてもらえないし、販売店から出してくれる金券はせいぜい 3 枚程度。そんな枚数で契約なんてとれない。また激戦区であるため、相手の要望も過大。何万円分ものビール券を請求されることもあった。それを給与の中から自腹で用意しないといけないのである。また、新聞の勧誘（拡張）に行くと古紙の回収もしてほしいと言われることもある。要望に応えるために、自分で車を購入して、顧客の古紙回収もおこなっていた。配達所にも車はあり、それを利用することもできたが、必要なときに限って他の人が使っていることがあって不便なので自分の車を購入した。なお、集めた古紙は業者が店舗に取りに来ていた。車を購入したときのローン 150~200 万円を組んだが支払いは終わっている。借金はない。「車もあるけど…」仕事のために原付バイクの免許も取っている。車も所有して維持費がかかったが何とかお金も回っていた。

Aさんは長期間、新聞販売店で働いていたが、他の人は仕事がキツイためなかなか定着していなかった。朝、同僚が起きて来ないので部屋を開けると逃げていないことも多かった。集金では 70 万円ぐらい手許に集まることになるので途中でお金を持って逃げた人もいた。多いときは 10 人ぐらい住み込みで働いていたが働く人の出入りは激しかった。

ここで勤めている間に、車との接触事故で全身打撲で 1 ヶ月半ほど入院したが、入院費などは相手が支払ってくれたので金銭的には特に問題はなかった。Aさんの入院歴はこのケガのみで特に大きな病気をしたり入院したりしたことはない。

退職の転機は突然やってくる。このころ、東京にいた母親は退院し、自宅で療養していた。母親は 70 歳の初め。Aさんは離れて生活しながらも会いにいけるときは会いに行き、電話連絡もよくしていた。あるとき、3 日間母親が電話にでなかった。虫の知らせもあり、どうしても気になったので大家さんに頼んで母親の住んでいるアパートの鍵を開けてもらった。大家さんは最初「鍵がかかっている」と言って拒否していたが、「鍵を壊してもいいから、今から自分はそっちに行くから、とにかく開けて（母親の様子を確認して）くれ」と頼み込んだ。母親は死んでいた。「母親の死に目にも会えなかった」。その後、新聞配達

や集金の仕事を少し続けたが、原付で配達をしていてもボーッとすることが増えたり、集金に行ったときに応対する主婦がみんな母親に見えてしまったりした。かなりつらい日々が続いた。事故を起こしてはいけないし、ノイローゼぎみだったので新聞販売店に事情を話して辞めた。そしてあてもなく車で走り続けた。南へ南へと走り、沖縄まで行った。このときは「もう何がなんだかわからなかった」。

沖縄に着いてからはしばらく貯金で生活をしていてお金もなくなってきた。車もガソリンを入れられなくなったので売った。そして沖縄ではじめて派遣の仕事をした。派遣先は米屋だった。住み込みでなかったのが那覇にあるドミトリーで生活をし、そこから30分ぐらいかけて自転車で通っていた。10日ぐらい働きそこでの仕事も終わり、同じ派遣会社から次の仕事を紹介してもらった。

次は広島県。そこまでの移動費用は給与から天引きされた。ここでは「個室完備」と言われていたが、実際は3LDKの部屋に3人同居であった。「扉を閉めれば個室になる」と言われた。給与は寮費やふとん代などが引かれ、手元に7万8千円ぐらいしか残らなかった。職場で全く同じ仕事をしている他の人（正社員）にどれくらい給与をもらっているかきくと、全く違った。その人はだいたい一時間1,100円もらっていたが、自分は時給700円ぐらいしかもらっていなかった。そのとき正社員の人から「派遣はピンはねされてるんや」と教えられた。派遣で働きはじめて間もなかったのもそんなことは知らなかった。同じ仕事をしていてあまりにも給与が違うのでバカらしくなり3ヶ月ぐらいで辞めた。

広島の次は場所を覚えていないが、別の地域に移り、派遣で自動車製造の仕事に就いた。そこで腰を少し痛めたが、今は痛まない。派遣では長く続けても1年ぐらいだった。また、いくつもの派遣会社に登録した。派遣では全国を転々としていたのであまりどこに行ったか覚えていない。覚えているのは沖縄・広島・福島・福井・名古屋ぐらいである。

派遣で仕事をしているときは社会保険・雇用保険・健康保険はなし。それまで正規雇用されているときは支払っていた（新聞販売店勤務のときは現金が手元に残らないので国民健康保険のみを支払って、他は支払ってなかった）。

派遣で働きだしてからの5年間は、つぎのようにして仕事を探していた。コンビニにあるフリーペーパーを見て住み込みでできる派遣の求人を見つけ電話をし、派遣会社に迎えに来てもらう。登録をし、派遣先に連れて行かれ住み込みで働く。しかし、ほとんどは仕事の内容が登録時に聞いたときと違ったり、寮費（6万円）やふとん代などが差し引かれ手元にお金が残らず生活するにもぎりぎりの雇用条件だった。派遣会社は「足元をみて、ピンハネばかり」。提供される住居のほとんどはひどかった。「個室完備」と謳っていても行ってみれば3LDKに3人が個室を利用する形態であったこともある。鍵がないところもあったし、ひどいときは木造の建物もあった。働きだしても手元にお金がないので前借りに前借りを重ね、給与がマイナスになってしまいバックレることになる。そして、食事を我慢しながらベンチの上に寝たりして野宿をするが、それでは生きていけなくなるのでまたコンビニに行き、フリーペーパーを見て求人を探して、また派遣に就く。その繰り返しであった。また、派遣の登録に行くともらえるクオカード等を目的に登録を繰り返したこともある。その日食べていくのが大変だったので登録をとりあえずし、クオカードをもらって1日の食費を、そのクオカードでまかなうのである。

なお、Aさんは山谷の炊き出しに行ったことがあると言っていた。そのときも派遣先からバックレて、その近辺で野宿していた。山谷ではNPOなどには行かなかったし、あることも知らなかった。また、山谷の寄せ場から仕事に行ったことはなく、ここからもフリーペーパーで見つけた「派遣」の仕事に就いた。

派遣をはじめから「正規」で働きたくてハローワークに何度か行ったが「住所がない、住民票がない、公園で生活をしている」と言うと、職員からは「住所が近くにないと難しいですね」と拒否される。派遣でこんな生活を続けていくのは無理だし、キツイことはわかっているが、「こんな状態の自分でもす

ぐ働けるのは派遣しかなかった。やるしかなかった…。また「派遣先で友達などはできなかったか」という質問には、「友達どころか周りの人とはけんかや泥棒ばかりだった」と。警察もきて騒動になったこともある。鍵のない部屋も多かったので A さんは寮の天井にカードなどを隠して生活をしていた。派遣に就くまでの仕事でも友達と言える人は特にいない。自衛隊のとき一緒に遊んでいた人も辞めたあとは連絡をとることもないし、新聞販売店などでも友達はいなかった。

A さんは行政にも相談に何度か行っている。しかし住民票がその地域になかったり、対応できるところがその地域になかったりと相談にならなかった。

「行政以外の相談場所や派遣会社に相談や苦情などは言わなかったのか」という質問には、派遣先や派遣会社に相談する前にバックレた。相談したって、「無理ならやめろ」と言われるだろうし、ユニオンもみんなグルだと思っていた。弁護士に話をしたことがあるが選んで仕事をしているのだから仕方がないというようなことを言われた。相談する前にバックレてまた次を、別を探した方が早いのでそうしていた。派遣では月払い制だったので途中で逃げた場合、振り込まれない場合もあった。また、給与の金額と寮費、ふとんや他レンタル代などの総計が全く同じ金額にされ、全く給与が振り込まれないこともあった。

A さんは、「派遣会社は自分のような、親もおらず、家もない人間の足元をみている。食べ物にしている、だからあんなでかいビルも建てられるほど儲かっているんだ」と声を荒げて言っていた。

野宿は派遣先をバックレて次の派遣に就くまでの間なので長期に渡るものではない。お金があったときは、まんが喫茶やネットカフェにも泊まっていたこともあるが、すぐにお金が尽きてしまったのであまり利用してはいない。A さんは「自分は新聞配達の仕事を辞めてから派遣で働きはじめ、自分はそこから転げ落ちてしまった」。「自分らはモノなんです。モノ」と何度も繰り返していた。「モノ以下。自分たちはゴミである。派遣先の営業はゴミを拾いにきて、そして工場など派遣先に落としていく。自分たちはゴミだ」とも言っていた。

派遣の形態は 3 交代制が多かった。5 勤 3 交代制。1 直 AM 8 : 00 ~ 4 : 30、2 直 4 : 30 ~ 12 : 00、3 直 12 : 00 ~ 8 : 00、1 直を 4 日続けて次 2 直… というような形態でかなりきつかった。派遣先 (A さんはほとんど製造業) の年齢制限は 40 歳ぐらいだが場所によっては 50 歳ぐらいの人もいた。年齢制限もあって登録時にごまかしている人もいるようだった。

ここ (自立支援センター) に辿り着くまではつぎのような経緯であった。ある派遣会社から福島県の半導体を製造する工場に就いていた。その後野宿、再度同じ派遣会社の仙台支社に電話し、仙台から営業の人に来てもらい仙台に行った (「派遣会社はどこからでも迎えに来てくれる」)。そこでは名古屋に本社があるからそちらに行けと言われ、名古屋本社を經由して福井県の会社に派遣された。福井の派遣先は 1 週間ほど働いてバックレた。それから自分の居場所を確保したくて福井県のある市の役所に相談に行った。すると「ここでは対応ができないので京都か大阪、名古屋には対応できるところがあるからどこがいいか選べ」と言われ、母親が住んでいたこともある大阪を選び、片道のお金を役所に借り大阪にやって来た。大阪に着いて駅員に一番近い区役所を教えてほしいと尋ね、相談した区役所を教えてもらった。そして巡回相談員につないでもらった。そこでは巡回相談員に「二度と派遣なんかしてはダメだ」と言われた。

現在は就職活動中。これまで製造業が多く工場でも働いてきたので、希望は工場の仕事だが、「派遣はピンハネされるので派遣には行きたくない」。今ある工場の求人はほとんどが「派遣」なので、「工場は無理か」と考えている。また、警備の求人もあるが、働き始めは寮での生活が条件のようである。寮生活だと辞めたときにまた野宿になるかもしれないという不安がある。通いの仕事を希望している。ここ (自立支援センター) を出てしまってから仕事が切れたときに「家がなくなるのは怖い」。「住み込みは辞めたときに困る。帰る家がないから…」。

また、結婚については「結婚については考えられない。自分だけでも精一杯なのに人を養うことなんて考えられない。相手に迷惑をかけるだろうと考えると自分がつらくなる。家がなかったり、勤めが続くかどうかもわからない、そんな将来への展望がないのに親へ頭を下げに行くことはできないだろう。だから無理だと思っている」と。現在、親族との連絡についてはおばさんやおじさんがいるが取っていない。「いい年なのに今更何も言えない」。

「賭け事などは特にしない、新聞販売店勤務のとき少しパチンコをしたぐらい」。

現在は健康である。

取得資格は普通免許以外にフォークリフトの資格も持っている。フォークリフトの資格は「派遣会社で必要だと言われ取らされた」。資格は持っているが実際に有益であったことはほとんどない。

68. 男性 40代後半

Uさん。広島県出身。父は同じ町内にある造船所勤務、母は主婦。兄3人、姉2人の六人兄弟の末子。長兄とは10歳以上離れており、一番近い次姉とも6歳離れている。幼いころ長兄は「蒸発」しており、存在も知らなかった。小学生のときに父を亡くす。既に20代だった三兄も父と同じ造船所に勤めていたのので、その働きで家族を養ってくれていた。

小中学校にはまじめに通っていたが毎日あそんでいた「悪ガキ」、いじめられもいじめもしなかった。中学校を卒業して、私立の高等学校に進学したが、自転車と船とバスに乗る通学のために朝5時すぎには家をでる生活で、家が貧乏だったこともあり、はやく働きたいと考えて一年で中退。17歳で職業訓練校に、そこで「電機や機械は苦手」なので「水道配管」を選択、その勉強には苦勞することもなく資格をもらって出た（いまは紛失）。

母は亡くした。兄弟みな実家を出てからは、最後まで本人が母に仕送りをしていた。

おおまかに3つの期間。第1期として職業訓練校の後に外食産業を転々とした20代前半まで。第2期として奈良県の牧場で働いた約20年間。第3期として3年ほど前から派遣などの仕事と野宿を繰り返している現在。

第1期はおそらく10代から20代前半。当時の記憶はちぐはぐで、本人もよく憶えていない様子。職業訓練校時代の居所も不明。水道配管の資格はとったがその仕事をしたかったわけでもなく、はじめは中華料理屋で6年くらい働いていたと言った。仕込み、皿洗いなどしたが料理をさせてもらえるところまではいかなかったという。だがよく聞くと、大阪のそば屋、東京の長兄の弁当屋や食堂など、いろいろな食堂を転々としていた様子。この期間も住み込みと住居喪失期間を繰り返していたものと思われる。広島県の中華料理屋にも何度か戻り、最終的に大阪のそば屋に戻ってきたらしい。

第2期の牧場が最長職。20代前半のころに、大阪のそば屋の店長の知人が他府県で牛の仕事をしており、その紹介による。はじめそこで働くものと思い連れられて行ったら、また別県の牧場へ連れて行かれ「おどろいた」という。そこは乳牛ばかり60頭。家族以外の従業員は自分ひとりだった。プレハブのような「はなれ」があてがわれた。毎日朝5時前に起床、乳しぼり、片付け、餌やりなど一通りの牛の世話をしていた。「楽しいものではなかったが、さほど苦もなくよく続いた」。はじめは家族と一緒にごはんを食べたこともあったが、いつからか気兼ねして奥さんに弁当をつくってもらい、「はなれ」で一人で食べていた。親方は自分と10歳も離れてなかった。仕事を辞めたきっかけは「親方のせがれとぶつかった」のもあった、という。

数年前、牧場を辞めてすぐ大阪へ出てきた。天王寺をうろうろして梅田へ移動し、ビルの階段にもたれかかるように夜を過ごしたが「どうにもならん」と思って中之島の市役所へ歩いて行ったところ、巡回相

談員につながれ三徳寮に2週間入った。そして自立支援センターへ。求人情報誌でパン製造業の仕事をみつけその次の年から働きはじめ、春には退所。40万円ほど貯めて大阪市北部でマンションを借りた（このころに住民票を移したようだ）。不動産屋は自立支援センターの者だとわかっていたが有名企業勤務ということでよくしてくれた。家賃4万3千円、保証人は兄(?)。テレビと布団を買った以外、ほとんど荷物は持たなかった。従業員カードには「準社員」と記載されており、社会保険もあった、手取り月収15~6万円だったという。だがその夏、以前知り合った女性と一緒に暮らしたくて、仕事を辞めて女性の暮らす都道府県に行ったが、仕事もなく、うまくいかず、再び大阪へ戻る。1万円で買ったテレビも売り（売価2,000円）、マンションも出た。お金に困ったときには、ときどき長兄に無心していた様子（三兄にも?）。

その年の初冬になって再びどうしようもなくなって区役所へ行き、自立支援センターに二度目の入所。派遣会社を通じて仕事をみつけ、大阪市内の工場で働いた。携帯電話ボディのバリとり（表面仕上げ）、5人1組のグループ作業、朝8時半から夕方5時までの定時、ノルマに届かなかった時など残業が入り19時まで。手取り月14、5万円。途中から朝8時からの勤務になり、仕事内容も顕微鏡による検査など難しくなる一方で自信も失い、3ヶ月目の契約更新をしなかった。工場は100人位の規模だった、中国人、フィリピン人のグループもたくさんいたとのこと。このとき、実は仕事を辞めたにもかかわらず、団体生活も苦しくなり仕事に就いたふりをしたまま退所した。いわゆる「敷金・礼金なし」のマンションを借りたが、保証人紹介料の1万5千円など色々かかり頭金17~8万円かかった。駅前で、家賃5万円。仕事をすでに辞めていて次の仕事もすぐには見つからなかったのひと月分しか払えなかった。だが鍵を付け替えられることもなく、夜寝る時間だけそっと帰ったりしていた。この頃も長兄に金を無心したり食事を友人におごってもらったりした。

新潟へ行き、ある派遣会社から紹介され金属粉をエアで集めて回収する仕事の工場を見学、健康診断を受けたのだが、そのときの尿検査でなかなか出なかった（午前中いっぱいかかったとのこと）ことにより「ドクターストップがかかった」と説明され、この仕事もなくなった。診断結果すべてでるには1週間かかると言われたが寮費も払えないのですぐに大阪へ帰ってきた。その交通費は往復とももらえた。

今年の夏、ミナミにある派遣会社を通じて中部地方の黒板工場で木枠に釘を打つ仕事をしたが、給料は残らなかった。時給1,000円で1日6~7時間労働なのだがいろいろ「経費」が引かれる。一週間で辞めた。つぎに同じ県で胡麻をとかして缶でうけて出荷する仕事があったが、作業が遅くやり直しが多いということで一日で首になった。さらに紹介を受けて近畿地方の住宅建材を切断する工場で働いた。寮から車で工場までの送迎があった。2人1組での作業、黙って辞めた。この3つの仕事で3枚の明細を見せられたが、「これでもうち赤字ですわ」と言われ、1円も振り込まれなかったとのこと。

寮の大家がくれた自転車で寮を出たとき、所持金は2,000円だった。駅前の屋根付き休憩所で野宿しながらハローワークへ行ったり、派遣会社へ行ったりしたが、「金属や電気の工場はいやだ」などの条件を主張したためか「紹介できる仕事はない」と言われ1週間過ごした。そして大阪まで自転車で帰ってきた。このときには所持金はほとんど無く、公園で2週間ほど過ごした。食事はコンビニなどで分けてもらい、野宿しながらハローワークへ行ったがどうしようもなく、再び区役所へ行き、三徳寮へ。医療センターの紹介で市更相、区役所などを歩いて巡るも前回の入所から半年経っていないなどの理由で自立支援センターに入れず、3週間ほど三徳寮生活ケアセンターを出たり入ったり。最終的に巡回相談員に融通してもらい入所。

ギャンブルはしない。タバコも吸わない。酒はビール4、5本呑むこともあるが、呑むようになったのは40代になってから。趣味はカラオケ。歯がほとんどないように見える。入れ歯は一度目に自立支援センターに入ったときに治療したとのこと。歯を悪くした理由は聞かなかった。持っている手帳は国民年金

の手帳のみ、健康保険証はない。他に銀行の通帳と郵便貯金の通用。携帯電話は7月くらいから止められている。持ったのは一度目の入所後。足も悪い様子。本人はとくに痛くないというが、左足親指が内側へ歪んでいるため「びっこ」をひいているように見られる、またそのため左足中指に靴擦れが出来るとやはり痛いようだ。この症状は、こどもの頃にはなかったという、牧場時代からか。また、牧場時代に業務用の換気扇で右肘をぶつけて切り15~6針ほど縫ったことがある以外、大きな病気をしたり入院したことはない。縫ったときにも、次の日から包帯だけで働いた。

荷物は牧場を出たときからほとんど衣類くらいでスポーツバッグひとつで十分だという。この先の仕事については、重労働はしんどい、掃除には抵抗がある、警備も苦手とのこと。本人も、パン製造業の仕事を「辞めんかったらよかった」とこぼした。また、最後に借金の有無をきくといくらかサラ金があったが兄弟の助けもあって完済していると応えた。これの理由も聞かなかった。

69. 男性 40代前半

家族は父母（すでに死去）、第一人の4人家族。

生まれは大阪市だが、生まれてすぐに奈良県に移り、そこで育つ。父母はビニール電線の製造会社で両方とも働き、会社の寮に4人家族で暮らしていた。中学生になったとき子どもが大きくなったということで部屋数が増えた。ただ高校のとき隣人のテレビの音が気になって眠れないことがあった。

「勉強は嫌いだったが」特にいじめたりいじめられたりはなかった様子。高校時代はあまりしっかりした目標もなく、「だるいな」と思いながら学校は通っていた。高校卒業後（すぐかどうかは分からないが）専門学校に行き、旅行添乗員の養成コースに行くが、20代前半に中退。

入院は鼻の治療のときだけで、特にからだの悪いところは今までない。施設入所歴などもない。

専門学校中退後「アルバイトニュース」で見つけた配送関係の会社に正社員で勤めた。社会保険関係はもうひとつ質問に要領を得ず。ただし、「休みで給料を引かれることはなかった」ので、正社員と判断していいだろう。いわゆるセールスドライバーで営業や取引先からの注文も聞かなければならず、いくつかのこと（配送ルートや要件）を段取りよくすることが自分にとっては難しかったので辞めようかと思っていたが、途中で車の事故を起こし、会社から「明日から来なくていい」と言われて辞めた。営業関係は苦手。

退職後は20年間ずっと派遣。いろんな派遣会社に登録して、半年未満（契約満了と自分で辞めたのが半々くらい）ばかりで、20箇所くらい行った。ただし、30歳位の時に2ヶ月だけ正社員になっていたときがある。プラスチック樹脂の着色の仕事だったが、粉がかかって手がかぶれるので、「よそを探したら何とかなる」と思って辞めた。

20歳代では機械加工やラインなど製造関係ばかり。途中D自動車で6ヶ月間期間雇用の直用で働いたこともある。このときは通いで行っていた。30歳の手前には建築の仕事も阪神大震災後の建物の解体とか片付けにも行ったことがある。これも「派遣」と言っていたが、「建設専門」のようなので「人夫出し」と思われる。これも通いで行っていた。

一番長いのは電気メーカーで携帯電話の組み立ての仕事をしていた。4年くらい前まで5年間派遣で行っていた。給料は振込みで日給月給。雇用保険はあったが退職金や厚生年金・健康保険はなし。最初日給9,000円だったが途中から8,000円に下がった。このときはまだ自宅マンションにいたので、通いで行っていた。

運送関係は、自立支援センター入所前の最後の2年8ヶ月くらい。派遣（日払）で週3回ほど運送会社で仕分けの仕事をしていた。

今まで行っていた仕事の通勤時間は1時間~1時間半くらいまで。大阪府の東部に部屋を借りていた。

派遣会社は「時給制」で休むと引かれる。派遣で行っている先のいろいろな会社から正社員にと声をかけられたことはあったが、「正社員になっても（仕事を）長く続けられるかどうか」と不安になり、正社員になることはほとんどなかった。当時のことを振り返って、「あまり将来のことは考えていなかった」と言う。

派遣会社には自分から連絡していた。20歳代には登録している派遣会社のほうから連絡があったが、30歳を過ぎてからは会社からはかかってこない。事務所の方に行ってもその日に仕事があるということはなく、2週間くらい待たされる（スポット派遣ではなく、期間契約の登録派遣に行っていたのではないか）。

大阪府の東部で部屋を借りて住んでいたが、家賃を3ヶ月滞納し、ロックアウトされて部屋を出て行かなければならなくなった。家賃は44,500円だったが、収入が少なくなって滞納するようになった。

部屋を出たので親や弟が住んでいた所に行ったが、親の入院で治療費がかさんだこと、また派遣先からの通勤時間が長くなって睡眠時間が非常に短くなったので、数年前に「会社の近くの公園で寝たほうがいい」と思い、家から出てきた。親の死去、その前後は不明。現在、弟と連絡は取っていない。親は死去している。2年3ヶ月間大阪市内の区役所近くで寝ながら、1週間に3回ほどそこから自転車で3分くらいのところにある運送会社に派遣で行き、仕分けの仕事をしていた。1日6,000円の日払で月平均72,000円ほどの収入。携帯で自分から派遣会社に連絡していた。「自分から連絡しなければ会社から連絡は来ない」。

公園ではテントを張らず、ベンチの横に自転車を置いて、雨が降った時はビニールを自転車にかぶせて寝ていた。朝、目を覚ましたら別の場所に移動してそこで寝ていた。他の野宿している人やテントを張っている人との交流はなかった。

マンションに住んでいた頃にカプセルホテルやサウナに泊まったことはあるが、住居を失ってからは利用したことはない。ネットカフェについては「それは何ですか」と逆に聞く状態で、利用どころかどんなところか「ネットカフェ」という用語さえ知らなかったようだ。

行政関係への相談はしたことがない。役所に「福祉事務所」や相談できるところがあるとは知らなかった。巡回相談も1年前に声をかけられるまでであることさえ知らなかった。

野宿者を支援している人たちには出会ったことはない。

警察には、野宿中何回か夜中の12時や2時頃寝ているときに寝ているベンチをけられ、「この区で野宿しているようなやつはいない。出て行け」と言われたことがある。別の場所でテントを張って野宿している人がいることは知っていたがそのようなことを言われ嫌がらせをされた。

1年前に巡回相談員から声をかけられた。自立支援センターへの入所を勧められたが断ったが、そのときに連絡先をもらっていたので、自分のほうから巡回相談に連絡して入所することになった。釜ヶ崎のことは知らず、ケアセンター入所しか行ったことはない。

野宿中、警察に見つかって会社にも野宿しながら通っていることがわかった。派遣会社と派遣先の運送会社の両方の担当者から「そんなことしてもらっては困る」と言われて行けなくなった。会社（派遣元か派遣先かは不明）は、前から野宿していることは知っていたようだが。

その運送会社に行けなくなって派遣会社に頼んだが「夜勤の仕事しかない」と言われ、「無理なのかな」と思って行かなくなった。

生活に困りだしたので、自分から巡回相談に連絡をした。

借金はない。消費者金融から借りたこともないようだ。「借りようと思えば健康保険証などがあるから借りられないでしょう」という感じで、からだは悪いところはないということなので国民健康保険証を作っていなかったのだと思う。

運転免許証は持っていたが、紛失した。期限は切れていると思う。相談すれば更新可能な時期であるこ

とはアドバイスした。

70. 男性 20代後半

Aさんは、大阪市西部にて2人兄妹の長男として生まれた。子供の頃から両親は共働きで父親はタクシーの運転手、母親は清掃等の仕事をしていた。年金暮らしの祖母がいる。実家には、2年前に電話連絡をしてからは、連絡をしていない。

小学校時代の得意科目は理科、好きな科目は道徳、不得意科目は算数で科学クラブに入っていた。中学校時代の得意科目は科学、不得意科目は数学と英語で将棋クラブに入っていた。

ネットカフェ等の利用は、友人と遊びで利用したことが1度あり、寝るための利用は、祖母の家を出てからの3日間である。場所は難波でナイトパック5時間980円を2回、8時間とシャワー利用の1,500円を1回である。野宿は2日間だけで、ネットカフェに泊まるお金がなかったからである。最初は公園の児童遊具で寝ようとしたが寒くて眠れずマンションの人目につかない最上階で寝た。

現在の健康状態は良好。あいりん地域に来たのは、今回が初めて。他の支援団体の利用はなし、シェルターと炊き出しも利用したことがない。

家庭の事情で幼稚園には行けなかった。小学校のとき、父の仕事（タクシーの運転手）の都合で名古屋市に引越。小学校高学年のとき同級生からのイジメが始まった。学年が上がると母親のサイフから3〜4万円（生活費）を抜き取り、平日に学校を休んで、1人でデパートで買物やゲームをしていた。お金は1日で使い切った。こういう事を3回ほど繰り返した。デパートの店員に補導されたこともあった。家の借金は自分のせいだと考えている。

中学校に入って、家の借金が原因で夜逃げ同然で北陸に引越。その時、両親とも働いていた。その後、借金が原因で大阪市の祖母の家に引越。両親共、ギャンブルと酒が好き。その後、しばらくしてからマンションで生活。同級生からの短期のイジメがあった。自分の友人もイジメられていた。イジメの原因は不明。

中学卒業後の進路については、工業高校を希望、ボーダーラインぎりぎり、がんばれば可能性があると言われた。しかし、両親からは就職を勧められた（妹も家庭の事情で高校には進学していない）。そして、大阪府北部の居酒屋に正社員として就職、仕事は調理補助、給料は14〜15万円、寮は市内にあった。「将来は自分の店を持ちたい」という希望があり調理師の専門学校に行くための貯金をしていた。しかし焼き物等はできたが、魚をさばくのが苦手な調理師を断念。仕事も1年で辞めた。辞めた時の貯金は30万円位あった。

求人誌（100円）から応募して、家からの通いで新聞配達の新卒社員に就く。仕事は配達・集金・営業で給料は16〜17万円、ボーナスが年間20万円。家には給料の中から5万円位入れていた。しかし、営業が苦手で成績が上がらずにイヤになって退職。営業は継続の契約が1件1,500円、新規の契約が1件2,500〜4,000円だったそうだ。辞めた時の貯金は10万円位。辞めた後は一时无職。遊びたかったため主に中学時代の同級生とゲームセンターや友人の家に泊まったりしていた。このころ一緒に遊んでいた友人は高校生だったので、高校に行けば、良かったと思っていたそうだ。その後、ハローワークから2〜3回清掃やレンタルビデオショップの面接に行ったが決まらなかった。学歴が、中学卒業がネックになっていたと言っていた。そして、新聞の広告求人から応募して、家から通いでパチンコの店員の仕事に就いた。しかし、友人が作れなかったことが原因で半年程で退職した。

20代前半、実家が契約していた、新聞の販売所の紹介で新聞配達の仕事に就いた。仕事は配達・集金・

営業であった。給料は手取りで20万円位。寮はワンルームマンションであった。20代半ばには、給料は手取りで25万円位になっていたようだ。しかし、新聞の集金のお金15万円（販売店に借金）を使い込んで退職。その後、派遣会社から車のエアバックの製造の仕事に就く。赴任した時に実家に生活費の送金の電話をした。送金はあった。この時以来、実家には連絡していない。仕事はそれほど、きつくはなかった。手取りは18万円。寮はマンションで、年下の男性と2人部屋であった。寮費は35,000円。およそ1年後、2日無断欠勤をし、1週間後の給料日の後で再び無断欠勤をして解雇された。無断欠勤が3回で解雇とのこと。この時は、兵庫に遊びに行き、朝帰りをして出勤ができなかったようだ。その後、求人誌から応募して兵庫の新聞配達の仕事に就いた。ここでも給料日の後に遊びに行くと、無断欠勤を繰り返して解雇された。退職時に販売店に50万円の借金（給料の前借17万円、家賃2ヶ月分15万円、その他敷金・礼金・電気・ガス代等）があった。その後1ヶ月祖母の家に居候。その間に、自動車工場の期間工に応募して、工場見学には行ったが就職しなかった。そして祖母の家を出て難波へ。NPO 釜ヶ崎支援機構お仕事支援部に相談に来る。

71. 男性 40代後半

出身地は大阪市。学歴は工業高校卒。家族は父母・兄・弟・本人（以後、Aさんと略記）の5人家族だが、父は当人20歳代前半のとき、母は当人30歳代初めのときに死去。兄は蒸発し、弟は結婚して家を出たため今は連絡を取っていない。本人は結婚歴なし（一時期女性と一緒に生活していた時期はあったとのこと）。

5人家族で父は工場勤めだったようだが詳しいことはわからないとのこと。両親はまだAさんが小さい時に離婚して、Aさんら子供は父に引き取られて育った。

高校卒業時、学校からの斡旋でN自動車に就職し、研修後関東にある工場のラインについたが、1ヶ月で退職し大阪に戻ってきた。関東方面に違和感がありなんとなく辞めたとのこと。「関東は肌に合わない」とのこと。

大阪に戻ってから、貴金属の陳列棚を作っている会社（町工場）に正社員で勤めた。正社員は5人ほど、家族経営で、後はパートが10人ほどの小さな会社だが、同級生の父親がその会社の下請け業者をしていたし、Aさんも高校のときにアルバイトに行っていたことがあるので正社員になり、20代半ばまで6年間ほど勤めた。仕事は製造と配達で、この仕事のときが今までで最も給料が良かったし、やめるときは退職金ももらった。しかし、最後のほうは基本給が上がりなくなり手当てだけしか上がらなくなったので、「給料上げて」といったら「ちょっと」という感じだったので、それならと思い辞めた。会社が言うには世間での年齢平均給は出しているとのことだったが。

そのときは、友人と2~3人で文化住宅の1室を借りてみんなで住んでおり、そこから通っていた。「当時はそうやって生活している若い連中が結構いた」とのことである。

この貴金属陳列棚製造の会社を辞めた後は、親戚が保険の代理店をしていたので、その関係でAさんも3~4年間、保険の代理店をしていたが、たいした金にはならず、生活はかつかつだった。このときは健康保険（国保）に加入していたらしい。「保険屋が健康保険に入っていないのはまずいだろうと思った」らしい（健康保険に加入していたのはこの時期だけとのこと）。

20代後半からは20年間派遣の仕事をしたり肉体労働をしたりして働いてきた。派遣からの仕事の職種は、そのほとんどが製造業でのラインの仕事で、倉庫での作業に就いたこともあるらしい。肉体労働とは、具体的には、90年前後に、人夫出し飯場に直接通いで行って建設現場で日雇いで働いていたことを指している。しかし、「西成」から仕事に行ったことはないとのこと。この建設日雇いでの日当は、11,000~

13,000円だった。

最初に行った派遣会社（「今はもうないだろう」とのこと）の派遣先（就業先）は何度か変わったが4～5年はその派遣会社から仕事に行っていた。現場によって日当は違うが、だいたい8,000円＋残業代。賃金の支払い形態は日給月給である。家電製品の製造が主で、最初は家電メーカーSの工場に行った。寮は個室ワンルームで、寮費は会社が半分負担してくれていた。Aさんは「派遣も人夫出しと同じ」と言っていて、派遣に対しても人夫出しに対してもあまり悪いイメージは持っていない様子。というよりもAさんは「派遣会社も人夫出しも一緒」と語って、きわめてリアルな認識を披露していた。90年前後くらいにも派遣はあり（当事は専門26職種のみ合法だったから）、Aさんの場合は違法派遣ということだが、そうしたことは結構広くおこなわれていたようだ。当時はサービス関係への派遣はなく、製造関係が主だった。当人いわく「まじめに仕事をしていれば給料は安い生活はできる。ひとつのところが終わっても次のところを紹介してくれる」。社会保険はないが、社会保険に入ろうと思えば入れる。ただし、「事業主負担分を含めて当人の給料から差し引かれるが」とのこと。Aさん自身は一度も入ったことはないと言っていた。なお、Aさんは近年問題となっている「スポット派遣」のようなきわめて不安定な就労は経験していないとのことで、「日銭欲しさ」にそうした仕事に就く人たちについて、幾分か批判的な口調で語っていた。

社会保険は陳列棚の製造の正社員だったときのみ。国保や国民年金も保険の代理店をしていたときのみ。

寮付きの派遣会社から仕事に就いて数年働いて、一定お金が貯まったら、大阪市内に部屋を借りる。部屋を借りると仕事を辞めてしまい、金のある間は遊んで暮らす、そして遊んでいて金がなくなったら再び寮付の派遣会社に行って、働いて金を貯め、また部屋を借りて引越をする、という生活を繰り返してきたとのことである。寮（仕事）⇔アパート（遊び）の繰り返しである。そしてAさんの場合、「遊ぶ」とは、主としてパチンコで、そのパチンコで飯を食えた時期もあったらしい。釘を見て、出る台を選んでそれで生活できた時期もあった。通算すれば、学卒後30年のうち15年以上は仕事をしてきたとのこと。住むところ（寮以外）は6箇所ほど変わっている。寮に入るときは友人に頼んで車を借りて荷物を寮に持っていく。引越は好きで、ひとつのところにずっと住むより新しい環境に行くほうがいい。大阪の地の人間だから友達があちこちにいるし、「さびしいな」と思ったことはない。

最終的に、家がなくなって6～7年。仕事をやめてから家賃を払えなくなった。テントは張らずにかばんひとつでホームレスしながら解体屋に日雇いで行き、金ができたらカプセルホテルやサウナに泊まった。当時はまだネットカフェや漫画喫茶はない。

その後露天商（テキヤ）の人と知り合いになり、その人の手伝いで今年まで5年ほど働いていた。仕事はたこ焼きで、日当は10,000円だったが、親方次第で日当は変わってくる。

（ホームレスを続けていると）「だんだん金がなくてもこれで生活できるという感覚になってくる」とのこと。ホームレスをしていて何回か巡回相談員には会っていた。1年半前に自立支援センターに入った。自立支援センターではパソコン講習を受け大型免許を取った。その他玉掛の修了証は陳列棚製造のときに取っている。昨年、自主退所。「寮もあるからどないかする」と言って退所し、退所後またテキヤで働いた。「センターを出た人でまじめにしっかりやっている人のほうが少ない」「（自立支援センターで）知り合った人が今は何人もホームレスしている」などと話していた。

テキヤでは、それぞれの仕事量が違うのに日当が同じなのは納得できず、「どないかしてくれ」と言ったがどうにもならなかったのでこの夏に辞めた。仕事もなくホームレス状態。そこで派遣会社に面接に行き、仕事に就けることになったのだが、社会保険の申請をするのに住民票が必要だといわれ、自立支援センターに住民票を置いたままだったので区役所にとりに行ったが、すでに抹消されていたので、住民票を

提出できず、結局その派遣会社からの仕事には就けなかった（今年6月から市民局が自立支援センターや救護・更生施設などに残っている住民票で、本人が現住しないもの、移転していないものの調査をして、職権消除を進めていた）。

住民票を設定するために、再度自立支援センターに入ったのだとのこと。

釜ヶ崎は知っているが、小さい頃からのイメージがあるので行ったことはない。大阪の人間だから、それだけかえって「西成」（釜ヶ崎）の「悪いイメージ」が強いとのことである。

正社員になりたいが、また仕事を探しにハローワークにも行ったこともあるが、派遣は雇ってもらいやすい返事が早い。正社員だと結果の返事が遅い。Aさんは、派遣はすぐに（1～2日で）採用・不採用の結果が判明するから、派遣の方がいいと話していた。お金に余裕があってもなくても、結果待ちの時間が無駄だと思ってしまうらしい。

障害者手帳等はない。きわめて健康で病気をしたこともなく、テントを張らずに野宿生活をしていても体の調子が悪くなったことはないとのこと。

Aさんは、雰囲気は明るくはきはきして仕事もそれなりにしゃきしゃきできそうなタイプに見える。会話も巧みである。また、仕事の現場では、残業を頼まれても正社員に文句を言って断ったりしたこともあるそうで、派遣という立場を自覚している様子である。全体的に、前向き志向で暗さが感じられない。野宿生活を送っていたり、ネットカフェ等で暮らしている層に概して感じられる「暗さ」がなく、どこか「自由人」という雰囲気もある。このような「不安定な」生活を続けていることが、この後どのような結果をもたらすかということもはっきりとわかった上で、このような生活を続けようとしているようである。

「今後の見通し」に関しても、かなり楽観的で、自立支援センターに入ってそこで再度住所設定をして、派遣を通じて仕事に行くと言っていた。

Aさんからすると、最近になって、派遣労働が社会問題化した結果、保険や身分証明など、いろいろと規制が多くなって、かえって仕事に就きにくくなり、また保険料を引かれる等、収入面でも不利益を被るようになった、ということのようである。「今さら年金を納めても、年取って年金をもらえるわけじゃない」と苦笑いをしていた。

72. 男性 30代後半

福岡市に長男として生まれる。父、母、弟、妹の5人家族。父は内装の自営業を行っていた。家は借家であった。父母は本人が中学生の時に離婚する。父はある時突然いなくなった。「借金、あったんちゃうかな〜」。内装業がうまくいかなくなって夜逃げしたのかもしれない。そのときから連絡がなく今どうしてるかわからない。母は糖尿病で体調はよくなかった。その後、糖尿病のため、足の指を切断するようになる。また、左目が白内障になり失明、合併症で腎不全となる。就職してからは、母や兄弟の経済面を本人が支える。

小、中、高と学校ではおとなしかった。母はそれまで働いたこともなかったので母子家庭ということで、市から生活保護を受けて、福岡市内の市営住宅に引っ越す。家賃は当時3万円くらいだった。高校の頃アルバイトについて考えたが、親戚に相談したところ支給額が減るということで就職するまでアルバイトは行わなかった。「そんなん知らんもんね（相談して良かった）」。

中学校、高校では、先輩などにいじめられたりした（不特定の怖い先輩や番町格の人などに時々なぐられたりした。最近、ニュースになるような集中的ないじめを受けていたわけではない。番長格がいてその人らの言うことを聞くような感じ）。中学校では部活をしていた。

「高校デビュー」。高校に入ってから部活には入らず、少林寺拳法を習う。「強くなった気がした」。学校では中学のときと同じようにおとなしかった（「弱い者」であった）が、学校を出ると一変した。街に遊びに行く時は、スーツにサングラス、オールバックという「やくざ」風の装いで出かけケンカをよくしていた。天神を歩いていると（天神だからこそ「やくざ」と勘違いして）みんな避けて歩いたという。たまたま「本物」の暴力団の人に出くわして（組員にはそれぞれこの組かわかる証がついてるのについてなかったので）「お前、どこの組のもんじゃ〜」と尋ねられ、サングラスをとって「すみません、高校生です」と正直に応えたときは「ぼこぼこ」に殴られ、「二度とこんなことすんなや」と言われたこともある（「その後もしとったけどね」）。学校を出てからの様子を知ってる同級生は怖がってたが、それ以外の彼をいじめの人らは知らないままに強圧的だった。本人曰く、高校の時は「異質だった」。

高校を卒業して、正規社員として営業会社に就職するが、高校の進路指導では、具体的な会社を紹介してくれることはなく、アドバイスが中心で後は本人が決めるという方針だった。進路相談ではずらっと就職向けの本が並べられ、「これだけ、就職口ある。ここから自由に選べ」と言われた。

高校卒業後（ちなみに商業高校ではない）、福岡の教材販売の営業会社に正規社員として入社する。有限会社で社員は90人ほどいた。小学生から高校生までが対象で、1つあたり平均30〜35万円くらいの教材を扱っていた。学研など他社と比べると安い方であった。小学校から高校までの教材を全部揃えると500万円ぐらいかかる。学研などは「ばら売り」しないが、その会社はその子にあった教材を売ることを社長の理念としていたので、「数学が得意で、国語が苦手な子には国語の教材だけを売っていた」。

基本給は10万円では後は歩合給（売り上げの4%）だった。1ヶ月300万円というノルマを越せなければ、給料は基本給のみとなる。「ノルマはそんなに厳しくなかった」。ボーナスはあるが保険等はいっさいないので自分で年金、健康保険に加入していた。ボーナスは、歩合で半期給料合計の5%だった。大手は基本給あるかもしれないが、営業は普通基本給はない、歩合制だという。月給は最高で350万円ぐらいになったこともある。今、当時の月給を平均的に考えると60〜70万円ぐらいだった。売り上げは社員のなかでは真ん中ぐらいだった。お金は（就職後も生活保護は続いていたが）母親は入院していたので全額家に入れていた。

最初の3ヶ月は研修ということで上司と一緒に行動し、その後は1人で営業を行い、3ヶ月周期ぐらいで、担当地域が変わっていった。最初は挨拶ということで家を回って家族構成などを調べて、その後何度もターゲットにした家庭を訪問するというスタイルをとる。教材販売は（母）親だけが買うと決めてもだめ。本人（子ども）が買うと言わせないといけない。その会社では担当地域は割り振られたが、どの学年をターゲットにするかなどの営業計画は自分でたてることになっていた。

いい時期、悪い時期があるので自分で計画を立てて営業を進めなければならなかった。給与が大きく変動するので営業計画だけでなく、生活面でも計画を立てないといけない。いい時期が続くと感覚がおかしくなってしまうとお金を使い込んでしまう。金銭感覚がおかしくなってやめてしまった人は多い。受験前などは何百万円もの給料があるが、必ず悪いときが来るのでそのための計画を立てて生活しないとけない。

本人は、自分で計画を立て、自分の力で仕事を取ってくるという営業の仕事は「面白い」と感じていた。本人曰く、「会社は資本金が大切で、売り上げがいくら良くてもだめ。会社の資本金から、営業の経費や会社の人件費、雑費が出ている。それらのことも計算に入れて売り上げを出せるようにならなければいけない」という考え方を上司から学んだ。「ただの営業マン」でなく「ビジネスマン」にならなければ本当の営業とは言えない。営業成績の良い優れた上司はそれらの事を頭に入れて、一年間のしっかりした計画を立てて営業を行っている。自分はまだ、半年の計画しか立てられない」と力説していた。営業マンは会社

の資本金を使って仕事をしている。何の契約もとれずに帰ってきたら、それは単に会社の資本金を食いつぶしてただけでそれでは他の人に食わせてもらってることと同じでそんな営業マンばかりだと会社が赤字になってしまう。会社の利益をあげられずに売り上げがいくらよかっても会社は潰れてしまう。「自分をどれだけ売れるか」「普通」の営業マンはそれがわかってないので売り上げのことばかり言って会社の資本金を食いつぶしてることがある。月に1千万円以上も稼ぐことのあるトップの人は1年間の計画を立てていた。研修のときには資本金と売り上げと（不明）と何が会社にとって一番大事かと尋ねられたが、なにもわからず、売り上げと言ったこともあった。答えは資本金であった。資本金の額でどれだけ会社が安定した経営ができるかわかるのである。

勤め始めて1~2年まではうまくいわずにノルマを越せないこともあったが、3年目くらいからは要領を得てきた。たとえば、しばらく売り上げが伸びずに悩んでいた頃、受験の時期に中3に教材の販売をするのは業界ではやらないことであったが、先輩から中3を狙えとアドバイスされて中3をターゲットに売り込みを行ったらよく売れた。「ほらみろ、お前といっしょやろ言われて、(子どもの)母親は(子どもには)前々から準備しとけ準備しとけ言うてるんや。直前になって本人はばたばたとるんやって。そのとおりや、思っ」。新学期は小6をターゲットに、中学から学習する内容の教材を売った。中学の教科書にしかのってないことがある。今からやっておけば、今よりも上の順位にいけると売り込んでいた。

福岡を本社として、他(宮崎、岡山)に支店が出来ていった。福岡の本社には8年くらいいて、最後の3年は管理職の仕事をしていた。「(上司から)あいつちょっと違うな、異質やな言われてて」、眼をつけられていたらしい。「自分だけ(社長との)食事に呼ばれたりして」た。各家庭に電話のアルバイトをする人の管理と、その情報をもとに、営業の誰を配置するかという仕事を行っていた。営業が出て行くと「留守番」のようで退屈だった。会社のなかでは一番重要なポストだったが、退屈だった。福岡支社長は、新人と一緒に営業が出来てうらやましかった。管理職の仕事はつまらなく支店に移りたいという気持ちもあったが、母の事があったので異動できなかった。管理職の時は、固定給で月25万円だった。

しかし、母が亡くなってしまい、大阪に支店を出すということになり、異動することにする。大阪へは50万円くらい持って出てきた。支店は8人くらいから始まった。仕事は営業だった。初めは寮に入っていたが、近くの民間アパートを借りて住むようになった。家賃は4万5千円だった。大阪の支店時代の月平均収入は20万円くらいだった。大阪の方が営業はやりづらく、「難しかった〜」。教材をバラで売るように言われたり、値切られたりした。「値切るて福岡じゃ、考えられんもん」。値切られて、会社に電話したら「そうか、お前も値切られたか」と言われたという。売り上げも福岡に比べ減った。かなり今までとは違い、地域性を考える必要があった。「これじゃ(福岡の社員ばかりでは)あかん言うて」、地元の社員を採用し、支店の社員は25人くらいにまで増やした。それまではまだ大阪営業所を開所したところで福岡で本人がしていたような営業マンの管理も必要なかったが、開所して5年くらいがたち社員を増やしてそろそろそうした管理もしようかと言っていたところに福岡の本社が倒産してしまった。あらかじめ噂はでていた。社長が不動産に手を出していたらしい。資本金を費やして不動産に手を出していると聞いて「こりゃ、あぶないな言うてたけど」。他の社員は福岡に帰るなどしたようだが、本人は家も引き払って大阪に出てきたので頼るところもなかった。

教材の営業会社が倒産後、本屋で販売している求人雑誌で次の仕事を探し、宝石の営業(店内)をする会社に正規社員として入った。他にも2つくらいの会社を考えたが胡散臭そうな会社だったのでやめた。その宝石店は事務所を構えていて、その事務所の壁一面が窓になっていてそこから店舗を眺めることができたことが決め手だった。

若い人向けの営業で、教材とは違いきつかったが、別な感覚で面白く勉強になることもあった。宝石は

生活に必要ななく、如何に付加価値（宝石の原価は2割くらいで残り8割は会社の利益となる）をセールスするかがポイントとなる。「正直言うと原価は2割くらい。後はデザインとか、誰がデザインしたとか、芸能人がデザインしたとかで値段が変わってくる」。しかし、くどくどこの宝石はどのようにいいか客に説明していても飽きられるので、あいさつをし、会話で笑いをとり、一気にセールスをし、OKをとらなければ、そのまま（セールストークが）流れていってしまう。よくまけてくれという客が多く、その値の引き方も通常では考えられないような事を言うてくるので大変だった。「(おばちゃんだけじゃなくて)若い人も値切るんやね」。100万円ほどの宝石みて「これ、高島屋で30万で売ってるのみた〜」とか「わけのわからないこと」を言って値切ってくる。「(母親に)似るんやね」。客を逃がしてしまい、よく上司に怒られた。よしもとに漫才を見に連れて行かれ短時間で話しの落ちをつける勉強をさせられた。その上司も（セールストークが）流れていくことがあって、見て面白かった。そのときは上司が「いまの悪い見本だ」っていう。

給料は基本給が月5万円で残りは歩合制だった。営業はあまりうまくいかず月平均の収入は16、7万円くらいだった。5年くらいその会社にいたが、急に社長が会社のお金を持っていなくなってしまった。ある日、会社に行くとシャッターが閉まったままで開かない。副社長も何も知らず困ってしまった。社長の家に電話してもつながらない。一軒家を構えていて、家に行っても誰もでない。社長は前日に銀行に行って、会社の資金を全部降ろしており、会社のお金をすべて持って行方不明になっていた。1週間会社に通い続けたが事態は変わらなかった。社員一同その月の給料も入らないで困ってしまったが、結局その後も社長のことについてはわからないままである。

宝石の営業会社が倒産した時に20万円くらい持っていた。その後、仕事を探すが見つからず、アパートを引き払ってビジネスホテル（5千円くらい）に宿泊して仕事探しを行う。5軒くらい面接に行くが決まらなかった。求職活動は書店で求人雑誌を買って職安には行かなかった。日に日にお金だけが無くなっていった。ネットカフェのような所では料金が時間制で荷物を部屋に置いておくことができない。そこで荷物を持って移動することになるため、面接などに荷物を持っていくようなことになる。このような光景は常識的に「おかし」な光景となってしまう。指で四角を作って「画としておかしいでしょ。大きな荷物もって面接行ったら」。そのため、ビジネスホテルにお金を最初に入れ、一室借りっぱなしにして、荷物を置いて帰って休んだり、求人雑誌を読んだりしていた。求職先は資本金をみて安定した経営を続けるかどうかで判断するので、簡単には決められないので決めるのに時間がかかるとも。

ホテルは3軒くらい変わった。2週間もしないうちにお金はなくなり野宿をする（後で、入院したときに同室の人から20万あったら「西成」でどれだけ生活できるかと笑われたが、「西成」の事や行政などのサービスについて大阪の事は全く知らなかった）。2日ほどして持っていたバッグを盗まれた。携帯、保険証、面接の履歴書、その他証明書などが入っていたのが一気になくなってしまった。この時、「人生終わったな」と思った。警察に届けには行った。連絡先のことあるので野宿生活をしている状況も話したが、警察の管轄ではないので福祉事務所のような所があるぐらいの話で具体的な所についての説明がなかった。「ホームレスがいることは大阪に来て知ってたし。みんなこんなもんかな思て」。その後も1週間ほど何も食わず、水道の水だけで野宿をしていた。巡回の警察官は毎日同じ人がいると思っていたが、野宿してるとは気づかなかったようだった。「ふつうの格好(服装)してるし...」。腹を下して体調が悪くなったため、派出所に行く。顔も真っ青だったため警察官がすぐに、救急車を呼んでくれ、医療業務センターを通して医療扶助を受け入院することとなる。胃カメラを飲んで胃のなかを見ると胃がズタズタの状態になっており、2週間くらい入院する。1週間はおかゆさんを食べ、その後肝炎用の病院食になった。「最初は(ひさしぶりにご飯食べて病院食も)おいしかったけどな〜。途中から飽きて...」。その後も通院を行う

ということで自立支援センターに入ることとなった。

今後は、固定給の仕事がいいと考えている。ヘルパーの資格をとって、介護の仕事をしてみたい。自立支援センターからだど、営業の仕事はできないと思う（給料が入るまで1ヶ月かかり、営業での経費などもかかり、それらの費用をセンターから借りることはできないだろうから）。C型肝炎もあり、肉体労働はできないと思う。

小学生の時、肺炎で通院していてC型肝炎に院内感染する。その後、3ヶ月ぐらい入院した。ずっと薬は飲んでいる。中学のときに両親からあのとき院内感染したと教えられた。

10代で車の免許をとる。最初は会社の仕事のために白のバンを中古で買って乗っていた。その後、車が好きで乗り回していた。20代前半までに4回違反をして減点が重なって取り消しとなる。その後、1度教習所に通わず試験を受けるが実技試験で落ちてしまう。変なクセがついてしまい受からなかった。「左右確認なんか、普段せえーへんやんか」。また教習所に通って免許を取るにはお金がかかり30万円ぐらいいるため放置したままである。

大した趣味は無く、映画を見たり、音楽を聞いたりするくらい。教材会社の際は、管理職のころ後輩を連れて飲み食いにいたり、カラオケやボーリングなど遊びに行ったりしていた。そんな時は自分が奢っていた。20万円くらい出すこともあった（上司からは立場がないと注意されることがあった）。

73. 男性 40代前半

1960年代、栃木県に生まれる。両親はAさんが赤ん坊のころに離婚。それから小学校高学年まで親戚の家に預けられ、育てられた。Aさんは家族同様に育てられた。Aさんより1つ上の男の子とも仲よく中学まで同じ学校に通った。

父は離婚後、栃木県内の他市にアパートを借り、一人暮らしをしていた。再婚はしていない。（Aさんが思うに）父親は一人が寂しいというより気楽にやっていた。父親の仕事は建築関係で小さい会社に勤めていたようだが、よくわからない。親戚に預けられている間、父親は多いときには毎週のように会いにきてくれた。

小学校高学年のころ、親戚が「このままではよくない」と考え、知り合いに頼んで小さな家を建ててくれた。その家では父親が亡くなるまでの間、父親と二人暮らしをした。父親はAさんが30代のときに他界。亡くなった原因はお酒の飲みすぎである。肝臓も1度手術していたし、Aさんが小学生のときに医者から「飲みすぎたら死ぬ」と言われていたのに飲み続けていた。父親は仕事にちゃんとしている間はご飯も一緒に食べていたし普通だった。しかしお酒がはいると、仕事にいかなくなるとほったらかしにされた。父親はお酒がはいると10日ぐらい仕事を休む。働きに行かない日が続くとAさんもほったらかしにされ食べるものもなくなり、よく親戚の家にご飯を食べにいていた。父が亡くなった日も、前日に親戚の家にご飯を食べに行ったら翌朝そこから中学校へ行っていた。そしたら学校に電話があって父が死んだと聞いた。

母親は再婚し、家庭を持っていた。16歳のときに両親の離婚後はじめて会った。そのときは感激というより、写真のイメージから変わったな…と感じた。

Aさんは中学を卒業後、職業訓練校に1年間行き溶接工の資格をとりH製作所の下請けの小さな工場に就職した。この工場はライン用の機械を製造する小規模工場でAさんは溶接を担当していた。ここは1年10ヶ月勤めた。この工場に勤めているとき、知り合いの人が海上自衛隊に入隊したと聞いた。この知り合いは特に仲のよい人でもないし、本人から話を聞いたわけでもないが、その話を聞いて「自衛隊もいいなあ」と思っ入りたいと思いだした。ただ、中卒だと県内で2人ぐらいしか自衛隊には入れないら

しく、学力的に難しいと思っていた。ある日、仕事を休み体験入隊で1週間ほどいった。体験入隊が終わり、帰ってきてから面接がありそこでやる気があるかどうか確認され、その後入隊が決まる。工場はその後辞めた。面接に自信がなかったし、もし入隊できなかつたら困るので入隊が確定した後、電話で辞めると伝えた。正式に辞めるということは親戚の人が工場の人に話してくれた。辞めるときは特にもめることもなかった。自衛隊に入隊後は半年の教育期間があり、前期3ヶ月は関東の駐屯地で基本を学び、後期3ヶ月は北海道の駐屯地へ行った。Aさんは入隊後、すぐに腰の大きな手術をした。生まれつき腰の骨が足りなく、腰痛がひどかった。そのため半年間入院した。自衛隊にいる間は月1回ぐらい病院に行っていた。現在は特にひどい痛みなどはない。

自衛隊は1回(2年で満期)更新し4年間いた。2回目の任期満了を迎える2ヶ月前に、更新の意思確認がありそのときに辞めると決めた。次の仕事は自衛隊内の職安みたいところ(週に1度ぐらい2人の担当者が来て仕事について相談にのってくれる)で決めた。とりあえず母親のところに北海道から荷物を送った。仕事ははじまるまで1、2日あったので母親のところに泊まり、それから墓参りに行き、会社に行った。そうしたら、育ててくれた親戚が「順番が違う(母親のところに行くよりも先に墓参りにいくのが先)」と怒り、縁を切られてしまった。自衛隊の時に貯めていた(退職金も含む)250万円は、自分で持っていたら使うと思って母親に預けていたが親戚に「これまで育ててやったんだから」と言われ、おそらく母親が返した。自衛隊ではタバコ代、服・ジュース・酒代ぐらいでほとんどお金を使うことがなかった。その頃、母の再婚相手の家業(小さな運送会社)を継いでくれと言われたが自分の実の父親ではないし、継ぐ気はなかった。その家にも行きづらかった。親戚とも母親とも、このとき以来会っていない。

20代前半に自衛隊を辞めてはじめに就いた結構大きい建設業者ではコンパネの型枠大工をした。はじめの現場は下水処理場だった。東京に社員寮があり、そこで生活をしていた。このとき住民票は北海道から移した。ここでは見習い期間のうちの2ヶ月ほどで辞めてしまった。この時期、特に腰の痛みがひどくこのままだとまわりにも迷惑をかけるだけだと考え、辞めた。このころ、病院は行っていないし貯金もゼロだった。辞めると決めてから母親に電話して着払いで荷物を送った。給料は2ヶ月分もらった。

その会社を辞めて1ヶ月もたたないうちに、アルバイト情報誌でパン工場を見つけ3ヶ月勤めた(これも寮生活)。母親のところに荷物は送っていたので、手元には衣類など簡単な荷物だけだった。母親とはこれ以降とくに電話連絡などもしていない。

次に勤めたのは家電メーカーTのブラウン管をつくる工場。日払いの期間雇用に1年半、これもアルバイト情報誌で見つけた。ここでも期間工用の寮を利用。寮費は取られず、日払いで7,000円程度もらっていた。残業はないが、2交代制(7:00~19:00・19:00~7:00・月~土:1週間毎の昼夜交代)で働いた(正社員は3交代制)。休憩は同じ部署に少し多い目に人が配属されて交代で1時間半毎に10分ぐらい休憩をとった。夜もこのペースで働く。この仕事を辞めたのは、T社が必要とする人数を請負会社が集めきれなかった(?)ので請負会社自体が工場から引き上げた(T社が契約解除したものと思われる)。このときの給与はT社からではなく、その間にはいていた請負会社からもらっていた。その会社に他のところを紹介すると言われたが、自分で他の仕事を探した。

アルバイト情報誌で仕事を探し、神奈川県に行き大型トラックの車体をつくる仕事をした。ここは2ヶ月ぐらい勤めた(住居は寮)。やめた理由は不明。その後パチンコ屋で1ヶ月ぐらい働くなど住み込みの仕事を探し、転々としていた。最短10日で辞めた仕事もあった。仕事を失って次の仕事に就くまでの数日間は安いカプセルホテルなどで寝泊りをしていた。仕事を失っている間はカプセルホテル1、2日分ぐらいと日中に少し多く使っても大丈夫なぐらいのお金は持っていた。どうしても寝泊りに困ったときは、数回、公園で夜を過ごしたことがあるが、夏には蚊もいて、安心して眠ることはできなかった。

その後、関東を出て名古屋へ。新幹線で名古屋に着いたが、帰りの電車賃もないので、そのままパチンコ屋で働いた。名古屋では2、3軒のパチンコ屋で働き、1年ほどいた。1軒目のパチンコ屋ではルール(特定のお客から物をもらったりしたら、特別扱いしていると思われるのでダメ)を知らず、お客さんにジュースをおごってもらってクビになった。2軒目は、言うこととやることがめちゃくちゃな人が同じ職場と寮にいた。この人は他の人とケンカも絶えず、一緒にいたくないので1ヶ月ぐらいで黙って辞めた。あともう1軒は覚えていない。

名古屋のパチンコ屋に勤めている間、店のお客さんで大阪から来ている人がいた。話をしただけだがおもしろい人だったし、そういう人がたくさんいるなら試しに大阪に行ってみようかと思ひ大阪に来た。始発電車に乗り、朝9時ごろ上本町に着いた。目の前にパチンコ屋があり、「まあすぐに仕事に就かんくてもええやろう」と思ってスロットをすると大当たりし16万円勝ってしまった。それから半月間程、ちょうどできたころだったカプセルホテルに泊まりながら遊んでいた。はじめのころは、大阪を知らなかったのであちこち行って見て、だいたいわかってきたころから、ミナミで遊んでいた。日中はパチンコをしたり、土日は競馬をした。たまたま、名古屋のパチンコ屋で同僚だった人と出会い、その人に、一見さんお断りの「店員に女性のいない店」に連れて行ってもらいおごってもらった。はじめはおごってくれたが次からは自腹で、そのうち行きたくても先立つものがなくなりあまり行けなくなった。

そうこうしているうちにすってんてんになった。地下鉄御堂筋線難波の改札あたりにいた手配師に声をかけられ飯場へいった。そこには7~8人すでにいた。現場は大阪府警だった。作業内容は雑用などいろいろ。口では日当8,000円(月払い)の約束だったが、ほとんど引かれ手元に残るのは1ヶ月に何千円か。毎日働きに出ても月に数千円しかならなかったし、明細もなかったのでどうなっているかわからなかった。みんな一緒に給与だから自分だけが文句を言っても仕方ないと思ひ何も言わなかった。1ヶ月目の給与をもらって、こんなじゃダメだと思ひ黙って出た。他の人は自分より前からいた人だから、そういう給与と知って残っていたのだろう。多く出て月1万円しかでないのに。その飯場は夕方に出て難波方面に向かった。とりあえず電車に乗ったが、お金がなくなったので途中で降りて、そこからのんびり歩いて難波に着いた。翌日、同じく難波駅前で別の手配師に声をかけられ別の飯場へ。現場は病院の新築工事。この飯場は1ヶ月で30,000円残り、2ヶ月いた。このころ、飯場の仲間につれられて「西成」(釜ヶ崎)を知った。

1992年、年が明けてから新聞の求人で見つけた住み込みで働ける奈良県のパチンコ屋に行き、2年ほど働いた。保険はなし、月給制で18万円(寮費を引かれて手取り)あった。特にトラブルもなく毎月1万円ずつは貯めていた。貯金は自分で持つと思ひ使ってしまうと思ひ、店長にハンコと通帳を預けていた。1994年に辞めた。理由はとくにないが、パチンコ屋のような仕事は長く続けるものではないし工場に勤めたいと思ひ辞めた。その後、「西成」に戻り年末は医療センターの下の布団(越冬)、年越しは南港の臨時宿泊所を利用した。

年が明けてから西成労働福祉センターの契約で京都の飯場に行った。このときは作業服もなかったので飯場で作業着をもらって働いた。現場は京都市内のマンション建築などだった。そこで働き出して10日ぐらいして阪神大震災があった。ちょうど満期になったので「西成」に戻ると神戸方面の現金の仕事がたくさんあり、毎日のように仕事に行った。現金の仕事は日当13,500円。よく利用していたドヤは1,500円。このころにセンターでアーク溶接、ガス溶接、フォークリフト、研削磨石取替試運転などの資格をとりなおした。そして住所を「とりよせて」白手帳も持った。※このときの住所はドヤ。

神戸方面への仕事は2~3年ぐらい続いた。行く場所によっては、昼飯がないかわりに昼代に1,000円~2,000円つけてくれるところもあった。その頃は朝から酒のにおいがしても、「行こう、行こう」と言っ

て連れて行ってくれた。Aさんは時々、朝からコップ1杯の日本酒をひっかけて行くこともあった。

この頃30歳ぐらい。釜では若いし、震災もあり、仕事はたくさんあった。それから十年くらい契約と現金の仕事を繰り返した。

去年、一昨年と自立支援センターを利用。一昨年は勝手に出て「西成」に帰ってきた。

去年は自立支援センターに入り、T自動車の下請けの工場で、部品の箱詰めの仕事が決まった。この仕事（工場）を見つけるまで2ヶ月かかり「就労」退所した。この工場へは、はじめはドヤから通っていたがしばらくしてアパートを借りた。25,000円で（家賃21,000円、電気代・水道代等を含め25,000円でお釣りがくる）借りた。敷金・礼金はなしだが大家さんに5,000円だけ渡した。半年間ほど借りていた。しかし、工場の従業員ともめて辞めてしまった。相手は昔から長いあいだ勤めている人なので相手の意見が優先され、結局自分が身を引く形になった。給与はだいたい月17万～18万円であった。見習い期間中だったので保険はなかった。

工場を辞めてから春までは「西成」のセンターで現金の仕事をした。電気代さえ抑えれば月25,000円で十分お釣りが来るぐらいだからドヤより安いのが、仕事がなく家賃が払えなくなったので大家さんに支払えないので家を出ると伝え、アパートを引き払った。このとき、白手帳があったら、その月はもしかしたら乗り切れたかも知れない。しかし、どっちにしてもつぎの月も仕事なかったから結局保たなかっただろう。以前取得した白手帳は工場への就職が決まってから返していた。

その後三徳寮に入った。自立支援センターを出てから間があったので、病院にかかってすぐに入れた。その後、契約の仕事があったので「西成」から姫路までいったが、行ったら仕事がなく「交通費を払うから帰ってくれ」と言われ、帰った。帰ってきて1、2日してから別の契約の仕事で10日働いた。そして10日満期になったのでまた2、3日ゆっくりして働くという飯場生活を繰り返した。10日間働くとい金銭的に若干の余裕ができるので、2、3日はゆっくり休める。

6月の終わりまで、それを繰り返し、7月に入ってから週に何度か現金の仕事が少し増えた。8月ごろまでそれをしていて。盆明けごろから3日に1日休むぐらいのペースで働きに出ていた。そのとき利用していたドヤはだいたい1,300円。仕事が安定しないのでアパートは借りられない。だからドヤに泊まる。Aさんは長い期間の野宿はないが、どうにもならないときはシェルターへ行く。

そして今回の入所に至る。一応3回まで自立支援センターは利用できると聞いたので利用した。今月は仕事もたくさんあり仕事に行っていた。休みも祭日の1日しかないほど忙しく、お呼びがかかって働いていた。しかし、もう少ししたら仕事が減るとい噂を聞いて、「仕事が無くなったらほんまに困る、今後困るから社員で雇ってくれるところがあったらそこで働きたい」。そう思って入所を希望した。仕事に入所の面接の予約をして仕事を休んで面接に行き入所が決まったのでつぎの日から仕事はしばらく行けないと言って来た。

以前決まった工場でもめたのは自分でも大人気なかったと思っているし、何とか工場で社員として働きたいと思っている。現在は取りあえず、工場での仕事を希望している。溶接関係がもしあればと思うが、なければ他の業務でもかまわない。健康状態・腰はだいぶよい。住民票は現在、関東の友人のところにおかせてもらっている。

74. 男性 30代後半

出身は兵庫県。中学卒。家族は父・母・弟・妹・本人の5人家族。

父は、内航船の船員。母は専業主婦。厳しかったが4年前に死去。やくざ稼業に入るときも「やるんならってっぺんまで行け」と言われた。現在母は健在、妹は結婚している。母・妹とは連絡を取っている。

結婚して、娘が一人できたが、1年で離婚。組の抗争があり、それが怖かったようだとのこと。親権は当人が裁判で得て、娘を引き取って暮らしてきたが、大阪に来るときに施設に預けた。週1回は娘に会っている。

自立支援センターへの入所経路は大阪に来たときに自立支援センターのことは知らなかったし、釜ヶ崎で泊まったことはなかったが、どうかしなければと思って歩いているときに近くに区役所があったので相談に行ったら、巡回相談員を呼んでくれた。

小学校に通っていた頃は別に悪くなかったが中学あたりから悪さをするようになり、中卒後料理の仕事（日本料理のようだ）をしながらやくざ稼業に入って、やくざもしていた。自然にヤクザ稼業に入った。連れも2〜3人ややくざになったがみんな2〜3ヶ月でケツを割った。やくざのほうで上のほうに行きだしたので、料理関係はやめ、ヤクザ一本で行くようになった。ヤクザになったのは「稼ぎたかった」から。古典的なヤクザではなく、いわゆる「経済ヤクザ」になりたかったようだ。見た目もたしかにヤクザとは見えない。目つきはきついが、古典的な釜ヶ崎で見るヤクザとは異なり、普通の兄ちゃんという感じ。本人が言わなければ、ぱっと見は、その雰囲気は感じられない。親分（広域暴力団の2次団体の親分）にも上納以外にも金を回せるようになっていた（頭と度胸がないとそれなりの地位にはつけない）と本人は言っていた。シマは、飲食店関係だけでなく、ネットカフェや漫画喫茶なども含まれ、そこでの客同士のトラブルの処理にも行ったことがあると言っていた。客同士の「いびきがうるさい」とのトラブルが一番多いとのこと。

3〜4年前に広域暴力団内部の抗争により1次団体が絶縁され、自分の所属する組（2次団体か）も解散した。そのときに堅気になった。別の組からの声もかかったが、「上が辞めたら下も辞めるのが筋」と考えて辞めた。そのとき、50歳をすぎて入ってきた弟分が他の組に移ったが、すぐにケツを割り逃走した。最も稼いでいたときで2,200万円ほどは手元に持っており、堅気になったときでも1,100万円ほどは持っていた。しかし、仕事もせずに金を持っていたらポートなどギャンブルや遊びで使ってしまう、その後はD自動車に期間工で6ヶ月通いで働いたり、「浜の仕事」＝港湾荷役で日払の仕事をしてしのいできた。生活が立ち行かなくなると、娘を施設に預けて大阪に出てきた。「大阪に来たら何とかなるだろうと思って」。

1ヶ月ほどサウナや難波の漫画喫茶で寝泊りして仕事を探した。漫画喫茶はナイトパック7時間で1,400〜1,500円ほど。前払い制。身分証明の必要がなかったから会員制でないそこで泊まっていた。

その間ハローワークには行かず、最初は梅田で料理関係の求人が出ていないか探したり、求人誌などで探したりもしたが、それは日銭が必要だったから。日払の仕事を探すために派遣会社に2社に登録した。しかし運送会社などで昼2時〜夜11時までで支払が翌日昼3時以降などの仕事はあったが、毎日続けると時間的に休みの日にまとめてもらうことになる。それでは日銭をもらえないと思い、また住み込みで滋賀県のほうの求人もあったが「何かあってもすぐには帰れない」と思ってなかなか仕事に就けず、そうしているうちに金が底をついて野宿するようになった。

2〜3日難波のあたりで野宿をして、その後自分で区役所に行って相談した。仕事を見つけて金を貯めて兵庫に帰って娘を引き取れるようになるのが目標である。

入院歴胆石・尿道結石・顔面神経痛などで。ヤクザの世界はストレスが強いのでなったのではないかということ。29か30歳の頃に交通事故で3ヶ月間入院したが、後遺症はない。障害者手帳や施設入所歴などはない。

「あいりん」はテレビなどで知っているだけ。行ったことはない。

組の解散当時、50歳代半ばの弟分（稼業に入って1年）は別の組に行き、町であったときに「兄貴もう

辞めたのにそんな格好していたらあきまへんで」と偉そうに言われたが、そいつも半年でケツを割ってヤクザを辞めてしまった。厳しい世界で、自分が間違っていないでも親分や兄貴分には頭を下げなければならない。大阪にある広域暴力団の構成団体（1次団体）の会長に夜中に「たこ焼きが食いたい。どここの何が食いたい」と呼び出されて持っていかされることなどはざらにあったということ。「夜中に店をたたき起こして作らせて自分が車でもって行く。「10分でもってこい」といわれても神戸からだと1時間かかったりする。「おそい」としかかれても「すいまへん」と頭を下げなければならない。そうしないとどうなるか分からない。特に自分のところは武闘派だったから。自分の親分には金を回していたから何でもいえたが、会長や兄貴分にはそうではない」。

「最近の堅気は怖い。ヤクザに対しても言いがかりをつけてくるやつがいる。服装を見たらこちらがヤクザだと分かるし取り巻きもいるのに、肩が当たってこちらが「すみません」と頭を下げても言いがかりをつけてきた。それで半殺しにしたこともあった。今はすぐに刃物を出すやつも多い」。

75. 男性 30代後半

北海道に生まれる。家族はAさんと両親、姉2人の5人家族。父親は炭坑で働いており、Aさん家族は炭鉱住宅（「炭住」）で生活していた。しかし、父親は酒の量が多く酒乱だった。母親はそれが理由でAさんが幼い頃に家を出て、離婚した。その後Aさんと姉2人は父親に育てられた。母親とはその後、現在に至るまで連絡をとっていない。

Aさんは父親が酒乱なので家にいたくなく、夏休みなどは汽車に乗って2時間かけて親戚のところによく泊まりに行っていた。親戚家族とも仲は良かった。この親戚は母と連絡があるらしい。この親戚の家が実家同然だとも語っていた。

Aさんは、酒乱の父が嫌だったので早く家を出たかった。とにかく寝るところと食事があるところであればいいと思い、中学卒業後、家をでて親戚が自営している自動車整備工場に住み込みで働きにいった。給与は特に決まっておらず必要なときももらっていた。その当時、中卒で働く人はAさんの周りには2、3人程度しかいなかった。工場では主に自動車整備の仕事などをし、2～3年ほど働いた。小さい頃からそこに行っていたので、ほとんど家族従業員のようなかたちで働いていた。姉はAさんが家を出た後も父親と一緒に生活していた。

その後、陸上自衛隊に入隊した。2回ほど任期（1回の任期：2年）を更新し、20歳前半まで働いた。自衛隊では宿舎はタダであるし、給与もよかった。それより何よりボーナスがとてもよかった。そのころはみんなよく飲みに行ったり遊びに行ったりしていた。階級によって門限があり、2等、1等陸士は12時まで、それ以上の階級は朝まで大丈夫、外泊が認められていた。結婚していない人は基地内の宿舎で生活し、結婚すると基地外の家族持ち用の宿舎へ移る。自衛隊の任期を更新しなかったのは、次へのステップへ昇進するための試験の勉強が嫌だったためである。長い間自衛隊にいと昇進していくために筆記試験や体力試験等がある。次の階級に上がるための勉強が嫌だったし、試験までの期間がそのとき既にあまりなかったのを辞めた。Aさんは調査員の「勉強はすきではないですか？」の質問に「あまり好きではない」と少し照れ笑いしながら答えてくれた。自衛隊の仕事は、山に入っただけの訓練がしんどかったけれども普段はそれほどしんどくなく、楽であった。入隊したときの階級は、二等陸士、その次は一等陸士、陸士長、その次の階級にあがるために試験があって、試験に通れば三曹（三等陸曹）、二曹（二等陸曹）…となる。上の階級に上がらない人は満期でほとんど辞めていく。幹部の人は一般から入隊するのではなく、防衛大学から入ってくるのでコースも違う。休日は土曜日の午後と日曜で、平日の勤務時間は午後5時ま

であり、外出はそれ以降にできる。

自衛隊を除隊してから普通自動車免許をとった。そして、関東の運送会社（20人ぐらいの小さい会社）に社員として就職し、2t車に乗って荷物の配送の仕事に就いた。あてはまったくなかったが、とりあえず関東に行き、求人誌を見てこの仕事を見つけた（このころ、北海道の家族の状況：父親はまだ生きており、炭坑も閉山になるかどうかというところと話していた）。この運送会社で働いている時の住居は、会社の寮で食事付き、寮費は給与から引かれた。寮には10人ぐらいが生活していたので、全従業員が住み込みで働いていたというわけでもなかった。勤務形態は、日曜の休みはなく（週休制ではなかったということ）、勤務時間も夜の配送が中心だった。保険については給与から引かれており、すべて加入し、支払っていた。給与は夜間の配送が中心だったので手当てがついて、月25、26万円ほどあったが、ボーナスはなかった。しかし、全部使っていたので手元には残らず、貯金もなかった。ここでは7、8年ほど勤めた。この間に父親が亡くなったので北海道に行ったり、来たりしていたが、家のことも片付けないといけなかったので、仕事を辞めて一旦家（北海道）に帰った。退職金はでなかった。父が亡くなったのは60歳ぐらいだった。家は父しか住んでいなかったなのでそのときに処分し、親戚の家に行った。そこで「大型免許ぐらいは持っていた方がいい」と言われそこで大型免許を取った。免許は大体2週間ぐらいで取れ、その後2、3ヶ月ほど北海道にいた。ハローワークで北海道内の住み込みで働ける運送関係の仕事を探したが、ほとんどなかった。札幌などでは住み込みの仕事があったが、そのほとんどは土木関係だった。住み込みの仕事がないし、ハローワークだと就職の決定までに時間がかかるので早く仕事に就きたいと思い、求人誌で仕事を探した。

北海道で求人誌をみて派遣の仕事を探し、北海道にある派遣会社（主として製造業への労働者「派遣」を行っている大手の人材派遣業者）の事務所に面接にいき、岡山での仕事が決まった。派遣先は岡山県のM自動車で、車の組み立ての仕事であった。そのころは「リコール隠し」事件の前だったので働く際に特に問題はなかったが、残業代はカットされ、人員を減らしはじめていた。北海道から岡山までの移動費は派遣会社から支給されたが、契約途中でやめたら給与からその分は差し引かれると言われた。勤務形態は夜勤・昼勤の交替で日当1万円ぐらい。寮と工場間は毎日バスによる送り迎えがされていた。そこには、かなりの労働者がいた。寮は1つの部屋を個室3つに分割したような造り（3LDKのような感じ）であり、そこに一人ずつ入る形態で、各個室に鍵はちゃんとついていて、寮によっては食事付のところとそうでないところがあるようだったが、Aさんが入った寮では朝食と夕食が出ていた。寮費は3万円ぐらいで、給料から天引きされており、その結果、残業をしても、手元に20万円残ればいいぐらいであった。ここでは半年ぐらい働いた。その後の仕事は、同じ派遣会社から別の派遣先に行くのではなく、一つの仕事が終わるたびに、求人誌で探しているいろいろな派遣会社を利用して仕事に就いた。Aさんによれば、大手の派遣会社とそうでない派遣業者の違いは、3LDKに3人入るか、1部屋に一人入るかというような寮の部屋の形態ぐらいだとのことである（大手の方が多数の人数を確保して、たくさん派遣先に入れなければならないから、寮に多人数を詰め込んでいるらしい）。

岡山の仕事の後、3年ぐらい転々と派遣業者を介して仕事をしてきた。仕事のほとんどが車の組み立てや製造など自動車会社の下請けだった。派遣期間が満期になると他へ移る、その繰り返しをしていた。次の仕事（場所）へ移る間の2、3日は、お金があればまんが喫茶などを利用していたので野宿経験はほとんどない。岡山の仕事の後は岐阜、名古屋に行き自動車関係の派遣の仕事、その後静岡で製紙工場に勤め、一番最後（大阪に来る直前）の仕事は近畿地方にある製菓会社の工場でのラインの仕事で、アイスクリームなどを作っていた。製菓会社の工場では夜勤もあると聞いて入ったが、昼勤しかなく手取りが少なかったため、寮も食事もあったが2ヶ月ほどで辞めてしまった。その後すぐに大阪へ来た。とりあえず聞いた

ことのある、大阪のミナミに来た。話で聞いたことしかなかったミナミに着いて、最初はかなり不安だった。1週間ぐらいなんばの商店街にあるまんが喫茶で生活をしていたが手持ちの3万円もなくなり、2日ぐらい野宿をしていた。そこでちょうど求人誌をみていたら巡回相談員に声をかけられて、自立支援センターに入所した。

派遣で働き出してからは、健康保険には入っていないし、年金も払っていない。退職金（満期時）はほとんどなかった。大きい会社は、期間工だと満期の際に退職金が出ているところはあると聞かすが、Aさんは辞めるときはいつも手持ちの金だけしかなかった。今思えば、関東でトラックに乗っていた時が一番よかったし、父親が亡くならなければそのままずっとその仕事を続けていただろうと思う、と話していた。

派遣を通じて仕事に行きたいわけではないのだが、それ以外に仕事に就く方法がなく、それが最終的な手段である。また35歳を過ぎると派遣の仕事も減り、だんだんと厳しくなってきた。仕事の場所はあまりこだわっていない、ただ仕事をしたいだけなので、いつも求人誌を利用して「即決」と書いてある仕事（派遣業者）を探している。履歴書を準備しているので、あればすぐに面接に行くし、これまでは面接に落ちたことはない。派遣から社員への登用の機会はなかった。「社員へ…」と募集欄に書いてあるものもあるし、長く続ければ可能性はあるのかもしれないが、Aさんにはそういう機会はなかったらしい。派遣での仕事は、契約期間が半年から長くて1年ぐらいで、すべて寮付きの仕事を探す。

寮での暮らしでは、派遣の仲間とは勤務形態も違うし、働く部署も違うので付き合いはほとんどなかった。休みの日などは、むしろ同じ部署で働く正社員のひとと仲良くなって車で遊びに行ったりしていた。派遣会社からは、給与から寮費・食費、ふとん代などの諸経費を差し引かれた額が銀行振り込みされていた。Aさんは派遣での仕事をだいたい満期になるまで働く。途中で辞めるときはちゃんと事前に言わないと給与が支払われない場合があるようである。Aさんは何日か勤め無理だと感じたら事前に伝え辞める。無理と感じるのは仕事がつらいからとかいうことではなく、「夜勤あり」と募集していても昼勤だけで収入が少ないときなどである。Aさんは関東で配送の仕事をしているとき、午後8時から午前5時まで働いていたので夜勤には慣れており（と話していた）、夜勤手当がつく仕事をやりたかったとのことである。

派遣で働きだした3~4年は、派遣ばかりでおかしくなった。100円で求人誌を買ってきて、業者に電話して、履歴書と身分証明書をもって面接を受け、そして現場へでる、そして辞めるということを繰り返してきた。派遣の期間を終え、次の派遣先に行くこともあれば北海道に帰ることもあった。親類の家は実家同様で、北海道に帰るときはそこに帰る。携帯は現在もっており、時々連絡を取っているが、正直言うと、向こうはいろいろAさんのことを知っているのだから、あまり連絡を取りたくないらしい。姉2人はどこに住んでいるかは知っているが、父が亡くなって以来、会っていないし連絡も取り合っていない。知人がいないこと、家族との連絡も疎遠になっていることは特に気にならないと話していた。

また、東京などは配送の仕事をしているときに何度か行ったのでなじみ（というより土地勘）がある。「大阪はどうか」という調査員の質問には、「関西弁がおもしろい。北海道には（関西出身者が）あまりいないので」と答えていた。Aさんは、小さいころは病弱だったが、病気はまったくしていない。

「せっかく大型の免許があるのに、そういう仕事の口はないのか」という質問には「大型の経験がないからどうなのかわからない」との答えだった。

現在、住民票は自動車関係の仕事で働いていた名古屋にある。移動する度に持ち歩いているわけではない。現在、自立支援センターからあまり出ていないし、大阪に来て間もないので、大阪のことについてはあまり知らないとのことである。

今後の（仕事や生活の）見通し・希望はという質問に対しては、「運送関係に就きたいと思っている。お

金を貯めて家を借り、生活をしたいと思っている。北海道に帰っても仕方がないので大阪に腰を落ち着けて生活していきたい」という答えだった。

お酒は飲まない、タバコは吸う、パチンコは昔やっていた。取得免許は、普通免許・大型特殊免許。結婚はしたことがない。行政への相談・福祉施設利用、手帳等はなし。大阪にはまだ来て間もないので「西成」のことは知らない、関東にいたけれども山谷も知らない。生活保護の歴はなし。

76. 男性 30代後半

生まれたときに両足首が逆向きで生まれたとのこと。生まれてすぐに1年ほど入院経験がある。その時に障害者手帳を申請していれば1級であったが、両親は申請しなかった。小学校低学年まで矯正用の靴を履いて過ごしていたが、その後は普通に歩くことができるようになった。現在、もし障害者手帳を申請するならば、5級になるそうである。日常生活にはそれほど差し支えがないものの、無理をすると痛むので、足に負担がかかることはできず、仕事も選ばなくてはならない。

幼い頃から、父親がギャンブルで借金を抱えていたので、実家での生活は苦しかった。金銭的余裕がなかったので、高校進学も諦め、中卒で働いた。しかし基本的にAさんの収入は、父親に管理されており、通帳などもまったくAさんの自由にはならなかったそうである。こうしたことにならうっぶんがたまっていき、最終的には家を出る一因となったようである。

Aさんは、兵庫県で長男として生まれる。大阪府、そして大阪府内を転居し、両親は現在大阪府内の自宅に住んでいる。父の仕事は、本人曰く「サラリーマン」だった（しかしAさん自身ははっきりと仕事内容を知らないようである。また、転居の度に仕事を変っていた可能性もある）。また、母もずっとパートで仕事に出ていたそうである。Aさんの記憶によると、すでにAさんが小学生のころに借金を抱えていた（父親のギャンブル（マージャンなど）が原因）らしく、そのことで両親がもめていたという。父の借金は今もあるようだが、金額はわからない。父はAさんの名義でも借金をしているようだ。借金のためか親戚との付き合いはあまりなく、経済的な援助をしてくれるような親戚もいない。特に、父親は母方の親戚からはよく思われていない。母はずっと父と離婚をしたがっているという。連絡をとることはあるが、父親と折り合いが悪い。兄弟は、弟が2人いる。2人とも独立している。Aさんは現在、弟たちとは連絡をとっていない。

Aさんは、小さいころに1年間入院していた。その後はちゃんと歩けるかどうかわからなかったので、一時期矯正用の靴を履いていた。体育の授業はほとんど出ていない。水泳は足が見えるのでイヤだった。女子より細い足で、友だちから「気持ち悪い」といじめられた。お金が無かったので高校には行けなかった。学校の紹介で就職する。

家電メーカーの下請け会社に正規社員として就職する。保険や年金などには加入していた。月給は18万円くらいだった。当初は塗装の仕事、途中から流れ作業で検品などを行った。2年くらい勤めるが、「将来ラーメン屋を営業したい」と考えている先輩から「一緒にやろう」と誘われて退職する。

しかし具体的な計画が立っていたわけでもなく、すぐにラーメン屋は始められないので、先輩の親戚の会社に正規社員として就職する。別の家電メーカーの下請けで電池を作っていた。流れ作業の仕事を行った。月給は18万円だった。その会社も2年くらいで辞める。

その後、パートでラーメン店に勤める。40席ほどある大きな店舗で仕事も忙しかった。朝の10:00～深夜3:00までの仕事で、休みは月2～3日だった。月給は時給制だったので、30万円くらいとよかったが、とてもきつい仕事だったので1年くらいで辞める。当時は国民健康保険に加入。

次に、情報誌で探した紳士服のアパレル会社に就職する。3ヶ月は研修期間、以後正規社員となる。接客や販売などの仕事を行った。店はいくつか変わった。店では、店舗での売り上げノルマはあったが、個人の給料には影響しなかった。月給は20万円くらいだった。25歳くらいで勤めている人は店長くらいで、店員は若かった。そのため、管理職試験を受けるが受からなかった。年齢のこともあってその会社は退職する。

その後、情報誌で探し、飲食関係の仕事に就く（ハローワークで仕事を検索したことはあったが、自分のやりたいような仕事「足のことがあったので、なるべく体に負担のかからない仕事がよかった」はなかった）。ファーストフードの店で、フリーターとして働く。正規社員は店長1名のみだった。「フル」で働いて月給20万円くらいだった。2〜3年勤めるが、同じファーストフードの他の店で食中毒が出てしまいその店も閉じ、解雇される。

次に、ラーメン、お好み焼き、たこ焼きの店に就職する。アルバイトとして研修期間を過ごし、正規社員となる。ここにいる当時、結婚し、家を購入し2人で過ごす。1年で離婚する。家には妻が住み、本人は実家へ帰る。子どもはいなかった。ちなみに離婚の原因について尋ねてみると、奥さんは、食事の準備もしてくれず、また親離れ（子離れ）もしていなかったことなどが原因で、うまくいかなかったそうである。

実家に帰るが、両親（父）との折り合いが悪く家を出る（30代）。今までの家での生活にうっぶんがたまっていて爆発した。これまでの給料は家に入れており、自分の通帳を自分で持っていなかった。お金など全て父が管理していた。就職する際には、「振り込みの会社にしろ」と言われていた。給料は、家の生活費（弟の学費も）や父の借金に使われていたと考えられる。

家を出てそのままホームレスのような生活を送ることになってしまった。手持ちのお金も無く、保険や証明書となるような物も全て父親が管理していて持っていなかった。華やかな所へ行きたかったので、梅田方面に向かった。ベンチ、駅、テントなどで寝た。とくに、教会の牧師さんにだいぶ助けてもらったようで、日雇いのアルバイト（小遣い稼ぎ程度の掃除など。1,000〜2,000円程度）もした。日曜日にはその炊き出しを食べていた（その教会では水曜日にも炊き出しを行っている）。一般の教会はホームレスのような人は入れない所が多かったが、その教会の牧師さんは理解があった。他の教会などの炊き出しなどに行って生活をしていた。「西成」の炊き出しにも行った。シェルター経験は無い。「西成」から建設の仕事に1回だけ行ったが、足が痛く体がもたなかったのですぐにやめた。ホームレス中の色々な情報は他のホームレスの人から聞いた。ピンサロに仕事に就くために行ったが、保護者が必要と親に電話され、親に連れ戻されたこともあった。しかし、すぐに家を出る。

30代半ばのころ、ホームレスの人から聞いて、役所に行き「自立支援センター」に1ヶ月入っていた。しかしセンター内には、がらの悪いやくざのような人がいてからまれたりけんかを売られたりした。センターからアルバイトの仕事に行っていたが、他にもアルバイトの人数が多かったため、仕事に就ける日も多くなく仕事もつまらなく、部屋に帰ってもいやだったので黙ってセンターを出た（無断退寮）。

30代後半、教会のアルバイトのお金を使って、東京まで仕事を探しに半年ほど行った。住む所や証明などがなかったため、なかなか仕事には就けなかった。炊き出しを食べたりした。ホームレスに聞いたり、新聞広告などを見たりして日払いの仕事をいくつか行った。工場のラインでの検品の仕事を行った。12時間働いて8千円だった。とてもきつく、目も疲れたので2日で辞めた。横浜の役所に相談に行った時には、千円渡され「大阪へ帰れ」と言われた。「千円では帰れない」と言うと、「他の役所に行って、また千円もらってこい」と言われた。東京の方は、役所もホームレスの人も関西人への対応は冷たかったようだ。

すし屋の前でたこ焼き屋をやらせてもらうことになった。たこ焼き屋の出資は社長が出してくれた。す

し屋の寮に住み込んでいた。売り上げは1日5万円くらいあって、休みの日は9万円くらいになったこともある。最初の1ヶ月は日当1万円もらっていた。しかし、店舗を3店舗増やし、事業を拡大したのとほぼ同時期に、すし屋が火事になったり、離婚したりで、社長の収入がなくなっていった。そのため、Aさんの日当も、1ヶ月くらいは日当2千円になってしまった。他にもあったすし屋の職人は辞めていった。結局、給料がもらえないので、最後に交通費として1万円もらって大阪に帰ってきた。

大阪に帰ってからは教会にいたりしていた。自分からセンターに行きたいとケアセンターに申し込み、巡回員との面談後、入所した。

足が悪く建設のような肉体労働はできないので、お好み焼きやたこ焼き（自分の味を持っているので自信がある）のような飲食店を天満の商店街あたりに出したい。とりあえず、資金を貯め、住む所などの生活環境を整えて自分の店を持ちたい。

出生時、1年入院する。その際、親は障害者手帳をとらなかった。今申請しても5級くらいにしかならず役に立たないだろう。

盲腸になったことがある。

生活保護施設に1ヶ月入っていた。三徳寮に入ったこともある。

親が将来の目的を持たず生活をしてきたことにとっても不満をもっている。2ヶ月ほど前に親と連絡（一日会う、電話をする）をとったが、家には帰る気はない。両親が不仲であるし、父はお金のことばかり気にする。下の弟は、スポーツなどで父に面倒をみてもらったが、自分は面倒をみてもらえず、弟たちの学費も含めて家のためにお金を入れていたことなどうっぶんがたまっていた。家にいた時よりホームレスをしていた時のほうがよかった。これからも親と生活する気はなく、1人でやっていく。

趣味のようなものはなく、たばこ、酒はやらない。お金があると少しパチンコはやったが基本的なかけごともやらない。

また、東京や大阪府のホームレス支援のNPOの実態についても詳しく語ってくれた。

77. 男性 30代前半

Iさん。1970年代、京都府に生まれる。父親は二度の離婚を経て現在はトラックの運転手をしている。生みの母は現在再婚しており、二人目の元妻は既に亡くなったようだ。祖父母も、既に他界。

幼稚園の頃に大阪市内へ家族で転居。そこで小学校に入ったが、「いつの間にかおらんかった（離婚していた）」ということで、低学年のうちに兄弟で大阪府内の生みの母のところへ行き、その小学校に何年か通った。その後父が再婚して住んでいたところ（大阪市）へ移り、いつときその小学校へ行くが、二人目の母の言うことを聞かず、家出を繰り返していた。家出中は、友達の家でご飯を食べさせてもらったり、コンビニの店員にただで飲み物をもらったり、歩き回るうちに現金を拾ったりしていたという。家の外では大人にかわいがられたようだ。二人目の母には叩かれたりもしていた。

この頃に親が家出のことなど児童相談所に相談したらしく、児童ホーム：現在の児童養護施設に入れられ、そこで小学校と中学校を卒業。中学卒業後、職業技術専門学校へ1年通い、そこで塗装を習得した（資格は無し）。電車で施設から通っていたが、最寄り駅から歩くのが遠いのでお金のあるときにはタクシー通いをしたという。施設がくれる小遣いの他、乗らないときには顔を憶えた運転手が声をかけてくれたが「今日は金ないで」というと、ただで乗せてくれたこともあったと語る。この後現在に至るまで資格、免許無し。

初職は職業技術専門学校を出てすぐの時期から塗装会社に勤めた。器具部品の焼き付け塗装などの業界で

は五本の指にはいる会社だという。従業員は200~300人はいた。寮費が引かれて月に15~6万円の給料が出たのだが、数ヶ月で辞めた。寮の荷物を父に取りにきてもらい、夏にはそのまま自分から辞めて出て、父のところへ転がり込んだという。そのときから職安（ハローワーク）通いがはじまる。職安へ毎日のように自転車で通って、仕事を決めては辞めるということを繰り返した。

たとえば、職安経由でペンキ屋に勤めた。自宅事務所で経営している個人建築業だが、従業員は10数名いたという。毎日最寄りの駅を始発か2本目に乗り、6時半には会社近くの駅につき、7時に車で拾ってもらって現場へ行くという生活だった。ここは社会保険もなく日給月給の月末払いだが、給料は毎月15~6万円あった。ところが、ここも半年で辞めた。辞めたらまた職安へ行くが、短期間で辞めることが多いので職安の職員にも「またかー」と声をかけられたという。

次は、大阪市南東部にある家具の塗装屋で働いた。ここは職安で紹介された塗装会社が「うちは足りてる」というところを何度も押しかけていたら、紹介してくれたところ。もともと、別の工場の経営者が借金で「どっかいった」業務を職安で紹介された塗装会社の知り合いが引き継いだということらしい。その塗装屋では、工場での作業以外に、百貨店などの現場へも行ったという。ここも社会保険はなく、日給月給の月末払いだが約20万円の給料があった。ここでは20歳すぎまでおよそ1年半働いた。

20代前半に黙って家を出て「放浪の旅・第一弾」に出たという。しばらくは大阪や神戸をうろろろしていたらしい。廃車の中などでよく寝た。今はきれいになっているが、当時不法投棄されているところがあったらしい。廃車で寝ているのは、自分ひとりだったとのこと。「エサ（食事）」には、コンビニやファーストフードの残飯をとった。店によっては店員が手渡しで出してくれるところや、時間前に何人も並んでいるところなどもあった。衣類の洗濯代くらいは持って歩いていた。ジュースや酒の自販機から金を抜いたこともあるというが、捕まったことはないという。ビールの自販機だと4万円くらい貯まっていることもあったとか。

あるとき神戸を通過して姫路まで75km歩いて行った。姫路では、知人の紹介で一週間だけ契約で飯場に入った。

それから再び大阪府に戻り、駅の近くをうろろろしていたら「にいちゃんよう見るなー、困っとるんか」と声をかけられた。いつも組の事務所の前を歩いていた姿が事務所の監視カメラに映っていたらしい。家出のことを話し、寝泊まりさせてもらうようになった。犬の世話をしたりしながらずっと鍵を預かっていて、若い衆が自分のところへ取りに来るほどだった。この頃、組の人の紹介で居酒屋のアルバイトもしたことがある。数ヶ月して、親分が亡くなりその事務所は解散した。若頭たちは別の組に行くと言っていたが、自分は「仕事でも探すわ」と言い、そこを離れた。「がんばりやー」という感じで送り出してくれた。

そして「西成」へ戻り、高架下に段ボールとふとんを敷いて寝ていた。ここでは近くにおっちゃんは何人か寝ていて、ふとんを貸したりワンカップをもらったりしたことはあるが、それほどよく話したわけではない。「エサとり」は夜中に行っていた。時間帯は店にもより、早いときには早い（夜中1時頃）が遅いときには午前3時半~4時、ゴミの回収車が来る直前のときもあるので、逃さないためには早めに行って離れて待っている。いきさつは分からないが、火事があり、そこの片付けをしばらく手伝い、その火事場（文化住宅か）の焼け残った部屋に住むようになった。

そこの文化住宅の管理人の知り合いから穴あけの仕事を紹介してもらった。建設業者の下請けで二人一組でする仕事の親方がちょうど相方を探しているということで、その仕事を始めた。それからその文化住宅の家賃を支払っている。風呂無し共同トイレで月額2万4千円、風呂は銭湯。橋ゲタなどの鋼板部材、ボックス、リブなどの穴を開ける仕事だった。仕事は忙しいときと暇なときの差が大きいけど、はじめのうちは暇なときでもタイムカードを押したらちゃんと計算してくれたという。社会保険なし、日給月給

だが当初は月額 23 万円くらいあった。ところが呑み代などに消えた。右手の人差し指をワイヤーにからまれねじれたのと小指を骨折したのと、二カ所にケガをしたが、片方は労災が効いた記憶があるとのこと。

ここで 6 年間働いたが、予告なく給料が下がることが何度かあり、結局月額 12~3 万円にまで下がっていた。文化住宅を出てからアパートに住み始めた。このとき十数万円の礼金がかかり、家賃は月額 4 万 3 千円だった。とくに夏が暇で、この夏も仕事がありませんで別の知り合いに忙しいときだけ仕事を手伝ってくれと言われていたので、穴開けの仕事を辞めた。親方に言わずに出たが、前月分の給料までもらった。この頃から家賃を滞納している。

知人に頼まれていた仕事は、ねじのコーティング塗装だった。有名な住宅建築会社の下請けで、一戸建ての家の建築現場に入った。結局 1、2 ヶ月ほど働き、まとめて 10 万円くらいを後払いでもらった。このお金は、呑み屋などにつけてあった借金の片付けに消えた。この時には家賃の滞納が 2~3 ヶ月分貯まっておき、家の鍵を付け替えられていた。

アパートを追われて、本人の言葉にいう「放浪の旅・第二弾」がはじまる。西成区内をうろうろしてからある公園にたどり着き、夜中に「エサとり」などに出かけて朝 5 時か 6 時頃に公園に戻り眠るという生活をしばらく続けた。あるとき公園管理事務所の人から「困ってるんか？」と声をかけられ、巡回相談員につないでもらい三徳寮に入所、2 週間経って自立支援センターに来た。巡回相談員のカードはいまも財布にとってあるという。もしかしたら、I さんは「放浪の旅・第二弾」がまだ続くと覚悟しているのかも知れない。

住民票はいまアパートの住所のままだと思う。その前は文化住宅だった。移さないといけない。

今後どんな仕事があると良いかきくと、やはり塗装が良いという。話のはじめにも自分は塗装だと言っていたので、施設から職業技術専門校に通ったときにアイデンティティを持ったのかも知れない。

療育手帳等はないというが、もしかしたら児童養護施設のときに取得していた可能性もある。

健康状態は元気そうだが、右手のケガの後がときどき痛むという。歯もわるい様子。

借金は呑み屋 3 軒ほどに計 12~3 万円。大きい所で 5~6 万円あるので、お金が入ったらまずそこに返しにいきたいという。サラ金などの借金はない。酒は未成年の頃から呑んでいた。

自転車窃盗で何度か捕まったことがあるが、指紋や写真をとられただけで済んでいる。

そもそも、これまで銀行通帳というものを持ったことがない。

きわめて明るい。

78. 男性 30 代後半

5 人兄弟の 3 男。住民票は和歌山にある。生まれてから高校を中退するまで、和歌山県の観光地で育った。両親はともに九州から和歌山に出てきたのでいわゆる「地つき」の人ではない。

父親は内航航路の船員（自営）をしていた。母親は内職のボタン付、仲居、日雇の土工、農作業、パートなど、何でもして家計を支えていた。母親は昼も夜も働いていた。苦勞していたのを見ていたので、酒もたばこも飲んだが、陽気で自分とは気もあい、「大好き」だった。父親は仕事で一週間ほど帰ってこないことが多く、あまりしゃべらないこともあって、好きじゃなかった。「お金を持ってくる人」という感じだった。

父親と兄とは折り合いが悪く、会いたい気持ちもない。「あんなやつ（父親）早く死んだらええねん」。現在、父親は年金暮らし、兄は他界。妹は離婚して子どもを連れて実家に戻っている。今は実家とは何の連絡もとっていない。

子ども時代は、姉や長男が優遇され、自分は放置されていた。長男も姉も大事に育てられていた。長男は一人目の子どものため。姉は親類を見渡しても女の子は体が弱かったため（妹もぜん息もち）だ。たとえば自分は制服一つ買ってもらえなかった。姉は毎年服を新調してもらっていたのに、自分は成長期に自分の身長が伸びても、制服は新調してもらえないまま。体にあわない、おさがりの制服をずっと着させられていた。とにかく、子どものころはおとなしくて文句の言わない子と見られていたのか、他の兄弟に比べて放置されたままだった。

もう一方で、バイトをしたり、家事をしたりと家のことを色々手伝っていた。小中学校時代は、薪集め・薪割り（薪割りというよりも枝折りの方が近いかな？——母親が山に行つて薪にするための枝を集めてきて、それを折っていた）・風呂焚きや買い物など、していた。家が貧しかったので小学生のころ新聞配達を始めた。新聞配達は4年間続けた。配達、集金、営業をしていたが、あるとき集金したお金がなくなった。母親が勝手に持っていき使い込んでいた。しかし、そのお金で遊んだわけではなく、家計に入ったと思うということもできずに黙っていた。その後は借金返済のために、新聞屋で「ただ働き」をしていた（なので自分としては2年分くらいの給料しかもらっていない）。とはいえ、借金は新聞屋を辞めるまでに全額返済できたわけでもなかった。勤め先の新聞屋は地元の営業所であったため、あるとき父親に事情を話したようだった。「そのとき、家の中こんな（混乱）なっていたけどね」。父親の賃金が低く（当時20万円/月くらいではないか）生活に困つてのことやと思うと…。父親は61歳で定年退職したが、その時は35万円/月くらいもらっていたと思う。「そんなに給料が少なかったわけではないはずやけど」。

小中学校時代はスポーツはそんなに得意ではなく、クラブ活動はしていないが、生徒会活動をしたりしていた。高校は自分のお金で通っていた。自分のお金で入学金を払い、学費は土日や夏休みに旅館のアルバイト等をして稼いで、親に負担はかけなかった。あるとき、お金も欲しい、新しい服も買っておしゃれしたいと思って、高校を中退して都会へのあこがれもあって大阪に出てきた。

まずは、本屋で販売している求人誌（アルバイトニュース等）で見つけた、居酒屋の住み込みの仕事に就いた。ここでは調理から給仕までなんでもこなした。

おおよそ20代は、スキー場で働いた。冬場のスキーだけではなく、林間学校などもあり、冬以外にも仕事があった。信用されると「翌年も（来て）」と声がかかり毎年のように働きにでかけた。「今年もまた来たんか」と言われていた。ただ、仕事が忙しいのでスキーをするなど遊びはしなかった。

20代の初め、過労で倒れ検査入院をした（自費）。先天的な病気が見つかった。それまで自覚症状はなにもなかったのがこれまでわからなかった。このこともあって、2〜3年は実家に戻つて和歌山で母親の看病をしながら過ごした。母親はちょうどこの時期身体を悪くして入院したりしていて、在宅介護が必要になっていた。年金暮らしの父親や出戻りの妹も介護をしていたが、自分が中心となって介護をして過ごした。しかし、この時期、病気を治さなかった。なお、この時期に交通事故にあったが、後遺症などは残っていない。

このころは、地元で夜の水商売や、農作業に労働者として従事していた。農作業は梅の栽培・加工でその技術も身に付けた。この経験から、「自然のなかで仕事をするのもいいなあ」と思うようになり、和歌山で中部地方の農家の求人が求人誌に載っているのを見て、その仕事に就くようになった。野菜（白菜、レタス等）の収穫や運搬で力仕事であった。その後はスキー場の仕事と農業、ふたつの季節仕事を掛け持ちして働いた。1年のうち農業の占める期間は5ヶ月から6ヶ月であった。このころは母親（や妹の子ども）にプレゼントを持って帰りたくて働いていた。

30歳になる前に大阪に出てからは兄弟姉妹とも連絡をしていない。連絡してもけんかになってしまうから。しかし、近所の人や同級生に連絡をして実家の情報はいくらか得ている。

30歳になる前に2,000円もって大阪で働こうと大阪に出てきた。大阪に出てきて水商売にいったん就いたが、他府県で水商売することになる。仲間うち何人かでそこで新しく水商売をしようという話になり、誘われてこの話に乗った（「自分は別に（彼等を）信用してたわけでもなかったけど」）。そこではマネージャー等の仕事をしてしていたが、またよく盗難に遭った。自分のロッカーの合い鍵を他の従業員に作られていたようで自分の物がよくなっていった。

そのころ、ホテルで働いていた人と知り合ってウマがあい仲良くなった。その人が不動産業に転業して、大阪で働くというので、大阪で一緒に家を借りようという話になった。その人がホテルで働いていたというのは本当のようで、業界誌の編集をしていてその原稿を10万円ぐらいで書いてくれと頼まれてもいた。そして、家賃は向こうの人が多く負担するようにもなっていたはずである。

ところがその人に有り金を持ち逃げされてしまった。一文無しになってしまい、しばらくホストで稼ぎつつ、映画館等で寝る生活になった。お金を稼ぐためにお店の知り合いの紹介でアダルトビデオにも出た。ちなみに、ホストのお店に来るのは女性だけではない男性も来ていた。こうしてお金を貯めて（安い）アパートを借りた。ここでは友達も多かった。自分の部屋に友達が来てはよく寝泊まりしていた。「1人泊めたら、2人でも3人でもいっしょやと思って（毎日、たくさんの人を寝泊まりさせていた）」。別に友達でない「知り合い」の人もよく遊びに来た。「自分が苦しいときは助けてもらったことあるから」。「こっちは（友達と）思てなくても来たら断れんやろ」。「5人来て、3人知り合いで、後の2人知らんから言うて帰すわけにいかんやろ」。一見の人でも泊まりに急に来たりしていた。こんな風にたくさんの人が出入りしていたが、お金や物もよくなっていった。「時計なくなったりな」。

人付き合いを切ろうと、その後、釜ヶ崎のドヤで生活を始める。このとき、天王寺でベンチに座っていると警察から職務質問を受けた。あまりにも高圧的な態度をとられたのでトラブルとなり、一発殴ってしまった。公務執行妨害で逮捕された。執行猶予の判決を受けた。

その後、その年の末までは派遣で荷物の搬入・仕分けの仕事をして働いた。この頃、何年か前に母親が死んだことを地元の友人から聞いて知った。これまでは母親や妹の子どもに何かプレゼントを買って実家に帰りたいと思ひ、それを張り合いにお金を稼いできたが、急に目的を失い何のために働いたらいいのかわからなくなった。何もする気が失せてしまった。

そこで、かねてから一度東京に行ってみたいという思いもあったので、夜行バスで東京へ行った。「もうちょっと若いときに行ったらよかったかもしれんけど」。東京ではたまたま知り合いに出会って、その友達に居候させてもらうことになった。何ヶ月かその友達のところにいた後は特に目標もなくそのほかにできた友達のところをうろろしていた。チンピラ風の仕事で小遣いをもらったり、酒を飲ませてもらったりしていた。お金もなく、東京駅から新宿まで歩いて移動したぐらいだった。「そこに立つといってくれ言われて、立ってたらお金もらえた。...なんかよーわからんけど。そんなんでお金稼いでた」。

「こんなことしてたらあかん」と思い一度帰阪。2週間程で東京に帰るつもりだったが、「そのままになってしもた」。大阪に戻って、家もないのでサウナや映画館で寝泊まりしていた。このとき、公園で声をかけられ、飯場の仕事に就いた。なお、その公園では野宿していたわけではない。

年末に住み込み派遣の仕事を見つけ、年頭から就職のところ、知り合いの飲み屋でクリスマスパーティーの手伝いを頼まれた。従業員に頼むとお金もかかるので、簡単にもりあげてくれないかと店主に言われる。その行き道でキャッチセールスの人ともめ、警察がきて、さらにもめて公務執行妨害で逮捕された。「最初は、スーツも着てないし、（そのキャッチセールスの）人はお酒も飲んでたみたいやし、ただの酔っぱらいやと思ってた。しつこくからんでくるから、（こっちは相手はただの）酔っぱらいやと思てるし。（からんでくる言うても）なんてことなかったんやけど、他のスーツ着たキャッチセールスの仲間が

警察呼んだみたいで（大ごとになってしもた）。（警察が来て仲裁に入ってきたときに）警察に後ろから抱えられて、ちょっと手挙げたら（警官の顔に手の甲が）当たってしまって…、公務執行妨害」。執行猶予期間中であったため、その前の刑と合わせ2年弱、刑務所に入った。

出所後、行く当てもなく梅田の駅手配で手配師に誘われ飯場暮らしを2回したが人間関係もあってすぐ辞めた。

その後、梅田でたばこを吸っていると、隣に座っていた同郷の人に誘われて交通量調査のアルバイトをした。ちょうど忙しい時期だった。交通量調査のアルバイトに自分を誘った、この人は貧しいながらもほかの仕事もしていたという。

交通量調査は24時間拘束のときもあったが、それゆえ実入りはよく、サウナで寝泊まりをして、飲みに行ったり、休憩時間の2時間は普通仮眠をとるが、走ったりしてトレーニングをしつつ仕事をこなしていた。「たまたまこの仕事に向いていて」、調査はふたりひと組で行うが、もうひとりの人が疲れて寝てたりすると、その人の分も打ち込んでいたぐらいだった。指で打ち込むような仕草をしながら、「右から、左から、三ナンバー、五ナンバー、バス、トラック…」と「となりの分も打ち込む」。

この仕事を続けていたが、季節的に仕事がなくなってきたので「西成」で日雇をすることにして安いドヤを探した。日雇仕事の中に知り合いになった人から紹介された派遣の仕事を、明るくなる年の暖かくなる季節までした。その派遣業者は市内中心部にあり、日給8,000円であった。賃金は日給、週給、月給を選択できたが、日給でもらっていた。仕事は建築関係の機材の搬入や新築マンションの清掃など。「一般土工とかはでけへんけど、力はあるから荷物運びやったらできるから」。自分に派遣仕事を紹介してくれた人は60歳ぐらいにもかかわらず、あまり仕事もできずに、自分の後ばかりついてくる。いやになって、若い人が多い仕事を選び、その人と違う（その人が嫌がるような）仕事場を選んでいった。仕事は一日に2つの現場に行ったり滋賀県で仕事をしたりと多くの仕事をこなした。大阪の事務所から滋賀の現場に行き、帰りに途中にある京都のカラオケボックスに寄り、カラオケボックスで寝て、翌日大阪の事務所に行くというようなことをしていた。毎日、あらかじめ予定は聞いているが携帯が無かったので朝1番に事務所に行き、前日の賃金をもらいその日の指示を受けるという形態で仕事をこなしていた。勤めだして3ヶ月ぐらいすると賃金が滞り出したので、未払い賃金もあったが辞めた。

その年の春頃から体調が悪くなった。よく行く立ち食いそばの経営をしている知人宅に転がり込んだ。「なんか、態度悪いし、経営のこと考えろよ、というようなそば屋やったけど。…ホモやったんかもしれんけど」。体調は戻った。一緒に仕事を（夜の立ち飲み屋）との話もあったが、反目があり別れた。「世話になったし、手伝ってたけど、なんかもっとちゃんとしろよと思て、むかついてきて辞めた」。

自立支援センターに入ることにした。友人を通じて自立支援センターは以前から知っていた。その友人は自立支援センターから自立できた人だったのでこれはいいと思っていた。それまでは自分は団体生活になじめず、酒も飲むし、ホームレスの人は汚いというイメージもあるので入所したくなかった。また、出所後1年間は自由になりたいという気持ちもあり、（自由に）やってきた。が、そろそろ生活を立て直したいと思い、入所することにした。これまでに巡回相談員と偶然出会っており、連絡先は知っていた。直接、相談員に連絡をとり、区役所で面談して入所した。自立できた友人が入所していた自立支援センターに入所しようとあらかじめ決めていた。

入所後、以前見つけた先天的な病気を治すために入院。退院して自立支援センターに入所、その冬に自立支援センターを退所した。ホテルの仕事を見つけて働いていたが、寮外のけんかで退所となった。

その後、別の自立支援センターに入所した。うまくいかず自主退所した

「西成」でドヤ住まいをした。ドヤに泊まっていたが、先に出所したメンバーがたまたま向かいのドヤ

の清掃員をしていて、その人と会うことができた。その彼は自分のドヤにひんぱんに出入りをするようになった。自立支援センターで原付自動車の免許とフォークリフトの講習修了証を取得していたので、毎日仕事のあるフォークリフトの仕事をしようと思い、求人誌で見つけた派遣会社を通じて面接を受け、「明日から仕事に来てください」と言われてドヤの自分の部屋に帰ってくると荷物がすっかりなくなっていた。そのメンバーに盗られたと思われる。荷物の中には自分で買ったり、自立支援センターや人からもらった服や高級品がかなりの量あった。全部で革のジャケットなんかもあったので総額で50万円ぐらいあったと思われる。西成署に被害届を出したが捜査したとは思わない。携帯電話や通帳も盗られたので、仕事は諦めてもろもろ止める手続きをした。

就職もできず、一文無しになってしまったので風俗関係の仕事をすることにして寮住まいをした。家に出向いてサービスをする仕事であったようである。いつも「相手する」わけではなく、話をするだけのこともあった。収入はそこそこあったし、そのころもトレーニングはしていた。

その仕事を辞めて身体を試すためもあって飯場に入ったが、現場で倒れ病院に運ばれた。

病院の関係で担当の巡回員と区役所で会い、再度自立支援センター入所となった。

いまでもトレーニングはしている。とにかくどんな仕事でもいいので毎日ある、安定した仕事をしたいと思っている。今はフォークリフトやヘルパーの仕事を考えている。そして生活を立て直したいと思っている。将来的には飲食関係の仕事をしたい。資格も身につけたい。

重労働はできないが、生保を受けたくないし、(なんどかすすめられたが)今の条件では受けられないと思う。

79. 女性 30代後半

大阪府北部の出身。父親は元々大阪府の東部地域出身で印刷業を自営していたが、80年代に仕事量が減ったため廃業、警備員の仕事をしていたが、数年前に倒れ入院、その後生活保護受給していたが亡くなった。母親は本人が生まれてすぐ亡くなる。父親は彼女が幼稚園にあがる前に再婚するが、再婚相手にも連れ子がいて、実子との差をつけられ関係が悪くなり親戚に預けられていた時期がある。兄妹はいない。結婚もしていない。

保育園のときは、アレルギーがひどかった。食物では乳製品、香辛料、生ものなどが食べられなかった。現在も食べられないと思っている。そして水道水を飲むと下痢をする。また吸入薬など薬に対してもアレルギーがでることもある。アトピーにも悩まされた。

高校を卒業して進学を考えたが経済的に「無理」だったため就職する。大阪市内の製作所で手書きの営業事務と検査の仕事をしていた。これは高校からの紹介で年金はあった。この頃、働きだしたとき宴会で飲酒して急性アルコール中毒になったことがある。数年後、新聞の折り込みの求人でゴム会社にパートで働く。年金はかけていた、手取りが15~16万円。さらに数年後、印刷会社で働き始める。6年間勤めた。これも新聞の折り込み求人でみつけ、パートで働いていたが年金はあった。その後、いくつかの派遣会社に登録。登録して、情報サービス会社に約3ヶ月働く。このときも年金はあった。それ以外にも大手派遣会社に登録していた。そしてTOEIC(英語検定)やコンピュータの資格などを取得するために、週に1、2回、1、2時間のビジネススクールにも通った。

このころ、父親と一緒に生活していた家から出る。理由は父親が倒れ入院、生活保護受給するにあたり、「扶養義務者」の自分がいたら問題だと思ったのと、ちょうどその頃アパートを取り壊す話が出たので。

数年後、父親が亡くなり、父親の遺産が100万円ほど入った。それと自分でそれまで働いて貯めてきた貯金が50万円あったので160万円弱で生活してきた。その後はずっと派遣の仕事ばかりである。その

年春に営業事務、同年秋に貿易事務、つぎの年の春に貿易事務、同年秋に保険会社の一般事務の仕事などに就いた。

求職活動に関しては、ある職安には失業給付を受けるために行っただけで、専ら大阪市内の職安に求職活動をしに行っていた。職安で探す仕事は貿易事務、派遣では貿易事務かコンピュータ関係の仕事のみの職種に限っていた。自分の持っている資格を活かすためにはこの職種だと思っていた。

しかし最近はその職安に行くも「どうせまた落ちる」という不安・恐怖から、面接に行くも採否の結果を待っている間に過食になってお金が急激に減るようになる。またお金が減るとそれは不安になり、面接に行くことができなくなるという悪循環に陥った。そしてさらに過食だけにとどまらず、感覚がおかしくなることがあった。具体的には、全身が痺れて、動悸が激しくなり、過呼吸状態になった。

病歴や過食については、20代前半に、入院して手術をした。手術してから免疫力が低下してアトピーなど体調が悪くなる。そのとき眠剤を一箱まよりのみしたが、入院には至らなかった。

20代半ばの半年間、過食がひどくなる。過食の原因は上司が自分にきつくあたるようになったから。従来やっていた仕事をしようとする、他のスタッフがやっていて、「おまえのような低能なやつにはさせられない」「やることをやったら帰れ」と言われるようになった。このような嫌がらせをされたのは、きっと自分の上司よりも自分の給料が良かったためと思っている。過食のときは、1回の食費で2,000円以上、具体的にはケーキ1ホール、スナック菓子、お中元などで送られてくるボンレスハムなど。同じ頃、不眠もひどくなり、朝の4時から2、3時間しか眠れなかった。あまりにもしんどかったので、心療内科の病院を2回受診した。食後3回飲む薬を処方された。最初の1回目の受診のときは調子がよかったが、2回目の受診で同じ薬をもらい服薬していたところ、幻覚をみた。虫が床に這っているのが見えた。それから病院に行くのを止めた。最後の過食は今年の秋であった。

この間生活費が少なくなってきたので、今年、区役所の保健福祉センター（福祉事務所）に行ったところ「まだ若いし、仕事ができるでしょう」と言われ何もしてもらえなかった。それで困り果てて幼少の頃世話をしてきていた、親戚の所に行く。しかし金銭的な援助をしてもらおうと思ったのではなく、その他にどのような支援が受けられるのか相談に行ったにもかかわらず、連絡をとらないでほしいと言われた。それがショックで再び不眠がひどくなり、夜中に3、4回、目が覚めるようになった。しかし以前のことがあるので病院を受診することはなかった。

父親からの干渉が激しかった（と思い混んでいる）。体調が悪くて朝が遅いことがあったら、会社をさぼっているのではないかと部屋にまで怒りに来ることがあった。「おまえのことは信用できない」「死んだ母親とそっくりだ」「身内は大学に行っているのに」「料理が気に入らない」「買い物下手だ」などいろいろ言われた。働きだしてからも門限があり午後8時までに帰らなければならなかった。（根拠はないが）父親が会社に無言電話をかけてきていた。常時監視されていたのではないかと考えていた。そのことについて彼女の母親がわりにあたる、親戚に夏休みのとき相談にいったら、そんなことはない、思い込みだと言われ否定された。

今年、NPO 釜ヶ崎を紹介され福祉相談部門に来る。

80. 男性 30代後半

Aさんは、和歌山県出身。Aさんが小学生の時に両親は離婚、Aさんは父親と一緒に暮らすことになる。元母親とは、その後まったくの音信不通であり、今どこに居るのかすら知らないとのことであった。

その後、父親が再婚し、義理のきょうだいができる。父親は、Aさんが暮らす市内で土木関係の仕事をしていたそうだが（会社に入っていた）とのことであったが、後に述べるように実際にはAさんの仕送

りで生活していたところをみると、父親は日雇いだったのかもしれない)、数年前から病気を患い、現在では入退院を繰り返しているそうである。現在の家族とは、年に1、2回電話で連絡を取るが、現状については全く言っておらず、「元気で仕事をがんばっているから」としか言っていない。他に連絡をとるような親戚もいない。

中学校を卒業した後、Aさんは学校の担任の先生の紹介で大阪府にある紡績の会社に就職する。従業員25、6人のタオル会社であった。研修期間の3ヶ月を経て、正社員となった。紡績会社なので女性も多かったが、男性は荷造り関連を担当し、Aさんは現場の材料の出し入れ、配送などを5、6人で担当していたそうである。勤務時間は、遅番と早番があった。この会社には、寮（男性寮・女性寮・夫婦寮）があり、寮費とご飯代を引いたうえでの手取りがおよそ18万円程度であった。Aさんはこの会社に15年ほど勤務したので、最終的には手取りが30万円ほどになったそうである。ボーナスは「少ないけど」あったそうだが、年金や社会保障はなかったらしく、Aさんは自分で国民健康保険に加入していた（後に生活保護施設に長期で入ったときに区役所で国保を返した）。

長く働いていたが、14、5年目、Aさんが30歳の頃に、その会社が火事になり、そのまま会社をたたむことになる。退職金は、従業員も多かったのも、一人ひとり少なくて、Aさんは30~40万円ほどもらった。

給料のうち、5万円ほどを手元に残し、残りは全額実家に仕送りしていた。仕事が休みの日に、給料を持って実家を訪ねていたそう。実家では、Aさんの仕送りにかなり頼って生活していたようで、きょうだいの学費なども仕送りから捻出していたようである。母親も、内職の仕事をしていたようだが、収入としては2、3万円程度だった。仕送りは、Aさんが会社を辞めるまで続けていた。Aさんの仕送りがなくなってからは、（確信はないようだったが）実家はおそらく生活保護で生活しているのではないかと思われる。

また、10代後半、同じ会社に勤めていた女性と、会社の寮で同棲を始める（男性寮から夫婦寮へと移った）。その女性とは、会社を辞めた頃に別れてしまい、その後まったく連絡はないそうである。

紡績会社を退職後、「西成」に行き西成労働福祉センターで日雇いの仕事に就く生活を始める。「西成」のことは、「現金の仕事がある」と友達から教えてもらったそう。Aさんが「西成」に行ったのは、98、99年頃であり、すでに景気も悪かったが、当時現金でだいたい13,000円くらいだったそう。契約にも行ったが、契約に行ってしまうと、かえって赤字になることがあったので（10日契約で行っても、初日は仕事があるが、3~4日休まされ、部屋代そして1日3,000円とられたので結局赤字になり、辞めて出てくる時には手持ちの貯金からいくらか支払う羽目になったそう）、基本的に現金で仕事をしたかったようだ。「西成」の人夫出し業者からよく現金に行っていたらしい。また、釜ヶ崎には知り合いはそれほどいなかったが、若い目立つのか、比較的仕事に就きやすかったそうである。多くは土工や鳶の手元の仕事をしていて、しかし、現金の仕事も、景気が悪く、1日行ったら3日休むような状況だったので、ドヤに泊まったりしていると、この時期に退職金の貯金を使い果たしてしまった。外で寝ることも何度かあったし、南港の臨時宿泊施設も利用したことがある。三角公園や四角公園の炊き出しも利用していた。ちなみに、時期は分からないが、NPO釜ヶ崎にも相談経験がある。仕事が無く困り、一緒に飯場にいた人と体験就労（缶の水を抜いてぺったんこにする仕事）をしたそうである。白手帳は取得していないし、知らなかった。

現金で1年半ほど働いた後、パチンコ店で2年ほどアルバイトをする。時給は昼が1,100円、夜が1,300円だったが、毎日仕事に入れるわけではなく、1週間に3、4日しか入れなかった。やはり、客の多い土・日・祝日に入ることが多かった。パチンコ店へは、ドヤから通勤していた。パチンコ店を週払いにもらって、ドヤには10日分まとめて払っていた。

その後も、「西成」でちょこちょこ仕事を続ける。基本的には、現金の土工の仕事。1泊1,500円のドヤに泊まっていた。

他には、シャブの売り子を何回かしたこともある。組関係の人が「ええ仕事あるで。仕事せーへん？」といって声をかけてくるらしい。ちなみに釜ヶ崎には、シャブの売り子は結構いるが、それぞれ組によってシマ（縄張り）が違うそうである。外から買いに来る人も多く、客は「(シャブが)好きな人」、やくざ関係の人が多かった。1日の売り上げは、14、5万円になるそうだが、そのうち売り子がもらえるのは2万円だった。売り子自身が「好きな人」だった場合は、現金1万円と現物をもらう形になるそうである。Aさん自身は売ってただけで、自分ではやらない。この仕事で、警察に捕まったことも2、3回あるらしい。実刑ではなく、保護観察処分であったが、西成警察の刑事とはほぼ顔見知りになり、立っていたらすぐ「がんばるとるか〜？」という感じで刑事が寄ってくるらしい。「西成」では、すでに顔を知っている人も多いので、自立支援センター退所後は、「西成」に戻るつもりはない。

昨年の暮れぐらいから腰痛が出始める。今年、1ヶ月強、ヘルニアで社会医療センターに入院していた。退院後、市更相に行く。その後、一時保護所、そして、生活保護施設に入所するが、トラブルになった。担当からリーダーに相談してもらったり、市更相の担当にも相談したが、みんな「出て行く」か「違う施設に行く」のどちらかしかないと言い、どちらにするかは自分で決めていいと言う。結局、別の施設に行くことになった。しかし、その施設は、年配の人が多く話が全く合わず、周りに何もないので、結局、無断退寮して帰ってきた。保護費があったので、9千円ほど手元にあった。

1週間間をあけて「短泊」から医療センターで血圧の薬をもらって、市更相に相談したが、無断退寮しており3ヶ月経ってないので、1回目はダメだと言われた。「ふるさとの家」で相談すると、もう一度行けと言われたので、しばらく間をあけて相談に行ったら、今度は「本当はダメなんだけど、自立支援センターやったら考えます」とのことで「今回だけ」ということでオッケーをもらい、2日ほどドヤやシェルターに泊まった後、自立支援センターに入所することができた。

「西成」では顔が知られているので、今後は梅田辺りでアパートを借り、通勤で仕事をしたいと思っている。6ヶ月の間に仕事を見つけようと考えているが、体調的にも建設関係の現場は辛いので、まずは病院で高血圧とヘルニアの病気を治したうえで、軽作業や清掃などの仕事を探そうとしている。「デスクワークは？」と尋ねてみると、「いけるけど、パソコンは触ったことないし…」とのことであった。現在も求人誌などは見ている。

現在は携帯電話も持っていないので、就職活動のためにもまず携帯電話を持つことと、免許等も何も持っていないので、自動車の免許を取りたいと考えている。

あと、過去に作った借金もあるので、その精算等についても相談したい。ちなみに借金は、友達の結婚式に行くために、金融会社から借りた30万円である。最初の4、5回は、毎月利子を払っていたが、その後やめてしまった。現在では、合計で100万円強に膨れている。すでに10年経ってはいるが、自立支援センターに住所を移したので督促がきた。

現在、身分証となるようなものは「住基カード」のみ。

酒はあまり飲まない。友達と飲みに行った時ぐらい。現在もたまに和歌山の友達と連絡を取り、帰ってこいとも言われるが、「金ができたら行くわー」としか言いようがない。タバコは、10~15本吸う。ギャンブルは、パチンコが好きで、大阪に出てきた頃から休みの日に行ったりしていた。

81. 男性 30代前半

1970年代福岡県に生まれる。父は車の板金塗装の会社に勤めていた。母（現在50歳代後半）は病氣ぎ

みで働けなかった。妹が1人。アパート住まいだったが、中学生の時に、両親が離婚し、母に引き取られて、近くに祖母や親戚のいた団地に移る。母の生活保護で暮す。その頃、交通事故でケガをして入院したことがある。公立高校の受験に失敗し、私立高校に行くお金がなかったため、夜間高校（5年間）を卒業する。父は10年ほど前に亡くなってしまった。高校時代に原付の免許、20歳で車の免許を取得する。免許取得に関する費用は、父がだしてくれた。その他、生活費も入れてくれていたらしい。高校時代からアルバイトをしていた。高校卒業時に学校から就職先の紹介はあったが、自分で決めると考えていてすぐには就職せず、1ヶ月ほど福岡にいた。その頃、就職する前に百数十万円の借金を作っていたようだ。

高校を卒業して20歳のとき、1ヶ月ほどして、原付で大阪に出てきて仕事を探す（住み込みの仕事）。雑誌で見つけたパチンコ店に勤める。梅田の店で住み込みだった。弁当も付いていた。月給18万円くらいで、社会保険無し、月4回くらいの休みだった。本人曰く、「あきっぽい」性格らしく、特にトラブルもなかったが、1年半ほどで辞める。

原付は盗まれていたため新幹線で一度福岡に帰る。北九州に行き、雑誌で見つけた住み込みのできるパチンコ店の仕事に就く。月給18万円くらい、社会保険無しで、まかない付きだった。自分の小遣いはパチンコに使っていた。その他、付き合いで飲むことはあった。この店に勤めていた時に、父が亡くなる。1年ほど勤めて辞める。

北九州の時、先輩から買った中古車（大阪で廃車になる）で大阪へ行く。雑誌で仕事を探し、ラウンジのような飲み屋でボーイの仕事をする。住み込みだったが、食事は付いていなかった。勤務は午後3時頃から始まって、店が12時頃に終わり、女の子を送ったりして2時頃までになった。今までとは時間帯が違う仕事だったが、苦にはならなかった。月給は18万円くらいだった。この仕事は半月ほどで辞める。

その後、実家へ帰る。ハローワークで見つけた独立運送の仕事始める。300万円の軽トラックを買わせる（借金をする、7年払いで月7万円のローン）。1回運ぶと1万3千円の収入になるが、仕事を回してもらえないのははじめだけで、借金だけが残る。

再び、パチンコ店の仕事に就く。住み込み賄い付き、月給25万円くらいだった。しかし、会社の方針で1年ほどしてクビになる（同時に何人か解雇された）。

1~2ヶ月ほど友だちの家でいた。そして、別のパチンコ店に勤める。月給18万円くらいだった。半年ほど勤めるが会社の方針に従わず、トラブルになってクビになる。

派遣会社に初めて登録し、未経験者でもできる仕事ということで東海地方の工場に行く。プリンターの組み立ての作業で、従業員は数百人の大きな工場だった。住み込み代を引かれて、月給15万円くらいだった。食事代は自分で出していた。同じことばかりで飽きる仕事だった。1年くらいで辞める。

20代後半に東京へ出て、上野駅で駅手配で声をかけられ、飯場の仕事に行った。千葉に住み込み、関東の現場に行った。現場は長い所で1カ所1ヶ月くらいだった。日当9,000円で、飯代を引かれて月14~15万円くらいだった。5ヶ月くらいで辞める。その後、ハローワークで探し、東京のカプセルホテルの仕事を行う。住み込みで月給20万円くらいだった。その時、社会保険には入っていた。1年ほどで辞める。この頃は住民票も東京。

福岡の実家へ数ヶ月帰る。再度仕事を探しに大阪へ行く。誰かに聞き、西成労働福祉センターから契約の仕事で飯場に行った。滋賀、神戸などの現場へ数ヶ月行った。一戸建て、学校、会社などの解体の作業だった。

時々ドヤ（1,500円）にも泊まっていたが、契約の仕事が無くなってきて、色々な場所で野宿を行うようになった。自分から市更相に「お金、住むところがなくて」と相談し、1ヶ月くらい待って自立支援センターに入った。炊き出しは1週間くらい、シェルター（布団が汚いと聞いていたので使わなかった）も

2 回くらい経験がある。自立支援センターにいる間の 1 ヶ月半ほど、パチンコ店で正規社員として働く。月給 28 万円だった。その後、「実家へ帰る」と言って退所、貯めたお金で実家に帰る。運転が好きなので宅急便などの運送の仕事を探すが、条件の合う仕事が見つからず、3 ヶ月ほど実家にいる。

以前登録した派遣会社に「以前働いていた」と言って、名古屋の工場の仕事を紹介してもらう。水道メーターの仕事で、従業員数百人規模の工場だった。「寮費」などを引かれて、月給 12 万円くらいだった。仕事はきつかった。契約が 3 ヶ月だったので満了して終えた。2 週間くらい名古屋でネットカフェ（以前にも使用したことはある）やカプセルホテルに泊まっていた。

名古屋で仕事が見つからなかったので大阪へ来る。住所が定まっていない（住民票は現在名古屋のまま）ため、仕事が見つからなかった。派遣会社に大阪で登録し、日雇い派遣（8,000 円）の仕事（倉庫の仕事が多い）をした。週 3~4 日仕事があり、1 ヶ月ほどはやっていけた。その間はドヤ（1,500 円）に宿泊。

日雇いではない仕事も探したが、住むところもないまま金に困り、知人に教えられて市更相へ相談に行くと「1 ヶ月くらいかかる」と言われ、区役所へ行き、三徳寮の生活ケアセンターで 1 週間ほど過ごし自立支援センターに入所した。今後も大阪で続けられる仕事、「今まで経験していない新しい仕事をやってみたい」と考えている。未経験だが IT 関係の仕事を希望している。

大阪へ仕事に出る前の 20 歳頃、福岡で消費者金融 4 社から百数十万円の借金をする。自家用車代（事故で廃車）、パチンコ代、飲食代などに使う。返済については、踏み倒すつもりでいたらしい。福岡には催促があったようだ（本人は大阪に出ていた）。その後、独立運送の仕事始めるため、軽トラック代として 300 万円ほど借金を重ねる（どこから借りたのかは不明）。借金全額の利息が膨らみ、総額 800 万円くらいになり、親戚の詳しい人に相談し、弁護士を通して自己破産したとのこと。

82. 男性 30 代後半

大阪府の東部で生まれ育った。父は現在 60 歳代前半、母は 50 歳代後半だと思う。健在だがここ 3 年ほど連絡は取っていない。4 人兄弟の長男で、妹、弟、弟。妹は結婚して家を出ており、弟たちも家を出ているが、あまり付き合いがなく分からない。たぶん所帯を持っているだろうとのこと。父は今は車を持ち込んでの運送屋の仕事をしているが、A さんが子供の頃は、家族営業で自動車部品に穴を開ける工場を自営していた。配達のとときにトラックの横に乗ったりしていたので、A さんも弟たちも車にとっても興味があり、みんな 18 歳になったらすぐに車の免許を取りに行っていた。

父と母とは仲良くやっていた。弟妹がワルになったこともない。父母は「テレビに顔が写らんように」とだけ言っていた。A さんは一番下の弟はかわいがっていたが、3 番目（上のほうの弟）とも仲が悪くはなかった。

住まいは文化住宅だった。小学校から中学校に進み、卒業後、職業訓練校に 2 年通って卒業した。中学の先生から「お前は進学するより手に職をつけろ」と言われて、職業訓練校を進められた。自分は自動車整備のほうを希望していたが、先生が金属塗装のコースを自分の知らないところで決めてしまっていたので、そこに行った。他のコースとしては、建築と木工があった。訓練校にいるときにガス溶接と危険物取り扱いの甲種（一番上の資格）をとった。その後車の免許を取って、大型免許も取っているのので、タンクローリーも乗れる。ガソリンスタンドの主任もできるが、A さんとしては「接客がいや」なので乗り気ではないようだ。バスの運転手も誘われたことがあるらしいが、「人を乗せるのは気を使うから荷物のほうがいい」と言っていた。釣りも好きなので 4 級船舶免許も持っているとのこと。

学校の紹介で大阪の自動車の金属塗装の工場に勤めた。15 人ほど従業員があり、自分のほかにも職業訓練校から 2 人就職しており、職業訓練校と連携していたようだ。社会保険はあり手取りで月給 15 万円ほ

ど。1年間勤めた。「学校の紹介なので辞めるわけにはいかないと思った」とのことで1年我慢したようだ。他の従業員との人間関係のこともあったし、それ以上に工程がハードだった。高級車が多かったので気を遣った。仕事は修理、板金塗装、車内の清掃やワックスがけなどだが、ヤクザ屋さんの車もあり、傷つけてはいけないので気を使うし、朝になって「いついつまでに仕上げる」と朝礼で言われ、工程が押し詰まった状況で作業していた。就職1年後に退職した。

退職後は失業保険をもらいながら職安に通って、間もなく職安の紹介で他の塗装会社に就職した。ポイントは家の近くにあったから。家電メーカーSの下請けで、石油ストーブやストーブの表のパネル・携帯音楽機器などの製品の塗装会社で、パートを入れて40~50人くらい従業員がいた。塗装方法は車とまったく違うが、車のほうが気を使う。社会保険つき、あえて社保付の会社に行こうと思ったわけではなかったが、手取りは20万円ほど。1年半ほど勤めたが、塗装でシンナー中毒に近くなり、ボーとしたりするようになってきたので、からだをつぶすので辞めようと思った。中毒にかかって「ばたん」と倒れてしまう人もいたし、シンナー中毒の中学生が問題になっていた時期でもあるので。工場では換気はされていたが（やはりシンナー臭は強かったということだろう）。このときに、会社に時間の融通をつけてもらって車の免許を取りに行った。

次の仕事も職安で見つけた。失業保険をもらいながら1ヶ月以内で見つけた。退職した会社の裏にある紙の卸問屋で、2トントラックでの配送専門で働いた。社会保険つき月給制で手取りは約25万円。リフトで降ろせるところは降ろしたし、手卸しなければならぬところは手卸した。給与は今迄が一番高かったし、家から自転車を通える距離だし社長も面倒見が良かったが、仕事をするにちょっと嫌気がさして1年半で辞めてしまった。Aさんがいうには、「ちょっと引かかかると辞めてしまった。だが、無遅刻無欠席で会社ともめるやり方では辞めていない。きちんと会社に行って辞めてきた」とのこと。

退職金をもらって「ちょっとゆっくりしようと思ひ、1ヶ月ほど遊んだ」。新聞の折り込み広告を見て直接会社に応募して次の会社に就職した。日給月給制・社保付で手取りは18~19万円。運送会社で、2トン車と4トン車を運転し、凸版印刷でできた紙を配送していた。凸版印刷の専属。自宅から通っていた。少ないときは5~6件、多いときは10件以上廻っていたが、渋滞などがあるので時間に追われていた。Aさんは市内ばかり廻っており、他に長距離運送もあったが、それはしなかった。長距離は宵積みと朝の配達時間指定があり、夜間もずっと走らなければならない。職場の人間関係も良かったし、トラブルなどなかったが、少し暇になってきて何人かは辞めて行っていたので、「それならもういいか」と思ひ、2年ほど勤めて辞めた。退職金はなかったが、寸志はくれたので失業保険はもらわなかった。

辞めた後すぐに新聞折込の求人広告を見て運送会社に就職。日給月給だが社会保険つきで、手取りは18~9万円でその後もあまり上がらなかったしボーナスはなく夏冬に寸志で給与の1ヶ月分もなかったが、そこには12~13年勤めた。トラックは14台あり、Aさんは専属でポットの中ビンをつくる工場に行き、2トントラックでメーカーに配送する仕事をしていた。中ビンを作る会社はいくつかあるが、販売メーカーごとに異なるわけではなく、中ビンを作る会社が複数の販売メーカーの中ビンを作っていたとのこと。今はステンレスが多いが、当時は中ビンはガラス（割れ物）で、配送中に壊れることはあったが、壊れた分を追納すれば、壊したことへの罰金とかはなかった。数年前に退職した。仕事が減り、リストラで辞めることになった。年のいった順に5人くらい辞めていっていたので辞めた。退職金は80万円くらい出た。一番古株の人で120~130万円くらい。

「気がついたならそれくらい勤めていた」とのこと。給与はほとんど上がらなかったが。

その後「西成」に行った。「西成に行ったらいいことがある」という噂があったので、興味しんしんで「西成」に来た。仕事を辞めてから何ヶ月かはぶらぶらしていたが別に親から何か言われたわけではない

が、「親といても」「退職金で遊んどけ」と思い、何も言わずに家出同然で出てきた。最初は「おそろしいところと思った」が、「ヘー」という感じで周りを見た。「西成」のドヤで泊まったが、「抵抗はなく、自分ひとりで自由に気楽にやれる」と思った。ドヤに泊まっているときも合間合間に酔っ払って野宿することがあった。ビールを500mlで6本くらい飲む。酒や焼酎とのちゃんぽんはしない。外で寝るのに抵抗感は無かったとのこと。

その年の秋頃に持ってきたお金がなくなってテントを張らずに昼間は公園のベンチで寝て、夜はほとんどアルミ缶を集めた。大阪市南東部の公園で寝泊りして、大阪府東部のほうにほとんど毎日集めに行っていたとのこと。いいときで1日40~50kgほど集めた。「アルミ缶を拾ったら何とか食べる」と思っていたので、自分で集め先・売り先を見つけて半年くらい続けた。他の野宿している人から聞いたのではないと言っていた。「味を占めたら面白くなって続けた」

ある時、公園で寝ていたら巡回相談員に声をかけられて名刺（カード）をもらった。「缶集めもそろそろ」と思い、寒くなってくるので自分から巡回相談員に連絡した。生活ケアセンターには入らずに、直接巡回相談員と一緒に自立支援センターに行き入所した。2ヶ月間いた。西成自立支援センターからNPO 釜ヶ崎の内職センターにも2週間行ったこともある。その後、パートが決まり、病院の清掃の仕事に就いた。時給850円で朝8時半~3時半まで。3階分を持たされ、廊下や部屋、ナースステーションなどを掃除機で清掃していく。集中治療室がある部署だったので、とても気を使ったし、掃除機のコードを伸ばして清掃していくので、前を見るだけではなく後ろも見なければならない。別の人が患者がコードに引っかかってけがをしたこともあったらしい。トイレは女性が清掃していた。その会社は別の病院の清掃もしており、そっちのほうがパートの人との人間関係が厳しいようだが。神経を使わなければならないのでいやになり1ヶ月くらい働いて辞めた。辞める人が多いとのこと。辞めた後自分から自立支援センターを出た。

「西成」では、西成労働福祉センターから日当1万円で現金仕事に行っていた。家の解体が主で月~土曜までぶっ通しで働いていた。季節的に仕事の少ない、5月も6月も仕事に就けたし、1日5,000円位は貯まっていた。ダンプでガラほりにも行っていたので、それが重宝されていたのではないかと。1,000円のドヤに泊まって1年以上働いていた。飯場に入ったことはない。飯場の話はあまりいい話を聞かないので。2年前の秋ごろから仕事が暇になってきたので、今年の春ごろに巡回相談員に自分から電話したが、「舞洲がいっぱい」といわれたので、夏にまた電話した。「空いています。間違いなく入れます」といわれたので、自立支援センターに再び入った。

今後の希望は「工場の中の軽作業がしたいな」とのこと。タンクローリーやガソリンスタンドにもいけるが、「接客がいや」なので。運送屋をしていたときはずっとゴールドカードで、トラック協会から優良ドライバーで表彰されたこともあるし、事故を起こしたことはない。

酒（アルコール）は飲まなくても我慢できるとのこと。酒での失敗はないとのこと。

結婚は中びんの配送をしていたときに結婚したが、2年程して事故で奥さんを亡くしたとのこと。事故の内容については詳しく聞かなかったが、すごくショックだったと言っていた。子供はいない。

「西成」に来る前の仕事は転職数は多いがすべて社会保険つきの正社員で働いており、最後の運送会社では安い給料でも長期に働いていた。

83. 男性 30代後半

Aさんは、和歌山県の施設で育つ（家に事情のある人の入る公立の施設）。母親が育てることができずに、（おそらく）生まれて早い時期に施設に預けられたが（施設での記憶があるのは、小2の頃くらいから

だそうだ)、そのことで A さんは、母親はたぶん「自分勝手」で、子どもを施設に預けた時点で「失格」、親には「裏切られた」と思っている。実家は、現在和歌山県の別の市にある。

施設では、中学校卒くらいまで暮らす。中学卒業後、奈良のお寺で、段ボールの箱を作る仕事をする。ライン(「ジェットライン」)で、箱を立ち上げる仕事であった。月に16万円くらいになる。寮に住み込みで生活し、夜は自分で学費を払って、定時制の高校にも通う。ダンボール会社には、約2年ほど勤める。

ダンボール会社を辞めた後(高校卒業後)は、自衛隊に計7年間勤める。陸上自衛隊に4年間、その後少し体を休めて、海上自衛隊に3年間勤める。給料は、どちらも手取りが月14万円程度。寮費などはタダで、保険は自衛隊の保険であった。

陸上自衛隊は、まず「陸士」から始まる。2年の任期制だが、1度延長できる。しかし、4年以上(定年まで)継続している場合は、「陸曹」への昇進試験を受けないといけなくなる。陸士の間は「パートみたいな感じ」であり陸曹からが「正社員」のようなものらしい。仕事の内容も陸士の間は A さんいわく「土方と同じ」だそうである。4年のうちに、車の免許を取って辞めていく人や、結婚して辞めていく人も多いそうである。辞めるときには退職金はもらえる。特にバブル期はそういう人が多かった気がするとのことであった。

その後、海上自衛隊へと入隊するが、同様に、「海士」の任期は3年であり、それ以上いる場合は「海曹」への昇進試験を受けることが必要になる。A さんは、「陸曹」でも「海士」もどちらの試験にも受かったそうだが、「自分より若い子が上にいるかもしれないが、そんな命令が聞けるか!」ということで自衛隊を辞めたそうである。

その後は、奈良に戻り、20代半ばから住み込みで新聞の配達員をする。しかし、もめ事があり、出て行ったり戻ったりしたらしい(詳細は不明)。給料は、配達員の力量にもよるらしいが、A さんはだいたい3時間で600軒程度配達し、給料は23万円くらいだったそうである。この店舗を辞めた後も計11年ほど続けて新聞配達の仕事をするが、新聞配達時代は、アルバイトで、保険・年金はなしの生活であった。自分で国民健康保険に加入していた。また、20代後半からお金を貯めつつ奈良で同棲を始める。

5年ほど勤めた後、別の店舗へと移る。このときは「本気を見せた」時らしく、営業の仕事も含めて、この時がもっとも良いときで、月に36万円(基本給が20万円で、歩合で16万円)ほど稼いでいた。良くない時は、28万円くらいだったが、奥さんに「28万じゃ足らん!」と言われ、もがいたそうである。30代前半には結婚したが、奥さんには連れ子があったので、28万円では経済的には厳しかったとのことであった。

その店舗で5年ほど働いた頃、平群町で女児誘拐殺人事件が起きた。この女児誘拐殺人事件の犯人が、同じ新聞の新聞配達員であったため、同じ店舗ではなかったものの、A さんらもかなりの打撃を受けたそうである。本当の理由を知ることはできないが、当時200軒近くが、新聞の契約を切ったそうである。奥さんからも、この仕事を辞めて欲しいと言われたそうである。結局、多数契約を切られたことなどから嫌気もさし、この仕事を辞める。

また、同じくらいの時期に、奥さんとも離婚することになる。離婚することになった理由については、自分1人違う人生を送ってきたから、波長を合わせることが大変で、食い違いが多くなったことが原因だと言っていた。奥さんが出て行った後は、復縁も考え、何度も子どもの顔を見に行ったりしたが「これ以上傷つけたらあかん」ということで、結局会わず復縁も無理であった。また、最終的には奥さんが今まで居た所にはいなくなっていたので、「終わったかな」と思ったとのことであった。

その後、大阪に出てきて、大阪市内で同じく新聞配達の仕事をして1年ほどしていたが、同じ店舗の配達員から逮捕者(不法侵入)が出る。新聞配達員の不祥事が続き、もう新聞配達は嫌だと思い、仕事を辞める。すべてやる気がなくなり、ボロボロになったとのこと。30代後半は、鬱になったりした時期もあったそう

である。

仕事を辞め、残っていたお金を元に仕事を探してやっていたものの、とうとうお金も底をつく。お金がなくなって3日目くらいに市役所へ行き、ケアセンターに入りたいと頼み、自立支援センターを紹介してもらおう。自立支援センターへ入所（1回目）。奈良での生活時代パチンコなどが理由の借金が300万円ほどあったが、ここで自己破産の手続きをする。お金を貯め、派遣会社で警備員の仕事に就く。自立支援センターから通っていたが、退所後は仕事を辞める。その理由は、警備員の仕事は雨が降ったら中止になる、給料が安い、仕事のない時期も多いということである。結局、生活が何ともならなかったので、自立支援センター退所の6ヶ月後に、「ケア」の人に話をし、再度入所させてもらうように頼み、自立支援センターに入所する（2回目）。今回は、約4ヶ月ほど入所し、その間に自動車の免許をとった。また、派遣で警備員をしたりもする。

その後、(母)親と一緒に住みたいと言ってきたので、和歌山県の親元に戻る。13年経って、(母)親は変わっているかと思っただけけれど、結局(母)親は変わっていなかった。家には、借金があり、父親(母親の再婚相手? : 仕事なし)は闇金からも金を借りるほどであったが、すでに借金を清算していたAさんに対し、「のんきでええな」「借金をどうにかしろ」などと言ってきた。自己破産を勧めたりもしたが、聞き入れられなかった。3ヶ月ほど居たものの、結局家を出ることになる。この時のことでAさんは、「親に2度裏切られた」と思っており、2度あることは3度あるし、もう裏切られてはたまらないと思うので、親にはもう二度と会いたくないとのことであった。したがって、親は現在も同じ所に居るが、「探すな」と言っているらしく、また会いに行く気もゼロであると言う。

実家を出たあとは、再度派遣で仕事をする。派遣でコンピューター周辺機器などを作るC会社の工場に行き、ピッキング(出し入れ作業)を行う。仕事は簡単で、「これは続く」と思ったが、そもそも持ち金も4,000円ほどしかなかったにもかかわらず、給料は日に2,000円しか支払われず残りは月末払い(計24万円)だったので、日々の生活が立ちゆかなくなる。ご飯を食べることもできず、倒れたこともあった。結局2週間ほどで大阪に戻ってくることになる。

再々度、市役所で「自分のことを精算したいので自立支援センターに入りたい」と頼み、自立支援センターに入所、現在に至る(3回目)。現在は、歯の治療をしつつ次の就職に備えている。

結局、2回の自立支援センター入所を経験してみてわかったことは、仕事を見つけるのに手っ取り早いという理由でまず派遣の仕事に就くものの、自立支援センターから通っている間は住居費・食費等必要ないので問題ないが、センターを退所した後は生活を維持することができなくなってしまう。寮に入っても落ち着かない。正社員であれば、ボーナスも社会保障もあるので半年我慢すれば何とかかなると思うが、派遣ではそうもいかない。今は、センターの人にも「派遣はやめておけ」と言われているので、今度は正社員で仕事を探そうと考えている。今回は三度目の正直で、失敗は許されない。現場での仕事や工場での仕事を希望している。特に工場での仕事は雨でもできるため安定しているので、工場での仕事を希望している。営業は嫌。歯の治療が終わっていないので(現在は歯を抜かれており印象が悪い。治療には今年一杯かかりそう)、まだ就職活動はできないが、職安に行ったりして目をつけている仕事は2、3ある。アパートを借りて体勢を立て直し、いずれは結婚して生活をしたいと考えている。

今度は失敗が許されないし、ここでリバウンドしないように2重3重に策を考えている。結局、センター退所時にお金を全額持って出してしまうと、強気になってしまうし、手持ちのお金が無くなるとすぐに生活ができなくなってしまうが、半分くらいをセンターの方で預かっておいてくれば、もし仕事に失敗して手持ちのお金が無くなっても貯金があるのでまた立て直すことができると思う。

また、何かしらの壁にぶつかったとしてもやっていけるような周囲の支えが絶対に必要である。した

がって自立支援センターを退所後も、「出て行ったらそれでいいわ」ではなく、困ったときにはいつでも相談できるなど、長期的にフォローしていくような仕組みが必要であるという。

「市役所に相談して、そのまま自立支援センターにつないでもらえるなんて、運が良いですね」と言うと、「それは訴え方次第だ」とのことであった。「苦しんでいて、今後どうしたいかなどを本気で考えていることが伝われば、絶対に何とかしてくれるものだ」、と言う。

これまで、野宿の経験は2、3日あるが、三徳寮（ケアセンター）の枠が空くまでの1週間くらいの間のことである。「西成」の生活は「合わない」とのこと、ドヤや炊き出しを利用したことはない。シェルターもあることは知っているけど、シラミがいるという噂なので入りたくない。「それやったら仕事探す」とのことであった。

手帳等は持っていないが、喘息があり、発作が出ることもある。今も病院に通っている。入院するほどの大きな発作は今のところない。現在は歯の治療をしている。お酒は飲まない。タバコは、1日1箱くらい吸う。ギャンブルは「足を洗いました」とのこと（かつてはパチンコで借金を作る）。

母親が再婚しているので、兄弟関係が「ごちゃごちゃして」いるとのことであったが、こちらも喧嘩別れのようなのである。実父は、おそらく今どこに居るかわかっているが、「40になって出てこられても困る」、とのことであった。

84. 男性 30代後半

Aさんは北海道出身である。家族構成は、両親とAさんと弟一人である。父親の職業についてきくと、「サラリーマン」とのことであった（こちらで、「事務系ですか？」ときくと「はい」とは答えたが、内容について詳しく知っている印象は受けなかった）。父親の勤める会社は終身雇用であるが定年は55歳らしく、現在は年金暮らしである。家族との関係性は「普通」であったし、生活に困ったという印象もないとのことであった。

Aさんは、高校卒業までは実家におり、卒業後18歳の頃から一人暮らしを始める。一人暮らしを始めた理由については「特にない」とのことであり、家族も特に反対するようなこともなかったそうである。ワンルームの部屋で、家賃が2~3万円であった。

高卒後の仕事は、在学中から時々行っていたサウナ屋での風呂掃除のアルバイトを続ける。最初はアルバイトでも、何年間か働けば正社員への道もあるところであった。当時はバブル期で、「仕事なんてどうにでもなる」という時代であり（Aさんは実際には行かなかったそうだが、当時は求人誌に「ラーメン屋で並んでいるだけのバイト」というのが時給1,000円くらいで出ていたらしい。怪しいと思っていかなかったそうであるが）、サウナ屋でのアルバイトをしつつ、他の仕事を探し、もし他に良い所が見つければそちらへ行こうと考えていたとのことであった。

サウナ屋でのバイトは、1日8時間で日給6,000円くらいもらっていた。当時、同年代の子が同じ時間働くとだいたい4,000~5,000円だったそうで、同い年の子よりは多くもらっていた。月20日で12万円になり、特に親から援助をしてもらうこともなく自分で生計を立てていた。この仕事は約1年ほど続ける。

次に就職したのは駅弁を作る会社であった。正社員で、保険、年金、ボーナスありで月給は手取り19万円であった。実際には、ボーナスをもらう前、就職してから半年弱で仕事を辞めてしまう。その理由は、会社の勤務時間にある。お弁当を作っていたため朝早くなるので、泊まり込みでの作業となり、朝8時に出勤すると24時間後の翌日の朝8時まで会社に拘束されることとなる。そして次の日は丸一日休みで、翌朝8時に出勤し、次の日の朝8時まで仕事をするというサイクルの繰り返しだったそうである。もちろん仮眠をとったりする時間はあるが、いつ寝ていていつ起きているのかわからないような状態になり体力

的にもしんどかったので半年弱でこの会社を辞める。

次に勤めたのは、警備会社であった。仕事は職安で見つけた。工事現場などでの交通誘導が主で、昼夜問わず仕事があった。北海道だったので、とても寒かったそうである。正社員だったそうだが、日給月給で日給 6,000 円、手取りで月 15 万円くらいであった。1~2 年勤める。仕事はたくさんあったが、それゆえ体力的に厳しかった。仕事を辞める直前は、1 週間寝ないで警備をしていたこともあったそうだ。

20 代前半には、出稼ぎのような感じで 5 ヶ月間だけ東京で働く。学校の友達のとついで、東京の会社に住み込みで働くこととなった。(実際には車の鉄板ではなかったそうだが、例えば車のボディの大きさや形にあわせて鉄板を切るなど) 鉄板を注文にあわせた大きさに切る仕事だったそうである。社長は東京の人で女性であったそうだが、従業員は他に 50 名くらいおり、北海道の人も多くいたそうである。食費や寮費を抜いて、手取りで 12 万円くらいであった。保険・年金などの社会保障はあり。仕事自体はよかったが、東京(もしくは職場)の環境が体にあわず、5 ヶ月で北海道に戻る事となった。東京に行って 3 日目くらいから頭痛がし始め、結局それが続いて耐えられなかったそうである。

北海道に戻り、派遣で N 運送業者の下請けの会社に就職した。この時は部屋を借り、通いで仕事をしていった。仕事は、日雇いで、倉庫での作業や解体の仕事だったが、仕事はあつたりなかつたりという不安定なものであった。この仕事不安定で、どうしようかと思っていた時に、同級生の友達とともに関西に出ることを決める。きっかけは、別の用事で友達と電話していた時に、友達が北海道であった関西の派遣会社の面接に受かったが、不安だから一緒に行こうと言われ、自分も仕事なくて悩んでいたのも、それなら一緒に行こうかと思い派遣会社の面接を受け、受かったため関西へと行くことになった。ちなみに、現在はその友達とはそれ以来ほとんど連絡を取っていない。たまに電話していたが、友人も「同じようにウロウロしているんじゃないでしょうか」とのことだった。

20 代前半に関西に出てきた後は、現在に至るまで完全に派遣の住み込みの仕事で暮らす生活であった。最初についた仕事は 1 年ほど続いたが、他は長くても 1 年、短ければ 1、2 ヶ月で仕事を変えることもあった。派遣会社も複数登録し、今では何社に登録したか、何社で仕事をしたかもよくわからないほどだ。その都度、唯一の身分証明書となる住民票は動かしていた。

最初に行ったのは、滋賀県であった。この時に貯金はまったくなかった(他に奈良県、岡山県、愛知県にも行ったそうだが、A さんの話は滋賀県での話をもっとも多く、滋賀県を中心に生活していたと思われる)。関西では正社員で仕事に就いたことも家を持ったことも一度もない。家がないため住み込みの仕事を探さなくてはならず、自ずと選択の幅が狭まっていく。仕事が無くてもお金があれば、サウナに泊まったりするが、それもできなくなると公園などで寝た経験もある。初めて野宿をしたのは 25 歳くらいの時のことであるという。生活に困ったことが理由で借金もした。最大で 40 万円の借金を抱えていた(自立支援センターに入所した際に精算)。

基本的に住み込みの仕事をしていたため、給料から寮費(場所によっては食費)が引かれることになるが、もっともひどかったのは、派遣会社 X であった。2DK の部屋に 2 人で住んでいたが、寮費が 1 人 10 万円だったそうである。これは部屋代だけで、食費、光熱費などはさらに引かれていったそうである。給料が手元に「残ればいい方」ということで、働いても借金を抱えることになり、その借金は残業などの「体で返していた」そうである。その派遣会社には職安を通じて何も知らずに登録したが、その社長はヤクザ関係だったとのことである。

(その派遣会社の時かどうかはわからないが) あまりにも待遇が求人情報と異なっていたので会社に文句を言ったら、「そんなもん信じるヤツがどこにおる! 全部嘘に決まってるやろ!」と言われたので、今度は職安にそれを言いに行くと、「そんなこと言われてもこちらでは(内情までは)把握できない。自己

責任ですから」と言われ、それではということで労働基準局にも相談に行くと、「そんなこと言われても、いちいちそんなこと言ったらこの世から仕事なくなる」と言われたそうである。

Aさんは自立支援センター退所後は、正社員での就職を希望しているが、万が一派遣で働くことになったとしても、その派遣会社だけは避けたいとのことであった。

派遣でうまく仕事が見つからなくて生活に困ることも生じてくる。3年くらい前から、生活に困って役所に相談に行くことがあった。役所以外に、生活に困ったときに相談するような機関は、そういう所があること自体、知らなかったそうである。役所でも教えてもらうことはなかった。色々な役所に相談に行ってみたが、「見た目元気そうだから、職安行って、仕事探せ」としか言われなかったそうである。「じゃあ見ただ目で分からない悪いところがあっても、見た目は元気だからって言うのか」と言うと、「僕らにそんなこと言われてもわからないし…」と言われ、また、生活保護を言ってみても、「ああいうのは、寝たきりで動けない人だけだから…」と言われ、「寝たきりの人は相談にこないやろ!」「そんなこと言ってる間に死んだらどうするねん」と言ってみても、「そんなん言われても…」というやりとりになったそうである。

職安に行ったり、有料の求人雑誌などを見ながら即決の住み込みの仕事を探して苦労していたそうである。ひどい時には、2、3ヶ月仕事が見つからない時もあった。基本的には、カバン1つで動き、サウナに泊まっていたが（一泊3,000円程度、京都駅前には2,000円くらいの安い所もあるが、そこにはホモっぽい人が居て、迫られるので嫌だった。サウナは、雑魚寝の所や2段ベッドの所など色々ある）。当時は、食事も切り詰めており、1日2食くらいでおにぎりやカップラーメンなどコンビニで安くあげていた。パン1個だけの日もあった。

（自立支援センター入所前に）最後に就いた派遣の仕事は、S電機の製品の組み立てや検査の仕事であった。検査は、完成した製品にスイッチを入れ、ちゃんと動くかどうかを調べるというものだったが、仕事はしんどかったそうである。約2年間勤めた。住み込みで働き、給料は1日8,000円、月に15~16万円であった。また、この会社では、車の免許をとることができた。車の運転は以前から好きで、知り合いの車に乗らせてもらうなど高校の頃から（無免許で）運転していた。これまでも免許は取りたかったが、金銭的に無理であった。社員の送迎をしてくれるならば、会社が負担して免許を取らせてくれるとのこと、やりますと言って昨年、免許を取得したそうである。送迎の仕事は、社員の自宅（周辺）から工場まで1人1人送迎していた。10キロ以上の距離であった。そのため、朝は7時くらいには出発して他の社員を迎えに行き、8時から工場勤務開始、定時（17時）に終わればそのまま帰りに送って帰り、残業があれば20時21時になった。自分が定時終わりでも、他の人を送るために、2往復することもあったそうである。送迎の報酬は、1人につき月3,000円×人数分をもらっていた。だいたい4、5人、少なければ3人ぐらいの送迎をしていた。Aさんは運転は好きで、全く苦にならない仕事だったらしく、送迎する人数が増えると嬉しいと言っていた。

また、会社は寛大で、ガソリンさえきちんと入れておけば休みの日に車を自由に使って良いと言っていた。ドライブが好きだったので、休みの日には朝から晩まで一日中車に乗っている日もあった。また会社の人との関係性は良好だったらしく休みの日に会社の社員に頼まれて車を出すこともあった。1ヶ月で1,000キロ以上走り「走り過ぎや」と言われたこともあったが、ガソリンをきちんと補充していたので文句は言われなかったそうである。

Aさんは、この会社に対し大きな不満もなく、何もしなければずっと勤めていたかったそうだが、喘息がでて、仕事に差し支えがでるようになったので、結局、辞めてくれと言われてこの会社を辞めることになった。

その後は、どうしても次の仕事が見つからなかった。職安で面接までいっても、結局決まらなかった。

喘息になっていたこともあり、この時に役所に相談に行くことは考えなかったのか？と尋ねると、どうせ行ってもダメだと思い、行かなかったそうである。その日のお金に困った A さんはとりあえずの生活費が稼げると思い、以前テレビで見たことのある BIG ISSUE の販売をすることにした。販売場所は、担当の人が当人の希望も込みで選ばせてくれるそうである。売上げが悪ければ、別の場所を選ぶことも可能。少ない日は日に 10 冊程度、多くても 20～30 冊の売上げ（2007 年 9 月までは、定価は 200 円で、売上げの 55 %（1 冊当たり 110 円）がベンダーの収入。BIG ISSUE の販売は 3 年ぐらい続けていると定期的に買ってくれるお客さんがついて、日に 50 冊もの売上げがある人もいるそうである）だった。ドヤに寝泊まりしていた。

結局、お金が足りず困っていたら、BIG ISSUE の人が、自立支援センターのことを教えてくれ、相談先や手続きの仕方も調べて教えてくれた。手続きを経て自立支援センターに入所。仕事が見つかったので退所、派遣で中部地方の工場へ住み込みで行く。勤務は 2 交代制で、日給 8,000 円くらいであった。機械の部品を作る仕事で、体力的にはきついわけではなかったが、会社は利益優先で人間関係がうまくいかず、2 ヶ月くらいで辞めることとなった。

自立支援センターを退所時に、職員さんから「困ったことがあれば電話しておいで…」と名刺をもらっていたので、路頭に迷い困って自分で電話して、再度自立支援センターに入所することになった。冬頃に再入所。

以前自立支援センターに入所したときに、フォークリフトの免許をとった。免許があるかないかは就職の際に大きく影響するらしく、「こんなに違うものか」と思ったそうである。例えば、これまでは面接でダメだった場合はそれまでだったが、「ここはダメだけれど他の所と話つけてやる」と言ってもらえたそう。今後は、この免許を使えるような仕事か工場に派遣以外で就職し、家を借りて生活していきたいと考えている。

上記以外で A さんは、北海道ではパチンコ屋のアルバイトの経験もあるそうである。この時は通い。

複数の派遣に登録したが、同時に登録することはなかったそうである。

結婚の経験はなし。これまでに機会がなかったわけではない。北海道では 2～3 年同棲した人がいた。しかし、まだ若かったし生活も不安定だったので、結婚はしなかった。この女性とは現在連絡をとっていない。関西に出てきて以降は、結婚につながるようなことはなかったそうである。

入院、施設入所、警察沙汰になった経験はない。

家族との関係は普通であり、現在も連絡を取っているが、生活面で頼る気はない。北海道も仕事はなく関西の方がマシだろうとのことだし、そもそも頼る気もない。「なるようにしかなんないし…」とのことである。また他の親戚にも頼るつもりはない。

派遣の仕事がなくなるときまで、もしものために、と年金はかけつづけていた。健康保険も同様で、国民健康保険に加入、支払い免除の申請などをしながら、支払いを続けていた。ただし、保険証は持っている、窓口で支払うお金はなかったので、「今日はお金がないからまた後日払います」と言って、また別の病院に行くことを繰り返していた。BIG ISSUE の人に、市更相で医療券を出してもらって病院に行く方法を教えてもらった。それまでは釜ヶ崎のことは知らなかった。シェルターや炊き出しについても利用経験を尋ねたが「そんな入る方法（手続き）は聞いてなかった」とのことであった。

85. 男性 40 代前半

1960 年代、北海道で生まれる。家族は A さんと両親、兄の 4 人家族であった。父親はある海藻をとる漁業に従事していた。その海藻漁は 7～9 月の夏の期間に行われ、それが終わると短期で土木関係の仕事

をしていた。そして10～12月はまた別の漁、そして1～6月頃までは東京など関東に出て働いていた。

「(海藻漁の)仕事は儲かるかどうかはわからない。ただ儲からなければやらないだろう」とAさんは言っていた。漁にかかる費用は漁業権と小型の船ぐらいであとは自然に生えているものをとるだけだから…と。

父親はAさんが20歳代前半に亡くなった。母親は現在関東にいるようだが20年近くあっていないし、同県の別の市にいるであろう兄とも連絡をとっていない。

Aさんは中学を卒業し、父親とともに出稼ぎのために関東に行き、工場で働きはじめた。そこでの仕事は生ビールのタル(飲食店などに置かれているようなもの)の清掃の仕事であった。そこでは工場が借りてくれたアパートに父と生活をし、1年半ぐらい勤めた。時給は860円ぐらいであったが、残業や日曜・休日の出勤が多かったので月24～25万円の収入があった。父親はもう少しあったと思うと。この仕事は臨時の仕事で北海道での仕事がなくなれば頼んで雇ってもらってというものであった。

Aさんは、親と離れて生活をしたい、独立したいと思いこの仕事を辞めた。これまで働いてきた給与はすべて親に渡してきたし、漁などの仕事も手伝ってきた。だからもういいだろうと思ったと。この仕事を辞めて、一度田舎に戻り家族に話をしてから親戚を頼りに大阪に出てきた。親戚は建築の内装の仕事を大阪市でしていたのでそこで10歳代後半から働きだした。勤務形態はバイトのようなものであった。内装会社の規模は7～8人でやっていた。はじめの頃は、月額22～23万円の収入であったが5年ぐらい続けると仕事もある程度わかってきたし、現場でいろいろな手配などもできるようになったので月額40万円ぐらいの収入があった。家はその会社の近くに借りていた。ここでは5年ぐらい働いたがその親戚のことがあまり人間的に好きではなかったので辞めた。次の仕事も同じような内装業の仕事に就き(20歳代前半ごろ)大阪市にある工務店(職人は2人ぐらい)のようなところで働いた。ここでの収入は35～40万円ぐらいであった。以後Aさんは30歳代後半になるころまでの20年間、内装の仕事をする。

当時はバブルのころで、どこへ行っても仕事があったし単価も現在と全然違った。最近聞いた話だとバブルのころに比べて単価が半分ぐらいしかないという。Aさんは仕事で関西国際空港の仕事にも行ったことがある。当時は空港建設反対運動のため、橋が封鎖されていたので船で現場に行っていた。その雰囲気がとても嫌だったという。

30歳代後半にAさんは足にケガをして内装の仕事を辞める。膝の上あたりが急に腫れ、膝が膿み、その膿が出て骨までえぐれてしまった。足の上げ下げなど痛みがひどく仕事ができなくなった。それに加え、その頃の職場の人間関係もいろいろと我慢をしていたことがあったので辞めた(口で言っても相手には伝わらないだろうから自分が辞めた)。それまでAさんは税金や国民健康保険などを払っていなかったので病院に行ったときどれくらい費用がかかるかわからず、そのまま放っていた。しかし、骨の部分までえぐれてきて「もしかしたら足を切らないといけないかもしれない」と不安になったので病院に行くことにした。手元に2万円あったのでそれを持ち病院に行くことにしたが、いざ行くとなるとなかなか病院に入れない。病院の前まで行ったけれども「足を切らなければならないかもしれない」と思うと怖くなり、入ることができず病院の前を行ったり来たりし、結局「明日には行こう」と思い辞める、それを2日繰り返してやっと病院に行った。それまでは薬局で消毒液を買い、消毒していた。医者に見てもらおうと、「すぐに来ないとダメじゃないか」と言われた。足を切られるのは怖いので、そのことをたずねると「菌さえ回っていなければ大丈夫だ」と言われ切らずにすんだ。それを聞いて心配せずに早く行けばよかったと思った。肉がえぐれてなかったので治るまでには3ヶ月ぐらいかかった。その間、何もしていなかった。仕事もできず、どうにもできなくなってきたので区役所に行き巡回相談員のひとと話をし、自立支援センターへの入所が決まった。しかし入所まで2ヶ月かかるとのことだった。その2ヶ月間、入るまでの生活がどうにも

できなかった。その頃足はもう既に治ってきていたが病院には2、3回行ってた。治療をはじめたころから家賃が払えなくなり、家を出て河川敷で生活をはじめた。「〇〇米」という米をもらったりしていた。その間、三徳寮のケアセンターにも2回入った。1回の入所は1週間で、その後1週間あけないと入れないので期間をおいて入所した。そのころは周りの野宿者にもお菓子をもらったりしていた。Aさんは釜ヶ崎に関してはこの三徳寮だけしか知らない。自立支援センター内ではみんな「西成」から来ているからいろいろと知っているが自分は知らない。「釜ヶ崎」は仕事をしているときに若干聞いたことがあるぐらいであるがNPOのことは聞いたことがある。

自立支援センター入所前は30万円ぐらいサラ金からの借金があったが、弁護士があいだにはいってくれ解決した。ひとつのサラ金には10万円ほど多く払っていたのでそれを精算し、20万円ぐらい借りていたもうひとつのサラ金会社には現金ですぐに渡せると言うとそのサラ金会社はそれで良いと言い解決した。

自立支援センターには6ヶ月間おり、その後ビルメンテナンスの会社に準社員というカタチで働き出した。アパートは自分で借りて生活をしてた。仕事はビルの床掃除やワックスがけなどと検車場の広告をつけたりなどしていた。日給は7,500円で、勤務は週6日ぐらいであった。ボーナスは少しあったが初めてのボーナスは2万円。Aさんは「2万円で…。これがボーナスかいなと思った」と笑いながら言っていた。この仕事は3年ぐらい勤めて辞めた。辞めた理由は人間関係が悪いわけでもないけれども、「もういいか」という気持ちや「このままでいいのか」という不安な気持ちが出てきて辞めてしまった。不安もあったが、開き直って「なんかあるやろう」と思って辞めた。辞めてからパチンコや競艇で少し遊んだ。Aさんは競艇にはかなり自信があるようだった。必ず勝つとは言わないがストレートに負けることは少なく、「負ける」とは言えない。パチンコ・競艇は20歳ごろからしている。日中パチンコで負ければ、そこでの負けをとりかえすために競艇のナイターレースに行き（梅田）取り戻したりしていた。「競艇の方が率がええやん」と思いながらやっていた。率が悪いと思いつつパチンコの甘い誘いとネオンに呼ばれ、ついやってしまっていた。競艇は開催されている時間がある程度決まっているがパチンコは仕事後でもいける時間があるのでネオンに負けて行ってしまっていた。タバコ・パチンコは「中毒」であるとAさんは言う。Aさんはタバコも吸う。パチンコはちょっと勝ってやめればいいのだが、やめられない。負けはじめるとやめられずに続けてしまい結果、負けてしまう。父親はよく勝っているあいだにやめていた。お金がぎりぎりあるときは勝っているところでやめるがお金があるときとないときについやりすぎてしまう。なお金が本当にないときは一発逆転で賭けに出る…。昔パチンコで10万円ぐらい勝ったことがあるけれどもそのときは一晩で使ってしまった。今はお金がないからギャンブルはしない。

今回はこの冬に入所。今回は2ヶ月も待つことなくすぐに入所できた。今年の半ばに仕事を辞めて夏まで家賃を払っていた。その後払えなくなって、家を出たあと以前ビルメンテナンスの仕事に就いたときお世話になった人がいるところへ行った。とりあえず、ご飯を食べるといってくれたのでご飯を食べしばらくそこにいた。そこで相談して住所がないとどうにもできないのでまた自立支援センターに入所して仕事を探すことにした。現在の住民票は以前住んでいたアパートにあるがアセスメントセンターから別の自立支援センターへ移るので住民票はそちらにする。別の自立支援センターから移るのを「仮出所」とAさんは言っていた。ここから外へは行こうと思えば出かけられるけどコンビニも遠いしバス代もかかる。タバコ代もかかる、ジュース1本買うのも悩むぐらいである。だから外出はしない。

これまで働いてきた工務店では退職金はなし、保険・年金などの支払いもしていない。住居は5回くらい大阪市北部で引越しをしてきた。結婚はしたことがないので荷物も少なく引越しは楽である。

入所前に生活をしてたアパートは現在放ったらかしにしている。家賃は4万円で3ヶ月ほど滞納して

いるのでそのお金と引越し代を含め 15~16 万円かかるとのことだが、荷物も大したものはないので、もういいと思っている。家を借りるときに保証人協会を利用しているので（加入 1 万 5,000 円）それに任せようかと思っている。

北海道から大阪に出てきたころは違和感だらけだった。言葉はだいぶなれたけども「おおきに」とかは今でも言えない。

これまでした大きな病気は特にないが大きなケガは足のケガ。持病は腰痛があるぐらいでぎっくり腰もしたことがある。腰痛がひどいときは咳をして立てなくなったこともある。

今回の自立支援センターの食事には味があるので感動した。以前入所したときは味がなかった。そのためマイマヨネーズとふりかけを持っていた。卵も 10 コ入りを買うとすぐになくなるから買わないほうがいと笑いながら言っていた。寮の冷蔵庫にいれておくと昼間仕事でいない間に他の人がとっていき、すぐになくなってしまふ。ただ、最後の 1 コはさすがにとらずに残してあると言っていた。自分もとられるのに頭にきて他の人の牛乳なども勝手に飲んでいた。

自立支援センター内でもめている人がいるというが、考え方というか、思っているところが違うのだと思う。三徳寮はケアセンターだから自立支援センターへもその気持ちで来ている人が多いと思う。だからトラブルが多いのではないかと。自分は元気だからすぐに仕事を見つけて働きたいと思うけど、そうではない人もいふ。どこの施設を回って…と話をしている人もいふが自分はそういう人と話すと気持ちがしんどくなるので話さない。自分がいやになる。高齢の人は別だろうけども、働けるなら働かないと思う。

今後は早く仕事を見つけて働きたい。希望はその場に応じてお金と相談しながら考える。ただ、これまでの内装とビルメンテナンスの仕事はしたくない。いつでももどれると思っている。良くも悪くもいろいろ見てまわりたいと思っているので他の仕事がいい。

我慢できるなら屋外でも屋内の仕事どちらでもよい。工場でも働けるし。

少し前にはうつ病にもなりかけた。今思えば「うつ病」と言えるような症状だったと思う。今は「人間楽しく明るく生きないと」と思っている、と笑いながら退室していった。

86. 男性 40 代前半

H さん。和歌山県生まれ。幼いうちに両親は別居しており母の面影も記憶にない。保育所ときには、親類のところに預けられていた。和歌山県の保育所にも 1 年くらいいた。父もよく仕事をかわったが、建具の仕事をしていたという。小学校に入ってから父と暮らしていたが、低学年のときに半年だけ母らしき人も一緒に生活をしていた。それが戸籍上の母だったのかどうか不明。大阪府で父が電気工事の仕事をしており、そこの小学校に通っていた時期もある。そして、また和歌山に移り、父も建具屋に戻ったらしい（建具屋も個人店を複数渡り歩いてきた模様）。そのときには父の知り合いの所に預けられており、その校区の小学校に通っていた。高学年から父と暮らしはじめ、転校したが、このときから父は同じ建具屋の職場で 7 年くらい働いている。社会保険もあったようだ。さらに、職場の二階に場所をもらって、そこに父が部屋を作って二人で住むようになり、住所地の変更に伴い隣の小学校へ再び転校し、そこで卒業した。中学へもそこから通っていた。父は毎日のように仕事場でも朝から酒を飲んでいて、暴力も当然のようであった。

中学卒業後、県立高校へ進学。このころ父は貯金なり親類に借りるなりして、二間の新古家を購入、そこから通っていた。就職を希望していたが、学力が悪かったこともあり、就職を希望しても「研修期間のあるような会社に行くには上から五番くらいやないと入れない」という具合で、就職先がなくて（「OB に聞いたら、だいたいトラックの運転手とかそんなん」だという、たしかにそこの高校のホームページで現

在の就職先をみても運輸業、自衛隊や引越屋などが目立つ) やむをえず進学コースに進んだ。高校のときに父がついに体をこわして入院した(酒)、父(当時40代前半)はこの頃から入退院を繰り返し、病院かかりになった。成績が悪いため卒業するためにも大変で、どのみち高校の求人の良いところもなさそうだったので、16歳から求人票があるという職安へ行った。そこで仕事をみつけて高校中退。

初職は16歳のときに職安でみつけた和歌山の飲食店の仕込。日本料理店で、お昼には1,500~2,000円程度の幕の内弁当を出しており銀行員らが来るようなお店。従業員は20名程度いた。勤務時間は朝4時~夜9時、休憩時間、まかないなどは随時あった。見習い期間ののち社会保険アリ、休みは週一回の定休日、時給400円(17時間計算して日当6,800円?)。ここには家から通っていた。ふだん父は自分が家にいるとすぐに怒り出し外に居てる方がうれしいようなのだが、あるとき気まぐれに「そんな仕事休め」と言われた。毎日朝から晩まで働き過ぎだと考えたのか。職場は厳しいところで休めないし、父の言うこともきかないと手を出すので板挟みだった。結局、このときには5日ほど欠勤して、会社に電話して退社した。働きはじめて5ヶ月だった。

次は、新聞の折込み求人広告をみて、食品会社でアルバイトをした。メーカーの下請け会社だった。冷凍食品用のタレの仕込みの補助。エビチリや八幡巻などのため20kgもあるケチャップやソースや砂糖を運んだり、エビの解凍など、マイナス数十度の冷蔵庫の仕事もあった。時給700円、朝9時~夕方5時の勤務で、残業ナシ日曜休み保険ナシ。

冬になり、新聞広告で製菓工場で「従業員」の募集を見つけて働きはじめた。地元のスーパーに入荷するような洋菓子を産業機械により製造する工場。ミキサーに材料を入れて機械を動かしたり、オーブンから焼き上がった菓子を運ぶ仕事。袋詰めはパートの「おばちゃん」たちがしていた。朝8時~夕方5時の勤務で夕方6時まで残業の入ることがあり、残業したときには手当がついて月平均12万~16万円くらい。当初3ヶ月くらいは見習い期間で、それ以降は社会保険アリ。景気の良い時には「もち代」程度のボーナスが出た。銀行通帳を持っていて、多少貯金もした。ここでは数年働き、自動車学校に行つて普通免許を取得、アパートを借りて2年ほどそこで過ごした。

この頃、求人広告で「景気の良いところが出てきていた」といい、前職を離れ(理由は不明、とくに趣味もないとのこと)求人広告を通じていくつかのアルバイトをした後、外食産業で働きはじめた。ファミリーレストランで、キッチン内の仕込みの仕事。入社時の面接と研修で大阪府にある統括店に行き、その後大阪市内、堺市などの店舗に半年ずつくらいで異動した。店は朝9時から深夜2時の営業、勤務は朝9時~夜9時までと昼12時~夜10時頃までの2交替制だった。タイムカードを押す時間給制のアルバイトで、社会保険はあった。手取りで月14万円くらいだったと思う。ボーナスは「寸志」程度出たが1ヶ月分もなかった。仕事をやめたときに離職票をもらったことはあるが、その使い方を知らず、失業手当はもらったことがない。また、厚生年金に入っていた時期もあるはずだが、「年金手帳」の記憶すらない。

ファミリーレストランの仕事も、20代前半にやめた。キッチン係も上の人もころころ代わり、お昼時や夜に注文が殺到するのも「しんどい」と感じるようになり、不安もあってやめた。やめる旨を上伝えてから2週間してやめた。この時期は、店舗近くに用意される寮に済んでいた。アパートをいつ、どのような理由で喪失したのかは定かでないが、この仕事を始める直前または同時のことだったと思われる。

求人広告で「月収40万」と書いてあったので、そこで1年間働くつもりで季節工の仕事に就いた。関東にあったN自動車の工場へ行き、自動車の組み立てラインに入った。仕事はきつく、しんどすぎたため、2週間で寮を出た。残業代込みで10万円程度、郵便振替で入金された。いったん和歌山へ帰り、求人情報誌で新聞販売店の協同組合の仕事を見つけて、和歌山で面接、東京での面接を経て翌年から東京にあった新聞販売店で働きはじめた。配達、集金、勧誘の仕事すべてせねばならず、研修期間のうちから誤配率

3%未満、集金率も97%を達成しないと給料が出ない。集金率97%を切ったときには、自分の持ち金から出すということも行われていた。夕方の食事時には相手にされないので、夜にまわるなどのノウハウもあったが、勧誘も苦痛だった。「社宅」は無料だが社会保険ナシ、手取り月14万円くらい。

その後、荷物を宅急便で和歌山に送り、東京の「社宅」を出て和歌山へいったん帰った。このとき「親が家に入れてくれない」状態だったので友人宅などに一時的に泊めてもらった。その夏は、ファミリーレストランで4ヶ月ほどアルバイトをした。この時にはホール係だった。次いで、秋から翌年初めまで、ビジネスホテルのレストランでキッチン内仕込みの仕事をした。ここは無料の社宅が、タクシー会社の整備工場などと並んで敷地内にあった。社会保険を入れて月14万、手取りは10万円くらいだったかと言う。ここでは、「遊びに行く」などして無断で1ヶ月休んで「やめてくれ」と言われた。このことについては、最終的に会って話をすることになり「ここは円満退社に出来た」と語った。その後、和歌山の父の家に帰った。

ここから1年ほどの空白期間、職安通いを経て、和歌山でゴミの分別の仕事を見つけた（職安経由）。アルミや鉄などの金属資源、ガラスなどを分別処理する産業廃棄物のリサイクルをしていた。正式に「公共の指定を受けていない」個人の会社だが、ゴミは「市」からもらってきていたとのこと。朝8時から夕方5時の仕事で、手取り10万円程度。ここには父の家から通い、2年以上働いたが、20歳代後半、父も他界してゴミの仕事もやめた。父の家は名義変更した様子だが、後にほったらかしになったので「とうに差し押さえられただろう」とのこと。

つぎに派遣の仕事をはじめた。自動車会社の子会社で働き、東海地方で製造ラインに入った。ラインの作業はしんどいけれど、「N自動車よりは楽やった」という。税込み月額25~30万円くらいで、寮費が月々3万円くらい引かれた。半年契約で一度更新して、ここでは約1年間働いた。「質が悪くなったら、やめようと思っていた」ということで、翌年にそこを出て関西へ戻った。次は、ある会社からD自動車の期間工に入った。3ヶ月契約で、税込み30万円。この仕事は契約期間を満了することなく、つぎの年にやめた。

その後、職探しを続けながら、大阪や滋賀などに行き派遣で働いた。

30歳代前半、釜ヶ崎に来る。「西成」や萩之茶屋のことは「日雇労働者の街」として、テレビの報道などを通じて知っていた。西成労働福祉センター経由で、大阪にある飯場に入り、翌年まで働いた。日当9,000円で、調子の良いときで月8万円くらい入ってきた。その飯場のあと「西成」に戻ってセンター通いをして、いくつもの飯場を転々とした（なかには関東のこともあった）。飯場に入っていないときは、釜ヶ崎の近くでアオカンしていた。この頃センターで住民票を「置いてよい」と言われたらしく、西成区に移した。和歌山の元父の住んでいた家はこのころまであったはずだが、一度も帰っていない。アオカンしているときに「NPO」の人に声をかけられ、「広島病院」に入り、半年後に出された。帰りに大阪までの交通費はくれたとのこと。

大阪で再びアオカンしていたところ、自立支援センターの「カード」をくれた人がいて、直接電話をした。ひと月待てと言われたので、15日の契約で兵庫県の飯場に入った。そして翌月、自立支援センターに入り草刈りなどの仕事をしながら、派遣会社の面接に通って自立支援センターを出た。派遣会社で、運送屋、テレビのブラウン管製造などの仕事をした。そして再び「西成」に戻って、飯場を行ったり来たり繰り返した。たまに現金の仕事があったときには、ドヤに泊まったこともある。シェルターを利用したことも、炊き出しを（三角公園のも四角公園の方も）利用したこともある。前回から半年で自立支援センターへの再入所が可能だということも、シェルターの貼り紙で知ったとのこと。そこで市更相に再入所を申し込んで、一ヶ月待ちの間現金の仕事などをしながらアオカンして過ごし、今回の入所に至った。今後は家

賃3万5千円くらいのアパートに住み、安定した仕事ができればと考えている。

住民票は、解放会館の件で「抹消された」と思っている。免許証も失効した。その他に免許等は持っていない。手帳の類も持っていない。広島病院への検査入院以外に入院経験もなく、大きな病気・ケガをしたこともないとのこと。

87. 男性 20代後半

島根県で生まれ育つ。母親は「オトコとおる」、家におらず他の男性といる（いつからいないのかは不明）。

父親は、あまり家にいなかった。「いわゆるその筋の人」であった。「フィリピン狂い」でフィリピン人の経営している店に入り浸りだった。父親は借金もあった。高校を退学した後、保護観察処分を受けたとき、身柄引受人に父親がなくなったため実家にいなければならなかったのだが、住み込みで水商売の仕事をしていたので、それを理由に父親が給料を持って行った。また自分が付き合っていた彼女の実家からもお金をひっぱって迷惑をかけた。総額で2,000万円くらいになったのではないかと。父親が亡くなってからは「カネ返すんが筋じゃねえか」と金融屋からも親戚からも言われて、それ以外も理由はあったが島根から出てくることになった。

本人が小学生の頃は、会話は無いが親子で食事をとることもあった。たまに弁当だけ置いてあることもあったそうだが。

中学生の時、児童相談所を通して児童養護施設に入所した。児童相談所でいたときは、夜中ばっくれる（逃げる）ために、「ほふく前進」で靴をとって、シャッターを開けて出て行った。がんばって逃げたところで知らないおじさんに声をかけられご飯を食べさせてくれて、結局児童相談所に人が迎えに来て帰ることになった。

そのとき入所していた施設で、偶然にも実の弟にはじめて出会う。弟は親戚の間をたらいまわしにされていた。現在、弟は進行性の障害を抱えており施設に入所している。手帳を取得しているかわからないが、障害者年金（月額6、7万円の収入があることより）は受け取っているようだ。本人曰く、「弟は唯一の家族」で、「ぼくがみるしかない。て言うか家族だし」と強い責任（義務）を感じているようだ。

10歳代後半、20歳代後半の女性との間に子どもを授かったが、結婚する前に別れた。子どもは奥さんが育てている。子どもには「パパは死んだのよ」って言っているかもしれない。「嫁には、新しい旦那がおる、って話しもある。子どもにおもちゃでも買って、ってことになるか」。しかし彼女が別の男性と一緒に生活しておらず復縁をしてもいいと思ってくれるのであれば、弟、彼女、子どもと一緒に住みたいという希望はあるけど、今の状態では何を言っても…。

中学生の時いじめられた。だから「違う」方向で強くなってやるって思って、いじめかえすようになった。高校に入学したが、1、2週間でやめた。「めんどくさくて」。

高校退学後、スナックで働く。ただ座っているだけで給料24、5万円もらっていた。お酒は仕事で相当飲んだ。飲んでも自分はあまりこたえない。ただ2回くらい急性アルコール中毒で病院に運ばれ、気付いたらパンツ一枚で点滴をうたれていたこともあった。嫌な客もいたが、てきとうに言っといたらいいから。田舎だから商売は1時くらいには終わる。2007年に島根県を離れるまで勤めていた。

その間、父親のつながりで昼間は左官の仕事をして3、4年やっていた時期もある。だから寝る時間は多くて5時間、少ないときは2、3時間くらいだった。

テキ屋のバイトもしたことがある。元々親父の知り合いの知り合いだった。すぐ上の人からは組関係の仕事をしなかと勧誘されたが「ムリムリ…」って言って断った。さらに上の人には、「まともに生活し

てほしいけん。名刺はやらん」と言われた。上の人はムリも言わんし、助けてくれた。後からどうこうは言っただけでなかった。

何歳の頃かは記憶が定かでないようだが、単発で派遣の仕事をやったこともある。本社から携帯電話に連絡があり紙コップを作る作業や、深夜勤務（20時～5時まで休憩1時間）で携帯電話の検査作業など。携帯電話の仕事は一人の作業なので気楽な職場ではあったが、定められた数（ノルマ）があって1日550個、600個を超える数検査することもあった。

水商売、派遣、建設土木（解体）なんでもやるよ。鋼管6mを5本は平気で持つよ。痩せているけど、いくよ。100kgの鉄筋、ちょっとだけ浮かんだね。腰痛くなった。

今年に父親が亡くなった後、島根県を離れ、大阪へ来た。親がいなくなったので出てくるしかなかった。

2007年に島根県を出て大阪に着いたあと、市役所の前のベンチで夏は寝ていた。寒くなってからは、図書館の下とかで野宿していた。そこには仲間がいて、いろいろな人がごはんもってきてくれた。あそこでもう追いだされる。「でてけ」とは言われている。かわいそうに。事情があってあんな生活しているのに…。

野宿をしているときに声をかけられ仕事をしに東京へ行くこととなる。チケットの並び屋も2回くらいやったが、主には電気屋の並び屋。例えば特売で一人1個限定という商品を代わりに購入して、中国人や日本人のバイヤーに渡すと、例えばPSP一台で300円、コントローラー1台300円、wii500円、カメラで1,000円とか。コート・帽子かえて4回回んでまた買う。別の店、また行って、レジを変えて。ましておれら（野宿生活者）は安くて都合のいい労働力としてみなされている。日本人は人件費が安いという理由で中国人を使うように、中国人もそういう対応している。ポシェットに200万円くらい持っている。日本のバイヤーも、1千万円くらい儲けていた。電気屋で並び屋の仕事をし、一日当たり2,000円～4,000円くらいの収入で漫画喫茶に寝泊まりをしていた。しかしこのままでは先行きがないと思い、大阪へ戻る。ただ今でもバイヤーに誘われている。けど、日本中まわるのとか苦手だし、「わるい（違法行為）」としてもY電気は目玉商品の回収を認めている。

ちょっと前、大阪にもどってきてから中之島の市役所になんとかしてほしいと直接行った。市役所に相談に行ったらと中之島で同じような生活している人に言われた。ケアセンターに1日だけいて東京に並び屋の仕事をしに行った。大阪にもどってきて「ケアセンターには行きたくないから、こっち（自立支援センター）に入れさせてくれ」と言った。その結果、自立支援センターに初めて入所した。

三徳ケアセンターを利用したときは、「こんな所にはおれん。異常や」と思った。公園にもいたことがあるが釜ヶ崎は全然雰囲気が違う。「いびきかいてねとったら、バッグを取られた。労働福祉センターのまえでダンボールひいて寝ていたら、バッグとられてた。あんな着替えとかしか入っていないの何すんのかな？ 住民票も入ってたか。おかげで私服なくした。釜は、こわい、っていうか、えげつない。ひとのもんとなるなんてそんな…。そこまでして生きたいか、って思うわ、こわいこわい」。

小学生の頃、てんかんとひきつけを持っていた。10歳代後半には薬は飲み終わったと言っていた。それまで毎日服薬していた。その後てんかん発作はないのか、今後も服薬する必要はないのかときくと、本人は「健康だから大丈夫」と言っている。しかし思い通りにならないこと、「くそ」と思うことがあると自分に罰を科すこともある。父親の借金、弟のこと、嫁と子どものこと、今おかれている現状などすべてについて「一人でしょいこみすぎではないか」と調査者が言うと、「その人（迷惑をかけている人）の痛みに比べたら、大したことはない。弟は腕一本で守っていく。次こうして、…ってのはイメージしている。借金かえす、働いて稼ぐ、カネもって実家かえる、周りはまだ20代というけど、もう20代だから」と30

歳までの計画（詳細については後述）を語る。予定通りすすめなければいけないと自分を脅迫しているような、それまでのちゃかした表情とは一変してきつい表情になった。求職活動で半袖を着ないといけないときは、「こういうのがあるけど、ちゃんとまじめにやりますので」と言って、面接受けてきた。

また左腕には入れ墨がある。本人は「慣れている人にやってもらったから大丈夫」と言っていたが、C型肝炎の恐れはないか、気になるところである。

集団生活が苦手で、自立支援センターでもあまり眠れていないということだった。いらいらしたりもする。でもこんなことでなぐつたらイカンから平常心を保っている。あまりにもイライラしたとき一度タバコの火をおしつけた。

昔田舎でやんちゃをしていたとき親は相手にしてくれなかったが、世話になった、かあちゃんも沢山いる。めし屋のオカン、「お金はいらん」って、卵やき、ごはん、ビール出してくれた。「いまでも顔ださんけん、心配してるかもしれんな」。いま70歳くらいかなあ。自分みたいな人間を受け入れてくれる居場所があったからなんとかいけたのかもしれない。

みんなこんなことになってるとは思ってない。連絡は出来ない。知っている人は知っとるけど、仲いい人は。けどみんなは知らん。ひとり、ふたりくらいだけ。嫁は知らない。

債務は自己破産するほどの額ではない。元々10万円しかしてないから残り6万円くらい。督促の電話はかかってくるけど、仕事をみつけて給料もらったらお金を返そうと思っているから。

自立支援センターでは東京に行ったとき仕事を探す際、身分証明書（住民票）を持ってこいと言われたので住民票を異動させようと思っている。そうでなければ就ける仕事が、建設土木の飯場のような不安定な仕事しかなく、就きたいとは思わない。もともと大阪市民ではないが、自立支援センターという施設を十二分に利用してやろうとは思っていると。二度とここには戻ってこない。それが恩返しになる。やさしい人ばかりだから。

「今後どのような仕事をしようと思っているのかイメージがありますか」ときくと、集団生活が苦手なこともあり、寮付きの派遣などで働くことを希望している。そして借金（6万円）を返済し、春には40万円は稼いで島根に帰りたいということだった。帰る場所が島根にあるのかときいたところ、「それは分からない。向こうでアパート借りることも出来るし。家賃安い。3~4万とか。敷・礼金20万位。知り合いがおるけん、借りようと思うけど」と。島根に帰ったらアパートを借りて昼は左官、夜はスナックで働くイメージを強く持っている。

さらにゆくゆくは、本人が若いころに生まれた子供の面倒も見たいと考えているようだ。また弟の面倒もみたいと考えている。弟の進行性障害のことが気になり、広島でそのような人たちを援助しているNPO団体の男性と話をしたこともある。自身もヘルパーの資格を取って、福祉の職に就きたいと考えている。どのような種類のヘルパーを想定しているのかはわからないが、「何年やれば進行性障害の人たちの気持ちがわかるのだろうか」とつぶやいた。「一人前って何かわからないけど、いろいろな場面で一緒に悩んでいくのではないだろうか」と言うと、「一人前はないんだね」と答える。「めし屋のオカンみたいに、ぼくらみたいな子でたら、支える、まちがった方向いかんようにしたい」と。

88. 男性 20代前半

京都で生まれ、父・母・本人・弟の4人家族。父親は無職で、母親は水商売で働いており、京都内をほぼ1年に1回転校していた。中学卒業までのことはあまり語りたくなさそうで、顔が曇るので突っ込んで

は聞かなかった。

中学卒業後、勉強が嫌いだし、進学率も低い学校だったので、「それなら働いたほうがいい」と思い、高校へは行かなかった。

自分で求人誌を見て牛井屋のアルバイトを始めた。その牛井屋は当時、正社員になるためには5年以上経験があり、かつ筆記試験と実技試験を受けて合格することが必要だった。アルバイトで社会保険はなく、月の手取りは10万円ほどで、年間103万円（所得税の課税限度額）までにとどまるように勤務シフトが組まれていた。入って1年たたないうちに狂牛病問題が起きて正社員が減り、アルバイト店長が増えてきた。入れるシフトも減ってきて、やめる前には月10万円を切っていた。

その後は、派遣会社1~2社に登録し、少ないときは週2~3回、多いときは週6日とばらつきはあるが、スポット派遣で仕事をしていた。春から夏にかけて忙しく、夏からだんだん減ってきてまた年末にかけて忙しくなり、年明けからは暇になるという波がある。倉庫のピッキング・製本の補助・配送補助・イベントの設営・食品関係など、行くときは1~2週間同じところ、後はばらばらのところへ、という感じだった。登録してから1週間は、どこに行っても一切仕事はくれない。ある日突然「どこどこに行ってくれ」と電話が入る。その後は電話して「明日仕事がありますか」と自分からきく。「毎日仕事を入れてくれ」と言うと毎日入れてくれたりする。登録には身分証が必要だったが、「忘れた」と言えばそれでいけた。そのころは実家にてそこから仕事に行っており、派遣会社はほぼ固定していた。「年齢を偽っていたので、あまり派遣会社を移動しないほうが良いと思った。京都は当時派遣が少なく、大手は身分証がうるさい」ので、中小の派遣会社に登録して、派遣会社を移動することはしなかったとのこと。

このころ、万引きして捕まったときに、「自立支援センター（教護施設）」に入ったことがある。

「もともと親父が嫌いだったので家を出た」。しばらくは児童公園で野宿生活。遊具の土管の中に布団（どこかから調達してきたとのこと）を敷いて寝泊りしていた。1年近く、10代後半に野宿生活し、スポット派遣で日払4,000円（冷凍倉庫内やイベント）~8,000円（引越やイベントの延長）の仕事をしていた。交通費は一部支給。

友達が「うちに来いや」と言ってくれたので、半年ほど世話になった。その後求人情報誌を見て、5~6回寮付の派遣に行った。ワンルームマンションや3LDKで3~4人のルームシェアが多い。よく覚えているのは、パワーショベルのキャタピラの製造。部品の仕分けをし、伝票に基いて個数を確認して、その部署に持っていく仕事。そのときは4階建てのアパートで、2LDKを2人でルームシェアし、寮費が4万5千円と5万5千円だった。残業して20万円以上になっても、寮費などを引かれて手取り15万円ほど。健康保険証をもらったことはない（社会保険には入っていないということ）。同僚から「金を貸してくれへんか」と言われて断ると、仕事で嫌がらせをしてきた。それで3ヶ月で辞めた。どこにいってもそういうことがあり、「ああまたか」と人間関係がイヤで今まで辞めてきた。

一時京都の漫画喫茶で寝泊りしていた。深夜11時~10時間で1,000円くらい。手持ち1万円を切ったくらいから次の仕事を探し出す。「人間関係がどうかな」と案じて躊躇しているうちに手持ちが少なくなってきた、そこで切羽詰って探し出す。探しているうちに手持ちがなくなって野宿するようになり、見つかったらまた別の住込み先の派遣に行くということを繰り返していた。途中でやめても給料は振込みできちんともらっていた。「労基（労働基準監督署）の電話を知っているけど振り込んでください」と言うとなんと振り込んでくれる。

20代前半、現金仕事にはじめていって、週4~5日働き、ドヤに泊まりながら「西成」かいわいでうろちょろ」と過ごした。釜ヶ崎に来たのは、友達に誘われたから（教護施設に入っていたときに知り合った友人）。2006年3月過ぎに現金仕事がなくなったので、近畿地方のガラス工場に住み込みの派遣で行く。

春にやめて京都に戻って、ほぼ野宿でたまに漫画喫茶で泊まるという生活をしながら、スポット派遣で働く。また夏に「西成」に戻ってきて現金仕事をしていた。

「変なおっちゃんがいる、どうしてんねんと聞かれてぶらぶらしていると言うと、自立支援センターというのがあって市更相の2階に行ったら相談できると言うので、市更相（市立更生相談所）に行ったら自立支援センターを申し込んだ。舞洲1（アセスメントセンター）に1ヶ月いて、そのときは注射がいや（針が体に入るのがいや）なので健康診断を断ったらされなかったが、自立支援センターに移ってから断ったら「出て行ってくれ」と職員に言われたので、1日で退所した。

その後また京都に戻り、友達と出会ったので友達の部屋に泊まらしてもらった。「仕事は何もないなら「西成」に行こう」と友達と3人でまた「西成」に行ったが、戻ってきたら現金仕事が減っており、「西成」で出会ったもう一人の友達と4人で、派遣会社に面接を受ける履歴書をもらうためにNPO釜ヶ崎のお仕事支援部に相談に行った。そこから4人とも京都の住み込みの派遣会社に紹介されていったが、年明けに4人別々の時期にやめて帰ってきた。

その後はまた大阪にいるときはドヤに泊まり、京都にいるときは漫画喫茶で泊まり、両方でも野宿もしながら、スポット派遣に行ったり、現金仕事で行ったりして生活している。

寮付の仕事に行きたい。聞き取り後、広島のように住み込みの派遣を決めてきたが、直前になって行き先を変更されたので、仕事をキャンセルし、「西成」にとどまっている。今後のことは「まったく考えていない」「ひとつのことだけでは不安だから、いろんな仕事をしてみたい」とのこと。「25歳まではとり合えずこんな生活をして、その後考える」ということらしい。

他の家族（弟をふくめて）は京都で一緒に住んでいる。母親とは2ヶ月に1回くらい電話をしているが、京都に帰ったときに実家に泊まることはない。「親父がいるから」とのこと。（引越回数が多いので）近所の人や小中学校時代の同級生で自分のことを覚えている人はいないと言っていた。

89. 男性 30代前半

奈良県で生まれて育った。父親と母・姉・本人・弟・弟の6人家族で、父親は雇われの瓦職人だった。姉と本人は小学校低学年まで施設に預けられていた。今の母は3人目で、結婚したときに姉と本人は父親の元に引き取られた。小学校高学年のころは、校区は近いが住居は転々とし、中学生になってからは団地で住んだ。母との関係は悪くない。

中学のときはヤンキーで、けんかは多かったが、いじめたりいじめられたりの記憶はない。高校のとき3年間アルバイトをしていたうどん店の店長と経営者が極真空手をしており、指導されて更生した。高校のときは団地が狭いので、本人と姉の2人は借家で住んでいた。

高校卒業のとき、学校の紹介では就職先がなかったのに、すでに内定が出ていた同じ高校の友人の紹介で、その友人と同じ会社に卒業ぎりぎりの時点で就職した。家電メーカーSの下請けで液晶の中間工程（ガラスを貼り付けて組み立てる）の製造会社。正社員だけで100人以上いた。社会保険はあり、手取りは約25万円、ボーナスは2か月分ずつ年2回あった。

20歳頃から難波に風俗店とパチンコに通うようになった。月に25日は通っていた。家などで引かれた後10万円は自由になる金が残ったので、それはすべてパチンコと風俗につき込んでいた。パチンコに3ヶ月くらい勝ち続けるようになっており、手元に100万円は持っている状態になっていたのに、会社を辞めてパチプロみたいになった。20代初めに会社を辞めてすぐに姉と住んでいた借家を出てきてサウナに泊まりながらパチプロ生活。半年間はパチンコで食えた。

その後勝てなくなってきて金がなくなり、冬には大阪駅付近のビルで2ヶ月間ほど野宿生活をするよう

になった。梅田をうろついていたら手配師に声をかけられて、兵庫の飯場に入った。プレハブとアパートとドヤスタイルの宿舎があり、その飯場に3年間いてコンクリート打ちや掘削などの土工仕事をした。日当は1万円で寮費がそこから3,000円引かれる。酒は飲まないで何とかそこで生活できたが、3年後の春頃に仕事が減ってきて月に10日間ほどしかなくなってきて、寮費を引かれると金が残らなくなってきたので、奈良の実家のところに帰ろうと思ってやめて飯場を出てきた。

奈良の実家に帰るつもりが、家族はすでに前に住んでいた団地にはおらず、父親一人が別のところに住んでいたの、父親のところに泊まった。姉はそのときすでに結婚してしていなかった。1年位地元の観光協会でアルバイト。3人が1グループで一人月15日の出勤。社会保険は不明だが、失業保険はもらえなかったとのことなので、なかったと推定できる。手取りは月13万円。1年契約で更新はなかった。

アルバイトの契約が切れる頃に、ちょうど父親が九州の実家に帰ると言ったので、本人も父親のところを出てきて「西成」に行った。飯場にいたときに他の労働者の話から「こういうところがあるで」と聞いて知っていたので、「西成」に来た。釜ヶ崎にある飯場で1ヶ月働いて、後はドヤに泊まりながら2つほどの業者から現金仕事で働いていた。この期間の途中で、自転車の窃盗で1回拘置所に入り、4回警察署での拘留を受けたことがある。1~2回は10日契約で飯場に入ったこともある。

その後は住み込みの派遣を転々とした。近畿地方にある派遣会社P、北陸地方にある派遣会社Vなど。派遣会社Pでは、社会保険つきで手取り20万円なかった。外資電機メーカーの下請けで基盤の製造の仕事で、6ヶ月契約だったが、2ヶ月で自分からやめた。宿舎はワンルームマンションだった。派遣会社Vでは、社会保険つきで残業はあまりなかったが、寮費を引かれても手取りで30万円はあってよかった。宿舎はここでもワンルームマンション。6ヶ月契約だったが、4ヶ月でクビになった。理由は「素行が悪い」ということで、髪が金髪でけんが多いということだった。

時期は若干不明だが、「自立支援センター（矯正施設）」に入ったこともある。そこを出た後は、半年ほど京都では派遣会社W、大阪では派遣会社Xに登録して「アルバイト派遣」で働いた。派遣会社Wのときは夜の仕事が多かったので、昼は公園やスーパー銭湯で寝て、休日は漫画喫茶で寝る生活、大阪ではドヤに泊まっていた。大阪では、数年前に2ヶ月間くらい自立支援センターに入っていた。住み込みで貨物会社に契約社員で入ったが、寮が高槻で職場も高槻でという話だったのが、1万円のみ給与のプラスで、福井県に行かされた。寮から片道で1時間半、往復で3時間もかかるので、通勤にしんどくなり、1ヶ月もたたないで辞めた。

辞めた後は京都の公園で野宿しながら、派遣会社PやYというところから「アルバイト派遣」で仕事に行っていた。布団もなしでベンチで寝ていた。冬が近づいたのでまた「西成」に来た。冬を京都で過ごしたことはない。年末に友人と出会う、NPO釜ヶ崎のお仕事支援部に相談に来て、紹介された兵庫県の住み込みの派遣会社に行ったが、年明けには辞めて「西成」に帰ってきて、現金仕事をしたりXから派遣で行っていたりしていたが、仕事が減ってきたので、今年に再び自立支援センターに入った。退所し現金仕事をしながら過ごしてきた。

90. 男性 30代前半

関東地方で生まれる。4人家族。県内での転居はあるが、ほとんど生まれた県で居住。父親は親戚の経営する10~20人規模の工場で旋盤のオペレーターで本人が小学校のときまで働いていた。中学校のときに父親は住宅総合メーカーのサービスの仕事に勤めるようになった。

中学のとき、東京の学校に転校してから半年後に登校拒否になり、保健室授業を受けていた。その関係で全日制の高校には進学せず、その後通信制の高校に行き、20歳代前半に卒業した。誰かから言われたこ

とはないが、自分でなんとなく「行こうかな」と思っていくようになった。

中学卒業後は、前に父親が勤めていた親戚の工場にアルバイトで入り、旋盤の仕事をしていた。通信制高校の卒業後も、社会保険はなく同じアルバイト待遇であったが、週5～6日、1日8～10時間そこで働いていた。手取りは16～17万円くらいであった。通信制高校に通っている途中でアルバイト先の2階に住むようになった。「一人暮らしをしたかったから」その当時は社長を入れて4人くらいだった。

その会社には15～16年勤めた。仕事がこない時期が増えてきて、社長から「給料1か月分出すから辞めてくれないか」といわれて辞めることになった。今は社長を入れて2人で仕事をしているようだ。

アルバイト扱いだっただけで社会保険にも入っていなかったようで、失業保険はもらえなかった。とりあえず実家に戻り、ボイラー・危険物関係の設備関係の仕事を探したが、未経験なのでなかなか見つからず、それ以外の職種を含めて10件以上探したがだめだった。

今年初めに大阪に来た。テレビやインターネットの情報で大阪では日雇の仕事があると知っていたので、建築関係の仕事をしようと思って、まず日雇の仕事を探そうと思った。場所を変えて就職活動してみようという気持ちもあった。「いったん就職活動をして、それでだめだったら戻ろうかと思って出てきた」。

最初に20数万円持っていたが、仕事がどこに決まるか分からないので部屋を借りずに公園で野宿。その公園を選んだのはインターネットの情報ではなんとなく寝泊りしやすそうだったから。けれど行ったらテントはまったくなかった（ちょうど強制撤去の後だったようだ）。釜ヶ崎の場所は知らなかった。夏までずっと別の公園で野宿。小さなテントを持ってきていたので、ベンチとか芝生の人目につかないところで張り、そこで暮らしていた。

最初は何件か就職先を探したが就職できず、その後は何件か登録派遣で仕事をしていた。日払いの派遣は大手ではないところで、週3回くらい。倉庫からパソコン関連の小さな部品をピッキングしてくる仕事をしていた。日給6,400円で交通費は自分持ち。

建設の日雇の仕事は、現金仕事で5～6回した。公園で野宿している人に聞いて、「西成」まで行って探した。

ずっと野宿していたのは、「宿泊すればお金がすぐになくなってしまう」という感覚があったから。大阪にいたのは「せっかく来たんだからもう少しやりたい」と思っていたから。

夏の終わり頃に「西成」に移って、建設会社のガードマンとして飯場に入った。が、休みが多かったので、20日ほどして出てきて、西成労働福祉センター周辺で野宿しながら週1回くらい1,000円ほどのドヤに泊まった。その間、設備関係の仕事や施設警備の仕事を探していたが、見つからなかった。

自立支援センターのことは、就職支援をしてもらえることと泊まれることは、テレビを見て内容は知っていたが、入り方は知らなかった。西成の自立支援センターの地図を見てそこに行ってみようと思い、お仕事支援部がそうだと思ってここに来た。

両親からは電話がかかってくるが、自分からはあまりしない。姉はすでに結婚していて実家にはいない。

施設警備の仕事をしたかったということだったので、求人依頼のある施設警備の仕事先を紹介し、勤めている。

91. 男性 40代前半

Aさんの生まれは九州だが、物心ついたころから大阪府南部で生活をしていた。家族構成は5人家族である。父親の仕事は（本格木造）大工で、棟梁の家の隣にある借家に住んでいた。Aさんは子どものころから休みの日にはアルバイト感覚で父親の大工仕事を手伝っていた。大工仕事は建設中、2階から落ち

たり、誤って手に釘を打ったりとかなり大変で厳しい仕事であるとは見て知っていた。この頃の父親には「おまえにはこの仕事は無理やろうな」と言われていた。父親もよくケガをしていたが痛がるような姿を見せるような人ではなかった。

この父親は厳しく、Aさんは小学生のときとても怖かった。鉄拳制裁を加える父で、怖くてよく近所の友達の家へ逃げていた。それを母親が迎えに来てくれ、連れて帰ってもらってそこで謝っていた。今思えば母親が厳しい父のフォローしてくれていたのだと思う。父親の大工仕事はAさんが小学生のころがピークだった。その後、木造から鉄筋が主流になり仕事が減りはじめた。母親はAさんが幼いころは家にいたが、小学校高学年ぐらいからパートでボーリング場の清掃の仕事に出ていた。母親が仕事で留守の間、父親は仕事が少なくなっていたのかその頃からよくAさんとキャッチボールするようになっていた。そしてそこに母親がパートから帰ってきていたという光景を覚えている。

Aさんが住んでいた町内にはだんじりがあり、Aさんも青年団に入りだんじりを曳いていた。青年団では酒などをかなり飲まされるがAさんは酒が弱いあまり飲まなかった。青年団に入団できるのは中学生からであった。Aさんの町では早くから興味のある子どもたちは青年団に入り、だんじりを曳いていた。同じ町内でも嫌いな人もいたので強制ではなかった。Aさんは小さいころから見ているし、和太鼓の音を聞くと気持ちが高ぶり、「いいなあ」と思っていたので入団した。入ってから写真を見て知ったがAさんが小さい頃、父親もだんじりを曳いていたようである。Aさんは中学生のときから曳いていたので地元の友人とは仲が良く青年団でも知っている顔ぶればかりであり、今でも地元へ帰れば会うこともできる（と言っていたが頻りに連絡を取り合っているような様子ではなかった）。

中学・高校のクラブ活動は野球をしていて高校の野球部では甲子園を目指していた。高校野球部ではアルバイトは禁止であったが小遣い稼ぎのため、早朝に新聞配達をしていた（「困窮していたというわけではない」）。これは友人からの口コミで知り、やりはじめた。当時は早朝に新聞配達をし、それから学校に行き野球の練習、勉強、（放課後に）野球の練習をし帰宅はいつも遅くかなりハードであった。電車で通学していたが立ちながら寝ていた。Aさんが行った高校は文武両道、勉強とクラブ活動を両立させなければならなかった。きついながらもクラブ活動を続けてきたが、肩を痛めて以前のような感覚で投げたりできなくなった。投球するたびに痛みがはしり、辛かった。そのころ自分の実力もわかっていし、そろそろ就職することを考えた方がよいかと思い、野球部を辞めた。本当は高校を卒業後、大学に行きたかったが高校が私立だったために諦めた。高校を受験する際、両親は公立高校への進学するものだと思っていたが、Aさんにはその高校に行きたいという思いがあった。両親との交換条件で私立の高校へいくなら大学までの資金は諦めてくれと言われた。Aさんは勉強もできて大学の推薦ももらったけれども、先生には事情があっていけないと断った。

就職活動では学校に募集がきていた会社に試験を受けに行った。そこはベアリングをつくる会社であった。ベアリングをつくる過程でのチェックは、ミクロン単位の世界なのでかなり神経をつかう仕事であった。そこでの仕事は、すべて機械で制御されているが、表面のガタガタした部分が丸に近い状態になっているかを何個かに1つ人間がチェックしなければならない。それらのベアリングは最終的には車のタイヤの丸い輪郭部になったりしていた。会社には自動車会社などから規格が送られてきてそれにあわせてつくっていく作業であった。精度がよくかなり大きな機械（「面接室」いっぱいになるぐらい）を使っていた。会社は業界大手であった。彼がこの会社に決めたのは地元で営業所があったためである。試験は大阪市内の自社ビルに受けに行き、そこで地元での勤務を希望した。「正直、はじめての就職試験だったので頭は真っ白だった」。倍率はかなり高かったようであるし、試験にも多くの人が出ていた。学校推薦があったわけでもなく、ただ学校に募集がきていた会社に受けに行っただけで、試験を受ける機会はあるけ

れども受かるかどうかはわからなかった。この会社は1年しかもたなかった。理由は地元の営業所には同年代の人がおらず、年配者が多かったこと（就職時同年代の採用も多かったが、あちこち他の営業所にいった。地元での営業所では自分のような若い子がくるのがめずらしかった）と、まだ子どもであった自分にはミクロン単位の仕事で神経をつかうことでかなり疲れてしまったためである。そのころの給与はよかったし次の仕事もまた何とかなるだろうと思っていた。

その後、新聞の折り込みチラシで見つけた大阪府東部の運送会社でお中元の配達のアパートをした。それは短期だったので休みなしでやっていた。そしてその所長さんがアルバイトではなく正規で仕事をやらないかと誘ってくれた。ただ、その営業所は支店なので「正規で働くなら大阪市の北部になるが」と言われた。通勤するには早朝に家を出なければならなかったがやってみようと思い、大阪市の支店に通うことにした。以前の支店では軽自動車に乗り、配送をする仕事であったが新しいところでは2トン車で配達をした。車の免許（普通免許）は高校3年のときに取得した。就職先も決まっていたのでこの時期に取ることができた。ただ、そのときは大阪ではどこもいっばいだったので奈良に原付で通って1ヶ月でとった（Aさんは1ヶ月でとったことを繰り返し嬉しそうに言っていた）。費用は高校の時の新聞配達で貯めたお金と親から少し出してもらった。

新しい勤め先は遠かったが実家から通い、親と一緒に生活をしてきた。しかし、毎朝始発から何本目かの電車に乗り、乗り換えて通っていたのでかなりしんどかった（当時はまだいまとはちがって電車が不便だった）。やっぱり遠くてしんどいので、職場の近くにマンションを借りたいと思い、敷金・礼金のために深夜喫茶のウエイターのアルバイトをはじめた。ウエイターの仕事では簡単なスパゲティなど軽食もつくっていた。

配送の仕事は朝8時から夕方5時ごろまでだった。深夜喫茶の店は繁華街のど真ん中で夕方6時ごろから朝の5時ごろまで働いた（帰りたいときは終電ぎりぎりまで働いて帰宅していたが、ほとんど朝まで働いた。朝まで働いたときはそこから運送会社に通った）。配送の仕事で一人でまわっているときは昼間に車中で寝ていた。仕事自体はお中元の時期はかなり忙しいが、それ以外はそうでもない。また前の支社から移ってからは基本的に2トン車で家具を運ぶ仕事だったので荷物が大きくなった分、件数は少ないので寝ることができた。助手の人が一緒のときも仲良くなっていたので「悪いけど…」と言って寝ていた。休みは土曜が時々と日曜・祝日で比較的休みがあった。配送の仕事は月給20万円もなかったがボーナスがあった。高卒ではそれぐらいだろうと思っていた。ウエイターの仕事は時給制であったが夜の10時から深夜の賃金になるし、かなりの時間働いていたので手取りで月20万円弱、正規の仕事と同じぐらい稼いだ。深夜喫茶は場所柄、客層はバラエティに富んでいた。ヤクザや仕事帰りの「おねえちゃん」などいろいろな人がきていた。その頃はそのような店はまだあまりなかったのでたくさんの方がきていた。朝5時までしか働いていなかったのもその店は日中もやっているのかどうかなどは知らなかった。チェーン店ではなかった。店は繁華街のど真ん中にあるので店主もヤクザ関係かと思ったが、面接のときあった人はそんな感じでもなく普通の人であった。この仕事は友人に教えてもらい、やりはじめた。配送の仕事の収入が少ないので夜にアルバイトあれば教えてほしいと友人に声をかけていた。そしたら、「自分はもう辞めているけど…」と友人が紹介してくれた。アルバイトは人づて、友達同士の口のつながりが多く、高校生の時にしていた新聞配達もそうであった。

この二つかけもちで働くという生活は1年間続けた。このときは歩いていても寝ているようだった。眠気覚ましドリンクを飲んでも効果はないし、地べたに座ったらすぐに寝てしまっていた。

お金は貯まり、大阪市内にマンションを借りた。部屋は六畳一間で家賃は7万円前後であった。ちょうどこの頃はバブルの時代でみんなお金も持っていた。仕事も猫の手を借りたいぐらいではなかっただろう

かと思う。ここのマンションは2年ぐらいして引越しをした。それは運送会社が倒産してしまったからである。Aさんが20歳代半ばのころである。

その頃、通いなれた会社はダメになり仕事を失ってしまったけれども新聞に掲載されている求人数をみてまだまだいけるという自信がどこかにあった。

その次は、大手の運送業者にトライした。通知でOKをもらい、実家から通った。そこでも地元の営業所を希望し、そこに勤務した。その会社は入社当初は副社員扱いであり、正社員になるには条件がある。それは荷物を出してくれるところを2箇所新規開拓しなければならないというものである。Aさんは3ヶ月してから正規になった。ここは半年たっても正規になれない人がおり、Aさんはかなり早いうちに正社員になったと周りに言われた。正規になるとボーナスの金額も半分以上変わってくる。当時ドライバーとして働いていた頃の手取りは25~28万円である。このように配達だけでなく、営業することも求められた。利用する会社を決めていない荷主もいたがたいがいすでにその他の運送業者を使っている。しかしそこにも営業をかける。

その後、年を取ったらいつまでもドライバーとしては働けないだろうと思い、運行管理資格者（運行管理者とは、トラック、バス、タクシーなどの営業用自動車の運行の安全確保のためにも設けられた国家資格。一定の数以上の事業用自動車を有している営業所ごとに、一定の人数以上の運行管理者をおくことが義務付けられている。原則的に、この試験に合格して運行管理者資格証を取得した者でなければ運行管理者として選任されない）の資格をとった。この資格は国家資格であり営業所の所長になったり、車を使う仕事を自分で起業したりした時に必要になる資格なのでとることにした。資格の取得は営業所の所長になるために必要で給与には関係なかった。

そしてAさんが30歳代前半のとき、配達中に人身事故をおこしてしまった。配達で回っていた地域は山を切り開いた宅地が多い場所である。子どもが車にぶつかり、Aさんは「これはヤバイ」と思ってかたまってしまい、隣に乗っていた助手の人が電話などをしてくれた。子どもは倒れて泣いていた。病院でCTなどをとったが特に問題はなくたんこぶ1つですんだ。しかし、運送会社では事故は許されない。ドライバーとしては働けなくなり、仕分けのセンターにとばされた。ドライバーとしての手当てもなくなり給与も減ったし、見えない周りからのプレッシャーもあった。言っではいけないのだろうけどもどの会社も大なり小なり事故を起こしている。名前を汚さないように事故はすると毎回言われている。それが事故を起こしたAさんにはプレッシャーとなった。また事故をおこすと社内報にもどの営業所のだれが事故を起こしたかが掲載される。ドライバーとして今後は乗車できない、見えないプレッシャーを感じてしんどくなりその会社を辞めた。

その次に、新聞の求人を見て大阪市内の郵便局に入っている委託会社にアルバイトとして働きだした。書籍や小荷物を主に配達する仕事である。委託会社ではあるが郵便局の「カブ」に乗りみどりの制服も支給されそれを着て配達をしていた。決められた配達区域があるわけではなく、「カブ」の荷台に荷物入れがついており、その中に入るだけの荷物を入れて配達していた。「カブ」での配達なので雨の日は大変だったが人間関係もよく、働きやすかった。配達地域には組事務所などもありややこしいところがあった。そういう組事務所への配達はとても気をつかった。雨の日はビニール袋に入れてからもって行かないとぬれたりしたら大変であると言われていた。組事務所などへ荷物を持っていき事務所下につくとすぐに組の人が降りてきて、「荷物をあけてみる」と言われあげさせられたこともある。ちょうどそのころ神戸の組で内部抗争があったころだった。たまたまその名前が明記された荷物があり、仲間うちでだれが行くのかという話になり、自分が行くことになった。案の定、事務所の下についた瞬間に囲まれた。何事もなかったが。

2年ぐらいアルバイトのままであった。仕事はフルタイムで給与は時給制ではなく荷物の個数によるも

のだった。1個あたり120円で1ヶ月15~16万円ぐらいであった。荷物は配達をしてなくなればまた郵便局に戻り、荷物を積みこみ、配達をするという繰り返しであった。お中元、お歳暮の時期は忙しいが普段はそれらに比べればかなり量は少なくなる。やっぱりお金が厳しいし、「このままアルバイトで生活するのなあ」と思いはじめていた。そんなとき、既にその仕事は辞め、他の仕事に就いていた年下のアルバイト仲間の子が「いいところがあるから…」と他の仕事を紹介してくれたので辞めた。

紹介され働き出したところはコピー機製造業者の下請け会社であった。ここははじめから正社員で雇ってくれた。倉庫があり、そこでコピー機などの保守・メンテナンスをするエンジニアからの電話を受けて3,000種類ぐらいある部品の中から必要な部品を探してエンジニアが作業しているところにバイクで持っていくという仕事である。その他、コピー用紙やトナーなども運んだ。そのうち、エンジニアが動くほどでもない簡単なコピー機のメンテナンスの方法も教えてもらい簡単なメンテナンスや部品交換などもするようになった。この会社の給与形態などはかなりかわっていた。どんなに勤続しても、キャリアがあってもみんな同じ給与であった（また昔は日本料理の料理人だったり、いろんな経歴をもつ人が働いていた）。家族のいる人は家族手当が多少あったが基本はみんな20万円ほど。明細書をみんなで見せ合っても毎月同じ金額だった。その代わり利益ができれば社長が食事に連れて行ってくれた。Aさんは「吉兆」にも連れて行ってもらった。そのときはいきなり車で連れて行ってくれたのでかなりびっくりした。たまたま、年下の同僚と「吉兆ってどんどこなんやろう」と冗談で言っていたのを聞いていたのだと思う。頑張っている人にはそういうことをするととても粹な社長であった。会社の規模は女性2人（事務）であとは8~10人ぐらいの社員。忙しいときは事務の子だけでは大変なのでみんなが電話にも出ていた。周りが仕事を頑張る人ばかりだったので自分も頑張るやっていた。その中に1人だけ親会社の社員がいた。その人は言うならば自分たちのお目付け役であった。ただ、自分の仕事しかしない嫌な人だったがそういう人ともうまくやっていかないといけなかったので何とかうまくやっていた。仕事はとても忙しく、残業も多かった。定時後、2時間は残業をつけられるがその後はサービス残業、遅いときは11時まで働いた。休みは週休2日であったが、当番で3回に1回は土曜日に出勤していた。土曜日は平日に比べ企業も休みなので仕事量も平日の1/10であった。身体は丈夫なので大病はしなかった。

しかし交通事故に遭ってしまった。「カブ」で荷物を運んでいるときに対向車線の車がいきなり自分に向かってきて、ステップに乗せていた足が車のバンパーと「カブ」にはさまり粉砕骨折になってしまった。ちょうど昼の12時を回っていたのでたくさんの人が集まってきて、そのうちの誰かが電話をしてくれ、救急車で運ばれ入院した。そのときも社長がすぐに来てくれた。相手は無免許で、入院中一度も見舞いにも挨拶にも来なかった。そのうち地元の病院に移してほしいと転医希望を出した。しかし、転医するには入院費を精算しないといけないが相手も話に来ないし、自分もお金がなかった。そんなとき社長が自転車で50万円ぐらいのお金を持ってきてくれて「これでいけるやろ」と支払ってくれた。その後、相手の保険などからお金がおりましたので、社長に返した。社長は本当にいい人だった。入院は1ヶ月ちょっとだったが歩けるようになるまでは半年間かかった。その間も仕事は社長がなんとか話してくれて給与保障してくれた。今思えば一番社長がよかった、いい人だったと思う。

Aさんの父親はこの頃に亡くなった。その後、良心的だった社長も亡くなり、会社は社長の奥さんが引き継いだ。しかし社員は社長のやり方についてきていたので、奥さんのお金にならないことはするなというような利益主義が目に見えてしまうやり方にしんどさを感じはじめていた。だんだん関係がギスギスして社長がいた頃のメンバーは辞め、人の出入りがあった。そして人数が少ないのに派閥ができたり、陰口を言われたり足の引っ張り合いがおこってきた。人間関係がだんだんおかしくなり、Aさんはしんどくなって10年弱前に辞めた（おそらく社長が生きていた頃にいた社員はみんな辞めただろうと思う）。

辞めたのはちょうど他の業者（この仕事をしていると同業者と顔を合わす機会が多い）の人に声をかけてもらったのもあった。次の会社は親会社が同じ孫請けの運送会社であった。

業務内容は主にコピー用紙の配達。「カブ」での配達から久々に車での配達の仕事になった。部品の配達から荷物（コピー機などのことか）が大きくなり重くなったので2トン車での配達になった。それを最近まで続けた。

その会社に勤めだした後、知り合いがお金に困っていたのでAさんは（貯金がなかった）サラ金でお金を借りて渡した。それが積み重なって100万円超えてしまった。その人との出会いは「合コン」である。後々相手側の女性たちに話をきくとその女性はたまたま人数あわせで参加していただけなのであまり知らないとのことだった。Aさんはだまされたんだろうと…。借金をしてしまった。

ちょうど今から2年前に母親が倒れた。父親が亡くなったその頃から母親は精神的にガタがきていたと思う。この頃はきょうだいも家庭を持っていたのでAさんと母親は二人暮らしであった。母親は以前から他の病気も抱えており、食事はヘルパーさんに頼んでいた。

このような状況でAさんだけでは、目が行き届かないこともあったりしたのできょうだい夫婦が自宅の様子を見にくるようになった。そうしているうちに借金がばれてしまった。事情を話しても「このご時世、そんな話あるわけないやろ。私利私欲に使ったんやろ」。責められ、次第に対立しだした。Aさんは借金をしてしまった自分が悪いのだと言っていた。

きょうだい夫婦との関係はおかしくなった。いくら事情を話しても聞いてももらえなかった。きょうだいが自宅に母親の様子を見にくるときはその家族がきて泊まるようになった。みんなが泊まると家も狭いし、きょうだい夫婦ともギクシャクしている、きょうだい家族が母親を看ってくれるなら自分は家にいなくてもいいかと思ひ、友達の家泊まりに行くようになった。すると、「無責任だ」とますます陰悪になり、きょうだいの配偶者が怒って会社まで来て「Aさんは家に帰っていない」と会社の人に言った。それから会社の人自分を見る目が変わってしまった。そして今年に入ってきょうだいが勝手に母親の引越しを決めたと言ってきた。自分には借金があり引越しのお金もなかった。今の社長にも自分がサラ金に借金していることがばれているので信用がなく借りることもできない。そうこうしているときに、社長が、引越しされたら住所不定になるだろうから会社の寮に住所を移せと言ってくれた。そして引越しをした。それから、Aさんは月々の5万円弱のローンとその家族に引越し代の請求を受けるようになった。その金額は50万円とかなり厳しい金額が突きつけられた。また、サラ金に借金をしてしまい母親と二人暮らしをしていた家の家賃が払えないこともありそのときの滞納分も含めて月10万円強の支払いを求められた。給与日になるときょうだいの配偶者に呼び出されお金を支払わなければならなかった。その頃、既にアルバイトに格下げになっていて出勤していくらと時給制になっていた。時給は1,000円で1日8,000円だったので月16~18万円であったがほとんどがとられていた。盆休みは仕事が休みで働けないし、前の月もあまり出られなかったのでお金もないのに10万円強支払えと言われていた。ずっとまともに食べることもできず、食べていない状態で働いていた。同僚も自分が食べずに働いている状況を知っていた。自分の借金だけだったら何とか支払っていったが、家賃の滞納分や引越し代などと言われるから困った。その頃は会社の人たちの態度も変わっていて仕事をしていても精神的なプレッシャーがありしんどかった。そして今年の夏に職場を飛び出してしまった。

Aさんは引越しをした春ごろから寮には着替えに帰るぐらいであった。周りの目もあったし、ガス代や電気代など光熱費がかからないように外で生活をしていた。外から会社へ通っていた。

夏に会社を飛び出してからは野宿をしていた。次の月にはお金がほとんどなかった。「どうしても食事を」となって釜ヶ崎から土工の現金仕事を探すようになった。しかし、1週間に1、2日程度でほとんど仕

事に就けなかった。Aさんは西成労働福祉センターの利用はあるが炊き出しに行ったことはない。釜ヶ崎を知ったきっかけは「西成」に行けば日雇い仕事につけるといのは小さいころや普通通勤中に様子を見てなんとなく知っていた。行けばなんとかなると思っていた。しかし実際に行って仕事があるのかは不安だった。朝4時から5時にセンターに行ってもないときもあった。センターには車はきているが「顔つけ」しか連れて行かないと言われ仕事に就けないときもあった。秋になると仕事がほとんどなくて厳しく、大阪市立更生相談所に行った。市更相は日雇いの仕事に行ったとき一緒に働いた人から聞いて知った。シェルターの利用は1回ある。三角公園のシェルターの雰囲気は夜見てびっくりした。「まわりの様子が危険な香りがした」。日雇いをしながら野宿生活をしていて、市更相に行くと三徳寮に入れば何とかかなると思って朝の9時ごろ行ったが、もう終わったと言われて帰ろうとしていた。そしたら「ちょっとまち」と言われて話を聞いてくれたので、これまでの借金に関する話をひととおりした。自分は明日のための聞き取りだと思っていたがそこから電話をかけてくれて巡回相談員につないでくれた。何がどうなったのかわからない状態で1時ごろにつないでもらった。そして入所となった。

Aさんは酒は飲めず、ギャンブルも自分ひとりではしない。また雇用保険はこれまでアルバイトのときも入っていたが、厚生年金ははずしていたこともある。事故を起こしたことがきっかけで辞めた仕事以降はかけていない。取得している資格・免許は普通免許、運行管理資格。

結婚は1度している。子どもはなく、1年ぐらいの結婚生活であった。

サラ金への借金はおそらく利子分しか支払えておらず元金は払えていないと思うと述べていた。

Aさんは「春ごろから（生活が）おかしくなってきたと思う」と言っていた。また、「他の人に比べてアオカン生活が何年もあるわけでもないのでキャリアはない。ここに入って他の人の話をきくとキャリアが違うと思った」とも言っていた。

母親は単身者しか生活ができない団地に入居している。単身が条件なので現在母親が生活しているところでは一緒に暮らすことができない。現在母親やきょうだいとは音信不通である。このような状況になってしまっていることは自分にとってもつらい。連絡はとった方がいいと思うのだがつい間があいてしまっている。またきょうだい家族には家に電話しないでくれと言われていたのでできない。

今後はヘルパーの資格も取れると聞いたのでそれを取りたいと思っている。現在母親は寝たきりではないが目も悪くなっている。その母をお世話しているヘルパーを見て自分もそういう仕事をしたいと思い、ゆくゆくは母親の面倒を見たいと思っている。

92. 男性 40代前半

大阪で生まれる。父・母・兄弟2人・当人の5人家族。父母とも死去。いつかは確認していないが、途中で一軒家を買って大阪府内に転居したようだ。お父さんは社員5~6人、アルバイト・パートを含めて30人ほどの小さな金属加工の工場に勤め、工場長をしていた。兄弟はバンドマンをしている。本人も普通科の高校に行った後大学に進学するが2年で中退し、東京に出て音楽の専門学校に1年半通いながらバンドマンで生活していた。そういう専門学校が東京にしかなかったから東京に行ったらしい。

専門学校を辞めた後、2年くらい専門学校の先生の荷物運びに雇ってもらった。当時はアパートを借りていたので、そこで住みながら2年くらい働いた。先生と引き方がかぶるので、2流の仕事しか廻ってこないで、やめて大阪の実家に戻り、1年位兄弟のバンドに入っていた。

その傍ら父の勤めていた工場にアルバイトに入り、そこで収入を得ていたが、父も年をとってきて、仕事も忙しくなってきたので、バンドのほうは辞めた。

正社員になったのはいつか聞けなかったが、この頃かもしれない。工場はビデオの部品を製造し、アル

マイト加工などもしており、特定の大企業の系列ではなかったようだ。社会保険はあり、手取りは25万円くらいで月給制。ここに通算して12〜3年勤める。1回辞めたが、翌年またそこに入ったとのこと。10年ほど前に父のほうから「暇になってきたし、よそに行ってもいい」と言われたので辞めて、1回だけ失業保険をもらった。

辞めた後1ヶ月くらいして新聞の折込の求人広告を見て探し、従業員3〜4人のメッキ工場に勤めた。「家から近い」「従業員が少ない」所を探した。社会保険ありで手取り20万円くらい。1年半勤めたが、極端に仕事が減ってきて土日以外でも機械のペンキ塗りとかの生産以外の仕事もするようになり、4、5年ほどして社長のほうから「紹介するから他のところに行ってくれ」と言われて辞めることになった。当人が一番入るのが遅かったし、他の人は中卒者が多かったので、他にいけるだろうとの社長の判断だったようだと言っている。

社長の紹介で大阪府内の従業員10人くらいのメッキ工場に転職。1年〜1年半勤めたが、仕事が暇になったので辞めた。今はその工場はつぶれている。メッキ工場は機械が1億円位するので、息子があとを継がなければ金融機関がなかなか融資してくれないらしい。

辞めた後は、母親の病気が悪くなったので面倒もみなければならなくなり実家に戻った。看病のために、実家はそのままにして病院の近くに住民のため大阪市内に賃貸マンションを借りて、家族ごと引っ越した。親が亡くなってまた以前暮らしていた地域に戻ったが、父と兄弟が看病のことで仲が悪くなっていたので、父が別の物件を借りて、自分も一緒にそこに住むようにした。

父親は当時は年金生活。当人はスポーツ新聞で見つけた、リフォームの営業の仕事に就いた。基本給15万円では後は歩合給。業界は、注文を取れなければ1ヶ月もいられない雰囲気、1ヶ月いる人はほとんどいない。日銭で3,000円もらうが、1ヶ月いなくて月給はもらえないというのが常識みたいところ。社長も「金になるで」と言われて始めた人が多く、直接施工する工務店ではなく、注文をとると他の実際に施工する工務店に仕事を回すという形である。営業とは、とりあえずピンポンと押して、相手と契約の話しを聞いてくれる時間を設定するのが仕事。契約の話は、「クローザー」と呼ばれる人が行い契約する。実際にはピンポンと押してもなかなか出てきてくれる人はおらず、外に出ているおばちゃんに話しかけてという感じ。3〜4年で50社ほどを転職したが、ほとんどみんなそういう感じで、40代〜60代の人が多く、会社も大阪で100社ほどある。同じ人がぐるぐる廻っている。会社のほうも社会保険等を免れるために「委託契約」にしている（いわゆる委託労働者と呼ばれるもの）。3年で2回ほど大当たりしたことがあり、そのときは手取り100万円くらいになった。でも自分の力でというよりも、相手が「かわいそうだから」と契約してくれたような感じである。床下にもぐったりしての「悪質」なやり方はしたことはない。

その後は「チラシ配布」の仕事をした。寮つきでそこに入り、夜間などに水道の修繕のチラシを配る仕事。社長が言うには最初は外注で出していたが高つくつので、配布用の会社を作ったとのこと。募集はスポーツ新聞でしているが、会社名がころころ変わっている。当人はチラシ配りだけだが、水道修繕のチラシを入り口にして、修繕のときに家の中には入れるので、そこからはリフォームの話をするらしい。リフォーム目的（当人は背景は分からないといっていたが）。日給は5,000円だが、当人は配った先での注文が増えたので7,500円にしてくれたらしい。夜中に自転車で行ってかなり精力的に配ったらしい。実際の給料の支払は、日払分が3,000円（4,000円から寮費1日1,000円を引いて）残りを給料日にもらうという形だが、社長が言うには1ヶ月いられたら困るらしい。ただ、辞めた後残りの給料をもらいに来たら払っていたようだ。当人に対する社長の面倒見は良かったとのこと。

寮は文化住宅で3部屋あり、1部屋ずつ3人が入る。社長がいくつかの地域にいくつかの文化住宅を持っているようで、最初は大阪府東部の営業所にいた。1回目は2ヶ月くらいいて、長くいると社長がい

い顔をしないのでよそでも探そうと思って辞めた。そのときは金も持っていたので、大阪市内の安いホテルに泊まった（父のところには戻っていない）。2週間位して金がなくなってきたので、また同じ会社に入り、1ヶ月くらいいた。

父親が寝たきりになって、介護保険でヘルパーが来たらおむつ代などが高つくようになった。家賃は父親の年金から支払っていたが、介護料を介護会社を運営する大家から借りる形になっていた。福祉事務所に生活保護の相談をしに行ったが、父親の年金が高いので生活保護にはならないといわれた。マンションに帰りにくくなってしまい、父親を病院に入院させて、部屋を出た。公園に1週間ほどいたが、昼間に時々マンションにも帰っていた。歩いていたことが多いようだ。福祉事務所で「自立支援センターもありますよ」と聞いていたので、別の区役所に行って巡回相談員を呼んでもらい、自立支援センターに入った。

父親は年末に死去。自立支援センターにいるときは「正社員にならなければ」という思いが強かったので、経験のあるメッキ会社ばかり探し、3箇所に勤めたり辞めたりしていた。当人が勤めていた頃とやり方がまったく異なっており、また初日に他の社員から「邪魔しに来ているようなもんや」とか言われたりした。当人が働いていた頃とは違い、偉そうに言う人間や、いい会社ではないところばかりだったので、続かなかった。自立支援センターの職員からも通りすがりに「面接が趣味か」と嫌みを言われたので、「もういいか」と思い、兄弟に連絡して、その兄弟の勤めていた会社に入った。兄弟がアパートを借りてくれたが、もともとそこで長く勤めるつもりではなかったので、1ヶ月もたたず辞めて出てきた。

大阪市内の安いホテルに泊まって、チラシ屋に3回目戻ろうと思って連絡したが、「前のことを知っている人間は困る」と言われて戻れなかった。家がないとまたリフォーム屋とかになるので、探しきれないうちに金が少なくなってきたので、大阪市役所に電話をした。区役所で巡回相談員の面接を受けて再び自立支援センターに入所。

ふたりの兄弟とは連絡を取っていない。彼女がおり連絡を取っているが、自立支援センターに入っていることは話しておらず、チラシ屋の寮にいることにしている。結婚歴はない。

将来のことについては、派遣でいこうかと考えているとのこと。「50万円くらい持って出てパートでは無理」「本当にちゃんとやっついこうとすれば100万円くらい持って正社員で、就職先もいいところで、という条件でなければやっていくのは難しい」。

「前は当たり前親といて金もあったが、リフォーム屋に行ってからはいろんな人がいて日銭の世界に慣らされているので、アパート借りてようやっていけるかな、と思う」「自立支援センターからアパートを借りて出た3~4人の人を知っているが、みんな携帯電話がなくなったりしており、失敗しているようだ」。

環状線の南へは（新世界も含めて）行ったことはないとのこと。「自分は荒っぽいところが嫌い」とのこと、見た目は体格も良くて「やんちゃ」そうなふうに見えるが、話し方は極めておとなしい。

93. 男性 30代前半

大阪府に生まれる。姉妹がいる。小さかった時に、両親が離婚し、捨てられて以後、祖父母（現在は二人とも亡くなっている）に育てられた。生活保護を受けていたらしい。父から養育費はもらっていた。父はタクシーの運転手（それ以前は、会社を営んでいたが潰れ、トラックの運転や営業を行っていたらしい）。中学生の時に連絡をとり、20歳代後半（2回目の裁判）から連絡をとっていない。父は再婚している。父のことについては「捨てられた」という気持ちが強い。母とは中学校卒業後に再会し、以後連絡をとっている（現在も連絡をとっており、自立支援センターにいることも知っている）。母には内縁の夫（相手が離婚できないらしい）がいる。母のことは許せる気持ち（会えてうれしい）になっている。

学校は中学校卒業。高校進学については、家庭の環境（経済的理由）が大きく、勉強が嫌いだったということもあり進学していない。中学校卒業直後までは、祖父母と暮らし、以後、姉妹と二人で市内でアパート生活（姉妹が結婚するまで）を始めた。

中学校卒業時に、学校から紹介された幾つかの会社の中から選び、自動車部品の製造会社に入った。入社1ヶ月後（研修期間中）、電気ドリルに軍手が巻き込まれ指をケガした。治療は労災で行い、2ヵ月後くらいから仕事を始めた。小さい部品などが扱えなかった。仕事のやる気が出ず、無断欠勤が続き、半年ほどで辞めた。月給は16～20万円くらいだった。

次に、姉妹が働いていた建築関係（タイルを扱い、税務署やマンションなどの全面タイル張りを行っていた）の会社に紹介で入った。10代後半だったので、年齢の関係でできる仕事が少なかった。社員14、5人、大阪府内に親会社がある。健康保険と年金はあった。この会社にいる時、靱帯を切断した（労災で治療）。工場では、製造、梱包、配達の仕事を行った。初めは、材料を運んだり、梱包を行ったりしていた。3、4年くらい勤めると、図面の事や、段取りの事などを行い、夜の7、8時頃まで仕事をしていた（遅いときは10、11時になった）。そして、仕事が増え、準社員となって自分の判断で仕事を進めるようになった。給料は、時給600円から始め、半年か1年くらいでボーナスとして2、3万円もらった。最後の方は時給750円になった。

20歳代前半、姉妹が結婚しアパートで一人暮らしとなった。同じ年にパチンコ（1日3万円までと決めている）や競馬で借金を作った。消費者金融から100万円ほど借り、利子などで120万円くらいになった。翌月分だけ払ったが後は払っていない。督促状が来たが無視し、今はどうなっているか知らない。アパートの家賃（5万円）を滞納し、解約をして出た。解約時に戻ってきた50万円を使って家賃3万2千円の文化住宅に変えた。会社には8年弱（20歳代前半まで）勤めたが、会社が傾き出したという噂（倒産しなかった）が出たり、パチンコが好きでパチンコ屋の店員になりたいという気持ちもあったりして辞めた。

飲み屋のママから紹介してもらい、面接を受け、和歌山県のパチンコ店に勤めた。パチンコ店に入った2、3ヶ月は、店の人に話して、会社を辞めた後、貰っていた失業保険を貰い続けられるようにしてもらった。和歌山では月1万円の寮（ご飯、風呂、テレビ、冷暖房付きの個室）に入っていた。その時も、父が文化住宅の家賃は払ってくれていた。3週間はアルバイト期間だったが時給は最高の1,200円ももらっていた。その後、そのパチンコ店に人材を派遣していた派遣会社から、声をかけられ、その派遣会社に籍を置くようにした（派遣会社に籍を置くと、最低時給額が1,200円となる。また、連絡しておく週初めに、日当の一部3,000円×7日分の給料がもらえた）。2年ほど勤めた時に、パチンコ店のバイトの子の車を運転（免許は前の会社に勤めていた時に合宿に行き取得）していて事故（自分の方が他の車に追突）を起こした。警察の事故処理は済ませたが、修理代があった。給料から9万円を1回払っただけで、逃げるような感じで店を辞めた。

20歳代後半、大阪市内の派遣会社の仕事を行う。堺市の文化住宅に入るが、夏には家賃滞納で追い出された。その後は、「西成」のドヤ（1,000円前後）で寝泊りする。パチンコ店、運輸会社の仕分けなどの仕事を行った。風俗店のボーイのアルバイトも行った。この時は、ローンで買った10万円の車に乗って行った。

その後、堺市の会社の面接を受け、系列の兵庫県の店に住む込みで働いたが、もめて帰ってきた。その後、悪さ（何をしたかは言いたがらない）をして、刑務所に入った。実刑2年4ヶ月であったが、1年半で出てきた。

出所後、半年施設に入っていた。

大阪へ帰ってきてから、刑務所で知り合った人の知り合いと「西成」で薬を売っていた（正式に組には

入っていなかった)。1回分だと5千円、2回分だと1万円だった。3万円をヤクザに払い、それ以上からが収入(1本1,500円の歩合)となった。日当のような形で一日1万円もらっていた(8本以上売れると5,000円アップ)。その時に、住民票を「西成」に移した(現在も「西成」のまま)。

運転手の仕事を行った。飲み屋の店にいた人の送り迎えをした。その人が、使っていたアパートが空いている(親が来そうで帰らない)というので借りた。2、3ヶ月使っていたが、相手の親が現れ問い詰められる。いきさつを説明したが、警察沙汰になる。飲み屋の人が説明に来てくれたため、アパートの件は大丈夫であったが、仕事で使っていた車が盗難車だったことが判明した(本人は盗んでいない)。窃盗罪で実刑となった。

米の配達の仕事に行ったが、この冬にケンカで辞めた。その後、大阪市内の繁華街で1週間ほど野宿をした。警察に話に行き、「区役所に行ってみれば」と言われた。その日は、警察署で寝させてもらい、休日の2日野宿をし、月曜日に区役所に行った。そして、三徳寮に1週間いて、巡回員と話をし自立支援センターに来た。

今後は、パチンコ店に勤めるか、運転関係の仕事を行いたいと考えている。知り合いにはラブホテルの清掃の仕事を頼んでいる。希望は、仕事を決めて、家を持ちたい。

「西成」(あいりん地区)のイメージは悪く、シェルターや炊き出しの経験は無い。

20歳代の時の借金以外に、カードでの借金がある。

指のケガについて、リハビリセンターで診断書を書いてもらい、身障者手帳の申請をしようと考えている。

94. 男性 40代前半

生まれは大阪市西部。この近所に両親はいない。母親は中学生のときにサラ金から借金をつくってそれが父親にわかり、蒸発した。父親は20年前に亡くなった。母親が何にお金を使っていたのかはわからない。父親がなくなったときは刑務所の中にいた。姉弟は3人。長女は亡くなった。次女とは関係が悪くて連絡をとっていない。市営住宅に住みながら父親はもともと別の仕事をしていたが、母親が蒸発してからは道路の舗装関係の仕事をするようになった。母親がいなくなって姉妹に父は暴力をふるうようになった。

また中学生のとき母は父から生活費をもらっていたにもかかわらず、給食費を払ってくれず、みんなの前で自分だけ給食費を払っていないと言われてつらかったが、父にはとてもそんなこと話をするのができなかった。母がいなくなってグレた。ほとんど家に帰らず、友人宅に入り浸り、暴走族に入ったり、シンナーも吸引した。シンナーは父親に叱られて辞めた。鑑別所にも入ったことがある。

中学校を卒業して、自分でみつけてきた紙加工会社に就職した。後の職歴は転々とした「お決まりのコースですよ」。バイトを転々としていた。仕事もせずにぶらぶらしていた時期もあった。バイトはアルバイトニュースで探した。パン屋、中華料理屋、ガソリンスタンドなど。

10代の後半、東京に行って、住みこみで「キャバレーのボーイさんもやったな」。保険をかけてくれるようなところひとつもなかった。お金がなくなって実家(大阪)に戻ってきた。

20歳代の前半、自衛隊に入隊。1年で辞めてブラブラしていた。

それから仕事仲間と(当時の仕事は何であったか聞けず)けんかして相手が亡くなり、刑務所から出てきたのが30歳になってからだった。お酒はコップ1杯飲むだけで真っ赤になるので飲まない。事件当ても飲酒はしていなかった。刑務所から出てきて保護会にも行ったことがあるけれども、じゃまくさくなって出てきた。結局何もしてくれなかった。

入所中に父は亡くなり、帰る家も無くなった。刑務所の中にいるときにボイラー整備3級（ボイラー技士2級の資格も取得している）、自動車整備士の資格を取得した。

刑務所を出てからは、塙の中で知り合いになったやくざさんにお世話になり、半月ほど事務所で寝泊まりした。

そのころ飲み屋で嫁はんと知り合い、このままやくざさんのところにお世話になっているわけにもいかないと思い仕事をさがした。

その後嫁の実家の近所のパチンコ屋で住み込みの仕事を1年半くらいした。パチンコで働き出した最初は給与が18万円くらいだったのでお金は全然貯めていなかった。その後は、「強制貯金」みたいな感じで、給料から積立されていた。「60万円くらい貯めましたよ」。7万円の部屋を借りた。しかしパチンコで遊んで、家賃が払えなくなり、親戚が家を借りてくれて、「一緒に住みなさい」って言われた。「延べで7年間結婚していたんですが、妻が働いて収入がある分、自分は結婚して半年は遊んでいた」と思う。

親戚が建築土木関係の会社を営んでおり、大特・普通免許、クレーンなどの資格もとった。フォークリフトの資格はもっていないけど、時期は不明だが、建築土木関係の仕事をしたらどうかといわれたけれども実際運転はしたことがないから、ほとんど仕事をしなかった。

その後ボイラー管理の仕事に就いた。ボイラーの資格は技士2級、3級整備でも仕事はある。「ボイラーの仕事は楽ですよ」。1時間に1回計測器をみるだけだから、「管理の仕事はよっぽどの異常がない限り」。最初就いた仕事は1人でする仕事で給料が13万円と安かったのでやめた。

その次は「石鹸で有名な会社あるでしょ、あすこで2年間くらい勤めた」。仕事内容は、「工場でもいろいろあるんですけど」、排水をきれいな水にして海に流す污水处理の機械の管理とボイラーの管理を2交代制で複数でしていた。20万円くらい給料があった。妻と二人で働けばなんとかなる金額だったけど、上司と仕事の仕方でもめた。「ボイラーの仕事をしている人って偏屈が多くて、日勤者（＝班長さん）とやっていたんですが合わなくて」。「最初はかわいがってもらっていたんですが、何がきっかけかはわからないけれども、話をしてくれなくなって。理由はよくわからない」。

ボイラー関係の仕事をしている人は7、8人。工場自体は大きくて、下請けの子会社で働いていた。年金や保険などはちゃんとあったけれども、組合はなかった。仕事をやめたとき、「妻はそりゃあ怒りましたね」。

次の仕事は水道屋。1年くらい働いていた。2、3人で水道配管を埋めていく仕事。給料はそこそこで18万円。この仕事を辞めたのは、ボーナスをもらって、その10万円でパチンコをして20万円くらいまで増えた。そのお金を元に、次の日も会社に行ったふりをしてパチンコ屋通いをしていたらクビになった。

どうしてもパチンコがやめられない。お金をもっているときは10万円。お金がないときでも2、3万円でももっていれば行ってしまう。お金が底をついたら家にお金をとりに帰ってまたパチンコをしていた。

40歳前半に離婚してからは、姉妹を頼っていくも、事件をおこして執行猶予をもらった。刑務所を出てすでに10年たっていたので重い刑にはならなかった。

そこで大阪に戻って人材派遣会社（小さいところ）に登録、東海地方のタイヤ会社に行った。日給18,000円だった。契約期間は決まっていなかった。3DKの団地みたいなところが寮で、「寮代などがひかれて25～40万円くらいあったのちがうかな」。それだけもらっていたらすぐお金が貯まった。妻に10万円仕送りして、寮から出て部屋を借りるようになって、中古の車を購入して羽振りがよかった。そこでスロットを覚えてしまって、お金をもらってパチンコ屋ばかりいくようになって、一年で契約解除された。

解雇されてからは、借りていたアパートの家賃が払えなくなり、アパートを飛び出し名古屋の風俗で働いていた。給料は26、7万円くらいもらっていた。昼の12時から深夜0時まで、立ち仕事でしんどかつ

た。店長は自分よりも年下だった。そのときは毎月5万円仕送りをして子どもに会わせてもらっていた。この仕事をやめたのは、子どもが一番かわいいときに近所に住みたいと思ったから。

貯金40万円を持って大阪にもどってからは「西成」を知らなかったのでビジネスホテルに泊まっていた。貯金を使って困窮して、野宿、数年前に自立支援センターに入所することとなった。

自立支援センターへは巡回相談員の番号を教えてもらって、手続きをしたら「すぐ入所できました」。自立支援センターが出来た頃だったと思う。半年入所していたけど、2~3ヵ所ボイラーなどの求職活動はしたがほとんど仕事はしていない。仕事をしたとしても、1ヶ月で辞めた。自立支援センターで仕事を探すと、住所が「60番地」で終わるから、面接に行っても「へんな住所ですね」と言われるので仕事も探さなかった。そこで借金、自己破産した。

退所、友達宅に転がり込んだ。

市立更生相談所を通して2度入所する。1回目は去年の初めに入った。退所したのが秋。自立支援センターに入所していたときは、職安からの紹介ではなく自立支援センターが紹介してくれた会社にボイラーの資格を活かして就職した。プールと風呂のボイラーの仕事だった。ボイラーが70機もあった。給料は13万円/月。「自立支援センターにいるときは13万円の給料でも十分やったんだけど」。それまでは派遣の仕事をしていて、結局3ヶ月くらいしたけどほとんどお金貯まらなくて、ボイラーの仕事で貯金することができて、保証金10万円、家賃3、4万円の部屋を借りた。自立支援センターのスタッフが一緒に買い物や引越しをしてくれた。もろもろの支払いをして残ったのが20万円くらいだった。ただその会社との契約内容で、自立支援センター入所中は社会保険や年金などをひかないという話だったのが、自立支援センターから出たら諸経費をひきますということになって、手取り10万円ではやっていけないと思い今年の初めに仕事をやめた。(生活保護などは考えなかったのですかと尋ねると)「思いつかなかった」。自立支援センターのアフターフォローがあると聞いていたのですが、自分の担当者もきてくれず、年賀状一枚来ただけで部屋には見に来てくれなかった。今入所している自立支援センターのスタッフにも「何で家賃つぶれる前にやらなかったんや」と言われたけど、半就労・半福祉のためにはどのように生活保護の相談をしたらいいのか、やり方とか知らなかった。

それからは貯金を食いつぶしながら生活していた。それに加え養育費を送らないと子どもに会わせてくれなかった。実際養育費を支払っても会わせてもらえない。自炊できるから何とか生活していたが、仕事を辞めてからは、失敗してパチンコでしばらくは生計を維持していた。初夏までは何とかもっていた。7万円勝つこともあったけど次の日には負けていた。でも10万円じゃとてもじゃないけど生活できない。仕送りして、家賃、タバコ(320円)一箱以上吸うので、タバコ代だけで1ヶ月1万円以上。これだったら病気もできないし、服も購入できないし、保険にも入れない。それからは夏までは妻からお金を借りてマンションにいた。(仕事をしていない時期は求職活動はしていたんですか?) 求職活動はしていなかった。自立支援センターに一度顔をだして「ボイラーの仕事お願いします」と頼んでいたが、ボイラーの仕事はあると聞いていたが、連絡がなかったから、「もうええわ」と思って部屋をでた。

ボイラー関係の仕事はちょこちょこある。しかし学歴が中学校卒業なのでそこでひっかかることが多い。「求人高校卒業が多いです」。

部屋をでてからは嫁にも言えず、夜逃げをした。野宿をした。市役所に相談に行ったが、相談にのってもらえず、区役所に行ったら市立更生相談所に行くように言われ、市立更生相談所に頼んで再度自立支援センターに入所することができた。そのとき初めて市立更生相談所に行った。釜ヶ崎では建築土木の仕事(土工)をしたことがない。体力的に自信がないので。友人のところにやっかひになったことはあるけど。今年の春に三徳寮のケアセンターを利用したことがあるくらいで釜ヶ崎のことはあまり知らない。

ここの所長にはボイラーに限らず広い範囲の職種で探したらどうかと言われている。資格はいろいろ持っているが経験もないのでむずかしい。若い人なら別であるが。

仕事をしていないとき暴走族に入っていたときもあった。「シンナー？ 吸いましたね」。ペンキ屋の息子がいたから、一斗缶で用立てしてくれた。ビニールに小分けにして吸っていた。「途中一回胃が痛くなることあったけど、半年くらい吸っていたかな」。「家の中で吸っていて親父にばれてどつかれてやめました」。シンナー吸っていたときは幻覚があった。「自分でレーザーをだすんですよ。手の指からだけど。あと記憶が飛んだりすることもあった」。「キレるみたいなことはある？」「確かに怒りっぽいかもしれない。でも自分からはけんか売るようなことはないと思うけど、キレ易いかもしれない」。最近精神科に受診して睡眠剤をもらっている。眠剤もらうまでは「毎日夢をみていたんですが、眠剤を飲んでからは夢をみなくなった」。それ以外身体の悪いところと言ったら、「たまに腰が痛くなる程度」。入院したのは中学生のとき蓄膿症で2週間。

30歳代前半に結婚、離婚は40歳代前半。子どもは現在妻の実家で妻と一緒に生活している。妻は働いている。正社員で給料は12、3万円、ボーナスもあるみたいだ。妻が働いているので、妻の両親がかわいがってくれているので安心はしている。妻からも妻の両親からもお金を借りている。

最終的には嫁さんと復縁したいと思っている。「けど仕事も長続きしないからな。飽き性なんです。飽きてパチンコ屋に行って、何とかしたいとは思っているけど、なかなか」。まずは仕事を見つけて携帯電話をつなげるようにして元妻と連絡をとりたい。

95. 男性 30代後半

自立支援センターの感想は「近くに図書館でもあったらいいな」。時間をもてあましていて、まわりには何もないし、自立支援センターにもまんがなど置いてあるが、少ししかない…。部屋は2段ベッドが6つあって12人部屋。「自分は、あんまりそういうの（共同生活）好きじゃないんで」。就職活動は、つぎの自立支援センターに移ってからになる。移ってからは仕事を探す。探す仕事は「工場関係」。これまでずっと工場関係の仕事に就いてきたからだ。

学校を卒業して、初めて就いた仕事が、関東にある製パンの工場。ここでは食パンを作っていた。食パンづくりは基本的に機械がしてくれるので仕事は機械の操作になる。生地を作って、おいといて、そして切るという工程をふむ。食パンは菓子パンとは違って安定して売れるから、とにかく忙しかった。作るパンによって労働時間は違ったが、食パンの場合は12時間労働の2交代制。休日は1週間に1回ぐらい。賞味期限の関係もあり、安定的に売れるので毎日出荷しないといけない。そのため、高校を卒業して9年間勤めたが、その内、お盆休みとお正月休みをもらったのは3回ほどだった。また、労働時間が短いだけでなく、神経も使う。何百個分の生地を1回で作るので、失敗すると大変なことになる。体重は落ちた。「今やったらできない。若かったからできた」。

何年働いても食パンを作る仕事だった。体力がもたなくなつて辞めた。人間関係も上司と悪かったが…「やっぱり、仕事がしんどくてですね」。年を重ねて働いていると、新しく雇われた人に仕事を教えないといけないこともあり、責任と負担が増していつより神経を使うようになった。新しい人が失敗すると自分のせいにされる。下の人が辞めて新しい人がまた入ってくると、またその人に仕事を教えないといけない。それに自分の仕事もこなさないといけない。10～20年働くと、班長になり現場に入るのは人手が足りないときだけで管理・事務が仕事になる。しかし、いつまでたっても現場だったので肉体的にも、精神的にも苦しくなつて仕事を辞めた。ちなみに、その上は、係長、課長だが、現場あがりは係長まで。

課長はいわゆるキャリア組がつく。

給与面などは悪くはなかった。身分は「社員」。初任給は20万円。辞めるときは30万円ほどもらっていた。勤め始めの最初の3年間は社宅に入っていたが、寮費は何千円だった。ただ、2人部屋だった。間取りは6畳1間。カーテンがついていて一応プライバシーは守られた。「同室のこはおとなしかったんで、(共同生活は苦手だが) 気になりませんでした」。その後、後から新入社員がどんどんと入ってくるので、部屋をあけると言われて、社宅を出て、アパートで暮らすことになる。アパートは1ヶ月5~6万円のところを借りた。ボーナス、雇用保険や年金はあった。なお、この仕事以降は派遣仕事に就いたので、これらの待遇はなく、自分でも保険、年金はかけていなかった。

この製パン工場へは高校から就いた。高校は普通科。ハローワークの求人を学校が調べて、学校に紹介してもらった求人。当時はちょうどバブル最盛期で仕事探しには困らなかった。「自分はいあまり勉強できなかったんで」、大学には行かず仕事をすることにした。出身は北海道で、高校も北海道。「北海道の札幌とかじゃなくて、“町”」。田舎。実家の周りは田んぼばかり。「地元で就職するのは優秀なやつだったんで」。「仕事するなら、関東。本州かな」と考えた。

実家の仕事は農業。米作り。実家の家族構成は父親と祖父母、それに兄弟がいた。母親は小さい頃に亡くした。祖父母は就職してから亡くなった。父親は今はおそらく年金暮らしをしていると思われる。生活保護は受けていない。兄弟は現在自衛隊に所属している。農業は小さい頃から手伝っていて、中学の頃ぐらいからトラクターも運転していた。北海道なので雪かきにも利用した。「コンバインとは違う」。田んぼの大きさは長方形だったが、一辺が50~100メートルぐらいあった。農業の仕事は継ぐ気はなかった。兄弟がいたから。「兄弟も継いでないけどね」。

中学、高校へは2、3km離れていたが、自転車で通学していたのでそれほど遠くはなかった。クラブ活動は「田舎やから、全国大会とかって感じないんで」していなかった。行きは友達といっしょにわいわいと通学していた。

ちなみに、高校の頃に原付の免許、中型自動二輪、今の普通自動二輪の免許をとった。自動車学校へのお金は自分がこれまで貯めたお金を使った。「車じゃないから、車だったら20万ぐらいかかるけど、自動二輪だから7、8万」。

仕事がつらいので、製パン工場を辞めた後は、仕事が上手く見つからず、「派遣」の仕事に就いた。時期はバブルがはじけた不況期であった。仕事は有料の求人雑誌を使って探した。

数年前まで「派遣」の仕事が続けた。「住み込み」の「派遣」仕事である。仕事の内容は工場内作業。電子部品を作ったり、車の部品を作ったり、マシンオペレーターをした。マシンオペレーターはもちろん機械の操作をするが、故障したりすれば「社員」がするので、「神経使うとかはなかった」。派遣先は転々とした。埼玉、栃木、群馬、長野、山梨、愛知、一回だけ滋賀県に行った。派遣期間は短いところでは3ヶ月。だいたい半年~1、2年。派遣業者もいくつか変わった。派遣期間が終了して、条件が悪かったり、今紹介できるところがないとか言われたときには、別の派遣業者に登録して働いた。仕事が見つかったりして、逃げたことはなかった。このころは比較的安定して働いていた。契約は満期を迎えた上であった。夜勤のときは眠かった。また、クリーンルームでの仕事は防塵服を着るのがめんどくさかった。

雇用条件は派遣先にもよるが、時給のところもあったが、だいたい日給8,000円から9,000円。そこに残業代や深夜手当がつく。深夜手当がつくと10,000円、そこに残業代がつくと日給が12,000円から13,000円になるので「おいしかった」。勤務体系は12時間の2交代制か、3交代制。2交代制なら4勤2休でだいたい残業が2、3時間つく。3交代制なら残業がでることはほとんどない。収入は多くて月に手取りで24、25万円。実際は28万円ぐらいあるが、部屋代が3万円ぐらい、光熱費が1万円ぐらいとられ

て、24、5万円ぐらいになる。勤務体系が3交代制のところは少なくなって、収入は月に18~20万円ぐらいだった。収入は勤務体系によって変わる。

部屋は「アパート」(木造ですかときくと、昔のぼろぼろのではないけど、「アパート」言うたら「木造」でしょ?)で個室。だいたい2DKで、風呂・トイレは共同。ウィークリーマンションを会社が借りてたこともあった。そこは部屋代が4、5万円が高かったが、「あそこはきれいでよかった」。

数年前から東京で「登録の日払い制の仕事」(日雇派遣など)に就くようになり、「ホームレス」をするようにもなった。「派遣」のころに「貯金してたらな」。よく「キャバクラ」や「パチスロ」で遊んでいたのにお金を使っていて貯金がなかった。「登録の日払い制の仕事」は毎日なく、仕事がないときは「ホームレス」状態だった。食事は一日に100~200円のパン一個のときもあった。炊き出しを何回か利用したこともある。自分はないが、寝ると荷物を持って行かれると聞いていたので、眠ることができないのがきつかった。通帳や印鑑がかばんに入っていたのでとられるわけにはいかなかった。

仕事があったときはネットカフェに泊まっていた。代金はナイトパックでだいたい1,000円から2,000円。安くて1,000円、2,000円ぐらいのところが多い。2,000円のところはナイトパックの時間が長かったり、シャワーが使えたり、個室であったりする。2,000円のところは8、9時間利用できたので、2,000円の個室をよく利用していた。8、9時間だとよく眠れる。席がフラットになるところもあって、フラット席だとよく眠れるので席が空いてるときはフラット席を利用していた。お金がないときはオープン席を利用していたが、オープン席はやっぱり個室と違って眠れない。周りに人はいるし、席はたおすことができない。ネットカフェに泊まった翌日、仕事がないときはネットカフェを出て公園や図書館で時間をつぶしていた。

「登録の日払い制の仕事」をすることになったのは、パチスロですってしまったからである。手持ちのお金が1、2万円になってしまった。1、2万円だと「派遣」の仕事には就けない。給料が週払い、前払いのところもあるが、さすがに手持ちが1、2万円だと1週間もたないので住み込みの派遣には就けない。ちょっとお金を貯めてからにしようと思って「登録の日払い制の仕事」をすることにしたが、仕事はなくそのままになってしまった。

お金を貯めようと思って、大手派遣会社に登録したが、仕事がなく、新聞や求人誌をみて引越などの日払いの仕事もしていた。派遣会社で日払いの仕事をするにはまず、3日前に予約をしないといけない。そして、その上で「仕事ありますか〜」と、前日に確認の連絡をしないといけない。そのとき明日の仕事はないと断られるときがある。そこで、そのほかの日払いの仕事も始めた。連絡したら「明日来てください」と言われるところもあるから。駅手配で飯場に入ったこともあるが、行ったはいいけど、タク部屋みたいところで、ひと部屋に7~8人。横見たらそばでとなりの人が寝てるようなところだったので、実際に働いたことはない。トンコばかりである。「自分は共同生活苦手で...」。

派遣会社など日払いの派遣は登録期間の長い人や20代前半の若い人が優遇される。「若い子は大学生とか、フリーターとか」。30、40代で登録したての人には1日、2日ならあるけど、続けてはない。「(自分は)続けてはなかった」。

日払いの仕事は日給は7~8,000円。交通費はでも500円で、交通費は要るし、そこにネットカフェ代とかを含めると、手許に残るのは「半分ぐらいになってしまう」。1週間続けて仕事に就けたら、2万円ぐらい貯まるかもしれないが、1週間続けて仕事はなかった。週に2、3日ぐらいだった。一回働いて3,000円残るとして、6日連続で働いて、18,000円。

日払いの仕事に就くには、携帯電話がないといけない。携帯電話はプリケーだったので利用料金はそんなに高からなかったが、後、必要なのは、運転免許証などの身分証明書。運転免許証は20歳代前半に

取った。それに年齢。年齢制限があるから、45歳を超えると仕事はない。これらがないと仕事に就けない。「どうしようもない」。

東京では仕事がないので、名古屋の方が仕事が多いと思って名古屋に行く。「名古屋の方が（仕事がなく）きつかった」。名古屋の方が自動車工場とかが多いから仕事があると思ったが、日払いの仕事はなかった。「派遣ならあったが…」。「派遣」のときに愛知県で働いたこともあったからだ。

そうしていると、あるとき名古屋駅で手配師に声をかけられて、兵庫県の飯場に入ることになる。そこは1日働いて2日休みという感じで1週間ぐらいで出た。

少しお金があったので、そこから大阪に向かった。大阪に行って野宿生活を始める。1週間ぐらいでお金が尽きて、どうにもこうにもなくなると、区役所に相談に行ったところ、巡回相談員に連絡をつけてくれ自立支援センターに入所することになった。途中、3、4日は三徳寮のケアセンターに入っていた。昨年冬の冬のことである。

資格・免許は、中型バイク、自動車にフォークリフトをもっている。フォークリフトは「派遣」に就いていたところに工場内作業で必要だと言うので、費用もだしてもらって取った。ただ、役に立ったのはそこでの仕事だけでこれまでのところ役には立っていない。今後もフォークリフトを頼りにするつもりもない。

結婚の経験はない。家族への連絡は「派遣」の仕事に就いてからはほとんどしていない。「社員」であったときまで。「なにしとるんじゃ」言われるから。

行政への相談は、これまで自立支援センター入所のきっかけとなったとき以外はない。労働組合などもない。〇〇ユニオンとかもない。ユニオンは相談なんかやっていない。「あの人はなんか違う人らでしょ」。

手帳の類ももっていない。

今後の就職活動は工場関係を探す。「それしかやったことないんで」。「(常雇の仕事は)ないやろうから、派遣とかになる」。調査のお願い文の「NPO 釜ヶ崎」というのを見つけて、「これ、(野宿になったら)なんかしてくれるんですか」。「今はいいけど、ここ出たらまたどうなるかわからんから。いや(自立支援センターを)今は出るつもりはないけど」。「たぶん、就職先はみつかるやろうけど、その後、またどうなるかわからんので」。「三徳寮の近くですか?」と尋ねていた。釜ヶ崎は三徳寮に入所したときに行っただけで、炊き出しなども東京にいたときに利用したことがあるだけで、よく知らない。お願い文を持って帰った。

96. 男性 20代後半

大阪府東部に生まれた。父母健在。父はコンピューターのシステムエンジニアの仕事を現在もやっている。兄弟2人の5人家族。兄弟は、数年前に病気となり、現在は行政からの補助を受け部屋を借りて住んでいる。もうひとりの兄弟は実家に住んでいる。実家との連絡はとっているが、小さいアパートのため、本人が帰っても生活できるスペースが無いため帰ることができない。学校は地元の普通科の高校を卒業した。

高校卒業後、父の知り合いの社長から別の何人かの社長の紹介を経て、大阪の会社でコンピューターのオペレーター(銀行のオンライン)の仕事に就いた。学生の時から、コンピューターに興味はあり、システムを作るなど勉強はしていた。籍は派遣会社にあったが、社長数人を經由したため、派遣会社2社分のお金を引かれた。月給12万円(固定)で、ボーナスは無かった。派遣の契約期間(1年ほど)が終わり、1ヶ月くらい自宅で待機していたが次の仕事はこなかった。

有料の求人雑誌で職を探し、風俗店に正社員(ホールスタッフ:キャッチも行う)として働いた。風俗

店に行ったことはなかったが、話は聞いていて興味はあった。そこでは寮に入っていた。2LDKの部屋に10人住んでいて（たこ部屋状態）、家賃は2〜3万円だった。食事は無かった。月給は25万円（そこから寮費が引かれる）で、ボーナスは無かった。仕事は辛かった。先輩後輩の上下関係が厳しく、暴力行為もあった。店長とケンカをし、一度店を辞めた。

別の風俗店でバイトとして働いた。寮費7万円で、1人1部屋のマンションだった。月給は28万円（そこから寮費を引かれる）だった。そこで2年ほど勤めるが、元の風俗店に戻る。

辞める前と戻ってから計3〜4年勤めた。上司にはかわいがってもらっていた。途中で辞めなければ主任ぐらいになっていたかもしれない。風俗店での仕事は嫌になっていたが、とにかく寮のある（実家は小さいアパートに引っ越していて帰っても生活空間がなかった）他の仕事が見つけれず続けていた。

その後、スポーツ紙で見つけた、小さな風俗店に、ホールスタッフとして勤めた。客の案内や部屋の掃除などを行った。1ルームの寮に入り、手取りは22万円だった。定休日は無く、交替で休みをとっていた。この店は半月ほどで辞めた。

別の大きな風俗店にバイトとして勤めた。受付の仕事を行った。月給は手取り22万円くらいだった。受付を行っている時に警察の摘発を受けたこともあり、2ヶ月くらいで辞めた。目の前で警察の摘発を受けたことで風俗店には懲りた。

無料の求人雑誌で職を探し、大阪市内で専従員（5〜6人）として新聞配達の仕事を行った。アルバイトやパートの人は多かった。店舗の上に住み込んでいた（それぞれ個室で3人ぐらいが住んでいた）。費用はかからず、電気代のみ支払った。月給25万円で手取り23〜24万円になった。朝刊、夕刊の準備配達などハードな仕事だったが風俗店に勤めるよりはよかった。1日は、仕事と仮眠で終わっていた。月2日休みがあった。あと、日曜日は夕刊が無いのでゆっくりできた。この仕事を行っている時に、パソコンを購入して、インターネットにはまっていった（ホームページの作り方なども勉強した）。20歳代後半から今年の冬の終わりまで勤めた。ITの仕事に就きたかったために辞めた。

「仕事があるだろう」という気持ちで15〜16万円持って東京に行った。スポーツ新聞ですぐに仕事が見つかった。携帯での出会い系の仕事を行っている会社に勤めた。その会社は、他にもマンガ喫茶、ビデオ試写などのチェーン店がある。電話の回線を繋いだり切ったりする仕事を行った。テレクラの仕組みは、男性が会員（当時は会費無料）となり電話をかけるためのポイント（100ポイント1万円）を購入する。そして、ポイントに見合った時間、女性と電話をする。ポイントが無くなれば、また購入する。女性は、素人さんではなく会社が雇っている（サクラ）のが実態であった。素人さんから電話があることもあったが繋がらないようにしていた。また、女性社員（声が若くさえ聞こえればOK）との会話内容を聞いて監視し、実際に出会うことのないようにしていた（出会うような状況になりそうな場合は回線を切る）。1ルーム9万円の寮に入っていた。月給は28万円からスタートし、32万円に上がっていた。東京には合わない（言葉の問題：同僚との会話、センターにくる質問の受け答え）と感じたことや会社の方針（「素人と繋がらないのはサギのようだ」）に合わないこともあって半月ほど勤めて辞めた。

数万円持っていたお金で次の仕事を探した。スポーツ新聞で見つけたティッシュ配布の仕事を行った。仕事は毎日あった（自分で何日働くか決めることができた）。勤めが長い人がリーダーとなり、1日の終わりに次の日の場所が指示された。日当1万円で、引かれて手取り9,500円だった。朝8:00〜夜8:00まで立ちっぱなしだった。ティッシュ配布数のノルマもあった。受け取ってもらえるための渡し方のコツがあった。宿泊はマンガ喫茶（ナイトコース1,900円くらい）やビデオ試写（12時間コース3,000円くらい）を使っていた。宿泊代を浮かすためにファーストフードを使ったり野宿（寒くて眠れない）をしたりもした。1ヶ月くらいでしんどくなってきた。友だちもいなく、不安だった。「東京にいる必要がない」と

思った。

大阪に帰ってくるが仕事が見つからなかった。マンガ喫茶、カプセルホテルを使っていた。携帯も止まってしまった。大阪府内の福祉事務所に相談すると、「大阪市の区役所に相談」するように言われる。大阪市内の区役所に相談し、巡回相談員を通して「三徳寮」に6日間入っていた。そして、自立支援センターに来た。

年齢的にギリギリだが、コンピューター関係の仕事に就きたいと考えている。オペレーターからプログラムの仕事ができるようになればいい。

病歴、結婚歴、借金無し。賭け事などはせず、娯楽としてはお酒を飲むくらい。

97. 男性 40代前半

Aさんの生まれは大阪市内で、両親とふたりの姉妹の5人家族であった。父は市内の新聞専売店に勤務(自営ではない。母の仕事は聞かなかった)。住居は2DKのアパートで家族5人では、狭く居づらかったようだ。小・中学と登校拒否やイジメ等もなく過ごし、クラブ活動もしていなかった。

中学卒業後、市内の公立の普通高校に進学し、父が勤務する新聞専売店で新聞配達(朝・夕刊)のアルバイトを高校卒業までしていた。住居は市内アパートで1人暮らし、朝食と夕食は新聞専売店で食べ、昼食は学校の食堂で食べるという生活であった。1ヶ月の給料は、食住の提供以外4万円位だった。

母親は30年位前に亡くなったと話されていたので、高校生の頃に亡くなったようだ。父親は現在70歳代で、公害認定の手当金と、少しの労働により、大阪市内のアパートで1人暮らしをしている。姉たちが今どうしているかは知らない。

20代半ばまでの期間。高校卒業後、英語の教材の訪問販売の仕事に就いた。従業員が100名程の会社で、ボーナスも保険もある正社員であった。ここには1年位、いたそうだ。その後、H自動車の工場に住込みの期間工として勤務。工場が休みの日は、工場の清掃のアルバイト(日払い1万円)に就き、「フル」で働いていた。景気の悪化で4ヶ月以降は延長してもらえなかったが、貯金が60~70万円でき、そのお金で普通免許を取得。大阪市内(新聞配達をしていた頃と同じ地域)にアパートも借りた。その後は、工場派遣や販売の仕事を経て、警備のアルバイトに1年間就いた。警備会社は新しい小さな会社で、正社員になるよう勧められたが、長く勤めるつもりはなかったので断った。

30代初めまでの期間。警備の仕事辞め、鉄道関係の関係会社(孫会社と言っていた)の運送会社に正社員として就職した。事務所は大阪市内にあった。仕事はワゴン車~1t位の車(毎日変わったそうだ)で証券(株券)の束のルート配送と一般の荷物の配達だった。午前6時から午後10時まで勤務することも多く、また、荷物が重かったため、元々悪かった両ひざが悪化(体質的に間接の間が広い)、そのため仕事が、続けられなくなり退職した。辞めた時には、貯金が約1千万円あったそうだ。

30代半ばまでの期間。貯金の1千万円と失業保険で、3年間仕事をせず過ごした。この間は、競馬とパチンコ等のバクチにのめり込んでいた。特に競馬につき込んだようだ。酒はあまり飲まない。

40代初めまでの期間。貯金も使い果たし、警備会社に契約社員として就職した。仕事は電力会社関係が多かった。仕事を始めた頃の賃金は、日勤が8千円で夜勤が1万円、1ヶ月の勤務日数も25日以上あった。辞める頃には、電力会社関係の仕事も減り、賃金は、日勤が6,500円、1ヶ月の勤務日数も10日位になった。

現在までの期間。警備の仕事辞めた後、大阪市内のアパートを引き払い、北陸の工場に派遣社員として就いた。仕事はプラズマディスプレイの液晶ガラスの製造の仕事で約2年間続けた。この時の派遣元は、3番目に請け負っているT派遣会社であったが、実際に仕事の話をするのは、2番目に請け負ってい

る M 派遣会社の担当であった。その後、プラズマディスプレイの生産量が減り、仕事も液晶ガラスの検査の仕事に変わった。A 氏の視力は、0.3 と 0.08 の近視と強度の乱視で検査の仕事は困難であったようだ。そして、M 派遣会社の担当から、突然「今日で仕事は終わり」と言われ、近畿地方（現在、住民票がある）のフォークリフトの製造の仕事を紹介された。突然言われ、どうすることもできず、その工場に行くことにした。派遣元は M 派遣会社で、担当者も同じであった。仕事はライン作業で組立てを担当していた。A 氏以外の作業者は、すべてブラジル人で、主に機械加工を担当していた。A 氏が言うには、組立てを担当するのは、日本語がわかるからだそうだ。ここで製造したフォークリフトのほとんどが輸出されていた。日本製で安いから売れているそうだが、品質は A 氏が見ても悪い物がたくさんあったそうだ。自分たちの賃金は変わらないが、円安の時はいいが、円高になるとほとんど会社の儲けはないと、繰り返し話されていた。毎日 12 時間働き、給料は寮費 5 万円と食費を引いた手取りが、22～23 万円位あった。しかし、ブラジル人は、もっと稼いでいたそうだ。ブラジルの貨幣価値は、日本の約 6 倍あり、国に帰ったらメイド付きの豪邸が建つから彼らは働くのだと言っていた。ここでは、今年の夏まで仕事を続けたが、健康診断の尿検査に引っかかったのと、体力の限界を感じ辞めた。尿検査に引っかかったのは、疲れから、たんぱくがおりたのだと言っていた。

今年の夏に「西成」に来て、一時は 2,000 円のドヤに泊まっていた。ドヤは外人のバックパッカーが、よく利用しているという情報から知った。「西成」での接点は、ドヤの利用だけで、他はないとのことであった。

その後秋には、スーパーや道路上でブルーベリーやクランベリー等の健康食品を販売する仕事をしていた。その時は、所持金が 2 万円位しかなく、売れないのは、分かっていたが、住込みなので決めたそうだ。携帯の仕事情報から応募したそうで、携帯の仕事情報はすごく、今は携帯がないと仕事を探すのは難しいと言っていた。この仕事は、完全歩合制で場所代 2,000～5,000 円と駐車代が必要だった。こんな仕事でも、上手な人は結構売っており、やりがいはあったが、売り上げが上がらず、辞めさせられた。その後、父親を頼りアパートに行ったが、断られた。

しかたなく、昼間は梅田周辺のベンチで過ごし、夜は 24 時間営業の店舗等で時間をつぶし、ネットカフェで数日、寝泊りした。

そして、所持金もなくなり、フリーダイヤルの支援団体を電話帳で探し、公衆電話から電話をした。その時、区役所に相談に行くように勧められ、相談に行った。そして巡回面談を受け、「三徳ケア」で 1 週間待機後、自立支援センターに来た。自立支援センターでは約 1 ヶ月になるが問題も無く過ごしている。今後は、自分の体の事も考え、仕事を探したいということであった。

借金が 10 年前に消費者金融で借りた分と 6 年前に大手サラ金で借りた分を合わせて、100 万円位ある。最終返済日は 4 年半位前。

健康状態は膝が悪い以外は良好。

98. 男性 30 代後半

もともと大阪市の川沿いで野宿をしていた。足の調子が悪いので診てもらおうと思って、「10・28」の統一行動に行ったところ、自立支援センターという施設があるからと聞いて、巡回相談員にあって、自立支援センターに入所した。

足に関しては病院で診てもらった。靴ずれで傷が治らなかつただけのこと。歯医者に行って虫歯の治療をしたいと思っている。左眼に関しては小さいときに手術した。身体障害者の手帳を取得することはできないかと思い判定を受けたが、右眼の視力がよいので手帳取得することは難しいと言われた。

野宿するようになったのは今年の夏から。最初は寒くなかったのでベンチで寝ていた。自立支援センター入所するまでの間は野宿であるが、その間、夏の終わりから秋の終わりぐらいまで、1ヶ月間飯場で建築土木の仕事をしていた、マンションの一室に13人くらい入って20日以上働いたが最後は「トンコ」して帰ってきた。稼ぎは6万円くらいだった。それ以前は別の飯場に2年間いた。仕事内容は建築土木で各種手元、造園、警備で7,000円、土工で8,000円だった。1、2年前に飯場がつぶれたとき、出入りしていた警備会社の人が声をかけてくれて、去年の夏まで仕事に就いていた。そのとき近所のネットカフェ（ナイトパック1,100円、個室でリクライニングシートタイプ）を利用した後、知り合いの紹介で長屋と一緒に住んでいた。家賃は月5.2万円だった。部屋のつくりは、台所＋一部屋＋3畳＋6畳に5人がいた。家賃はみんなで仕事に行った日に1,000円ずつ払っていた。

野宿するようになって、役所に言っても何もしてくれないと思っていた。昼間は図書館、夜間は野宿していた。その状況で求職活動をしていた。

中学校を卒業して、高校に進学したくないという理由で、京都の調理関係の専門学校に入学、1年で卒業できる専門学校であるが、在学中からアルバイトで京都で料理屋の仕事を5、6年していた。学校を辞めて半年正社員（年金などあり）として働いていたが人間関係で辞めた。

その後は、京都を中心に日本料理、学生旅館のまかない、料亭、居酒屋など、調理関係の仕事をいろいろした。大阪府内の実家から通ったり、住み込みで仕事をしていた時期もあった。大阪市内でも1年間くらい働いたかな。調理師免許をもっている人はよく調理師を紹介してくれるような組合があるけれども、「『部屋』には入っていなかった」。一人の親方について一緒に職場をかえていた。親方は3、4人いた。年齢は当時で40歳くらい。給料にも波があり、手取で月24、5万円もらえるときもあれば、月10万円くらいしかもらえないこともあった。平均したら15万円程度。時期にも波があって、年の初めと夏は暇だった。京都の場合は春と秋がかきいれどきだから。仕出屋にいたとき、一番給料がよくて月30万円もらった。責任者ということで仕入れからはじまり仕込なども含めて、朝の5時から14、5時間労働をさせられた。あまりにも仕事がきつかったので1年間で辞めた。調理の仕事を最後にしたのは数年前までで、その後2年間は仕事らしい仕事をしていない。求職活動をまったくやっていたわけではなく、履歴書を10回以上郵送したり面接もしたが調理関係の仕事に就くことはできなかった。

調理関係の仕事をあきらめて、飯場に入ったのが2年前であった。飯場にいるとき派遣会社にも登録をしたことがある。その際、倉庫のピッキング、引越しの荷物運び、精缶屋の仕事もした。

実家は飯場に近いのだが、家を出て1年、理由はいいたくないが、いろいろあったので2、3年は実家に帰りたくないと思っている。

今後は仕事を探していきたいと言うものの、眼のことがあり、いろいろ今まで断られたこともあり消極的である。調理の仕事をまた探しますかときくも、年齢がいつているため、自分の上につ人（責任者）が自分より年齢が上だということで使ってもらえなかったり、逆に調理師免許の資格をもっているから資格料として高いお金を払わなければならないのではないかとチェーン店からは敬遠されるので、調理の仕事だけを考えているわけではないという。

* なお、聞き取った内の2票は、秘匿処理が極めて困難なため掲載を割愛させていただいた。